原本校註漢和對照往生要集
版權所有・不許復製

144

定價 拾貳圓也

印刷 昭和十二年七月十五日
發行 昭和十二年七月二十日

校譯註者 花山信勝

發行者 小山久二郎
東京市小石川區諏訪町五九番地

印刷者 島連太郎
東京市神田區美土代町十六番地

發行所 小山書店
東京市小石川區諏訪町五九
電話 小石川七五七五番
振替 東京三九八七二番

881. 念佛三昧經.〔大正 13 巻 No. 415〕

882. 十往生經.〔卍續藏經 87 套 四册收〕

883. 十住毘婆沙論.〔大正 26 巻 No. 1521〕

884. 小阿彌陀經.〔大正 12 巻 No. 366〕

885. 無量壽經優婆提舍願生偈.〔大正 26 巻 No. 1524〕

886. 摩訶止觀.〔大正 46 巻 No. 1911〕

887. 善導觀念法門.〔大正 47 巻 No. 1959〕

888. 六時禮讃.〔大正 47 巻 No. 1980〕

889. 天台十疑.〔大正 47 巻 No. 1961〕

890. 道綽安樂集.〔大正 47 巻 No. 1958〕

891. 慈恩西方要決.〔大正 47 巻 No. 1964〕

892. 懷感群疑論.〔大正 47 巻 No. 1960〕

p. 471. 893. 迦才淨土論.〔大正 47 巻 No. 1963〕

894. 瑞應傳.〔大正 51 巻 No. 2070〕

895. 大集經云.（四十四巻）〔大正 13 巻 290 頁下〕〔但シ今ノ文ハ法苑珠林十七巻（大正 53 巻 415 頁下）及ビ諸經要集二巻（大正 54 巻 15 頁中）ニ引用スル文ヨリノ孫引ナリ〕

p. 472. 896. 華嚴經偈云.（八十華嚴經七十五巻）〔大正 10 巻 412 頁下〕〔敎行信證末文（大正 83 巻 643 頁上）引用〕

p. 475. 897. 觀音讃.〔傳ハラズ. 但シ淨土依憑經論章疏目錄ヲ參照〕

898. 十六相讃.（十六想觀讃）〔傳ハラズ. 但シ東域傳燈目錄下巻ヲ參照〕

899. 日本往生傳.（日本往生極樂記）〔大日本佛敎全書 104 巻所收〕

900. 法華經賦.〔傳ハラズ〕

— 終 —

p. 458. 853. 清淨覺經. 三卷〔大正 12 卷 292 頁中, 292 頁下〕

854. 諸　師.〔本註 No. 717 以下ノ說. 參照〕

855. 憬興師.（無量壽經連義述文贊下卷）〔大正 37 卷 169 頁中〕

856. 玄一師.（無量壽經記下卷）〔缺本〕

p. 459. 857. 木槵經.〔大正 17 卷 No. 786〕

858. 止觀第四.（四卷上）〔大正 46 卷 41 頁下〕

859. 大論云.（二十八卷）〔大正 25 卷 265 頁下〕

p. 460. 860. 大集月藏分言.（大方等大集經五十二卷）〔大正 13 卷 345 頁下〕

861. 又　云.（大方等大集經五十二卷）〔大正 13 卷 345 頁下〕

p. 461. 862. 同經言.（大方等大集經五十三卷）〔大正 13 卷 354 頁上—中, 355 頁中—下〕略抄.

p. 462. 863. 又　云.（大方等大集經五十六卷）〔大正 13 卷 381 頁上—中〕

p. 464. 864. 梵網經云.（下卷）〔大正 24 卷 1009 頁上〕取意.

865. 涅槃經云.（北本三卷）〔大正 12 卷 380 頁下—381 頁中〕（南本三卷）〔大正 12 卷 620 頁中—621 頁上〕取意略抄.

866. 月藏分言.（大方等大集經五十四卷）〔大正 13 卷 359 頁中—下〕略抄.

p. 465. 867. 梵網經.（下卷）〔大正 24 卷 1009 頁上〕〔上ノ引文〕

868. 月藏經.（大方等大集經五十四卷）〔大正 13 卷 359 頁中—下〕〔上ノ引文〕

p. 466. 869. 十輪經偈云.（大乘大集地藏十輪經四卷）〔大正 13 卷 742 頁下〕

870. 月藏分云.（大方等大集經五十四卷）〔大正 13 卷 359 頁中〕取意.

871. 涅槃經第三云.（北本三卷）〔大正 12 卷 381 頁上—中〕（南本三卷）〔大正 12 卷 620 頁下—621 頁上〕

p. 467. 872. 又　云.（北本涅槃經三卷）〔大正 12 卷 384 頁中〕（南本涅槃經三卷）〔大正 12 卷 624 頁中〕

p. 468. 873. 大論云.（四十九卷）〔大正 25 卷 414 頁中〕

874. 法華云.（七卷）〔大正 9 卷 60 頁下〕

875. 又.（付法藏因緣傳六卷）〔大正 50 卷 322 頁上〕略抄.

p. 469. 876. 般舟經偈云.（下卷）〔大正 13 卷 918 頁下〕

877. 觀無量壽經.〔大正 12 卷 No. 365〕

p. 470. 878. 雙觀無量壽經.〔大正 12 卷 No. 360〕

879. 觀佛三昧經.〔大正 15 卷 No. 643〕

880. 般舟三昧經.〔大正 13 卷 No. 418〕

p. 440. 825. 彼 經 言. (大悲經三卷) 〔大正 12 卷 959 頁下—960 頁上〕 取意略抄.

826. 彼 經 云. (大悲經三卷) 〔大正 12 卷 959 頁中—下〕 抄出.

p. 441. 827. 華 嚴 偈 云. (八十華嚴經二十三卷) 〔大正 10 卷 124 頁上〕 〔上引, 三回目〕

p. 442. 828. 寶積經第八云. 〔大正 11 卷 45 頁下〕

p. 443. 829. 如來祕密藏經下卷云. 〔大正 17 卷 843 頁下〕

p. 444. 830. 謂(大悲經). (大悲經一卷) 〔大正 12 卷 949 頁中〕 取意.

831. 法 華 經 云. (一卷) 〔大正 9 卷 8 頁上〕

p. 445. 832. 大 經 云. (北本涅槃經二十七卷) 〔大正 12 卷 522 頁下〕 (南本涅槃經二十五卷) 〔大正 12 卷 767 頁上—中〕

833. 又 云. (北本涅槃經二十七卷) 〔大正 12 卷 524 頁中〕 (南本涅槃經二十五卷) 〔大正 12 卷 769 頁上〕

834. 又 云. (北本涅槃經二十七卷) 〔大正 12 卷 524 頁下〕 (南本涅槃經二十五卷) 〔大正 12 卷 769 頁上〕

835. 華 嚴 偈 云. (八十華嚴經十三卷) 〔大正 10 卷 68 頁上〕

p. 446. 836. 觀佛三昧經一云. (十卷) 〔大正 15 卷 695 頁中—下〕 略抄.

p. 447. 837. 二 云. (觀佛三昧經十卷) 〔大正 15 卷 695 頁下〕 取意略抄.

p. 448. 838. 三 云. (觀佛三昧經十卷) 〔大正 15 卷 695 頁下—696 頁上〕 略抄.

839. 四 云. (觀佛三昧經十卷) 〔大正 15 卷 696 頁上〕 略抄.

840. 五 云. (觀佛三昧經十卷) 〔大正 15 卷 696 頁上—中〕 略抄.

p. 449. 841. 六 云. (觀佛三昧經十卷) 〔大正 15 卷 696 頁中〕 略抄.

842. 般 舟 經 云. (上卷) 〔大正 13 卷 904 頁中〕

843. 十住婆沙第三云. (五卷) 〔大正 26 卷 41 頁中, 42 頁下〕

p. 450. 844. 寶積經九十二云. 〔大正 11 卷 527 頁中〕

p. 451. 845. 大集月藏分偈云. (大方等大集經四十六卷) 〔大正 13 卷 303 頁上〕

p. 453. 846. 法華經分別功德品. 〔大正 9 卷 44 頁下〕

p. 454. 847. 般 舟 經 云. (上卷) 〔大正 13 卷 907 頁下〕

848. 無量清淨覺經云. (四卷) 〔大正 12 卷 299 頁中—下〕 取意略抄.

p. 455. 849. 大集經第七云. (六卷) 〔大正 13 卷 37 頁下〕

p. 456. 850. 法 華 云. (六卷) 〔大正 9 卷 50 頁下—51 頁上〕 略抄.

p. 457. 851. 稱揚諸佛功德經下卷云. 〔大正 14 卷 99 頁上—中〕

852. 雙 觀 經 云. (下卷) 〔大正 12 卷 278 頁上〕

p. 422. 801. 感法師云.（釋淨土群疑論五卷）〔大正 47 卷 61 頁中〕

802. 迦才師云.（淨土論中卷）〔大正 47 卷 93 頁下〕

803. 雙觀經云,（下卷）〔大正 12 卷 272 頁中〕略抄.

804. 感師云.（釋淨土群疑論七卷）〔大正 47 卷 72 頁下〕取意略抄.

p. 423. 805. 那先比丘問佛經言.（下卷）〔大正 32 卷 No. 1670 A. 701 頁下—702 頁下〕取意略抄.

（同）〔大正 32 卷 No. 1670 B. 717 頁中—718 頁上〕取意略抄.

p. 424. 806. 十疑云.（淨土十疑論）〔大正 47 卷 79 頁下—80 頁上〕

p. 426. 807. 安樂集.（上卷）〔大正 47 卷 10 頁中—下〕取意略抄.

p. 428. 808. 大論云.（二十四卷）〔大正 25 卷 238 頁中〕

p. 429. 809. 安樂集云.（上卷）〔大正 47 卷 11 頁上〕

810. 綽和尙云.（安樂集上卷）〔大正 47 卷 12 頁上〕略抄.

p. 430. 811. 要決云.（西方要決釋疑通規）〔大正 47 卷 107 頁中—下〕

812. 淨名.（維摩詰所說經下卷）〔大正 14 卷 554 頁上〕〔本註 No. 393 參照〕

813. 成實.（一卷）〔大正 32 卷 242 頁下〕〔本註 No. 394 參照〕

814. 佛藏經第三云.（中卷）〔大正 15 卷 794 頁下—795 頁下〕略抄.〔釋淨土群疑論三卷（大正 47 卷 49 頁中—下）所引略抄〕

p. 432. 815. 感師云.（釋淨土群疑論四卷）〔大正 47 卷 50 頁上〕取意略抄.

p. 433. 816. 雙觀經云.（上卷）〔大正 12 卷 268 頁上〕

817. 智憬等云.〔釋淨土群疑論三卷（大正 47 卷 43 頁下）第三家. 參照〕

818. 有云.〔釋淨土群疑論三卷（大正 47 卷 44 頁上）第十一家. 參照〕

819. 感法師云.（釋淨土群疑論三卷）〔大正 47 卷 44 頁上〕

p. 434. 820. 感師云.（釋淨土群疑論五卷）〔大正 47 卷 60 頁中—下〕〔涅槃經第十八卷云トハ北本涅槃經十九卷（大正 12 卷 477 頁下），南本涅槃經十七卷（大正 12 卷 720 頁下），上引. 又云トハ同上略抄. 又三十一云トハ北本涅槃經三十一卷（大正 12 卷 549 頁下—550 頁上），南本涅槃經二十九卷（大正 12 卷 795 頁中—下）. 又言トハ北本涅槃經三十一卷（大正 12 卷 550 頁上），南本涅槃經二十九卷（大正 12 卷 795 頁下）. 瑜伽論トハ不明，（大正 30 卷 319 頁中）參照〕

p. 436. 821. 放鉢經.〔大正 15 卷 No. 629〕

822. 雙觀經云.（下卷）〔大正 12 卷 278 頁中〕

p. 437. 823. 首楞嚴三昧經云.（上卷）〔大正 15 卷 633 頁中〕

p. 439. 824. 大悲經第三言.（三卷）〔大正 12 卷 960 頁上〕

p. 413. 778. 雙觀經言.（下卷）〔大正 12 卷 273 頁上〕

779. 止　　觀.（二卷上）〔大正 46 卷 12 頁上→〕〔本書引文 No. 549 參照〕

780. 感　師　云.（釋淨土群疑論五卷）〔大正 47 卷 59 頁下—60 頁上〕略抄.

p. 414. 781. 綽和尙云.（安樂集上卷）〔大正 47 卷 11 頁中〕

782. 感和尙云.（釋淨土群疑論一卷）〔大正 47 卷 36 頁下〕

783. 佛藏經說.（上卷）〔大正 15 卷 784 頁中〕略抄.〔釋淨土群疑論五卷（大正 47 卷 56 頁下）所引ニヨルカ〕

p. 415. 784. 又　　言.（佛藏經上卷）〔大正 15 卷 784 頁下〕〔釋淨土群疑論五卷（大正 47 卷 56 頁下）參照〕

785. 感　師　云.（釋淨土群疑論五卷）〔大正 47 卷 57 頁上—中〕略抄.〔有聖教トハ無上依經上卷（大正 16 卷 471 頁中）取意略抄. 上ニ引ケル文. 有經言トハ大方等大集經賢護分一卷（大正 13 卷 876 頁中）略抄. 觀佛三昧經云トハ同經九卷（大正 15 卷 687 頁下）〕

p. 416. 786. 觀佛經第九.〔大正 15 卷 687 頁中—下〕

787. 觀　　經.〔大正 12 卷 343 頁中→〕

788. 華嚴經偈云.（八十華嚴經十六卷）〔大正 10 卷 81 頁下, 82 頁中〕

789. 又　　云.（八十華嚴經十六卷）〔大正 10 卷 82 頁上〕

790. 金剛經云.〔大正 8 卷 752 頁上〕〔西方要決（大正 47 卷 104 頁上）所引〕

p. 418. 791. 要　決　云.（西方要決釋疑通規）〔大正 47 卷 104 頁中〕略抄.〔般若經トハ金剛般若經（上揭ノ文）. 彌陀等經トハ阿彌陀經（大正 12 卷 347 頁中）觀無量壽經（大正 12 卷 343 頁中→）〕

p. 419. 792. 般　舟　經.（支婁迦讖譯一卷般舟三昧經）〔大正 13 卷 899 頁中〕,（同譯三卷般舟三昧經上卷）〔大正 13 卷 905 頁下〕

793. 止　　觀.（摩訶止觀二卷上）〔大正 46 卷 12 頁上→〕〔本註 No. 549 參照〕

794. 平等覺經.（三卷）〔大正 12 卷 293 頁上〕

795. 小　　經.（阿彌陀經）〔大正 12 卷 347 頁中—348 頁上〕

796. 十往生經.（佛說十往生阿彌陀佛國經）〔卍續藏經 87 套 4 册 292 丁左下—293 丁右上〕〔上引. 本註 No. 626 參照〕

p. 420. 797. 綽和尙云.（安樂集上卷）〔大正 47 卷 11 頁上〕〔往生論註下卷（大正 40 卷 834 頁下）參照. 教行信證行卷 40 丁右左引用ノ文〕

798. 有　　云.（良源ノ極樂淨土九品往生義）〔大日本佛教全書 24 卷天台小部集釋 208 頁上〕

p. 421. 799. 彌勒所問經.〔傳ハラズ. 本註 No. 683 ノ文〕

800. 寂法師云.〔良源ノ極樂淨土九品往生義（大日本佛教全書 24 卷 208 頁下）所引〕

750. 有　　云.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁中）第五師〕

751. 有　　云.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁中）第六師〕

p. 402. 752. 仁王經.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁中）参照〕

753. 諸　　論.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁中）参照〕〔大智度論四十九卷（大正 25 卷 412 頁上），攝大乘論釋八卷（大正 31 卷 208 頁中）等. 参照〕

754. 本業瓔珞經.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁下）参照〕

755. 華嚴經.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁下）参照〕

756. 占察經.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁下）参照〕

757. 遠　　云.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁下）第一師〕

p. 403. 758. 力法師.〔明カナラズ〕

759. 基　　云.〔明カナラズ〕

760. 有　　云.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁下〕第二師〕

761. 有　　云.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁下）第四師〕

762. 感禪師論.（釋淨土群疑論六卷）〔大正 47 卷 67 頁中—下〕

763. 龍興記.

764. 觀經善導禪師玄義.（觀無量壽佛經疏玄義分）〔大正 37 卷 247 頁下→〕,〔同 249 頁中〕取意.

p. 405. 765. 慧遠和尙觀經義記云.（末卷）〔大正 37 卷 182 頁上—中〕取意.

766. 雙觀經.（下卷）〔大正 12 卷 278 頁中—下〕

767. 綽和尙云.（安樂集下卷）〔大正 47 卷 12 頁上—中〕取意略抄.

p. 406. 768. 導和尙云.（往生禮讃偈）〔大正 47 卷 439 頁中〕略抄.

769. 感和尙云.（釋淨土群疑論一卷）〔大正 47 卷 36 頁下〕

p. 407. 770. 菩薩處胎經第二說.（三卷）〔大正 12 卷 1028 頁上〕〔釋淨土群疑論四卷（大正 47 卷 50 頁下）所引〕

771. 群疑論云.（四卷）〔大正 47 卷 50 頁下—51 頁上〕〔此經言トハ菩薩處胎經三卷（大正 12 卷 1028 頁上）参照〕

p. 408. 772. 華嚴偈云.（六十華嚴經二十三卷）〔大正 9 卷 544 頁上〕

773. 釋　　云.〔華嚴經探玄記十卷（大正 35 卷 294 頁下）参照〕

p. 409. 774. 十疑云.（淨土十疑論）〔大正 47 卷 79 頁下—80 頁上〕

775. 感　　師.〔釋淨土群疑論三卷（大正 47 卷 49 頁下—50 頁上）参照〕

p. 410. 776. 雙觀經云.（下卷）〔大正 12 卷 278 頁中—下〕略抄.

p. 412. 777. 經　　云.（阿彌陀經）〔大正 12 卷 347 頁中〕

724. 平等覺經云.（三卷）〔大正 12 卷 292 頁上—中〕取意略抄.

725. 憬興等師.（無量壽經連義述文賛下卷）〔大正 37 卷 158 頁下→〕等.

p. 392. 726. 雙觀經說.（下卷）〔大正 12 卷 277 頁下〕

p. 393. 727. 金剛般若經云.〔大正 8 卷 750 頁中〕参照.

728. 陀羅尼集經第二云.〔大正 18 卷 800 頁中〕

729. 玄一師.〔卍續藏經 32 套 2 册 98 丁〕

730. 因法師云.〔同上引文〕

p. 394. 731. 經云.（阿彌陀經）〔大正 12 卷 346 頁下〕〔無量壽經上卷（大正 12 卷 270 頁上）参照〕

732. 有經云.（稱讃淨土佛攝受經）〔大正 12 卷 348 頁下〕

733. 論智光疏云.〔傳ハラズ〕

p. 395. 734. 大論云.（三十二卷）〔大正 25 卷 302 頁下〕

735. 道綽等諸師.〔道綽（安樂集上卷. 大正 47 卷 6 頁上），懷感（釋淨土群疑論六卷. 大正 47 卷 63 頁下）等〕

736. 彼經（鼓音聲經）云.（阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經）〔大正 12 卷 352 頁中〕

p. 396. 737. 華嚴經偈云.（八十華嚴經七卷）〔大正 10 卷 35 頁中〕

738. 又云.（八十華嚴經五卷）〔大正 10 卷 22 頁中〕

p. 397. 739. 華嚴偈云.（八十華嚴經五卷）〔大正 10 卷 25 頁上〕

p. 398. 740. 瑜伽論云.（七十九卷）〔大正 30 卷 736 頁下〕取意略抄.

741. 感師釋云.（淨土群疑論二卷）〔大正 47 卷 38 頁下〕略抄.

742. 道宣律德云.（道世集，法苑珠林十六卷）〔大正 53 卷 406 頁上〕，（道世集，諸經要集一卷）〔大正 54 卷 6 頁下—7 頁上〕〔道宣ハ道世カ〕

p. 399. 743. 天台云.（維摩經略疏一卷）〔大正 38 卷 564 頁中〕略抄.

744. 經（彌勒問經）云.〔西方要決（大正 47 卷 105 頁上）所引ノ孫引〕

745. 西方要決云.〔大正 47 卷 105 頁中〕略抄.

p. 400. 746. 要決云.（西方要決釋疑通規）〔大正 47 卷 107 頁上—中〕取意略抄.〔十住毘婆沙云トハ大正 26 卷 No. 1521 ノ諸文集成ノ文〕

p. 401. 747. 遠法師云.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁中）第一師〕（慧遠ノ觀無量壽經義疏末卷（大正 37 卷 182 頁上—中）参照）

748. 力法師云.〔釋淨土群疑論六卷（大正 47 卷 67 頁中）第四師〕

749. 基師云.〔龍興ノ記所引カ〕

697. 綽法師云.（安樂集上卷）〔大正 47 卷 5 頁下〕略抄.〔古舊等相傳皆云トハ慧遠, 智顗, 吉藏, 慧思, 道朗, 法朗等ヲ指スカ. 大乘同性經云トハ, 同經下卷（大正 16 卷 651 頁下）取意略抄. 彼經云トハ, 同經下卷（大正 16 卷 651 頁中―下）取意略抄〕

p. 384. 698. 諸 經.〔阿彌陀經（大正 12 卷 347 頁上）, 無量壽經（大正 12 卷 270 頁上）, 大阿彌陀經（大正 12 卷 331 頁上）, 大寶積經十八卷無量壽如來會（大正 11 卷 96 頁上）, 等〕

699. 大阿彌陀經云.（阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經）〔大正 12 卷 303 頁中〕

700. 平等覺經云.〔大正 12 卷 282 頁下〕

701. 稱讃淨土經云.〔大正 12 卷 349 頁下〕

702. 雙觀經璟興師疏云.（無量壽經連義述文賛中卷）〔大正 37 卷 155 頁上〕

703. 小 經 云.（阿彌陀經）〔大正 12 卷 347 頁上〕

704. 觀音授記經云.（觀世音菩薩授記經）〔大正 12 卷 357 頁上―中〕略抄.〔今校合ヲ略ス〕

p. 385. 705. 同性經云.（大乘同性經）〔大正 16 卷 651 頁下〕〔上ノ引文〕

706. 授記經云.（觀世音菩薩授記經）〔大正 12 卷 357 頁〕〔上ノ引文〕

p. 386. 707. 綽禪師云.（安樂集上卷）〔大正 47 卷 6 頁上〕

708. 迦 才 云.（淨土論上卷）〔大正 47 卷 85 頁中〕

709. 迦 才 云.（淨土論上卷）〔大正 47 卷 85 頁上〕〔攝論ハ攝大乘論釋十二卷（大正 31 卷 241 頁上）取意略抄. 參照〕

p. 387. 710. 觀佛經云.（九卷）〔大正 15 卷 687 頁中〕

711. 雙觀經云.（上卷）〔大正 12 卷 271 頁上〕

712. 寶積經云.（十七卷）〔大正 11 卷 96 頁中〕

713. 十往生經云.〔卍續藏經 87 套 4 册 292 丁左下〕

714. 觀 經 云.〔大正 12 卷 343 頁中〕

p. 388. 715. 華嚴經云.（六十華嚴經二十九卷）〔大正 9 卷 589 頁下〕略抄.

716. 雙觀經云.（下卷）〔大正 12 卷 278 頁上〕

p. 389. 717. 有 師 云.〔璟興（無量壽經述文賛下卷. 大正 37 卷 158 頁下參照）, 義寂, 等〕

718. 有 師 云.〔曇鸞（略論安樂淨土義, 大正 47 卷 2 頁上參照）, 元曉, 等〕

719. 懷 感.（釋淨土群疑論七卷）〔大正 47 卷 71 頁下〕

720. 智 憬.〔傳ハラズ〕

721. 有 師 云.〔善導（觀無量壽佛經疏四卷散善義, 大正 37 卷 270 頁→）參照〕

p. 390. 722. 尊勝陀羅尼經說.〔大正 19 卷 350 頁上―中〕取意.

723. 法護所譯經云.（康僧鎧譯無量壽經下卷）〔大正 12 卷 278 頁上―中〕〔和倚ノ孫引カ〕

頁下）參照〕

678. 光　　明．（不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光眞言）〔大正 19 卷 No. 1002. 同經（大正 19 卷 606 頁上—中）參照〕

679. 阿　彌　陀．（阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經）〔大正 12 卷 No. 370〕

680. 龍樹所感往生淨土等呪．（拔一切業障根本得生淨土神呪）〔大正 12 卷 No. 368. 同經（大正 12 卷 351 頁下），樂邦文類一卷（大正 47 卷 163 頁上）所引．參照〕

681. 大阿彌陀經云．（阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經下卷）〔大正 12 卷 311 頁上—中〕略抄．

p. 371. 682. 十往生阿彌陀佛國經云．〔卍續藏經 87 套 4 册 292 丁右下—左上〕〔安樂集下卷（大正 47 卷 21 頁中—下所引略抄〕

p. 373. 683. 彌勒問經云．〔傳ハラズ．但シ良源ノ極樂淨土九品往生義（大日本佛敎全書 24 卷 208 頁上—下）所引略抄．尙ホ元曉ノ遊心安樂道（大正 47 卷 114 頁下）並ニ元曉ノ兩卷無量壽經宗要（大正 37 卷 129 頁上）ノ引クトコロナリ．參照〕

p. 374. 684. 寶積經第九十二云．〔大正 11 卷 528 頁中—下〕〔元曉ノ遊心安樂道（大正 47 卷 115 頁中）所引．參照〕

685. 其結文云．〔寶積經九十二卷）〔大正 11 卷 528 頁下〕〔元曉ノ遊心安樂道（大正 47 卷 115 頁中〕所引．參照〕

686. 觀　經　云．〔大正 12 卷 341 頁下〕

p. 375. 687. 又　　云．（觀無量壽佛經）〔大正 12 卷 344 頁下—346 頁上〕略抄．

p. 378. 688. 雙　觀　經．〔大正 12 卷 272 頁中—下〕

689. 觀　　經．〔大正 12 卷 341 頁下—346 頁上〕

690. 寶積經偈云．（九十八卷）〔大正 11 卷 548 頁上〕

691. 慧遠法師．（慧遠ノ觀無量壽經義疏末卷）〔大正 37 卷 183 頁上—中〕

p. 379. 692. 梵網戒品．〔大正 24 卷 997 頁中→〕

693. 大集月藏分偈云．（大方等大集經四十七卷）〔大正 13 卷 305 頁下〕略抄．

p. 380. 694. 佛藏經云．（中卷）〔大正 15 卷 793 頁上〕

大文第十

p. 382. 695. 天　台　云．〔觀無量壽經疏（大正 37 卷 188 頁中）參照〕

p. 383. 696. 遠法師云．〔無量壽經義疏上卷（大正 37 卷 92 頁上），觀無量壽經義疏（大正 37 卷 173 頁下）等參照〕

p. 362. 655. 菩薩處胎經八齋品云.（菩薩從兜術天降神母胎說廣普經七卷）〔大正 12 卷 1051 頁上〕

大 文 第 八

p. 364. 656. 木 槵 經 云.（木槵子經）〔大正 17 卷 726 頁上〕略抄.〔但シ觀念法門（大正 47 卷 30 頁上）ノ孫引ナリ〕

p. 365. 657. 占察經下卷云.（占察善惡業報經）〔大正 17 卷 908 頁下—909 頁上〕

p. 366. 658. 雙 觀 經 云.（下卷）〔大正 12 卷 272 頁中，下〕

659. 四十八願云.（無量壽經上卷）〔大正 12 卷 268 頁上，第十八願〕

660. 觀 經 云.〔大正 12 卷 346 頁上，下品下生人〕意引.〔教行信證行卷 36 丁右左. 參照〕

661. 同 經 云.（觀無量壽佛經）〔大正 12 卷 344 頁中〕

662. 同 經 云.（觀無量壽佛經）〔大正 12 卷 343 頁中〕〔上引〕

p. 367. 663. 阿彌陀經云.〔大正 12 卷 347 頁中〕

664. 般 舟 經 云.（上卷）〔大正 13 卷 905 頁中〕

665. 鼓音聲經云.〔大正 12 卷 352 頁中〕

p. 368. 666. 往 生 論.（無量壽經優波提舍）〔大正 26 卷 No. 1524〕

p. 369. 667. 大乘起信論云.〔大正 32 卷 583 頁上〕略抄.

大 文 第 九

p. 370. 668. 四十華嚴經普賢願.〔大正 10 卷 No. 293. 同經四十卷（大正 10 卷 848 頁上）第 48 偈. 參照〕

669. 三千佛名經.〔大正 14 卷 Nos. 446, 447, 448. 同經（大正 14 卷 365 頁上—中）參照〕

670. 無字寶篋經.〔大正 17 卷 No. 828. 同經（大正 17 卷 872 頁中）參照〕

671. 法 華 經.〔大正 9 卷 No. 262. 同經（大正 9 卷 54 頁下）參照〕

672. 隨 求.（佛說隨求即得大自在陀羅尼神呪經）〔大正 20 卷 No. 1154〕

673. 尊 勝.（佛頂尊勝陀羅尼經）〔大正 19 卷 No. 967. 同經（大正 19 卷 351 頁下）參照〕

674. 無 垢 淨 光.（無垢淨光大陀羅尼經）〔大正 19 卷 No. 1024. 同經（大正 19 卷 718 頁上）參照〕

675. 如 意 輪.（如意輪陀羅尼經）〔大正 20 卷 NO. 1080. 同經（大正 20 卷 196 頁上）參照〕

676. 阿 嚕 力 迦.（阿唎多羅陀羅尼阿嚕力經）〔大正 20 卷 No. 1039. 同經（大正 20 卷 24 頁上，30 頁中）參照〕

677. 不 空 羂 索.（不空羂索神變眞言經）〔大正 20 卷 No. 1092. 同經二十八卷（大正 20 卷 385

627. 唐土諸師云. 〔善導ノ觀念法門（大正 47 卷 25 頁中），善導ノ往生禮讚偈（大正 47 卷 447 頁下）參照〕

628. 雙觀經云. （上卷）〔大正 12 卷 268 頁下—269 頁上〕

p. 342. 629. 大集經賢護分云. （一卷）〔大正 13 卷 875 頁下〕

p. 343. 630. 觀　經　云. 〔大正 12 卷 343 頁下〕〔上句上引〕

631. 鼓音聲王經云. （阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經）〔大正 12 卷 352 頁下〕

p. 344. 632. 平等覺經云. （三卷）〔大正 12 卷 293 頁上〕

633. 雙觀經偈云. （下卷）〔大正 12 卷 273 頁上〕

634. 觀　　經. 〔大正 12 卷 345 頁下〕略抄.

635. 同. （觀無量壽佛經）〔大正 12 卷 346 頁上〕略抄.

p. 345. 636. 同. （觀無量壽佛經）〔大正 12 卷 346 頁上〕略抄.

637. 雙觀經云. （上卷）〔大正 12 卷 268 頁下第三十四願，269 頁中第四十七願〕

p. 346. 638. 觀　經　云. 〔大正 12 卷 346 頁中〕

639. 觀佛經第三言. 〔大正 15 卷 660 頁中—661 頁上〕略抄.

p. 347. 640. 又　　云. （觀佛三昧經三卷）〔大正 15 卷 661 頁上—中〕取意略抄.

p. 348. 641. 第　七　卷. （觀佛三昧經九卷）〔大正 15 卷 688 頁中〕

p. 349. 642. 又　　云. （觀佛三昧經九卷）〔大正 15 卷 688 頁中—下〕取意略抄.

p. 350. 643. 又　　云. （觀佛三昧經九卷）〔大正 15 卷 688 頁下—689 頁上〕略抄.

p. 352. 644. 又　　云. （觀佛三昧經九卷）〔大正 15 卷 689 頁上—中〕略抄.

p. 353. 645. 又　　云. （觀佛三昧經九卷）〔大正 15 卷 689 頁中—下〕

p. 354. 646. 迦葉經云. （大寶積經八十九卷摩訶迦葉會）〔大正 11 卷 512 頁下—514 頁上〕取意略抄.〔但シ諸經要集一卷（大正 54 卷 2 頁上—中）所引ト全同〕

p. 356. 647. 譬喩經第二云. 〔傳ハラズ. 但シ經律異相十八卷（大正 53 卷 97 頁中），法苑珠林十三卷（大正 53 卷 381 頁下），諸經要集一卷（大正 54 卷 2 頁下）等ノ引文. 參照〕

p. 357. 648. 優婆塞戒經云. 〔大正 24 卷 No. 1488 ニナシ. 他本カ，孫引カ.〕

p. 359. 649. 淨　土　論. （下卷）〔大正 47 卷 97 頁上→〕

650. 瑞　應　傳. （往生西方淨土瑞應傳）〔大正 51 卷 No. 2070〕

651. 慶氏日本往生記. （慶保胤ノ日本往生極樂記）〔大日本佛教全書 107 卷所收〕

652. 群疑論云. （四卷）〔大正 47 卷 51 頁上〕取意略抄.

p. 360. 653. 大悲經第二云. 〔大正 12 卷 956 頁下〕

654. 同經第三. （大悲經三卷）〔大正 12 卷 957 頁中—下〕略抄.

p. 333. 600. 大悲經第二. 〔大正 12 卷 956 頁上—中〕

601. 寶積經云. (三十七卷)〔大正 11 卷 210 頁下〕

602. 又　云. (寶積經六卷)〔大正 11 卷 33 頁下〕

603. 十二佛名經偈云. 〔大正 21 卷 862 頁中〕

p. 334. 604. 法華經偈云. (一卷)〔大正 9 卷 9 頁上〕

605. 大悲經第三. 〔大正 12 卷 957 頁上〕

606. 華嚴經偈云. (八十華嚴經二十三卷)〔大正 10 卷 124 頁上〕

607. 華嚴經偈云. (八十華嚴經十六卷)〔大正 10 卷 83 頁上〕

p. 335. 608. 觀佛經. (觀佛三昧海經)〔大正 15 卷 No. 643〕

609. 般舟經. (般舟三昧經)〔大正 13 卷 Nos. 417, 418〕

610. 念佛經. (大方等大集經菩薩念佛三昧分)〔大正 13 卷 No. 415〕

611. 觀佛經云. 〔大正 15 卷 646 頁上〕〔上引文〕

612. 觀經云. 〔大正 12 卷 343 頁上〕

p. 336. 613. 往生論智光釋文云. 〔今傳ハラズ. 但シ曇鸞ノ無量壽經優婆提舍願生偈上卷(大正 40 卷 832 頁上)ノ文ト同ジ〕

614. 大集經日藏分云. (大集經三十八卷)〔大正 13 卷 256 頁中〕取意引文. 〔今校合セズ. 和尙ノ孫引カ〕

p. 337. 615. 觀　經. 〔上文〕

616. 光師釋. 〔上文〕

617. 華嚴經偈云. (六十華嚴經十一卷)〔大正 9 卷 466 頁上〕〔八十華嚴經十九卷(大正 10 卷 102 頁上—中)參照.〕

618. 華嚴傳曰. (四卷)〔大正 51 卷 167 頁上〕略抄.

p. 339. 619. 觀經云. 〔大正 12 卷 343 頁中〕

620. 又　云. (觀無量壽佛經)〔大正 12 卷 346 頁中〕

621. 又　云. (觀無量壽佛經)〔大正 12 卷 344 頁中〕〔上引〕

622. 阿彌陀思惟經云. (阿彌陀佛大思惟經說序分)〔大正 18 卷 800 頁中〕

p. 340. 623. 稱讃淨土經云. 〔大正 12 卷 351 頁上〕

624. 觀經云. 〔大正 12 卷 343 頁中〕

625. 又　云. (觀無量壽佛經)〔大正 12 卷 344 頁中〕

p. 341. 626. 十往生經云. (佛說十往生阿彌陀佛國經)〔卍續藏經 87 套 4 册 292 丁左下—293 丁右上〕〔但シ完全ニ一致セズ. 異本カ, 或ハ孫引ナラン〕

p. 321. 574. 普曜經偈云. (八卷)〔大正 3 卷 537 頁下〕

p. 322. 575. 般舟經偈云. (上卷)〔大正 13 卷 908 頁上〕

p. 323. 576. 度諸佛境界經說. 〔大正 10 卷 916 頁上〕

577. 觀佛經說. (三卷)〔大正 15 卷 661 頁上〕

p. 324. 578. 護身呪經云. (灌頂三歸五戒帶佩護身呪經)〔大正 21 卷 502 頁中〕略抄. 〔教行信證化卷末 23 丁右左引用ノ文〕

579. 般舟經云. (中卷)〔大正 13 卷 912 頁下〕

p. 325. 580. 偈曰. (般舟經中卷)〔大正 13 卷 913 頁中〕略抄.

p. 326. 581. 十住婆娑云. (十二卷)〔大正 26 卷 88 頁上〕

582. 十二佛名經偈云. (十二佛名神呪校量功德除障滅罪經)〔大正 21 卷 862 頁中〕

583. 文殊般若經下卷云. (文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經)〔大正 8 卷 731 頁上—中〕略抄. 〔往生禮讃偈 (大正 47 卷 439 頁上) 所引參照〕

p. 327. 584. 導禪師釋云. (往生禮讃偈)〔大正 47 卷 439 頁上—中〕略抄.

585. 般舟經云. (中卷)〔大正 13 卷 913 頁上〕

586. 同經偈云. (三卷本般舟三昧經中卷)〔大正 13 卷 908 頁中〕(一卷本般舟三昧經)〔大正 13 卷 900 頁下〕〔但シ "如阿彌陀國菩薩" 以下ノ四句ハ現藏經本ニ缺ク〕

p. 328. 587. 念佛三昧經第九偈云. (大方等大集經菩薩念佛三昧分)〔大正 13 卷 865 頁中〕

588. 十二佛名經偈云. 〔大正 21 卷 862 頁上〕

p. 329. 589. 華嚴偈云. (八十華嚴經二卷)〔大正 10 卷 9 頁下〕

590. 般舟經偈云. (中卷)〔大正 13 卷 913 頁中〕

591. 觀佛經云. (九卷)〔大正 15 卷 687 頁下〕

p. 330. 592. 安樂集云. (上卷)〔大正 47 卷 4 頁中〕〔大集經云. 但シ大集經ニ文ナシ (安樂集癸丑記一卷. 眞宗大系本 60 頁上→參照). 有云. 迦才ノ淨土論下卷 (大正 47 卷 101 頁上) 參照〕

p. 331. 593. 十二佛名經偈云. 〔大正 21 卷 862 頁上—中〕略抄.

594. 觀佛經云. (一卷)〔大正 15 卷 646 頁上〕

595. 大集念佛三昧經第七云. 〔大正 13 卷 857 頁下〕

596. 同經第九云. 〔大正 13 卷 864 頁中〕

p. 332. 597. 同經偈云. (九卷)〔大正 13 卷 865 頁中〕

598. 有經言. (俱舍論二十七卷)〔大正 29 卷 141 頁下〕, (順正理論七十五卷)〔大正 29 卷 750 頁上〕參照.

599. 大般若經云. (四百三十卷)〔大正 7 卷 162 頁下〕略抄?〔不明再檢セヨ〕

p. 299. 550. 弘 決 云.（摩訶止觀輔行傳弘決二ノ一卷）〔大正 46 卷 188 頁下〕

551. 四分律抄云.（四分律刪繁補闕行事鈔下卷）〔大正 40 卷 144 頁上〕〔法苑珠林九十五卷（大正 53 卷 987 頁上），諸經要集十九卷（大正 54 卷 176 頁下）參照〕

p. 300. 552. 或 說.（法苑珠林九十五卷）〔大正 53 卷 987 頁上〕（諸經要集十九卷）〔大正 54 卷 176 頁下〕

553. 導和尙云.（觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門）〔大正 47 卷 24 頁中—下〕

p. 301. 554. 大 論 云.（四十卷）〔大正 25 卷 352 頁上—中〕

p. 302. 555. 綽和尙云.（安樂集上卷）〔大正 47 卷 11 頁中〕

p. 304. 556. 大圓覺經偈云.（大方廣圓覺修多羅了義經）〔大正 17 卷 914 頁上〕

p. 306. 557. 彌陀佛言.（無量壽經下卷）〔大正 12 卷 273 頁上〕

p. 307. 558. 彼佛本願云.（無量壽經上卷）〔大正 12 卷 268 頁中〕

p. 308. 559. 又本願云.（無量壽經上卷）〔大正 12 卷 268 頁上—中〕

p. 310. 560. 華嚴偈云.（六十華嚴經七卷）〔大正 9 卷 437 頁中〕

p. 312. 561. 觀佛三昧經說.（五卷）〔大正 15 卷 669 頁上〕

p. 313. 562. 又 言.（觀佛三昧經五卷）〔大正 15 卷 669 頁中〕〔群疑論七卷（大正 47 卷 71 頁上）參照.〕

p. 314. 563. 感和尙釋云.（釋淨土群疑論七卷）〔大正 47 卷 71 頁中〕〔觀佛三昧經五卷（大正 15 卷 669 頁上—中），觀無量壽佛經（大正 12 卷 345 頁下）參照〕

卷　下

大文第七

p. 317. 564. 觀佛經第二云.〔大正 15 卷 655 頁上—中〕

p. 318. 565. 又 云.（觀佛三昧經六卷）〔大正 15 卷 675 頁下〕

566. 又 云.（觀佛三昧經六卷）〔大正 15 卷 675 頁下〕

p. 319. 567. 優塡王作佛形像經云.（佛說作佛形像經）〔大正 16 卷 788 頁中—下〕取意略抄.

568. 又 云.（觀佛三昧經六卷）〔大正 15 卷 676 頁中〕

569. 又 云.（觀佛三昧經八卷）〔大正 15 卷 687 頁中〕

570. 又 云.（觀佛三昧經八卷）〔大正 15 卷 687 頁中〕

p. 320. 571. 寶積經第五云.〔大正 11 卷 30 頁上〕

572. 遺日摩尼經云.〔大正 12 卷 191 頁中〕

573. 大悲經第二云.〔大正 12 卷 956 頁下〕略抄.

p. 275. 529. 十住婆沙懺悔偈云.（五卷）〔大正 26 卷 45 頁上〕

530. 勸請偈云.（十住毘婆沙論五卷）〔大正 26 卷 45 頁下〕

531. 隨喜偈云.（十住毘婆沙論五卷）〔大正 26 卷 46 頁上〕

p. 276. 532. 彌勒菩薩本願經一偈.〔大正 12 卷 188 頁下〕

533. 經云.（彌勒菩薩本願經）〔大正 12 卷 188 頁下〕

p. 277. 534. 十住論偈云.（六卷）〔大正 26 卷 47 頁中〕

p. 278. 535. 大般若.（三百四十六卷）〔大正 6 卷 776 頁下〕

p. 279. 536. 般舟經云.（中卷）〔大正 13 卷 912 頁下〕略抄.

537. 止觀第八云.（八卷下）〔大正 46 卷 115 頁上, 116 頁中〕

p. 280. 538. 大般若經云.（三百四十六卷）〔大正 6 卷 776 頁下〕

539. 大論云.（五十卷）〔大正 25 卷 417 頁下〕

p. 281. 540. 彼論云.（大智度論三十七卷）〔大正 25 卷 332 頁下〕

541. 大集經月藏分云.（大方等大集經四十九卷）〔大正 13 卷 320 頁中〕取意.〔現世利益和讃（大正 83 卷 659 頁上—下）參照〕

p. 282. 542. 迦才云.（淨土論上卷）〔大正 47 卷 90 頁上〕

大文第六

p. 284. 543. 導和尚云.（觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門）〔大正 47 卷 24 頁上—中, 25 頁下, 29 頁中〕〔般舟三昧經（大正 13 卷 899 頁上—中）, 觀佛三昧海經二卷（大正 15 卷 655 頁中）略抄. 參照〕

p. 289. 544. 大般若五百六十八云.〔大正 7 卷 936 頁中〕

p. 290. 545. 大集賢護經.（大方等大集經賢護分一卷）〔大正 13 卷 875 頁下〕〔本書下卷念佛利益門第五彌陀別益中所引〕

546. 迦才淨土論云.（下卷）〔大正 47 卷 102 頁下〕〔經文（木槵子經, 大正 17 卷 726 頁上）參照〕

p. 291. 547. 鼓音聲經.（阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經）〔大正 12 卷 352 頁下〕〔下出〕

548. 平等覺經.（三卷）〔大正 12 卷 293 頁上〕〔下出〕

549. 止觀第二云.（二卷上）〔大正 46 卷 12 頁上—13 頁上〕常行三昧全文引用.〔十住毘婆沙論十二卷（大正 26 卷 88 頁中）, 同論（同 86 頁中）參照. 引文ノ偈ハ般舟三昧經（大正 13 卷 899 頁下）, 般舟三昧經中卷（大正 13 卷 909 頁上）, 十住毘婆沙論十二卷（大正 26 卷 86 頁上）參照. 婆娑云以下ハ十住毘婆沙論十二卷（大正 26 卷 88 頁上）略抄.〕

501. 大　　論.（四十九卷）〔大正 25 卷 415 頁下〕
p. 259. 502. 往生論云.（無量壽經優波提舍）〔大正 26 卷 232 頁下〕〔淨土論註下卷（大正 40 卷 842 頁中—下）參照〕
p. 261. 503. 次第禪門云.（釋禪波羅蜜次第法門四卷）〔大正 46 卷 503 頁下〕略抄.
p. 263. 504. 六波羅蜜經云.（八卷）〔大正 8 卷 900 頁上〕
505. 菩薩處胎經偈云.（六卷）〔大正 12 卷 1046 頁上〕
p. 265. 506. 心地觀經偈云.（八卷）〔大正 3 卷 328 頁上〕
507. 中論第一偈云.（一卷）〔大正 30 卷 2 頁中〕
508. 經　　云.〔出處不明. 教行信證行卷 46 丁右參照〕
p. 266. 509. 止　觀　云.（二卷上）〔大正 46 卷 11 頁中〕
510. 觀佛經云.（九卷）〔大正 15 卷 689 頁下〕
p. 267. 511. 大經十九云.（北本涅槃經十九卷）〔大正 12 卷 477 頁下〕（南本涅槃經十七卷）〔大正 12 卷 720 頁下〕
512. 大　論　云.〔不明再檢セヨ〕
p. 268. 513. 儀　　軌.（無量壽如來觀行供養儀軌）〔大正 19 卷 71 頁中〕
514. 心地觀經云.（三卷）〔大正 3 卷 304 頁上〕
p. 270. 515. 華嚴偈云.（八十華嚴經十六卷）〔大正 10 卷 83 頁上—中〕
516. 佛藏經念佛品云.（上卷）〔大正 15 卷 785 頁上—中〕略抄.
p. 271. 517. 心地觀經偈云.（三卷）〔大正 3 卷 303 頁下〕略抄.
518. 如來祕密藏經下卷言.〔大正 17 卷 844 頁中—下〕
p. 272. 519. 決定毘尼經云.〔大正 12 卷 40 頁上〕取意ノ文.〔他カラ孫引ノ文ナラン〕
p. 273. 520. 大論四十六云.〔大正 25 卷 395 頁下〕
521. 十輪經說.（四卷）〔大正 13 卷 744 頁下〕取意ノ文.
p. 274. 522. 觀　　經.（下々品ノ文意）〔大正 12 卷 346 頁上〕
523. 觀　佛　經.（九卷）〔大正 15 卷 687 頁中〕
524. 大　　經.（北本涅槃經十九卷）〔大正 12 卷 477 頁下〕（南本涅槃經十七卷）〔大正 12 卷 720 頁下〕
525. 般　若　經.（大樂金剛不空眞實三麽耶經）〔大正 8 卷 784 頁下〕
526. 華　嚴　經.（四十華嚴經四十卷）〔大正 10 卷 848 頁上〕
527. 感禪師云.（釋淨土群疑論三卷）〔大正 47 卷 49 頁中〕
528. 大　論　云.（七卷）〔大正 25 卷 110 頁上〕取意略抄.

472. 般舟經云．（般舟三昧經下卷）〔大正 13 卷 919 頁上〕

473. 偈　　言．（般舟三昧經下卷）〔大正 13 卷 919 頁上―中〕

p. 246.　474. 雙觀經云．（無量壽經下卷）〔大正 12 卷 279 頁上〕

p. 248.　475. 度諸佛境界經云．（度諸佛境界智光嚴經）〔大正 10 卷 916 頁中〕

476. 華嚴偈云．（八十華嚴經二十三卷）〔大正 10 卷 124 頁上〕

p. 249.　477. 華　嚴　經．（六十華嚴經六卷淨行品）〔大正 9 卷 431--432 頁〕（八十華嚴經十四卷淨行品）〔大正 10 卷 70―72 頁〕

p. 250.　478. 觀佛三昧經云．（十卷）〔大正 15 卷 694 頁下〕

479. 同　經　云．（觀佛三昧經九卷）〔大正 15 卷 690 頁下〕

p. 251.　480. 大　論　云．（二十二卷）〔大正 25 卷 225 頁下〕

481. 般舟經云．（中卷）〔大正 13 卷 909 頁中〕

482. 觀佛經云．（十卷）〔大正 15 卷 695 頁中〕

p. 252.　483. 六波羅蜜經云．（九卷）〔大正 8 卷 908 頁中〕

484. 遺教經云．（垂般涅槃略說教誡經）〔大正 12 卷 1111 頁中〕

485. 或處說云．〔不明〕

486. 大集月藏分云．（大方等大集經五十卷）〔大正 13 卷 328 頁上，328 頁中〕合文．

487. 雙觀經云．（下卷）〔大正 12 卷 274 頁下〕

p. 253.　488. 寶積經九十一云．〔大正 11 卷 519 頁中―520 頁下〕略抄．

p. 255.　489. 大論偈云．（一卷）〔大正 25 卷 63 頁下〕

490. 同論偈云．（大智度論十五卷）〔大正 25 卷 173 頁中〕

p. 256.　491. 華嚴經偈云．（八十華嚴經十三卷）〔大正 10 卷 67 頁下〕

492. 金剛般若論偈云．（金剛般若波羅蜜經論上卷）〔大正 25 卷 785 頁上〕〔法華玄義五卷上（大正 33 卷 733 頁中）引用句参照〕

493. 觀　佛　經．（十卷）〔大正 15 卷 694 頁下〕〔上出〕

494. 般舟經(彼經言)．（下卷）〔大正 13 卷 916 頁中―下〕略抄．

p. 257.　495. 般　舟　經．（上卷四事品）〔大正 13 卷 906 頁上〕

496. 十住婆沙第九．（四法品）〔大正 26 卷 65 頁下→〕

497. 念佛三昧經．（菩薩念佛三昧分正觀品第十）〔大正 13 卷 856 頁下→〕

498. 華嚴經偈云．（八十華嚴經八十卷）〔大正 10 卷 442 頁下〕

499. 觀佛經云．（十卷）〔大正 15 卷 693 頁上〕

p. 258.　500. 遺日摩尼經說．（遺日摩尼寶經）〔大正 12 卷 192 頁下〕

p. 232. 443. 六波羅蜜經云. (七卷)〔大正 8 卷 897 頁下—898 頁上〕略抄.
p. 233. 444. 寶積經云. (四十六卷)〔大正 11 卷 273 頁上〕
p. 234. 445. 華嚴經偈言. (八十華嚴經六卷)〔大正 10 卷 30 頁上—中〕
446. 同經偈云. (八十華嚴經六卷)〔大正 10 卷 31 頁下〕
447. 十住論云. (十卷)〔大正 26 卷 73 頁上—中〕
p. 235. 448. 同論云. (十住毘婆沙論十卷)〔大正 26 卷 73 頁中〕
p. 236. 449. 偈云. (十住毘婆沙論十二卷)〔大正 26 卷 84 頁上〕
450. 大般若經云. (五百六十八卷)〔大正 7 卷 935 頁下〕
451. 寶積經云. (四十卷)〔大正 11 卷 230 頁下〕
p. 237. 452. 同經偈云. (寶積經三十七卷)〔大正 11 卷 208 頁下〕
453. 華嚴經偈云. (八十華嚴經十三卷)〔大正 10 卷 63 頁中〕
454. 大經偈云. (北本涅槃經三十八卷)〔大正 12 卷 590 頁中〕(南本涅槃經三十四卷)〔大正 12 卷 838 頁上—中〕
455. 大論云. (二十六卷)〔大正 25 卷 248 頁上〕
456. 有論云. (大智度論七十九卷)〔大正 25 卷 614 頁下〕略抄. 〔大智度論三十七卷 (大正 25 卷 333 頁上) 參照〕
p. 238. 457. 莊嚴論偈云. (大乘莊嚴經論六卷)〔大正 31 卷 623 頁上〕
458. 有懺悔偈云. 〔不明〕
459. 十住論云. (十一卷)〔大正 26 卷 80 頁中〕略抄.
p. 239. 460. 又云. (十住毘婆沙論十一卷)〔大正 26 卷 81 頁下〕
p. 240. 461. 偈云. (十住毘婆沙論十二卷)〔大正 26 卷 84 頁上〕
462. 華嚴經偈云. (八十華嚴經六卷)〔大正 10 卷 31 頁中〕
463. 淨名經偈云. (維摩詰所說經上卷)〔大正 14 卷 538 頁上〕
464. 譬喩經第三云. 〔不明〕
p. 241. 465. 文殊師利菩薩言(大般若). (五百七十四卷)〔大正 7 卷 964 頁中〕
p. 242. 466. 占察經下卷言. (占察善惡業報經)〔大正 17 卷 907 頁上〕
p. 243. 467. 華嚴經偈云. (八十華嚴經十六卷)〔大正 10 卷 81 頁下〕
468. 普賢菩薩云. (四十華嚴經四十卷)〔大正 10 卷 844 頁中〕
469. 雙觀經云. (無量壽經下卷)〔大正 12 卷 272 頁下〕
p. 244. 470. 龍樹偈云. (十住毘婆沙論十二卷)〔大正 26 卷 84 頁下〕
471. 同讃彌陀偈云. (十住毘婆沙論五卷易行品)〔大正 26 卷 43 頁下〕〔上出〕

412. 興　云.（無量壽經連義述文賛中卷）〔大正 37 卷 155 頁下〕

413. 一　云.（玄一無量壽經記上卷）〔卍續藏經 32 套 202 丁左下〕

414. 一　云.（玄一無量壽經記上卷）〔卍續藏經 32 套 202 丁左下〕

p. 220. 415. 平等覺經.〔前引〕

416. 觀　經.〔前引〕

417. 譬喩經第三云.〔唐法逵所集ノ賢聖集ト傳フ. 存亡不明〕

p. 221. 418. 華嚴經偈云.（八十華嚴經十一卷）〔大正 10 卷 56 頁下〕

419. 寶積經三十七云.〔大正 11 卷 215 頁上〕略抄.

p. 222. 420. 十住論云.（十住毘婆沙論十一卷）〔大正 26 卷 81 頁上〕

421. 偈　云.（十住毘婆沙論十二卷）〔大正 26 卷 84 頁上〕

p. 223. 422. 同論云.（十住毘婆沙論十卷）〔大正 26 卷 72 頁上一中〕取意略抄.

423. 觀佛經云.（六卷）〔大正 15 卷 675 頁中〕略抄.

p. 224. 424. 又(寶積經).（四十卷）〔大正 11 卷 229 頁中〕

425. 華嚴經偈云.（六十華嚴經十卷）〔大正 9 卷 464 頁上〕

p. 225. 426. 十住論云.（十卷）〔大正 26 卷 72 頁下〕取意略抄.

427. 淨名經云.（維摩詰所說經中卷）〔大正 14 卷 546 頁中一下〕取意略抄.

p. 226. 428. 度諸佛境界經云.（度諸佛境界智光嚴經）〔大正 10 卷 913 頁中〕

429. 華嚴經偈云.（六十華嚴經十四卷）〔大正 9 卷 487 頁下〕

p. 227. 430. 十住論云.（十卷）〔大正 26 卷 72 頁中〕取意略抄.

431. 度諸佛境界經云.〔大正 10 卷 914 頁下〕

432. 華嚴偈云.（八十華嚴經十九卷）〔大正 10 卷 100 頁下〕

433. 又　云.（八十華嚴經七卷）〔大正 10 卷 34 頁下〕

p. 228. 434. 十住論云.（十一卷）〔大正 26 卷 83 頁上〕

435. 華嚴經偈云.（八十華嚴經三卷）〔大正 10 卷 13 頁上一中〕

p. 229. 436. 十住論云.（十卷）〔大正 26 卷 73 頁上〕略抄.

437. 華嚴偈云.（八十華嚴經十三卷）〔大正 10 卷 69 頁上〕

p. 230. 438. 十住論云.（十卷）〔大正 26 卷 73 頁上〕略抄.

439. 華嚴偈云.（八十華嚴經十三卷）〔大正 10 卷 69 頁上一中〕

440. 十住論云.（十一卷）〔大正 26 卷 83 頁上〕

p. 231. 441. 偈　云.（十住毘婆沙論十二卷）〔大正 26 卷 84 頁中〕

442. 寶積經三十七云.〔大正 11 卷 210 頁中一下〕略抄.

384. 善導和尙云. (往生禮讃偈)〔大正 47 卷 447 頁下〕略抄.

p. 210. 385. 要　決　譬. 〔大正 47 卷 110 頁上〕

386. 安 樂 集 云. (上卷)〔大正 47 卷 11 頁上—中〕

p. 211. 387. 元　　曉. 遊心安樂道〔大正 47 卷 115 頁上〕

388. 止觀第二云. 〔大正 46 卷 12 頁中〕略抄.

389. 感 禪 師 云. (釋淨土群疑論七卷)〔大正 47 卷 76 頁中—下〕〔觀經 (大正 12 卷 346 頁上意引) 大集日藏分 (大正 13 卷 285 頁下) 參照〕

p. 212. 390. 日藏經第九. (大集經四十三卷)〔大正 13 卷 285 頁下〕

p. 213. 391. 無量淸淨覺經云. (二卷)〔大正 12 卷 290 頁上〕取意.〔但シ今ハ迦才ノ淨土論下卷 (大正 47 卷 102 頁中) ノ文ヲ引ク〕

p. 214. 392. 心地觀經偈云. (一卷)〔大正 3 卷 295 頁上〕

393. 維 摩 經 言. (下卷)〔大正 14 卷 554 頁上〕

p. 215. 394. 要　決　云. 〔大正 47 卷 107 頁下〕〔維摩經 (大正 14 卷 554 頁上) 成實論一卷 (大正 32 卷 242 頁下) 參照〕

395. 華 嚴 偈 云. (八十華嚴經二十三卷)〔大正 10 卷 124 頁上〕

p. 216. 396. 首楞嚴經文. (首楞嚴三昧經上卷)〔大正 15 卷 633 頁中〕〔本書下卷引文 No. 823 參照〕

397. 六波羅蜜經云. (七卷)〔大正 8 卷 897 頁中〕略抄.

p. 217. 398. 寶　積　經. 四十六卷〔大正 11 卷 272 頁下〕

399. 大集念佛三昧經第五云. (大方等大集經菩薩念佛三昧分五卷)〔大正 13 卷 850 頁中〕

400. 華 嚴 偈 云. (八十華嚴經四卷)〔大正 10 卷 16 頁中〕

p. 218. 401. 平等覺經云. (一卷)〔大正 12 卷 281 頁下—282 頁中〕

402. 觀　經　云. 〔大正 12 卷 343 頁中〕

403. 此　經　云. (平等覺經)〔大正 12 卷 282 頁中〕略抄.〔上引〕

404. 雙 觀 經 云. (上卷)〔大正 12 卷 270 頁上—中〕略抄.

p. 219. 405. 玄　一　師. (無量壽經記上卷)〔卍續藏經 32 套 No. 305, 202 丁左下〕

406. 一　師　云. (玄一無量壽經記上卷)〔卍續藏經 32 套 202 丁左下〕

407. 一　　　云. (玄一無量壽經記上卷)〔卍續藏經 32 套 202 丁左下〕

408. 憬 興 師 云. (無量壽經連義述文賛中卷)〔大正 37 卷 155 頁下〕

409. 一　　　云. (玄一無量壽經記上卷)〔卍續藏經 32 套 202 丁左下〕

410. 興　　　云. (無量壽經連義述文賛中卷)〔大正 37 卷 155 頁下〕

411. 一　　　云. (玄一無量壽經記上卷)〔卍續藏經 32 套 202 丁左下〕

ノ文ト全同ナリ.〕(諸經要集十卷所引)〔大正 54 卷 90 頁上〕

359. 大論云. (四十九卷)〔大正 25 卷 411 頁中〕

p. 201. 360. 論云. (大智度論四十六卷)〔大正 25 卷 395 頁下—396 頁上〕

p. 202. 361. 大論第七云. 〔大正 25 卷 112 頁下〕

大文第五

p. 203. 362. 感禪師. (懷感ノ釋淨土群疑論七卷)〔大正 47 卷 76 頁中〕

363. 觀佛三昧經供養文意. (十卷)〔大正 15 卷 695 頁上〕

p. 204. 364. 念珠功德經. (校量數珠功德經)〔大正 17 卷 727 頁上—中〕

365. 攝論. (攝大乘論釋八卷)〔大正 31 卷 209 頁上〕

366. 等. (俱舍論二十七卷)〔大正 29 卷 141 頁中〕, (阿毘達磨順正理論七十五卷)〔大正 29 卷 749 頁下〕等.

367. 要決云. (窺基ノ西方要決釋疑通規)〔大正 47 卷 109 頁下〕

368. 善導禪師云. (往生禮讃偈)〔大正 47 卷 439 頁上〕

369. 要決云. 〔大正 47 卷 109 頁下〕

370. 導禪師云. (往生禮讃偈)〔大正 47 卷 439 頁中〕

p. 205. 371. 要決云. 〔大正 47 卷 110 頁上〕

p. 206. 372. 導師云. (往生禮讃偈)〔大正 47 卷 439 頁上〕

373. 要決云. 〔大正 47 卷 110 頁上〕

p. 207. 374. 導師云. (往生禮讃偈)〔大正 47 卷 439 頁上〕

375. 寶積經九十二云. 〔大正 11 卷 527 頁中〕

376. 同偈云. 〔大正 11 卷 528 頁上〕

377. 止觀. 四卷下〔大正 46 卷 42 頁下〕

378. 木槵經. (佛說木槵子經)〔大正 17 卷 726 頁上〕

p. 208. 379. 迦才淨土論云. (中卷)〔大正 47 卷 91 頁下〕

380. 觀經云. 〔大正 12 卷 344 頁下〕

381. 善導禪師云. (往生禮讃偈)〔大正 47 卷 438 頁下〕略抄. 〔選擇本願念佛集ノ引用文. 散善義, 信卷, 化卷參照〕

p. 209. 382. 鼓音聲經云. 〔大正 12 卷 353 頁上〕

383. 涅槃經云. (北本三十五卷)〔大正 12 卷 573 頁下〕(南本三十二卷)〔大正 12 卷 821 頁上〕

332. 大　　論. 二十九卷〔大正 25 卷 276 頁上, 等〕

p. 190. 333. 觀　　經. (觀無量壽佛經)〔大正 12 卷 344 頁下〕

334. 心地觀經. (大乘本生心地觀經)〔大正 3 卷 305 頁上—中〕

335. 金光明經. (金光明最勝王經二卷)〔大正 16 卷 408 頁中→〕

336. 念佛三昧經. (大方等大集經菩薩念佛三昧分)〔大正 13 卷 No. 415〕

337. 般若經. (仁王般若波羅蜜經上卷)〔大正 8 卷 827 頁中〕(般若波羅蜜多心經)〔大正 8 卷 848 頁下〕等.

338. 止　　觀. 一卷下〔大正 46 卷 6 頁中—下〕

p. 191. 339. 觀　　經. 〔大正 12 卷 343 頁中—344 頁中〕

340. 華嚴經. 〔大正 9 卷 No. 278, 10 卷 No. 279, No. 293〕

p. 192. 341. 觀經云. 〔大正 12 卷 344 頁中〕

342. 天台大師云. (淨土十疑論)〔大正 47 卷 78 頁中〕

p. 193. 343. 華嚴經云. (六十華嚴經五卷)〔大正 9 卷 429 中〕〔教行信證行卷 45 丁左—46 丁右引用ノ文〕

344. 觀佛三昧經云. (十卷)〔大正 15 卷 695 頁上〕〔上出ノ文〕

345. 文殊般若經下卷云. 〔大正 8 卷 731 頁中〕

p. 194. 346. 觀經云. 〔大正 12 卷 343 頁下〕

347. 觀佛經云. (二卷)〔大正 15 卷 655 頁中—下〕

p. 195. 348. 又　　云. (九卷)〔大正 15 卷 691 頁中〕

349. 又　　云. (九卷)〔大正 15 卷 692 頁下〕

p. 196. 350. 觀佛經第九云. 〔大正 15 卷 687 頁中—下〕

p. 197. 351. 華嚴經意. (六十華嚴經十五卷)〔大正 9 卷 493 頁中—494 頁上〕(八十華嚴經二十四卷)〔大正 10 卷 130 頁上—中〕

352. 大論意. (四十六卷)〔大正 25 卷 393 頁中, 395 頁上〕

353. 華嚴經說云. (八十華嚴經二十四卷)〔大正 10 卷 130 頁上〕略引.

p. 198. 354. 刊定記. (慧苑ノ續華嚴略疏刊定記二十卷)〔但シ現流布本ハ缺文〕

355. 論　　云. (大智度論四十九卷)〔大正 25 卷 411 頁中〕

356. 六波羅蜜經云. (大乘理趣六波羅蜜多經四卷)〔大正 8 卷 883 頁中 "一華一果施." 尙 885 頁中參照セヨ〕

p. 199. 357. 寶積經四十六云. 〔大正 11 卷 272 頁中〕

358. 大莊嚴論偈云. 〔馬鳴並ニ無著ノ大莊嚴論ニハ共ニナシ. 但シ諸經要集所引 "大菩薩藏經"

306. 大　經　云. (北本涅槃經二十八卷) 〔大正 12 卷 535 頁上〕(南本涅槃經二十六卷) 〔大正 12 卷 780 頁上〕

307. 大　論　云. (二十九卷) 〔大正 25 卷 273 頁下〕

308. 大集經云. (六卷) 〔大正 13 卷 37 頁下〕

309. 報恩經云. (大方便佛報恩經七卷) 〔大正 3 卷 165 頁上〕

310. 瑜　伽　云. (四十九卷) 〔大正 30 卷 567 頁中—下〕

p. 181. 311. 大　經　云. (北本涅槃經二十八卷) 〔大正 12 卷 535 頁上〕(南本涅槃經二十六卷) 〔大正 12 卷 780 頁上〕

312. 大集經云. (六卷) 〔大正 13 卷 37 頁中〕

313. 大　論　云. (二十九卷) 〔大正 25 卷 273 頁下〕

314. 導禪師云. (觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門) 〔大正 47 卷 23 頁上〕

315. 大　經　云. (北本涅槃經二十八卷) 〔大正 12 卷 535 頁上〕(南本涅槃經二十六卷) 〔大正 12 卷 780 頁上〕

316. 瑜　伽　云. (四十九卷) 〔大正 30 卷 567 頁中〕

317. 瑜　伽　云. (四十九卷) 〔大正 30 卷 567 頁中〕

p. 182. 318. 無上依經云. (下卷) 〔大正 16 卷 474 頁上〕

319. 優婆塞戒經云. (一卷) 〔大正 24 卷 1039 頁下〕

320. 瑜　伽　云. (四十九卷) 〔大正 30 卷 567 頁中〕

321. 大　經　云. (北本涅槃經二十八卷) 〔大正 12 卷 534 頁下〕(南本涅槃經二十六卷) 〔大正 12 卷 779 頁下〕

p. 183. 322. 大　般　若. 五百七十三卷 〔大正 7 卷 960 頁上—961 頁下〕

323. 觀　佛　經. 一乃至八卷 〔大正 15 卷 647 頁下—687 頁上〕

324. 瑜伽四十九云. 〔大正 30 卷 567 頁上—中〕

325. 論　　文. (瑜伽論四十九卷) 〔大正 30 卷 567 頁中→〕

p. 184. 326. 觀　佛　經. 一乃至八卷 〔大正 15 卷 647 頁下—687 頁上〕

327. 觀佛三昧經云. (一卷) 〔大正 15 卷 649 頁上〕

p. 185. 328. 導和尚云. (觀念法門 〔大正 47 卷 23 頁中. "如是上下依前十六遍觀, 然後住心向眉間白毫, 極須捉心令正, 更不得雜亂" ノ略引〕

p. 188. 329. 觀　　經. 〔大正 12 卷 343 頁中—下〕

330. 雙　觀　經. 上卷 〔大正 12 卷 270 頁上, 等〕

331. 般　舟　經. 上卷 〔大正 13 卷 905 頁上, 等〕

p. 170.　282. 大集經云.（六卷）〔大正 13 卷 37 頁下〕
283. 大集經云.（六卷）〔大正 13 卷 37 頁下〕
p. 171.　284. 觀佛三昧經云.（三卷）〔大正 15 卷 656 頁中—下〕
p. 172.　285. 大集經云.（六卷）〔大正 13 卷 37 頁下〕
286. 觀佛經云.（二卷）〔大正 15 卷 655 頁上—中〕
p. 173.　287. 大集經云.（六卷）〔大正 13 卷 37 頁下〕
288. 大經云.（北本涅槃經二十八卷）〔大正 12 卷 535 頁中〕（南本涅槃經二十六卷）〔大正 12 卷 780 頁中〕
289. 大集經云.（六卷）〔大正 13 卷 37 頁下〕
p. 174.　290. 大經云.（北本涅槃經二十八卷）〔大正 12 卷 535 頁上〕（南本涅槃經二十六卷）〔大正 12 卷 780 頁上〕
291. 大集經云.（六卷）〔大正 13 卷 37 頁中〕
p. 175.　292. 大集經云.（六卷）〔大正 13 卷 37 頁中〕
293. 大般若. 三百八十一卷〔大正 6 卷 967 頁下〕
294. 大經云.（北本涅槃經二十八卷）〔大正 12 卷 535 頁中〕（南本涅槃經二十六卷）〔大正 12 卷 780 頁上〕
295. 大經云.（北本涅槃經二十八卷）〔大正 12 卷 535 頁中〕（南本涅槃經二十六卷）〔大正 12 卷 780 頁上〕
296. 大集經云.（六卷）〔大正 13 卷 37 頁下〕
p. 176.　297. 無上依經云.（下卷）〔大正 16 卷 474 頁上〕
p. 177.　298. 法華文句云.（八卷下）〔大正 34 卷 116 頁中〕
299. 無上依經云.（下卷）〔大正 16 卷 474 頁中〕
p. 178.　300. 大集經云.（六卷）〔大正 13 卷 37 頁中〕
301. 瑜伽云.（四十九卷）〔大正 30 卷 567 頁中〕
302. 大集經云.（北本涅槃經二十八卷）〔大正 12 卷 534 頁下〕（南本涅槃經二十六卷）〔大正 12 卷 779 頁下—780 頁上〕
303. 大集經云.（北本涅槃經二十八卷）〔大正 12 卷 535 頁上〕（南本涅槃經二十六卷）〔大正 12 卷 780 頁上〕
304. 瑜伽云.（四十九卷）〔大正 30 卷 567 頁下〕
p. 180.　305. 大經云.（北本涅槃經二十八卷）〔大正 12 卷 535 頁上〕（南本涅槃經二十六卷）〔大正 12 卷 780 頁上〕

259. 大論第五偈云.〔大正 25 卷 86 頁中〕

p. 157. 260. 止　觀　云.（一卷下）〔大正 46 卷 10 頁中〕

261. 祕密藏經.〔大正 17 卷 844 頁下—845 頁上〕略抄.〔上引〕

262. 唯識論云.（八卷）〔大正 31 卷 45 頁中〕

p. 158. 263. 十　疑　云.（淨土十疑論）〔大正 47 卷 80 頁上—中〕〔大乘阿毘達磨雜集論十二卷（大正 31 卷 752 頁上—中）略抄參照〕

264. 慈　恩　云.（西方要決釋疑通規）〔大正 47 卷 109 頁中〕

p. 159. 265. 入法界品云.（六十華嚴經五十九卷）〔大正 9 卷 779 頁下〕

266. 莊嚴論偈云.（大乘莊嚴經論六卷）〔大正 31 卷 622 頁中〕

p. 160. 267. 丈夫論偈云.（大丈夫論上卷）〔大正 30 卷 257 頁中〕〔諸經要集十一卷（大正 54 卷 107 頁下），法苑珠林七十一卷（大正 53 卷 823 頁下）參照〕

p. 161. 268. 十住毘婆沙云.（一卷）〔大正 26 卷 24 頁中〕

269. 法句偈說.〔法句經（No. 210），法句譬喩經（No. 211）共ニ此ノ文ナシ. 他經カ〕

270. 十　疑　言.〔大正 47 卷 81 頁上〕

p. 162. 271. 大莊嚴論云.（萬善同歸集中卷所引）〔大正 48 卷 979 頁下〕〔但シ馬鳴ノ大莊嚴論經十五卷（No. 201），無著ノ大乘莊嚴經論十三卷（No. 1604）共ニ此ノ文ナシ. シカルニ龍樹ノ大論ニアリ. 卽チ大智度論七卷（大正 25 卷 108 頁中—下）ヲ見ヨ. 恐ラク“大論云莊嚴佛國”云々ノ寫誤ニ由來セルナラン〕

p. 163. 272. 十住毘婆沙論云.（一卷）〔大正 26 卷 24 頁中〕

273. 又　　云.（十住毘婆沙論五卷易行品）〔大正 26 卷 43 頁中〕

274. 有　　云.（淨影寺慧遠ノ說）〔觀無量壽經義疏末卷（大正 37 卷 184 頁中）等參照セヨ〕

p. 164. 275. 慈　　恩.（西方要決）〔大正 47 卷 107 頁下〕

276. 有　　云.（善導ノ說）〔觀無量壽佛經疏卷第一玄義分（大正 37 卷 249 頁中）等參照セヨ〕

277. 大論第八云.（大智度論七卷）〔大正 25 卷 108 頁下〕

p. 165. 278. 十住婆沙第三偈云.（四卷）〔大正 26 卷 38 頁上〕

卷　　中

p. 167. 279. 十住毘婆沙云.（十二卷）〔大正 26 卷 86 頁上〕取意略抄.

280. 諸　　經.〔下出ノ諸經參照〕

281. 觀　經　云.〔大正 12 卷 342 頁下—343 頁上〕

234. 淨名經云. (中卷)〔大正 14 卷 550 頁上〕
235. 中論偈云. (三卷)〔大正 30 卷 22 頁下〕
236. 大論云. (二十七卷)〔大正 25 卷 264 頁上〕

p. 145. 237. 無上依經上卷云. 〔大正 16 卷 471 頁中〕
238. 中論第二偈云. (二卷)〔大正 30 卷 18 頁下〕
239. 佛藏經念僧品云. 〔大正 15 卷 787 頁中—下〕略抄.

p. 146. 240. 同經淨戒品云. (但シ淨法品ナリ)〔大正 15 卷 794 頁下〕
241. 大論云. (三十七卷)〔大正 25 卷 331 頁中〕

p. 147. 242. 中論偈云. (四卷)〔大正 30 卷 33 頁中〕
243. 止觀. (第一上)〔大正 46 卷 5 頁下〕

p. 148. 244. 止觀云. (第一下)〔大正 46 卷 10 頁上〕〔大寶積經百十三卷寶梁聚會(大正 11 卷 640 頁上—中)意引參照〕

p. 149. 245. 又云. (第一下)〔大正 46 卷 10 頁上〕〔大方廣如來祕密藏經下卷(大正 17 卷 844 頁下—845 頁上)略抄參照〕

p. 150. 246. 華嚴經入法界品云. (六十華嚴經五十九卷)〔大正 9 卷 777 頁上, 778 頁下〕

p. 151. 247. 大般若經云. (五百八十四卷)〔大正 7 卷 1020 頁上〕
248. 入法界品云. (六十華嚴經五十九卷)〔大正 9 卷 777 頁上, 777 頁中, 780 頁上〕〔教行信證信卷本 16 丁右引用ノ文〕

p. 152. 249. 同經法幢菩薩偈云. (八十華嚴經二十三卷)〔大正 10 卷 124 頁上〕
250. 入法界品云. (六十華嚴經五十九卷)〔大正 9 卷 778 頁上, 778 頁下, 778頁中, 779 頁下〕〔教行信證行卷 37 丁右引用ノ文〕

p. 153. 251. 賢首品偈云. (六十華嚴經六卷)〔大正 9 卷 432 頁下—433 頁上〕〔摩訶止觀一卷上(大正 46 卷 2 頁上)所引參照〕
252. 弘決. (一之二)〔大正 46 卷 152 頁中〕
253. 同經偈云. (六十華嚴經九卷)〔大正 9 卷 458 頁中〕

p. 154. 254. 出生菩提心經偈云. 〔大正 17 卷 893 頁上〕

p. 155. 255. 寶積經偈云. (九十六卷)〔大正 11 卷 542 頁下〕
256. 迦葉菩薩禮佛偈云. (北本涅槃經三十九卷)〔大正 12 卷 590 頁上〕(南本涅槃經三十四卷)〔大正 12 卷 838 頁上〕
257. 彌伽大士. 〔六十華嚴經四十六卷(大正 9 卷 692 頁下—693 頁上)參照〕

p. 156. 258. 往生論云. 〔大正 26 卷 232 頁下〕

206. 六時禮法. (願往生禮讃偈)〔大正 47 卷 No. 1980〕

207. 觀虛空藏菩薩佛名經云. 〔大正 13 卷 No. 409 觀虛空藏菩薩經カ. 679 頁上—中參照〕

208. 十住婆沙第三云. 〔大正 26 卷 43 頁上—下〕略抄.

p. 128. 209. 往生論偈. 〔大正 26 卷 No. 1524〕〔大正 47 卷 No. 1980, 443 頁上參照〕

210. 眞言教佛讃. 〔樂邦文類一卷 (大正 47 卷 No. 1969) 參照〕

211. 阿彌陀別讃. 〔樂邦文類二卷 (大正 47 卷 No. 1969) 參照〕

212. 法華偈云. (一卷)〔大正 9 卷 9 頁上〕

p. 129. 213. 安樂集云. (上卷)〔大正 47 卷 7 頁中—下〕略抄. 〔淨土論註 (大正 40 卷 842 頁上) 參照〕

p. 132. 214. 止觀第一. (一卷下)〔大正 46 卷 9 頁上—中〕略抄.

215. 思益經云. (思益梵天所問經三卷)〔大正 15 卷 48 頁中〕

216. 莊嚴菩提心經云. 〔大正 10 卷 961 頁中—下〕

p. 133. 217. 大般若經云. (七十一卷)〔大正 5 卷 403 頁下〕略抄.

p. 134. 218. 大論云. (三十二卷)〔大正 25 卷 298 頁中〕

p. 135. 219. 又云. (大智度論六卷)〔大正 25 卷 107 頁上〕

220. 無行經喜根菩薩偈云. 〔大正 15 卷 759 頁下〕〔大智度論六卷 (大正 25 卷 107 頁下) 引文〕

221. 同論云. 〔大智度論ノ文, 今明カナラズ〕

p. 136. 222. 迦葉菩薩言. (北本涅槃經三卷)〔大正 12 卷 380 頁上〕(南本涅槃經)〔同 620 頁上〕

223. 般若經云. (大般若波羅蜜多經五百七十八卷)〔大正 7 卷 990 頁中〕

224. 法句經云. 〔法句經 No. 210, 法句譬喩經 No. 211 共ニ此ノ文ナシ. 他經カ〕

p. 137. 225. 涅槃經三十二云. (南本)〔大正 12 卷 819 頁中—下〕(北本三十五卷)〔大正 12 卷 572 頁中—下〕

p. 139. 226. 優婆塞戒經第一云. 〔大正 24 卷 1037 頁上〕

227. 經廣說. (優婆塞戒經一卷)〔大正 24 卷 1036 頁下—1037 頁上〕

228. 大般若經云. (五百七十卷)〔大正 7 卷 943 頁上—中〕

p. 140. 229. 寶積經九十三云. 〔大正 11 卷 529 頁上—中〕略抄.

p. 142. 230. 華嚴經入法界品云. (六十華嚴經五十九卷)〔大正 9 卷 780 頁上〕

p. 143. 231. 寶積經云. (九十三卷)〔大正 11 卷 529 頁中—下〕

232. 因果經偈云. (過去現在因果經四卷)〔大正 3 卷 652 頁上〕

p. 144. 233. 十住毘婆沙偈云. (八卷)〔大正 26 卷 59 頁下〕

180. 心地觀經云. (七卷)〔大正 3 卷 322 頁中〕

p. 112. 181. 目連所問經云. (安樂集上卷所引)〔大正 47 卷 14 頁上〕及ビ(樂邦文類一卷所引)〔大正 47 卷 160 頁中〕

182. 阿彌陀經云. 〔大正 12 卷 347 頁中〕

p. 113. 183. 天台十疑云. 〔大正 47 卷 78 頁下〕略抄.

184. 慈　恩　云. (西方要决釋疑通規)〔大正 47 卷 109 頁中〕

p. 114. 185. 懷感禪師云. (釋淨土群疑論六卷)〔大正 47 卷 66 頁下〕

p. 115. 186. 玄奘三藏云. (諸經要集一卷所引)〔大正 54 卷 6 頁下—7 頁上〕, 又(法苑珠林十六卷所引)〔大正 53 卷 406 頁上〕

p. 116. 187. 群　疑　論. 四卷〔大正 47 卷 52 頁下—53 頁中〕意引.

188. 慈　恩　云. (西方要决釋疑通規)〔大正 47 卷 107 頁上〕意引.

p. 117. 189. 感　師　云. (群疑論四卷)〔大正 47 卷 54 頁上〕

190. 第　十　云. (慈恩西方要决)〔大正 47 卷 107 頁上〕意引.

191. 感　　師. (群疑論四卷)〔大正 47 卷 53 頁下—54 頁下〕略抄.

p. 119. 192. 西方要決. 〔大正 47 卷 106頁下—107 頁上〕

p. 120. 193. 心地觀經云. (三卷)〔大正 3 卷 306 頁上〕

194. 上　　生. 〔大正 14 卷 No. 452〕

195. 心　　地. 〔大正 3 卷 No. 159〕

196. 大悲經第三云. 〔大正 12 卷 958 頁上〕略抄. 〔末法燈明記ニ用フル文, 教行信證化土卷本 43 丁左參照〕

p. 121. 197. 心地觀經. (上問所引)〔大正 3 卷 306 頁上〕

198. 彼　經　云. 〔大正 3 卷 306 頁上〕

199. 新婆沙意. (阿毘達磨大毘婆沙論百三十五卷)〔大正 27 卷 698 頁中〕

200. 感法師云. (群疑論四卷)〔大正 47 卷 53 頁中〕

大文第四

p. 123. 201. 往生論云. 〔大正 26 卷 231 頁中〕

202. 觀佛三昧經文. (十卷)〔大正 15 卷 695 頁上〕

p. 124. 203. 或. 〔慈覺大師ノ法華常行三昧禮佛ノ文ナリトイフ, 義記ヲ見ヨ〕

204. 心地觀經. 二卷〔大正 3 卷 299 頁中〕〔教行信證行卷 36 丁左引用ノ文〕

p. 126. 205. 十　二　禮. (願往生禮讚偈所引)〔大正 47 卷 No. 1980 中夜禮讚所引〕

p. 104. 153. 阿彌陀經. 〔大正 12 卷 347 頁上〕

154. 平等覺經. 二卷〔大正 12 卷 285 頁下—286 頁上〕

155. 雙觀經. 下卷〔大正 12 卷 273 頁下〕

156. 龍樹偈云. (十住毘婆沙論五卷易行品)〔大正 26 卷 43 頁中〕

p. 106. 157. 龍樹菩薩云. (安樂集上卷)〔大正 47 卷 9 頁中〕, 尙大智度論二十九卷〔大正 25 卷 275 頁下〕ヲ參照セヨ.

158. 華嚴偈云. (八十華嚴經二卷)〔大正 10 卷 9 頁上〕

p. 107. 159. 雙觀經. 下卷〔大正 12 卷 273 頁下〕上卷〔同 268 頁中〕等.

160. 天台十疑. (淨土十疑論)〔大正 47 卷 79 頁中, 第六疑中五因緣不退〕

161. 龍樹偈云. (願往生禮讃偈. 善導ノ往生禮讃偈所引)〔大正 47 卷 442 頁下〕

大文第三

p. 109. 162. 天台大師云. (淨土十疑論)〔大正 47 卷 78 頁中—下〕

p. 110. 163. 淨土論. 中卷〔大正 47 卷 91 頁下→〕

164. 智憬師. 〔典據明カナラズ. 義記ヲ見ヨ〕

165. 法華經藥王品. 〔大正 9 卷 No. 262〕

166. 四十華嚴經普賢願. 四十卷〔大正 10 卷 No. 293〕

167. 目連所問經. 〔缺經. 安樂集 (大正 47 卷 No. 1958) 樂邦文類 (大正 47 卷 No. 1969) 等所引〕

168. 三千佛名經. 〔大正 14 卷 Nos. 446, 447, 448〕

169. 無字寶篋經. 〔大正 17 卷 No. 828〕

170. 千手陀羅尼經. 〔大正 20 卷 No. 1060〕

171. 十一面經. 〔大正 20 卷 Nos 1069, 1070〕

172. 不空羂索. 〔大正 20 卷 No. 1092〕

173. 如意輪. 〔大正 20 卷 No. 1080〕

174. 隨求. 〔大正 20 卷 No. 1154〕

175. 尊勝. 〔大正 19 卷 No. 967〕

176. 無垢淨光. 〔大正 19 卷 No. 1024〕

177. 光明. 〔大正 19 卷 No. 1002〕

178. 阿彌陀. 〔大正 12 卷 No. 370〕

p. 111. 179. 隨願往生經言. (灌頂經十一卷)〔大正 21 卷 529 頁下〕

126. 寶積經意.（六十卷）〔大正 11 卷 348 頁上〕

127. 上生經意.（觀彌勒菩薩上生兜率天經）〔大正 14 卷 420 頁中〕

128. 虛空藏經.（虛空藏菩薩經）〔大正 13 卷 656 頁中ノ文意カ〕

129. 佛名經意.〔大正 14 卷 160 頁下, 166 頁下, 383 頁中, 388 頁上, 388 頁中, 393 頁下等ノ意カ〕

p. 93. 130. 華嚴經偈.（八十華嚴經七十七卷）〔大正 10 卷 425 頁中〕

131. 四十華嚴經. 四十卷〔大正 10 卷 846 頁下. "即得往生極樂世界, 到已即見阿彌陀佛, 文殊師利菩薩, 普賢菩薩, 觀自在菩薩, 彌勒菩薩等"〕

132. 十輪經意.（大乘大集地藏十輪經）一卷〔大正 13 卷 724 頁上—中文意〕

133. 經偈云.（十輪經一卷）〔大正 13 卷 727 頁下及ビ 728 頁上〕

134. 弘猛海慧經.〔疑經. 開元釋敎錄十八卷（大正 55 卷 675 頁中）參照〕

p. 94. 135. 十一面經.（十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經上卷）〔大正 20 卷 140 頁中〕及ビ（十一面觀世音神呪經）〔大正 20 卷 149 頁下〕合糅.

136. 請觀音經偈.（請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經）〔大正 20 卷 36 頁中〕

137. 法華經.（妙法蓮華經七卷）〔大正 9 卷 57 頁下及ビ 58 頁上, 58 頁中〕

138. 寶積經.（九十卷）〔大正 11 卷 514 頁下〕

p. 95. 139. 觀經意.（觀無量壽佛經）〔大正 12 卷 344 頁上—中〕

140. 龍樹讃.（讃觀音勢至二菩薩偈. 迦才ノ淨土論中卷所引）〔大正 47 卷 96 頁上〕

141. 又云.（同上）〔大正 47 卷 95 頁下〕

p. 97. 142. 大論云.（三十四卷）〔大正 25 卷 311 頁下〕

p. 98. 143. 雙觀經.（無量壽經）〔大正 12 卷 No. 360〕

144. 觀經.（觀無量壽佛經）〔大正 12 卷 No. 365〕

145. 平等經.（無量淸淨平等覺經）〔大正 12 卷 No. 361〕

146. 龍樹偈云.（十住毘婆沙論五卷易行品）〔大正 26 卷 43 頁中〕

147. 又云.（願往生禮讃偈. 善導ノ往生禮讃偈所引）〔大正 47 卷 442 頁中〕

148. 師子吼菩薩言.（心地觀經一卷）〔大正 3 卷 295 頁上〕

p. 99. 149. 法華云.（妙法蓮華經五卷）〔大正 9 卷 43 頁下〕

p. 102. 150. 雙觀經. 上卷〔大正 12 卷 271 頁上〕下卷〔同 272 頁下—273 頁上, 273 頁下, 等〕

151. 平等覺經. 三卷〔大正 12 卷 290 頁上〕

等. 觀無量壽佛經〔大正 12 卷 344 頁中—下〕等.

152. 龍樹讃曰.（願往生禮讃偈. 善導ノ往生禮讃偈所引）〔大正 47 卷 442 頁中—下〕

291 頁下—292 頁上，等〕

100. 傳　　記.（慶滋保胤ノ日本往生極樂記）〔大日本佛教全書 107 卷所收〕ヲ指セルカ.

p. 72. 101. 龍樹偈云.（十住毘婆沙論五卷易行品）〔大正 26 卷 43 頁上〕

p. 74. 102. 觀經等意.〔觀無量壽經上中品等（大正 12 卷 345 頁上，等）及ビ無量壽經（大正 12 卷所收）平等覺經（同上）等〕

103. 龍樹偈曰.（十住毘婆沙論五卷易行品）〔大正 26 卷 43 頁中〕

p. 76. 104. 雙　觀　經.（無量壽經）〔大正 12 卷所收〕

105. 平等覺經〔大正 12 卷所收〕

106. 龍樹偈云.（十住毘婆沙論五卷易行品）〔大正 26 卷 43 頁上—中〕

p. 83. 107. 二種觀經.〔雙觀經即チ無量壽經（大正 12 卷 No. 360）ト觀無量壽佛經（大正 12 卷 No. 365)〕

108. 阿彌陀經.〔大正 12 卷 No. 366〕

109. 稱讃淨土經.〔大正 12 卷 No. 367〕

110. 寶　積　經. 十七卷，十八卷（無量壽如來會）〔大正 11 卷 No. 310 第 5 會〕

111. 平等覺經.〔大正 12 卷 No. 361〕

112. 思　惟　經.（阿彌陀佛大思惟經說序分第一. 陀羅尼集經二卷所收）〔大正 18 卷 800 頁〕

等.　〔讃阿彌陀佛偈（大正 47 卷 No. 1978）淨土論（大正 26 卷 No. 1524）等〕

113. 世親偈云.（淨土論）〔大正 26 卷 230 頁下—231 頁上〕

p. 84. 114. 經　　言.〔法句經又ハ大集經等ト古傳スレドモ，典據明カナラズ〕

p. 86. 115. 十往生經.（十往生阿彌陀佛國經）〔卍續 I 部 87 套 4 册 292 丁左下〕

116. 龍樹偈云.（十住毘婆沙論五卷易行品）〔大正 26 卷 43 頁上〕

p. 87. 117. 心地觀經偈云.（三卷）〔大正 3 卷 302 頁中〕

p. 88. 118. 平等經云.（一，二卷）〔大正 12 卷 283 頁中，290 頁上〕略引

119. 華嚴經普賢願云.（四十華嚴經四十卷）〔大正 10 卷 848 頁上〕

p. 89. 120. 龍樹偈云.（世親ノ淨土論）〔大正 26 卷 231 頁上〕

121. 經　　云.（阿彌陀經）〔大正 12 卷 347 頁中〕

p. 90. 122. 華嚴經意.〔八十華嚴經入法界品ノ文意〕

123. 又　　云.（四十華嚴經四十卷）〔大正 10 卷 847 頁中〕及ビ（八十華嚴經七卷）〔大正 10 卷 33 頁下—34 頁上〕

p. 91. 124. 心地觀經意.（三卷）〔大正 3 卷 305 頁下〕但シ意引ニ非ズ. 正シク引文ナリ.

p. 92. 125. 文殊般涅槃經意.〔大正 14 卷 481 頁上—中〕略抄

p. 52. 77. 大集經偈云. (十六卷)〔大正 13 卷 109 頁上〕

78. 經 偈 云. (雜阿含經三十四卷)〔大正 2 卷 242 頁中〕

79. 大 經 云. (北本涅槃經三十三卷)〔大正 12 卷 563 頁上—中〕(南本涅槃經三十一卷)〔大正 12 卷 809 頁下〕 但シ意引ナリ.

80. 法 華 經 云. (二卷)〔大正 9 卷 10 頁上〕

p. 55. 81. 龍 樹 偈 云. (龍樹菩薩爲禪陀迦王說法要偈)〔大正 32 卷 745 頁下—747 頁下〕

p. 61. 82. 馬鳴菩薩云. (付法藏因緣傳五卷)〔大正 50 卷 315 頁上〕

83. 堅牢比丘偈云. (寶積經七十八卷)〔大正 11 卷 446 頁下〕

p. 62. 84. 仁王經四非常偈. 〔大正 8 卷 830 頁中. "劫燒終訖, 乾坤洞燃, 須彌巨海, 都爲灰煬. 天龍福盡, 於中凋喪, 二儀尙殞, 國有何常.」 生老病死, 輪轉無際, 事與願違, 憂悲爲害. 欲深禍重, 瘡疣無外, 三界皆苦, 國有何賴.」 有本自無, 因緣成諸, 盛者必衰, 實者必虛. 衆生蠢蠢, 都如幻居, 聲響俱空, 國土亦如.」 識神無形, 假乘四馳, 無明寶象, 以爲樂車. 形無常主, 神無常家, 形神尙離, 豈有國耶."〕

85. 金 剛 經 云. (金剛般若波羅蜜經)〔大正 8 卷 752 頁中〕

86. 大 經 偈 云. (北本涅槃經十四卷)〔大正 12 卷 450 頁上, 451 頁上〕(南本涅槃經十三卷)〔大正 12 卷 692 頁上, 693 頁上〕

p. 63. 87. 經 說. 〔上ノ金剛經ヲ指ス〕

88. 西 域 記 云. (七卷)〔大正 51 卷 906 頁下— 907 頁中〕

p. 65. 89. 唯 識 論 云. (七卷)〔大正 31 卷 39 頁下〕

p. 66. 90. 法 華 云. (四卷)〔大正 9 卷 32 頁上〕

91. 大 般 若 經. 五十三卷〔大正 5 卷 298 頁中〕參照.

p. 67. 92. 大莊嚴論偈云. (三卷)〔大正 4 卷 271 頁下〕, (八卷)〔同 302 頁下〕

93. 寶積經五十七偈云. 〔大正 11 卷 335 頁上〕

p. 69. 94. 大 論. 二十一卷〔大正 25 卷 217 頁上→. 九想觀ノ下〕

95. 止 觀. 九卷〔大正 46 卷 117 頁上→. 釋定境ノ下〕

大 文 第 二

p. 70. 96. 群 疑 論. (釋淨土群疑論五卷)〔大正 47 卷 61 頁上〕

97. 安 國 鈔. 〔萬善同歸集上卷引文 (大正 48 卷 967 頁中—下) ヲ參照セヨ〕

p. 71. 98. 觀 經. (觀無量壽經上品上生段)〔大正 12 卷 344 頁下—345 頁上〕

99. 平 等 覺 經. (無量淸淨平等覺經一卷第十八願, 同三卷上輩段, 等)〔大正 12 卷 281 頁下,

p. 39. 50. 寶　積　經. 九十六卷〔大正 11 卷 541 頁上〕

p. 40. 51. 禪　　經. （禪祕要法經）中卷〔大正 15 卷 253 頁中，等〕

52. 次第禪門. （釋禪波羅蜜次第法門）八卷〔大正 46 卷 530 頁中，532 頁上，等〕

53. 寶積經云. （五十五卷）〔大正 11 卷 325 頁上—中〕五十七卷〔同 331 頁上—下〕合引略抄.

p. 41. 54. 僧伽吒經說. （四卷）〔大正 13 卷 972 頁下〕

p. 42. 55. 大　　論. 十九卷〔大正 25 卷 199 頁上〕

56. 止　　觀. 第七上〔大正 46 卷 93 頁中〕

57. 禪經偈云. 〔羅什譯禪祕要法經＝見當ラズ. 但シ法苑珠林引用禪祕要經偈（大正 53 卷 847 頁下—848 頁上）参照〕

58. 大　般　若. 五十三卷〔大正 5 卷 298 頁下〕

59. 止　　觀. 第九上〔大正 46 卷 121 頁下—122 頁上〕. 同第七上〔同 93 頁上〕参照.

p. 43. 60. 止　觀　云. （第九上）〔大正 46 卷 122 頁上〕

61. 又　　云. （止觀第九上）〔大正 46 卷 122 頁中〕

p. 44. 62. 寶積經說. （五十五卷）〔大正 11 卷 325 頁上〕. 同五十七卷〔同 331 頁上〕参照.

63. 同　經　說. （寶積經五十五卷）〔大正 11 卷 325 頁下—326 頁上〕略抄

p. 45. 64. 涅槃經云 （北本二十三卷）〔大正 12 卷 498 頁下〕（南本二十卷）〔同 742 頁中〕

65. 出曜經云. （二卷）〔大正 4 卷 616 頁中〕，（三卷）〔同 621 頁中，621 頁下〕

66. 摩耶經偈云. （上卷）〔大正 12 卷 1007 頁下〕

p. 46. 67. 大經偈云. （北本涅槃經二卷）〔大正 12 卷 373 頁上—中〕（南本涅槃經二卷）〔同 612 頁下〕

68. 罪業應報經偈云. （罪業應報敎化地獄經）〔大正 17 卷 452 頁中〕

69. 法句譬喩經偈云. （一卷）〔大正 4 卷 577 頁上〕

p. 47. 70. 止　觀　云 （第七上）〔大正 46 卷 93 頁下—94 頁上〕

71. 又　　云 （第四上）〔大正 46 卷 40 頁上〕

p. 49. 72. 六波羅蜜經. 三卷〔大正 8 卷 878 頁上〕

p. 50. 73. 正法念經偈云. （二十三卷）〔大正 17 卷 131 頁中〕

74. 瑜　　伽. 四卷〔大正 30 卷 297 頁下〕

p. 51. 75. 正法念經偈云. 〔本經＝見當ラズ. 但シ增一阿含經二十四卷（大正 2 卷 675 頁下）＝“愚者常喜悅，亦如光音天，智者常懷憂，如似獄中囚”トアリ〕

76. 寶積經偈云. （九十六卷）〔大正 11 卷 542 頁上—中〕

28. 瑜　伽　論. 四卷〔大正 30 卷 296 頁上—中〕

p. 20. 29. 正法念經. 十一卷〔大正 17 卷 62 頁上—64 頁上〕

p. 21. 30. 正法念經. 十二卷〔大正 17 卷 66 頁下—67 頁上, 69 頁下—70 頁上〕

p. 23. 31. 正法念經. 十三卷〔大正 17 卷 74 頁上—77 頁下〕

p. 24. 32. 觀佛三昧經. 五卷〔大正 15 卷 668 頁下〕

33. 瑜伽第四云. 〔大正 30 卷 296 頁中〕

p. 26. 34. 正法念經. 十三, 十五卷〔大正 17 卷 74 頁上, 77 頁下, 90 頁下〕

35. 俱　舍　論. 十一卷〔大正 29 卷 61 頁下〕

36. 觀佛三昧經. 五卷〔大正 15 卷 669 頁上—中〕

p. 28. 37. 正法念經. 十四, 十五卷〔大正 17 卷 83 頁上, 84 頁下—85 頁上, 85 頁中—下, 87 頁上—中, 87 頁中—88 頁上〕

38. 瑜伽第四云. 〔大正 30 卷 296 頁下—297 頁上〕

p. 31. 39. 俱　舍　論. 十一卷〔大正 29 卷 58 頁中—下〕

40. 正法念經. 五—十五卷〔大正 17 卷 27 頁上—91 頁上〕

41. 經　　　論. 涅槃經十一卷〔大正 12 卷 430 頁上〕, 大論十六卷〔大正 25 卷 176 頁下→〕俱舍論十一卷〔大正 29 卷 59 頁上→〕, 瑜伽論四卷〔大正 30 卷 297 頁上→〕, 順正理論三十一卷〔大正 29 卷 517 頁上→〕

42. 大　集　經. 三十三卷〔大正 13 卷 226 頁中〕

p. 34. 43. 正法念經. 十六, 十七卷〔大正 17 卷 92 頁下, 93 頁中, 94 頁上, 94 頁中, 94 頁下, 95 頁上, 98 頁上, 100 頁下—101 頁上, 102 頁中〕

44. 六波羅蜜經. 三卷〔大正 8 卷 876 頁下〕

45. 大　　　論. 十六卷〔大正 25 卷 175 頁下〕

p. 35. 46. 瑜　伽　論. 四卷〔大正 30 卷 297 頁中〕

47. 正法念經云. (十六卷)〔大正 17 卷 92 頁上〕〔但シ經文ニハ“一切餓鬼皆爲慳貪嫉妬因緣生於彼處”トアリ〕

p. 36. 48. 經　　　論. 正法念經十八卷〔大正 17 卷 103 頁中—105 頁中〕, 四十七卷〔同 277 頁下〕, 六十四卷〔同 381 頁中〕, 六波羅蜜經三卷〔大正 8 卷 887 頁上—中〕, 法華經譬喩品〔大正 9 卷 15 頁下〕, 長阿含經十八卷〔大正 1 卷 117 頁上〕, 婆沙論百七十二卷〔大正 27 卷 866 頁下—867 頁上〕, 俱舍論十一卷〔大正 29 卷 59 頁上〕, 正理論二十一卷〔大正 29 卷 461 頁上〕等參照セヨ.

p. 38. 49. 大　　　經. 十二卷〔大正 12 卷 434 頁上. 南本涅槃經 675 頁中〕

巻　上

大文第一

p. 4. 1. 智度論. 十六巻〔大正 25 巻 175 頁下〕

2. 瑜伽論. 四巻〔大正 30 巻 295 頁下〕

3. 諸經要集. 十八巻〔大正 54 巻 166 頁中→〕〔人間五十年云々. 御文章第二帖 No. 12（大正 83 巻 784 頁中）參照. 但シコレハ正法念經（大正 17 巻 27 頁中）ニ依ルノ說アリ〕

4. 倶舍論. 十一巻〔大正 29 巻 61 頁下〕

5. 正法念經. 五巻〔大正 17 巻 27 頁中〕

6. 優婆塞戒經. 七巻〔大正 24 巻 1072 頁上〕

p. 6. 7. 正法念經. 五, 六巻〔大正 17 巻 27 頁中—29 頁下〕

p. 7. 8. 瑜伽論. 四巻〔大正 30 巻 295 頁下〕

9. 智度論. 十六巻〔大正 25 巻 175 頁下—176 頁上〕

10. 觀佛三昧經. 五巻〔大正 15 巻 673 頁下〕

11. 正法念經. 八巻〔大正 17 巻 45 頁中〕同六巻〔同 32 頁下〕

p. 8. 12. 正法念經. 六巻〔大正 17 巻 29 頁下, 30 頁下〕

p. 9. 13. 瑜伽論. 四巻〔大正 30 巻 295 頁下—296 頁上〕

14. 大論. 十六巻〔大正 25 巻 176 頁上〕

p. 10. 15. 正法念經. 七巻〔大正 17 巻 36 頁中〕

p. 12. 16. 正法念經. 六巻〔大正 17 巻 33 頁下—35 頁上〕

p. 13. 17. 大論. 十六巻〔大正 25 巻 176 頁上〕

18. 瑜伽論. 四巻〔大正 30 巻 296 頁上—中〕

19. 大論. 十六巻〔大正 25 巻 176 頁上〕

20. 正法念經. 七巻〔大正 17 巻 41 頁上, 45 頁上〕

p. 15. 21. 正法念經. 七, 八巻〔大正 17 巻 40 頁中—45 頁上〕

p. 16. 22. 正法念經. 八, 九巻〔大正 17 巻 45 頁中—53 頁上〕

23. 瑜伽論. 四巻〔大正 30 巻 296 頁上〕

24. 大論. 十六巻〔大正 25 巻 176 頁上〕

p. 17. 25. 正法念經. 十巻〔大正 17 巻 55 頁下〕

p. 18. 26. 正法念經. 十, 十一巻〔大正 17 巻 55 頁下—56 頁中, 61 頁中—下〕

27. 大論. 十六巻〔大正 25 巻 176 頁中〕

第三　引用諸經論疏典據指示

〔延久二年四月十日，平等院南泉坊，多本取集讀相給，其中以善本日野點畢．
其衆皇宮太夫殿，其爲張護，樺尾阿闍梨以爲講師云々　承安元年十二月十
一日書寫畢　沙門弘惠本也　傳領十達　傳領英弘　右往生要集上中下三卷
令感得也　于時慶安三年十一月中旬傳領老僧　尊純記之〕＋世　⑧㊂

－〔世間流布之本〕以下ノ刊記　①②⑤⑥⑦初版本⑧⑨㊀㊁㊂㊃

―終―

p. 474.　永観二年以下速證無上覺ニ至ル一文ヲ⑤ハ上本ノ卷頭ニ移ス

〔甲申〕大書ス　②⑤⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

臥＝兆　②　＝卝　⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕，　＋〔音串〕細註　②⑤⑦⑨

－〔要〕　①②③④

－〔作〕　②

〔遣唐消息〕＋佛　⑦〔但シ㊂㊃寫本並ニ建保四年版本ハ共ニ此ノ遣宋消息並ニ返報ヲ載セズ〕

p. 475.　封＝尌　①　＝封　②　＝對　③④⑥

東＝永　①〔但シ帝國圖書館本①ハ‘東ィ’ト書入ル〕

－〔下〕　①〔但シ帝國圖書館本①ハ墨デ書入ル〕

－〔緣〕　②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁

郎＝卽　①②④

－〔作〕　②

p. 476.　呼＝乎　②⑤⑥⑦⑧㊀㊁

－〔寬和二年〕　①②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁〔但シ㊁傍註ニ‘寬和二年歟’トアリ〕

〔某〕大書ス　⑦再版本⑨

〔申狀〕細書ス　③④

〔某〕大書ス　⑦再版本

封＝尌　①④　＝封　②

－〔奉〕　①；　撰＝選　⑨

p. 477.　緇＝緇　①　＝緇　④；　伍佰＝五佰　⑦　＝五百　⑨

哉＝惑　⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁

p. 478.　〔往生要集者，一代聖教之肝心，九品往生之目足也．流布之雖多，摺寫之本惟尠．仍彫文字於形木，整句偈於貫花．其志相企其力不叶，祈請三寶勸進諸人，以其助成熟此功德．縱祕之閫內，將弘之世間．若有借請之輩，可勿悋惜之心而已．　于時仁安三年六月十九日彫刻畢〕＋永　⑧㊁ィ

－〔永元四年四月八日〕以下ノ刊記　②⑤⑥⑨；　永＝承　⑦⑧；　徵＝自　⑦；－〔得〕　⑦

〔今此要集者，源出橫川，流傳四海．但文字加減，何是何非．文義俱妙，取捨無據．廣考諸文，或古本云．自本此文有兩本．遣唐本，留和本．今本是遣唐本也．祇園精舍無常院文有二行餘，是留和本也已上．故知，遣唐本再治本明矣．今以送唐本開板鏤印．以此功德自利利他，我與衆生同會樂邦．建長五年在歲癸丑四月肇彫九月畢功　願主道妙〕＋世　②⑤⑦⑧⑨

鈍甍＝甍鈍 ⑧〔㊀？〕；　甍＝甍 ⑨

p. 468.　―〔又〕 ①③④⑨

―〔水〕（大智度論㊂㊇㊈）〔但シ同論㊆ハ今ノ如シ〕

〔則〕＋功（大智度論）

p. 469.　爾＝也（付法藏傳）

忘＝妄（般舟三昧經㊇）〔但シ同經他本ハ今ノ如シ〕

盡＝量（般舟三昧經㊂）〔但シ同經㊆㊇ハ今ノ如シ〕

―〔四〕 ①②⑤⑥⑦⑨㊀㊃（觀佛三昧經）〔但シ東洋文庫本①ハ書入ル〕

―〔四〕 ②⑤⑥⑦⑨㊀㊃

應＋〔耶〕 ⑧㊁㊂

p. 470.　―〔日々讀誦……羅什譯〕十六字 ㊂；　卷＋〔五紙〕 ⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃

卷＋〔日々讀誦……一卷五紙羅什譯〕 ㊂

道＝導 ②⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

二＝三 ㊂

群＝郡 ①④

p. 471.　耶＝也 ⑤頭註⑥

―〔法〕（大集經）〔但シ法苑珠林及ビ諸經要集所引ハ今ノ如シ〕

法＝眼（大集經〔但シ法苑珠林及ビ諸經要集所引ハ今ノ如シ〕

闇藏＝暗蔽（大集經）〔但シ法苑珠林及ビ諸經要集所引ハ今ノ如シ〕

―〔經〕（大集經）〔但シ法苑珠林及ビ諸經要集所引ハ今ノ如シ〕

由此業緣＝此業緣故（大集經〔但シ法苑珠林及ビ諸經要集所引ハ今ノ如シ〕

旦＝舟 ②　＝丹 ⑤⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

旨＝盲 ①〔但シ東洋文庫本①ハ書訂ス〕

―〔或復……非過〕二十四字 ②⑤⑦㊀㊁㊃；　―〔略〕 ⑧㊁；　抄＝鈔 ⑥

p. 472.　抄＝杪 ⑤

意＋〔也〕 ②⑤⑥⑦㊀㊂㊃

―〔論〕 ②⑤⑥⑦⑨㊀㊂㊃

取＋〔已上〕細註 ⑧㊁

p. 473.　―〔末終〕 ①②⑧㊀㊁㊂㊃

末　　　文

擯＝儐 ①③④

已＝以 ④

p. 463.　－〔於〕 ①③④⑨

此以＝以此 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃(大集經)；　－〔以〕 ①〔但シ東洋文庫本竝ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

果報＝報果 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃(大集經)

－〔定〕 ②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃(大集經)

旋＝旃 (大集經)

p. 464.　－〔諸〕 ①③④⑨

－〔何〕 ①③④⑨

－〔至〕 ①③④

乎＝耶 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃

拂＝掃 (梵網經)

－〔若〕 ①③④⑨

p. 465.　擯＝憒 ①　＝憒 ④　＝擯 ③

分＝物 (大集經)

口＋〔業〕 (大集經)

讁＝謫 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

罪＝罸 (大集經)

開＝闢 ④

決＝次 ④

p. 466.　恒河＝殑伽 (十輪經)

－〔之〕 ②⑤⑥⑦〔㊀㊃？〕

－〔若〕 ①③④⑥

苦＝若 ⑦再販本

p. 467.　責＝嘖 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

嘖＝責 (涅槃經)

處＋〔者〕 ㊂

嘖＝責 (涅槃經)

慧＝惠 ①③④

－〔事〕 ①③④⑨

一〔也〕⑧㊁(平等覺經)
抄＋〔無量清淨佛是阿彌陀也〕細註 ⑧㊁
殖＝植 (大集經㊂(宮))〔但シ同經[illegible]ハ今ノ如シ〕
能＝得 (大集經[illegible])〔但シ同經㊂(宮)[illegible]ハ今ノ如シ〕
一〔即〕①③④
輒＝輙 ①③④⑥⑨

p. 456. 已＝以 ①③④
〔亦〕＋未 ①②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃；　一〔未〕①〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

p. 457. 一〔人〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃
一〔若〕㊂
一〔無〕①③④⑨

p. 458. 修＝罪 ⑦再版本
當＝常 (雙觀經)
聖＝之 ①②⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕
慧＝惠 ①③④

p. 459. 餒＝餧 ①③④
飡＝餐 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕
果＝菓 ①②③④⑨
信＝嚫 ②⑤⑦⑨㊀㊃　＝親 ㊂
一〔少有〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

p. 460. 佛＝有世尊 (大集經)
云＝言 ②⑤⑥⑦㊀㊂㊃

p. 461. 是＋〔之〕⑧㊁
則＝即 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃
一〔者〕㊂
一〔誠〕㊂
鬚＝鬢 ③④
呰＝呰 (大集經[illegible]㊂)〔但シ同經[illegible]ハ今ノ如シ〕

p. 462. 鬚＝鬢 ③④
笑＝咲 ①②③④

—〔尊〕(般舟經(麗))〔但シ同經㊂(知)ハ今ノ如シ〕
住＋〔毘〕⑧㊁
沙＝婆 ①④
路＝道 ①②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃(十住毘婆沙論)
提＝薩 ㊂[1](十住毘婆沙論)

p. 450. 〔阿彌陀等佛〕以下四句ヲ頌トス (十住毘婆沙論(麗))〔但シ同論 ㊂ ハ初ノ十字ヲ長行トシ，流布本ハ全偈ヲ長行トス〕
—〔世〕②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃〔但シ十住毘婆沙論ハ今ノ如シ〕
波＝婆 ①④⑨
蜜＝密 ⑤
持＝得 ③④

p. 451. 慧＝惠 ①③④

p. 452. 有＝人 (大集月藏分㊂(宮))〔但シ同經(麗)ハ今ノ如シ〕

p. 453. 八＝一 ②⑤⑦⑨㊀㊃
挍＝校 ⑦⑨
諸教相對＝相對諸教 ㊂
挍＝校 ⑦⑨

p. 454. 慧＝惠 ①③④
—〔若〕①②⑧㊁(般舟三昧經)
—〔其〕(般舟三昧經㊂)〔但シ同經(麗)(知)ハ今ノ如シ〕
雖＝聲 ②⑤⑦⑧㊀㊁㊃
名＝聲 (平等覺經)

p. 455. 身＝衣 (平等覺經)
—〔如〕(平等覺經)
拔＝淚 (平等覺經(元)(明))〔但シ同經(麗)(宋)ハ今ノ如シ〕
—〔宿世〕②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊃；　宿＝前 ⑥(平覺等經)
—〔已〕(平等覺經)
事＝道 (平等覺經)
民＝氏 ④〔但シ①ハ'民'トス〕
未＋〔當〕(平等覺經)
解＝度 (平等覺經)

p. 443.　身＋〔信解觀察無陰種諸入則名奉行法身也〕細註 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊃？〕

想＝相 ①③④（寶積經）

－〔信解觀察無陰種諸入則名奉行法身也〕 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊃？〕

－〔於〕（如來祕密藏經）；　隨＝墮 ⑨

p. 445.　－〔定〕 ①③④⑨

耨＋〔多羅三藐三〕（涅槃經）

衆＋〔定〕 ①〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ墨デ訂ス〕

一切衆生＝衆生亦爾（涅槃經）

耨＋〔多羅三藐三〕（涅槃經）

嚴＋〔經〕 ㊂

p. 446.　〔於〕＋餘 ㊂

者＋〔多財饒寶唯有一子長者自知〕（觀佛三昧經）

p. 447.　賊＋〔從四面來〕（觀佛三昧經）

物＋〔不能遮護〕（觀佛三昧經）

唯＝惟（觀佛三昧經麗宋）〔但シ同經元明宮ハ今ノ如シ〕

鋋＝鋋 ⑨　＝挺（觀佛三昧經麗）〔但シ同經㊂宮ハ今ノ如シ〕

兩＝雨 ①，　＋〔爲賊所逼無奈金何〕（觀佛三昧經）

已＝了 ⑧㊀

執＝得（觀佛三昧經）

倒僻＝倒躄（觀佛三昧經麗）　＝躄倒（同經㊂）　＝倒擗（同經宮）

人＝入 ⑦再版本

p. 448.　我今有寶＝今有妙寶（觀佛三昧經麗）〔但シ同經㊂宮ハ今ノ如シ〕

珠＋〔燒香禮拜，先發願言，爲我雨食〕（觀佛三昧經）

－〔意〕 ①㊂（觀佛三昧經）〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

－〔語〕 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃

雨＝露（觀佛三昧經麗）〔但シ同經㊂宮ハ今ノ如シ〕

涌＝踊 ①③④

p. 449.　挽＝免 ⑥　＝拋（觀佛三昧經麗）〔但シ同經㊂宮ハ今ノ如シ〕

彼慧岸＝慧彼岸（觀佛三昧經）；　彼＝被 ④

洞＝烱（觀佛三昧經麗）〔但シ同經㊂宮ハ今ノ如シ〕

貫＝寶 ①④⑨

一〔如〕②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃(群疑論)

一〔說〕⑤⑦〔㊀㊃？〕(群疑論)

一〔名〕①⑧⑨㊁㊂〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

p. 436. 〔咸〕+說 (群疑論)

定+〔業〕(群疑論)

一〔而〕(雙観經)

一〔知〕①②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃〔但シ帝國圖書館本①ハ書入ル〕

p. 437. 一〔有〕①③④(首楞嚴三昧經)

以用=用以 (首楞嚴三昧經)

一〔時〕(首楞嚴三昧經)

一〔見〕㊂

〔設〕+淺 ㊂

p. 439. 槃+〔已上〕細註 ⑧㊁

鷄=雞 ③④⑨

p. 440. 一〔良〕〔大悲經〕

咄=拙 ③④⑨

一〔莫〕①③④〔但シ東洋文庫本①ハ墨デ書入ル〕

子=種 ①②③④⑤⑥⑦⑨㊀㊂㊃

p. 441. 一〔復〕①③④

此=是 ①③④

聞佛名=佛名聞 ①③④

果=菓 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

果=菓 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

物=物 ① =狗 ⑨

p. 442. 〔利〕+益 ⑧㊁㊂

殊=姝 (寳積經)〔但シ同經㊅ハ今ノ如シ〕

作=化 ①③④⑨

殊=姝 (寳積經)

寐=寐 ① =寐 ③④ =寢 ⑦

姓=性 ①④⑨

一〔見〕①②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃(寳積經)

活＝等活（群疑論所引）〔但シ佛藏經ハ今ノ如シ〕
彼＋〔在〕⑧㊀，　＝在（佛藏經）（群疑論所引）
百＋〔四〕②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃（佛藏經）（群疑論所引）
俱＝具 ⑦
盡＝燒（佛藏經）（群疑論所引）
劫成＝世界還生（佛藏經）（群疑論所引）
－〔王〕（佛藏經）（群疑論所引）〔但シ群疑論一本ハ'主'トナス〕
家＝宋 ①
修＝行（佛藏經）（群疑論所引）
p. 432.　－〔於後〕（佛藏經）〔但シ群疑論所引ハ今ノ如シ〕
－〔九〕（群疑論所引）〔但シ佛藏經ハ今ノ如シ〕
法＝經（佛藏經）（群疑論所引）
破＝謗（佛藏經）〔但シ群疑論所引ハ今ノ如シ〕
應當＝當應（佛藏經㊂㊪）〔但シ同經㊩及ビ群疑論所引ハ今ノ如シ〕
薩和多＝一切有（佛藏經㊂㊪）〔但シ同經㊩㊟㊅及ビ群疑論所引ハ今ノ如シ〕
緣＝勝（群疑論）
小＝尙 ⑦再版本
佛＝他 ⑦再版本
p. 433.　〔五〕＋逆 ⑧㊀
〔不〕＋論（群疑論一本）
若造逆人＝如其造逆（群疑論）；　－〔若〕①③④
p. 434.　擇＝釋 ①③④
業＝對（群疑論）
八＝九（群疑論）
p. 435.　－〔云〕（群疑論）
少＝小 ①③④
小＝少（涅槃經）（群疑論所引）
－〔之〕①③④⑨
慧＝惠 ①③④
令＝合（群疑論大藏經本）〔但シ涅槃經ハ今ノ如シ〕
世＝在 ⑧㊀

ー〔輕〕①

p. 428. 羚＝羖 ①②③④⑥⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

漼＝渙？ ⑤頭註

泮＝釋？ ⑤頭註

已＝加 ①③④

沙＋〔沙字寫誤當作阿字〕細註 ⑤頭註⑦

訶＋〔施〕㊂

昴＝昴 ①③④

果＝菓 ①②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃

浮＋〔水〕⑧㊁

盤＝磐 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

勇＝猛 （大論）

p. 429. 根＝相 ①〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ墨デ修正ス〕

〔勇〕＋健 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃〔但シ大論ハ今ノ如シ〕

ー〔道〕（大論㊂宮）〔但シ同論聖石ハ今ノ如シ〕

〔乃至〕 細註トセヨ（安樂集參照）

生＋〔云云〕細註 ⑧㊁

ー〔破〕①③④

p. 430. ー〔卽〕①③④

摩＝磨 ①②③④⑨（安樂集一本）

復＝後 ③④

脚＝卽 ①③④

杖＝枝 （安樂集）

摩＝磨 ①②③④⑨㊂（安樂集一本）

能＋〔能〕⑦再販本

包＝苞 ①③④⑨

p. 431. ー〔惡〕①③④

揵＝犍 ③⑨　＝楗 ④

ー〔已〕（佛藏經）〔但シ群疑論所引ハ今ノ如シ〕

灰＝炙 （佛藏經）〔但シ群疑論所引ハ今ノ如シ〕

灰＝炙 （佛藏經）〔但シ群疑論所引ハ今ノ如シ〕

闇＝暗 ①②③④

一〔心〕(十疑論大藏經本)〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

致＝破 (十疑論大藏經本)　＝至 (同書一本)

一〔擊〕(十疑論大藏經本)〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

毒箭＝箭出毒 (十疑論)

〔箭〕＋深毒＋〔謬〕(十疑論大藏經本)〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

p. 426.　揮＝揮 ④

劍＝釼 ④

段＝分 (十疑論)

草＝柴 (十疑論)

大＝一 (十疑論大藏經本)〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

之＝少 (十疑論)，　＋〔少〕⑥

善＋〔業〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃(十疑論)

生＋〔之〕(十疑論)

一〔利〕(十疑論大藏經本)〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

一〔不〕(十疑論大藏經本)〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

集＋〔云〕⑧㊁

躄＝癖 ①③④ (安樂集)

獲＝蒦 ①④　＝穫 ③

瑞＝端 ①②⑨

p. 427.　鵄＝鴟 ①④

蝷＝蚌 ⑤⑦　＝蜂 ⑧(安樂集)〔㊀㊁㊂㊃？〕

皆＋〔死〕⑤⑥⑦(安樂集)〔㊀㊁㊂？〕

諸＝泥 (安樂集)

甦＝蘇 ⑤⑦〔㊁㊂㊃？〕

一〔有〕①③④

閉＝閇 ①②③④〔同例以下略ス〕

〔汝〕＋豈 (安樂集)

豈＝汝 (安樂集)

少＝小 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

法＝佛 (安樂集)

p. 423. 間＝問 ①④

一〔卽〕 ㊂

梨＝梨 ⑥ ＝黎 ⑦〔同例以下略ス〕

中＝上（那先比丘經）

令＝今 ①③④⑥⑨

丈＝枚（那先比丘經）

先＝生 ①

丈＝枚（那先比丘經）

一〔何不信耶〕（那先比丘經）

經法＝佛經（那先比丘經）

一〔何不信耶〕（那先比丘經）

p. 424. 俱＝具 ⑦再版本

飛＝止（那先比丘經 B 本）〔但シ同經 A 本ハ今ノ如シ〕

到＋〔地〕（那先比丘經）

一〔如〕（那先比丘經）

少＝小 ①③④⑨（那先比丘經）

少＝小 ①③④

作惡亦爾愚者＝愚者作惡（那先比丘經）

〔故〕＋其 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊃（那先比丘經）

少＝小 ①③④⑧㊁

〔今〕＋以 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃

按＝校 ⑦⑨（十疑論）

p. 425. 少＝小 ①③④

一〔心〕（十疑論大藏經本）〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

一〔心〕（十疑論大藏經本）〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

一〔心〕（十疑論大藏經本）〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

闇＝暗 ①③④

闇＝暗 ①②③④⑨

除＝滅（十疑論大藏經本）〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

有＝以（十疑論大藏經本）〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

闇＝暗 ①②③④

繋＝係（觀佛三昧經大藏經本）〔但シ同經東大寺本並ニ群疑論所引ハ今ノ如シ〕

〔觀佛經第九說……三昧等文〕本文トス ⑧㊁；　－〔也〕②⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

－〔品〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

p. 417.　就＝熟 ①③㊂

相＝想 ①③㊂

卽＝則（華嚴經）；　佘＝遮 ⑨

p. 418.　經＋〔說〕（西方要決）

色聲＝聲色（西方要決大藏經本）〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

良爲＝爲良（西方要決大藏經本）〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

邪＝耶 ①④

p. 419.　生＝壯 ①〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ墨デ修正ス〕

〔護〕＋念 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃

山＝十 ①

－〔云云〕⑧㊁，　＝云 ①③④

p. 420.　逕＝經 ⑤⑥⑦⑧〔但シ安樂集ハ今ノ如シ〕〔㊀㊁㊂㊃？〕

便＝使（安樂集）

辨＋〔便能〕（安樂集一本）（行卷所引），　＋〔便能不用〕（安樂集大藏經本）

p. 421.　－〔一心〕（九品往生義）

－〔念〕（九品往生義）

逕＝經 ⑤⑥⑦⑧（九品往生義）〔㊀㊁㊂㊃？〕

也＋〔云云〕細註 ⑦⑨，　＋〔云云〕大書ス ②⑤㊀㊃

十＋〔念〕（九品往生義）

而＝何能（九品往生義）

－〔念〕②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（九品往生義）

－〔阿彌陀〕（九品往生義）

一＝少（九品往生義）

生＋〔云云〕細註 ⑧㊁

p. 422.　斥＝斥 ①④　＝庁 ②

經＋〔意〕（群疑論一本）

者＋〔已上〕細註 ⑧㊁

－〔業〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

p. 411.　華＝花 ①②③④

慧＝惠 ①③④

－〔國〕 ①③④

竟＝盡 （雙觀經㊂）〔但シ同經●並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

上＋〔略抄〕細註 ②⑦⑨㊀㊂㊃，　＋〔略鈔〕細註 ⑤⑥

少＝小 ①③④

－〔今〕 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊃

時一＝一適 ⑧㊁

少＝小 ③④

生＋〔之〕 ⑧㊁

p. 413.　性＝門 （雙觀經●）〔但シ同經㊂並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

〔始〕＋於 （群疑論）

于＝乎 （群疑論）

學＝修 （群疑論）

p. 414.　學＝覺 ①③④⑨

既＋〔有〕 （群疑論）

〔往〕＋生 ㊃

也＋〔云云〕細註 ⑧㊁

－〔念施〕 ⑦再版本

如是等思惟＝唯 （佛藏經●）（群疑論所引）　＝一心思惟 （佛藏經㊂(宮)）

樂＝隱 （佛藏經）　＝穩 （群疑論所引）

p. 415.　熟＝就 ⑤頭註⑨（佛藏經）（群疑論所引）

惡＝罪 （佛藏經㊂(宮)）（群疑論所引）〔但シ佛藏經●ハ今ノ如シ〕

見＋〔人見〕 （佛藏經）

乃＝爲 （群疑論）

卅＝世 ④

如聚金融＝如融金聚 ⑤⑥⑦〔㊀㊃？〕（賢護經）（群疑論大正大藏經本）〔但シ群疑論一本ハ今ノ如シ〕　＝如聚融金 ⑧㊁㊂

來＋〔色〕 （群疑論所引）〔但シ賢護經ハ今ノ如シ〕

p. 416.　此＝是 （群疑論所引觀佛三昧經）〔但シ觀佛經ハ今ノ如シ〕

覺＝學 （群疑論所引觀佛三昧經）（觀佛三昧經）

等＋〔分〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂[illegible]

三＝二 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁？〕

p. 404.　上＝九 ⑤⑥⑦

p. 405.　意＝奇 ①

約＝駒 ①　＝駒 ③④

深＝淳（安樂集）

p. 406.　不＝無（安樂集）

三五＝五三（往生禮讃一本）

〔云々〕＋言 ⑧㊀

必＝心 ①③④

皆＝咸（淨土群疑論）

p. 407.　倡＝偈 ①

伎＝妓（菩薩處胎經㊂宮）〔但シ同經㊆㊇ハ今ノ如シ〕

開＝關（菩薩處胎經）（群疑論所引）

床＝牀 ⑥⑦⑨

床＝牀 ⑥⑦⑨

〔而〕＋皆（菩薩處胎經元明）（群疑論所引）〔但シ菩薩處胎經㊆㊇㊈ハ今ノ如シ〕

深＝染（菩薩處胎經）（群疑論所引）

－〔佛〕①③④⑨

p. 408.　固＝國 ①〔但シ東洋文庫本並＝帝國圖書館本①ハ共＝墨デ修正ス〕

釋＋〔文〕⑧㊁

p. 409.　就＝熟 ①④

並＝皆（十疑論）

善＋〔業〕（十疑論）

〔始〕＋得＋〔遇〕（十疑論）

之＋〔故不唐捐〕⑧㊁

生＋〔人〕㊂

p. 410.　三＝五 ③④〔但シ①ハ今ノ如シ〕

修＝脩 ①④；　修＋〔行〕⑧㊁，　修＋〔習〕（雙觀經）

意＝音（雙觀經）

百＋〔億〕（雙觀經㊆並＝流布本，又帝國圖書館本①ハ書入ル）〔但シ雙觀經㊂ハ今ノ如シ〕

攬＝賢（鼓音聲經宋）〔但シ同經㊂宮並＝西福寺本ハ今ノ如シ〕

ー〔靜〕①②⑤⑦⑨㊀㊂㊃（鼓音聲經西福寺本）〔但シ同經宋㊂ハ今ノ如シ　又東洋文庫本並＝帝國圖書館本①ハ共＝書入ル〕

ー〔已上〕①㊂〔但シ東洋文庫本並＝帝國圖書館本①ハ共＝書入ル〕

p. 397.　亦＝皆（華嚴經）

就＝熟①③④⑨

p. 398.　宜＝世？（私考）

德＝師㊂

始＋〔可得〕（法苑珠林）（諸經要集）

p. 399.　壽＋〔佛〕②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊃

持＝特④

彌勒問經如何通會＝如何通會彌勒問⑧㊁

使＋〔念〕（西方要決所引）

國＋〔已上〕②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊃

永＝長（西方要決）

汎＝凡②⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

念＋〔佛〕（西方要決）

〔已上〕細註＋略⑧㊁

抄＝鈔⑤⑥

p. 400.　沙＝娑①③④〔但シ西方要決ハ'娑論'トス〕

命長＝長命（西方要決）

p. 401.　解＝住（群疑論）

以＝已（群疑論）

三＝二②⑤⑦⑧㊀㊁㊂㊃（群疑論）

p. 402.　信＝住⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁？〕

ー〔前〕（群疑論）

p. 403.　善＋〔根〕（群疑論）

基＋〔法師〕㊂

忍＝輭⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕〔但シ群疑論ハ今ノ如シ〕

愞＝燸②　＝軟③　＝忍⑤⑥⑦⑧　＝輭⑨　＝煗（群疑論）〔㊀㊁㊂㊃？〕

ー〔問〕②⑤⑦⑧㊀㊁㊂㊃

―〔者〕㊂

尅＝剋 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

p. 391. 逕＝經 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

尅＝剋 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

少＝小 ①③㊉

此＋〔世〕 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃〔但シ東洋文庫本①ハ書入ル〕

尅＝剋 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

心＋〔行〕 ②⑤⑦⑧㊀㊁㊂㊃

p. 392. 植＝殖 （雙觀經宮宋元）〔但シ同經明並＝流布本ハ今ノ如シ〕

惠＝慧 ②⑤⑥⑦⑧⑨（雙觀經宮）〔㊀㊁㊂㊃？〕〔但シ同經㊂並＝流布本ハ今ノ如シ〕

〔爲德〕＋立 （雙觀經）

〔正心〕＋正 （雙觀經）

齋＝齊 ①③㊉

―〔佛〕 （雙觀經）

―〔佛〕 ①③㊉〔但シ東洋文庫本並＝帝國圖書館本①ハ共＝書入ル〕

中＝土 （雙觀經流布本）

―〔等〕 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（雙觀經）

p. 393. 娑婆＝婆娑 ⑦再版本

〔得〕＋生 （陀羅尼集經）

此文違彼＝此文違於彼 ②⑤⑥⑦㊀㊂㊃　＝文彼違此 ⑧㊁

擇＝釋 ①③㊉

〔又〕＋玄 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃

p. 394. 此＝是 （阿彌陀經）

極樂世界＝世界名曰極樂 （阿彌陀經）

欬＝嗽 ②　＝咳 ⑤⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕　＝㰯 ⑥

p. 395. 庾＝由 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

土＝世界 （智度論）

文＝牟尼 ②⑤⑥⑦⑨㊀㊃，　＋〔佛國〕 （智度論）

俱＋〔如來應正遍知〕 （鼓音聲經）

陀＋〔佛〕 （鼓音聲經）

p. 396. 〔名〕＋曰 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（鼓音聲經）

p. 384.　經＋〔多〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃〔但シ帝國圖書館本①ハ書入ル〕

八＝小（平等覺經元明）〔但シ同經麗宋ハ今ノ如シ〕

〔蓋〕＋其（述文贊）

p. 385.　－〔子〕①

p. 386.　〔示〕＋現（安樂集）

〔作〕＋判（淨土論）

－〔事〕（淨土論）

報＝應（攝大乘論釋）

就＝熟 ①③④⑨

p. 387.　－〔說〕①〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本ハ共ニ書入ル〕

同＝因（觀佛經㊂並ニ東大寺本）〔但シ同經麗宋ハ今ノ如シ〕

二＋〔相〕（觀佛經㊂並ニ東大寺本）〔但シ同經麗宋ハ今ノ如シ〕

－〔種〕①②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃（觀佛三昧經）〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ“イ本”トシテ書入ル〕

彼＝無量壽（無量壽經）

道＋〔場〕（無量壽經）

道＝菩提（寶積經）

道＋〔場〕（十往生經）

師＝獅（十往生經）

p. 388.　量＝高（觀經）

〔云云〕大書ス ①②③④⑤⑥⑨

娑＝婆 ⑦再版本

極樂國＝安樂世界阿彌陀佛刹（華嚴經）

逕＝經 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

華＝花 ①②③④

恒＋〔沙〕⑧㊁㊂㊃

p. 389.　逕＝經 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

此＝比 ②

干＝千 ②

尅＝剋 ②　＝刻 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

p. 390.　勤＝勒 ⑤

華＝花 ①②③④（寶積經）

提＝提 ④

－〔私云，　支提者塔廟異名也〕 ①②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ‘支提者塔廟異名也’ノ八字ヲ冠頭ニ書入ル〕

慧＝恵 ①③④⑨

p. 379.　戒＋〔等〕 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

－〔者〕 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃

－〔念〕 ①〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本ハ共ニ書入ル〕

戒施＝施戒 ②⑤⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

果＝菓 ①②③④⑨

如任騾懐喪自身＝如騾懐㚻自喪身（大集月藏分㊇）〔但シ　㚻＝妊 ㊂㊃　＝任 ㊃〕

p. 380.　〔又〕＋佛 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

〔云云〕大書ス ①②③④⑥⑨

雲＝雪 ㊂

p. 381.　－〔往生要集巻下本〕 ①②⑧㊀㊁㊂㊃；　本＋〔終〕 ⑤⑥⑦

p. 382.　－〔往生要集巻下末　天台首楞嚴院沙門源信撰〕 ①②⑧㊀㊁㊂㊃；　楞＝摆 ④

大　文　第　十

p. 383.　－〔報佛〕（安樂集）〔但シ同書一本ハ“是報佛土”トス〕

－〔等〕（安樂集）

化＝應（大乘同性經）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

－〔又〕（安樂集）

主＋〔王〕（大乘同性經）（安樂集所引）

皆＝即（大乘同性經）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

－〔佛也〕（大乘同性經）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

化＝應（大乘同性經）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

由＝猶 ⑤⑥⑦㊂〔㊀㊃？〕（大乘同性經）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

如＝若（大乘同性經）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

歩健＝戒属（安樂集一本），　－〔健〕（安樂集別三本）

－〔等〕（大乘同性經）（安樂集所引）

如＋〔何〕？ ⑤訓註

著＋〔心〕(遊心安樂道所引彌勒問經)(兩卷無量壽經宗要所引同經)〔但シ九品往生義所引同經ハ今ノ如シ〕

想＝疑 (遊心安樂道所引彌勒問經)　＝根 (兩卷無量壽經宗要所引同經)〔但シ九品往生義所引同經ハ今ノ如シ〕

結＝經 ㊂

〔云云〕大書ス ①②③④⑥⑨

p. 375.　三＋〔種〕㊃

業＋〔乃是〕(觀經)〔但シ同經流布本ハ今ノ如シ〕

p. 376.　－〔願〕(觀經(麗)(宋))〔但シ同經(元)(明)(敦)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

彼＋〔佛〕(觀經(麗)(宋))〔但シ同經(元)(明)(敦)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

持＋〔讀誦〕(觀經)

樂＋〔國〕(觀經)

齋＝齊 ①④

衆＝諸 ①②⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

患＝惡 ①②⑨(觀經(麗))〔但シ同經㊂並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

求＋〔生於西方極樂世界〕(觀經)

受＝持 (觀經(麗)㊂)　＝受持 (同經(敦)並ニ流布本)

齋＝齊 ①④

－〔沙〕①

－〔若〕①②⑤⑦㊀㊂㊃

求＋〔生極樂國〕(觀經)

p. 377.　慈＝義 (觀經(麗))〔但シ同經㊂(敦)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

衆惡法＝惡法 (觀經(麗)㊂)　＝衆惡 (觀經(敦)並ニ流布本)

臨終＝命欲終時 (觀經)

掌＋〔叉手〕(觀經)

爲＝卽爲讃 (觀經(麗)㊂)〔但シ同經(敦)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

說＝讃 ⑤⑦⑧㊀㊁㊃(觀經(麗)㊂)〔但シ同經(敦)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

脫＋〔解脫〕(觀經)

p. 378.　不＋〔能〕②⑤⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕，　＋〔遑〕(觀經)

無量壽＝阿彌陀 (觀經)

〔叉〕＋觀 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃

懐＝起（十往生阿彌陀佛國經）（安樂集所引）

坊＝房（安樂集所引）〔但シ十往生阿彌陀佛國經大藏經本ハ今ノ如シ〕

法＝灋（十往生阿彌陀佛國經）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

宿＝夜（十往生阿彌陀佛國經）（安樂集所引）

齋＝斉 ①③㊃；　戒齋＝齋戒（十往生阿彌陀佛國經）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

－〔一日一宿中受持〕（十往生阿彌陀佛國經）（安樂集所引）

齋＝斉 ①③㊃

齋＝斉 ①③㊃

樂＝於（十往生阿彌陀佛國經）（安樂集所引）

p. 373.　－〔生〕①②⑤⑥⑦㊀㊂㊃〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本１ハ共ニ書入ル〕

皆悉＝悉皆 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（十往生阿彌陀佛國經）（安樂集所引）

彌＝旀 ㊃　＝爾 ⑦再版本

國＋〔已上〕細註 ㊂

願＝念（九品往生義所引彌勒問經），　－〔願〕（遊心安樂道所引彌勒問經）（兩卷無量壽經宗要所引同經）

〔彼〕＋佛（遊心安樂道所引彌勒問經）（兩卷無量壽經宗要所引同經）〔但シ九品往生義所引同經ハ今ノ如シ〕

諸＝一切（遊心安樂道所引彌勒問經）（兩卷無量壽經宗要所引同經）〔但シ九品往生義所引同經ハ今ノ如シ〕

諸＝一切（遊心安樂道所引彌勒問經）（兩卷無量壽經宗要所引同經）〔但シ九品往生義所引同經ハ今ノ如シ〕

常＝深（九品往生義所引彌勒問經）（遊心安樂道所引同經）（兩卷無量壽經宗要所引同經）

p. 374.　切＋〔種〕（遊心安樂道所引彌勒問經）（兩卷無量壽經宗要所引同經）〔但シ九品往生義所引同經ハ今ノ如シ〕

廢忘＝癈忘 ①　＝癈志 ㊃

諸＝一切（遊心安樂道所引彌勒問經）（兩卷無量壽經宗要所引同經）〔但シ九品往生義所引同經ハ今ノ如シ〕

慢＝所（九品往生義所引彌勒問經）〔但シ遊心安樂道所引同經並ニ兩卷無量壽經宗要所引同經ハ今ノ如シ〕

心＝意（九品往生義所引彌勒問經）（遊心安樂道所引同經）（兩卷無量壽經宗要所引同經）

味＝昧 ？（私考）

作＝修 ⑤⑥⑦㊂(起信論)〔㊀㊃？〕

業＝根 (起信論)

即＝別 ⑦

p. 370. 大 文 第 九

持＝侍 ②

p. 371. 齋＝齊 ①③㊉

當＝常 (大阿彌陀經)

〔往〕＋生 (大阿彌陀經)

愍＝哀 (大阿彌陀經)

－〔往〕 (大阿彌陀經)

爾＝念 (大阿彌陀經㊂)〔但シ同經㊇ハ今ノ如シ〕

授＝技 ②⑤⑥⑦初版本⑧(大阿彌陀經)〔但シ帝國圖書館本①ハ書入ル〕· ＝枝 ⑦再版本⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

不＝下 (大阿彌陀經)

愛＝憂 (大阿彌陀經)

女＝人 (大阿彌陀經)

床＝牀 ⑥⑦

齋＝齊 ①③④

專＝意 (大阿彌陀經)

蓮華＝華蓮 (大阿彌陀經)

－〔阿〕 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃

生＋〔法〕 (十往生阿彌陀佛國經)(安樂集所引)

世＝甘 (十往生阿彌陀佛國經)(安樂集所引)〔但シ安樂集㊁本所引ハ‘世甘’トス〕

－〔良〕 ⑦

－〔以〕 (十往生阿彌陀佛國經)(安樂集所引)

－〔一切〕 (十往生阿彌陀佛國經)〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

p. 372. 慧＝惠 ①③④

－〔心〕 (十往生阿彌陀佛國經)〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

〔歡〕＋喜 (十往生阿彌陀佛國經)(安樂集所引)

重＝奉 (十往生阿彌陀佛國經)(安樂集所引)

冊藏經本)

p. 365. 摩＝磨 ⑥⑨(木槵子經㊂宮)〔但シ同經㊂宮並ニ仁和寺本ハ今ノ如シ〕

是＋〔漸次度木槵子〕(木槵子經)

萬＋〔億〕 ⑧㊁(往生要集略料簡所引)〔但シ阿彌陀經釋所引ハ今ノ如シ. 法然上人全集 p. 197 參照〕

炎＝焰 (木槵子經)〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕

魔＝摩 ①③④⑨, 一〔魔〕(木槵子經)〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕

受安樂＝安樂行 (木槵子經)〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕

涅槃道＝向泥洹 (木槵子經)〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕; 趣＝赴 ⑨

抄＋〔感禪師亦同之〕細註 ②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃〔但シ帝國圖書館本①ハ書入ル〕, ＋〔感禪師意同之〕(往生要集略料簡所引)

成＝獲 (占察經)

p. 366. 〔體性〕＋平 ⑤⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃?〕

滿＋〔此可歸依〕 ⑤⑦〔㊀㊃?〕

〔此〕＋可 ⑤⑦⑨㊂〔㊀㊃?〕

一〔云〕 ⑧㊁㊂(法然所引)(行卷所引)〔但シ東洋文庫本①ハ'イ無'ト書ク〕

念佛＝彌陀 ⑤⑥⑦㊀(阿彌陀經釋所引)(行卷所引)

一〔者〕 ①③④

p. 367. 國＋〔舍利弗〕(阿彌陀經)

〔乃至〕大書ス ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃?〕

當＝常 ①②⑤⑦⑧⑨(般舟經)〔㊀㊁㊂㊃?〕

一〔常〕 ②⑤⑦⑧⑨〔㊀㊁㊃?〕〔但シ般舟經ニハアリ〕

一〔當〕 ㊂〔但シ般舟經ニハアリ〕

專＝守 (般舟經)

一〔佛〕 ⑧㊁(鼓音聲經㊂宮)〔但シ同經㊂宮並ニ西福寺本ハ今ノ如シ〕

p. 368. 生＋〔慶悅〕(鼓音聲經)

辯＝弁 ③④ ＝辨 ⑥⑨〔但シ⑦⑧ハ今ノ如シ〕

p. 369. 畏＝謂 (起信論)

隨＝謂 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃(起信論)

心＝意 (起信論)

一〔往〕(起信論)

卽＝乃 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

p. 357.　免＝勉 ①③㊉

p. 358.　槌＝揵 ①⑧⑨㊁〔②㊀㊃？〕〔但シ東洋文庫本①ハ“イ本揵”ト書入ル〕〔同例以下略ス〕

廢＝癈 ①㊉

聞＝聲 ㊂

p. 359.　－〔國〕 ①②⑤⑦⑨㊂〔㊀㊃？〕〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

〔道〕 原本冠註〔僧廿三人尼六人沙彌叉在家男大合廿四人〕㊉；　〔叉＝二人；　大＝女〕 ②挾註⑧脚註㊁傍註㊃挾註(東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ノ書入レ)；　〔叉＝及；　大＝女〕 ③

者＋〔道俗男女〕 ⑧㊁

p. 360.　父＝文（帝國圖書館本①ハ墨デ書訂ス）

〔亦〕＋當（大悲經）

〔眞〕＋際 ⑧㊁

槃＋〔已上〕細註 ⑧㊁

p. 361.　奇＝痛 ⑤頭註⑨(大悲經)〔但シ同經(麗)ハ今ノ如シ〕

閉＝閇 ①②③㊉；　閉口＝口閉（大悲經㊂(宮))〔但シ同經(麗)(聖)ハ今ノ如シ〕

難＋〔船及商人所願得稱，安隱而還到閻浮提〕（大悲經）

p. 362.　食噉＝噉食（大悲經）

餘諸＝諸餘（大悲經㊂(宮))〔但シ同經(麗)(聖)ハ今ノ如シ〕

－〔聞佛名〕 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊃〔但シ東洋文庫本①ハ“イ無”ト書入ル〕

齋＝斉 1㊉

子＋〔復〕（菩薩處胎經）

滅＝減 ①⑤頭註⑨(菩薩處胎經)〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ‘滅’ト書訂ス〕

今＝命（菩薩處胎經(宮))〔但シ同經(麗)㊂ハ今ノ如シ〕

身＝我（菩薩處胎經㊂(宮))〔但シ同經(麗)(知)ハ今ノ如シ〕

p. 363.　意開＝開意（菩薩處胎經(麗))〔但シ同經㊂(宮)(知)ハ今ノ如シ〕

齋＝斉 ①③㊉

德＝能 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ‘イ能’ヲ書入ル〕

大　文　第　八

p. 364.　慈＝矜（木槵子經㊂(宮)並ニ仁和寺本)〔但シ同經(麗)並ニ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕　＝慾（同經縮

身＋〔作是語已〕（觀佛經）

〔若〕＋不（觀佛經）

－〔然〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃（觀佛經）

繋＝係（觀佛經）

p. 353. 〔恆得〕＋値＋〔遇〕（觀佛經）

佛＋〔於諸佛所常勤精進〕（觀佛經）

已＝以（觀佛經(麗)）〔但シ同經㊂並＝東大寺本ハ今ノ如シ〕

曾＝會（觀佛經(明)）〔但シ同經(麗)(宋)(元)並＝東大寺本ハ今ノ如シ〕

p. 354. －〔名大精進〕①〔但シ③④ハ小字デ右横＝添刻ス．又東洋文庫本並＝帝國圖書館本①ハ共＝書入ル〕

氍＝毾 ①②③④⑨（迦葉經(麗)(明)）〔但シ同經(宋)(元)並＝諸經要集所引ハ今ノ如シ〕

與＝至（迦葉經）〔但シ諸經要集所引ハ今ノ如シ〕

叵＝匹 ③④

－〔我〕①〔但シ東洋文庫本並＝帝國圖書館本①ハ共＝書入ル〕

床＝牀 ⑥⑦

p. 355. 座＝坐 ⑤⑦⑧（迦葉經大藏經本）〔㊀㊁㊂？〕

跏＝加（迦葉經）〔但シ同經(明)並＝諸經要集所引ハ今ノ如シ〕

趺＝跏 ⑤⑦〔㊀？〕

〔如來〕＋像（諸經要集所引迦葉經）

－〔足〕（迦葉經(元)(明)(宮)）

－〔四〕①⑧㊁㊂（迦葉經(麗)(宋)並＝諸經要集所引）〔但シ迦葉經(元)(明)(宮)ハ'足'ノ代リ＝'四'トナス〕

具＋〔足〕⑧㊁

月＝日（迦葉經）〔但シ諸經要集所引ハ今ノ如シ〕

食＋〔不食世供〕（迦葉經）

法＋〔一會說法〕（迦葉經）

眷＝屬 ⑧㊁（迦葉經）〔但シ諸經要集所引ハ今ノ如シ〕

p. 356. －〔母〕㊃

－〔便〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃

寢＝寑 ①③⑤　＝寖 ②

－〔殿〕②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

禶＋〔之〕（觀佛經）
歎＝嘆　②⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕
悉＝已（觀佛經）
各得成＝隨意作（觀佛經）

p. 350.　−〔過去〕（觀佛經）
−〔觀像〕（觀佛經）
歎＝嘆　②⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕
−〔今〕（觀佛經）
−〔各〕（觀佛經）
佛＋〔起居安隱〕（觀佛經）
−〔文〕②⑤⑦⑧㊀㊁㊂㊃（觀佛經）
床＝牀　⑥⑦
々＋〔釋迦牟尼〕（觀佛經）
時＝世（觀佛經）
相＝明　㊂
念我＝我念（觀佛經(麗)）〔但シ同經㊂並ニ東大寺本ハ今ノ如シ〕
習＋〔學三世諸〕（觀佛經）
墮＝隨　③④
−〔有〕（觀佛經）
−〔語比丘〕（觀佛經）
〔汝四比丘〕＋空（觀佛經）

p. 351.　可＝當（觀佛經）
像＝佛（觀佛經）
毫＋〔相〕（觀佛經）
大＝太（觀佛經㊂並ニ東大寺本）〔但シ同經(麗)ハ今ノ如シ〕
別＝莂　⑤⑥⑦㊀㊂㊃（觀佛經㊂）〔但シ同經(麗)ハ今ノ如シ〕

p. 352.　國＋〔已上略抄〕⑧㊁
−〔佛〕①②⑤⑦⑧〔㊀㊁㊃？〕〔但シ觀佛經ハ今ノ如シ〕
幢＝憧　①②⑤　＝幰　④
飾＋〔極爲可愛〕（觀佛經）
敎＝語　①②⑤⑦⑨㊀㊂㊃（觀佛經）〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ‘敎’ヲ書入ル〕

頃＝須 ①④〔但シ①ハ‘頃’ノ劃字ノ積リカ〕

生＋〔已上往生淨土〕細註 ⑧㊁

彼＝說彌陀 ⑧㊁

p. 346. 〔卽〕＋是 (觀無量壽經)〔但シ同經流布本ハ今ノ如シ〕

分＝芬 (觀無量壽經(麗))〔但シ同經㊂(宋)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

〔成菩提〕＋將 ⑧㊁

到＝致 ①③④⑨㊂， 到＋〔諸〕(觀佛經)

前＝所一々兒前 (觀佛經)

涕＝泣 (觀佛經)

截＝割 (觀佛經)

身＋〔汝心煩悶〕(觀佛經)

佛＝之 (觀佛經)

p. 347. 〔得〕＋生 (觀佛經)

獄＋〔地獄受苦〕(觀佛經)

杈＝叉 (觀佛經諸本) ＝杈 (同經(麗))

故＋〔從地獄出〕(觀佛經)

中＋〔貧窮下賤〕(觀佛經)

出＋〔亦得値遇〕(觀佛經)

〔乃至〕細註トセヨ(私案)

時＝出 (觀佛經)

値遇＝遭値 (觀佛經)

出＋〔世〕(觀佛經㊂)〔但シ同經(東)(麗)ハ今ノ如シ〕

p. 348. 修＝脩 ⑦⑨

照＋〔已上第三卷略抄〕細註 ⑧㊁

〔又〕＋第 ⑧㊁

釋迦文佛＝世尊 (觀佛經)

上＝尙 (觀佛經(明))〔但シ同經(麗)(宋)(元)ハ今ノ如シ〕， 上＋〔云云〕細註 ⑧㊁

p. 349. 來＝結 (觀佛經)

跏＝加 (觀佛經大藏經本)〔但シ同經東大寺本ハ今ノ如シ〕〔同例以下略ス〕

出世＝世尊 (觀佛經)

王＋〔佛〕⑧㊁㊂， ＋〔如來應正遍知〕(觀佛經)

五＋〔菩薩〕㊂

吼＝孔　①③④〔但シ①ハ‘吼’ノ略書カ〕

－〔光〕　②⑤⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

薩＋〔金剛藏菩薩〕　⑦再版本

p. 342.　歡＝勸　⑤⑦⑧〔㊀㊁？〕

我＝先　（大集經賢護分）

覺＋〔也〕（大集經賢護分）

〔睡〕＋夢　（大集經賢護分）

也＋〔已上〕細註　②⑤⑦⑧㊀㊁㊃〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

p. 343.　毫＋〔相〕（觀無量壽經）〔但シ同經(敦)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

見＝現　（觀無量壽經㊂並ニ流布本）〔但シ同經(麗)ハ今ノ如シ〕

〔十方〕＋無　㊂

授＝受　（觀無量壽經(麗)）〔但シ同經㊂並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

色＋〔身〕（觀無量壽經(宋)(元)並ニ流布本）〔但シ同經(麗)(明)ハ今ノ如シ〕

相＝想　（觀無量壽經(麗)(宋)並ニ流布本）〔但シ同經(元)(明)ハ今ノ如シ〕

念＝令　（鼓音聲王經）〔但シ同經西福寺本ハ今ノ如シ〕

喩＝愈　②⑤⑦⑧　＝慰　⑤頭註⑥⑨（鼓音聲王經）

p. 344.　即＝尋　（鼓音聲王經(麗)）〔但シ同經㊂(宮)並ニ西福寺本ハ今ノ如シ〕

〔至〕＋要　（平等覺經）

齋＝齊　①③④

〔往〕＋生　（平等覺經）

愍＝哀　（平等覺經㊂）〔但シ同經(麗)ハ今ノ如シ〕

－〔乃至〕　⑤⑦⑧〔㊀㊁？〕

亦如＝如亦　⑦

－〔或可以此文置下諸行門中〕⑤⑦〔㊀？〕；　〔亦〕＋或　㊂

從＝隨　（觀無量壽經）

猛＝衆　（觀無量壽經）

p. 345.　慧＝惠　①③④

－〔淸〕（觀無量壽經(麗)(宋)）〔但シ同經(元)(明)(敦)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

能＝遑　（觀無量壽經）

無量壽＝阿彌陀　（觀無量壽經）

卽＝則（往生論註）

燒＋〔木〕（往生論註）

是＝爲（往生論註）〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

火＋〔也〕（往生論註）

少＝小 ①②③④

少＝小 ①②③④

p. 338. 此一＝一行（華嚴傳）

偈＋〔其文曰，若人欲求知，三世一切佛，應知如是觀，心造諸如來，菩薩旣授經文〕（華嚴傳）

氏＋〔盡誦〕（華嚴傳）

〔何〕＋功（華嚴傳）

唯＋〔我〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

免＝勉 ①②③④

—〔之〕（華嚴傳）

示＝參（華嚴傳）

p. 339. —〔念〕①③④

〔滅罪生善……如次〕細註トス ②⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕；念＝持 ㊂；次＝此 ⑧㊂

經＝時 ㊂

—〔說〕①③④⑥〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

—〔又云……何況憶念〕二十二字 ②⑤⑦㊀㊃

況復＝何況（觀無量壽經流布本）〔但シ同經大藏經本ハ今ノ如シ〕

相＝想（觀無量壽經㊄）〔但シ同經㊇㊅㊆並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

千＝十（阿彌陀思惟經）

蒭＝芻 ⑧（阿彌陀思惟經大藏經本）＝菊 ①④ ＝蒭 ②〔同例以下略ス〕

p. 340. 或＝若（稱讚淨土經）

殑＝兢 ①③④

耨＋〔多羅三藐三〕（稱讚淨土經）

〔及〕＋大（觀無量壽經）〔但シ同經㊆並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

p. 341. 使＝令（十往生經）

寠＝窶 ①② ＝窶 ③④〔㊀㊁㊂㊃？〕

者＋〔云云〕細註 ㊂

耨＋〔多羅三藐三〕（大集念佛三昧經）

－〔經〕①〔但シ東洋文庫本①ハ書入ル〕

－〔若〕①③④

妙＝好（大集念佛三昧經(麗)）〔但シ同經㊂(宮)ハ今ノ如シ〕

味＋〔已上〕細註 ⑧㊁

殖＝植 ⑦（倶舎論並＝正理論㊂(宮)）〔但シ同論(麗)ハ今ノ如シ〕

敬＝驚 ㊂

華＝花 ①②③④

p. 333. 謨＝無 ②⑤⑥⑦⑧㊁〔㊀㊃？〕

慈悲者＝調御士 ⑤頭註〔大般若經？但シ原典不詳，再調ヲ要ス〕

－〔若〕①③④

問＝聞（十二佛名經㊂）〔但シ同經(麗)ハ今ノ如シ〕

p. 334. 佛＝復（大悲經．卽チ‘世尊復告阿難’トアリ）

菩＝若 ⑦再版本

p. 335. 〔已上四門……通三世佛〕細註トス ②⑤⑥⑦㊀㊂㊃； 三世＋〔諸〕⑧㊁

佛＋〔如來〕（觀無量壽經）

〔遍〕＋入（觀無量壽經(麗)(宋)）〔但シ同經(元)(明)並＝流布本ハ今ノ如シ〕

－〔之〕（觀無量壽經）

遍＝徧 ⑥⑦（觀無量壽經流布本）

p. 336. 當＋〔知〕⑧㊁

皆＝好（往生論註）

中＋〔也〕（往生論註）

卽＝則（往生論註）

－〔而〕（往生論註）

水＋〔之〕（往生論註）

想＋〔也〕（往生論註）

〔言〕＋心（往生論註）

佛＋〔也〕（往生論註）

佛＋〔也〕（往生論註）

〔火〕＋不（往生論註）

木＋〔也〕（往生論註）

此＝比 ②

p. 326. 可＋〔思〕 ⑥

婆娑＝婆沙 ⑥⑨　＝娑婆 ⑦再版本

空＝至 ③④

p. 327. 於＝是 （文殊般若經）〔但シ往生禮讃所引ハ今ノ如シ〕

就＝獎 ①④

卷＋〔名〕（般舟經）

－〔悉〕（般舟經㊂）〔但シ同經㊕㊗ハ今ノ如シ〕

得見佛＝見得 （般舟經）

跋＝颰 （般舟經）

若＋〔復〕（般舟經）

－〔是〕（般舟經㊂）〔但シ同經㊕㊗ハ今ノ如シ〕

能＝力 （般舟經㊕㊂）　＝乃 （同經㊗）

－〔者〕（般舟經㊒）〔但シ同經㊕㊖㊐㊗ハ今ノ如シ〕

p. 328. 當＝常 ?

央＝數 ㊂

至＝志 （十二佛名經㊒）〔但シ同經㊕㊖㊐ハ今ノ如シ〕

p. 329. 嚴＋〔經〕 ⑧㊁

是＝此 （般舟經）

p. 330. －〔但〕 ⑤⑦〔㊀?〕

獲＝護 （觀佛經㊐）〔但シ同經㊕㊒㊖ハ今ノ如シ〕

繫＝係 （觀佛經）

味＋〔已上〕細註 ②⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃?〕

－〔安樂集云〕 ②⑤⑦〔㊀㊃?〕

大集＝彼 （安樂集）

神變＝變化 （安樂集）

－〔道〕（安樂集）

〔云云〕大書ス ⑤

－〔有云〕 ②⑤⑦⑧㊀㊁㊃；　有＝或 ⑥

文＋〔云云〕 ②⑤〔㊀㊁㊃?〕，　＋〔云云〕細註 ⑥⑦⑧⑨

p. 332. 不爲他＝爲他不 ⑧㊁

洹＝恒 ⑦

—〔種々〕（大悲經）

福德＝德福 ⑦再版本

德＋〔神通威力〕（大悲經）

校＝挍 ①②⑥⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

數＝千 （普曜經(聖)）〔但シ同經㊂ハ今ノ如シ〕

床＝牀 ⑥⑦〔⑤？〕

擣＝搗 （普曜經大藏經本）〔但シ‘搗’ノ誤字カ〕

p. 322. 專＝等 （普曜經）

誦＝讚 （般舟三昧經）

究盡＝盡究 （般舟三昧經）

滿＝滴 ⑦再版本

p. 323. 說講＝講說 （般舟三昧經）

畜生餓鬼＝餓鬼畜生 （度諸佛境界經）

羅＝魔 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（度諸佛境界經）〔但シ同經(宮)(聖)ハ‘摩’トス〕

挍＝校 ⑦⑨（度諸佛境界經㊂）〔但シ同經(聖)ハ今ノ如シ〕

知＝得 （度諸佛境界經）

—〔說〕 ①②⑤⑦㊀㊂㊃〔但シ東洋文庫本竝ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕； 說＋〔云〕 ⑧㊁

p. 324. —〔除〕（觀佛三昧經㊂）〔但シ同經(聖)(聖)ハ今ノ如シ〕

恒＋〔河〕（護身呪經(聖)）〔但シ同經㊂ハ今ノ如シ〕

嬰＝罌 ①④

跋＝颰 （般舟經）

—〔者〕（般舟經）； 昧＋〔者〕（同經）

若火若水＝若水若火 （般舟經）〔但シ同經(知)ハ今ノ如シ〕

閱＝閲 ③④

—〔者〕（般舟經㊂）〔但シ同經(聖)(知)ハ今ノ如シ〕

p. 325. 命＋〔所請〕（般舟經(聖)）， ＋〔不請〕（同經㊂(知)）

神＝鬼 （般舟經）

甄＝眞 （般舟經）

壞＝懷 ①③④⑨（般舟經）

天＝友 ③④

斧＝豿 ㊃

折＝斬 (觀佛三昧經)(淨土群疑論所引)

準＝准 ①②③④⑨久(淨土群疑論)

華＝花 (淨土群疑論)

迎＝近 ①〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ墨デ書訂ス〕

昧＋〔海〕 (淨土群疑論)

－〔末終〕 ①②⑧久㊀㊁㊃

卷　下

大 文 第 七

p. 317.　－〔本〕 ①②⑧㊁㊂㊃〔㊀？〕

p. 318.　毫＝毛 (觀佛三昧經)

〔除〕＋却 (觀佛三昧經宋)〔但シ同經㊂元ハ今ノ如シ〕

助＝勛 ㊃

色＝光 (觀佛三昧經)

絲＝糸 ①②③④⑨　＝彩 (觀佛三昧經宋)〔但シ同經㊂元ハ今ノ如シ〕

p. 319.　－〔優塡王作佛形像經云……云々略抄〕四十五字 ②⑤⑦㊀㊂㊃; 〔大〕＋作⑤⑧㊀;

薩＝提 ⑧〔㊀？〕

女＝母 (觀佛三昧經)

劫＋〔之〕 ⑤⑥⑦〔㊀㊃？〕

齋＝齊 ①③④

繫＝係 (觀佛三昧經宋)〔但シ同經㊂並ニ東大寺本ハ今ノ如シ〕

盡滅＝滅盡 (觀佛三昧經)

p. 320.　駃＝駛 ⑥(寶積經㊂宮)〔但シ同經宋ハ今ノ如シ〕

執＝犹 ①④

大＝火 (寶積經㊂)〔但シ同經宋宮ハ今ノ如シ〕

－〔日〕 ①③④〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

－〔雖復〕 (遺日摩尼經)

罪＝欲 (遺日摩尼經宋㊂)〔但シ同經宮元ハ今ノ如シ〕

－〔若〕 (遺日摩尼經)

p. 321.　若＋〔有〕 (大悲經)

p. 313. 燃＝然（觀佛三昧經）
爆＝曝（觀佛三昧經㊞） ＝暴（同經㊛）〔但シ同經㊜ハ今ノ如シ〕
擢＝霍（觀佛三昧經）
捉＝提 ③④
折＝斬（觀佛三昧經）
佚＝泆（觀佛三昧經）
略＝掠（觀佛三昧經㊄㊞）〔但シ同經㊜㊛ハ今ノ如シ〕
坐＝臥（觀佛三昧經）〔但シ群疑論所引ハ今ノ如シ〕
杖禁＝楚撻（觀佛三昧經）； 禁＝楚 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊈㊀㊁㊂㊃〔但シ群疑論所引ハ‘杖楚撻’トス〕
癡狂＝狂癡（觀佛三昧經）〔但シ群疑論所引ハ今ノ如シ〕
宅＝屋（觀佛三昧經㊂）〔但シ同經㊜ハ今ノ如シ〕
廓＝郭（觀佛三昧經）

p. 314. 便＝使 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊈㊀㊁㊂㊃（觀佛三昧經）〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ墨デ書訂ス〕
—〔淨〕①
—〔地〕（觀佛三昧經）〔但シ群疑論所引ハ今ノ如シ〕
山＝林（觀佛三昧經）〔但シ群疑論一本ハ今ノ如シ〕
嘄＝嘴 ⑤⑥⑧（觀佛三昧經大藏經本） ＝嶲 ⑦ ＝觜 ⑨
鴈＝雁 ③④⑨
卽＝尋 ①②⑤⑦⑧⑨㊈㊀㊁㊂㊃（觀佛三昧經）
大＝火（觀佛三昧經）（群疑論所引）
華＝花 ①②③④㊈（淨土群疑論）
華＝花 ①②③④㊈（淨土群疑論）

p. 315. —〔時〕①⑤⑦〔㊀㊃？〕〔但シ淨土群疑論ハ今ノ如シ．又東洋文庫本①ハ‘特’ト書入レ，帝國圖書館本①ハ‘時’ト書入ル〕
華＝花 ①②③④㊈（淨土群疑論）
華＝花 ①②③④㊈（淨土群疑論）
屎尿＝尿屎 ②
言讃＝讃言 ⑥㊂（觀無量壽經）（淨土群疑論所引）

p. 316. 彼＝復 ②⑨㊈㊀〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ墨デ書入ル〕

―〔生〕①

獄＝極 ㊂

〔南無阿彌陀佛〕細書ス ⑤⑥⑦⑧〔㊁㊂？〕

p. 307. ―〔或加稱二菩薩〕②⑤⑦⑧(久)㊁

―〔下去準之〕⑤⑦

之＋〔此行空也〕①〔但シ①ハ此ノ下空間．不用字句ナリ〕

―〔今〕⑤⑥⑦⑧〔㊁？〕

途＝惡 ①②⑤⑥⑦⑧(久)㊀㊁㊂㊃

係＝繫（無量壽經(元)(明)）〔但シ同經(宋)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

殖＝植 ⑦（無量壽經㊂並ニ流布本）〔但シ同經(宋)ハ今ノ如シ〕

諸＝衆（無量壽經㊂）〔但シ同經(宋)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

p. 308. 益＝樂 ②⑤⑥⑦⑧⑨(久)㊁㊃

p. 309. ―〔之〕②⑨

―〔阿〕②⑨㊂

―〔五〕①③④⑥

p. 310. ―〔光〕②⑨

p. 311. 明＋〔與觀音勢至倶來〕㊂

〔南無阿彌陀佛〕大書ス ②(久)〔㊀㊁㊂㊃？〕；　佛＋〔以上第七八九條事，常應勸誘，共餘條事時々用之〕細註 ②⑤⑦⑧(久)〔㊀㊁㊂㊃？〕

臺＝華 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊃？〕

―〔以上第七八九條事，常應勸誘，共餘條事時々用之〕②⑤⑦⑧(久)〔㊀㊁㊂㊃？〕；

―〔事〕①〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

不＝否 ③④⑨

但＝唯 ③④⑨；　―〔但〕①㊁㊃〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

〔處〕細書ス ⑦

―〔一〕①⑧㊁〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

p. 312. 攝＋〔於〕②⑤⑥⑦(久)㊁㊂㊃

―〔一〕②(久)

―〔矣〕⑧㊁

害＝殺 ②

中＋〔我欲往中〕（觀佛三昧經）

盋＝鉢 ⑨（行事鈔）

p. 300.　幡＝幡 ⑤

－〔佛〕（行事鈔）

華＝花 ①③㊃〔但シ②㊇ハ今ノ如シ〕

西＋〔方〕 ⑧⑨㊇㊁〔但シ東洋文庫本①ハ書入ル〕〔②？〕

華＝花 ①②③㊃

導＝道 ⑤⑦⑧〔㊀㊁㊂？〕

華＝花 ②③㊃㊇

則＝卽（觀念法門）

p. 301.　語＋〔者〕（觀念法門）

病＋〔者〕㊂，　＋〔人〕（觀念法門）

準＝准 ①②③㊃⑨㊇

抄＝鈔 ⑤⑥⑦⑧（觀念法門）

火＝炎（大智度論㊂宮）〔但シ同論麗ハ今ノ如シ〕

－〔等〕（大智度論）

p. 302.　準＝唯 ①　＝准 ②③㊃⑨㊇

猨＝援 ⑦再版本

致＝發（安樂集）〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕

曉＝繞 ①

極樂＝安樂國（安樂集）　＝安樂（同書一本）

p. 303.　－〔爲善根爲結縁〕 ①⑤⑦〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル．②㊇ハ今ノ如シ〕

床＝牀 ⑥⑦

床＝牀 ⑥⑦

閉＝閇 ①②③㊃㊇

p. 305.　翻＝飜 ①③㊃⑨

瑠＝琉 ①③㊃

佛＋〔南無三世十方一切諸佛〕 ②⑨㊇

p. 306.　準＝准 ①②③㊃⑨㊇

性＝門（無量壽經麗）〔但シ同經㊂並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

是＋〔淨〕㊂

－〔是〕㊃

慧＝惠 ①③④
共＝某 ①③④
ー〔々〕⑤⑥⑦⑧⑨〔但シ①②(久)並ニ摩訶止觀ハ今ノ如シ．㊀㊁㊂㊃ヲ調査セヨ〕
想＝相 （摩訶止觀）
瑠＝琉 ①③④

p. 296. 共＝某 ①③④
相＝想 ⑤頭註⑥⑨㊂（摩訶止觀）
ー〔念〕⑤頭註⑨（摩訶止觀）
共＝某 ①③④
知心＝自知 （般舟三昧經）〔但シ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕
卽＝則 （般舟三昧經）〔但シ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕
想卽泥洹＝心是涅槃 （般舟三昧經）〔但シ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕
得解脫＝解得道 （般舟三昧經）〔但シ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕
無垢名清淨＝清淨明無垢 （般舟三昧經）〔但シ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕

p. 297. 此＝是 （般舟三昧經）〔但シ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕
〔云云〕大書ス ②
沙＝娑 ③④⑨〔但シ①ハ今ノ如シ〕
貪＝深 （十住毘婆沙論㊂(宮)）　＝染 （同論(宮)）〔但シ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕
人＝又 ③④

p. 298. 搆＝礊 （摩訶止觀）〔但シ同書一本ハ今ノ如シ〕
邊＝量 ①⑤⑥⑦〔㊀？〕（摩訶止觀）〔但シ同書流布本ハ今ノ如シ．帝國圖書館本①ハ‘邊ナリ’ト墨デ書入レアリ〕
婆娑＝婆沙 ②⑥(久)㊃（摩訶止觀）　＝娑婆 ⑦再版本

p. 299. 是＝此 ⑤⑥⑦〔但シ摩訶止觀ハ今ノ如シ〕〔㊀㊃？〕
齇＝䶑 ①②③(久)　＝齆 ④
ー〔鼻〕（摩訶止觀）
云＋〔云〕②(久)㊀，　＝〔云云〕細註 ⑧〔㊁㊂？〕
〔結〕＋信 ⑧㊀
就＝熟 ①③④⑨，　就＋〔也〕⑧㊁㊂
抄＝鈔 ⑤⑥⑦⑧
洹＝桓 （行事鈔）（諸經要集）〔但シ法苑珠林(四)ハ今ノ如シ〕

華＝花　①②③④㊄（大般若經）

p. 290.　便＝使　（大般若經）〔但シ帝國圖書館本①ハ書キ訂ス〕

華＝花　①②③④㊄（大般若經）

—〔等〕　⑧㊁

撿＝檢　⑧〔同例以下略ス〕

p. 291.　矣＝美　②〔但シ西來寺本②ハ訂ス〕

十＝七　③④〔但シ東洋文庫本①ハ‘十’トアリ，右ニ‘七’ト墨デ書入ル〕

—〔明〕（摩訶止觀）

—〔明〕②（摩訶止觀）

嘿＝默　⑧⑨（摩訶止觀）

—〔毘〕（摩訶止觀）〔但シ同書流布本ハ今ノ如シ〕

亦應＝皆當　（十住毘婆沙論）〔但シ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕

議＝義　⑦再版本（十住毘婆沙論㊔）〔但シ同論㊂㊪，並ニ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕

p. 292.　常＋〔獨〕⑦〔但シ摩訶止觀ハ今ノ如シ〕

果＝菓　①②③④⑨㊄

濫＝濫　①④　＝盥　②③⑨㊄（摩訶止觀）

唯＝只　⑦再版本

當＝常　①④〔但シ帝國圖書館本①ハ‘當イ’ト書入ル〕

同＝周　⑤⑦〔但シ摩訶止觀ハ今ノ如シ〕〔㊀㊃？〕

嶮＝險　（摩訶止觀）

p. 293.　三月終竟＝終竟三月　⑧㊁

〔希〕＋望（摩訶止觀）

沙＝娑　①③④

忘＝退　（十住毘婆沙論）〔但シ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕

無＝不　（十住毘婆沙論）〔但シ摩訶止觀所引ハ今ノ如シ〕

嘿＝默　⑧⑨（摩訶止觀）

—〔身〕⑦再版本

—〔阿〕②

p. 294.　輻＝幅　⑦

—〔心〕⑤頭註⑨㊂（摩訶止觀）

p. 295.　—〔是〕（摩訶止觀）

四衆＝菩薩（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
常＝當（般舟三昧經）（觀念法門所引）
得＝有（般舟三昧經）（觀念法門所引）
卽＝則（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
p. 286. 當＝常（般舟三昧經）（觀念法門所引）
〔有〕＋三（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
莫＝不（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
－〔故〕（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
由＝用（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
－〔色身〕（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
〔已上明念佛三昧法〕大書ス ②⑤⑥⑦⑧(久)㊀㊁㊂㊃
－〔此文在彼經行品中，若覺不見佛，於夢中見之〕（⑤頭註⑦再版本（觀念法門）
－〔日〕①③④
p. 287. 齋＝齊 ①③④
專＋〔心〕（觀念法門）
內＝間（觀念法門）
竊＝竊 ①④
來＝身 ①(久)〔但シ(久)ハ‘イ來’ト墨書ス〕
－〔々〕（觀念法門）
p. 288. 極＝誓（觀念法門）
〔或〕＋願（觀念法門）
曰＝白 ①②⑤⑥⑦⑧(久)㊀㊁㊂㊃（觀念法門）
命＝念 ⑥（觀念法門）
轉＋〔壽〕（觀念法門）
〔多〕＋安 ①
因緣一々＝一々因緣？ ⑤頭註
p. 289. 號＝瑞 ④
－〔毛〕（觀念法門所引）〔但シ觀佛三昧經㊂[illegible]ハ今ノ如シ，[illegible]ハ‘光’トス〕
見＝現（觀佛三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
－〔像〕（觀念法門所引）〔但シ觀佛三昧經ハ今ノ如シ〕
抄＋〔之〕⑧㊁㊂

p. 280. 妄＝妾 ④
廻＝回 ⑤⑥⑦⑧
等＝笲 ②
沮＝爼 ①②③㊃㊈
狂＝誑（大智度論）〔但シ㊈イ本トシテ書入ル〕
狂＝誑（大智度論）

p. 281. 無＝不（大智度論㊆）〔但シ同論㊂㊅㊆ハ今ノ如シ〕
死＋〔云云〕細註 ⑧㊁
權＝摧ヲ ①　＝推 ③④

p. 282. 要行＝行要 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁
願＝顧 ⑦再販本
問＝間 ⑦再販本

p. 283. 之＋〔往生要集中本終〕⑤⑦⑨

大 文 第 六

p. 284. 〔往生要集卷中末　天台首楞嚴院沙門源信撰〕＋大 ⑤⑦⑨
尙＋〔觀念門〕②⑧㊈㊀㊁㊂㊃
跋＝颰（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕〔同例以下略ス〕
法＋〔行〕（般舟三昧經），　＋〔修行〕（觀念法門所引）
正＝止 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃（般舟三昧經）（觀念法門所引）〔但シ東洋文庫本①ハ'止'ト書キ訂ス〕

p. 285. －〔彼〕（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
十萬億＝千億萬（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
〔人〕＋夢（般舟三昧經）（觀念法門所引）
由＝用（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
蔽＝弊 ①③④
四衆＝菩薩（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
常＝當（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
佛＋〔國〕（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕
開＝門 ③④
闢＝避（觀念法門一本）
四衆＝菩薩（般舟三昧經）〔但シ觀念法門所引ハ今ノ如シ〕

—〔自作教使見作隨喜也〕②⑧(久)㊀㊁(3)四； 使＝作？ 5頭註 ＝他 6

界＝苛 ①③㊏

—〔三毒三品〕②⑧(久)㊀㊁四

惱＋〔也〕①②⑤⑥⑦⑧⑨(久)㊀㊁(3)四

佛＝道（十住毘婆沙論）

—〔切〕①〔但シ帝國圖書館本①ハ書入ル〕

住＋〔已上〕細註 ⑧㊁

p. 276. 土＝王 ⑤⑦⑧㊀㊁

根＝權 ①②⑧(久)㊂（彌勒本願經）〔但シ同經ハ權＋〔方便〕トス〕 ＝業 ⑦再版本

根＝權 ①⑨(久)（彌勒本願經）〔但シ東洋文庫本1ハ根ト書キ直ス〕

語＝言（彌勒本願經）

—〔勒〕①

右＝下（彌勒本願經）

p. 277. 說＋〔此〕（彌勒本願經）

明＝助 ⑤頭註⑨（彌勒本願經）

根＝權 ①②⑨(久)（彌勒本願經）

—〔於〕（彌勒本願經）

中＝行（十住毘婆沙論）

p. 278. 緣＋〔若愚若智〕？〔止觀第八，大正大藏經 46 卷 115 頁下參照〕

沮＝爼 ①②③㊏(久)

沮＝爼 ①②3㊏(久)

p. 279. 爲＝所（大般若經）

閱＝閲 ③㊃⑤⑥㊂〔②ヲ檢セヨ〕

叉＝又 ①㊃

禪＝神 ㊂

—〔者〕（般舟三昧經㊂）〔但シ同經㊂ハ今ノ如シ〕

〔云云〕大書ス ①②③㊃⑥⑨(久)

〔中〕＋理 ①⑤⑦⑧㊁〔但シ東洋文庫本①ハ墨デナシト訂ス〕

—〔以〕（摩訶止觀）

提＝薩 ⑦再版本

—〔悲〕（摩訶止觀）

—〔佛〕 ⑧㊁㊂
根＝相 ①②⑤⑥⑦⑧(久)㊀㊁㊂㊃
怠＝息 ①
慧＝惠 ①③④
謬＝謬 ④

p. 269. 遍＝偏 (心地觀經[illegible]) ＝徧 ②(心地觀經㊂)
唯＝惟 (心地觀經)

p. 270. 眞＝直 ①②⑧(久)㊁㊂㊃
未＝去 (華嚴經)〔但シ①(久)ハ去トアリ，更ニ(久)ハ墨デ未ト書キ訂ス〕
卽＝則 (華嚴經)
念＝見 (佛藏經)
準＝准 ①②③④⑨(久)

p. 271. 何＝阿 ①〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入レテ訂ス〕
華＝花 ①②③④(久)
—〔能〕 ㊂(心地觀經)
—〔堅執〕 ⑦再版本

p. 272. 少＝小 (如來祕密藏經)
戒＝或 ③④〔但シ①ハ戒ナリ，コレヲ見誤ツタモノ〕
戒＝或 ③④

p. 273. 戒＝或 ③④
遮＝通 (決定毘尼經)
準＝准 ①②③④⑨(久)
心＋〔也〕 ㊂
—〔悔〕 (大智度論)
卽＝則 (大智度論)
不＋〔能〕 (地藏十輪經)

p. 274. —〔解說〕 (般若理趣經)
密＝蜜 (淨土群疑論)
〔云云〕大書ス ①②③④⑨(久)

p. 275. 沙＝娑 ①③④
前＝先 (十住毘婆沙論)

p. 261. 亳=毫 ①④

閉=閇 ①②④⑧

成=作（次第禪門）

閉=閇 ①②③④⑧

中=心（次第禪門）

力=方 ⑤⑦㊀㊂

―〔勝〕①②⑤⑦⑧⑨⑧㊀㊁㊃〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕； ―〔緣〕㊂； 勝緣=緣勝（次第禪門）

p. 262. 陋=everything ①③④

〔多〕+因（次第禪門）

―〔相〕（次第禪門）

p. 263. 蜜=密 ⑤⑦再版本

慧=惠 ①②③④⑧

繫=擊 ⑤頭註⑦再版本⑨（六波羅蜜經）〔但シ同經㊍ハ今ノ如シ〕

忘=妄 ②⑤⑥⑦⑨（六波羅蜜經）〔㊀㊁㊂㊃？〕

王=身（六波羅蜜經）〔但シ同經㊐並ニ仁和寺本ハ今ノ如シ〕

自+〔退〕（六波羅蜜經）

散+〔滅〕②⑧㊁㊃〔但シ東洋文庫本①ハ書入ル〕

大僻=火僻（菩薩處胎經㊛㊡） =火辟（同經㊝） =大辟（同經㊢㊠㊐）； 僻=辟？ ⑤頭註

伎樂=衆伎（菩薩處胎經㊢㊛） =妓樂（同經㊠㊐）〔但シ同經㊝ハ今ノ如シ〕

p. 264. 來=求（大藏經本菩薩處胎經）〔但シ同經㊡ハ今ノ如シ〕

p. 265. 氷與水=水與氷 ②⑧⑧㊁㊃

p. 266. 〔云云〕大書ス ①②③④⑨⑧

慧=惠 ①③④

p. 267. 悔=愧（涅槃經）

卽=則（涅槃經）

―〔意〕②㊂（大智度論）〔但シ西來寺本②ハ書入ル〕

p. 268. 汗=汙 ④⑤⑥〔㊀㊁㊂㊃？〕

―〔相〕②③④⑨⑧〔但シ①ハ今ノ如シ〕

禮敬=敬禮 ⑤頭註

p. 256.　懈＝懺　⑦〔㊀㊃？〕

於餘名＝亦爲餘　（金剛般若論）〔但シ法華玄義所引ハ今ノ如シ〕

六＝五？　⑤頭註

釋＝譯　⑦再版本

當＋〔有反復〕　（般舟經）

妄＝忘　①❹⑤⑥⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

〔遠〕＋離　（般舟經）

〔行〕＋乞　（般舟經）

p. 257.　慧＝惠　①②③❹〔但シ⊙久ハ今ノ如シ〕

〔視〕＋如　（般舟經）

法種＝種法　②⑧⑨㊀㊁㊂

若＝或　（華嚴經）

心＝意　（華嚴經）

若＝或　（華嚴經）

p. 258.　憙＝喜　⑤⑥⑦⑧（大正大藏經本遺日摩尼經）

抄＋〔之〕　②⊙久

－〔問〕　②⑤⑦⑧㊀㊁㊂⊙久

今何＝何今　⑨⊙久㊂

六＝五？　⑤頭註

不顯＝顯不　①③❹

文＋〔云〕　⑨⊙久㊂

如＝始　①❹〔但シ東洋文庫本①ハ如ヲ書入ル〕

p. 259.　想＝相？　⑤頭註

違＝逺　①　＝遠　③❹

慧＝惠　①②③❹〔但シ⊙久ハ今ノ如シ〕

－〔生〕　①

－〔故〕　（往生論流布本）（往生論註大藏經本）〔但シ往生論大藏經本ハ今ノ如シ〕

三＋〔種〕　（往生論）

〔以〕＋不　（往生論㊂）；　不＋〔以〕　（往生論[illegible]）

〔自〕＋身　（往生論）

p. 260.　〔以〕＋拔　（往生論）

p. 245. 具＝共（般舟經㊂㊅）〔但シ同經㊁㊆ハ今ノ如シ〕

智＝知（般舟經）

隣＝輪（般舟經）〔但シ同經㊃ハ今ノ如シ〕

洹＝日（般舟經）〔但シ同經㊃ハ今ノ如シ〕

隣＝輪（般舟經）〔但シ同經㊃ハ今ノ如シ〕

輒＝輙 ①③④⑥⑨

髮鬚＝鬚髮 ②⑤㊇ ＝鬚髮 ⑥⑦⑧〔㊀㊁㊃？〕 ＝鬚髮 ㊀（般舟經）

－〔此〕㊃

p. 246. 誦＝用（般舟經㊁）〔但シ同經㊂㊃ハ今ノ如シ〕

p. 247. 轉＋〔已上〕細註 ⑤⑥⑦〔㊀㊃？〕

持＋〔誦〕⑤⑥⑦⑧㊁

－〔讀〕（無量壽經）

－〔如說修〕㊁； －〔如〕－〔修〕（無量壽經）

－〔已上〕⑤⑦初版本㊁

此＝是 ㊇

p. 248. 癈＝癡 ①③④

彼佛＝諸如來（度諸佛境界經）

方＋〔世〕（度諸佛境界經）

癈＝癡 ①③④

智慧功德＝功德智慧（度諸佛境界經）

證＝登（華嚴經㊂㊅㊁）〔但シ同經㊆㊂ハ今ノ如シ〕

p. 249. 笑＝咲 ①②③④㊇

準＝准 ①②③④⑨㊇

－〔往生要集卷中本終〕①②⑤⑦⑧⑨㊇㊀㊁㊂㊃

p. 250. －〔往生要集卷中末 天台首楞嚴院沙門源信撰〕①②⑤⑦⑧⑨㊇㊀㊁㊂㊃

緣＋〔何等爲五〕（觀佛三昧經）

燃＝然 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊃（觀佛三昧經）

速＝疾（大正大藏經本觀佛三昧經）

六＝五？⑤頭註

淨戒＝戒淨（觀佛三昧經）

p. 251. 或＝戒 ⑤頭註（大智度論）

慧＝惠 ①②③④
說＋〔法〕（十住毘婆沙論）
不＋〔全〕（十住毘婆沙論㊂㊄）〔但シ同論㊅ハ今ノ如シ〕
－〔一〕（十住毘婆沙論）
毫＝豪 ①④
釐＋〔之〕（十住毘婆沙論㊂㊄）〔但シ同論㊅ハ今ノ如シ〕
叉＝又 ④
p. 240. 云＋〔問〕 ①③④⑨
得＝答（十住毘婆沙論）
設＝妄（十住毘婆沙論㊂㊄）〔但シ同論㊅ハ今ノ如シ〕
能＝居 ⑦再販本
卽＝則（維摩經）
p. 241. 音＝意 ④
髣髴＝髮髴 ①④ ＝髣髴 ③
綵＝婇 ①②③④⑨〔㊀㊃？〕
尊＝寶 ㊃
殊＝珠 ⑦再販本
佛＝能 ⑦再販本
－〔能〕（大般若經㊂）〔但シ同經㊅ハ今ノ如シ〕
樂＝爻 ㊂
p. 242. 已＝以（占察經）
至＝生（占察經㊌）〔但シ同經他本ハ今ノ如シ〕
幻＝㓜 ①④
定＝眞（占察經㊐㊃）〔但シ同經㊅㊌等ハ今ノ如シ〕
薫＝動 ①②③④⑧ ＝熏（大正大藏經本占察經）
妄現＝現妄（占察經）
－〔無〕（占察經）
p. 243. 想＝相（占察經㊂㊄）〔但シ同經㊅ハ今ノ如シ〕
念＝り ⑦再販本
－〔不可說〕（華嚴經㊐）〔但シ同經他本ハ今ノ如シ〕
p. 244. －〔應念願我得佛齊正法王〕 ②⑧㊀

－〔其〕（寶積經）

－〔願〕②㊀㊃；　願今彌陀＝彌陀如來 ㊂；　陀＋〔如來〕②㊀

－〔願得如世尊慧眼第一淨〕㊀；　慧＝惠 ①②③④

p. 235.　慧＝惠 ①②③④

心＋〔以此諸智令一人得是人〕（十住毘婆沙論）〔但シ同論㊂(宮)ハ諸智＝心智〕

－〔應念願令我得佛覺三昧〕㊀；　佛覺＝覺佛 ⑦再販本

慧＝惠 ①②③④

穩＝慧（十住毘婆沙論）

－〔生〕（十住毘婆沙論(麗)）〔但シ同論㊂(宮)ハ今ノ如シ〕

礙＝疑（十住毘婆沙論）

耨＋〔多羅三藐三〕（十住毘婆沙論）

提＝薩 ⑦再販本

p. 236.　相＝想 ②⑨㊀㊂㊃

在＋〔念〕㊀（十住毘婆沙論）

慧＝惠 ①②③④

穩＝隱（大正大藏經本十住毘婆沙論）

－〔應念願佛除滅我䮕動覺觀心〕㊀

恒河＝兢伽 ②⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕　＝殑伽（寶積經）

入＝人 ④

p. 237.　〔又〕＋同 ②㊃〔但シ東洋文庫本①ハ書入ル〕

－〔時〕（大智度論(宋)(宮)）〔但シ同論(麗)(元)(明)ハ今ノ如シ〕

有＝同？⑤頭註

p. 238.　卽＝則 ㊂〔同例以下略ス〕

－〔心〕⑦再販本

熟＝熟 ①④

－〔引〕②⑤⑦㊀㊂㊃

－〔佛〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

說＋〔如〕㊀

p. 239.　就＝熟 ①④　＝熟 ⑨

慧＝惠 ①②③④

窮＝盡（十住毘婆沙論）

華果＝花菓 ①②③㊃　＝華菓 ⑨　＝花果（寶積經）

p. 232. 殑＝兢 ③㊃⑨

廻＝洄 ⑥（寶積經㊂）〔但シ同經㊂㊂ハ今ノ如シ〕

渡＝複 ①②⑥⑨㊀㊂㊃（寶積經）　＝復 ⑤⑦⑧〔㊁？〕

云＋〔無量兢河沙十方界草木盡焚成墨灰億載歷于海十力智深妙取滴與含生如實分別知某界樹等云云又云〕㊂

州＝洲 ⑦（六波羅蜜經）〔但シ①ハ㴬トアリ〕

紙素＝素紙？ ⑤頭註⑨〔但シ六波羅蜜經ハ今ノ如シ〕

慧＝惠 ①②③㊃

慧＝惠 ①②③㊃

p. 233. 慧＝惠 ①②③㊃

慧＝惠 ①②③㊃

－〔所得〕⑤⑦⑧〔㊁？〕；　所得＝所有 ㊂〔但シ六波羅蜜經ハ今ノ如シ〕

蜜＝密 ⑤；　－〔蜜〕⑥⑦

慧＝惠 ①②③㊃

－〔復〕⑤⑥⑦㊀㊂〔但シ六波羅蜜經ハ今ノ如シ〕

慧＝惠 ①②③㊃

薩＋〔摩訶薩所得〕（六波羅蜜經）

慧＝惠 ①②③㊃

薩＋〔摩訶薩所得〕（六波羅蜜經）

慧＝惠 ①②③㊃

慧＝惠 ①②③㊃

慧＝惠 ①②③㊃

慧＝惠 ①②③㊃

慧＝惠 ①②③㊃

p. 234. 就＝熟 ①㊃　＝熟 ⑨

－〔補處〕㊂（寶積經）

智＋〔惠〕①③㊃⑨

智＝不 ⑦再版本

〔百分千分〕＋百（寶積經）

－〔共〕（寶積經）

作＝住 ③⑤〔但シ①ハ住トス．住ノ字ナリ．見誤ツタモノ〕

惟＋〔云云〕細註 ⑤⑥⑦⑧〔但シ②ハ大書ス〕〔㊀㊁㊂㊃？〕

華＝花 ①〔同例以下略ス〕

p. 227. 〔如〕＋十 ㊂

施＋〔作〕 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊁㊂㊃（十住毘婆沙論）

通＋〔也〕 ㊂

座＝坐 ⑤⑥⑦⑧〔㊁㊂？〕

p. 228. －〔力〕（十住毘婆沙論㊏㊍㊄）〔但シ同論㊊㊒ハ今ノ如シ〕

十＝千（十住毘婆沙論）

百＋〔萬〕（十住毘婆沙論）

p. 229. 諸＋〔佛〕 ㊀

嚴＋〔經〕 ㊂

間＝界（華嚴經㊊㊒）〔但シ同經㊏㊍㊄ハ今ノ如シ〕

p. 230. －〔所有〕 ①⑤⑦⑧㊁〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

嚴＋〔經〕 ②㊃〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

普在於三世＝普在三世中（華嚴經）

p. 231. 即能知見＝以天眼清淨過於人眼見六道衆生隨業受身（十住毘婆沙論）

智＝知 ⑥⑦（十住毘婆沙論）

天中＝中天（十住毘婆沙論㊂㊒）〔但シ同論㊏ハ今ノ如シ〕

－〔應念願佛令我宿業清淨〕 ②㊀

恒河＝殑伽（寶積經）

界＋〔中〕（寶積經）

－〔一切〕（寶積經）

恒河＝殑伽（寶積經）

大海＝海中（寶積經）

墨＝黒 ③⑤

共＝某 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（寶積經）

共＝某 ②⑤⑥⑦㊀㊃（寶積經）

共＝某 ②⑤⑥⑦㊀㊃（寶積經）

共＝某 ②⑤⑥⑦㊀㊃（寶積經）

共＝某 ②⑤⑥⑦㊀㊃（寶積經）

明＝雲 ②⑧⑨㊀㊁㊂(華嚴經)

諸幽冥所＝所有幽冥 (華嚴經)

光＋〔明〕 ㊂

風＋〔所吹〕(寶積經)

p. 222. 州＝洲 (寶積經)

萬＝方 ②

小州＝少洲 (寶積經)

－〔已上〕 ㊂

p. 223. －〔應作是念願我當得佛金剛不壞身〕 ②㊀

－〔千〕 ⑦再版本

河＝劫 (十住毘婆沙論(麗))〔但シ同論㊂(宮)ハ今ノ如シ〕

擧足行時＝擧足時足下 (觀佛三昧經)

p. 224. －〔行〕(寶積經)

華＝花 ①②③④(寶積經)

經＋〔意〕？ ⑤頭註〔但シ然ラズ．正引文ナリ〕

盤＝磐？ ⑤頭註

華＝花 ①②③④

－〔應作是念願我得神通遊戲諸佛土〕 ②㊀

p. 225. 末＝抹 (十住毘婆沙論(明))〔但シ同論(麗)(宋)(元)ハ今ノ如シ〕

還＋〔令〕 ⑤⑥⑦⑨〔㊀㊃？〕

合＝令 ①

己＝已 ⑤

住＝往 (維摩經)

－〔又於下方······而無所嬈〕四十一字 ②㊀㊃； 鋒＝鋒 ④ ＝鉢 ㊂； 針鋒＝鍼鋒 (維摩經)； 稾＝来 ① ＝稿 ⑥ ＝槁 ⑦ ＝棗 ⑧㊁(維摩經) ＝稾 ⑨〔但シ①ハ藁ト書入ル〕

納＝內 (維摩經)

p. 226. 海＋〔水〕(維摩經)

－〔何〕 ㊃

窄＝迮 ①②③④(大正大藏經本度諸佛境界經)

現＋〔於〕(度諸佛境界經)

毫＝豪 ①④⑤⑦⑧㊀㊁㊂㊃

挍＝校 ①⑦⑧⑨

及＋〔以〕（大集念佛三昧經）

假＝設（大集念佛三昧經）

－〔已上〕⑧㊁㊂

嚴＋〔經〕②⑨㊀㊃〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

p. 218. －〔應作是念願我當見佛無邊功德相〕②㊀

淨＋〔佛〕②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（平等覺經）

－〔無量清淨佛者〕⑤⑥⑦

尺＝丈（平等覺經）

炎＝焔（平等覺經）

國＋〔也〕⑤⑥⑦㊂

〔三千〕＋大（觀無量壽經）

〔世〕＋界（觀無量壽經）

經＋〔意同之經〕②⑤⑦㊀㊂

勝＝尊（無量壽經）

p. 219. －〔有佛光〕（無量壽經㊂）〔但シ同經(麗)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

與＝興 ①④

〔玄〕＋一 ㊀㊂

一＋〔師〕⑧㊁㊃

歡＝歎 ⑦

慧＝惠 ①③④；　發＝及（無量壽經記）

慧＝惠 ①③④

途＝塗（大正大藏經本無量壽經）

非＝不（無量壽經）

p. 220. 不＝未（無量壽經㊂並ニ流布本）〔但シ同經(麗)ハ今ノ如シ〕

賤＝淺 ㊀

p. 221. 足＝之 ⑤⑥⑦㊀㊂

恠＝怪 ⑤⑥⑦⑧

華＝花 ①

－〔經〕②

徑＝侄 ①②㊃

覩＝視（安樂集）

p. 211. 是＝此（觀無量壽經流布本） ＝彼（同經大藏經本）

可＝應（觀無量壽經）〔但シ群疑論所引ハ今ノ如シ〕

p. 212. 今＝令 ⑧㊁㊂

然＋〔常在〕（群疑論）

分＋〔經〕（群疑論）

－〔已上彼經但云……更勘諸本〕三十五字 ⑤⑦；｜｜－〔云云〕⑧㊁㊂； 仰信受＝師信 ⑧㊁㊂； 彼＋〔之〕②； －〔受〕②； －〔小念見小大念見大文出日藏經第九〕②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃〔但シ②ハ墨デ書入ル〕

p. 213. 利＝益？⑤頭註

少＝小 ②㊃

行＝善？⑤頭註

－〔問何等功德答其事無邊〕①②⑤⑦⑧㊀㊁㊃； －〔等〕㊂； 邊＝量 ㊂

p. 214. 汎＝浮（迦才淨土論）

肯＝有（迦才淨土論）

也＋〔此文出三卷淨土論〕細註 ⑧㊁， ＋〔又〕㊀

超＝趣？⑤頭註⑥

性＝姓？⑤頭註

脫＋〔解脫〕（維摩經）

p. 215. 受＋〔已上〕細註 ㊂

名＝各 ㊃

華＝花 ①②③㊃

p. 216. －〔首楞嚴經文如下斷簡門〕⑤⑦㊂； 斷＝析 ① ＝料 ②⑥⑨

－〔佛〕②

蜜＝密 ③㊃

－〔中〕（六波羅蜜經）

－〔隨〕②⑤⑦⑨㊀㊂

p. 217. 宛＝婉（六波羅蜜經）

遶＝旋（六波羅蜜經）

毫＝豪 ①㊂

痢＝利（西方要決）

―〔禪〕②㊂

p. 205.　曲＋〔故〕（往生禮讃偈）

―〔方〕①⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂

―〔者〕（往生禮讃偈）〔但シ大日本續藏經本往生禮讃偈ハ今ノ如シ〕

―〔本〕①②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃（西方要決）

由＝猶（大日本續藏經本西方要決）

爺＝耶①③④（大正大藏經本西方要決）　＝娜②〔但シ大日本續藏經本西方要決ハ今ノ如シ〕

爾＝然（西方要決）

沈＝流（西方要決）

p. 206.　〔來〕＋間（往生禮讃偈）

等＝煩惱來（往生禮讃偈）

令＝使（往生禮讃偈）

淨＋〔云云〕細註 ㊂

廢＝癈 ①④

業行＝行業？⑤頭註〔但シ西方要決並ニ往生要集諸本皆今ノ如シ〕

p. 207.　〔云云〕大書ス ②〔㊀㊁㊂㊃？〕

〔若〕＋世 ②㊂

p. 208.　卽＝則（迦才淨土論）

逝＝遊 ①⑧㊁

生＋〔何等爲三〕（觀無量壽經）

未＝不（往生禮讃偈）

p. 209.　―〔向〕（往生禮讃偈）

―〔往〕（往生禮讃偈）

狐＝孤 ④

―〔阿〕⑦

―〔佛〕（鼓音聲經）

睡＋〔眠〕（往生禮讃偈）

p. 210.　又＋〔綽和尚〕㊂

嚝＝臟 ①④

劍＝釼 ①②④　＝刀（安樂集）

p. 196.　繫＝係（觀佛三昧經）

p. 197.　－〔明〕⑧㊁

華＝花 ①②

施＝向 ⑦再版本

其＝第 ⑦再版本

－〔善根〕①②⑤⑦⑨㊀㊂㊃

薩＝提 ㊂

p. 199.　小＝少（六波羅蜜經）

小＝少（六波羅蜜經）

華＝花 ①④

果＝菓 ①②③④⑨

〔又〕＋寶 ②㊂㊃

小＝少（寶積經）

專＝我（諸經要集所引大菩薩藏經）

p 200.　慳＝惜（大智度論）

花＝華 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

花＝華 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

p. 201.　〔生〕＋火（大智度論[illegible]）〔但シ同論㊂[illegible]ハ今ノ如シ〕

－〔然〕⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

p. 202.　－〔相〕⑧㊁（大智度論）

成＝明 ㊂

願＋〔往生要集上末終〕⑤⑦，　＋〔往生要集卷上末終〕⑨

p 203.　〔往生要集卷中本　天台首楞嚴院沙門源信撰〕＋大 ⑤⑦⑨

大　文　第　五

行要＝要行 ②⑨

華＝花 ①②③④〔㊀㊁㊂㊃？〕

華＝花 ①②③④〔㊀㊁㊂㊃？〕

華＝花 ①②③④〔㊀㊁㊂㊃？〕

p. 204.　－〔禪〕⑤⑥⑦㊀

涕＝啼 ①②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃

p. 188. 〔亦〕＋在 ②⑧⑨㊁㊂㊃

－〔於〕 ⑧㊁

無＋〔所〕 ㊀

p. 189. 去＋〔無〕 ㊀； 去來＝來去 （心地觀經）

斷＋〔非〕 ⑤⑥⑦㊂〔㊀㊃？〕； ˙斷常＝常斷 （心地觀經）

此＝止 （心地觀經）

－〔非〕 ①②⑤⑥⑦⑨㊀㊂㊃〔但シ東洋文庫本及ビ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

p. 190. －〔惡〕 ㊀㊂㊃

－〔面〕 ⑤⑥⑦

p. 191. －〔又〕 ⑧㊁

華＝花 ①②③④

p. 192. 寤寐＝寤寐 ④ ＝寤寐 〔同例以下略ス〕

況復＝何況 （觀無量壽經流布本）〔但シ同經(麗)㊂等ハ今ノ如シ〕

p. 193. －〔是〕 ㊂（淨土十疑論）

卽＝唯 （華嚴經）〔但シ淨土十疑論所引ハ今ノ如シ〕

佛＝法 （華嚴經）〔但シ淨土十疑論所引ハ今ノ如シ〕

心＝身？ ⑤頭註

－〔云云〕 ⑧㊁

議＝義 ⑦再版本

－〔佛〕 ⑦再版本

德＋〔無量〕 （文殊般若經）〔但シ東洋文庫本及ビ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

p. 194. 差＝左 ⑦再版本

相＋〔已上〕細註 ⑧㊁〔㊂？〕

毫＋〔相〕 （觀無量壽經大藏經本）〔但シ同經(宋)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

見＝現 （觀無量壽經㊂）〔但シ同經(麗)並ニ流布本ハ今ノ如シ〕

小＝少 （觀佛三昧經）

惠＝悲 ②⑧㊁㊃ ＝慧 ⑤⑥⑦⑨㊀㊂（觀佛三昧經）

p. 195. 諸觀＝觀諸 （觀佛三昧經(麗)）〔但シ同經㊂ハ今ノ如シ〕

現＝住 （觀佛三昧經）

抄＋〔之〕 ②⑨㊃

〔上所說……應知〕二十六字大書ス ①②③④⑨

失＝去（優婆塞戒經）
網縠＝輞轂 ？⑤頭註⑦⑨ ＝網轂 ⑥〔但シ①ハ轂ナリ〕
〔云云〕細書ス ③❹⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕
匳＝匲 ①② ＝奩 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕
怚＝坦？⑤頭註
移＝移 ❹
〔云々〕細書ス ⑧〔㊁㊂？〕
網＝綱 ⑦
―〔相〕⑦再版本
花＝華 ⑤⑥⑦⑧⑨
花＝華 ⑤⑥⑦⑧⑨
花＝華 ⑤⑥⑦⑧⑨
上＝中（觀佛三昧經）
―〔五〕（觀佛三昧經）
p. 183. 細＝綱 ①❹ ＝網 ⑤⑦初版本
小＝少 ①③❹
廢＝癈 ①❹
始＝如 ㊂
p. 184. ―〔也〕㊂
眼＝目（觀佛三昧經）
一事想＝想一事 ⑧㊁（觀佛三昧經）
政＝正 ⑤頭註⑥⑨（觀佛三昧經㊂）〔但シ同經[illegible]ハ今ノ如シ〕
p. 185. 穩＝隱（觀佛三昧經大正大藏經本）
導＝道 ㊂
p. 186. ―〔如前〕㊀
婉轉＝轉婉 ⑦
p. 187. 光＝先 ⑦再版本
以＝有（觀無量壽經）
〔以〕＋爲（觀無量壽經）
隨＋〔形〕（觀無量壽經）
奕＝夾 ③❹

身＋〔體〕（大智度論㊇）〔但シ同論㊂㊈ハ今ノ如シ〕

周＝圍 ③㊄

爲＋〔廣〕㊀

－〔方〕（報恩經）

相＋〔法花文句云慈心平等得此相〕㊀，　＋〔文句云慈心平等得此相云々〕⑧㊁

〔但シ帝國圖書館本①ハ書入ル〕

p. 181. 陰＋〔馬〕②⑨

－〔經〕②㊀㊃

慙＝懺 ㊀

導＝道 ⑧㊁㊂

欲＝慾 ⑦再版本

止＝息 ㊂

悋＝悋 ①②③⑤⑥　＝恡 ④　＝悕 ⑦　＝怯 ⑨

觀＝視 ①③⑤⑥⑦〔㊀㊁㊂㊃？〕

腨＝腸 ④

翳＝黳（大般若經㊇）　＝鑒（同經㊂）

腨＝膞 ⑧㊁㊂

膞＝腨 ⑤⑥⑦⑨〔㊀㊃？〕

鑠＝瓅 ①②㊄⑨

翳＝臀 ①　＝鑒（瑜伽論）

膞＝腨 ⑤⑥⑦〔㊀㊃？〕　＝瑞 ⑨　＝踌（瑜伽論）

與＝輿 ⑦再版本

情＝憒 ㊄，　情＋〔大經云．不殺不盜於父母師長常生歡喜故得跟長相〕⑧㊁

趺＝跟 ⑦

跟趺二相＝足跟趺長（瑜伽論）

p. 182. 生＝坐 ㊀

－〔化〕㊀

現＝有？⑤頭註

渧＝滴？⑤頭註

－〔相〕（無上依經）

塞＝基 ⑤⑦

花＝華 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

指纖長相＝纖長指相 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（瑜伽論） ―〔指〕 ①〔但シ東洋文庫本①ハ書入レアリ〕

網＝綱 ⑤⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

絡＝絡 ④

浮＋〔檀〕 ⑧㊀（觀佛三昧經）

億＝倍 （觀佛三昧經）

達＝淨 （觀佛三昧經㊂）〔但シ同經㊃ハ今ノ如シ〕

―〔集〕 ⑧㊀

―〔集〕 〔大涅槃經ノ引文ナリ〕〔㊀ヲ再檢セヨ〕

苦＋〔時〕 （涅槃經南北兩本）

捉＝提 ⑤⑥⑦〔㊀㊃？〕

按＝安 ①②③④⑨ ＝案 （涅槃經北本）（同經南本聖語藏本）〔但シ同經南本㊂等ハ今ノ如シ〕

師＝獅 ⑦再版本

情＋〔隨所生起〕 （瑜伽論）

獷＝獚 ②⑤⑥ ＝横 ⑦〔㊃？〕 ＝獚 ⑧㊀㊁〔但シ瑜伽論ハ今ノ如シ〕

p. 179. 萬＝卍 ⑤⑥⑦再版本⑧⑨㊀ ＝卐 ⑦初版本〔㊀㊃？〕

花＝華 ⑤⑥⑦⑧⑨

花＝華 ⑤⑥⑦⑧⑨

化＝他 ⑤⑦

光＋〔中〕 （觀佛三昧經）

瑠＝琉 ①③④

筒＝箇 ⑤⑦〔㊀？〕

量＝生 ①〔但シ東洋文庫本及ビ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

〔云云〕細書ス ③④⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

p. 180. 花＝華 ③⑤⑥⑦⑧⑨

〔云々〕細書ス ⑧〔㊁㊂？〕

―〔觀〕 ①〔但シ東洋文庫本①ハ書入ル〕

逆＝逆 （大智度論）

遶＝逆 （大智度論）

約＝均 ①②③④⑧⑨㊁

〔云云〕細書ス ⑧〔㊁㊂？〕

明＋〔猶如伊字〕（觀佛三昧經）

出一々光＝流出二光（觀佛三昧經）

p. 176. 畫＝晝 ⑦

晝＝畫 ⑦再版本

薩＋〔二手皆〕（觀佛三昧經）

金＋〔色〕⑧㊁

圍＝圓 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

車＝事 ⑦再版本

－〔相〕（無上依經）

瓫＝盆 ③（觀佛三昧經ノ一處）

相＋〔滿相〕（觀佛三昧經）

光＋〔明遍〕（觀佛三昧經）

虎魄＝琥珀 ⑤⑥⑦⑧⑨〔但シ觀佛三昧經ハ今ノ如シ〕〔㊀㊁㊂㊃？〕

p. 177. －〔光〕②⑧⑨㊁㊂㊃

十＝千 ⑤⑥⑦

光＝明 ⑦再版本

施＋〔得〕（法華文句）

勤＋〔如師子王〕（無上依經）

而＝兩 ⑤⑥⑦㊂（無上依經）〔㊀㊃？〕

－〔相〕（無上依經）

明＝脩（大般若經）

膞＝腨 ②　＝傭 ⑤⑥⑦⑧〔但シ大般若經ハ今ノ如シ〕〔㊀㊁㊂㊃？〕

理＝輪？⑤頭註

方＋〔已〕？⑤頭註

象＝像 ①⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

p. 178. 膞＝臑 ②　＝傭 ⑤⑥⑦⑧〔但シ大般若經ハ今ノ如シ〕〔㊀㊁㊂㊃？〕

〔樂〕＋佐（大集經）

一々＝十指（觀佛三昧經）

萬＝卍 ⑤⑥⑦再版本⑧㊁（觀佛三昧經㊇）〔但シ同經㊂ハ今ノ如シ〕　＝卐 ⑦初版本〔㊀㊃？〕

p. 173. 脊＝瘠 ②
　　整＝愬 ①②③④〔同例以下略ス〕
　　鬢＝鬓 ④
　　善＝喜（涅槃經）
　　－〔故〕（涅槃經）
　　－〔愛視衆生〕（大集經）
　　〔云々〕細書ス ⑧〔㊁㊂？〕
　　鋌＝挺 ①　＝挻 ②　＝捱 ③　＝梃 ④　＝鋋 ⑨

p. 174. 妙＝好 ⑧㊁
　　珞＋〔也〕⑧㊁
　　果＝菓 ①②③④⑨
　　－〔如量嚴麗〕（大般若經）
　　齊＋〔平〕（大般若經）
　　大＋〔集〕⑧㊁
　　鮮白＝白淨（涅槃經）
　　相＋〔云々〕細註 ⑧㊁
　　潔鋒＝絜鋒 ①④　＝潔鋒 ③
　　四＝二（大集經）
　　〔云々〕細書ス ⑧〔㊁㊂？〕
　　千＝十 ⑤⑦⑨㊂〔㊀㊃？〕
　　可＝應？⑤頭註

p. 175. 咲＝笑 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕
　　〔云々〕細書ス ⑧〔㊁㊂？〕
　　滴＝適 ①③④⑤㊃　＝渧（觀佛三昧經㊂）〔但シ同經㊂ハ今ノ如シ．又①ハ“シタヽリ”ト振假名ス〕〔㊀㊁㊂？〕
　　根＝相？⑤頭註 ⑦挾註〔但シ觀佛三昧經ハ今ノ如シ〕
　　若＋〔經〕⑧㊁〔但シ東洋文庫本及ビ帝國圖書館本①ハ共＝書入ル〕
　　大＋〔集〕⑧㊁
　　瑠＝琉 ①③④
　　華＋〔相〕（觀佛三昧經）
　　婉＝綩 ①③④⑨

瑠＝琉 ①③④
—〔化〕⑤⑦〔㊀？〕
蠶＝蚕 ① ＝蚕 ④
毛＝色（大集經）

p. 171. 糸＝絲 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕〔同例以下略ス〕
見＝現 ⑧㊁
—〔樂廣觀者可用此觀〕⑤⑦，此ノ八字大書ス⑥⑧㊁
—〔億〕⑧㊀㊁㊂㊃（觀佛三昧經）
爲＝爲 ① ＝與 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃（觀佛三昧經）
〔云々〕細書ス ⑧〔㊁㊂？〕
去＝云 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕
—〔皆〕⑧㊁
註＝注 ①②③④
廣＋〔圓滿〕（大般若經）
妙＝好 ①②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃
澗＝澗 ⑤⑨ ＝澗 ⑥ ＝煕 ⑦⑧
—〔無〕①
瑠＝琉 ①③④⑨〔同例以下略ス〕

p. 172. 右＝古 ⑦
逾＝踰（大般若經）
筒＝箇 ④
丈五＝五丈 ⑧㊁㊂
徑＝經 ㊂ ＝徑 ④
三＝二 ③④
華＝花 ①②③④
坐＝座 ⑤⑦⑧〔㊀㊁㊂？〕
—〔說〕㊂
—〔說〕㊂
—〔集〕？⑤頭註
佛＋〔三昧〕⑧㊁
毫＝豪 ①④

想＝相？（私見）

p. 168. 畫＝盡 ①

〔一々〕＋脈（觀無量壽經㊎）〔但シ同經㊂及ビ流布本ハ今ノ如シ〕

葉＝華 ⑦〔但シ"々"トス〕

是＋〔蓮〕（觀無量壽經）

〔具〕＋有（觀無量壽經㊂）〔但シ同經㊎ハ今ノ如シ〕

〔大〕＋葉（觀無量壽經㊎）〔但シ同經㊄㊅及ビ流布本ハ今ノ如シ〕

〔各〕＋有（觀無量壽經流布本）〔但シ同經大正大藏經本ハ今ノ如シ〕

－〔珠〕（觀無量壽經流布本）〔但シ同經大正大藏經本ハ今ノ如シ〕

布＝覆（觀無量壽經）

伽＋〔摩尼〕（觀無量壽經㊎）〔但シ同經㊂及ビ流布本ハ今ノ如シ〕

萬＋〔四千〕㊃

交＝校 ⑦㊀（觀無量壽經㊄㊅）　＝挍 ⑤⑧㊁〔但シ觀無量壽經㊎㊥及ビ流布本ハ今ノ如シ〕

幔＝縵 ①②③④⑨（觀無量壽經㊎）〔但シ同經㊂及ビ流布本ハ今ノ如シ〕

宮＋〔復〕（觀無量壽經）〔但シ同經流布本ハ今ノ如シ〕

p. 169. 光＝色（觀無量壽經）

華＝花 ②

此＝是 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕〔但シ觀無量壽經ハ今ノ如シ〕

華＝花 ②〔同例以下略ス〕

〔妙〕＋華（觀無量壽經㊎）〔但シ同經㊄㊅及ビ流布本ハ今ノ如シ〕

座＝坐 ①③④

此＝是（觀無量壽經）

相＝想 ⑧㊁

坐＝座 ⑤⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕

p. 170. 光＝此（往生要集諸本）〔今觀佛三昧經ニヨリテ訂ス〕

雲＋〔微塵從空〕（觀佛三昧經）

脩＝長（大集經）

〔云云〕細書ス ⑧

上＝兩（觀佛三昧經）

褫＝捓 ①③④　＝褅 ②

尼＝厄 ⑤⑦〔㊀？〕

〔爲〕+欲（淨土十疑論）

惟=忖 ①②③④(淨土十疑論)〔㊀㊁㊂㊃?〕

−〔中以境〕（淨土十疑論）

−〔故〕（淨土十疑論）

被纒=爲業（淨土十疑論）

數劫=劫數（淨土十疑論）〔但シ同論慶安元年本ハ今ノ如シ〕

衆生苦=苦衆生（淨土十疑論）

〔若〕+證（淨土十疑論）

p. 162. 衆生苦=苦衆生（淨土十疑論）

花=華 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃?〕

花=華 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃?〕

花=華 ⑤⑥⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃?〕

菓=果 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃?〕

菓=果 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃?〕

飡=餐 ⑤⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃?〕

俟+〔別釋〕? ⑤頭註〔但シ④ハ“落字”ト指示ス〕

p. 163. 願+〔力〕 ⑧㊁

慧=德（萬善同歸集所引大莊嚴論）

沙=娑 ⑤⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃?〕

諸+〔佛〕（十住毘婆沙論㊂㊪）〔但シ同論㊬ハ今ノ如シ〕

根=其（十住毘婆沙論）

p. 164. 〔云云〕大書ス ①②③④⑤⑥⑦⑨〔㊀㊁㊂㊃?〕

九=凡 ④

p. 165. 小=少（大智度論）

沙=娑 ⑤⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃?〕

p. 166. −〔往生要集卷上末終〕 ⑤⑦⑨， −〔末終〕 ①②⑧㊀㊁

p. 167. 卷　中

−〔往生要集卷中本　天台首楞嚴院沙門源信撰〕 ⑤⑦⑨， −〔本〕 ①， −〔本〕+〔盡第六別時念佛門〕細註 ②⑧㊀㊁

相+〔云云〕細註 ⑧⑨㊀， +〔云云〕大書ス ②

不能＝猶不（華嚴經）〔但シ止觀所引ハ今ノ如シ〕

p. 154. 分＋〔若此佛刹諸衆生，令住信心於法行，如彼最上大福聚，不及道心十六分〕

⑧㊁㊂（出生菩提心經）

等＝復 ⑦註〔但シコレ誤註ナラン〕

得＝復 ①③④〔但シ東洋文庫本①ハ墨デ冠＝“得”ト書ク〕

p. 155. 〔云云〕大書ス ①②③④⑤⑥⑦⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

無＝不（涅槃經南北二本）

前＝先（涅槃經南北二本）

p. 156. 是＋〔緣〕⑧㊁

一＋〔也〕⑦

〔云云〕大書ス ①②③④⑤⑥⑦⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

二＋〔也〕⑦

〔云云〕大書ス ①②③④⑤⑥⑦⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

p. 157. 〔云云〕大書ス ①②③④⑤⑥⑦⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

無＝有 ⑦再版本

p. 158. ―〔有〕（淨土十疑論）

淨＝國（淨土十疑論）

此＝並（淨土十疑論）

是＋〔則〕⑧㊁

無＋〔有〕（淨土十疑論）

p. 159. 菩＝善 ④

p. 160. 大如地＝如大地（丈夫論）〔但シ法苑珠林及ビ諸經要集㊇所引ハ今ノ如シ〕

又＝亦 ⑦　＝人 ㊂

甘＝其 ①③④

霑＝沾 ①②③④

p. 161. 婆沙＝婆娑 ⑤⑦初版本⑧　＝娑婆 ⑦再版本

於＝淤（十住毘婆沙論㊇）〔但シ同論㊂㊈ハ今ノ如シ〕

濟＝拔（十住毘婆沙論）

水＝人 ③

漂＝溺 ①②③④（十住毘婆沙論）〔但シ同論㊂㊈ハ今ノ如シ〕

句＋〔經〕⑧㊁㊂〔但シ東洋文庫本①ハ書入ル〕

間＝壞（如來祕密藏經）〔但シ止觀所引ハ今ノ如シ〕
壞＝懐 ①②⑤⑦⑧㊀㊁㊂㊃〔但シ如來祕密藏經並ニ止觀所引ハ共ニ今ノ如シ〕
物之＝之物 ㊂
惡＋〔惡〕⑤⑦⑨〔㊀㊃？〕（止觀）〔但シ②ハ墨デ書入ル〕
命＝者 ⑧㊁㊂
染＝淨 ㊂

p. 150. 道＋〔果〕（止觀所引）
切＋〔諸〕（如來祕密藏經）
不生＝生滅（如來祕密藏經）
生＝起（如來祕密藏經）（止觀所引）
－〔有〕（如來祕密藏經）
百＋〔千〕（如來祕密藏經）
主＝毛 ③④
如＋〔有人得〕（華嚴經）
〔得〕＋菩（華嚴經）
心＋〔善見藥王〕（華嚴經）

p. 151. 而＝若（大般若經）
卽＝普（大般若經）
折＝摧（大般若經）

p. 152. －〔楞〕（華嚴經）
轂＝轂 ①②③④〔同例以下略ス〕
不＝弗（華嚴經）
華＝花 ①②③④
瞻＝詹（華嚴經大正大藏經本）
華＝花 ①②③④
華＝花 ①②④

p. 153. 〔一切〕＋聲（華嚴經）
智＝心（華嚴經）
少＝小（華嚴經）
二＝三 ⑤⑥⑦㊀㊂
涯＝岸 ㊂　＝邊（華嚴經）〔但シ止觀所引ハ今ノ如シ〕

若＝著 ㊃

p. 142. 能持＝持諸 （華嚴經）

〔云云〕大書ス ①②③④⑥⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

p. 143. 此＝是 ⑤⑥⑦〔㊀㊃？〕〔但シ寶積經ハ今ノ如シ〕

學＝覺 ㊂

惔＝惔 （寶積經大正大藏經本）

p. 144. 沙＝娑 ⑤

經＋〔偈〕 ㊂

觀＝知 （維摩經）

諸＝於 （維摩經）

而＝亦 （中論[illegible]）〔但シ同論㊂ハ今ノ如シ〕

p. 145. 怖＝怪 （無上依經）

髭＝髦 ①②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（無上依經㊂[illegible]） ＝毛 （同經[illegible]）

p. 146. 念＝想 （佛藏經）

戒＝法 （佛藏經）

論＋〔第一〕 ㊂

人＋〔得〕 ⑧㊀

陜＝狹 （大智度論）

p. 147. 因緣所＝衆因緣 （中論）〔但シ止觀所引ハ今ノ如シ〕

空＝無 （中論）〔但シ止觀所引ハ今ノ如シ〕

名爲＝爲是 （中論）〔但シ止觀所引ハ今ノ如シ〕

是＝名 （止觀）〔但シ中論ハ今ノ如シ〕

〔云云〕大書ス ①②③④⑥⑦⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

檢＝撿 ②③㊃

p. 148. 千＝地 （寶積經）〔但シ止觀所引ハ今ノ如シ〕

六十＝二百 （寶積經）〔但シ止觀所引ハ今ノ如シ〕

－〔言〕 （止觀）

〔四〕＋向 （止觀）

p. 149. 揣＝搏 ⑦再版本（止觀）（寶積經）

盜＝奪 （如來祕密藏經）〔但シ止觀所引ハ今ノ如シ〕

不實事＝以不實 （如來祕密藏經）〔但シ止觀所引ハ今ノ如シ〕

二＋〔種〕 ⑧㊁〔但シ東洋文庫本①モ書入ル〕

定＋〔教化〕（大智度論）

p. 135. 大＝火 ㊃

冶＝治 ⑤⑨

鼓＝錮 （大智度論(元)(明)）〔但シ同論(麗)(宋)等ハ今ノ如シ〕

觀禪＝坐禪觀 （大智度論） ＝禪觀 （同論(宮)）

－〔已上〕 ⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂

婬欲卽是道＝貪欲是涅槃 （諸法無行經）〔但シ大智度論所引ハ今ノ如シ〕

無量諸佛道＝有無量佛道 （諸法無行經）〔但シ大智度論所引ハ今ノ如シ〕

婬怒癡及道＝貪欲瞋恚癡 （諸法無行經(麗)） ＝婬慾及瞋恚 （同經㊂(宮)）〔但シ大智度論所引ハ今ノ如シ〕

道＝遠 （諸法無行經）（大智度論）

地＋〔已上〕細註 ⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃

p. 136. 略抄＝抄略 ⑦再版本

世＝仙 （涅槃經北本及ビ南本）

性＝情 （大般若經）

徧＝遍 （大般若經大正大藏經本）

六＝四 ㊂ ＝五 ㊂イ

p. 137. 果＝菓 ①②③④⑨

p. 138. 生＋〔亦〕（涅槃經）

p. 139. 須＝願？ ③⑤頭註

慧＝惠 （優婆塞戒經）

小＝少 （優婆塞戒經）

小＝少 （優婆塞戒經）

讀＋〔誦〕 ⑦再版本

蜜＝密 ⑤

p. 140. 飮＝食 ⑦再版本

斷＋〔衆生〕（寶積經）

坐＝座 ⑦再版本

－〔欲〕 ⑦

p. 141. 準＝准 ①②③④⑨〔同例以下略ス〕

p. 122.　毀＝謗（淨土群疑論）

p. 123.　**大　文　第　四**

　－〔行〕（淨土論）

　就＋〔者〕（淨土論）

　－〔門〕①②⑤⑦㊀㊃

　〔見〕＋一（觀佛三昧經）

p. 124.　－〔一佛〕①②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃〔但シ東洋文庫本並＝帝國圖書館本①ハ共＝“一佛”ヲ書入ル〕

　此＝是（心地觀經）

　益＝樂（心地觀經）

p. 126.　導＝道 ⑤⑦⑧㊀㊁

　－〔門〕①②⑤⑦㊀㊃〔但シ東洋文庫本①ハ書入ル〕

　三＝五（十住毘婆沙論）

p. 128.　鈔＝抄 ①②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃〔同例以下略ス〕

　－〔具在別鈔〕㊂

p. 129.　門＋〔門〕⑦再版本

　周遍＝遍周（安樂集）〔但シ教行信證信卷末所引ハ今ノ如シ〕

　輪＝淪 ㊂（安樂集）〔但シ教行信證信卷末所引ハ今ノ如シ〕

　發＝此無上（淨土論註）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

　正＝卽（淨土論註）（安樂集）〔但シ安樂集一本ハ今ノ如シ〕

　－〔是〕（安樂集）〔但シ淨土論註一本ハ今ノ如シ〕

　受＝取 ⑧㊀（淨土論註）（安樂集）

　綱＝網 ③㊃

p. 130.　－〔總〕①②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃〔但シ東洋文庫本並＝帝國圖書館本①ハ共＝書入ル〕

p. 131.　衆＝諸 ⑦再版本

　滅＝減 ㊃

　氷＝冰 ①②⑤⑦〔同例以下略ス〕

　妄＝忘 ①②㊃

p. 132.　提＋〔心〕（莊嚴菩提心經）

p. 133.　云＝乍 ①

p. 134.　他＝池 ㊃

陀＋〔佛〕（淨土群疑論）

切＋〔諸〕（淨土群疑論）

p. 115. 七＝十（諸經要集）（法苑珠林）

p. 116. 徧＋〔在〕㊂

兜率＝天 ①②⑤⑥⑦⑨㊀㊃ ＝都率天 ⑧㊁㊂

悉＝內外亦 ㊂

－〔無內外〕①②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃

謂天＝兜率 ㊂イ

－〔已上凡立二界勝劣差別〕⑤⑦㊀

慼＋〔禪〕㊂

p. 117. 勸＝竝 ⑦再版本

〔云云〕大書ス ①②③④⑨

p. 118. 誠＝成 ①②㊃

如＝同 ㊂

－〔而〕⑦

難＝易？ ⑤頭註

p. 119. 西域＝彼土 ㊂

〔相傳云〕＋十 ㊂〔但シ東洋文庫本並ニ帝國圖書館本①ハ共ニ書入ル〕

經＝敎？ ⑤頭註

p. 120. 華＝花 ①②④

率＋〔耶〕㊂

此亦＝亦此 ㊂

性＝姓？ ⑤頭註

p. 121. 華＝花 ①②④

兜＝都 ①②④⑨

案＝按 ⑦

沙＝裟 ⑤

華＝花 ①②④

兜＝都 ①②④⑨

華＝花 ①②④

揚＝楊 ①②③④

乃＝及 ③④

p. 106.　氷＝冰 ⑥⑦〔同例以下略ス〕

氷＝如少（安樂集）

〔若〕＋經（安樂集）

境＋〔界〕（安樂集）

順違＝違順（安樂集）

返＝還 ⑤⑥⑦〔㊀㊃？〕

齊＝齋 ①②④⑨

p. 107.　一〔日〕⑦

p. 108.　佛＝尊（往生禮讃偈）

願共＝廻施（往生禮讃偈）

國＋〔往生要集上本終〕⑤⑦，　＋〔往生要集卷上本終〕⑨

p. 109.　**大　文　第　三**

〔往生要集卷上末　天台首楞嚴院沙門源信撰〕＋大 ⑤⑦，〔往生要集卷上末盡第四門半　天台首楞嚴院沙門源信撰〕＋大 ⑨

是以＝故（淨土十疑論）

p. 110.　聲＋〔王〕（迦才淨土論）

十＋〔方〕⑧㊁㊂（迦才淨土論）

沙＝娑 ㊂（迦才淨土論）

p. 111.　人＝者（灌頂經）

〔云云〕大書ス ①②③④⑥⑨

p. 112.　只＝秖（樂邦文類所引）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

一〔佛〕（樂邦文類所引）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

反＝返 ㊂㊃（樂邦文類所引）　＝還 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

五＝六（樂邦文類所引）〔但シ安樂集所引ハ今ノ如シ〕

人＋〔已上〕細註 ⑧㊁㊂

是＝此（阿彌陀經）

信＝衆生聞是說（阿彌陀經）

p. 113.　陀＋〔佛〕⑧㊁㊂（淨土十疑論）

p. 114.　跋＝跂 ④

齋＝賫 ①②③④

償＝賸 ④

p. 98. 〔同〕＋問 ⑧㊁

皆＝以 (十住毘婆沙論)

佛＋〔願共諸衆生往生安樂國〕 ㊂; 佛＝尊 (願往生禮讃偈)

p. 99. 提＝薩 ⑦再版本

p. 100. 果＝菓 ①②③④⑨

膊＝腨 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂

妙＝沙 ⑦再版本

煕＝熙 ⑥⑦再版本 ＝熈 ⑦初版本

p. 101. 衆＋〔聽受經法宣布道化〕 (雙觀經)

量＝上 (雙觀經)

容＋〔發〕 (雙觀經)

說＋〔意〕 (雙觀經)

p. 102. 響＝嚮 ④

ー〔已上〕 ⑤⑦⑨㊂〔㊀㊃?〕

〔已上〕＋此 ⑤⑥⑦⑨㊀

全＝金 ①②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃(願往生禮讃偈)

佛＝尊 (願往生禮讃偈)

p. 103. 佛＝尊 (願往生禮讃偈)

華＝花 ①②③④

供＝俱 ⑤⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃?〕

p. 104. 各＋〔相〕 ⑧㊁㊂

幕＝慕 ① ＝慕 ④

大＝天 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂

覺＝學 ④

土＝諸 (十住毘婆沙論)

時＝昧 ⑤⑥⑦⑨㊀㊂㊃

p. 105. 陣＝陳 ⑤⑦㊀㊂

果＝菓 ①②③④⑨

許＝計 ③⑤⑥⑦⑨

p. 84. 絞＝交（淨土論）

皆＝能（淨土論）

生彼＝往生（淨土論）

朝＝[illegible] ④

p. 85. 然＝爾 ⑧㊁

－〔之〕㊂

憙＝喜 ⑥⑦⑧〔㊀㊁㊂㊃？〕〔同例以下略ス〕

語＝話 ㊂イ

p. 86. 功＋〔德〕③イ④イ〔但シ東洋文庫本並＝帝國圖書館本①ハ“德”ヲ右傍＝墨デ書入ル〕

說＝脫 ⑦⑨

惡＝三（十住毘婆沙論）

p. 87. 弟＝第 ⑤

生＝處 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊃

途＝塗（心地觀經）

p. 88. 蠉＝蜎 ⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃（平等覺經）

蠕＝蠕 ①　＝蝡 ⑥⑦初版本⑧⑨　＝輭 ⑦再版本

p. 89. 樂＝生 ⑦再版本

p. 91. 意＝偈 ⑧㊁

日＋〔至〕（文殊般涅槃經）

p. 92. 誦＋〔文殊師利〕（文殊般涅槃經）

利＝饒（寶積經）

－〔經〕⑧㊁

p. 93. 恒＝殑伽河（十輪經）

沙＋〔等諸〕（十輪經）

養＋〔寶積經意〕細註 ⑧㊁，　＋〔已上〕細註 ㊂

p. 95. 勢至＝大勢（迦才淨土論）

p. 96. 遍＝徧 ①②③④⑥⑦初版本⑨

挍＝挾 ④　＝校 ⑦

－〔雖加恒水〕⑦

p. 97. 相＋〔見遙相〕⑧㊁〔但シ帝國圖書館本①ハ書入ル〕，　＋〔見〕㊂

－〔河〕㊂

彼＋〔土〕⑧㊁

五＋〔神〕㊂

－〔所〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃

p. 76. 焚＝樊 ⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃

－〔多依〕？ ⑤頭註

等＋〔意〕？ ⑤頭註

身＝心（十住毘婆沙論）

－〔往生要集卷上本終〕①②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃， ＝〔往生要集卷一上本終〕③

p. 77. －〔往生要集卷上末　盡第四門半　天台首楞嚴院沙門源信撰〕①②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃， －〔盡第四門半〕⑥

坦＝怛 ④〔同例以下略ス〕

床＝牀 ⑤⑥⑦㊀㊃〔同例以下略ス〕

p. 78. 妓＝伎 ②⑤⑥⑦⑧⑨等〔同例以下略ス〕

琥珀＝虎魄 ①②④〔同例以下略ス〕

硨磲＝車渠 ①④ ＝車栗 ②〔同例以下略ス〕

飲＝飯 ⑦

善根＝根善 ⑦再版本⑨； 根＋〔出稱讃淨土經〕⑧㊁㊂

p. 79. 蜜＝密 ③④⑧

鶴＝鸖 ①

p. 80. 曲＋〔直〕㊂

次＝吹 ⑤⑦⑧⑨〔㊀㊁㊂㊃？〕

華＝花 ②〔同例以下略ス〕

果＝菓 ①②③④⑨

果＝菓 ①②③④⑨㊂〔同例以下略ス〕

p. 81. 軟＝輭 ⑥⑦〔同例以下略ス〕

林＝相 ㊂

p. 82. 類＝頻 ④

美＝味 ㊂

甛＝甜 ⑥⑦⑨

p. 83. 之＋〔歟〕⑤頭註

樓＝棲 ⑦再版本

p. 67.　貪＝但（大莊嚴論經）
觀察＝繫念（大莊嚴論經）
斷除＝除破（大莊嚴論經）
習＝執（大莊嚴論經）
捉＝投 ③④
散＋〔專精於境界〕（大莊嚴論經）
褢＝裹 ①⑦
舍＝倉（寶積經）

p. 68.　堅＝賢 ⑤⑦
汙＝汚（寶積經（宮））〔但シ同經㊂（宮）ハ今ノ如シ〕
膈＝鬲（寶積經）
熱＝熱 ③④⑨
腹＝腸 ⑤⑥⑦⑨㊂（寶積經㊂）〔但シ同經（宮）ハ今ノ如シ〕
臭穢＝穢臭 ⑦
廓＝郭（寶積經）
枉＝莊（寶積經）

p. 70.　**大　文　第　二**

鈔＝抄 ①②⑤⑥⑦⑧⑨

p. 71.　晧＝皎 ⑤⑥⑦⑧㊀〔㊁㊂？〕　＝皓 ⑨
－〔依〕？ ⑤頭註
蓮＋〔花〕 ㊂

p. 72.　越＝超 ㊂
邊鄙＝鄙邊 ⑦再版本

p. 73.　－〔雲〕 ①③④⑨
華＝花 ②
池＝地 ㊃

p. 74.　經＝教 ①②③④⑨
－〔多依〕？ ⑤頭註
－〔觀〕 ⑦

p. 75.　仞＝仭 ①②③④　＝仭 ⑦⑨

逕＝經 ⑤⑥⑦⑧（龍樹偈）

漂＝濎 （龍樹偈）〔但シ同偈㊖ハ今ノ如シ〕

p. 61. 抄＋〔之〕 ㊂

有爲諸法＝所謂有爲 （付法藏因緣傳）

親近＝近親 ⑦再版本

呵＝奇 ①

－〔無我〕 ②㊀㊃

入＝人 ①

虚＝唐 ㊂（寶積經）

p. 62. 屍＝尸 （寶積經）

欲＝著 （寶積經）

p. 63. －〔祇園寺無常堂……況復〕四十一字 ②⑤⑦⑨㊀㊃； 乘＝垂 ①⑧㊁㊂（祇園圖經. cf. 大正 45 卷 893 頁下）

夢＝無 ⑦再版本

波＝婆 （西域記）

蘆＝盧 ⑤⑦⑧㊁ ＝廬 ⑥（西域記）

p. 64. 檀＝壇 （西域記）

逮＝達 （西域記）

接＝按 ⑤頭註（西域記）

反＝返 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊃〔但シ西域記ハ今ノ如シ〕

遂依＝既得 （西域記）

求一＝行訪 （西域記）

貽＝賂 （西域記）

待＝持 （西域記）

若＝苦 （西域記）

恩＝德 ㊂イ

p. 65. 危＝厄 ②⑧㊀㊁㊂㊃（西域記㊛㊊） ＝阨 （同記㊕㊖）

稚＝穉 ⑤⑦㊀㊂㊃ ＝穉 ⑥

常＝恒 （唯識論）

p. 66. 苦＝菩 ⑦再版本

欲＋〔心〕 ⑧㊁

歟＝觀 ⑦

苦＝共 ②㊀㊂㊃(寶積經)

p. 52. 不＝無 (大集經)

p. 53. 所受諸＝積聚共 (雜阿含經)

爪＝瓜 ⑤⑦⑧㊀㊁

經＋〔偈〕②⑨

p. 54. 此＝斯 (法華經)

今＝亦 ⑦

俗＝浴 ①⑤⑦

銅＝洞 ①②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

厭＋〔離〕⑧㊁

p. 55. 蔽＝弊 ①③④

p. 56. 上＝士 (龍樹菩薩爲禪陀迦王說法要偈)〔但シ同偈(宮)ハ今ノ如シ〕

p. 57. ―〔不放逸〕②⑤⑦⑧㊀㊁㊂㊃(龍樹偈)

穩＝隱 ①⑤⑥⑦⑧(龍樹偈)〔同例以下略ス〕

齊＝齋 ⑤⑥⑦⑨(龍樹偈)〔同例以下略ス〕

p. 58. 墮＝墜 (龍樹偈)

―〔等〕(龍樹偈)

剌剝＝剝剌 ⑧⑨㊁㊂(龍樹偈)

p. 59. 以＝已 (龍樹偈(元))〔但シ同偈㊁(宮)ハ今ノ如シ〕

逕＝經 (龍樹偈)〔同例以下略ス〕

矛＝鉾 (龍樹偈(元))〔但シ同偈㊂(宮)ハ今ノ如シ〕

鑽＝攢 (龍樹偈㊂(宮))　＝攥 (同偈(元))

鼻＝毘 ㊂(龍樹偈(元))〔但シ同偈㊂(宮)ハ今ノ如シ〕

―〔地〕(龍樹偈)

―〔其〕⑧㊁(龍樹偈)

撻＝撻 ①④　＝韃 ⑦再版本〔但シ龍樹偈ハ今ノ如シ〕

被＝致 ㊂(龍樹偈)〔但シ帝國圖書館本①モ書入ル〕

p. 60. 涼＝冷 ㊂

果＝菓 ①②③④⑨

―〔淨〕②⑧⑨㊁(龍樹偈)

者＝住 (涅槃經南本)〔但シ同經北本ハ今ノ如シ〕

渚＝流 ㊂イ(罪業應報經)

高＝豪 (罪業應報經)

速＝復 (罪業應報經)

當念＝今當 ⑧㊁ ＝念當 (罪業應報經)

p. 47. 他＝地 ①②⑥⑨㊀㊂(法句譬喩經)

止＝之 (法句譬喩經)

賢＝胥 ⑤⑦⑧〔㊁㊂？〕

非＋〔或出家人，智解溢胸，或精進滅火而不悟無常，諺云可憐無丘媚，精進無道心此之謂也〕(止觀)

是＝此 (止觀)

燃＋〔白駒烏兎日夜奔競〕(止觀)

p. 48. 取意＝略抄 ㊂

華＝花 ②③④(六波羅蜜經)

著＝者 ④

p. 49. 數＋〔數〕 ②㊃

車＝花 (六波羅蜜經㊧㊕㊖㊗)〔但シ同經㊐並ニ仁和寺本ハ今ノ如シ〕

澁＝惡 (六波羅蜜經)

甲＝介 ①②⑨㊀㊂㊃(六波羅蜜經)

卒＝亦 (六波羅蜜經)

悲＝咄 (六波羅蜜經)

悲＝愍 ⑧㊁(六波羅蜜經)

救＝濟 (六波羅蜜經)

涹＝沃 (六波羅蜜經)

作＝有 (六波羅蜜經)

敢＝能 (六波羅蜜經)

經＋〔意〕？ ⑤頭註

p. 50. 一＋〔已上〕細註 ㊂

伽＋〔論〕 ⑤頭註

p. 51. 寶＝保 ㊂イ〔但シ帝國圖書館本①モ書入ル〕

而＝如 ②⑧⑨㊁㊂㊃(增一阿含經)

鐠＝鏷 (大論)

逕＝經 ⑤⑥⑦⑧等(大論)〔同例以下略ス〕

大小＝多少 (止觀)

p. 42. ―〔取〕 ②⑤⑥⑦⑨㊀㊃

―〔體〕 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

身＝上 ①　＝體 ②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

塚＝家 ①

爛＝瀾 ⑦

齰＝摣 ②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃〔但シ般若經ハ今ノ如シ〕〔同例以下略ス〕

曝＝暴 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁

―〔見〕？ ⑤頭註

等＋〔意〕？ ⑤頭註

p. 43. 屎＝尿 (止觀大正大藏經本)〔但シ同古刊本ハ今ノ如シ〕

繪＝繪 ⑦

彩＝綵 (止觀)

見＝視 (止觀)

歍＝歍 ④　＝欨 ⑨　＝嗚 (止觀)〔但シ止觀補註ハ今ノ如ク訂ス〕

湯＋〔已上〕細註 ⑧㊁

p. 45. 外＝行 ㊂，―〔外〕(寶積經)

臥＋〔各々長時〕(寶積經)

諸餘＝餘諸有 ⑧㊁

日＝曰 ④

此＝是 (出曜經)

卽＝則 (出曜經)

減少＝隨減 (出曜經)

小＝少 (出曜經)

至＝就 (摩耶經)

亦如是＝疾於是 (摩耶經麗)　＝疾過是 (同經㊂宮)

p. 46. 大經＝涅槃 ㊂

有終盡＝當有盡 (涅槃經北本)〔但シ同經南本ハ今ノ如シ〕

有必＝必有 ②⑨㊀㊃ (涅槃經)

項＝頸 ㊂イ

肩＝膊 (涅槃經北本)〔但シ同經南本ハ今ノ如シ〕〔同例以下略ス〕

腕＝脘 ㊂〔同例以下略ス〕

經＝論 ③④；　經＋〔意〕 ⑤頭註㊂

帀＝匝 ③⑤⑥⑦⑧⑨(寶積經)〔同例以下略ス〕

宍＝完 ①③④　＝肉 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃(寶積經)〔今ハ②⑨ニ從フ〕

如＝若 (寶積經)

熟＝爇 ①　＝熱 ③④⑨

宍＝宛 ①②③④　＝肉⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃　＝穴 (寶積經)〔但シ今訂正ス〕

－〔碎〕 ②⑨㊃

p. 39.　殨＝潰 ⑤⑥⑦⑧(寶積經麗)　＝憒 ③〔但シ寶積經㊂宮ハ今ノ如シ〕

六＋〔意〕 ⑤頭註

中＋〔間〕 ⑧㊁

十＋〔九〕 (次第禪門)

p. 40.　等＋〔意〕 ⑤頭註

二＝一 (寶積經 57 卷)〔但シ同經 55 卷ハ今ノ如シ〕

舐＝食 (寶積經 57 卷)〔但シ同經 55 卷ハ今ノ如シ〕

二＝一 (寶積經 57 卷)〔但シ同經 55 卷ハ今ノ如シ〕

－〔虫〕 ①㊂

－〔二名遍擲〕 ⑦

p. 41.　〔復有〕＋五 (寶積經)

－〔百〕 (寶積經 57 卷)〔但シ同經 55 卷ハ今ノ如シ〕

熟＝熱 ④⑨

頭＝項 (寶積經 57 卷)〔但シ同經 55 卷ハ今ノ如シ〕

〔復〕＋心 (寶積經)

－〔五〕 ②⑧㊁

七＋〔兩卷之意〕 ⑤頭註

抄＋〔之〕 ㊂

說＋〔云〕 ㊂

惱＋〔迭相食噉〕 (僧伽吒經)

－〔又〕 ①⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂

論＋〔意〕 ⑤頭註

竭＝槁（瑜伽論）

趣＝赴 ㊂　＝起 ①

枤＋〔逆〕 ②⑧⑨㊀㊁㊂㊃

或＋〔逆〕 ①

p. 35. 論＋〔意〕 ⑤頭註

月年＝年月？ ⑤頭註

姤＋〔之〕 ㊂

p. 36. 性之屬＝族之類（六波羅蜜經）

或＋〔以〕（六波羅蜜經）

鉤＋〔鉤〕（六波羅蜜經）

－〔常〕 ⑧㊁

棰＝捶 ①②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（法華經）

中＋〔而〕 ②⑧⑨㊁（六波羅蜜經）

宛＝踠 ⑥⑦再版本⑨（法華經(宋)）〔但シ同經他本ハ今ノ如シ〕

－〔或復有如一毛百分……十千由旬〕二十字 ②⑤⑦⑨㊁㊃〔但シ大集經＝ハ其身細小猶如微塵十分之一有如微塵乃至如棗有一由旬乃至百千萬由旬等トアリ〕

一時頃或七時頃或有一劫乃至百千萬億劫＝一中劫 ②⑤⑦⑨㊁㊃；　或有一劫＝或經一劫 ⑧㊁㊂〔但シ大集經＝ハ如一念頃至七念頃或有一劫至千萬劫頃トアリ〕；　〔或經一中劫乃至百千萬億劫〕＋受 ⑧㊁㊂

p. 37. －〔已上諸文散在經論〕 ②㊀㊃

〔二〕＋支 ㊀

州＝洲 ⑦

章＝慞？ ⑤頭註

日＝曰 ⑤⑥⑦⑧⑨㊁

〔不可勝說〕ノ四字本文トス ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃

淨＋〔相〕 ⑧㊀㊁

拄＝柱 ②〔同例以下略ス〕

踹＝腨 ⑤⑥⑦　＝腨（涅槃經(麗)）〔同例以下略ス〕

p. 38. 髀＝髀（涅槃經）〔同例以下略ス〕

勒＝肋 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（涅槃經）　＝勒 ②　＝勒 ③⑨

一〔或身長一尺……大集經〕二十二字 ②⑤⑦⑨㊀㊃； 或＋〔如〕⑧㊁㊂； 踰＝瑜

⑧㊁㊂〔但シ大集經ニハ或長一尺或如人等或百由旬或如雪山トアリ〕

p. 32. 兩＝雨 ④

財＋〔故〕（正法念經）

食＝貪 ㊂

嘔＝臨 ④ ＝歐（正法念經㊪）

人＋〔誑惑其夫〕（正法念經）

不與夫子＝心懷慳嫉憎惡其子而不施與（正法念經）

一〔者〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

障＝憧 ⑦⑧（正法念經） ＝章 ⑨㊀

p. 33. 沽＝酤（正法念經）

悕＝怖 ⑦ ＝希（正法念經）

若＝昔？ ⑤頭註

一〔而〕⑧㊁

小＝少 ㊂（正法念經）

千＝十（正法念經）

渚＋〔以惡業故〕（正法念經）

賣＝買 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃ ＝價（正法念經）

火屍＝屍火 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃（正法念經）

取＝禁（正法念經）

食＝貪 ㊂

p. 34. 〔餓〕＋鬼 ②⑨㊀㊃

押＝壓（正法念經㊪）

經＋〔意〕？ ⑤頭註

〔或〕＋復 ②⑤⑥⑦⑨㊀㊂㊃

燒＋〔其身〕（六波羅蜜經）

蜜＝密 ③⑤⑦⑧㊁㊂㊃

經＋〔意〕⑤頭註

〔或〕＋復 ㊂

沒＝投 ②⑤頭註⑦⑧⑨㊁㊂

濃＝膿 ⑤頭註⑦再版本

生＝出 ②⑤⑥⑦⑨㊀㊂㊃〔但シ正法念經ハ今ノ如シ〕

p. 28. 合已復執＝爲復更執（正法念經）

受＋〔大〕②⑧⑨㊀㊁㊂㊃（正法念經）

決斷＝斷截（正法念經）〔但シ同經ニハ斷截彼河トアリ〕

用＝困 ⑧㊁㊂

之＋〔河〕？ ⑤頭註

經＋〔意〕？ ⑤頭註

置＝有（瑜伽論）

出＋〔爲〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃〔但シ瑜伽論ハ今ノ如シ〕

－〔之〕㊂

有＋〔死〕②⑧⑨㊁（瑜伽論）； 泥＝涅 ⑨

逐＝遂 ②⑨㊀㊂（瑜伽論）

黧＝梨 ① ＝薹（瑜伽論）

攎＝萓 ①②③④⑨

胎＝脂 ⑤頭註

柆＝粒 ㊀ ＝拉 ㊃（瑜伽論）〔但シ同論(宋)ハ今ノ如シ〕 ＝杜？⑧㊁〔同例以下略ス〕

廻＝回 ⑤⑥⑦⑧⑨〔同例以下略ス〕

p. 30. 觜＝嘴 ①②④（瑜伽論）

烏＝鳥 ⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊂〔但シ瑜伽論ハ今ノ如シ〕

揬＝唂（瑜伽論㊂(宮)）〔但シ同論(元)ハ今ノ如シ〕

猛＝熢 ①③④

涌＝浦（瑜伽論）

兩＝南 ⑤⑦⑧㊁

烈＝列（瑜伽論）

鈷＝鉗 ⑦（瑜伽論）〔但シ同論(宮)ハ鈷，(明)ハ今ノ如シ〕〔⑥ハ以鐵鉗鉗口合開トス〕

p. 31. －〔惡業〕①②⑤⑥⑦初版本⑧㊀㊁㊂㊃（瑜伽論）

伽＝迦 ⑤⑥⑦

有＋〔此〕㊂

爲＝名 ⑧㊁㊂

六＋〔別處〕⑧㊁

追＋〔廣〕⑧㊀㊁㊂

獄＝猛（觀佛三昧經）

－〔佛〕②

經＋〔佛〕②

略抄＝意？⑤頭註

三熱＝燒熱極燒熱遍極燒然（瑜伽論）

號＝啼⑤⑥⑦⑧㊁㊂〔但シ瑜伽論ハ今ノ如シ〕

三熱＝燒然極燒然遍極燒然猛焰（瑜伽論）

p.　25.　揃＝剪（瑜伽論[illegible]）〔但シ同論㊂㊪ハ今ノ如シ〕

熱＝勢④

〔釘〕＋而（瑜伽論）

裓＝襵（瑜伽論）

熱＋〔燒〕（瑜伽論）

鉆鉆＝鉗鉗⑤⑥⑦㊀㊂㊃（瑜加論）

三熱＝燒然極燒然遍極燒然大熱（瑜伽論）

－〔也〕②⑧㊁

－〔前〕②⑨㊂㊃

極＋〔大〕②⑧⑨㊀㊁㊂㊃（正法念經）

p.　26.　堪＝憶①

－〔既〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃（正法念經）

〔若〕＋有②㊂（正法念經）

略抄＝意？⑤頭註

〔依〕＋觀②㊀㊂㊃

經＋〔意〕？⑤頭註

p.　27.　繞＝執（正法念經）

鑊＝鑊④

此＝是⑤⑥⑦㊀㊂㊃

用＋〔之〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

－〔中〕㊂

揣＝摶（正法念經）

鑶＝鎘①②③④

亘＋〔度〕（正法念經）

〔旣聞啼哭〕＋十 （正法念經）

魄＝怕 ⑤頭註（正法念經㊂宮⃝）〔但シ同經宋⃝ハ今ノ如シ〕

薪草＝草薪？ ⑤頭註〔但シ正法念經ハ今ノ如シ〕

〔云云〕大書ス ②㊃

岸＝崖 （正法念經）

險＝嶮 （正法念經）

經＋〔取意〕 ㊂〔同例以下略ス〕

抄＋〔之〕 ⑧㊁；　略抄＝意？ ⑤頭註

p.　21.　夷＋〔之〕 ㊂

抄＋〔之〕 ㊂；　略抄＝意？ ⑤頭註〔同例以下略ス〕

p.　22.　界＝獄 ⑤頭註（正法念經㊂宮⃝）

月＋〔星〕②⑧⑨㊁㊂㊃（正法念經）

－〔已上〕 ②⑤⑥⑦⑧㊁〔但シ⑦再販本ハ今ノ如シ〕

－〔增〕 ⑤頭註（正法念經）

健＝揵 （正法念經）

羂＝羅 ①②⑨㊂㊃，　－〔羂〕 ㊀

海＋〔已上〕細註 ㊂

－〔如〕 ①

p.　23.　逕＝經 ⑤⑥⑦㊂（正法念經）〔但シ同經宮⃝ハ今ノ如シ〕

〔已上〕＋正 ⑤⑥⑦〔㊀㊃？〕

略抄＝意？ ⑤頭註

萬＝千 （觀佛三昧經）

身＋〔長〕 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃，　＋〔廣長〕（觀佛三昧經）

十＝千 （觀佛三昧經㊂）〔但シ同經宋⃝等ハ今ノ如シ〕

－〔幢〕 ⑤⑥⑦⑨㊀㊃

踊＝涌 ⑨㊃（觀佛三昧經元⃝明⃝）

八十＝十八 ⑧㊁

涌＝踊 ①⑤⑥⑦⑧⑨（觀佛三昧經宋⃝）

間＝門 ⑦

蜂＝蟒 ㊂（觀佛三昧經）

p.　24.　有＝又？ ⑤頭註

如燒草木薪＝猶如燒草木（正法念經）；　薪＋〔云云〕細註 ㊂

p.　16.　熱＝燒 ⑦再版本　＝熱炎（正法念經）

－〔二〕②⑧㊀㊁㊂㊃（正法念經）

－〔也〕㊂

略抄＝意？ ⑤頭註

投＝捉 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

熬＝鏊 ⑤⑥⑦⑧⑨㊁㊂

薄＝㷟？ ⑤頭註（瑜伽論）〔西來寺本②ハ訂ス〕

熱＋〔鐵〕⑧㊁

置＋〔熱〕⑧㊁

論＋〔意〕？ ⑤頭註

p.　17.　霜雪＝雪霜 ⑧㊁

經＋〔意〕？ ⑤頭註

他化＝化他 ①

爲＋〔一〕⑤頭註⑧㊁

中＋〔此焦熱地獄〕？ ⑤頭註

汝々疾々速々來々＝汝疾速來汝疾速來 ②　＝汝速疾來汝速疾來 ⑤⑥⑦⑧⑨（正法念經）；　速疾＝疾速 ㊂〔同例以下略ス〕

p.　18.　火＝大 ⑧㊁㊂；　－〔火〕②⑤⑥⑦⑨㊀㊃

如＋〔車〕㊂

是＋〔無有年數〕（正法念經）

經＋〔意〕？ ⑤頭註

大論瑜伽論＝瑜伽大論 ⑧㊁㊂；　論＋〔意〕？ ⑤頭註

p.　19.　具＝重？ ⑤頭註

肱＝肚 ⑤⑦㊀㊃（正法念經）〔⑤頭註ハ肱ヲ是トナス〕〔同例以下略ス〕

恾＝忙 ⑤⑥⑧⑨㊁㊂㊃〔同例以下略ス〕

炎＝焰（正法念經）〔同例以下略ス〕

－〔奄〕⑤⑦；　－〔悉〕⑥

堅繫罪人咽＝執惡業人（正法念經）

魔＋〔羅〕㊂（正法念經）

p.　20.　魄＝怕 ⑤頭註（正法念經㊂(宮)）〔但シ同經(宮)ハ今ノ如シ〕

p. 12. 活＋〔以本不善悪業因故於彼炎人〕（正法念經）

岸＋〔下未至地在於空中〕（正法念經）

鳥＝烏 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃〔但シ正法念經ハ今ノ如シ〕； 烏＋〔分々擗斫，令如芥子，尋復還合，然後到地，既到地已，彼地復有〕（正法念經．cf．⑤顧註）

燃＝然 ⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊃〔同例以下略ス〕

火＝大 ②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

身＋〔分〕 ②㊀

熱＝熱 ①②③⑤⑥⑦⑧等

一〔之〕 ②

小＝少 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊃〔但シ大論ハ今ノ如シ〕

p. 13. 論＋〔意〕？ ⑤顧註

熬＝契 ② ＝鏊 ⑤⑦⑧⑨㊁㊂ ＝鏾 ⑥（瑜伽論㊂）〔但シ同論㊂㊃ハ今ノ如シ〕

一〔論〕 ⑧㊁㊂〔同例以下略ス〕

論＋〔意〕？ ⑤顧註

經＋〔意〕？ ⑤顧註

都卒＝覩率 ② ＝兜率 ⑤⑥⑦⑧ ＝覩卒 ⑨〔同例以下略ス〕

其＋〔壽四千〕 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

卒＋〔天〕 ⑧㊁㊂

p. 14. 而＝其 ②㊃

末＝未 ②⑨

飲＝飯 ⑤⑥⑦⑧〔㊁㊂？〕

拶＝弄 ⑤顧註⑦再版本（正法念經） ＝拵 ②⑧㊀㊁㊂㊃； 之＝人 ⑥

恥＋〔之〕 ②㊃； 恥＝耻 ①③⑥

投＝捉 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃（正法念經）

之＝足 ⑧㊁

與＝受？ ⑤顧註〔但シ正法念經ハ今ノ如シ〕

責＝嘖 ①②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃〔同例以下略ス〕

p. 15. 法＋〔也〕 ⑦

經＋意？ ⑤顧註

此＋〔地〕 ⑧㊁

卒＋〔前〕 ②⑨㊀㊃

〔復〕＋等 ㊀

－〔別〕 ②㊃

責＝嘖 ②㊀

－〔族眷〕 ㊀㊂；　－〔族〕 ②⑧㊁㊃

－〔屬〕 ②⑧㊁㊃

例應＝應例 ㊂

p.　8.　岸＝崖 （正法念經）〔但シ同經㊂㊪ハ今ノ如シ〕

分＝別 ㊀

岸＝崖 （正法念經）〔但シ同經㊂㊪ハ今ノ如シ〕〔同例以下略ス〕

－〔中〕 ②⑨㊃

－〔名畏鷲處〕 ㊂；　鷲＝鶖 ②

折＝打 ⑧⑨㊁（正法念經）

－〔中〕 ㊂

略抄＝意？ ⑤頭註

p.　9.　山＝兩 ②⑤⑦⑧⑨㊁㊂

驅＋〔罪人〕 ㊃

－〔論〕 ②⑧㊁

論＋〔等〕 ㊀；　論＋〔意〕？ ⑤頭註

掛＝挂 ⑤⑥⑦㊂

江＝河 ②⑧⑤頭註㊁㊂〔但シ西來寺本②ハ江トアリ，河ト訂ス〕

燃＝然 ⑤⑥⑦⑧㊁〔但シ⑦再販本ハ今ノ如シ〕

江＝河 ②⑤⑦⑧⑨㊁㊂

－〔有〕 ②㊂

p.　10.　政＝正 ③⑤⑥⑦⑧㊁

至＋〔廣說〕 ②⑤⑥⑦⑧㊁㊂㊃

經＋〔意〕？ ⑤頭註㊀

p.　11.　此＋〔地〕 ②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

下＋〔熱炎鐵鉢〕 （正法念經）〔⑤頭註ハ以熱鐵鉢ノ四字トス〕

熱＝熟 ①②⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（正法念經）

腸＝腹 ㊂

惱＋〔處〕 ⑧㊁㊂

卷　　上

p.　1.　－〔本〕①②⑧(寛)㊁㊂㊃

－〔盡第四門半〕⑤⑥⑦⑧㊁㊂

惟＝是 ㊂

大　文　第　一

p.　3.　獵＝猎 ①

p.　4.　揣＝摶（正法念經）

活＋〔可還等活〕㊀

p.　5.　嘴＝觜 ⑤⑥⑦⑨㊂〔同例以下略ス〕　＝嘴（正法念經）

虫＝蟲 ⑤⑥⑦⑧〔同例以下略ス〕　＝虫（正法念經）

宍 ①②④⑤(寛)㊃　＝髊 ⑤⑥⑦⑨　＝肉 ⑧㊁

如＋〔如〕①〔衍字〕

復＋〔有〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃

雨＝兩（正法念經）

生＋〔之〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊁㊂；　－〔生〕①

熱＝爇 ①　＝熱 ②⑤⑥⑦⑧㊁㊂　＝煮（正法念經）〔但シ正法念經ニハ煎煮極熱猶如熟豆トアリ〕〔同例以下略ス〕

食＋〔之〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊁㊂

－〔者〕①

p.　6.　－〔大火炎〕②⑤⑦⑧（正法念經）

唵＝掩 ⑤頭註⑥（正法念經(寛)(宋)(明)）〔但シ同經(元)(宮)ハ今ノ如シ〕

岸＝崖（正法念經）

生＋〔之〕②⑤⑥⑦⑧㊁㊂

法＋〔念〕②⑤⑥⑦⑧⑨㊁㊂

經＋〔意〕？ ⑤頭註

－〔自餘九處經中不說〕？ ⑤頭註〔但シ正法念經ニハ說ナシ〕

〔黑〕＋熱（智度論）

p.　7.　論＋〔意〕？ ⑤頭註

經＋〔意〕？ ⑤頭註

第二　諸本並ニ引用原典校合

大正新脩大藏經本（六七頁下）

言前所說功德等者。如來大慈大悲說法無礙。靜慮一念能現無邊類身。天眼天耳他心智無失念。無漏離垢。得一切法自在平等功德威神也。

等である。又特に句讀點についての一例を擧げれば、第九大文に諸行往生の諸經列擧中、それ等經典間の切り方が各本區々となつてゐるが如きである。句讀點を附してゐない本については不明であるけれども、附けてゐる本のみについて比べてみても、或は隨求（佛說隨求即得大自在陀羅尼神呪經）と尊勝（佛頂尊勝陀羅尼經）とを一經とし、或は不空羂索（不空羂索神變眞言經）と光明（不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光眞言）と阿彌陀（阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經）とを一經とし、又は光明と阿彌陀とを一經として句點を附して居る。而も是れ等の經典は第三大文の初めにも亦列擧されてゐるのである。その他、偈頌の句點を誤つたり、引文と僧都の本文とを混同したり、隨分亂暴なものがある。將來次第に是れ等の誤謬の減じて行くことを念願とする。

智。無失念。無漏離垢。得一切法。自在平等。等功德威神也。

と句讀點を附し訓點を加ふ可き文であつて、各德目の間に假名を用ひて連絡して訓む可き文章ではないのである。しかるに從來の諸本は、夫々種々に假名を送り苦心して訓んでゐるけれども、何れも皆誤訓たるを免れない。左に參考のために元祿本以外の諸本の訓點を示せば、

貞享元年本（卷中末、三十一丁左）

言前所說功德等者如來大慈大悲說法無礙靜慮一念能現無邊類身天眼天耳他心智无失念无漏離垢得一切法自在平等等功德威神也

淨土宗全書本（七四頁上）

言前所說功德等者如來大慈大悲說法無礙靜慮一念能現無邊類身天眼天耳他心智無失念無漏離垢得一切法自在平等等功德威神也

惠心僧都全集本（大日本佛敎全書本九三頁下）

言前所說功德等者。如來大慈大悲。說法無礙。靜慮一念。能現無邊類身。天眼天耳他心智無失念。無漏離垢。得一切法自在平等。等功德威神也。

昭和新集 國譯大藏經本（一三九頁）〔高僧各著全集本一七一頁〕

前の所說の功德等と言ふは、如來は大慈大悲もて說法無礙にして、靜慮の一念に能く無邊類の身を現ず。天眼天耳他心智にして失念無し。無漏離垢にして一切法自在平等を得る等の功德威神なり。

昭和校訂 眞宗七祖聖敎本（六四八頁）

言前所說功德等者。如來大慈大悲。說法無礙。靜慮一念。能現無邊類身。天眼天耳他心智無失念。無漏離垢。得一切法。自在平等等功德威神也。

ども、一旦訓點を附けるか、又は延書きする段になると、何れかに決定してしまはなければならぬ無理が生ずるのである。往生要集全卷を讀んでみると、それが必ずしも僧都の化他行のためのみの著作であつたとも考へられず、それかと云つて僧都自行一方の著作であつたとは素より信ぜられぬ。そこで今は此の兩方の意味を含める意味で假りに「廢忘に備へん」として置いたのである。これは一例に過ぎぬが、往生要集全卷に亙つて斯ういふ難關が必ずしも尠くなかつたのである。殊に數多い引文に至つては、意引又は抄引のものが比較的多く、それ等の各々を現在に譯してよいのか、過去に譯す可きであるのか又は未來か、或は佛語か菩薩語か又は弟子語か、更に命令語なのか可能語なのか、單に動詞一語の延書きといふ段になつても隨分面倒なことが多かつた。幸ひそれ等の引文は大抵引用經論の原文に當つて、その前後の關係から解決を求め得たがために何とか切り拔けることが出來たけれども、自然從來の訓點と相違することにもなつたのである。尤も今は躁急の試譯であり、したがつて誤譯も亦可なり多いことと思ふが、それ等はしだいに將來の機會に於て改めて行きたいと考へて居る。しかし左の一文の如きは、確かに從來諸本の誤訓を今回改め得たと自信をもつて言ひ得るものである。卽ち底本元祿本に於ける

言前所說功德等者如來大慈大悲說法無礙靜慮一念能現無邊類身天眼天耳他心智無失念無漏離垢得一切法自在平等々功德威神也　（卷四、二十丁右）

の一節は、上に大般若經五百六十八卷から引文した文中の「功德威神」に對する僧都自身の說明解釋の一段である。而もそれは全部、上の引用大般若經の中に續いて出て來る如來功德の德目であつて、今はそれ等の德目だけを拾つて列擧されたのであり、（大正七卷九三五頁下―九三六頁上參照。）したがつてそれは本書（二九〇頁）に於て訓讀したやうに、

言前所說功德等者。如來大慈大悲。說法。無礙靜慮。一念能現無邊類身。天眼。天耳。他心

に訓點書入れのある楞嚴院本（承元複刻本カ）を意味したやうである。して見ると訓點を板木に附した最初のものは寛永八年本ではなかつたかと考へられるのである。爾來次第に訓點が改められて後出の諸版本が現れて來て居るのであるが、句讀點も亦天保十年本に於て初めて板木に附せられて以來、現行の諸本は殆んど皆これを用ひて居るのである。惠心僧都の原著に於て訓點や句讀點が附せられて居たかどうかといふことは一つの疑問であるが、現行諸本の訓點や句讀點については改む可きものが尠くないやうである。

今回の底本元祿本には訓點はあるが、句讀點は無い。したがつて本書の出版に當り元祿本を底本としたとは云ひながら、句讀點は今回新に附したものであり、改行や引文、偈頌並に書名等に對しては格別の注意を拂つて新しい試みを爲したのである。又その訓點は參考とはしたけれども、今は謂はゆる延書本往生要集を以て目的としたのでないからして、成る可くそれに束縛されることを避けたのである。例へば、序文の最後の句に底本元祿本では

置テ之ヲ座右ニ備ヘヨ於廢忘ニ矣　（巻一、一丁左）

とあり、而してこれは寛永本に於ても、貞享本に於ても、その他の諸本に於て皆概ね同樣である。即ち「これを座右に置いて廢忘に備へよ。」と訓んで居るのである。往生要集一部三卷が專ら僧都の化他行のための著作であつたとするときはこれで充分であるが、序文の中には有名な「予が如き頑魯の者」といふ言葉もあるのであり、又僧都自行の廢忘に備へたまふ意味が全然無かつたと斷じ切ることも出來ないやうに思ふ。したがつて諸本の中には「備」一字には特に送假名を廢してゐるものもあり、現に或る學者の如きは「廢忘に備ふ。」と訓讀してゐるのである。「備ふ」と「備へよ」とは僅か假名一二文字の相違に過ぎぬけれども、その意味するところは誠に天地の差ともいふ可く、往生要集全卷の使命を左右する程の重大な訓點である。訓點を全然用ひなかつた時代は、何れにでも訓み得たわけであるけれ

の往生要集義記八巻は、謂はゆる留和本を原典として註釋されたものであり（遺宋本も亦參考して、その異同を指摘してある。）、したがつて爾來淨土宗には謂はゆる留和本を採用し、現在の淨土宗全書本も亦天保本を原稿としながら寛永本の形式に還へして出版することとなつたもののやうである。

最後に元祿本の訓點について一言して置くならば、今回底本として採用した元祿十年乙本の表紙には「訓點改正往生要集」の題簽が附してある。しかるにそれは上に述べて置いたやうに元祿十年甲本の題簽をその儘用ひたものであつて、元祿十年乙本の訓點は全六冊二百三十五紙の中

第一冊　五―八、十三―十六、三十二―三十五、三十七、三十八。　十四紙
第二冊　五―十二、十七―二十、四十一―四十四。　十六紙
第三冊　五―八、十七―二十四。　十二紙
第四冊　一―四、九―十二、十七―二十四。　十六紙
第五冊　一―三十一。　全三十一紙
第六冊　一―十六、二十一―四十六。　四十二紙

以上の一百三十一紙だけが元祿十年甲本の改正訓點であり、他の一百〇四紙は寛永十七年本の訓點の儘なのである。

しかるに寛永十七年本の表紙には「新版往生要集」とあり、その刊記の中に「世間流布之本依繁落字謬點今尋求往古楞嚴院點本開板之」とある。而も此の刊記は寛永八年本に於けるものと同一であることは上に述べて置いた如くである。したがつて寛永八年本以前に於て既に謬點落字の流布版本があつたやうにも見えるが、現存する建長本や承元複刻本その他の古版本には返點、送假名等の書入れはあるけれども、板木そのものには元來訓點も句讀點も附いて居らぬのである。故に寛永本の謂はゆる「世間流布之本依繁落字謬點」とは恐らく訓點書入れの版本（建長本カ）を意味し、「楞嚴院點本」も亦同様

一してゐるのである。此の點に關しては兩本の何れとも相違する。更にその次行の挾註「佛法僧戒施天謂之六念」は却つて承元複刻本に一致して、建長本以下の遺宋本に於ける「念佛法僧施戒天謂之六念」と相違するのである。（淨土宗全書本にも「念」あり。但し「戒施」は今の如し。）又上の阿彌陀經釋に於ける引文の中で、起信論の句を引ける「隨以專心」（全集一九八頁、大正八三巻一一二七頁下）は留和本に一致して、遺宋本の「謂以專心」並に起信論原典の「謂以專意」と相違する。（淨土宗全書本も亦「謂以專心」である。）而も往生要集略料簡中の同文引文には「隨心專意」とある。（全集二一九頁、大正八三巻一一三五頁下。）したがつて現本によつて見る法然上人の引文は、一面遺宋本に一致しながら、他面留和本に一致し、更に兩本の何れにも一致しない點がある。 上の無量壽經釋中引文挾註「六念」の次に、現在の往生要集諸本は一致して「十六想觀亦不出之」の八字を加へてゐるけれども、法然上人の引文には缺いて居る。 又阿彌陀經釋中引文に於て、般舟經の語として「當念我名數常專念」とあるけれども、遺宋本の原典には「常念我數々當專念」とあり、留和本には「常念我數々常當專念」（承元本）又は「當念我數々常當專念」（寛永本等）とある。（淨土宗全書本は寛永本に從ふ。） 又その上の觀經の句として引く「極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂」も、亦承元本、建長本、寛永本、貞享本、元祿本等には、悉く「念佛」とあつて「彌陀」とはない。（但し、親鸞聖人の教行信證の行卷及び化土卷中の所引、並に天保本、淨土宗全書本、惠心僧都全集本等は今の如くである。）更に往生要集略料簡中所引の木槵經の文中に於ける「如是若十若二十乃至百千萬億、若能滿二十萬遍身心不亂云々」に於て、「乃至」の上に「若百若千」の四字が脫して居るけれども「億」一字の加はつてゐることは正智院藏古寫本、したがつて大正大藏經本と一致しながら、阿彌陀經釋中の引文に於ては「若百若千」を具しながら「億」を缺いて居る。 斯くの如き同一人の述作中に於ける相互の不同は、素より當時の引文が概ね取意略抄に從つたものである關係上、必ずしも一概に現代流の推理を以て論ず可きではないけれども、上に指摘したやうな矛盾は或は後人の加筆によつて生じたものではないかとも思はれるのである。 したがつて法然上人述作中の引文によつて推究しても、その依用本が何れであつたかといふことを決定することは寧ろ困難である。 しかし良忠上人

された往生要集の原典が何れの系統に屬したものであつたかを推定することが出來ぬ。しかるに法然上人の場合は、選擇本願念佛集の中の引文にはその何れであつたかを決定するものが無いけれども、往生要集略料簡並に無量壽經釋及び阿彌陀經釋の中の引文によつてこれを觀るに、謂はゆる遺宋本に一致するところと留和本に一致するところとが半々であり、更に何れにも一致しない箇處もある。したがつて現在所傳の是れ等の書の中に後世の補筆が全然なかつたものであるとするならば、そこに見られる引用文の方が或は往生要集の原形を傳へて居るのかも知れぬけれども、此の點については甚だ疑問がある。

例へば、第八念佛證據門に木槵經を引き終つて（卷下、三六五頁）挾註「略抄」の次に建長本、天保本、惠心僧都全集本、大正大藏經本、眞宗七祖聖教本、並に古寫本等は揃つて「感禪師亦同之」の挾註六字を加へて居るのであり、今法然上人の往生要集略料簡中の引文には「感禪師意同之」（法然上人全集二一八頁、大正大藏經八三卷一三五頁上）とあり、阿彌陀經釋の中には「感禪師意亦同、已上難易意也」（全集一九七頁、大正八三卷一二七頁中）とあつて、その間兩處の引文に不同があるけれども、此の挾註をもつことに於て謂はゆる遺宋本の方に一致するのである。（承元本、寛永本、貞享本、元祿本等には缺く。淨土宗全書本も亦缺く。）又阿彌陀經釋に於けるその續きの引文中に於て「若欲至心生西方者」の「者」一字は、承元本以下の留和本に脫字するものであるが（三六六頁）、今法然上人の引文に於ては建長本等と一致してこれを加へて居る。又無量壽經釋中に於ける第九往生諸行門からの引文中に於て、「三歸五戒八戒十戒等多少戒行」の「等」一字は、留和本に脫して遺宋本に存するものであるが（卷下、三七九頁）、今法然上人の引文に於ては是れ亦加へて居り（全集一四七頁、大正八三卷一一〇頁上）、その次の「四精進」も、承元本等の留和本は「四者精進」として「者」一字を加へてゐるのであるが、今法然上人の引文は遺宋本に一致してこれを缺く。しかしながら、建長本等は「一者財法等施、二者三歸五戒八戒十戒等多少戒行、三者忍辱」として、一から三までは留和本と一致して「者」を加へてゐるのであるけれども、法然上人の引文に於ては全然これを缺いて終始統

居るのではなく、上掲の四古寫本も亦先匠の對校註記に從つたのであつて予が直接の校合ではない。したがつて往々中に疑問とす可き節があり、斯かる場合は將來校合參考のために特に疑問符「〻」を附して置いた。今回予が往生要集諸本の校合に當つて、最初是れ等古寫本との直接對校をも念願したのであつたけれども、實は亡母の一周忌までに完成したいと願つたため、そこまで及ぶ時間の餘裕がなく、且つ是れ等の古寫本は既に吾人の先輩によつて夫々現在流行の諸本の中に採用乃至對校されてゐるので、今回は差控へて將來の機會に讓ることとしたのである。

源信僧都の往生要集に本來遣宋本と留和本との二種類の原本が存してゐたといふ古來の傳說は、その儘これを採用す可きでないといふことを上に述べて置いたが、若し往生要集の諸本を假りに此の二種本の系統に分けるとするならば、今の底本とした元祿十年本はもとより留和本の系統に屬する一本である。現に往生要集を奉じて居る天台宗眞盛派と眞宗大谷派とに於ては遣唐本と自稱する建長本の系統から出た諸本を用ひて居るのであり、これに對し淨土宗と眞宗本願寺派とでは留和本と謂はれて居る承元本系統の諸本を依用して居るのである。法然上人や親鸞聖人、並に眞盛上人等の依られた往生要集が果して何れの系統のものであつたかといふことは、容易に決定し難いけれども、此の際一考して置くのも何等かの參考にならうかと思ふのである。

眞盛上人については、現に越前引接寺藏の古寫本が上人の常に捧持して地方遊行の際携帶せられたものだとも傳へられて居るからして、それによつて判定がつくわけである。しかるにその寫本の內容は、天保十年本の例言によれば「似留和之本」とあるが、惠心僧都全集本の校合註に誤り無きものとすれば、寧ろ遣宋本に八九部通り近似してゐるのである。親鸞聖人については、敎行信證の中に往生要集の引文は九箇處あるけれども、その何れの引文も二本相違の部分からのものでないために、依據

したがつて單に⑦と示した場合は、大日本佛教全書本(惠心僧都全集初版本)と惠心僧都全集再版本と同じである場合であり、兩者に不同のある場合は特に ⑦初版本 又は ⑦再版本 と斷はつてある。又天保十年本の頭註に於て考僞するものは、今？符を附して ⑤頭註 として置いた。例へば、

P. 224 經十〔意〕？ ⑤頭註〔但シ然ラズ、正引文ナリ〕

は、天保十年本⑤の頭註に考僞して「經」の次に「意」一字を加へるのではなからうかとあることを示し、次の括弧内の意味は天保本の考僞は誤りであり、今は寶積經からの正引文であつて、意引でないといふことを明かにした記號式である。又屢〻出て來るものは、初め二三回の校合の後〔同例以下略ス〕とした。又大書ヌとは、異本に於て本文同大の文字となつてゐることを意味し、細註 とは異本に於て細字を以て挾註してゐることを意味せしめたのである。

又引用經論疏の原文と直接校合したものは、凡て大正新脩大藏經の脚註、並に流布本あるものはそれによつたのであり、その略符は大正新脩大藏經所用のものを採用したのである。卽ち

(麗) 麗本(西曆一一五一年版)
(三) 宋、元、明三本
(宋) 宋本(西曆一二三九年版？)
(元) 元本(西曆一二九〇年版？)
(明) 明本(西曆一六〇一年版？)
(聖) 正倉院聖語藏本(天平寫經)
(宮) 宮內省圖書寮本(舊宋本、西曆一一〇四―一一四八年版)
(石) 石山寺本(天平寫經)
(知) 知恩院本(天平寫經)
(敦) 敦煌本(スタイン發掘本)

尙、古梓堂文庫藏本(久)と寛永八年本(寛)とは、僅かに部分的に校合註記したのであつて全卷に及んで

と武生引接寺藏本㊃とには之を缺き、更に文中の「乘生淨土」の「乘」は承元複刻本①、大正新脩大藏經本⑧、並に高野山正智院藏古寫本㊁と青蓮院藏承安元年寫本㊂とに於て「垂」となつてゐることを示した記號式である。而して同文に就いては、更に大正新脩大藏經四十五卷八百九十三頁下段の祇園圖經中の文を參照することを注意として添加して置いたのである。

p. 76 ―〔往生要集卷上本終〕①②⑤⑦⑧⑨㊀㊁㊂㊃, ＝〔往生要集卷一上本終〕③

は「往生要集卷上本終」の八字は承元複刻本①、建長五年本②、天保十年本⑤、大日本佛教全書本(惠心僧都全集初版本⑦、惠心僧都全集再版本⑦、大正新脩大藏經本⑧、昭和校訂眞宗七祖聖教本⑨、並に上揭四種の古寫本㊀㊁㊂㊃とに缺き、只寛永十七年本を複刻した元祿十年本④と淨土宗全書本⑥とのみに存する文字であり、貞享元年本③には「往生要集卷一上本終」となつてゐることを示した記號式である。

p. 167 ―〔往生要集卷中本　天台首楞嚴院沙門源信撰〕⑤⑦⑨, ―〔本〕①, ―〔本〕＋〔請第六別時念佛門〕細註②⑧㊁㊂

は、今本の「往生要集卷中本　天台首楞嚴院沙門源信撰」の十八字は底本たる寛永十七年本卽ち元祿十年乙本④の儘であることを示し、貞享元年本③、淨土宗全書本⑥等も亦同じであるが、(因に大日本佛教全書本の校合註によれば、長德二年寫本㊀並に武生引接寺藏本㊃も亦今の底本と同じやうであるが、「本」一字の有無に就いては疑はしい。)承元複刻本①には「本」一字を缺き、建長五年本②、大正新脩大藏經本⑧、並に高野山正智院藏古寫本㊁と青蓮院藏承安元年寫本㊂とには「本」一字を缺いて、細字を以て「請第六別時念佛門」の八字を加へ、天保十年本⑤、大日本佛教全書本(惠心僧都全集初版本⑦、惠心僧都全集再版本⑦、昭和校訂眞宗七祖聖教本⑨には「往生要集卷中本　天台首楞嚴院沙門源信撰」を缺く、卽ち上卷と中卷との切り目が他の諸本と相違して居ることを示した記號式である。

p. 247 ―〔如說修〕㊂; ―〔如〕―〔修〕(無量壽經)

は、大正新脩大藏經本⑧の校合脚註によれば、青蓮院藏承安元年寫本㊂には「如說修」の三字を缺く由であり、原典たる大無量壽經の諸本には「如」と「修」とを缺くことを示した記號式である。

正することにしたが、斯かる場合はその校合註記に於て一目瞭然たらしむるやう、底本元祿本の符號は特に二重圓の中に入れて⓸と示して置いたのである。又その校合記號として採用した十、一、二、〔〕、?、及び往生要集異版本の略符①②③⑤⑥⑦⑧⑨(久)(寛)、同古寫本の略符㊀㊁㊂㊃、大藏經異本の略符(大)㊂(宋)(元)(明)(聖)(宮)(石)(知)(甲)等も亦、成る可く說明を略してその異同を判明ならしめようとの意圖に出たものである。今その二三の例を擧げて說明して置く。例へば、

p. 38　宍＝完　①③④　＝肉　⑤⑥⑦⑧㊀㊁㊂㊃（寶積經）〔今ヽ②⑨＝從フ〕

は、今本の「宍」は建長五年本②並に昭和八年本⑨の「宍」に依つて、承元複刻本①、貞享元年本③、並に寬永十七年本卽ち元祿十年乙本たる今の底本⓸の「完」を改めたものであり、更に此の「宍」は天保十年本⑤、淨土宗全書本⑥、大日本佛教全書本（惠心僧都全集初版本）⑦、惠心僧都全集再版本⑦、大正新脩大藏經本⑧では「肉」となつて居り、大正新脩大藏經中の原典大寶積經の中に於ても亦同樣であり、鎌倉時代古寫本㊀、高野山正智院藏古寫本㊁、青蓮院藏承安元年寫本㊂、武生引接寺藏本㊃に就いては今回直接校合するの便宜を得なかつたため明言することは出來ないけれども、天保十年本、大日本佛教全書本、大正新脩大藏經本等に行はれた先匠の校合を信用すれば、是れ等の四古寫本も亦同樣に「肉」となつてゐるといふことを示した記號式である。

p. 63　一〔祇園寺無常堂……况復〕四十一字　②⑤⑦⑨㊀㊃；　乘＝垂　①⑧㊁㊂（祇園圖經. cf. 大正 45 卷 893 頁下）

は「祇園寺無常堂」以下「况復」に至る四十一字が承元複刻本①、貞享元年本③、寬永十七年本卽ち元祿十年乙本たる今の底本⓸、淨土宗全書本⑥、大正新脩大藏經本⑧、並に大正新脩大藏經本の底本となつた高野山正智院藏古寫本㊁、大正新脩大藏經本が校合した青蓮院藏承安元年寫本㊂等の中には存在するけれども、建長五年本②、天保十年本⑤、大日本佛教全書本（惠心僧都全集初版本）⑦、惠心僧都全集再版本⑦、昭和校訂眞宗七祖聖教本⑨、並に天保十年本と大日本佛教全書本とが校合した鎌倉時代古寫本㊀

絕〔絕〕、駞〔駝〕、鈎〔鉤〕、脉〔脈〕、肱〔肱〕、経〔經〕、碍〔礙〕、陰〔陰〕、滛〔淫〕、婬〔婬〕、遥〔遙〕、
鐶〔鐶〕、壊〔孃〕、懴〔懺〕、
伍〔低〕、胒〔胝〕、許〔訊〕、綱〔網〕、狠〔貌〕、恠〔恠〕、拾〔捐〕、族〔族〕、脆〔脆〕、逢〔遲〕、覩〔顧〕、
涯〔涯〕、燋〔燋〕、偃〔偃〕、隟〔隙〕、鏁〔鎖〕、攄〔據〕、

ニ　類

衰〔衰〕、廁〔廁〕、寇〔寇〕、寘〔寘〕、冣〔最〕、首〔首〕、炙〔炙〕、斉〔斉〕、糞〔糞〕、蚤〔蚤〕、窂〔牢〕、
昬〔昏〕、婚〔婚〕、悪〔惡〕、臺〔臺〕、索〔索〕、

ホ　類

𡰱〔尼〕、老〔老〕、哭〔哭〕、衮〔衮〕、盛〔盛〕、荒〔荒〕、煑〔煮〕、衰〔衰〕、葉〔葉〕、苑〔苑〕、曺〔曹〕、
遺〔遺〕、賔〔賓〕、臭〔臭〕、歯〔齒〕、菌〔齒〕、歯〔齒〕、蔵〔藏〕、蟲〔蟲〕、膚〔膚〕、鐵〔鐵〕、
交〔交〕、替〔替〕、閇〔閉〕、辯〔辯〕、廻〔廻〕、逄〔逢〕、咸〔咸〕、牆〔牆〕、

ヘ　類

刄〔刃〕、即〔卽〕、着〔著〕、埿〔泥〕、脩〔修〕、惣〔總〕、餝〔飾〕、擁〔擁〕、欝〔鬱〕、
鄣〔障〕、頭〔頭〕、蘓〔蘇〕、𪚺〔籤〕、畧〔略〕、咒〔呪〕、寅〔虻〕、胷〔胸〕、慙〔慚〕、槩〔概〕、鑒〔鑑〕、
呲〔毘〕、鵄〔鵄〕、褁〔裹〕、弊〔蔽〕、
率〔卒〕、輙〔輒〕、餙〔飾〕、閲〔閲〕、

尚、此の他に「懴」は「懺」、「聖」は「聖」等と改めて置いたが、「恒」「讃」「繊」等はその儘に止めて「恆」、「讚」、「纖」等としなかつた例外もある。

※今回元祿本を底本として諸本を校合するに當り、特に元祿本の顯著な誤謬は之を他本によつて訂

つて現在本派本願寺用本となつてゐる寛政十一年の小型七祖聖教本並にそれに依つた明治四十年の眞宗聖典全書本、及び貞享元年の首書本、嘉永二年の大本七祖聖教本等の底本となつた寛永本に還へしたことにもなるのである。

しかし寛永、元祿の版木には當時流用の俗字が可なり多く使用されて居るのであり、中には木版特有の略字乃至誤刻字までもある。今それ等異體文字の中に於て、特別なものはその儘之を採用して校合註記に於て說明することとしたけれども、その他の多くは現在通用の活字體に改めることにした。したがつて左の六類の異字表は、本書の底本たる元祿十年版乙本から今回改めたものを參考のために纒めてみたものである。〔括弧內の文字は本書上欄原本使用の文字を示す。〕

イ類

万〔萬〕、无〔無〕、尒〔爾〕、弁〔辨、辯〕、弃〔棄〕、与〔與〕、号〔號〕、㝵〔礙〕、皃〔貌〕、耎〔輭〕、絜〔潔〕、
宝〔寶〕、筭〔算〕、盖〔蓋〕、猒〔厭〕、劉〔劚〕、啚〔圖〕、甞〔嘗〕、膏〔膏〕、并〔幷〕、礼〔禮〕、辞〔辭〕、
躰〔體〕、
夂〔久〕、辺〔匹〕、叐〔夭〕、失〔失〕、夾〔夾〕、更〔更〕、角〔角〕、兎〔兎〕、局〔局〕、弊〔弊〕、煞〔殺〕、
逮〔逮〕、釼〔劍〕、變〔變〕、

ロ類

决〔決〕、况〔況〕、潔〔潔〕、撈〔撈〕、秘〔祕〕、疎〔疎〕、疏〔疏〕、躭〔耽〕、刹〔刹〕、鈌〔缺〕、勅〔勅〕、
筯〔筋〕、毀〔毀〕、戯〔戲〕、覌〔觀〕、斷〔斷〕、項〔項〕、侵〔侵〕、刾〔刺〕、剌〔刺〕、荊〔刺〕、剥〔剝〕、
耀〔耀〕、隤〔價〕、

ハ類

乹〔乾〕、起〔起〕、記〔記〕、虵〔蛇〕、朽〔朽〕、弥〔彌〕、駈〔驅〕、珎〔珍〕、陁〔陀〕、陁〔陀〕、施〔施〕、

心僧都全集第一版と同本と昭和六年の大正新脩大藏經本とが用ひられて居る。しかるに今それ等の出版系統を尋ねてみると、眞宗本願寺派用本の寛政十一年本と明治四十年本以外の現流諸本は、悉く直接又は間接に天保十年本に依據してゐるのであり、現に廣く民間に普及して居る昭和四年の昭和新纂國譯大藏經並に同六年の高僧名著全集所收の全譯本も、亦淨土宗全書本の延書本である關係上同一系統に屬するのである。天保本のもつ學的價値は上に述べて置いた如く極めて大ではあるけれども、それと同時に亦幾等かの缺點をもつ本であつて、したがつてそれを底本とした後出の諸本がそれ等の缺點から全然離脱し得なかつたことはいふ迄もない。そこに諸本各〻獨自の特色をもちながら、天保本の誤謬を幾等かづつ保存してゐるといふことになるのである。

今回予が底本として採用した元祿本は、往生要集の版本としては必ずしも善本ではない。上に述べて置いた如く建長本に比べて遙かに多く後世竄入の文字と觀らるゝものを加へた承元本を改版した寛永本の複刻である。しかし天保本自身が既に此の承元複刻本を參照して居るのであり、後出の南條師校正七祖聖教本、大日本佛教全書本、昭和校訂眞宗七祖聖教本等も亦それぞれ天保本を直接或は間接に底本としながら、承元本や寛永・元祿本等と校合して合糅を試みて居り、殊に淨土宗全書本並に惠心僧都全集再版本ともなれば、完全に天保本から寛永・元祿本に還へしたやうな校合をなすに至つたのである。したがつて、此の際承元本の系統を繼ぐ寛永・元祿本のまゝを原本として再版し、建長本その他との異同はこれを註記によつて明細に示す方法を採つた方が寧ろ兩得であらうと考へて元祿本を底本として用ひることにしたのである。したがつて元祿本よりも寧ろ寛永本を採用した方が今の目的に副うたわけであるけれども、寛永本の入手が比較的困難であつたことと、今の底本とした元祿十年乙本は上に述べて置いたやうにその大半は寛永版木を用ひたものであり、その殘りは寛永本の複刻である爲に殆んど寛永本を底本としたことと變らぬことになるのである。したが

に惠心僧都全集本の註記あるを除いては、諸本悉く此の剩字を加へて居る。次に第六別時念佛の一尋常別行中の『觀念法門』からの長引文中に於ける「卽蒙彌陀加命、得除罪障」(二八八頁)の「命」は、觀念法門の原文(大正四七卷二五頁下)に照して「念」の誤字であることが知られる。偶々淨土宗全書本が「加念」としてゐる以外、現傳往生要集の諸本は悉く「加命」と誤つてゐるのである。更に同じく二臨終行儀末の『觀佛三昧經』からの長引文最後の句「念已卽時、坐大蓮華」(三一四頁)は同經原文の「念已尋時、坐火蓮華」(大正一五卷六六九頁中)によつて、「卽」が「尋」、「大」が「火」の誤りであることが知られるのである。尤も寛永本、貞享本、元祿本、淨土宗全書本以外の諸本には悉く「卽」が「尋」となつてゐるけれども、「大」に至つては一本として「火」としてゐるものがない。しかるに「大蓮華」が「火蓮華」の誤字であるといふことは、懷感の釋淨土群疑論中の同經引文(大正四七卷七一頁上)にも亦「火蓮華」とあり、更に僧都の今の引文直後の句である「寧知、今日蓮華來迎、非是火華」、並に此の問に對する答として感和尚の群疑論を引文せられた中に見える「此四義、異火華」の語によつても知られるのである。此の他、現傳往生要集諸本共通の誤りとして指摘す可きものは必ずしも少くないやうであるが、斯かる方法によつて次第に往生要集本來の形に還へすとともにその誤謬をも訂正して行くことが將來我等の任務であらうと思ふのである。

五　底本元祿本考

現在我が日本佛教諸宗に於て往生要集を祖典として奉じてゐるのは、天台宗殊に眞盛派と、淨土宗、並に眞宗とであるが、是れ等の各宗が往生要集の何れの版本を依用してゐるかに就いては、上の諸本略解説の中に示して置いたやうに、天台宗並に眞盛派に於ては惠心僧都全集本と天保十年本を用ひ、淨土宗に於ては淨土宗全書本、眞宗本願寺派に於ては寛政十一年本と明治四十年本、同大谷派に於ては明治十年本と昭和八年本を主用して居る。而して一般學界には大正五年の大日本佛教全書本(惠

又大智度論中の引文に於ても共に「遠」であつて「道」ではない。現在の諸本には悉く「道」となつてゐるが、僧都自身の原本に於て「道」とあつたのか或はその後の寫傳の誤りであるのか、兎も角現傳諸本の「道」は「遠」と訂正されなければならぬのである。更に同じく四觀察門中の本文頂上肉髻釋の中に「亦放此光、光光相次」の一句（一七〇頁）があるが、これは今僧都の此の文の所依となつた觀佛三昧經の原文「亦放此光、光光相次」（大正一五巻六六三頁上）によつて訂正したのであつて、天保本、淨土宗全書本、大日本佛教全書本、惠心僧都全集本、大正大藏經本、眞宗七祖聖教本等では悉く「亦放此光、此光相次」となつて居り、寛永元祿本等の古本では「亦放此光々々相次」とあつて「此光」となつて居らぬが、訓點によれば「々々」を「光光」と解しないで「此光」と訓んで居るのである。今の文意からしても「光光」とするのが正しいのであり、したがつて「々々」は「光光」であつたものが中途から誤つて「此光」となつたものであることが知られるのである。又その次下の挾註の『大集經』からの引文「恭敬父母、師僧和上」（一七〇頁）の「僧」は、是れ亦諸本皆「僧」となつてゐるが、同經の原文（大正一三巻三七頁下）では「長」である。「師僧」が「師長」の誤りであることは明瞭である。第五助念方法の四止惡修善の初め『大論』からの引文「佛如醫王、法如良藥、僧如瞻病人、或如服藥禁忌」（二五一頁）中、「或」は智度論の原文（大正二五巻二二五頁下）に照して「戒」の誤字であることが知られ、同じく五懺悔衆罪の中の『華嚴』偈の引文「現在非和合、未來亦復然」（二七〇頁）の「未」は華嚴經の原文「去來亦復然」（大正一〇巻八三頁上—中）に照して「去」の誤字であることが知られる。尤も後者の場合は現流の諸本悉く「未」となつてゐるけれども、承元複刻本並に古梓堂文庫藏の古版本が「去」と印刻してゐるところからすれば、僧都自筆の往生要集本には「去」であつたものが次第に轉寫の間に「未」となつたものかとも考へられる。いふ迄もなく現在過去未來の三世について說く言葉であるからして、現流諸本の「未」は誤りである。又同じく六對治魔事の中の『止觀』第八からの引文の最後の句「是故起慈悲」（二七九頁）の「悲」一字は剩字である。（大正四六巻一一六頁中參照）その前々行に「是故起悲」の句があり、したがつて今の句は「是故起慈」でよいのである。しかるに天保本並

であり、その次の『十住婆沙』第三偈云として引いてある「乃至失身命」以下の三偈(一六五頁)も、亦第三ではなくして第四(大正二六巻三八頁上)の偈である。是れ等の巻數の誤記も、亦或は僧都の孫引せられたがための誤字でもなかつたかと考へられるのである。したがつて往生要集中多くの引文の中には間接孫引の引文のあることをも注意して置く必要がある。

今往生要集の引用文に就いて略説した序に、現傳往生要集の諸本に見られる引用經論中の誤謬の甚しきもの二三について記して置かう。

上巻第一厭離穢土の七總結の中に引く龍樹菩薩勸發禪陀迦王の長『偈』に於て、「所謂黒繩等活地獄」(五八頁)の「等」一字は原文(大正三二巻七四七頁上)にこれを缺く。それが七言の長偈であるところからしても當然剩字であることが知られる。しかるに天保本並に惠心僧都全集本が之を註記する以外、現傳の諸本は悉く引用本文中に加へてゐるのである。而してこれに前行する「不放逸如是七法名聖財」(五七頁)の「不放逸」三字が是れ亦原文(大正三二巻七四六頁上)に無く、承元本、寛永本、貞享本、元祿本、淨土宗全書本、眞宗七祖聖教本等の誤加文字であることは上に述べて置いたところである。又第二欣求淨土の三身相神通樂末の龍樹『偈』(十住毘婆沙論易行品)中の「神變及身通」(七六頁)の「身」は、原文(大正二六巻四三頁上―中)に於て「心」とある。現傳の往生要集諸本には悉く「身」となつてゐるが、これは「他心通」の意味の語であるからして「心」の誤りであることは明かである。又第四正修念佛の三作願門中の『無行經』喜根菩薩偈中の「婬欲卽是道」(一三五頁)は原文(大正一五巻七五九頁下)に於て「貪欲是涅槃」であり「無量諸佛道」は原文「有無量佛道」、「婬怒癡及道」は麗本原文「貪欲瞋恚癡」、宋元明三本及び宮本原文「婬慾及瞋恚」ではあるけれども、今は大智度論所引の文(大正二五巻一〇七頁下)を採用したものであり、したがつて諸法無行經の原典と相違しても、大智度論所引の偈と一致するため先づよいとする。ところが同『偈』中の「是人去佛道、譬如天與地」の「道」は、諸法無行經の原文に於ても、

が、此の他尙往生要集の引文には此の種類の孫引引文は必ずしも少くなからうと思はれる。例へば、龍樹『偈』云として引く「無垢莊嚴光、一念及一時、普照諸佛會、利益諸群生」の一偈（八九頁）は、正しく世親の淨土論中の偈（大正二六巻三一頁上）であつて龍樹の偈ではなく、又『佛藏經』の淨戒品云として引く「我見、人見、衆生見者」以下四行の引文（一四六頁）は同經淨戒品中の文ではなくして淨法品中の文（大正一五巻七九四頁下）である。更に『大莊嚴論』云の「佛國事大」以下四行の引文（一六三頁）は、是れ亦馬鳴の大莊嚴論經にも無着の大乘莊嚴經論にも見出されず、正しく龍樹の大智度論中の文（大正二五巻一〇八頁中—下）である。尤もこれはそのもと「大論云、莊嚴佛國事大云云」とあつたものが、誤つて「莊嚴」の二字が「大論」の中間に入つた寫誤に由來するものと考へられるが、現存の往生要集諸本には悉く「大莊嚴論云」となつてゐるからして、或は僧都の當時以來の誤謬であつたのかも知れぬ。因に本文は萬善同歸集の中に引かれてゐる文（大正四八巻九七九頁下）である。又中卷第四正修念佛の四觀察門中の挾註『大集經』云として引いてある「修四攝法、攝取衆生、故得此相」の一文は正しく大涅槃經の文（北本、大正一二巻五三五頁上　南本、大正一二巻七八〇頁上）であり、したがつて大集經は明かに大經の誤りでなければならぬ。又下卷第十問答料簡の一極樂依正中の法護所譯『經』云として引いてある「胎生之人、過五百歲、得見於佛」の文（三九〇頁）は、法護譯ではなくして正しく康僧鎧譯の無量壽經中の文（大正一二巻二七八頁上—中）である。その他、上卷第一厭離穢土の七總結中の『正法念經』偈云として引いてある「智者常懷憂、而似獄中囚、愚人常歡樂、猶如光音天」の一偈（五一頁）も、亦本經中に見當らないで增一阿含經中の「愚者常喜悅、亦如光音天、智者常懷憂、如似獄中囚」と一致する偈である。是れ等も亦或は僧都の孫引された文章ではなかつたであらうか。更に上卷第四正修念佛の二讚歎門の最初『十住婆沙』第三云として引いてある「阿彌陀佛本願如是」以下の長行と偈頌（一二六頁—一二八頁）とは、同論第三ではなくして第五（大正二六巻四三頁上—下）からの略抄文であり、同三作願門の終り『大論』第八云として引いてある「罪福雖有定報」以下の五行（一六五頁）は、是れ亦同論第八ではなくして第七（大正二五巻一一八頁下）からの略抄文

卷下『文殊般若經』下卷云（三二六頁ー三二七頁）の引文は同經（大正八巻七三一頁上ー中）の略抄ではあるが、今は往生禮讃所引（大正四七巻四三九頁上）を用ひたものであり、同『迦葉經』云（三五四頁ー三五六頁）の引文は大寶積經の摩訶迦葉會（大正一一巻五一二頁下ー五一四頁上）の取意略抄ではあるが、今は諸經要集所引（大正五四巻二頁上ー中）と全同し、同『譬喩經』第二云（三五六頁ー三五七頁）の引文は現在不傳の經であるが、是れ亦諸經要集所引（大正五四巻二頁下）及び經律異相所引（大正五三巻九七頁中）、法苑珠林所引（大正五三巻三八一頁下）等の文であり、同『木槵經』云（三六四頁ー三六五頁）の引文は同經（大正一七巻七二六頁上）からの略抄ではあるが、是れ亦觀念法門所引（大正四七巻三〇頁上）を孫引したものであり、同『十往生阿彌陀佛國經』云（三七一頁ー三七三頁）の引文は同經（續藏八七套二九二右下ー左上）の文ではあるが、今は安樂集所引（大正四七巻一二頁中ー下）を更に略抄したものであり、同『彌勒問經』云（三七三頁ー三七四頁）の引文は是れ亦現在不傳の經であるが、僧都の師匠であつた良源大僧正の極樂淨土九品往生義所引（佛全二四卷二〇八頁上ー下）の略抄と觀られ、元曉の遊心安樂道（大正四七巻一一四頁下）並に無量壽經宗要（大正三七巻一二九頁上）の中にも引かれてゐる文である。更に同『寶積經』第九十二以下の文（三七四頁）も亦同經（大正一一巻五二八頁中ー下）の文ではあるが、是れ亦上の遊心安樂道所引（大正四七巻一一五頁中）の文である。同『菩薩處胎經』第二說以下の文（四〇七頁）は是れ亦同經第三卷（大正一二巻一〇二八頁上）の文ではあるが、淨土群疑論所引（大正四七巻五〇頁下）の文であり、同『金剛經』云（四一七頁ー四一八頁）の五言一偈も亦同經の偈（大正八巻七五二頁上）を西方要決に引いたもの（大正四七巻一〇四頁上）からの孫引であり、同『佛藏經』說の一文（四一四頁ー四一五頁）並に又言（四一五頁）の一文、及び『佛藏經』第三云の一文（四三〇頁ー四三二頁）は、夫々同經（大正一五巻七八四頁中）（同巻同頁下）（同巻七九四頁下ー七九五頁下）の略抄文ではあるが、今は直接釋淨土群疑論所引の文（大正四七巻五六頁下）（同巻同頁）（同巻四九頁中ー下）に依つて居るのである。又同『大集經』云の一文（四七一頁）は是れ亦同經（大正一三巻二九〇頁下）の文ではあるが、今は法苑珠林（大正五三巻四一五頁下）及び諸經要集（大正五四巻一五五頁中）所引の孫引である。

以上は往生要集の中の引文を直接原典に遡つて對照することによつて知り得る孫引引文である

引文（上欄）	引文中引文（中欄）	所依乃至言及（下欄）	〔已上、日本部七種〕
42		55	
33		36	
17	5	22	
12	6	36	
157	4	23	
19	14	3	
83	1	9	
1			
11		16	
152	13	55	
654	43	255	6 / 7
總計 952			

上掲六百五十四の引文の中に於て、僧都自身直接その原典から引かれなかつたものが幾等かある。例へば、

巻上『禪經』偈云（四二頁）の五言一偈は現傳羅什譯の禪祕要法經に見當らぬが、法苑珠林所引の禪祕要經の偈（大正五三巻八四七頁下―八四八頁上）であり、同龍樹菩薩云（一〇六頁）の引文は龍樹の大智度論二十九巻（大正二五巻二七五頁下）の文ではあるが、今は安樂集所引（大正四七巻九頁中）の文からの孫引であり、同『目連所問經』云（一一二頁）の引文も亦安樂集所引（大正四七巻一四頁上）の文であり、同時に樂邦文類所引（大正四七巻一六〇頁中）の文でもある。　更に同『賢首品』偈云（一五三頁）の五言二偈は舊譯華嚴經六巻の偈（大正九巻四三二頁下―四三三頁上）ではあるが、今は摩訶止觀所引（大正四六巻二頁上）の孫引である。　又同『丈夫論』偈云（一六〇頁）の五言二偈は大丈夫論上巻（大正三〇巻二五七頁中）の偈ではあるが、是れ亦法苑珠林七十一巻所引（大正五三巻八二三頁下）又は諸經要集十一巻所引（大正五四巻一〇七頁下）の孫引である。

巻中『大莊嚴論』偈云（一九九頁）の七言一偈は現傳の馬鳴の大莊嚴論經並に無着の大乘莊嚴經論の中に見當らぬが、諸經要集所引の大菩薩藏經の偈（大正五四巻九〇頁上）と全同であり、同『無量清淨覺經』云（二一三頁―二一四頁）の引文は同經（大正一二巻二九〇頁上）の取意文ではあるが、今は迦才の淨土論所引（大正四七巻一〇二頁中）を用ひたものであり、同『金剛般若論』偈云（二五六頁）の五言一偈は同論上巻の偈（大正二五巻七八五頁上）ではあるけれども、是れ亦法華玄義所引（大正三三巻七三三頁中）からの孫引である。

弘猛海慧經		1											1			〔僞經〕
經		1					1						2			〔出處不明〕
諸經											1		1			(阿彌陀、無量壽、大阿彌陀、如來會等)
經論	1														1	(涅槃、大論、俱舍、瑜伽、順正理等)
經論	1														1	(正法念經、六波羅蜜經、法華、長阿、婆沙、俱舍、順正理等)
諸論												1			1	(大論、攝論釋等)
基師											2		2			〔不明〕
刊定記						1									1	
無量壽經記							7				3		10			(玄一師、一師、一、因法師)〔卍續藏經32套〕
龍興記												1			1	
智憬師				1							1	1	1		2	〔群疑論參照〕
有懺悔偈							1						1			〔不明〕
有處說							1						1			〔不明〕
〔已上、續藏部並ニ不明ノモノ〕													28	1	11	
往生論智光釋								1	1		1		2		1	(論智光疏、光師釋)
或					1								1			〔慈覺大師法華常行三昧禮佛文トイフ〕
極樂淨土九品往生義										1	2		3			(良源作。彌勒問經孫引、有、寂法師ニ〔日佛全書24卷〕)
日本往生極樂記			1						1			1			3	(傳記、慶氏日本往生傳、日本往生傳)
法華經賦												1			1	(爲憲撰)
觀音讚												1			1	(慈慧大師撰)
十六相讚												1			1	(慶氏保胤撰)

No.	書名	卷數	引用數（上から順）	計			備考
1959	觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門	1	2, 2, 1, 1	5		1	(導禪師、導和尚、唐土諸師)
1960	釋淨土群疑論	7	1, 4, 1, 2, 1, 1, 1, 17, 5	25		8	(導禪師、感禪師、感和尚)尚、第十門中孫引（有、力法師）アリ
1961	淨土十疑論	1	1, 2, 2, 1	7		2	(天台十疑、天台大師)
1963	淨土論	3	2, 1, 2, 1, 2, 3, 1	8		4	(龍樹讚、迦才、有)
1964	西方要決釋疑通規	1	3, 1, 1, 1, 1, 4, 1	14		4	(慈恩、要決)
1965	遊心安樂道	1	1			1	(元曉)
1969	樂邦文類	5	1, 1, 2	1		3	(眞言教佛讚、阿彌陀別讚、目蓮所問經)
1980	往生禮讚偈	1	3, 2, 5, 1, 1, 1	10		3	(龍樹偈、十二禮、六時禮法、六時禮讚、善導禪師、善導禪師釋、導和尚)
2017	萬善同歸集	3	1			1	(安國鈔引文)
2058	付法藏因緣傳〔五十〕史傳	6	1, 1	2			(馬鳴菩薩　文)
2070	往生西方淨土瑞應傳〔五十一〕	1	1, 1			2	
2073	華嚴經傳記	5	1	1			
2087	大唐西域記	12	1	1			
2122	法苑珠林〔五十三〕事彙	100	1, ←1	2			(或說、道宣)
2123	諸經要集〔五十四〕	20	1, 1, 1, 1, ·(1)	3		1	(玄奘三藏引文、大莊嚴論引文、或說)
	〔已上、疏釋部二十九種〕			125	2	46	
	〔已上、大正新脩大藏經中一百三十六部〕			620	42	237	
	十往生阿彌陀佛國經		1, 1, 1, 1, 1, 2	[illegible]	1	3	(十往生經)〔卍續藏經87套〕
	法句經		2	2			〔不明〕
	譬喩經		2, 1	3			〔不明〕
	彌勒所問經		1, 1	1		1	〔西方要決孫引〕

部類	番號	書名	卷數	記數（上より順に）	計			備考
	1604	大乘莊嚴經論	13	1、1	2			
	1606	大乘阿毘達磨雜集論	16	1			1	
論集〔卅二〕	1646	成實論	16	1、1		1	1	
	1666	大乘起信論	1	1	1			
	1670	那先比丘經	2	1	1			（那先比丘問佛經）
	1672	龍樹菩薩爲禪陀迦王說法要偈	1	1	1			
		〔〕上、論部十七種〕			100	7	33	
經疏〔卅四〕	1718	妙法蓮華經文句	20	1	1			
〔卅五〕	1733	華嚴經探玄記	20	1	1			（釋）
〔卅七〕	1748	無量壽經連義述文贊	3	3、3、1	6		1	（憬興師、雙觀經憬興師說、有師）
	1749	觀無量壽經義疏	2	1、1、4	6			（有、慧遠法師、遠法師）
	1750	佛說觀無量壽佛經疏	1	1	1			（天台）
	1753	觀無量壽佛經疏	4	1、2	3			有、有師、觀經玄義）
〔卅八〕	1778	維摩經略疏	10	1	1			（天台）
律疏〔四十〕	1804	四分律刪繁補闕行事鈔	12	1	1			
論疏	1819	無量壽經優婆提舍願生偈註	2	1		1		（淨土論註）
諸宗〔四十六〕	1911	摩訶止觀	20	4、3、3、3、3、1、1、4	11		11	
	1912	止觀輔行傳弘決	40	1、1	1		1	
	1916	釋禪波羅蜜次第法門	12	1、1	1		1	（次第禪門）
〔四十七〕	1957	略論安樂淨土義	1	1	1			（有師）
	1958	安樂集	2	1、1、1、1、1、8、2	12	1	2	（綽禪師、綽法師）

番号	注	経論名	巻数	引用	計			備考
1080		如意輪陀羅尼經	1	1, 1			2	
1092		不空羂索神變眞言經	30	1, 1			2	
1154		佛說隨求卽得大自在陀羅尼神呪經	1	1, 1			2	
1331	〔廿二〕	佛說灌頂經	12	1, 1	2			（隨願往生經、護身呪經）
1348		佛說十二佛名神呪校量功德除障滅罪經	1	4	4			
		〔已上、經部八十七種〕			391	33	153	
1484	律〔廿四〕	梵網經	2	1, 1, 1	1		2	（梵網戒品）
1485		菩薩瓔珞本業經	2	1			1	（本業瓔珞經）
1488		優婆塞戒經	7	1, 2, 1, 1	3		2	
		〔已上、律部三種〕			4		5	
1509	釋經論〔廿五〕	大智度論	100	10, 2, 1, 3, 11, 1, 4	33		13	（龍樹菩薩、論）
1511		金剛般若波羅蜜經論	3	1	1			
1521	〔廿六〕	十住毘婆沙論	17	6, 7, 2, 1, 3, 1, 1, 1, 1	37	4	2	（龍樹偈）
1524		無量壽經優波提舍	1	2, 2, 1, 1, 1, 1	6		2	（世親偈、往生論、無量壽經優婆提舍願生偈）
1545	毘婆〔廿七〕	阿毘達磨大毘婆沙論	200	1			1	（新婆沙）
1558	〔廿九〕	阿毘達磨倶舍論	30	3, 1	1		3	（有經）
1564	中觀〔三十〕	中論	4	3, 1	4			
1577		大丈夫論	2	1	1			
1579	瑜伽	瑜伽師地論	100	2, 8, 7, 1, 1, 1	10	1	9	
1583	〔卅一〕	成唯識論	10	1, 1	2			
1595		攝大乘論釋	15	1, 1		1	1	

番號	經名	卷數	分布	計	備考
673	大乘同性經	2	1, 2	1, 2	
693	佛說作佛形像經	1	1	1	(優塡王作佛形像經)
[十七] 721	正法念處經	70	10, 13	10, 13	
724	佛說罪業應報教化地獄經	1	1	1	
786	佛說木槵子經	1	1, 1, 1	1, 2	
788	佛說校量數珠功德經	1	1	1	(念珠功德經)
821	大方廣如來祕密藏經	2	1, 1, 1, 1	2, 1, 1	(祕密藏經)
828	無字寶篋經	1	1, 1	2	
837	佛說出生菩提心經	1	1	1	
839	占察善惡業報經	2	1, 1, 1	3	
842	大方廣圓覺修多羅了義經	1	1	1	
密教 [十八] 901	陀羅尼集經	12	1, 1, 1	2, 1	(阿彌陀佛大思惟經)
[十九] 930	無量壽如來觀行供養儀軌	1	1	1	
967	佛頂尊勝陀羅尼經	1	1, 1, 1	1	
1002	不空羂索毘盧遮那佛大灌頂眞言	1	1, 1		(光明)
1024	無垢淨光大陀羅尼經	1	1, 1	2	
[二十] 1039	阿唎多陀羅尼阿嚕力經	1	1	1	(阿嚕力迦)
1043	請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經	1	1	1	
1060	千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經	1	1	1	
1069	十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經	1	1	1	
1070	佛說十一面觀世音神呪經	1	1, 1	1, 1	

番號	經名	數	各欄記入（上ヨリ）	計1	計2	計3	備考
416	大方等大集經賢護分	5	1, 1, 1	1	1	1	
418	般舟三昧經	3	1, 1, 5, 1, 3, 6, 1, 1, 3, 2	15	4	5	
423	僧伽吒經	4	1	1			
434	佛說稱揚諸佛功德經〔十四〕經集	3	1	1			
440	佛說佛名經	12					
441	同上	30	1			1	〔但シ、コレハ三千佛名經ヲ意味スルカ〕
446	過去莊嚴劫千佛名經	1					
447	現在賢劫千佛名經	1					（三千佛名經）
448	未來星宿劫千佛名經	1	1, 1			2	
452	佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經	1	1, 1			2	
463	佛說文殊師利般涅槃經	1	1			1	
475	維摩詰所說經	3	1, 3, 1, 1	4	1	1	（淨名經）
586	〔十五〕思益梵天所問經	4	1	1			
613	禪祕要法經	3	1, 1	1		1	
629	佛說放鉢經	1	1			1	
642	佛說首楞嚴三昧經	2	1, 1	1		1	
643	佛說觀佛三昧海經	10	3, 9, 2, 6, 3, 2, 5, 17, 1, 7, 1, 2	41	6	11	
650	諸法無行經	2	1		1		
653	佛藏經	3	2, 1, 1, 3	7			
665	〔十六〕金光明最勝王經	10	1			1	
669	佛說無上依經	2	4, 1	4	1		

番號	經名	卷數	各欄數字（上より順に）	合計	備考
350	佛說遺日摩尼寶經	1	1, 1	2	
360	佛說無量壽經	2	6, 2, 1, 4, 3, 3, 2, 1, 10, 2	22, 2, 10	（雙觀經）
361	佛說無量清淨平等覺經	4	1, 6, 3, 1, 1, 1, 3, 2	8, 10	
362	佛說阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經	2	1, 1	2	（大阿彌陀經）
365	佛說觀無量壽佛經	1	5, 3, 4, 2, 1, 2, 2, 11, 1, 3, 2, 1, 1, 2	22, 3, 15	
366	佛說阿彌陀經	1	1, 2, 1, 1, 3, 3	6, 5	（小經、經）
367	稱讚淨土佛攝受經	1	1, 1, 1, 2	3, 1, 1	（有經）
368	拔一切業障根本得生淨土神呪	1	1	1	（龍樹所感往生淨土等呪）
370	阿彌陀皷音聲王陀羅尼經	1	1, 1, 1, 1, 1, 1, 1	4, 3	（阿彌陀）
371	觀世音菩薩授記經	1	2	2	
374	大般涅槃經（涅槃）	40	4, 12, 3, 6	25	
375	同　上	36	1, 1, 1, 4	5, 2	
380	大悲經	5	1, 4, 1, 4	9, 1	
383	摩訶摩耶經	2	1	1	
384	菩薩從兜術天降神母胎說廣普經	7	1, 1, 1, 1	3, 1	（菩薩處胎經）
389	佛垂般涅槃略說教誡經	1	1	1	（遺教經）
397	大方等大集經（大集〔十三〕）	60	1, 1, 13, 2, 1, 1, 1, 1, 1, 9, 1	27, 2, 3	（日藏經、大集月藏分）
405	虛空藏菩薩經	1	1	1	
409	觀虛空藏菩薩經	1	1	1	（觀虛空藏菩薩佛名經）
411	大乘大集地藏十輪經	10	1, 1, 1, 1	3, 1	
415	大方等大集經菩薩念佛三昧分	10	1, 1, 1, 4, 1	5, 3	（大集念佛三昧經、念佛三昧經）

番号		經名	巻数	各欄の数（上から順に）	計			備考
159		大乗本生心地觀經	8	2, 1, 3, 2, 1, 1, 4	10		4	
186		佛說普曜經	8	1	1			
189		過去現在因果經	4	1	1			
201	〔四〕	大莊嚴論經	15	1	1			
211		法句譬喩經	4	1	1			
212		出曜經	30	1	1			
220	般若〔五六七〕	大般若波羅蜜多經	600	2, 5, 1, [illegible], 1, 1	11		3	
232	〔八〕	文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經	2	1, 1	2			
235		金剛般若波羅蜜經	1	1, 1, 2, 1	3		2	
243		大樂金剛不空眞實三摩耶經	1	1			1	（般若經）
245		佛說仁王般若波羅蜜經	2	1, 1, 1			3	
261		大乗理趣六波羅蜜多經	10	2, 1, 4			2	
262	法華〔九〕	妙法蓮華經	7	2, 2, 1, 1, 1, 1, 3, 1	9		3	
278	華嚴	大方廣佛華嚴經	60	7, 1, 3, 2, 1, 1, 1, 2	13	1	4	
279	〔十〕	大方廣佛華嚴經	80	3, 1, 2, 2, 17, 3, 8, 1	33		4	
293		大方廣佛華嚴經	40	2, 1, 1, 2, 1	4		3	（華嚴經普賢願、四十華嚴經普賢願）
302		度諸佛境界智光嚴經	1	3, 1	4			
307		佛說莊嚴菩提心經	1	1	1			
310	寶積〔十一〕	大寶積經	120	6, 1, 1, 2, 4, 1, 9, 1, 4, 3, 3	3[illegible]	1	4	
325	〔十二〕	佛說決定毘尼經	1	1	1			
349		彌勒菩薩所問本願經	1	[illegible]	2			

般若經、平等覺經、無量壽經優波提舍、摩訶止觀、安樂集、往生禮讃偈、十往生經の五大門、心地觀經、涅槃經、大方等念佛三昧分、佛藏經、觀念法門、淨土十疑論、西方要決の四大門に亙る等である。 尤も此の配列は更に十大門各門の內容的意義と實質的價値との上から併せて考察さる可きものであることは云ふまでもない。

往生要集中の引文には、單に「經」と云ひ、或は「有經」と云ひ、乃至「有師」「或說」「釋」「有」等として引文又は言及してある場合が少くない。 佛說無量壽經は概ね「雙觀經」又は「無量壽經」、佛說阿彌陀經は「阿彌陀經」又は「小經」或は單に「經」、阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經は「阿彌陀鼓音聲經」又は「鼓音聲經」或は單に「阿彌陀」、大般涅槃經は「涅槃經」又は單に「大經」、大智度論は「智度論」又は「大論」或は「龍樹菩薩」又は單に「論」、華嚴探玄記は單に「釋」、慧遠の觀無量壽經義疏は「遠法師」又は單に「有」、善導の觀無量壽經疏は「觀經玄義」又は「有師」或は單に「有」、玄一の無量壽經記は「玄一師」或は「一師」又は單に「一」等の呼稱を以て引かれて居るのである。 したがつて中には容易にその典據の見付からぬものもあり、今日亡佚の書となつてゐるものもあるけれども、大概は大正新脩大藏經並に卍續藏經及び大日本佛教全書中所收の原典の中に索め得られるのである。

今左に往生要集中引文並に典據の統計を表示して置く。

題目欄並に備考欄中の右又は左傍線は往生要集中呼稱の略名又は別名を示す。 例へば「妙法蓮華經」は往生要集の中では「法華」又は「法華經」として引き、「佛說阿彌陀經（小經、經）」は往生要集の中では「阿彌陀經」又は「小經」又は「經」と呼んで引文してあることを示す。 尙、數字の上欄は引文、中欄は引文中引文、下欄は所依乃至言及を示す。

類數號 部卷番	題目	冊數	門 I	門 II	門 III	門 IV	門 V	門 VI	門 VII	門 VIII	門 IX	門 X	計	備考（略名・別名）
阿含 [三] 99	雜阿含經	50	1										1	
本緣 [三] 156	大方便佛報恩經	7				1							1	

從來は一百十二部六百十七文と稱せられて來たやうだけれども、嚴密に數へ上げれば實に一百六十數部の多きに達し、直接引文の形に於て引かれてゐるもの六百五十四文、間接僧都所說の所依とし又は典據として指示してある經論名二百五十五、引文中に引いてある他の經律論疏の文四十三、總計實に九百五十二といふ殆んど一千回にも及ぶ多數の引文を一切藏經の中から總集して出來上つてゐる書物である。而して是れ等多數の引文書は、阿含から本緣、般若、法華、華嚴、寶積、涅槃、大集、經集、密敎、律、釋經論、毘曇、中觀、瑜伽、論集、經疏、律疏、論疏、諸宗、史傳、事彙の大藏各部に亙り、大正新脩大藏經五十五卷の中に於てはその三分の二以上、實に四十卷に亙るばかりでなく、卍續藏經並に大日本佛敎全書中の書物も用ひられて居り、更に今日亡佚の書も亦四五部引用されてゐるのである。就中引用並に論及回數の最も多いものは觀佛三昧經の五十八回、華嚴經の五十五回、大智度論の四十六回、十住毘婆沙論の四十三回、觀無量壽經の四十回、大寶積經の三十五回、無量壽經の三十四回、淨土群疑論の三十三回等であり、以下大集經の三十二回、涅槃經の三十二回、般舟三昧經の二十四回、正法念經の二十三回、摩訶止觀の二十二回、瑜伽師地論の二十回、西方要決の十八回、平等覺經の十八回、安樂集の十五回、大般若經の十四回、心地觀經の十四回、往生禮讃偈の十三回、法華經の十二回、迦才淨土論の十二回、大悲經の十回、阿彌陀皷音聲經の七回等がある。したがつて經では觀佛三昧經、華嚴經、觀無量壽經、大寶積經、無量壽經、大集經、涅槃經、般舟三昧經等が比較的多く用ひられ、論では大智度論、十住毘婆沙論、瑜伽師地論、支那の疏章では淨土群疑論、摩訶止觀、西方要決、安樂集、往生禮讃偈、迦才淨土論等が比較的多く依用されてゐるのである。此の往生要集中引文回數の量的考察に併せて、十大門組織內容の質的考察の參考とし、十大門各部門に通じて最も廣く用ひられてゐるものから順次配列してみれば、先づ無量壽經の九大門に亙つて用ひられてゐるのを始めとし、觀無量壽經の八大門、大寶積經、般舟三昧經、法華經、阿彌陀皷音聲經の七大門、華嚴經、觀佛三昧經、大智度論、十住毘婆沙論、大集經、淨土群疑論、迦才淨土論の六大門、大

訂の割合に誤植が少くない。尤も是れ等の缺點の外に、本書獨自の特長が無いわけではない。第一厭離穢土門中の第五人道の中に「五百分宍猶如泥塗」(卷上、三八頁)とある「宍」は、承元複刻本、寛永本、貞享本、元祿本等の「完」、天保本、淨土宗全書本、惠心僧都全集本、大正大藏經本等の「肉」に依らないで獨り建長本の「宍」を採用し、更に四行後の「一百七關宍如破碎器」は、建長本に從つて「碎」を脱し、建長本、承元複刻本、寛永本、貞享本、元祿本等の「宛」、天保本、淨土宗全書本、惠心僧都全集本、大正大藏經本等の「肉」を改めて、今本獨り「宍」としてゐるのである。又第四正修念佛門中の第四觀察門の中に「如鑄金鋌」(卷中、一七三頁)とある「鋌」は、諸本の誤字を正して今本獨り「鋋」としてゐる。今その一例を示して全豹を窺はしむるの資とする。(合本。返點、送假名、振假名、句讀點、科文あり。又留和本との異同註四回上欄に示す。)

尚、此の他民間流通の往生要集本としては、「繪入往生要集」又は「和文繪入往生要集」、或は「和字繪入往生要集」等と稱する六冊又は三冊本がある。寛文十一年(一六七一)、元祿二年(一六八九)、寛政二年(一七九〇)、天保十四年(一八四三)、明治十六年(一八八三)、大正七年(一九一八)等相尋いで繰返し出版されて居り、更に開板年時不明の古版もある。しかし何れも皆往生要集最初の一分である地獄六道極樂のところだけを平假名交りに和述して插繪を入れたものであつて、その和述の方法も難譯な箇處は省略したり意譯したりしてあるため、往生要集の原典とは當然區別して考察しなければならぬ。又現代意譯乃至抄錄したものなども存するけれども、これも亦上と同樣である。尚往生要集末疏の出版には、寛永五年(一六二八)の「往生要集抄」、延寶二年(一六七四)の「直譚鈔」、天和二年(一六八二)の「指麾鈔」、正德五年(一七一五)の「倭解」、元治元年(一八六四)の「義記」等のあることを今は附記するに止めて置く。

四　引用文獻概說

往生要集三卷の中に引文し又は典據として言及してゐる經籍の數は、實に夥しいものがある。

同時に、その本文の校訂には主として建長本を襲用せんとしながら（明治十年本も亦、建長本を底本とせる天保本を底本とし、更に建長本を以て校合したもの）、建長本と相違して却つて寛永本等の誤れる箇所を採用した場所が少くない。例へば、上にも擧げた龍樹菩薩勸發禪陀迦王の偈中に於ける「不放逸如是七法名聖財」一句中の「不放逸」三字は、謂はゆる留和本と稱せられてゐる方の諸本にのみ見られる衍字であるが、今は建長本、天保本、惠心僧都全集本、大正大藏經本等に相違して、これを加へて居る。又第五助念方法門中の第三對治懈怠の要を略擧する前に、「問何等功德、答其事無邊」の十字が挿入されてゐる（巻中、二一三頁）が、これは建長本にも、亦承元複刻本にもなく、したがつて天保本、惠心僧都全集本、大正大藏經本にも加へて居らぬ。只青蓮院藏の古寫本には加はつてゐるやうであるが、往生要集の最古寫本たる長德本にも、又引接寺本にもない由である。文の前後を讀んでみても、後世の竄入のやうである。又第六別時念佛門の尋常別行の中に善導和尚の觀念法門（大正四七巻二四頁上―二九頁中）からの引文があるが、その中に般舟三昧經を引いて後「已上明念佛三昧法」の八字を次下の「此文在彼經云云」の十八字と共に挾註としたことは正しくない。此の八字を挾註にしてゐるのは、承元複刻、寛永、貞享、元祿等の謂はゆる留和本の方であつて、長德古寫本を始めその他の古寫本全部、又建長本、古梓堂文庫本、天保本、淨土宗全書本、惠心僧都全集本、大正大藏經本等の類は悉く大書して本文としてゐるのである。元來此の八字は、觀念法門中の文句であるため、挾註とした方が誤つてゐるわけである。その他、「乃至先世所造一切」（巻上、三一頁）、次に「惡業」の二字を加へ、「生熟藏」を「生熟藏」とし（巻上、六八頁）、「香雲華雲」を「香華雲」と一字脫し（巻上、七三頁）、「一毛髮」を「一髭髮」とし（巻上、一四五頁）、「菩薩之智」に「慧」一字を加へ（巻中、二三四頁）、「皆悉成就」を「皆悉成熟」とし（巻中、二三九頁）、「偈云」に「問」一字を加へ（巻中、二四〇頁）、「隨罪相」を「隨罪根」とし（巻中、二六八頁）、「又白」を「又曰」とし（巻中、二八八頁）、「還墮三惡八難之中」を「還墮三途八難之中」とし（巻中、三〇七頁）、「佛子知不」を「佛子知否」となす（巻中、三一一頁）等は、是れ亦建長本等の遺宋本系統の諸本はもとより、往々に承元複刻本とも相違し、却つて寛永、貞享、元祿本一類の誤謬を採用したわけである。その他天保本の誤謬を襲ひ、周到な校

22 昭和六年本。（西暦一九三一）［存。別本］（大正大藏經本）

昭和六年十二月刊行の「大正新脩大藏經」第八十四卷所收本であるが、これは脚註によれば高野山正智院藏古寫本を原本とし、天保本と青蓮院藏承安元年寫本とを以て校合したことになつてゐるが、事實は天保本を印刷原稿として用ひ、これに上の二古寫本を以て校合したものである。したがつて從來の諸本に見ることの出來ぬ獨自の特徴をもつ一本ではあるが、その底本として採用した正智院藏古寫本が他の諸本にない註釋的文字を相當に多くもつてゐる本であり、したがつて今の藏經本も亦それをその儘本文として採用してゐるのである。

例へば、龍樹菩薩勸發禪陀迦王の偈中の「百千萬分不及其一」（卷上、五九頁）の「其」一字は諸本中今本のみこれを缺いてゐることは原本（龍樹菩薩爲禪陀迦王說法要偈、大正三二卷七四七頁中）に一致し、これが七言の長偈でもあるから素より今本が正しいのである。しかしそれと同時に、「以何等相應生厭心」（卷上、五四頁）の「厭」の下に「離」を加へ、「調伏心者五欲微薄」（卷上、六六頁）の「欲」の下に「心」を加へ、「又彼諸衆生」（卷上、七五頁）の「彼」の下に「士」を加へ、又「大經云、不殺不盜、於父母師長、常生歡喜故、得跟長相」の挾註二十一字を第三十七相好相の後に加へ（卷中、一八一頁）、「此文出三卷淨土論」の挾註を無量清淨覺經引文の後に加へ（卷中、二四頁）、「已上第三卷略抄」の挾註を觀佛三昧經引文の後に加へ（卷下、三四八頁）たりしてゐることは、後世加筆の文字乃至挾註をその儘原文として採用したものではないかと考へられるのである。加之、天保本を印刷原稿とした關係上、正智院藏本との校合の見落しもあるやうであり、更に今本の誤植も亦必ずしも皆無ではない。（縮刷合本。返點、校註記、句讀點あり。）

23 昭和八年本。（西暦一九三三）［存。遺宋本］（眞宗大谷派用本）

昭和八年四月刊行の「昭和校訂眞宗七祖聖敎」の中に收められてゐる本であるが、その凡例によれば明治十年版「七祖聖敎」を底本とし、特に建長本と蓮如上人延書本とを參照して襲用に努めたとある。したがつてその訓點に於て特色があるが、可なり問題となるものも多いやうに見受けられる。又それと

出版された往生要集であつて、天保十年本を底本とし、校合するに長德(中巻のみ)、鎌倉(上巻のみ)、室町(下巻のみ)の古寫本と、建長本、西教寺古板本(承元複刻本)、引接寺古寫本とを以てしたものである。したがつて往生要集の原典としては最も依用するに足るものではあるけれども、縮刷叢書本の例として誤植及び脱字の尠くないことと共に、訓點並に句讀點についても更に訂正を要するものがある。(縮刷合本。返點、送假名、句讀點、校合註記、科文印あり。)

19 昭和二年本。(西暦一九二七)［存。遺宋本］(天台宗用本)

昭和二年七月刊行の比叡山專修院、同叡山學院編纂にかかる「惠心僧都全集」第一卷所收の往生要集は、前の惠心僧都九百年遠忌事務所發行の「惠心僧都全集」第二卷所收のもの(大正五年本)を、更に元祿十年版法龍師加筆本を以て再校し、前者の五號二段組を四號一段組に改めたものであるが、前者の誤植以上に更に多くの新誤植を加へ、又前者の挾註を全部欄外上段に移し變へたため、却つて誤謬を冒した點が少くない。殊に留和本の後世竄入文字を補加して、初版本を改惡したもののあることは一層遺憾とす可きである。(合本。返點、送假名、句讀點、校合註記、科文印あり。)

20 昭和四年本。(西暦一九二九)［存。遺宋＋留和本］(譯本)

昭和四年七月刊行の「昭和新纂國譯大藏經」宗典部第九所收の國譯本であるが、これは上の淨土宗全書本をその儘延書きしたものであり(訓讀上幾等か相違するところもある)、したがつて底本の誤字誤訓をその儘襲用してゐる。(和譯合本。讀假名、字註あり。)

21 昭和六年本。(西暦一九三一)［存。遺宋＋留和本］(譯本)・

昭和六年二月刊行の「高僧名著全集」第三卷所收の國譯本であるが、これは更に上の國譯大藏經本をその儘採用したものであり、したがつて前者の誤字誤讀誤植をも亦その儘襲用してゐる。(和譯合本。讀假名、字註あり。)

丁左に「寛永十七年庚辰正月」の刊記を附してゐることによつて明かなやうに、寛永十七年本を改刻したものである。寛永本の九行十九字詰を十行十九字詰に改めたがために、自然丁數の上に不同を來すやうになつたけれども、六分册の始終、並に字行等は寛永本の儘である。（十行十九字詰、第一册三十五紙、第二册三十九紙、第三册三十八紙、第四册三十一紙、第五册二十八紙、第六册四十一紙。大册合本。返點、送假名、振假名あり。）

15 明治十年本。（西暦一八七七）〔存。遺宋本〕（眞宗大谷派用本）

南條（神興師）校正本と稱する小本「眞宗校本七祖聖教」中の一部として、明治十年屆出、同十二年三月京都六書堂から發行されたものである。天保十年本を底本とし、更に建長本を以て對校したものであるが、書生の寫誤並に訓點の疑はしきものありと。（十行十九字詰、上本四十九紙、上末四十二紙、中本三十五紙、中末十六紙、下本二十八紙、下末四十紙。小型合本。返點、送假名、頭註あり。罫、句讀點なし。）

16 明治四十年本。（西暦一九〇七）〔存。留和本〕（眞宗本願寺派用本）

後藤（環爾師）編輯本と稱する「眞宗聖典全書漢文之部」中の一部として明治四十年東京神田の文會堂書店から發行されたものである。寛政十一年の長圓寺本を底本としたものであり、したがつて寛永本並に元祿本と相一致する。（縮刷合本）

17 明治四十三年本。（西暦一九一〇）〔存。遺宋＋留和本〕（淨土宗用本）

卽ち「淨土宗全書」第十五卷の中に出版された往生要集であつて、その體裁は留和本のやうであるけれども、實は天保本を以て印刷原稿とし、それに寛永元祿本の丁數を記入し、本文と訓點とに僅かの修正を加へながら、寛永元祿本の舊體に還へしたものである。したがつて一面留和本を採用しつゝ、他面遺宋本（天保本）の誤謬をも踏襲するといふ矛盾がある。（縮刷合本。返點、送假名、科文印あり。）

18 大正五年本。（西暦一九一六）〔存。遺宋本〕（天台宗用本）

大正五年九月刊行の「大日本佛教全書」第三十一卷、並に同年十月刊行の「惠心僧都全集」第二卷の中に

本以來約六百年にして再び遺宋本の出現となつたわけである。而してそれに校合するに、西教寺古板本と稱する承元複刻本と、越前引接寺の古寫本とを以てしたのである。此の點に於て本版本の價値は極めて貴いわけであるが、その訓點について遺憾ある點は先輩の既に認むるところであり、更に本文中從來諸本の誤字を訂正したものも少くはないけれども、却つて本版本が冒した誤字も亦可なり多いのである。又冠頭に註記する宋明二藏との引用文の校合は、極めて便利ではあるが、中に往々誤つた註記が少くなく、殊にそれが全引文に及んでゐない憾みがある。更に本版本編者が後世竄入の挾註と考へて脫文したものの中には、再考を要す可きものが少くない。

本版本の卷上本の首紙には、僧都が屋中に坐し合掌して來迎を待つの圖像が印畫してあり、それと相表裏して「永觀二年云々」の謂はゆる通稱流通分の一段がその一偈とともに裏面に載せてある。諸本では第六册の最終に附載されて流通分と名づけられてゐる部分であるが、先づ此の點に於て本版本が、他の何れの版本とも相違して居る。次に一品公紹法親王の序文三紙があり「新校往生要集例言五則」二紙の次に、往生要集の本文が始まる。卷下末の終りに、遺宋消息往復文二通と願主道妙の建長五年の刻記とがある。最後に

弘化五戊申年仲春

として「西教寺學校藏版」の文字を大書し、京都書林小川多左衛門以下大坂並に江戸の書林七氏の連名がある。故に天保十年成版の後九年を經て、三都の書店協力して此の版の普及に努力したもののやうである。（九行十七字詰、上本六十一紙、上末五十二紙、中本四十三紙、中末二十紙、下本三十五紙、下末五十紙。册子本六册。罫入り、返點、送假名あり。又句讀點、諸本並引文校合註記、科文印○△あり。）

14 嘉永二年本。（西曆一八四九）〔存。留和本〕

弘化五年の翌年、卽ち嘉永二年に西六條の永田調兵衛、並に丁子屋莊兵衛、丁子屋九郎右衛門、丁子屋平兵衛の四氏共同にて大本七祖聖教の中に出版した「七祖聖教往生要集」合本三册がある。卷六の四十一

永板木を用ひながら、尙元祿本の「訓點改正往生要集」の題簽を附してゐるわけである。（寛永十七年本、元祿十年本と同じ。）

12 寛政十一年本。（西暦一七九九）［存。留和本］（本派本願寺本）

元祿十年より更に一百年餘を經て、寛政十一年に浪華の長圓寺で印行された小型七祖聖教下卷の中に收められたものがこれである。卽ち眞宗七祖聖教合本の嚆矢であり、長圓寺版と通稱されてゐるものである。後に本派本願寺の所藏に歸し、現に本山版として本派本願寺依用本である。

竄入最初の極めて優秀な刻字本であるが、訓點は宗祖引用の箇處だけに用ひて他は省き、只返點だけに止めてゐる。寛永本並に元祿本の九行十九字詰を九行二十字詰に改めたがため、自ら紙數の上に變化を生じたけれども、六分册の始終並に本文內容は寛永本に全く一致する。それが寛永本と元祿本との何れを底本としたかについては、素より判らぬ。遺宋消息往復の二文を以て終り、その次の「永元四年」云々以下の刊記は悉く省略してゐる。（九行二十字詰、上本三十七紙、上末四十二紙、中本四十紙、中末三十三紙、下本二十九紙、下末四十二紙。小型合本。罫入り、返點あり、送假名、振假名一部分あり。）

13 天保十年本。（西暦一八三九）［存。遺宋本］（西教寺本）

寛政十一年から更に四十年を經て、天保十年に比叡山麓坂本の西教寺に於て出版されたものがこれである。謂はゆる「遺宋新校往生要集」の題簽を附するものである。

此の西教寺本は、往生要集諸本最初の校合本であつて、從來の訓點を改むると共に、初めて句讀點を附した版本であり、集中引用の經論文を宋明二藏本と校合するのみならず、科段を示し、俗略字を改め、進んで後世竄入の挾註と信じたものを拔き出すまでして、極めて學術的に工夫を加へた新本である。したがつて此の新版本の出現以來は、明治以後今日に及ぶまで、往生要集の諸版は悉くこれを底本として採用することになつたのであり、往生要集版本史上に占むる地位は極めて大きいのである。

今の底本となつたものは、惠心院祕笈所藏に發見したと稱する建長五年本であり、したがつて建長

村上勘兵衛壽梓

とあり、極めて落付いた字體ではあるけれども、本文の字體と稍〻異なるところのあるのは、複刻である證據である。（寛永十七年本と同じ。）

11 元祿十年本（乙種）（存：留和本）

上の村上勘兵衛壽梓の元祿十年本の他に、尙

元祿十丁丑年

京師 東六條下珠數屋町 西村九郎右衛門

書林 醒井五條下二丁目 小林莊兵衛

寺町四條下二丁目 赤井長兵衛

の刊行所名をもつ元祿十年本がある。此の奥附は卷下末（第六册）四十六丁の左面にあり、本文の字體とは全然相違して居る。刊行年時は元祿十年とあるけれども、實際は可なり後世に屬するもののやうである。此の乙種元祿十年本が普通元祿十年本として取扱はれてゐるが、此の版本は寛永十七年の板木と元祿十年の板木とを互に寄せ集め、更に足らざる所は新に寛永十七年本によりて補刻し、以て完全な一本として上の奥附を加へて出版したものである。したがつて、その訓點は寛永本に一致するところと、元祿本に一致するところとがあり、郭内竪法と版心上下の模　とに於て、自らその區別が明瞭である。しかし元祿十年本が、もともと寛永本を複刻したものである關　上、往生要集の本文に於ては、此の兩種の版木を寄せ集めて一本として刊行しても、別段差支はないわけである。大字寛

いため、或は後から加へられた文字かとも考へられる。何れにしても寛永十七年以後貞享元年に至るまでの四十四年間に開板されたものに間違ひはない。爾來此の版本は、冠註が附いてゐる爲かと考へられるが、今日に至るまで往生要集の單行本としては最も廣く行はれて來た本のやうである。現に大正大學には同版本が七八部迄も藏せられて居る。

此の貞享本が寛永十七年本を底本として採用したといふことは、寛永十七年本が從前のものを訂正し又は誤刻したものは、殆んど皆そのまゝこれを襲用してゐることによつて知ることが出來る。間々寛永本の誤刻、又は承元複刻本並に寛永本の誤字を訂正したものも僅かにありはするが、それは冠註を附け加へたがために、自然原本の誤字を正すやうになつたもので、他の異本と校合したがための結果とは考へられぬ。特に貞享本のみの誤刻も無いわけではなく、したがつて此の便利な冠註本の出來以後も、尚寛永本の複刻が再三試みられるに至つたわけである。冠註は、毎紙三分の一上段と內側とに、細字を以て加へられて居り、字註を加へた本文中の文字には、特に圈點を附して示してある。尤も註の全然ない欄外空白のまゝの頁も可なり多い。（本文八行十四字詰、冠註側五行三十二字、冠十三行十二字詰、第一冊六十七紙、第二冊七十紙、第三冊六十六紙、第四冊五十五紙、第五冊四十八紙、第六冊七十紙。冊子本六冊。返點、送假名、振假名、字註あり。）

10 元祿十年本。（西曆一六九七）［存。留和本］

貞享本の後十三年を經て、寛永十七年本を複刻したものが、元祿十年本である。寛永本の複刻本であるがために、その分冊切り目、紙數、行數、字詰、字體等は、兩本完全に相一致する。只相違するところは、元祿本の郭內竪法が二分ばかり縮まつて居り、送假名と振假名とが幾等か改められて居る。したがつて、表紙の題簽に「訓點改正往生要集」と斷はつてある理由も首肯かれる。卷下末（第六冊）四十六丁右の終二行に「寛永十七年……開板之」とあつた場所に

元祿十年龍飛丁丑霜月吉日

8 寛永十七年本。（西暦一六四〇）〔存。留和本〕

寛永八年本の開板あつた後、僅か九年にして再び承元複刻本を基礎として新刻したものが、此の寛永十七年本である。前者の半葉八行十七字詰なるに對し、今は九行十九字詰に壓縮し、その紙型も亦前者の方が竪七分横二分大版のものを用ひてゐるために、文字が大きく上品で、その鮮明さに於ては到底後者の及ぶところではないけれども、訓點に改正を加へたところに後者の特色があり、爾來寛永八年本は同十七年本に壓倒されて自然世間に行はれなくなつたもののやうである。その題簽に「新版往生要集」といふ出版當初の題簽の尚殘つてゐる此の種の版本の存することによつてみても、「新版」と稱するに足るだけの意義が存したことを窺ひ知るのである。しかるにその刊記は、上の寛永八年本のそれと全然同一であつて、僅かに開板年時と開板者の名前とが相違するだけである。即ち「世間流布之本乃至可爲證明本而已」の次の刊記に

旹寛永十七年庚辰正月吉日
洛陽三條寺町誓願寺前
安田十兵衞開板之

とある。（九行十九字詰、第一冊三十八紙、第二冊四十四紙、第三冊四十二紙、第四冊三十四紙、第五冊三十一紙、第六冊四十六紙。冊子本六冊。返點、送假名、振假名あり。）

9 貞享元年本。（西暦一六八四）〔存。留和本〕（首書本）

寛永十七年本を採用しこれに冠註を施して出版したものが、貞享元年本である。第六冊の卷尾に承元複刻本の刊記と、寛永八年本の刊記とを併せ載せてゐる點は、上の寛永十七年本と同様であるが、その最後に

貞享元歲次甲子重陽日

といふ大きな字體の出版年月日がある。しかしそれだけが本文並に上の刊記等の字體と同じでな

而已

旹寛永八年辛未十月　日

洛陽五條坊門上柳町書林

員外沙門嘉休

とあり、したがつて此の寛永八年本以前に尚落字と謬點の多い訓點流布本があつたやうに見えるが、それが何れの版本であつたかは明かでない。特に「落字」といふことに力點をいれてゐるところからすれば、或は建長本の如き謂はゆる遺宋本を指したものでもなからうか。此の寛永八年本の出現以來、天保十年本の現れるまでの二百餘年間は、專ら留和本が行はれた時代であり、斯かる現象を出來せしめたことから逆に推し考へても、今謂はゆる「落字本」といふのが遺宋本を意味したもののやうである。現に此の寛永八年本の開板される八年前、即ち元和九年（西暦一六二三）求得の奥書をもつ遺宋本（建長五年本）の寫本一冊が大谷大學に藏せられてゐることから推察しても、當時遺宋本が相當廣く流通してゐたと考へられるのである。（尤も該本の卷末一枚目には「此壹卷不思議ニ求也。元和九年七月廿六日。天台沙門豪明」とあり、次に「肥後國居住之時求也」とあつて、その求得の困難であつたことが窺はれるけれども。）而して此の寛永八年本が原本として採用した「往古楞嚴院點本」といふのは、斯かる特別の訓點版本があつたのではなく、承元複刻本へ訓點書入れしたものを意味したもののやうに考へられる。（八行十七字詰、第一冊四十八紙、第二冊五十五紙、第四冊四十三紙、第五冊三十九紙、第六冊五十七紙。冊子大本六冊。返點、送假名あり。）

因に承元本並に建長本以來寛永八年本の新開板を見るまで、約四百年に近い長い間に承元複刻本以外別版の存するものを見ないのは、鎌倉以後の吉野、室町、安土桃山の時代といふものは主として鎌倉新興諸宗教勢發展の時期に屬するとともに、往生要集の需要は承元複刻本と建長本とによつて充たされてゐたやうである。それ等の古版本の今現に尚相當殘存してゐることによつて知ることが出來る。

様に新複刻本に屬する。その三本の中にも亦、料紙の不同によつて、その印刷時代の相違のあることとが知られるのである。

承元四年本が一本として現存しない今日、謂はゆる留和本としての最古版本は此の承元複刻本であり、その卷尾の刻記たる

永元四年四月八日刻彫畢願主大法師實眼勵自力於自心抛財寶於佛界迄功于一百枚但此模者先年之比有聖人勸進十方刻彫之於此所不慮之外逢失火燒失畢仍以自力刻之偏是爲四恩七世無緣法界成佛道也

も亦承元四年原板の由來を髣髴せしむるに充分である。そこにはたとへ幾等かの誤刻文字乃至脫字衍字等が存するとしても、格別此の版本が建長本以上により長く後世に影響を垂れて、往生要集諸版本の原本として採用されて來たことを思へば、本版本の往生要集版行史上に占むる地位は極めて重大なのである。（六行十七字詰、第一帖六十四葉、第二帖七十三葉、第三帖七十葉、第四帖五十六葉、第五帖六十二葉、第六帖六十五葉。粘葉綴六帖。返點、送假名なし。但し龍谷大學藏古本、帝國圖書館本、東洋文庫本等は皆等しく返點、送假名、誤字訂正等の加筆あり。）

7 寛永八年本。（西暦一六三一）［存。留和本］

現存する往生要集諸版本の中では、返點と送假名とを附して開板した最初の訓點本である。その第六冊の卷尾に

永元四年四月八日刻彫畢 云々

の承元複刻本の刊記をその儘載せてゐるところから觀ても、承元複刻本に據つて新に板を刻したものであることが知られる。但し前本の六行を八行とし、訓點を新加した關係上、自ら紙數の上に不同を生じ、又大册本となつたわけである。而して上の承元複刻本の刊記を載せた後に、

世間流布之本依繁、落字、謬點、今尋求往古、楞嚴院、點本開板之信師言置之座右備於靡忘可爲證明本

或古本云自本此文有兩本遺唐本留和本今本是遺唐本也祇園精舍無常院文有二行餘是留和本也

已上

といふ「或古本」とは、版本を意味したのか、寫本を意味したのか、若し版本のことだとすれば建保本か古梓堂文庫藏本か乃至その他の別本か、それ等の點は推量し難いけれども、要するに建長本は

故知遺唐本再治本明矣今以遺唐本開板鏤印云々

と記してゐるやうに、明かに遺宋本を以て底本とした現存最古の完本であると同時に、完本としての現存往生要集最古版本である。その將來諸版本への影響といふ點からも、亦極めて重要な地位にある。現に龍谷大學並に伊勢西來寺に藏本があり、叡山の横川にも第一第三の二帖だけを後世に補寫した建長本があるとのことである。謂はゆる留和本との相違は、分冊の切り目の不同とともに、改行の相違するところが多く、中の文章の出入、文字の相違、挾註の本文への混入等いろいろ數へられる。（六行十七字詰、第一帖七十葉、第二帖六十六葉、第三帖六十三葉、第四帖六十三葉、第五帖六十三葉、第六帖六十三葉。粘葉綴六帖。返點送假名なし。但し西來寺藏本は數次に亙り、墨、朱、黄漆等で加點並に修字を行ふ。）

6 承元複刻本。［存。留和本］

謂はゆる承元複刻本と通稱されてゐる古版本の開板年時は不明であるけれども、これが承元四年本を複刻したものであるといふ說は、卷尾刻記年號の「承元四年」とある可き「承」の字が「永」に誤つて「永元四年」となつてゐるといふところから起つた說のやうである。此の版本は龍谷大學を始め、帝國圖書館、東洋文庫、宮內省圖書寮、大谷大學、古梓堂文庫、三緣山等、可なり弘く所藏されてゐる古版本であるが、何れも皆本文中の「品」が「已」、「如」が「始」、「妄」が「忘」、「界」が「苛」、「迎」が「近」、「捉」が「投」、「堪」が「憶」、「入」が「人」、「俗」が「浴」、「當」が「常」、「塚」が「家」、「裹」が「裏」、「齋」が「齊」等といつた具合に、數多の文字を刻り誤つてゐるところからすれば、正しく複刻本の實證を示してゐるといつてよい。しかるに龍谷大學藏の四本と對校すると、同じ承元複刻本の中にも、更に新古二板木の存したことを知るので、四本中の一本だけが古複刻本に屬し、他の三本は一

返報の二文が、建保五年三月二十三日に摺寫し了つた僧印西の自筆で墨書されてゐるさうであつて、是れ亦青蓮院藏古寫本と引接寺藏寫本とに一致し、その現存最古版本たる面目を充分保つてゐるわけである。日下氏は本版を以て留和本と推定されてゐるけれども、それは後世補寫の第一帖に關してのことであつて、謂はゆる建保四年版の後の四帖はその切り目から推して遺宋本なるものの最古版とす可きものの如くである。（六行十五字詰、第三、第四、第五帖各七十一葉、第六帖六十九葉。返點、送假名なし。）

4 古梓堂文庫藏古版本。［殘缺。遺宋本］

第二帖と第五帖との二帖だけが原形を保つて居り、他の四帖は後世の補寫と雜つて綴られて居る。殊に卷末刻記のある可き第六帖が悉く後世の補寫であるため、その開板年時は不明に屬するが、第四帖の卷末に左の識語がある。

建長七年乙卯五月七日　於北京近衞西洞院交點畢

爲悲母尊靈往生極樂云々　長禪

卽ち建長七年以前の版本であり、それが建長五年本と、文字の校合に於て僅かの相違あるを除いては殆んど一致し、その行數、字詰並に葉數までも亦完全に一致する。しかしその摺本の紙質、並に摺寫文字が、建長五年本以前の古本であることを示す。（六行十七字詰、第二帖六十六葉、第五帖六十三葉。返點、送假名なし。）

尙、古梓堂文庫にはこれと別版の黃紙摺第四帖一冊がある。（六行十七字詰、六十三葉。返點、送假名なし。）その版式は建長五年本と同一であるけれども、文字の校合に於て僅かの不同がある。

5 建長五年本。（西曆一二五三）［存。遺宋本］

承元四年の留和本が開板されてから四十三年目、建保四年の遺宋本が開板されてから三十七年目に當る建長五年に新刻された、謂はゆる自稱遺唐本がこれである。その第六帖卷末の刻記は上に出した如くであつて、そこに

とある。したがつて承元四年(西暦一二一〇)よりも前に、或る聖人あつて十方を勸進して刻彫したもののあつたことが知られるのである。ところが、偶々正智院藏古寫本の奥書を見ると「異本奥書曰」として

往生要集者一代聖教之肝心九品往生之目足也流布之雖多摺寫之本惟尠仍彫文字於形木整句偈於貫花其志相企共力不叶祈請三寶勸進諸人以其助成熟此功德縱祕之閫內將弘之世間若有借請之輩可勿恪惜之心而已　　于時仁安三年六月十九日彫刻畢

とある。即ち平安末期(仁安三年)に於て未だ摺寫の本の尠かつた頃文字を形木に彫つて版行したものの存した事實が知られるのであり、それが諸人を勸進してその助力によつて出來上つたといふ點が、承元版の刻記に述べてゐるところと完全に一致するのである。果して然りとすれば、それは仁安三年刻成の往生要集本であつたといふことになる。しかるに、本版木は失火に逢つて全部燒失してしまつたらしく、その版本も亦知るところがない。

2 承元四年本。(西暦一二一〇)［缺。留和本］

仁安三年刻成の版木が全部燒失したために、それより四十二年後の承元四年に、大法師實眼によつて模刻されたものである。しかるに、本版本も亦今日何處にもこれを見出すことが出來ないので、謂はゆる承元複刻版と推定されてゐる古本によつて、僅かにその面影を知るに止まるものである。

3 建保四年本。(西暦一二一六)［殘缺。遣宋本］

これは現に日下無倫氏の藏本であり、その報ぜらるゝところによれば、第一帖が足利末期の補寫、第二帖が別版を以て補つた不揃本ではあるけれども、後の四帖が建保四年の刻記をもつ古本の原形を保つものださうである。(眞宗史の研究五三八頁以下參照)したがつて現存する往生要集諸版本での最古本といふことになる。版式は一面六行十五字詰で、他の何れの版本とも相違し、又最終卷末附載の遣唐消息並に

がある。前者は大正新脩大藏經本の原本として採用された本であり、後者は眞盛上人捧持本と稱せられ、天保十年本並に惠心僧都全集本（大日本佛教全書本）に於て校合に用ひられた本である。

往生要集の原本はもとより漢文であるが、鎌倉時代に於て既に假名雜りに延書きしたものが行はれたらしく、最近鎌倉寫本と推定される和訓往生要集卷上本、卷中本の二卷（古筆家は後京極良經筆と稱す）が京都の淨福寺に發見されたといふことであるし、又

安養寺釋淨性依所望書寫畢　于時享德三甲戌卯月十七日（西暦一四五四）

の奥書ある蓮如上人眞筆本と稱する江州安養寺所傳、明性寺藏の延書本殘缺十卷の存在が傳へられて居る。前者は僅か殘缺二卷本ではあるけれども、本文は平假名、使用漢字にはパラルビ程度に片假名を附してある由、したがつて我が中世の國語國文資料としても貴重なものと觀られ、漢文和譯往生要集の古き實例としても亦參考に値するものである。したがつて、不完本ながら近き將來に於て何等かの形に於て公刊することが豫定されて居る。而して後者も亦同樣の意味に於て參照の價値があり、昭和八年刊行の眞宗七祖聖教本の訓點は大體それを參考として附せられてゐる由である。

次に往生要集の版本について之を觀るに、左の二十三種が數へられ、今それ等各版本の大要を左に略說して置く。

1 仁安三年本。（西暦一一六八）〔缺。留和本〕

往生要集版本の最初が何れであつたかは明言することは出來ないが、謂はゆる承元複刻版と稱せられてゐる古版の刻記には、

永元四年四月八日刻彫畢乃至但此模者先年之比有聖人勸進十方刻彫之於此所不慮之外逢失火燒失畢仍以自力刻之云々

たと思ふのである。

三　諸本略解説

惠心僧都の往生要集は、その著作の翌年直ちに宋に贈られて宋皇帝はじめ廣く支那朝野の歸仰を受くるに至つたとさへ傳へられてゐる位であるからして、況や我が本朝に在つても亦廣く傳寫してこれを信奉したものと觀なければならぬ。現にその實證の一として、幸ひ

長徳二年七月二十六日寫了長胤（西暦九九六）

の奥書のある法隆寺顯眞所持本中卷一册（故山田文昭氏藏本）が存して居るのであり、既に僧都生存中五十五歳の時の筆寫本である。僅か中卷一册で、而も全五十五紙百九葉中、第二、四、十三、十五、四十四の五紙十葉を缺く殘缺本である（龍谷學報三一七號口繪參照）ことは如何にも殘念であるが、現存する往生要集としては最も貴重な最古の寫本である。而して此の殘缺現存の最古寫本は、鎌倉時代の一寫本（上卷のみ、奥書なし）と共に故上杉文秀氏によつて天保本と對校されて現に惠心僧都全集本（大日本佛教全書本）の中に採用されて居るのである。山田氏の歿後、此の古寫本はその遺族から上杉氏に贈られ、今は上杉慧岳氏所藏の由である。

次に上中下三卷揃つた古寫年時の明確なものとしては、

承安元年十二月十一日書寫畢　沙門弘惠本也（西暦一一七一）

の奥書ある青蓮院藏本がある。最近玻璃版出版の噂もあるが、大正新脩大藏經本の中に對校された乙本である。

此の他、筆寫年時不明の古寫本としては

高野山正智院藏本

武生引接寺藏本

斯かる場合も亦建長本の方が正しいやうである。

しかるに遺宋本を以て任じた後世の諸版本、卽ち天保本、明治十年本、惠心僧都全集本、眞宗七祖聖教本等が、建長本を底本として他の諸本を校合したことは全然無意義なことではなかつたとしても、建長本の長所を捨てて却つて他本の誤謬を採用し、又は勝手な脫文等を敢てして、次第に往生要集原本の形を遠ざかることとなつたのは、甚だ遺憾と云はなければならぬ。

したがつて、古來同じ遺宋本と稱せられてゐるものの中にも、建長本と天保本、並に惠心僧都全集本、明治十年本と眞宗七祖聖教本等の間には互に自ら不同と矛盾とが存するのであり、そのやうに留和本と稱せられてゐるものの中にも、亦承元複刻本と寬永貞享元祿三本とは大體に於て一致するけれども、時に寬永貞享元祿三本が建長本に一致して承元本に相違する場合があり、又承元複刻本と建長本とが一致しながら寬永貞享元祿三本と天保本、惠心僧都全集本、眞宗七祖聖教本とが上の二古版本に相違するといふやうな場合もある。殊に淨土宗全書本となれば天保本と寬永元祿本とを合糅したものであり、惠心僧都全集再版本も亦初版本以上に留和本に傾いて居るのである。大正大藏經本に至つては、一面留和本の形式を具へながら他面建長本と一致する點が亦多いのである。したがつて、現在の往生要集諸本については、簡單に遺宋本とか留和本とかいふ名前を以て區別することは出來ないのである。只その何れの系統を汲むか、又は何れを底本としたかといふことが云ひ得られるだけである。

斯くして、「遺唐本」及び「留和本」といふ用語は建長本の刻記に用ひられて以來、今日に至るまで往生要集の原典に關する常套語として用ひられて來たやうであるけれども、斯かる用語自體が果して史實的意味內容を有てるものなりや否やといふことが先づ問題となるのであり、次には現行の往生要集諸本を簡單に遺宋本と留和本との二種に區別することは正しくないといふことを聊か明かにし得

なつて居る。又、

16〔巻下、三六五頁〕「略抄」

の次に、「感禪師亦同之」の挾註六字が建長本、正智院藏寫本、青蓮院藏寫本、引接寺藏寫本、天保本、惠心僧都全集本、大正大藏經本、眞宗七祖聖教本等には加はつてゐるけれども、留和本系統の諸本には缺けて居る。法然上人の『往生要集略料簡』中の引文には「感禪師意同之」（全集二一八頁、大正八三巻一一三五頁上）とあり、『阿彌陀經釋』の中には「感禪師意亦同、已上難易意也」（全集一九七頁、大正八三巻一一二七頁中）とあつて、その間兩處の引文に不同があるけれども、此の挾註をもつことに於て遺宋本系統の諸本に一致して居るのである。

是れ等も亦建長本並にその一類の方が正本のやうに考へられる。是れ等の不同箇處について列擧を續けるならば、尙相當多數に亙る文句又は文字の出入、本文と挾註との混同、挾註の置き場所の不同等について擧げることが出來るけれども、今は省略して置く。而してそれ等相違する箇處の大概は、建長本の方が正しいやうである。尤も建長本の中にも誤刻や脫字、乃至衍字とみられるものが全然無いわけではない。

例へば、「火末虫」を「火未虫」とし（巻上、一四頁。建長本と眞宗七祖聖教本のみ）、「能誦此經」を「能誦止經」とし（巻下、三二五頁。建長本のみ）、出第五十五七」の「五」を脫し（巻上、四一頁。建長本と大正藏經本並に正智院藏寫本のみ）、此中具演無常苦空無我」の「無我」二字を脫し（巻上、六一頁。建長本と鎌倉寫本並に引接寺藏寫本）、「法華經」に「偈」一字を加へ（巻上、五三頁。建長本のみ）たりしてゐるなどが數へられるが、若し是れ等の誤字や脫字、衍字等を擧げるならば、承元複刻本の方が更に遙かに多いのである。

卽ち建長本には、誤字や脫字乃至衍字等が比較的少く、長德古寫本並に引接寺藏寫本、及び正智院藏寫本、青蓮院藏寫本等と一致する場合が多く、引用經論文の原本類とも亦符合する場合が多い。殊に文前後の關係上、後世の竄入と考へられるやうな文句又は挾註の多くは、建長本に存しないで留和本と稱せられてゐるものの方に多いのである。文字の上下入れ違ひになつてゐるものも少くないが、

であるからして、留和本の方に缺くのは脫字したものと考へられる。（但し大正大藏經本以外の後世諸版本は、悉く之を脫してゐる。）

12〔卷中、二八六頁〕「已上明念佛三昧法」の挾註八字。は、本來「觀念法門」中の善導の語であつて、挾註とす可き性質の文字ではない。したがつて、建長本、古梓堂文庫藏本、長德古寫本、正智院藏寫本、青蓮院藏寫本、引接寺藏寫本等の如く之を本文中の句として大書してある方が正しいのである。（淨土宗全書本も亦此の場合は天保本に從つて大書して居り、惠心僧都全集本、大正大藏經本も亦大書して居る。然るに遣宋本の系統に屬する眞宗七祖聖教本が留和本に從つて挾註としたことは誤りである。）

是れ等の諸點について觀れば、謂はゆる遣宋再治本と稱する建長本の方が正しくして、留和本と稱せられてゐる承元複刻本並にその系統の諸本が後世竄入又は脫字の誤謬をより多くもつてゐるといふことになるのである。此の他、尚

13〔卷中、二一二頁〕「小念見小。大念見大。文出日藏經第九」の挾註十五字。が建長本、長德古寫本、正智院藏寫本、青蓮院藏寫本、引接寺藏寫本を始め、天保本、惠心僧都全集本、大正大藏經本眞宗七祖聖教本等に缺けて、他の留和本系統の諸本に加はつて居り、

14〔卷下、三一九頁〕「優塡王作佛形像經云。作佛形像。功德無量。世々所生。不墮惡道。後皆得生無量壽佛國。作菩薩當得成佛。云云。略抄」。の挾註四十五字。も亦建長本、青蓮院藏寫本、引接寺藏寫本以下、天保本、惠心僧都全集本等に缺けて、他の留和本系統の諸本に加はつて居り、（但し今は正智院藏寫本、淨土宗全書本、大正大藏經本、眞宗七祖聖教本等も亦加へてゐる。）

15〔卷下、三三五頁〕「已上四門。總明念諸佛之利益。其中觀佛經。以釋迦爲首。般舟經。多以彌陀爲首。理實俱通一切諸佛。念佛經。通三世佛」の四十六字。は建長本、青蓮院藏寫本、引接寺藏寫本、並に天保本、淨土宗全書本、惠心僧都全集本等には挾註となつてゐるけれども、承元複刻本、寬永本、貞享本、元祿本、大正大藏經本、眞宗七祖聖教本等には大書して本文と

長本、鎌倉寫本、正智院藏寫本、青蓮院藏寫本引接寺藏寫本等は、その原本に近き正しさを示してゐるわけである。（大正大藏經本も亦缺く。但し遺宋本の系統に屬する惠心僧都全集再版本並に眞宗七祖聖教本は留和本に從つて之を加へてゐる。）

9〔卷中、二五二頁〕「又或處說云。能損大利莫過瞋。一念因緣悉焚滅。俱胝廣劫所修善。是故慇懃常捨離」の三十三字。

は、建長本、古梓堂文庫藏本、引接寺藏寫本に之を缺き、長德最古寫本も亦同樣の由である。此の前後の引文は、總べて經論名を擧げての引文であり、したがつて今の例外引文は後の竄入と觀ることが正しいのである。殊に長德最古寫本が之を缺くことに於て極めて明瞭である。しかるに、後世の留和本はもとより、建長本を底本とした諸本も亦皆誤つて之を加へて居る。（卽ち遺宋本の系統に屬する天保本、惠心僧都全集本、眞宗七祖聖教本等も亦之を加へてゐる。）

10〔卷中、二七五頁〕「三三合九種者。身口意各有。現生後自作。教使。見作隨喜也。業從三煩惱起者。三界三毒。三品煩惱」の挾註三十八字。

の中に於て、建長本、古梓堂文庫藏本、並に長德古寫本、正智院藏寫本、引接寺藏寫本等には「自作教使見作隨喜也」の九字と「三毒三品」の四字とを缺き、最後に「也」一字を加へてゐる。此の圈點文字が後世竄入のものであることは一見して明瞭である。此の際、青蓮院藏寫本が初の九字を缺きながら、後の四字を加へてゐることが注意を引く。卽ち竄入過程の中途にある一本であることを示してゐるわけである。（然るに遺宋本の系統に屬する天保本、惠心僧都全集本、眞宗七祖聖教本等も亦皆之を加へてゐる。只大正大藏經本のみ正本に從ふ。）

11〔卷中、二八四頁〕「導和尙云。」

の「尙」の次に、建長本、古梓堂文庫藏本、並に長德古寫本、正智院藏寫本青蓮院藏寫本、引接寺藏寫本等は、等しく「觀念門」の三字を加へてゐるのであるが、是れ亦原本の形を留めてゐるものと考へられる。正しく『觀念法門』からの長引文であり、斯かる長引文の場合は必ずその書名を擧げて引いてあるのが例

は惠心僧都當時の原本（宋に贈られた本）であり、留和本とは後世竄入の加はつたもの（宋へ贈つたものには無い）であるといふ意味に變へて取扱はなければならぬことになるであらう。そこで更に此の考究を進めるために、遣宋本の代表たる建長本と、留和本の現存最古版たる承元複刻本とを主とし、併せて寛永元祿本並に天保本及び古寫本等を參考として、その間の異同並に正誤について聊か調べてみよう。

5〔卷上、三七頁〕「已上諸文散在經論」の挾註八字。

は、建長本並に鎌倉寫本及び引接寺藏寫本に缺くものであるが、斯かる挾註の用語が全卷中の異例であるところからすれば、これ亦後世竄入の文字のやうである。（但し遣宋本の系統に屬する天保本、惠心僧都全集本、眞宗七祖聖教本等は留和本に從つて之を加へてゐる。）

6〔卷上、三七頁〕「不可勝說」の挾註四字。

は、建長本、天保本、惠心僧都全集本、眞宗七祖聖教本、並に鎌倉寫本、正智院藏寫本、引接寺藏寫本等は本文として大書して居るのであり、これを挾註として細書する承元複刻本等は正しくない。（淨土宗全書本、大正大藏經本は遣宋本に從つて大書してゐる。）

7〔卷上、五一頁〕「智者常懷憂。而似獄中囚。」

の「而」は、建長本、正智院藏寫本、青蓮院藏寫本、引接寺藏寫本等に於て「如」である。今は『正法念經』偈云として引かれてゐるけれども、本經に見當らず、『增一阿含經』（大正二卷六七五頁下）の「愚者常喜悅、亦如光音天、智者常懷憂、如似獄中囚」の孫引と觀られる一偈であり、そこにも亦「如」とあるところからすれば、素より「如の方が正しいとしなければならぬ。（但し遣宋本の系統に屬する天保本並に惠心僧都全集本は、校註を加へながら留和本に從つて「而」としてゐる。）

8〔卷上、五七頁〕「不放逸如是七法名聖財。」

の「不放逸」三字が剩字であることは原文、卽ち龍樹菩薩爲禪陀迦王說法要偈（大正三二卷七四六頁上）に參照するまでもなく、これが七言の偈句であるところからも極めて明瞭であるが、したがつて此の三字を缺く建

1〔卷上、六三頁〕「祇園寺無常堂四角。有頗梨鐘。鐘音中。亦說此偈。病僧聞音。苦惱卽除。得清涼樂。如入三禪。乘生淨土。況復」の四十一字。

2〔卷上、三一頁〕「或身長一尺。或身量如人。或千踰繕那。或如雪山。（大集經）」の二十二字。

3〔卷上、三六頁〕「或復有如一毛百分。或如窓中遊塵。或如十千由旬」の二十字。

の加はつてゐるのが留和本で、これを缺くものが遺宋本であり、又遺宋本の「如是諸畜生。或經一中劫。受無量苦。或遇諸違緣。數被殘害。此等諸苦。不可勝計」の「一中劫」の三字が、留和本に於て

4〔卷上、三六頁〕「一時頃。或七時頃。或有一劫。乃至百千萬億劫」の十八字。

に置き換へられてゐるといふのである。而して此の四箇處に限定して論ずる限り、建長本、天保本、明治十年本、惠心僧都全集本、眞宗七祖聖教本等は一致して遺宋本に屬し、鎌倉寫本並に引接寺藏寫本も亦同樣であるに對し、承元複刻本、寬永本、貞享本、元祿本、寬政本、嘉永本、眞宗聖典全書本、淨土宗全書本、大正大藏經本等、並に正智院藏寫本と青蓮院藏寫本とは留和本であると決定してよい。但し、第一例中「乘。生淨土」の「乘」は承元複刻本並に大正大藏經本（正智院藏寫本並に青蓮院藏寫本もか）に於て「垂」とあり、第二例中「或千踰繕那」は大正大藏經本に於て「或如千踰繕那」とあり、第四例中「或有一劫」の「有」は大正大藏經本に於て「經」とあり、更に「萬億劫」の次に「或經一中劫乃至百千萬億劫」の十二字が補加されてゐる。是れ等の異同があるけれども、正智院藏寫本並に青蓮院藏寫本の二部は、それ等を依本とした大正大藏經本とともに留和本の部類に入るのである。

上の四例に就いて之を觀るに、謂はゆる再治本を以て任ずる遺宋本の方が惠心僧都自撰の原本に近く、草稿本と稱せられてゐる留和本の方が後世の竄入を加へた加筆本の如くに考へられるのである。若し果して然りとすれば惠心僧都自筆のものに於て遺宋本と留和本との二本があつたといふ考へ方は宜しく訂正されなければならぬわけである。又遺宋本、留和本といふ呼稱も、自ら遺宋本と

建長五年在歳癸丑四月肇彫九月畢功

願主　道妙

とある。これによつて觀るに、建長板木刻成の當時旣に往生要集の異本があつて廣く世間に行はれてゐたのであり、その中から特に遺唐本と自稱した或る古本に據つて新に開板したものが、建長五年本である。卽ち往生要集に遺唐本と留和本との二本があるといふことは、旣に建長以前からの古說であり、爾來久しく此の說が採用されて來たのである。德川時代は淨土宗流行の關係上、主として謂はゆる留和本が開板されてゐるけれども、天保十年西敎寺藏版の遺宋新校本の現れるに至つてからは再び遺唐本が重要視され、明治以後現代に至る間に出た往生要集の諸本、卽ち南條師校訂七祖聖敎本、淨土宗全書本、大日本佛敎全書本(惠心僧都全集初版本)、惠心僧都全集(再版)本、大正新脩大藏經本、昭和校訂眞宗七祖聖敎本等の中に收められた往生要集は、悉く西敎寺本を直接間接の底本として遺宋本を採用して居るのである。其の間、只眞宗聖典(漢文之部)本だけは寬永本(留和本)に依つて居る。

寫本はしばらく別とし、今往生要集の版本のみに就いて云へば、仁安三年本、承元四年本、承元複刻本、寬永八年本、寬永十七年本、貞享元年本、元祿十年本、同乙本、寬政十一年本、嘉永二年本、明治四十年本等は謂はゆる留和本の系統に屬し、建保四年本、古梓堂文庫藏古版本、建長五年本、天保十年本、明治十年本、大正五年本、昭和二年本、昭和八年本等は謂はゆる遺宋本の系統に屬する。此の他留和遺宋合本とす可きものに明治四十三年本と國譯本二種があり、更に別本として昭和六年本がある。若し建長本の謂はゆる「祇園精舍無常院」の文の二行餘の有無によつて分けるならば、後の四本も亦皆留和本に入るわけであるけれども、此の四本はその系統上しばらく別途に考へて置く方が正しいのである。

果して然らば是れ等の諸本に於て、謂はゆる留和本と遺宋本と稱せられてゐるものの中に、どれだけの相違があるのであらうか。普通兩本の相違點として指摘されてゐるのは、

とあり、返報の日附には

　　二月十一日　　大宋國弟子周文德申狀

とある。しかるに寛永本、貞享本、並に今の底本とした元祿本等には「正月十五日」の上に「寛和二年」の年號が附加されて居るのであり、高野山正智院藏の古寫本にも亦「寛和二年歟」の傍註がある由である。惠心僧都の往生要集がその著作の翌年直ちに宋に贈られたといふ説が一般に傳へられてゐるが、文獻的に何時の頃まで遡り得るかは一箇の問題である。僧都の傳記類の中では横川僧都源信和尚行實（享保三年撰、西暦一七一八）に及んで漸く寛和二年遺宋のことを記して居るのであり、したがつてそれが寛永本往生要集の年號附消息文の影響であることは明かである。しかし此の消息文の中には「先師故慈惠大僧正（諱良源）作觀音讃」の語が見られ、「慈惠大師」の諡號は寛和三年の二月に宣下されてゐるのであるからして、寛和二年正月十五日の遺宋消息文とすることは明かに誤りである。少くともそれより二箇年以上後の正月十五日としなければならぬ。殊に慈惠は大師號であつて、大僧正の場合は良源である。大師號宣下直後の文に「慈惠大僧正」とあるのも少しく了解し兼ねるし、「先師」の語も亦必ずしも不當ではないが大恩師示寂直後の用語とは受け取り難い。兎も角、此の他解し難い部分の少くない消息文ではあるが、此の二通の文面によつて知る限り、往生要集はたとへその著作の翌年ではなかつたにしても、宋の一商人の手を經て支那にもたらされたのであり、ここに宋にもたらされた往生要集と和國に留められた往生要集との二本があるといふ説がなされるやうになつたやうである。

建長五年（西暦一二五三）本の刻記に

　今此要集者源出横川流傳四海但文字加減何是何非文義倶妙取捨無據廣考諸文或古本云自本此文有兩本遺唐本留和本今本是遺唐本也祇園精舍無常院文有二行餘是留和本也已上故知遺唐本再治本明矣今以送唐本開板鏤印以此功德自利々他我與衆生同會樂邦

二　遺宋留和二本說考

現在傳はつてゐる往生要集の諸本には、上の「永觀二年云々」の謂はゆる往生要集の流通分と解釋されてゐる一文一偈の次に、「佛子源信云々」の大宋國の某賓旅下に宛てた謂はゆる遺宋消息文なるもの一通（慧心僧都全集本には特に「遺唐消息」の題號を附して居る）と、大宋國の弟子周文德からの返報一通とが附載されて居る。

此の二通の文面から窺へば、僧都は西海道の諸州名嶽靈窟を頭陀中、遠客著岸（博多カ）の日に面會し、此の因緣を以て相ひ分るゝに際し僧都自撰の往生要集三卷を、先師慈惠大僧正の觀音讚、著作郎慶保胤の十六相讚と日本往生傳、及び前進士爲憲の法華經賦と共に贈り與へられたところ、周文德は後に僧都の往生要集三卷を支那天台山の國淸寺に納め、それより緇素男女貴賤五百餘人が淨財を國淸寺に施捨して、五十間の廊屋を造り、柱壁に彩畫し、內外を莊嚴して供養瞻仰するやうになり、佛法ために興隆し往生淨土の善き因緣を結ぶに至つたといふのである。而して後の傳記等の中には更に、支那の信者達は「南謨日本敎主源信大師」と唱へて禮拜し、宋の皇帝は僧都の影像を求め來つて先の往生要集と共に塔中に安置して鄭重に禮拜供養されたといふやうな記事をさへ附け加へて居るのである。どの點までが歷史的事實であつたかに就いては尙充分吟味す可き要があると思ふが、今の消息文二通が本來往生要集の卷末に附せられてゐたものでないことは、承安元年（西曆一一七一）寫靑蓮院藏本と引接寺藏古寫本、並に建保四年（西曆一二一六）古版本等に缺けてゐることによつて知ることが出來る。卽ち僧都の滅後二百年頃を經て初めて附け加へられたものが定本となつて、爾來現流の諸本悉くこれを附することになつて居るのである。

而して右の遺宋消息文の日附には

正月十五日　　天台楞嚴院某申狀

に由來したと云はれて居るのである。したがつて、若し今の往生要集が果してその賢母の逝去に直接因縁して著作されたものであつたとするならば、本文の中に、乃至は序文又は末文等に於て何等かの言及があつてもよささうに思はれるのである。尤も僧都の母清原氏の歿年に關しては、僧都の四十二歳又は四十四歳說等が行はれて居るけれども、これも明確な根據がないやうである。僧都の他著勸進往生極樂偈こそは、その慈母の鴻恩に報いんがためにとて著作されたものであつたことは明瞭であるが、今の往生要集に就いては此の點甚だ明瞭を缺くのである。

それとともに、若し往生要集が果して僧都の四十三歳から四十四歳に至る間の著作であつたとするならば、僧都の出家學道の大恩師でもあり叡山中興の祖でもあつた慈惠大師良源大僧正は、往生要集著作の眞最中である永觀三年の正月に示寂されてゐるのであるからして、そこに何等かの言葉があつてもよささうに思はれるのである。殊に僧都の淨業專修は、先師良源大僧正の感化によるところ少くなかつたと考へられるのである。しかるに、今の往生要集の中には何等恩師の長逝に觸るゝところが無い。たとへ純學術的著作に於てさへも、大恩を受けた師匠の長逝がその前後に起つたとすれば、當然その死を悼み鴻恩に謝する言辭が序文なり末文なりに附加されてよい筈である。況や今の往生要集の性質からいつても、又殊に僧都の場合は、その信心深い性情の上からいつても、一層そのことの無いといふことが不思議に思はれるのであり、したがつてそれが却つて往生要集の寛和元年著作說への疑ひを深からしむる原因となり得るやうに思ふのである。

しかし、兎も角現に往生要集の最古寫本として源信僧都在世中の長德二年(西暦九九六)寫の中卷一本が傳はつて居るのであるからして、僧都の五十三歳以前の著作であつたには間違がないやうであり、たとへ半箇年完成の一點については尙疑問が殘るにしても、從來の著作傳說を無下に拒否するといふことも愼重に考へなければならぬことと思ふのである。

し、それを僅か三卷の書の中に收めて十門組織の獨自體系を編み出すといふやうなことは並大抵な業ではなかつたと思ふ。殊に本邦に於ては前人未踏の新野を開拓し、日本淨土教門獨立の一大礎石を置くに至つたといふやうな内容的にも亦極めて圓熟した深慮のこもつた著作なるに於てをやである。もとより現存の往生要集本に就いて云へば、その中の引用經論の名目やそれ等典據の卷數指示の上等に幾等かの誤謬があり、引文の中に於ても亦剩字や脫字乃至誤字等が決して尠くはない。而してそれ等が異本によつて訂正され得る場合もあるが、諸本擧つて誤つてゐるやうな場合も比較的多い。したがつて、中には傳寫相承の間に起つた誤りと觀られるものもあるが、同時に僧都自身依用された原典の誤字であつたと考へられるものもある。而してそれには直接引用された經論の原典に於て既に誤つてゐたと考ふ可きものの外に、僧都が諸師既引の諸文章を間接に孫引されたがため前者の誤謬を踏襲されるに至つたものと觀なければならぬものがある。故に往生要集の中の約一千回の引文並に依據文は、その全部が全部で僧都自身直接一切藏經の中から探り出されたものでなかつたといふことだけは明かである。例へば諸經要集、法苑珠林、淨土群疑論、安樂集、往生禮讃偈、觀念法門、摩訶止觀、法華玄義、西方要決、迦才淨土論、樂邦文類、遊心安樂道、極樂淨土九品往生義といふやうな既存の諸書から孫引されたものがあり、大智度論や十住毘婆沙論のやうな論書も亦屢〻經文引用の典據として用ひられて居る。しかしそれにも關らず、尚數千卷の群書を讀破して一千文を抄出し、僅か三卷の中に要集して劃時代的の大編著を大成されるのに僅か半箇年だけで足つたであらうかどうか。兎も角、此の點が先づ疑問となる。

次に普通世間では、往生要集の著作は僧都の生母の逝去に直接關係があつたやうに喧傳されて居るのであるが、しかし往生要集の本文の中には、それらしい言葉は一箇處として見當らぬのである。もともと僧都の佛道入門と共にその並ならぬ精勵と晩年の大成とは、信心深い賢母の慈訓と鞭撻と

一　著作傳說考

惠心院の僧都源信が叡山の横川に示寂されたのが寛仁元年(西暦一〇一七)であり、往生要集の著作はそれよりも三十二年以前、即ち寛和元年(西暦九八五)僧都四十四歲の春であつたと云はれて居る。即ち現存往生要集の諸本には、何れも

永觀二年甲申冬十一月於天台山延曆寺首楞嚴院撰集斯文明年夏四月畢于其功矣云々

の末文が附載されて居るのである。(但し天保十年版のみは特に上本の卷首に移す)而して是れが謂はゆる往生要集の流通分とされてゐる一偈の說明となつて居るのである。

上の一文に據る限り、往生要集三卷は源信僧都の中年に於て僅か半箇年の間に大成された著書といふことになるのであり、此の點に關しては、古來の傳說は皆悉く一致して疑つて居らぬのである。殊にその末文が源信僧都自撰の文であるかどうか、乃至それが最初から往生要集の卷末に附せられてゐたものであるかどうか等に就いては、未だ何人も之を疑つた者がないやうである。しかし此の謂はゆる末文の內容に就いて少しく吟味すれば、必ずしも疑問がないわけではない。加之、往生要集三卷の內容を穿鑿すれば、それが僅か半箇年の間に集大成されたものであつたとはどうしても首肯し難いものがある。尤も僧都のやうな非凡の才智を以て專心從事されたことであるからして、凡人普通の考へ方では容易に臆測を許さぬ事柄ではあらうけれども、それにしても現代のやうな書籍の便宜の全くない時代に、一百六十數部數千卷の經籍を一切大藏の中から撰出して無慮一千文を抄出

一　著作傳說考

二　遣宋留和二本說考

三　諸本略解說

四　引用文獻概說

五　底本元祿本考

第一概説

註記

元祿十丁丑年

京師　東六条下珠數屋町
西村九郎右衞門

醒井五条下二丁目
小林莊兵衞

書林　寺町四条下二丁目
赤井長兵衞

爲證明本而已。

謹上

天台楞嚴院源信大師禪室法座前

永元四年四月八日。刻彫畢。願主大法師實眼。勵微力於自心。抛財寶於佛界。迄功于一百枚。但此模者。先年之比。有聖人。勸進十方。刻彫之。於此所。不慮之外。逢失火燒失畢。仍以自力刻之。偏是爲四恩七世。無緣法界。成佛得道也。

世間流布之本。依繁落字謬點。令尋求往古楞嚴院點本。開板之。信師言置之座右。備於廢忘。可

三卷。捧持詣天台國清寺。附入既畢。則其專當僧。請領狀予也。爰緇素隨喜。貴賤歸依。結緣男女。弟子伍佰餘人。各發虔心。投捨淨財。施入於國清寺。忽飾造五十間廊屋。彩畫柱壁。莊嚴内外。供養禮拜。瞻仰慶讃。佛日重光。法燈盛朗。興隆佛法之洪基。往生極樂之因緣。只在於斯。方今文德。忝遇衰弊之時。免取衣食之難。仰　帝皇之恩澤。未隔　詔勅。幷日之食甑。重欲積塵。何避飢饉之哉。伏乞。大師垂照鑒。弟子不勝。憤念之至。敬表禮代之狀。不宣謹言。

二月十一日

大宋國弟子周文德申狀

を予に請けたり。爰に緇素隨喜し、貴賤歸依して、緣を結べる男女の弟子、伍百餘人、各〻虔心を發し、淨財を投捨し、國清寺に施入して、忽ちに五十間の廊屋を飾り造れり。柱壁を彩畫し、内外を莊嚴し、供養禮拜し、瞻仰し慶讃す。佛日光りを重ね、法燈朗かなるを盛せり。佛法を興隆するの洪基、極樂に往生するの因緣は、只斯に在り。方に今、文德、忝く衰弊の時に遇へども、衣食を取るの難を免がる。帝皇の恩澤を仰いで、未だ詔勅を隔てず。幷日の食甑、重ねて塵を積まんと欲せんも、何ぞ飢饉の惑を避けん。伏して乞ふ、大師照鑒を垂れたまへ。弟子、憤念の至りに勝へず。敬んで禮代の狀を表す。不宣謹言。

二月十一日　大宋國弟子周文德申狀

謹上　天台楞嚴院源信大師禪室　法座前

欲令知。異域之有此志。嗟呼。一生苒々。兩岸蒼々。後會如何。泣血而已。不宣以狀。

寛和二年正月十五日

天台楞嚴院某申狀

大宋國某賓旅下

返報

大宋國。台州弟子。周文德。謹啓。仲春漸暖。和風霞散。伏惟法位無動。尊體有泰。不審々々。悚恐々々。唯文德入朝之初。先向方。禮拜禪室。舊冬之內。喜便信。啓上委曲。則大府貫首。豐嶋才人。附書狀一封。奉上先畢。計也。經披覽歟。鬱望之情。朝夕不休。馳憤之際。遇便脚重啓達。唯大師撰擇。『往生要集』

正月十五日　　天台楞嚴院某申狀

大宋國某賓旅下

返報

大宋國台州の、弟子周文德、謹んで啓す。仲春漸く暖かにして、和風霞散す。伏して惟みるに、法位動き無く、尊體有泰なるや。不審々々。悚恐々々。唯、文德入朝の初め、先づ方に向つて、禪室を禮拜せり。舊冬の內、便信を喜んで、委曲を啓上せり。則ち大府の貫首、豐嶋の才人に、書狀一封を附して、奉上つること先に畢んぬ。計ふに披覽を經つらん歟。鬱望の情、朝夕休まず。馳憤の際に、便脚に遇うて、重ねて啓達す。唯、大師の撰擇したまへる、『往生要集』三巻は、捧持して天台の國清寺に詣り、附入すること既に畢んぬ。則ち其の專當の僧、領狀

日。不圖會面。是宿因也。然猶方語未通。歸朝各促。更封手札。述以心懷。側聞法公之本朝。三寶興隆。甚隨喜矣。我國東流之敎。佛日再中。當今刻念極樂界。歸依『法華經』者。熾盛焉。佛子。是念極樂其一也。以本習深故。著『往生要集』三卷。備于觀念。夫一天之下。一法之中。皆四部衆。何親何疎。故以此『文』敢附歸帆。抑在本朝。猶慚其拙。況於他鄕乎。然而本發緣一願。縱有誹謗者。縱有讚歎者。併結共我。往生極樂之緣焉。又先師故慈惠大僧正。諱良源。作『觀音讚』。著作郞。慶保胤。作『十六相讚』及『日本往生傳』。前進士爲憲。作『法華經賦』。同亦贈

因なり。然れども、猶方語未だ通ぜず、歸朝各ゝ促し、更に手札を封じて、述ぶるに心懷を以てす。側かに聞く、法公の本朝には、三寶興隆す、と。甚だ隨喜す矣。我が國東流の敎も、佛日再び中る。當今、極樂界を刻念ひ、『法華經』に歸依する者、熾盛なり焉。佛子は、是れ極樂を念ずる其の一りなり。本習深きを以ての故に、『往生要集』三卷を著して、觀念するに備へり。夫れ一天の下、一法の中、皆四部の衆なり。何れか親しく、何れか疎からん。故に此の『文』を以て、敢て歸帆に附す。抑ゝ本朝に在つても、猶其の拙きを慚ず。況や、他鄕に於てを乎。然れども、本と一願を發せり。縱ひ誹謗る者有り、縱ひ讚歎る者有りとも、併我と共に、極樂に往生するの緣を結ばんと焉。又、先師故慈惠大僧正 諱良源 は、『觀音讚』を作り、著作郞慶保胤は、『十六相讚』、及び『日本往生傳』を作り、前進士爲憲は、『法華經賦』を作れり。同じく亦贈つて、異域の此の志有るものに、知らしめんと欲す。嗟呼、一生苒々たり、兩岸蒼々たり。後會如何ん。泣血而已。不宣以狀。

永観二年甲申冬十一月。於天台山延暦寺首楞嚴院。撰集斯文。明年夏四月。畢于其功矣。有一僧夢。毘沙門天。將兩卧童來。告云。源信所撰『往生要集』。皆是『經』『論』文也。一見一聞之倫。可證無上菩提。須加一『偈』。廣令流布。他日語夢。故作『偈』曰。

已依聖教及正理。
勸進衆生々極樂。
乃至展轉一聞者。
願共速證無上覺。

佛子源信。暫離本山。頭陀于西海道諸州。名嶽靈窟。適遠客著岸之

〔末文〕

永観二年甲申冬十一月、天台山延暦寺首楞嚴院に於て、斯の文を撰集し、明年の夏四月、其の功を畢へたり矣。一僧有つて夢みらく、毘沙門天、兩卧童を將ゐて來り、告げて云はく「源信撰するところの『往生要集』は、皆是れ『經』『論』の文なり。一見一聞の倫は、無上菩提を證す可し。須らく一の『偈』を加へて、廣く流布せしむべし」と。他日、夢を語る。故に、『偈』を作つて曰く、

已に聖教と正理とに依り
衆生を勸進めて極樂に生れしむ
乃至展轉へて一たびも聞かん者
願はくば共に速かに無上覺を證せん

と。

佛子源信、暫らく本山を離れて、西海道の諸州、名嶽靈窟を頭陀せるに、適ゝ遠客著岸の日、圖らざるに會面せり。是れ宿

問。因論生論。多日染筆。劬勞身心。其功非無。期何事耶。

答。依此諸功德。願於命終時。得見彌陀佛。無邊功德身。我及餘信者。既見彼佛已。願得離垢眼。證無上菩提。

往生要集卷下末終

我を引攝せよ。乃し菩提に至るまで、互に師弟と爲らん。

問ふ。因論生論、多日筆を染めて、身心を劬勞す。其の功無きに非じ。何事をか期する耶。

答ふ。此の諸の功德に依り、願はくば命終の時に於て、彌陀佛の無邊の功德の身を見たてまつることを得ん。我及び餘の信者と、既に彼の佛を見たてまつり已らば、願はくば離垢の眼を得て、無上菩提を證せん。

往生要集　卷下

是過。爲開解等。略抄非過。況今所抄。多引正文。或是諸師所出文也。又至不能出繁文者。注或云乃至。或云略抄。或云取意。是卽欲令學者。易勘本文也。

問。所引正文。誠可生信。但屢加私詞。盍招人論謗耶。

答。雖非正文。而不失理。若猶有謬。苟不執之。見者取捨。令順正理。若偏生謗。亦不敢辭。如『華嚴經』偈云。

若有見菩薩。　修行種々行。
起善不善心。　菩薩皆攝取。

當知。生謗亦是結緣。我若得道。願引攝彼。彼若得道。願引攝我。乃至菩提。互爲師弟。

文を脱するは是れ過なれども、開解等の爲に、略抄するは過に非ざるなり。況や今の所抄、多くは正文を引き、或は是れ諸師の出したまへる文なり。又繁き文を出すこと能はざるに至つては、注して或は「乃至」と云ひ、或は「略抄す」と云ひ、或は「取意す」と云へり。是れ卽ち、學者をして本文を勘へ易からしめんと欲してなり。

問ふ。引くところの正文は、誠に信を生ず可し。但、屢々私の詞を加へたるは、盍ぞ人の論謗を招かざらん耶。

答ふ。正文に非ずと雖も、而も理を失はず。若し猶謬まれる有らば、苟しくもこれを執せざれ。見ん者は取捨して、正理に順ぜしめよ。若し偏へに謗りを生ぜば、亦敢て辭せず。『華嚴經』の偈に云ふが如し。

若し菩薩の　種々の行を修行するを見て
善き不善き心を起すもの有らば　菩薩は皆攝め取る

と。當に知るべし、謗りを生ぜんも、亦是れ結緣なり。我若し道を得ば、願はくば彼を引攝せん。彼若し道を得ば、願はくば

迦才師『淨土論』三巻。幷『瑞應傳』一巻。
其餘雖多。要不過此。
2問。行人自應。學彼諸『文』何故今
勞。著此『文』耶。
答。豈不前言。如予之者。難披廣
『文』故聊抄其要耶。
3問。『大集經』云。
或抄寫經法。洗脱文字。或損壞
他法。或闇藏他經。由此業緣。今
得盲報。
云云。而今抄『經』『論』。或略多文。或
亂前後。應是生盲因。何爲自害耶。
答。天竺震旦。論師人師。引『經』『論』
文。多略取意。故知。錯亂『經』旨。
是爲盲因。省略文字。非是盲因。或
復於彼。十法行中。初書寫行。脱文

過ぎず。
2問ふ。行人自ら應に、彼の諸『文』を學ぶべし。何が故に今勞はしく、此の『文』を著せる耶。
答ふ。豈、前に言はざりしや。予が如きの者は、廣き『文』を披くこと難きが故に、聊か其の要を抄すと。
3問ふ。『大集經』に云はく、
或は經〔法〕を抄寫して、文字を洗脱し、或は他法〔眼〕を損壞し、或は他〔經〕を闇藏〔暗蔽〕せり。此の業緣に由〔故〕つて、今盲の報を得たり。
と。云云。而るに今『經』『論』を抄するに、或は多文を略し、或は前後を亂る。應に是れ、生盲の因たるべし。何ぞ、自ら害なふことを爲せる耶。
答ふ。天竺や震旦の、論師や人師、『經』『論』の文を引くに、多くは略して取意したまへり。故に知んぬ、『經』旨を錯亂するは、是れ盲の因爲るも、文字を省略するは、是れ盲の因に非ざることを。或は復た、彼の十法行の中に於て、初の書寫行に、

願。幷極樂細相。不如『雙觀無量壽經』二卷。康僧鎧譯。明諸佛相好。幷觀相滅罪。不如『觀佛三昧經』十卷。或八卷。覺賢譯。明色身法身相。幷三昧勝利。不如『般舟三昧經』三卷。或二卷。支婁迦讖譯。『念佛三昧經』六卷。或五卷。功德直共玄暢譯。明修行方法。不如上三『經』幷『十往生經』一卷『十住毘婆娑論』十四卷。或十二卷。龍樹造。羅什譯。日々讀誦。不如『小阿彌陀經』一卷。羅什譯。結偈總說。不如『無量壽經優婆提舍願生偈』或名『淨土論』。或名『往生論』。世親造。菩提留支譯。一卷。修行方法。多在『摩訶止觀』十卷。及善導和尚『觀念法門』幷『六時禮讃』各一卷。問答料簡。多在天台『十疑』一卷。道綽和尚『安樂集』二卷。慈恩『西方要決』一卷。懷感和尚『群疑論』七卷。記往生人。多在

することは、『觀無量壽經』一卷、畺良耶舍の譯。には如かず。彌陀の本願、幷に極樂の細相を說くことは、『雙觀無量壽經』二卷、康僧鎧の譯。には如かず。諸佛の相好、幷に觀相による滅罪を明すことは、『觀佛三昧經』十卷或は八卷、覺賢の譯。には如かず。色身・法身の相、幷に三昧の勝利を明すことは、『般舟三昧經』三卷或は二卷、支婁迦讖の譯。『念佛三昧經』六卷或は五卷、功德直と玄暢との共譯。には如かず。修行の方法を明すことは、上の三『經』、幷に『十往生經』一卷。『十住毘婆沙論』十四卷或は十二卷、龍樹の造、羅什の譯。には如かず。日々の讀誦は、『小阿彌陀經』一卷、羅什の譯。には如かず。偈を結んで總說するは、『無量壽經優婆提舍願生偈』或は『淨土論』と名づけ、或は『往生論』と名づく。世親の造、菩提留支の譯、一卷。には如かず。修行の方法は、多く『摩訶止觀』十卷。及び善導和尚の『觀念法門』、幷に『六時禮讃』各一卷。に在り。問答料簡は、多く天台の『十疑』一卷。道綽和尚の『安樂集』二卷。慈恩の『西方要決』一卷。懷感和尚の『群疑論』七卷。に在り。往生人を記することは、多く迦才師の『淨土論』三卷。幷に『瑞應傳』一卷。に在り。其の餘は多しと雖も、要は此れに

言不爾。是全因緣也。
三於念佛相應教文。常應受持。披讀習學。故『般舟經』偈云。

此三昧經眞佛語。
設聞遠方有是經。
用道法故往聽受。
一心諷誦不忘捨。
假使往求不得聞。
其功德福不可盡。
無能稱量其德義。
何況聞已卽受持。
以四十里。四百里。四千里。爲遠方也。

[1]問。何等教文。念佛相應。
答。如前所引西方證據。皆是其文。然正明西方觀行。幷九品行果。不如『觀無量壽經』。一卷。畺良耶舍譯。說彌陀本

阿難、言はく「善知識は、是れ半因緣なり」と。佛、言はく「爾らず、是れ全因緣なり」と。
といふ。三には、念佛相應の教文に於て、常に受持し、披讀し、習學す應し。故に『般舟經』の偈に云はく、

此の三昧經は眞の佛の語なり
設ひ遠方にも是の經有りと聞かば
道法を用ての故に往いて聽受け
一心に諷誦して忘捨れざれ
假使往き求めて聞くことを得ざらんも
其の功德の福は盡く可からず
能く其の德義を稱量るもの無し
何て況や聞已て卽ち受持たんをや。

と。四十里、百里、四千里を以て、「遠方」と爲すなり。

[1]問ふ。何等の教文か、念佛に相應せるや。
答ふ。前に引きし所の、西方證據〔の文〕の如きは、皆是れ其の文なり。然れども、正しく西方の觀行、幷に九品の行果を明

弟子。多犯禁戒。不能教令。清淨懺悔。而便與共。説戒自恣。是名愚癡僧。

已上略抄。明知。若過若不及。皆是違佛勅。其間消息。都在得意。

第十助道人法者。略有三。一須明師。善内外律。能開除妨障。恭敬承習。故『大論』云。

又如雨墮。不住山頂。必歸下處。若人憍心自高。則法水不入。若恭敬善師。功德歸之。

二須同行。如共渉嶮。乃至臨終。互相勸勵。故『法華』云。

善知識者。是大因緣。

又。

阿難言。善知識者。是半因緣。佛

第十に助道の人法

とは、略して三有り。一には、明師の、内外の律に善くして、能く妨障を開除くを須ひて、恭敬し承習せよ。故に『大論』に云はく、

又雨墮ちては、山の頂に住まらず、必ず下き處に歸するが如し。若し人、憍心つて自ら高からば、則ち法水入らず。若し善き師を恭敬せば、〔則ち〕功德は之に歸す。

と。二には、同行の、共に嶮を渉るが如くせんを須ひよ。乃至、臨終まで、互に相ひ勸め勵めよ。故に『法華』に云はく、

善知識は、是れ大因緣なり。

と。又、

即應驅遣。呵責擧處。若善比丘。見壞法者。置不呵嘖。驅遣擧處。當知是人。佛法中怨。若能驅遣。呵嘖擧處。是我弟子。眞聲聞也。乃至諸國王。及四部衆。應當勸勵。諸學人等。令得增上。戒定智慧。若有不學。是三品法。懈怠破戒。毀正法者。王者大臣。四部之衆。應當苦治。

又云。

若有比丘。雖持禁戒。爲利養故。與破戒者。坐起行來。共相親附。同其事業。是名破戒。乃至若有比丘。在阿蘭若處。諸根不利。闇鈍瞢瞢。少欲乞食。於說戒日。及自恣時。教諸弟子。清淨懺悔。見非

懈怠破戒にして、正法を毀る者有らば、王者、大臣、四部の衆は、應に苦治す當し。

と。又云はく、

若し比丘有つて、禁戒を持つと雖も、利養の爲の故に、破戒の者と、坐起行來し、共に相ひ親附し、其の事業を同じうせば、是れを破戒と名づく。乃至若し比丘有つて、阿蘭若處に在れども、諸根利ならず、闇鈍瞢瞢にして、少欲に乞食し、說戒の日、及び自恣の時に於ては、諸の弟子を教へて、清淨に懺悔せしむれども、非弟子の多く禁戒を犯すを見ては、教へて清淨に懺悔せしむること能はず、而も便ち與共に、說戒し自恣せば、是れを愚癡僧と名づく。

と已上、略抄す。明かに知んぬ。若しは過ぎ若しは及ばざるは、皆是れ佛勅に違ふ。其の間の消息は、都べて意を得るに在り。

[5]問。因論生論。於彼犯戒。出家之人。供養惱亂。得幾罪福。

答。『十輪經』偈云。

彼恒河沙佛。解脱幢相衣。

於此起惡心。定墮無間獄。

袈裟。名爲解脱幢衣。『月藏分』云。

若惱亂彼。其罪多於。出萬億佛。身血之罪。若供養之。猶得無量。阿僧祇大福德聚。

取意。

[6]問。若爾一向。應供養之。何可治之。招大罪報耶。

答。若有其力。不苦治之。彼亦得罪過。是佛法大怨。故『涅槃經』第三云。

持法比丘。見有破戒。壞正法者。

と。袈裟を名づけて、「解脱幢の衣」と爲す。『月藏分』に云はく、

若し彼を惱亂せば、其の罪は、萬億の佛身の血を出す罪よりも多し。若し之を供養せば、猶無量阿僧祇の、大福德の聚を得。

と。取意す。

[6]問ふ。若し爾らば、一向に之を供養す應し。何ぞ之を〔苦〕治して、大罪報を招く可き耶。

答ふ。若し其の力有つて、之を苦治せずんば、彼も亦罪過を得。是れ佛法の大なる怨なり。故に『涅槃經』の第三に云はく、

持法の比丘は、戒を破り、正法を壞る者の有るを見ば、卽ち應に驅遣し、呵責し、擧處すべし。若し善比丘、法を壞る者を見て、置いて呵嘖〔責〕し、驅遣し、擧處せずんば、當に知るべし、是の人は佛法の中の怨なり。若し能く驅遣し、呵嘖〔責〕し、擧處せば、是れ我が弟子にして、眞の聲聞なり。乃至諸の國王、及び四部の衆は、應に諸の學人等を勸勵めて、增上の戒・定・智慧を、得しむ當し。若し是の三品の法を學ばず、

法。擯出國土。城邑村落。不聽在寺。亦復不得。同僧事業。利養之分。悉不共同。不得鞭打。若鞭打者。理所不應。又亦不應。口罵辱。一切不應。加其身罪。若故違法。而讁罪者。是人便於。解脫退落。必定歸趣。阿鼻地獄。何況鞭打。爲佛出家。具持戒者。

略抄。

[4]問。人間擯治。差別可然。非人之行。猶未決了。『梵網經』一向拂跡。『月藏經』一向供給。那忽乖角。

答。爲知罪福旨。要須決人行。不可必決。非人所行。若制若開。各生巨益。或復如人。意樂不同。非人願樂。亦不同耳。學者應決。

者は、是の人は便ち、解脫に於て退落し、必定して阿鼻地獄に歸趣せん。何に況や、佛の爲に出家して、具に戒を持たん者を鞭打せんをや。

と。略抄す。

[4]問ふ。人間の擯治は、差別然る可し。非人の行は、猶未だ決了せず。『梵網經』には、一向に跡を拂ひ、『月藏經』には、一向に供給す。那んぞ忽ちに乖角けるや。

答ふ。罪福の旨を知らんが爲には、要は須らく人の行を決すべし。必ずしも非人の所行を、決す可からず。若しは制、若しは開、各ゝ巨益を生ず。或は復た、人の意樂の不同なるが如く、非人の願樂も、亦不同ならん耳。學者、應に決すべし。

[5]問ふ。因論生論、彼の犯戒の出家の人に於て、供養し惱亂せば、幾ばくの罪福を得るや。

答ふ。『十輪經』の偈に云はく、

恒河〔殑伽〕沙の佛の　解脫幢相の衣を被たり

此のものに惡心を起さば　定んで無間獄にぞ墮ちなん

今復以彼諸施主。寄付汝手。

上已。破戒尚爾。何況持戒。聲聞尚爾。
何況發大心至誠念佛乎。
[3]問。若破戒人。亦爲天龍。所護念
者。云何『梵網經』云。

五千鬼神。拂破戒比丘跡。

『涅槃經』云。

國王群臣。及持戒比丘。應當苦
治。驅遣呵嘖。破戒者。

耶。
答。若如理苦治。卽順佛教。若非理
惱亂。還違聖旨。故不相違。如『月
藏分』佛言。

國王群臣。見出家者。作大罪業。
大殺生。大偸盜。大非梵行。大妄
語。及餘不善。如是等類。但當如

五千の鬼神、破戒の比丘の跡を拂〔掃〕ふ。

と云ひ、『涅槃經』には

國王、群臣、及び持戒の比丘は、應に破戒の者を苦治し、驅
遣し、呵嘖す當し。

と云へる耶。
答ふ。若し如理の苦治は、卽ち佛教に順ずれども、若し非理
の惱亂は、還つて聖旨に違ふ。故に相違せざるなり。『月藏分』
に、佛の言ふが如し。

國王、群臣は、出家せる者の、大罪業たる、大殺生、大偸盜、
大非梵行、大妄語、及び餘の不善を作せるを見ば、是くの如
き等の類は、但當に法の如く、國土、城邑、村落より擯出し
て、寺に在ることを聽さざるべし。亦復た僧の事業を、同じう
することを得ざれ。利養の分〔物〕は、悉く共に同じうせざれ。
鞭打することを得ざれ。若し鞭打せば、理應ぜざる所なり。
又亦口〔業〕をもつて、罵り辱かしむ應からず。一切、其の身
に罪を加ふ應からず。若し故らに法に違して、謫罪〔罰〕せん

子。我昔行菩薩道時。曾於過去。諸佛如來。作是供養。以此善根。與我作於三菩提因。我今憐愍。諸衆生故。此以果報。分作三分。留一分自受。第二分者。於我滅後。與禪定解脱三昧。堅固相應聲聞。令無所乏。第三分者。與彼破戒。讀誦經典。相應聲聞。正法像法。剃頭著袈裟者。令無所乏。彌勒我今。復以三業相應。諸聲聞衆。比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。寄付汝手。勿令乏少。孤獨而終。及以正法像法。毀破禁戒。著袈裟者。寄付汝手。勿令彼等。於諸資具。乏少而終。亦勿令有。旋陀羅王。共相惱害。身心受苦。我

一分を留めては、自ら受く。第二の分は、我が滅後に於て、禪〔定〕解脱三昧と堅固に相應する聲聞に與へて、乏くる所無からしめん。第三の分は、彼の破戒にして經典を讀誦し、聲聞に相應して、正法像法に、頭を剃つて袈裟を著ん者に與へて、乏くる所無からしめん。彌勒。我、今復た三業相應の、諸の聲聞衆、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷を以て、汝が手に寄付す。乏少孤獨にして終らしむること勿れ。及び正法像法に、禁戒を毀破して、袈裟を著ん者を以て、汝が手に寄付す。彼等をして、諸の資具に於て、乏少にして終らしむること勿れ。亦旋陀羅王の、共に相ひ惱害して、身心に苦を受くること、有らしむること勿れ。我、今復た彼の諸の施主を以て、汝が手に寄付す」と。

と。已上。破戒尚爾り、何に況や持戒をや。聲聞尚爾り、何に況や大心を發して至誠に念佛せんを乎。

[3]問ふ。若し破戒の人も、亦天、龍の爲に護念せられなば、云何んぞ『梵網經』には

爲三惡道增長盈滿故。云云爾時復有。一切天龍。乃至一切。迦吒富單那。人非人等。皆悉合掌。作如是言。我等於佛。一切聲聞弟子。乃至若復。不持禁戒。剃除鬚髮。著袈裟片者。作師長想。護持養育。與諸所須。令無乏少。若餘天龍。乃至迦吒富單那等。作其惱亂。乃至惡心。以眼視之。我等悉共。令彼天龍。富單那等。所有諸相。缺減醜陋。令彼不復。得與我等。共住共食。亦復不得。同處戲笑。如是擯罰。已上取意。又云。

爾時世尊。告上首彌勒。及賢劫中。一切菩薩摩訶薩言。諸善男

那、人、非人等有つて、皆悉く合掌して、是くの如きの言を作さく「我等、佛の一切の聲聞の弟子に於て、乃至若しは復た、禁戒を持たざらんも、鬚髮を剃除して、袈裟の片を著けたらん者をば、師長の想を作して、護持し養育し、諸の所須を與へて、乏少るところ無からしめん。若し餘の天、龍、乃至迦吒富單那等、其の惱亂を作し、乃至惡心の眼を以て之を視ば、我等悉く共に、彼の天、龍、富單那等の、有らゆる諸の相をして、缺減て醜陋ならしめん。彼をして復た、我等と共に住み、共に食ふことを得ざらしめん。亦復た、處を同じうして戲笑することを得じ。是くの如くに擯罰せん」と。

と。已上、取意す。又云はく、

爾の時に、世尊、上首の彌勒、及び賢劫の中の、一切の菩薩摩訶薩に告げて言はく「諸の善男子。我、昔菩薩の道を行ぜし時に、曾て過去の諸佛如來に於て是の供養を作しき。此の善根を以て、我が與に、三菩提の因と作せり。我、今諸の衆生を憐愍するが故に、此の報果を以て、分つて三分と作す。

漏。應無依怙。

答。如是問難。是則懈怠。無道心者。之所致也。若誠求菩提。誠欣淨土者。寧捨身命。豈破禁戒。應以一世勤勞。期永劫妙果也。況復設雖破戒。非無其分。如『同經』佛言。

若有衆生。爲我出家。剃除鬚髮。被服袈裟。設不持戒。彼等悉已。爲涅槃印。之所印也。若復出家。不持戒者。有以非法。而作惱亂。罵辱毀呰。以手刀杖。打縛斫截。若奪衣鉢。及奪種々。資生具者。是人則壞。三世諸佛。眞實報身。則挑一切。天人眼目。是人爲欲隱沒。諸佛所有正法。三寶種故。令諸天人。不得利益墮地獄故。

答ふ。是くの如き問難は、是れ則ち懈怠にして、道心無き者の致す所なり。若し誠に菩提を求め、誠に淨土を欣はん者は、寧ろ身命を捨つるとも、豈禁戒を破らんや。一世の勤勞を以て、永劫の妙果をば期す應きなり。況や復た、設ひ戒を破ると雖も、其の分無きに非ざるをや。『同經』に、佛の言ふが如し。

若し衆生の、我が爲に出家し、鬚髮を剃除して、袈裟を被服するもの有らば、設ひ戒を持たざらんも、彼等は悉く已に、涅槃印の爲に印せらるゝなり。若し復た出家して、戒を持たざらん者をも、非法を以て而も惱亂を作し、罵り辱かしめ毀呰り、手の刀杖を以て打縛斫截し、若しは衣鉢を奪ひ、及た種種の資生具を奪ふこと有らん者は、是の人は則ち三世の諸佛の、眞實の報身を壞り、則ち一切の天人の眼目を挑るなり。是の人は、諸佛の有らゆる正法と、三寶の種とを、隱沒せんと欲するが爲の故に。諸の天人をして、利益を得ずして、地獄に墮ちしむるが故に。三惡道増長して、盈滿るが爲の故に。云云。爾の時に、復た一切の天、龍、乃至一切の迦吒富單

譬如比丘貪求者。不得供養。無所貪求。則無所乏短。心亦如是。

若分別取相。則不得實法。

又『大集』月藏分中。欲界六天。日月星宿。天龍八部。各於佛前。發誓願言。

若佛聲聞弟子。住法順法。三業相應。而修行者。我等皆共。護持養育。供給所須。令無所乏。若復世尊。聲聞弟子。無所積聚。護持養育。

又云。

若復世尊。聲聞弟子。住於積聚。乃至三業。與法不相應者。亦當棄捨。不復養育。

問。凡夫不必。三業相應。若有缺

譬へば、比丘の貪求する者は、供養を得ず、貪求する所無きは、則ち乏短る所無きが如し。心も亦是くの如し。若し分別して相を取れば、則ち實法を得ず。

と。又『大集』月藏分の中に、欲界の六天、日月星宿、天龍八部、各々佛の前に於て、誓願を發して言はく、

若し佛〔世尊〕の聲聞の弟子にして、法に住み法に順ひ、三業相應して、而も修行せん者あらば、我等皆共に、護持し養育し、所須を供給して、乏くる所無からしめん。若し復た世尊の、聲聞の弟子にして、積聚する所無からんを、護持し養育せん。

と。又云はく、

若し復た世尊の、聲聞の弟子にして、積聚に住み、乃至三業と、法との相應せざらん者は、亦當に棄捨せん、復た養育せじ。

と。

問ふ。凡夫は必ずしも、三業相應せざるなり。若し缺漏くること有らば、依怙無かる應し。

第九助道資緣者。
[1]問。凡夫行人。要須衣食。此雖小緣。能辨大事。裸餧不安。道法焉在。答。行者有二。謂在家出家。其在家人。家業自由。飡飯衣服。何妨念佛。如『木槵經』瑠璃王行。其出家人。亦有三類。若上根者。草座鹿皮。一菓一果。如雪山大士。是也。若中根者。常乞食糞掃衣。若下根者。檀越信施。但少有少有所得。卽便知足。具如『止觀』第四。況復若佛弟子。專修正道。無所貪求者。自然具資緣。如『大論』云。

智」は前の如けれど、後の四智を以て、逆まに成事智等の四に對せり。餘の異解有れども、これを煩はしくす可からず。

第九に助道の資縁とは、

[1]問ふ。凡夫の行人は、要ず衣食を須ふ。此れ小緣なりと雖も、能く大事を辨ず。裸餧にして安からずんば、道法焉ぞ在らん。
答ふ。行者に二有り。謂はく、在家と出家となり。其の在家の人は、家業自由にして、飡（餐）飯衣服あれば、何ぞ念佛を妨げん。『木槵經』の、瑠璃王の行の如し。其の出家の人に、亦三類有り。若し上根の者は、草座鹿皮、一菓一果なり。雪山大士の如き、是れなり。若し中根の者は、常乞食糞掃衣なり。若し下根の者は、檀越の信（嚫）施なり。但し少しく得る所有れば、卽便ち足るを知る。具には、『止觀』第四の如し。況や復た、若し佛弟子にして、專ら正道を修して、貪求するところ無くんば、自然に資緣を具するなり。『大論』に云ふが如し。

然猶信罪福。修習善本。願生其國。此諸衆生。生彼宮殿。壽五百歳。當不見佛。不聞經法。不見菩薩。聲聞聖衆。是故於彼國土。謂之胎生。

已上。疑佛智慧。罪當惡道。然隨願往生。是佛悲願力。『清淨覺經』以此胎生。爲中輩下輩人。然諸師所釋。不能繁出。

5問。言佛智等。其相云何。

答。憬興師。以『佛地經』五法。今名五智。謂清淨法界名佛智。以大圓鏡等四。如次當不思議等四也。玄一師。佛智如前。以後四智。逆對成事智等四也。有餘異解。不可煩之。

に云ふが如し。

若し衆生有つて、疑惑の心を以て、諸の功德を修し、彼の國に生れんと願ひ、佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了らず、此の諸の智に於て、疑惑して信ぜず、然も猶罪福を信じ、善本を修習し、其の國に生れんと願はん。此の諸の衆生は、彼の宮殿に生れ、壽五百歳のあひだ、當〔常〕に佛を見たてまつらず、經法を聞かず、菩薩、聲聞、聖衆を見ず。是の故に、彼の國土に於て、これを胎生と謂ふ。

と。已上。佛の智慧を疑ふ罪は、惡道に當れり。然れども、願に隨つて往生するは、是れ佛悲願の力なり。『清淨覺經』には、此の胎生を以て、中輩下輩の人と爲せり。然れども、諸師の所釋、繁く出すこと能はず。

5問ふ。「佛智」等と言ふは、其の相云何ん。

答ふ。憬興師は、『佛地經』の五法を以てせり。今は五智に名づく。謂はく、清淨法界を「佛智」と名づけ、大圓鏡等の四を以て、次での如く、不思議等の四に當つるなり。玄一師は、「佛

後賢人取捨。
[3]問。不信之者。得何罪報。
答。『稱揚諸佛功德經』下卷云。
其有不信。讃歎稱揚。阿彌陀佛。
名號功德。而謗毀者。五劫之中。
當墮地獄。具受衆苦。
[4]問。若無深信。生疑念者。終不往
生。
答。若全不信。不修彼業。不願求者。
理不應生。若雖疑佛智。而猶願彼
土。修彼業者。亦得往生。如『雙觀
經』云。
若有衆生。以疑惑心。修諸功德。
願生彼國。不了佛智。不思議智。
不可稱智。大乘廣智。無等無倫
最上勝智。於此諸智。疑惑不信。

に、多くは法を聞くこと難し。惡增すに非ざるが故に、一向に
無聞なるには非ず。交際るに非ざるが故に、聞くと雖も亘益無
し。六趣四生に、蠢々たる類是れなり。故に上人の中にも、亦
聞き難きもの有れば、凡愚の中にも、亦聞く者有り。此れ未だ
決せず、後賢取捨せよ。
[3]問ふ。信ぜざる者は、何なる罪報を得るや。
答ふ。『稱揚諸佛功德經』の下卷に云はく、
其れ阿彌陀佛の、名號の功德を、讃歎し稱揚するを信ぜずし
て、謗毀らん者有らば、五劫の中、當に地獄に墮ちて、具に
衆の苦を受くべし。
と。
[4]問ふ。若し深信無くして、疑念を生ずる者は、終に往生せざ
るや。
答ふ。若し全く信ぜず、彼の業を修せず、願求せざる者は、
理として生る應からず。若し佛智を疑ふと雖も、而も猶彼の土
を願ひ、彼の業を修する者は、亦往生することを得。『雙觀經』

聽聞。設許希有。猶違道理。
答。此義難知。試案之云。衆生善惡。有四位別。一惡用偏增。此位無聞法。如『法華』云。
　增上慢人。二百億劫。常不聞法。
二善用偏增。此位常聞法。如地住已上。大菩薩等。三善惡交際。謂垂捨凡。入聖之時。此位中有。一類之人。聞法甚難。適聞卽悟。如常啼菩薩。須達老女等。或爲魔所障。或爲自惑障。雖隔聞見。不久卽悟。四善惡容預。此位善惡。同是生死。流轉法故。多難聞法。非惡增故。非一向無聞。非交際故。雖聞無巨益。六趣四生。蠢々類是。故上人中。亦有難聞。凡愚之中。亦有聞者。此未決。

　問ふ。佛、往昔、具に諸の度を修したまひしも、尙八萬歲に於て、此の法を聞くこと能はざりし、と。云何んぞ薄德のもの、輒く聽聞することを得ん。設ひ希有を許さんも、猶道理に違はん。
　答ふ。此の義、知り難し。試みに、これを案じて云はく。衆生の善惡には、四位の別有り。一には、惡用偏へに增す。此の位には、法を聞くこと無し。『法華』に云ふが如し。
　增上慢の人は、二百億劫のあひだ、常に法を聞かず。
と。二には、善用偏へに增す。此の位には、常に法を聞く。〔十〕地、〔十〕住已上の、大菩薩等の如きなり。三には、善惡交際る。謂はく、凡を捨てゝ、聖に入らんと垂るの時なり。此の位の中には、一類の人有つて、法を聞くこと甚だ難きも、適ゝ聞くことをえば卽ち悟る。常啼菩薩、須達の老女等の如きなり。或は魔の爲に障へられ、或は自らの惑の爲に障へられて、聞見することを隔てりと雖も、久しからずして卽ち悟る。四には、善惡容預なり。此の位の善惡は、同じく是れ生死流轉の法なるが故

歡喜踊躍。身毛爲起。如拔出者。皆悉宿世宿命。已作佛事。其有人民。疑不信者。皆從惡道中來。殃惡未盡。此未得解脫也。

略抄。又『大集經』第七云。

若有衆生。已於無量。無邊佛所。殖衆德本。乃得聞是。如來十力。四無所畏。不共之法。三十二相。乃至下劣之人。不能得聞。如是正法。假使得聞。未必能信。

已上。當知。生死因緣。不可思議。薄德得聞。難知其緣。如烏豆聚。有一綠豆。但彼雖聞。而不信解。是卽薄德。之所致耳。

問。佛於往昔。具修諸度。尚於八萬歲。不能聞此法。云何薄德。輒得

答ふ。『無量清淨覺經』に云はく、

善男子、善女人あつて、無量清淨佛の名〔聲〕を聞いて、歡喜し踊躍し、身〔衣〕の毛爲に起つて、拔き出す〔が如くする〕者は、皆悉く宿〔前〕世の宿命に、〔已に〕佛事〔道〕を作せり。其れ人民有つて、疑うて信ぜざる者は、皆惡道の中より來つて、殃惡未だ盡きず、此れ未だ解〔度〕脫を得べからざるなり。

と。略抄す。又『大集經』の第七に云はく、

若し衆生有つて、已に無量無邊の、佛の所に於て、衆の德本を殖ゑたるものは、乃ち是の如來の、十力、四無所畏、不共の法、三十二相を聞くことを得。乃至下劣の人は、是くの如きの正法を、聞くことを得ること能はず。假使聞くことを得るも、未だ必ずしも信ずること能〔得〕はず。

と。已上。當に知るべし、生死の因緣は、不可思議なり。薄德にして聞くことを得たりとも、其の緣を知ること難し。烏豆の聚に、一の綠豆有るが如し。但し彼聞くと雖も、而も信解せざるは、是れ卽ち薄德の致す所なる耳。

義不相違。念佛三昧。亦復如是。偏敎三昧。當敎爲勝。圓人三昧。普勝諸行。又定有二。一者慧相應定。是爲最勝。二者暗禪。未可爲勝。念佛三昧。應是初攝。

第八信毀因緣者。『般舟經』云。

不獨於一佛。所作功德。不於若二。若三若十。悉於百佛所。聞是三昧。却後世時。聞是三昧者。書學誦持經卷。最後守一日一夜。其福不可計。自致阿惟越致。所願者得。

問。若爾聞者。決定應信。何故雖聞。有信不信。

答。『無量淸淨覺經』云。

善男子善女人。聞無量淸淨佛名。

には、暗禪。未だ勝と爲す可からず。念佛三昧は、應に是れ初の攝なるべし。

第八に信毀の因緣

とは、『般舟經』に云はく、

獨り一佛の所に於て、功德を作らず。〔若しは〕二、若しは三、若しは十に於てのみせるにもあらず。悉く百佛の所に於て、是の三昧を聞き、却りて後の世の時に、是の三昧を聞く者なり。經卷を書學し誦持して、最後に守ること一日一夜すれば、其の福計る可からず。自ら阿惟越致に致り、願ふ所のものを得るなり。

と。

問ふ。若し爾らば、聞く者は決定して、應に信ずべし。何が故に、聞くと雖も、信ずると信ぜざると有りや。

欲成佛道常在禪。
若不能住阿蘭若。
應當供養於彼人。
已上。汎爾禪定。尚既如是。況念佛三昧。是王三昧耶。
2問。若禪定業。勝讀誦解義等。云何『法華經』分別功德品。以八十萬億。那由他劫。所修前五。波羅蜜功德。挍量聞『法華經』一念信解功德。百千萬億分之一分。何況廣爲他說耶。
答。此等諸行。各有淺深。謂偏圓教。有差別故。若當教論。勝劣如前。若諸教相對。偏教禪定。不及圓教。讀誦事業。『大集』『寶積』約一教論。『法華』挍量。偏圓相望。是故諸『文』

應に彼の人を供養すべし
と。已上。汎爾の禪定すら、尚既に是くの如し。況や念佛三昧は、是れ王三昧なるを耶。
2問ふ。若し禪定の業にして、讀誦、解義等よりも勝れたらば、云何んぞ『法華經』の、分別功德品に、八十萬億那由他劫に修する所の、前の五波羅蜜の功德を以て、『法華經』を聞いて一念信解する功德に挍量して、百千萬億分の一分なりとする。何に況や、廣く他の爲に說かんを耶。
答ふ。此れ等の諸行には、各ゝ淺深有り。謂はく、偏圓の教に、差別有るが故なり。若し當教にて論ずれば、勝劣は前の如し。若し諸教相對して論ずれば、偏教の禪定は、圓教の讀誦事業には及ばず。『大集』『寶積』は、一教に約して論じ、『法華』の挍量は、偏圓相ひ望む。是の故に諸『文』の義、相違せざるなり。念佛三昧も、亦復た是くの如し。偏教の三昧は、當教に勝れたりと爲し、圓人の三昧は、普く諸行に勝れたり。又定には、二有り。一には、慧と相應せる定。是れを最勝と爲す。二

若能七日在蘭若。
攝根得定福多彼。
乃至
閑靜無爲佛境界。
於彼能得淨菩提。
若人謗彼住禪者。
是名毀謗諸如來。
若人破塔多百千。
及以焚燒百千寺。
若有毀謗住禪者。
其罪甚多過於彼。
若有供養住禪者。
飲食衣服及湯藥。
是人消滅無量罪。
亦不墮於三惡道。
是故我今普告汝。

乃至
閑靜無爲は佛の境界なり
彼に於て能く淨菩提を得る
若し人彼の住禪の者を謗らば
是れ諸の如來を毀謗しまつると名づく
若し人塔を破すこと多百千
及以百千の寺を焚燒すとも
若し住禪の者を毀謗ること有らば
其の罪甚多しく彼よりも過ぐ
若し住禪の者を供養するに
飲食、衣服、及び湯藥をもつてする有らば
是の人無量の罪を消滅し
亦三惡道に墮つることなし
是の故に我今普く汝に告ぐ
佛道を成ぜんと欲はゞ常に禪に在れ
若し阿蘭若に住むこと能はずば

讀誦修行。爲人演説。是人乃爲。供養於我。何以故。諸佛菩提。從多聞生。不從衆務。而得生也。乃至若一閻浮提。營事菩薩。於一讀誦。修行演説。菩薩之所。應當親近。供養承事。若一閻浮提。讀誦修行。演説諸菩薩等。於一修勤。禪定菩薩。亦當親近。供養承事。如是善業。如來隨喜。如來悦可。若於勤修。智慧菩薩。承事供養。當獲無量。福德之聚。何以故。智慧之業。無上最勝。出過一切。三界所行。

『大集』月藏分偈云。

若人百億諸佛所。
於多歲數常供養。

乃ち我を供養すと爲す。何を以ての故とならば、諸の佛の菩提は、多聞より生じて、衆務より生ずることを得ざればなり。乃至 若し一閻浮提の、營事の菩薩は、一りの讀誦し、修行し、演説する菩薩の所に於て、應當に親近し、供養し、承事すべし。若し一閻浮提の、讀誦し、修行し、演説する諸の菩薩等は、一りの禪定を勤修する菩薩に於て、亦當に親近し、供養し、承事すべし。是くの如きの善業をば、如來は隨喜し、如來は悦可す。若し智慧を勤修する菩薩に於て、承事し、供養せば、當に無量の福德の聚を獲べし。何を以ての故とならば、智慧の業は、無上最勝にして、一切三界の所行に出過れたればなり。

と。『大集』月藏分の偈に云はく、

若し人百億諸佛の所にて
多の歲數常に供養しまつらんも
若し能く七日蘭若に在み
根を攝めて定を得ん福彼よりも多し

如是。或有勤行精進。或有以信方便易行。疾至阿惟越致。乃至

阿彌陀等佛。及諸大菩薩。

稱名一心念。亦得不退轉。

已上。『文』中擧。過去現在。一百餘佛。彌勒。金剛藏。淨名。無盡意。跋陀婆羅。文殊。妙音。師子吼。香象。常精進。觀世音。勢至。等一百餘大菩薩。其中廣讚。彌陀佛也。於諸行中。唯念佛行。易修證上位。知是最勝行。又『寶積經』九十二云。

若有菩薩。多營衆務。造七寶塔。遍滿三千。大千世界。如是菩薩。不能令我。而生歡喜。亦非供養。恭敬於我。若有菩薩。於波羅蜜。相應之法。乃至受持。一四句偈。

の乘船は則ち樂しきが如し。菩提の道も、亦是くの如し。或は勤行精進する有り、或は信の方便易行を以て、疾く阿惟越致に至る有り。乃至

阿彌陀等の佛　及び諸の大菩薩の

名を稱へて一心に念ずるも　亦不退轉を得る

と。已上『文』の中には、過去と現在の、一百餘の佛と、彌勒、金剛藏、淨名、無盡意、跋陀婆羅、文殊、妙音、師子吼、香象、常精進、觀世音、勢至等の、一百餘の大菩薩とを擧げ、其の中に、廣く彌陀佛を讃めたてまつれるなり。諸行の中に於ては、唯念佛の行のみ、修し易くして上の位を證す。知んぬ、是れ最勝の行なることを。又『寶積經』の九十二に云はく、

若し菩薩有つて、多く衆務を營み、七寶の塔を造つて、遍く三千大千世界に滿たさんに、是くの如きの菩薩は、我をして歡喜を生ぜしむること能はず、亦我を供養し恭敬するにも非ず。若し菩薩有つて、波羅蜜相應の法に於て、乃至一の四句偈を受持し、讀誦し、修行し、人の爲に演說せん。是の人は、

到於彼岸。安穩無懼。行念佛者。
如大力士。挽心王鏁。到彼慧岸。
六云。
譬如劫盡。大地洞燃。唯金剛山。
不可摧破。還住本際。念佛三昧。
亦復如是。行是定者。住過去佛。
實際海中。
已上略抄。又『般舟經』問事品。說念佛三昧云。
常當習持。常當守不。復隨餘法。
諸功德中。最尊第一。
已上。又至不退轉位。有難易二道。言易行道。卽是念佛。故『十住婆沙』第三云。
如世間道。有難有易。陸路步行
則苦。水道乘船則樂。菩提道亦

て海の邊に到り、髻の明珠を解いて、持つて船師を雇ふ。彼の岸に到り〔已つ〕て、安穩にして懼れ無きが如し。念佛を行ずる者は、大力士の、心王の鏁を挽れて、慧の彼岸に到るが如し。

と。六に云はく、

譬へば、劫の盡くるとき、大地洞燃くに、唯金剛山のみ、摧破す可からず、還つて本際に住まるが如し。念佛三昧も、亦復た是くの如し。是の定を行ずる者は、過去の佛の、實際海の中に住す。

と。已上、略抄す。又『般舟經』の問事品に、念佛三昧を說いて云はく、

常に當に習ひ持つべし。常に當に守つて、復た餘の法に隨はざるべし。諸の功德の中に、最尊第一なり。

と。已上。又不退轉の位に至るに、難易の二道有り。易行道と言ふは、卽ち是れ念佛なり。故に『十住婆沙』の第三に云はく、

世間の道に、難有り易有り。陸道の步行は則ち苦しく、水道

三云。

譬如長者。將死不久。告一女子。我今有寶。寶中上者。汝得此寶。密藏令堅。莫令王知。女受父勅。持摩尼珠。及諸珍寶。藏之糞穢。室家大小。皆亦不知。値世飢饉。持如意珠。隨意語。卽雨百味飮食。如是種々。隨意得寶。念佛三昧。堅心不動。亦復如是。

四云。

譬如大旱。不能得雨。有一仙人誦呪。神通力故。天降甘雨。地出涌泉。得念佛者。如善呪人。

五云。

譬如力士。數犯王法。幽閉囹圄。逃到海邊。解髻明珠。持雇船師。

と。三に云はく、

譬へば、長者の將に死せんこと久しからざる「を知つて」、一りの女子に告ぐ「我今寶有り、寶の中の上れたる者なり。汝、此の寶を得て、密藏して堅からしめよ。王をして知らしむること莫れ」と。女、父の勅を受けて、摩尼珠及び諸の珍寶を持つて、これを糞穢に藏す。室家の大小、皆亦知らず。世の飢饉に値ひ、如意珠を持つて、「我が爲に食を雨らせ」との一語に隨つて、卽ち百味の飮食を雨らす。是くの如く種々、意の隨に寶を得るが如し。念佛三昧の、堅心不動なることも、亦復た是くの如し。

と。四に云はく、

譬へば、大旱して、雨を得ること能はず。一りの仙人有つて、呪を誦ふるに、神通力の故に、天より甘雨を降らし、地より涌泉を出さんが如し。念佛し得る者は、善く呪する人の如し。

と。五に云はく、

譬へば、力士、數々王法を犯して、囹圄に幽閉せらる。逃げ

以諸庫藏。委付其子。其子得已。隨意遊戲。忽於一時。値有王難。無量衆賊。競取藏物。唯有一金。乃是閻浮檀那紫金。重十六兩。金鋌長短。亦十六寸。此金一兩價直。餘寶百千萬兩。卽以穢物。纒裹眞金。置泥團中。衆賊見已。不識是金。脚踐而去。賊去之後。財主得金。心大歡喜。念佛三昧。亦復如是。當密藏之。

二云。

譬如貧人。執王寶印。逃走上樹。六兵追之。貧人見已。卽呑寶印。兵衆疾至。令樹倒僻。貧人落地。身體散壞。唯金印在。念佛心印不壞。亦復如是。

佛、阿難に告げたまはく。譬へば、長者の將に死せんこと久しからざる〔を知つて〕、諸の庫藏を以て、其の子に委付す。其の子得已つて、意の隨に遊戲す。忽ち一時に於て、王難有るに値ひ、無量の衆賊〔來つて〕、藏の物を競ひ取る。唯、一の金有り。乃ち是れ閻浮檀那紫金にして、重さ十六兩なり。金鋌の長短、亦十六寸なり。此の金一兩の價直は、餘の寶の百千萬兩なり。卽ち穢物を以て、眞金を纒裹み、泥團の中に置く。衆賊見已つて、是れ金なりと識らず、脚をもつて踐んで而も去る。賊去りて後、財主金を得て、心大に歡喜するが如し。念佛三昧も、亦復た是くの如し。當に之を密藏すべし。と。二に云はく、

譬へば、貧人、王の寶印を執り、逃走して樹に上る。六兵これを追ふに、貧人見已つて、卽ち寶印を呑む。兵衆疾く至つて、樹をして倒僻〔覆〕さしむ。貧人地に落ちて、身體散壞し、唯金印のみ在るが如し。念佛の心印の壞れざることも、亦復た是くの如し。

理不相違。

第七諸行勝劣者。

[1]問。往生業中。念佛爲最。於餘業中。亦爲最耶。

答。餘行法中。此亦最勝。故『觀佛三昧經』有六種譬。一云。

佛告阿難。譬如長者。將死不久。

たび佛を聞かば、定んで菩提を成ずと說き、或は應に勤修すること、頭の燃ゆるを救ふが如くすべしと說き、又『華嚴』の偈には

人、他の寶を數ふるも　自ら半錢の分無きが如し
法に於て修行せざらば　多聞するも亦是の如し

と云ふや。

答ふ。若し速かに解脫せんと欲はゞ、勤めずしては分無きが如し。若し永劫の因を期さば、一たび聞くも亦虛しからず。是の故に諸『文』の、理相違せざるなり。

第七に諸行の勝劣

とは。

[1]問ふ。往生の業の中には、念佛を最と爲さんも、餘業の中に於ても、亦最と爲る耶。

答ふ。餘の行法の中においても、此れ亦最勝なり。故に『觀佛三昧經』には、六種の譬有り、一に云はく、

又『大經』明。如來決定說義云。
一切衆生。悉有佛性。如來常住。無有變易。
又云。
一切衆生。定得阿耨菩提故。是故我說。一切衆生。悉有佛性。
又云。
一切衆生。悉皆有心。凡有心者。定當得成。阿耨菩提。
[9]問。何故諸『文』所說不同。或說一聞佛。定成菩提。或說應勤修。如救頭燃。又『華嚴』偈云。
如人數他寶。自無半錢分。
於法不修行。多聞亦如是。
答。若欲速解脫。不勤如無分。若期永劫因。一聞亦不虛。是故諸『文』。

是れ何れの果なり耶。
答ふ。初めには機に隨つて、三乘の果を得と雖も、究竟しては必ず、無上の佛果に至る。『法華經』に云ふが如し。
十方佛土の中には　唯一乘の法のみ有つて
二も無く亦三も無し　佛の方便說をば除く
と。又『大經』には、如來決定說の義を明して云はく、
一切の衆生は、悉く佛性有り。如來は常住にして、變易有ること無し。
と。又云はく、
一切の衆生は、定んで阿耨〔多羅三藐三〕菩提を得るが故に、是の故に我說く、一切の衆生は、悉く佛性有り、と。
と。又云はく、
〔一切の〕衆生は、悉く皆心有り。凡そ心有る者は、定んで當に阿耨〔多羅三藐三〕菩提を、成ずることを得べし。
と。
[9]問ふ。何が故に諸『文』の、說くところ不同にして、或は一

增於。衆生妄心。如何以惡心。得大
涅槃樂耶。
答。以惡心故。墮三惡道。以一緣如
來故。必至涅槃。是故不違。因果道
理。謂。
彼衆生。墮地獄時。於佛生信。生
追悔心。由此展轉。必至涅槃。
見『大悲經』。染心緣如來。利益尚如是。何
況淨心。一念一稱。佛大恩德。以之
可知。
問。諸『文』所說。菩提涅槃。於三
乘中。是何果耶。
答。初雖隨機。得三乘果。究竟必至。
無上佛果。如『法華經』云。
十方佛土中。唯有一乘法。
無二亦無三。除佛方便說。

に於て、供養を施作すること非かれ。何を以ての故とならば、
若し如來の所に於て、不善の業を起さば、當に悔ゆる心有つ
て、究竟して必ず涅槃に至ることを得べけんも、外道の見に
隨はゞ、當に地獄、餓鬼、畜生に墮つべければなり。
と。
問ふ。此の『文』は、便ち因果の道理に違ひ、亦復た衆生の
妄心を增さん。如何んぞ惡心を以て、大涅槃の樂を得ん耶。
答ふ。惡心を以ての故に、三惡道に墮ち、一たび如來を緣ず
るを以ての故に、必ず涅槃に至る。是の故に、因果の道理に違
はざるなり。謂はく、
彼の衆生、地獄に墮つる時、佛に於て信を生じ、追悔の心を
生ず。此れに由つて展轉して、必ず涅槃に至る。
と。『大悲經』に見ゆ。染心に如來を緣ずるの、利益すら尚是くの如
し。何に況や淨心に、一念一稱せんをや。佛の大恩德は、これ
を以て知んぬ可し。
問ふ。諸の『文』に說く所の、菩提涅槃は、三乘の中に於て、

師。所不能及也。如是寂意。若菩薩奉行法身。假使衆生。婬怒癡盛。男女大小。欲想慕樂。卽共相娛。貪欲塵勞。悉得休息。

信解觀察。無陰種諸入。則名奉行法身也。 奉行法身菩薩尚爾。何況證得法身佛耶。

6問。如欲想緣。有此利益。誹謗惡厭。亦有益耶。

答。既云婬怒癡。明非唯欲想。又『如來祕密藏經』下卷云。

寧於如來。起不善業。非於外道。邪見者所。施作供養。何以故。若於如來所。起不善業。當有悔心。究竟必得。至於涅槃。隨外道見。當墮地獄。餓鬼畜生。

7問。此『文』便違。因果道理。亦復

或は大豪の國王、太子、大臣、百官、貴姓、長者有つて、耆域醫王の所に來到り、藥童子を視て、與共に歌ひ戲むれんに、其の顏色を相ば、病皆除ることを得て、便ち安穩寂靜にして、無欲なることを致せり。寂意、且く觀よ。其の耆域醫王の、世間を療治せるは、其の餘の醫師の、及ぶ能はざる所なりき。是くの如く、寂意、若し菩薩あつて、法身を奉行せば、假使衆生の、婬・怒・癡の盛んなる、男女大小、欲想〔相〕をもつて慕ひ樂はんに、卽ち共に相ひ娛しまんも、貪欲の塵勞は、悉く休息することを得ん。

と。陰種諸入無しと信解し觀察するを、則ち「法身を奉行す」と名づくるなり。法身を奉行する菩薩にして尚爾り、何に況や法身を證得せる佛を耶。

6問ふ。欲想をもつて緣ずるに、此の利益有るが如く、誹謗り惡み厭ふも、亦益有り耶。

答ふ。既に婬・怒・癡と云へり。明けし、唯欲想のみには非ず。又『如來祕密藏經』の下卷に云はく、

寧ろ如來に於て、不善の業を起すとも、外道、邪見の者の所

五百兩車。淺近世法。猶難思議。何況出世。甚深因果。唯應信仰。不可疑念。

問。以染心緣於如來者。亦有益耶。

答。『寶積經』第八。密迹力士。告寂意菩薩云。

耆域醫王。合集諸藥。以取藥草。作童子形。端正殊好。世之希有。所作安諦。所有究竟。殊異無比。往來周旋。住立安坐。臥寐經行。無所缺漏。所顯變業。或有大豪國王太子。大臣百官。貴姓長者。來到耆域醫王所。視藥童子。與共歌戲。相見其顏色。病皆得除。便致安穩。寂靜無欲。寂意且觀。其耆域醫王。療治世間。其餘醫

と云へるや。

答ふ。諸法の因緣は、不可思議なり。譬へば、孔雀の、雷震の聲を聞いて、即ち有身むことを得、又尸利沙果の、先には形質無かりしが、昴星を見る時、果則ち出生して、長さ五寸に足るが如し。佛の名號に依つて、即ち佛因を結ぶことも、亦復た是くの如し。此の微因より、遂に大果を著すなり。彼の尼拘（拘）陀樹の、芥子許りの種より、枝葉を生じて、遍く五百兩の車を覆ふが如し。淺近の世法すら、猶思議すること難し。何に況や、出世の甚深の因果をや。唯應に信仰すべし、疑念す可からず。

問ふ。染心を以て、如來を緣ずる者も、亦益有り耶。

答ふ。『寶積經』の第八に、密迹力士、寂意菩薩に告げて云はく、

耆域醫王、諸の藥を合せ集め、以て藥草を取つて、童子の形を作れり。端正殊好にして、世に希有なり。所作安諦にして、所有究竟し、殊異なること比無かりき。往來、周旋、住立、安坐、臥寐、經行、缺漏るところ無く、顯變する所の業あり。

至發心。得一念信。雖復爲餘。惡不善業。之所覆障。墮在地獄。畜生餓鬼。乃至諸佛世尊。以佛眼。觀見此衆生。發心勝故。從於地獄。拔之令出。既拔出已。置涅槃岸。

[4]問。如此『經』意。以敬信故。遂得涅槃。若爾但一聞。應非涅槃因。既爾云何。『華嚴』偈云。

若有諸衆生。未發菩提心。
一得聞佛名。決定成菩提。

答。諸法因緣。不可思議。譬如孔雀。聞雷震聲。卽得有身。又尸利沙果。先無形質。見昴星時。果則出生。足長五寸。依佛名號。卽結佛因。亦復如是。從此微因。遂著大果。如彼尼物陀樹。從芥子許種。生枝葉。遍覆

佛、阿難に告げたまはく。捕魚師、魚を得んが爲の故に、大池水に在つて、鉤餌を安置れて、魚をして呑み食はしめんに、魚呑み食ひ已らば、池の中に在りと雖も、久しからずして出づ當きが如し。乃至阿難、一切の衆生、諸佛の所に於て、敬信を生ずることを得、諸の善根を種ゑ、布施を修行し、乃至發心して、一念の信をも得ば、復た餘の惡不善業の爲に、覆障はれて、地獄、畜生、餓鬼に墮在ちんと雖も、乃至諸の佛世尊は、佛眼を以て、此の衆生を觀見るに、發心勝れたるが故に、地獄よりこれを拔いて出でしむ。既にして拔き出し已らば、涅槃の岸に置くなり。

と。

[4]問ふ。此の『經』の意の如くんば、敬信するを以ての故に、遂に涅槃を得といふ。若し爾らば、但一たび聞かんは、涅槃の因に非ざる應し。既に爾らば、云何んぞ『華嚴』の偈に

若し諸の衆生有つて　未だ菩提心を發さざらんも
一たび佛の名を聞くことを得ば　決定して菩提を成ぜん

業轉。是故於佛。修諸善業。意樂雖異。必至涅槃。故彼『經』擧譬言。
譬如長者。依時下種。於良田中。隨時漑灌。常善護持。若是長者。於餘時中。到彼田所。作如是言。咄哉種子。汝莫作種。莫生莫長。然彼種子。必應作果。非無果實。取意略抄。
問。彼於何時。得般涅槃。
答。設雖久々。輪廻生死。善根不亡。必得涅槃。故彼『經』云。
佛告阿難。如捕魚師。爲得魚故。在大池水。安置鉤餌。令魚呑食。魚呑食已。雖在池中。不久當出。乃至阿難。一切衆生。於諸佛所。得生敬信。種諸善根。修行布施。乃

答ふ。業によつて果をうるの理は、必ずしも一同ならず。諸の善業を以て、佛道に廻向するは、是れ卽ち作業なれば、心に隨つて轉ず。鷄狗の業を以て、天の樂を樂ひ求むるは、是れ卽ち惡見なれば、業をして轉ぜしめず。是の故に、佛に於て諸の善業を修せば、意の樂異なりと雖も、必ず涅槃に至る。故に、彼の『經』に譬を擧げて言はく、
譬へば長者の、時に依つて種を良田の中に下し、時に隨つて漑灌して、常に善く護持せんに、若し是の長者、餘の時の中に於て、彼の田所に到つて、是くの如きの言を作さん「咄哉、種子よ、汝種と作ること莫れ、生ふること莫れ、長ずること莫れ」と、然れども彼の種子は、必ず應に果を作り、果實無きには非ざるが如し。
と。取意略抄す。
問ふ。彼、何れの時に於て、般涅槃を得るや。
答ふ。設ひ久々に、生死に輪廻すと雖も、善根亡びずして、必ず涅槃を得。故に、彼の『經』に云はく、

果。理必可然。若爲人天果。修善根云何。

答。或染或淨。於佛修善。雖有遠近。必至涅槃。故『大悲經』第三。佛告阿難言。

若有衆生。樂著生死。三有愛果。於佛福田。種善根者。作如是言。以此善根。願我莫般涅槃。阿難。是人若不涅槃。無有是處。阿難。是人雖不。樂求涅槃。然於佛所。種諸善根。我說是人。必得涅槃。

[2]問。所作之業。隨願感果。何樂世報。得出世果。

答。業果之理。不必一同。以諸善業。廻向佛道。是卽作業。隨心而轉。以鷄狗業。樂求天樂。是卽惡見。不令

[1]問ふ。若し菩提の爲に、佛に於て善を作さば、妙果を證得すといふこと、理必ず然る可し。若し人天の果の爲に、善根を修せば、云何ん。

答ふ。或は染にあれ或は淨にあれ、佛に於て善を修せば、遠近有りと雖も、必ず涅槃に至る。故に『大悲經』の第三に、佛、阿難に告げて言はく、

若し衆生有つて、生死の三有の、愛果に樂著れて、佛の福田に於て、善根を種ゑたらん者、是くの如きの言を作さん「此の善根を以て、願はくば我、般涅槃すること莫からん」と。阿難、是の人若し涅槃せずといはゞ、是の處有ること無けん。阿難、是の人は、涅槃を樂ひ求めずと雖も、然も佛の所に於て、諸の善根を種ゑたれば、我說く、是の人は必ず涅槃を得と。

と。

[2]問ふ。作れる業は、願に隨つて果を感くべし。何ぞ世の報を樂うて、出世の果を得るや。

第六麁心妙果者。

[1]問。若爲菩提。於佛作善。證得妙

を、知ることを得るや。

答ふ。『首楞嚴三昧經』に云はく、

大藥王有り、名づけて滅除と曰ふ。若し闘戰の時に、用以ひて鼓に塗らんに、諸の、箭に射られ、刀や矛に傷つけられたらんものも、鼓の聲を聞くことを得ば、箭出で丶毒除こるが如し。是くの如く、菩薩の、首楞嚴三昧に住せん時、その〔菩薩の〕名を聞くこと有らん者は、貪・恚・癡の箭、自然に抜け出で丶、諸の邪見の毒、皆悉く除こり滅し、一切の煩惱も、復た動發ることなし。

と。已上。諸法の眞如實相を觀見し、凡夫法と佛法との不二を見る、是れを「首楞嚴三昧を修習す」と名づく。菩薩既に爾り、何に況や佛をや。名を聞くこと既に爾り、何に況や念ぜんをや。應に知るべし、淺心に念ずるも、利益亦虛しからざるなり。

第六に麁心の妙果

とは、

答。臨終心力强。能滅無量罪。尋常稱名。不應如彼。然若觀念成。亦滅無量罪。若但稱名。隨心淺深。得其利益。應有差別。具如前利益門。

[13]問。何以得知。淺心念佛。亦有利益。

答。『首楞嚴三昧經』云。

如有大藥王。名曰滅除。若鬪戰時。以用塗鼓。諸被箭射。刀矛所傷。得聞鼓聲。箭出毒除。如是菩薩。住首楞嚴三昧時。有聞名者。貪恚癡箭。自然拔出。諸邪見毒。皆悉除滅。一切煩惱。不復動發。已上。觀見諸法眞如實相。見凡夫法佛法不二。是名修習首楞嚴三昧。菩薩既爾。何況佛。聞名既爾。何況念。應知。淺心念利益亦不虛。

の處にか輕く受くるや。

答ふ。『雙觀經』に、彼の土の胎生の者を說いて云はく、

五百歲の中、三寶を見たてまつらず、供養し諸の善本を修することを得ず。此れを以て苦と爲し、餘の樂有りと雖も、猶彼の處を樂はず。

と。已上。之に準ずるに、應に七々日、六劫、十二劫のあひだ、佛を見たてまつらず、法を聞かざる等を以て、輕く苦を受くと爲すべき耳。

[12]問ふ。爲如臨終に、一たび佛の名を念ずれば、能く八十億劫の衆の罪を滅すとせば、尋常の行者も、亦然る可き耶。

答ふ。臨終の心は力强ければ、能く無量の罪を滅すれども、尋常に名を稱ふるも、彼が如くなる應からず。然れども、若し觀念成ぜんには、亦無量の罪を滅せん。若し但名を稱ふるのみならば、心の淺深に隨つて、其の利益を得ること、應に差別有るべし。具には、前の利益門の如し。

[13]問ふ。何を以てか、淺心の念佛にも、亦利益有りといふこと

定業。」如是等。諸大乘『經』『論』。說五逆罪等。皆名不定。悉得消滅。

轉重輕受相。具出『放鉢經』。

問。所引『文』云。智者轉重輕受。下品生人。但十念已。卽生淨土。何處輕受。

答。『雙觀經』說彼土胎生者云。五百歲中。不見三寶。不得供養。修諸善本。而以此爲苦。雖有餘樂。猶不樂彼處。

已上。準之應知。以七々日。六劫十二劫。不見佛。不聞法等。爲輕受苦耳。

問。爲如臨終。一念佛名。能滅八十。億劫衆罪。尋常行者。亦可然耶。

の衆生有つて、業緣の中に於て、心輕んじて信ぜざらん。彼を度はんが爲の故に、是くの如きの說を作す。善男子、一切の作業には、輕き有り、重き有り。輕重の二業に、復た各〻二有り。一には決定、二には不決定なり」と。又、言はく「或は重き業の、輕く作すことを得可き有り、或は輕き業の、重く作すことを得可き有り。有智の人は、智慧の力を以て、能く地獄極重の業をして、現世に輕く受けしむれども、愚癡の人は、現世の輕き業を、地獄に重く受く」と。阿闍世王は、罪を懺悔し已つて、地獄に入らず、鴦掘摩羅は、阿羅漢を得たり。『瑜伽論』に說く「未だ解脫を得ざるを、決定業と名づけ、已に解脫を得たるを、不定業と名づく」と。是くの如き等の、諸の大乘の『經』『論』には、〔咸く〕五逆罪等を、皆不定〔業〕と名づけ、悉く消滅することを得、と說けり。と。

重きを轉じて輕く受くるの相は、具に『放鉢經』に出でたり。

問ふ。引く所の『文』に、「智者は重きを轉じて輕く受く」と云ふ。下品生の人は、但十念し已つて、卽ち淨土に生る。何れ

耆婆爲阿闍世王。説懺悔法「罪得滅」。又云。「臣聞佛説。修一善心。破百種惡。如少毒藥。能害衆生。小善亦爾。能破大惡」。又卅一云。「善男子。有諸衆生。於業緣中。心輕不信。爲度彼故。作如是説。善男子。一切作業。有輕有重。輕重二業。復各有二。一決定。二不決定」。又言。「或有重業。可得作輕。或有輕業。可得作重。有智之人。以智慧力。能令地獄。極重之業。現世輕受。愚癡之人。現世輕業。地獄重受」。阿闍世王。懺悔罪已。不入地獄。鴦掘摩羅。得阿羅漢。如『瑜伽論』説。「未得解脱。説名決定業。已得解脱。名不

には、兼ねて逆の十と餘の一とを取れり。此の義、未だ決せず。別して、思擇す應し。

[9]問ふ。逆者の十念は、何が故に不定なるや。

答ふ。宿善の有無に由つて、念力別なるが故に。又臨終と尋常と、念ずるの時別なるが故に。

[10]問ふ。五逆は、是れ順生の業なり。報と時と、倶に定まれり。云何んぞ滅することを得んや。

答ふ。感師これを釋して云はく、九部の不了教の中に、諸の不信業果の凡夫の爲に、密意をもつて説いて、「定報の業有り」と言へり。諸の大乘の、了義教の中に於ては、「一切の業は、悉く皆不定なり」と説けり。『涅槃經』の、第十八〔九〕巻に云ふが如し。耆婆、阿闍世王の爲に、懺悔の法を説いて「罪滅することを得」と、又「臣、佛の説を聞くに、一の善心を修せば、百種の惡を破す、と。少かの毒藥の、能く衆生を害するが如し。少〔小〕善も亦爾り、能く大惡を破す」と。又、三十一〔巻〕に云はく「善男子、諸

已上。今試加釋。餘處遍顯。往生種類。本願唯擧。定生之人。故云。不爾不取正覺。餘人十念。定得往生。逆者一念。定不能生。逆十餘一。皆是不定。故願唯擧。餘人十念。餘處兼取。逆十餘一。此義未決。別應思擇。

[9]問。逆者十念。何故不定。

答。由宿善有無。念力別故。又臨終尋常。念時別故。

[10]問。五逆是順生業。報時倶定。云何得滅。

答。感師釋之云。

九部不了敎中。爲諸不信。業果凡夫。密意說言。有定報業。於諸大乘。了義敎中。說一切業。悉皆不定。如『涅槃經』第十八卷云。

若し唯〔五〕逆のみを造れる者は、十念に由るが故に、生るゝことを得れども、若し逆罪を造り、亦法を謗りし者は、往生することを得ず。

と。有るが云はく、

五逆の不定業を造れるものは、往生することを得れども、五逆の定業を造れるものは、往生せず。

と。是くの如く、十五家の釋有り。感法師は、諸師の釋を用ひずして、自ら云はく、

若し逆を造らざる人は、念の多少を論ぜず、一聲も十聲も、倶に淨土に生る。若〔如〕し逆を造れる〔人〕は、必ず十を滿す須し。一をも闕かば生れず。故に「除く」と言へるなり。

と。已上。今試みに釋を加へば、餘處には、遍く往生の種類を顯はせども、本願には、唯定生の人を擧ぐ。故に、「爾らずば正覺を取らじ」と云へり。餘人の十念は、定んで往生することを得、逆者の一念は、定んで生るゝこと能はず。逆の十と餘の一とは、皆是れ不定なり。故に〔本〕願には、唯餘人の十念を擧げ、餘處

不爾故。不能滅罪。略抄。

8問。若爾云何。『雙觀經』說十念往生云。

唯除五逆。誹謗正法。

答。智憬等諸師云。

若唯造逆者。由十念故得生。若造逆罪。亦謗法者。不得往生。

有云。

造五逆不定業。得往生。造五逆定業。不往生。

如是有十五家釋。感法師。不用諸師釋。自云。

若不造逆人。論念之多少。一聲十聲。俱生淨土。若造逆人。必須滿十。闕一不生。故言除也。

聲や十聲して、即ちに罪を滅し、淨土に往生することを得んや。

答ふ。感師の釋して云はく、

念佛は、五の緣に由るが故に、罪を滅す。一には、大乘の心を發すの緣。二には、淨土に生れんと願ふの緣なり。小乘の人は、十方の佛の有すことを信ぜざるが故に。三には、阿彌陀佛の本願の緣。四には、念佛の功德の緣なり。彼の比丘は、但四念處の觀を作すが故に。五には、佛の威力をもつて加持したまふの緣なり。是の故に、〔念佛は〕罪を滅して淨土に生るゝことを得。彼の小乘の人は、爾らざるが故に、罪を滅すること能はず。

と。略抄す。

8問ふ。若し爾らば、云何んが『雙觀經』には、十念往生を說いて、

唯、五逆と、正法を誹謗るをば除く。

と云へるや。

答ふ。智憬等の諸師の云はく、

阿鼻地獄。於後値九十九億佛。不得順忍。何以故。佛説深法。是人不信。破壞違逆。破毀賢聖。持戒比丘。出其過惡。破法因緣。法應當爾。已上略抄。四比丘者。苦岸比丘。薩和多比丘。將去比丘。跋難陀比丘。十萬億歲。如救頭燃。尚不滅罪。還生地獄。如何念佛。一聲十聲。卽得滅罪。往生淨土。

答。感師釋云。

念佛由五緣。故滅罪。一發大乘心緣。二願生淨土緣。小乘人不信。有十方佛故。三阿彌陀佛本願緣。四念佛功德緣。彼比丘。但作四念處觀故。五佛威力加持緣。是故滅罪。得生淨土。彼小乘人。

〔四〕萬億人は、此の四師と倶に生れ、倶に死して、大地獄に在つて、諸の燒煮を受けたり。劫の盡〔燒〕きしとき、他方の地獄に轉生し、劫〔世界〕成〔還生〕つて、還た此の〔無〕間地獄に生れたり。久々にして地獄を免れ、人中に生るゝ〔ことを得たれど〕も、五百世のあひだ、生れながらにして盲なりき。後、一切明〔王〕佛に値ひたてまつりて出家し、十萬億歲、勤修〔行〕精進すること、頭の燃ゆるを救ふが如くせしかども、順忍をも得ざりき。況や道果を得んことをや。命終つて、還た阿鼻地獄に生れたり。後に於て、九十九億の佛に値ひたてまつりしかども、順忍をも得ざりき。何を以ての故とならば、佛の深法〔經〕を說きたまひしとき、是の人信ぜずして、破壞し違逆し、賢聖持戒の比丘を破〔謗〕毀して、其の過惡を出せし、破法〔業〕の因緣をもつて、法として應に爾る當かりし。と。已上、略抄す。「四の比丘」とは、苦岸比丘と、薩和多比丘と、將去比丘と、跋難陀比丘となり。

十萬億歲、頭の燃ゆるを救ふが如くせしかども、尚罪を滅せずして、還た地獄に生れたりといふ。如何んぞ念佛すること、一

大莊嚴佛滅後。有四惡比丘。捨第一義。無所有。畢竟空法。貪樂外道。尼揵子論。是人命終。墮阿鼻獄。仰臥伏臥。左脇臥右脇臥。各九百萬億歲。於熱鐵上。燒燃燋爛。死已更生。灰地獄。大灰地獄。活地獄。黑繩地獄。皆如上歲數受苦。於黑繩死。還生阿鼻獄。彼家出家親近。幷諸檀越。凡六百萬億人。與此四師。倶生倶死。在大地獄。受諸燒煮。劫盡轉生。他方地獄。劫成。還生此間地獄。久々免地獄。生人中五百世。從生而盲。後値一切明王佛出家。十萬億歲。勤修精進。如救頭燃。不得順忍。況得道果。命終還生。

を指すが如き、是れなり。

と。已上。『要決』に云はく、

諸佛は願と行とをもつて、此の果名を成じたまへば、但能く號を念ぜば、具に衆の德を包む。故に大善と成る。

と。已上。彼の『文』には、『淨名』と『成實』との文を引く。具には、上の助念方法の如し。

問ふ。若し下々品の、五逆罪を造れるものも、十たび念佛するに由つて、往生することを得といはゞ、云何んぞ『佛藏經』の第三に云へるや。

大莊嚴佛の滅後に、四の惡比丘有りき。第一義、無所有、畢竟空の法を捨てゝ、外道尼揵子の論を貪樂せり。是の人、命終りしとき、阿鼻〔地〕獄に墮ち、仰臥と伏臥と、左脇臥と右脇臥とをして、各々九百萬億歲、熱鐵の上に於て、燒燃かれ燋爛れて死し〔已り〕、更に灰〔炙〕地獄、大灰〔炙〕地獄、〔等〕活地獄、黑繩地獄に生れて、皆上の如き歲數のあひだ苦を受けたり。黑繩〔地獄〕より死して、還た阿鼻〔大地〕獄に生れたり。彼の〔在〕家と、出家との親近、幷に諸の檀越、凡そ六百

東方。乍赤乍黃。假令酉亥行禁。患者亦愈。又如有人。被狗所囓。炙虎骨熨之。患者卽愈。或時無骨。好攊掌摩之。口中喚言。虎來虎來。患者亦愈。或復有人。患脚轉筋。炙木瓜杖熨之。患者卽愈。或無木瓜。炙手摩之。口喚木瓜。患者亦愈也。名異法者。如以指指月是。

已上。『要決』云。

諸佛願行。成此果名。但能念號。具包衆德。故成大善。

已上。彼『文』引『淨名』『成實』文。具如上助念方法。

「問。若下々品。造五逆罪。由十念佛。得往生者。云何『佛藏經』第三云。

「問ふ。深き觀念の力の、罪を滅すること然る可し。云何んぞ佛號を稱念して、無量の罪を滅する。若し爾らば、指を以て月を指すに、此の指能く闇を破す應きや。

答ふ。綽和尚の釋して云はく、

諸法萬差なり、一槪す可からず。「何となれば」自ら名の、法に卽せる有り、自ら名の、法に異なれる有り。名の法に卽せる「有り」とは、諸佛菩薩の名號、禁呪の音辭、修多羅の章句等の如き、是れなり。禁呪の辭に「日出で丶東方乍ち赤く乍ち黃」と曰はゞ、假令酉亥に禁を行ふも、患者亦愈ゆるが如し。又、人有つて狗に囓まれんに、虎の骨を炙つて之を熨（慰）せば、患者卽ち愈ゆるも、或る時骨無くんば、好く掌を攊げてこれを摩り、口の中に喚うて「虎來れ虎來れ」と言はゞ、患者亦愈ゆるが如し。或は復た人有つて、脚轉筋を患はんに、木瓜の杖（枝）を炙つて之を熨せば、患者卽ち愈ゆるも、或は木瓜無くんば、手を炙つて之を摩り、口に「木瓜」と喚はゞ、患者亦愈ゆるなり。名の法に異なる「有り」とは、指を以て月

是後心名爲大心。以捨身及諸根事急。故如人入陣。不惜身命。名爲健。如阿羅漢。捨是身著。故得阿羅漢道。

已上。由此『安樂集』云。

一切衆生。臨終之時。刀風解形。死苦來逼。生大怖畏。乃至便得往生。

6問。深觀念力。滅罪可然。云何稱念佛號。滅無量罪。若爾以指々月。此指應能破闇。

答。綽和尚釋云。

諸法萬差。不可一概。自有名卽法。自有名異法。名卽法者。如諸佛菩薩名號。禁呪音辭。修多羅章句等是也。如禁呪辭曰。日出

莫れ。

5問ふ。臨終の心念、其の力幾許ぞなれば、能く大事を成ずるや。

答ふ。其の力は、百年の業よりも勝れたり。故に『大論』に云はく、

是の心は、時の頃少しと雖も、而も心力の猛くして利きこと、火の如く毒の如くなれば、少しと雖も、能く大事を成す。是の死なんと垂る時の心は、決定して勇〔猛〕健なるが故に、百歳の行力よりも勝れたり。是の後心を名づけて大心と爲す。身及び諸根を捨つる事、急なるを以ての故なり。人の、陣に入つて、身命を惜まざるを、名づけて健と爲すが如し。阿羅漢の如きは、是の身の著を捨つるが故に、阿羅漢道を得。

と。已上。此れに由つて、『安樂集』に云はく、

一切の衆生は、臨終の時に、刀風その形を解き、死苦來り逼るに、大なる怖畏を生じて、乃至 便ち往生することを得。

と。

能變千斤銅爲金。四金剛雖堅固。以羚羊角扣之。則灌然氷泮。已上滅罪譬。五雪山有草。名爲忍辱。牛若食者。卽得醍醐。六於沙訶藥。但有見者。得壽無量。乃至念者。得宿命智。七孔雀聞雷聲。卽得有身。八尸利沙見昴星。則出生果實。已上生善譬。九以住水寶。瓔珞其身。入深水中。而不沒溺。十沙礫雖小。尚不能浮。盤石雖大。寄船能浮。已上總譬。諸法力用。難思如是。念佛功力。準之莫疑。

問。臨終心念。其力幾許。能成大事。

答。其力勝百年業。故大論云。

是心雖時頃少。而心力猛利。如火如毒。雖少能成大事。是垂死時心。決定勇健。故勝百歲行力。

と。已上、略抄す。今、これに加へて云はく。一には、栴檀の樹、出成する時は、能く四十由旬の伊蘭林を變へて、普く皆香美しからしむ。二には、師子の筋を用ひて、以て琴の絃と爲し、音聲一たび奏するときは、一切の餘の絃、悉く皆斷ち壞る。三には、一斤の石汁、能く千斤の銅を變へて、金と爲す。四には、金剛は堅固しと雖も、羚羊の角を以てこれを扣くときは、則ち灌然として氷のごとくに泮く。已上は、滅罪の譬なり。五には、雪山に草有つて、名づけて忍辱と爲す。牛若し食ふときは、卽ち醍醐を得。六には、沙訶藥を、但見ること有る者は、壽無量なることを得、乃至念ずる者は、宿命智を得。七には、孔雀、雷の聲を聞くときは、卽ち有身むことを得。八には、尸利沙、昴星を見るときは、則ち果實を出生す。已上は、生善の譬なり。九には、住水寶を以て、其の身を瓔珞るときは、深水の中に入るも、沒溺れず。十には、沙礫は小なりと雖も、尚浮ぶこと能はず、盤（磐）石は大なりと雖も、船に寄すときは能く浮ぶ。已上は、總譬なり。諸法の力用は、思ひ難きこと是くの如し。念佛の功力も、之に準じて疑ふこと

賞。斯須之頃。富貴盈望。四劣夫若從輪王行。便乘虛空。飛騰自在。五十圍索喩。如前。六鴆鳥入水。魚蚌斯斃皆。犀角觸諸。死者還活。七黄鵠喚子安。子安還活。豈可得言。墳下千齡。決無可甦也。一切萬法。皆有自力他力。自攝他攝。千開萬閉。無量無邊。豈得以有礙之識。疑彼無礙之法乎。又五不思議中。佛法最不可思議。豈以三界。繫業爲重。疑彼少時。念法爲輕。

已上略抄。今加之云。一栴檀樹出成時。能變四十由旬伊蘭林。普皆香美。二用師子筋。以爲琴絃。音聲一奏。一切餘絃。悉皆斷壞。三一斤石汁。

ん。

と。已上。又『安樂集』には、七喩を以て、此の義を顯はせり。一には、少火の喩。前の如し。二には、躄〔躃〕者、他の船に寄載るに、風帆の勢に因つて、一日に千里に至る。三には、貧人、一の瑞物を獲て、以て王に貢つるに、王慶んで重く賞し、斯須の頃に、富貴となつて望みを盈たす。四には、劣夫、若し輪王の行に從はゞ、便ち虛空に乘つて、飛騰自在なり。五には、十圍の索の喩。前の如し。六には、鴆鳥水に入るに、魚蚌斯に斃れて皆〔死し〕、犀角諸〔泥〕に觸るゝに、死者還た活く。七には、黄鵠、子安を喚ぶに、子安還た活く。豈、墳の下に千齡なるも、決して甦る可きこと無し、と言ふことを得可けんや。一切の萬法は、皆自力と他力、自攝と他攝と有つて、千開萬閉、無量無邊なり。豈、有礙の識を以て、彼の無礙の法を疑ふことを得ん乎。又、五の不思議の中には、佛法最も不可思議なり。豈〔汝〕、三界の繫業を以て重しと爲し、彼の少時の念法〔佛〕を疑うて輕しと爲んや。

後心也。念佛之時。以無間心無後心。遂即捨命。善心猛利。是以即生。譬如十圍之索。千夫不制。童子揮劔。須臾兩段。又如千年積草。以大豆火焚。之時即盡。又如有人。一生已來。修十善。應得生天。臨終之時。起一念決定邪見。即墮阿鼻地獄。惡業虚妄。以猛利故。尚能排一生善業。令墮惡道。豈況臨終。猛利心念佛。眞實無間善業。不能排無始惡業。不得生淨土者。無有是處。

已上。又『安樂集』以七喩顯此義。一少火喩。如前。二壁者寄載他船。因風帆勢。一日至千里。三貧人獲一瑞物。而以貢王。王慶重

は深く毒は瘉ましく、肌を傷つけ骨に致〔破〕らんも、一たび滅除藥の鼓の聲を聞くことあらば、即ちに毒箭の除こるが如し。豈、「箭は」深く毒「は瘉ましき」を以てとて、出づることを肯んぜざらんや。決定に在りとは、罪を造るの時は、有間心、有後心を以てすれども、念佛する時は、無間心、無後心を以てし、遂に即ち命を捨つるまで、善心猛くして利し。是を以て、即ち生る。譬へば、十圍の索は、千夫も制せざれども、童子劔を揮はゞ、須臾に兩段〔分〕するが如し。又千年の積草〔柴〕も、大〔一〕豆ほどの火を以て焚かば、少時にして即ち盡くるが如し。又人有つて、一生已來十善〔業〕を修して、應に天に生るゝことを得べきが、臨終の時に、一念決定の邪見を起さば、即ち阿鼻地獄に墮ちんが如し。惡業の虚妄なるすら、猛くして利きを以ての故に、尚能く一生の善業を排うて、惡道に墮ちしむるなり。豈、況や臨終のとき、猛く利き心もて念佛する、眞實無間の善業をや、無始の惡業を排う能はずして、淨土に生るゝことを得ずといはゞ、是の處有ること無け

在時節。久近多少。云何爲三。一者在心。二者在緣。三者在決定。在心者。造罪之時。從自虛妄。顚倒心生。念佛心者。從善知識。聞說阿彌陀佛。眞實功德名號心生。一虛一實。豈得相比。譬如萬年闇室。日光暫至。而闇頓除。豈有久來之闇。不肯滅耶。在緣者。造罪之時。從虛妄癡闇心。緣虛妄境界。顚倒心生。念佛之心。從聞佛淸淨。眞實功德名號。緣無上菩提心生。一眞一僞。豈得相比。譬如有人。被毒箭中。箭深毒礤。傷肌致骨。一聞滅除藥鼓聲。卽毒箭除。豈以深毒。不肯出也。在決定者。造罪之時。以有間心。有

と。已上。十念に衆の罪を滅し、佛の悲願の船に乘つて、須臾にして往生することを得るも、其の理亦然る可し。又『十疑』に釋して云はく、

〔今〕三種の道理を以て挍〔校〕量るに、輕重不定なり。時節の久近、多少には在らず。云何んが三と爲る。一には心に在り、二には緣に在り、三には決定に在り。心に在りとは、罪を造るの時は、自らの虛妄顚倒心より生るゝも、念佛する心は、善知識の、阿彌陀佛の眞實功德名號を說くを聞く心より生る。一は虛にして、一は實なり。豈、相ひ比ぶることを得んや。譬へば、萬年の闇室に、日光暫くも至らば、闇頓ちにして除〔滅〕こるが如し。豈、久來の闇なればとて、滅することを肯んぜざる有らん耶。緣に在りとは、罪を造るの時は、虛妄癡闇心の、虛妄境界を緣ずる、顚倒心より生るゝも、念佛する心は、佛の淸淨眞實の、功德名號を聞いて、無上菩提を緣ずる心より生る。一は眞にして、一は僞なり。豈、相ひ比ぶることを得んや。譬へば、人有つて毒の箭に中てられんに、箭

言。善哉々々。比丘言。如兩人倶死。一人生第七梵天。一人生罽賓國。此二人遠近雖異。死則一時到。如有一雙飛鳥。一於高樹上止。一於卑樹上止。兩鳥一時倶飛。其影倶到耳。如愚人作惡得殃大。智人作惡得殃少。如燒鐵在地。一人知燒。一人不知。兩人倶取。然不知者手爛大。知者少壞。作惡亦爾。愚者不能自悔。故得殃大。智者作惡知不當。故爲日自悔。其罪少。

已上。十念滅衆罪。乘佛悲願船。須臾得往生。其理亦可然。又『十疑』釋云。

以三種道理挍量。輕重不定。不

て、便ち天上に生るゝこと、〔何ぞ信ぜざらん耶。〕其の小石の沒むは、人の惡を作つて、經法〔佛經〕を知らずんば、死して後に便ち泥犂〔犁〕に入るが如し〔何ぞ信ぜざらん耶〕と。王の言はく「善き哉、善き哉」と。比丘の言はく「兩人倶に死して、一人は第七の梵天に生れ、一人は罽賓國に生れんに、此の二人は、遠近異なりと雖も、死せんときは則ち一時に到らんが如し。一雙の飛鳥有つて、一は高き樹の上に止り、一は卑き樹の上に止らんに、兩鳥一時に倶に飛ばんときは、其の影倶に〔地に〕到らんが如き耳。愚人は惡を作つて、殃を得ること大きく、智人は惡を作つて、殃を得ること少〔小〕きが如し。燒けたる鐵の、地に在らんに、一人は燒けたる〔鐵〕と知り、一人は知らずして、兩人倶に取らんときは、然も知らざりし者の手の爛るゝこと大きく、知りし者は少しく壞れんが如し。惡を作るも、亦爾り。愚者は、自ら悔いる能はざるが故に、殃を得ること大きく、智者は、惡を作つて不當と知るが故に、日に自ら悔いることを爲せば、其の罪少きなり」と。

臨命終時。纔十聲念。何能滅罪。永出三界。即生淨土。

答。如『那先比丘問佛經』言。

時有彌蘭王。問羅漢。那先比丘言。人在世間作惡。至百歲。臨死時念佛。死後生天。我不信是說。復言。殺一生命。死即入泥梨中。我亦不信也。比丘問王。如人持小石。置在水中。石浮耶沒耶。王言。石沒也。那先言。如令持百丈大石。置在船上。沒不。王言。不沒。那先言。船中百丈大石。因船不得沒。人雖有本惡。一時念佛。不沒泥梨。便生天上。何不信耶。其小石沒者。如人作惡。不知經法。死後便入泥梨。何不信耶。王

と。

[4]問ふ。生れてより來た、諸の惡業を作つて、一善をも修せざる者、命終の時に臨み、纔かに十聲念ずるも、何ぞ能く罪を滅して、永く三界を出で、即ち淨土に生れん。

答ふ。『那先比丘問佛經』に言ふが如し。

時に彌蘭王有り、羅漢の那先比丘に問うて言はく「人、世間に在つて惡を作り、百歲に至らんも、死せん時に臨んで念佛せば、死して後天〔上〕に生るとは、我是の說を信ぜず」と。復た言はく「一の生命を殺さば、死して即ち泥梨〔犂〕の中に入るとは、我亦信ぜざるなり」と。比丘、王に問ふ「如し人、小石を持つて水の中〔上〕に置在かば、石は浮ぶ耶、沒む耶」と。王の言はく「石は沒むなり」と。那先の言はく「如し百丈〔枚〕の大石を持つて、船の上に置在かしむれば、沒むや不や」と。王の言はく「沒まず」と。那先の言はく「船の中の百丈〔枚〕の大石は、船に因つて沒むことを得ざるなり。人、本惡有りと雖も、一時念佛すれば、泥梨〔犂〕に沒まずし

感法師云。
各是聖教。互說往生。淨土法門。
皆成淨業。何因將彼爲是。斥此
言非。但自不解『經』。亦乃惑諸
學者。
迦才師云。
此之十念。現在時作。『觀經』中
十念。臨命終時作。
已上。意同感師。
[3]問。『雙觀經』云。
乃至一念。得往生。
此與十念。云何乖角。
答。感師云。
極惡業者。滿十得生。餘者乃至
一念亦生。
[4]問。生來作諸惡業。不修一善者。

ることを得。
と。感法師の云はく、
各ゝ是れ聖教にして、互に淨土に往生するの法門を說けば、
皆淨業を成ず。何に因つてか、彼を將つて是と爲し、此を斥
けて非と言はん。但自ら『經』を解らず、亦乃ち諸の學者を
惑はすなり。
と。迦才師の云はく、
此の十念は、現在の時に作すなり。『觀經』の中の十念は、命
終の時に臨んで作すなり。
と。已上。意は、感師に同じ。
[3]問ふ。『雙觀經』に云はく、
乃至一念せば、往生することを得。
と。此れと十念と、云何んぞ乖角ふや。
答ふ。感師の云はく、
極惡業の者は、十を滿して生るゝことを得、餘の者は、乃至
一念するも亦生る。

一心稱念。南無阿彌陀佛。逕此六字之頃。名一念也。

²問。『彌勒所問經』十念往生。彼一一念深廣。如何今云。十聲念佛。得往生耶。

答。諸師所釋不同。寂法師云。

此說專心。稱佛名時。自然具足。如是十。非必一一。別緣慈等。亦非數彼。慈等爲十。云何不別緣。而具足十。如欲受戒。稱三歸時。雖不別緣。離殺等事。而能具得。離殺等戒。當知。此中道理亦爾。又可具足十念。稱念南無阿彌陀佛者。謂能具足。慈等十念稱南無佛。若能如是。隨所稱念。若一稱。若多稱。皆得往生。

一心に「南無阿彌陀佛」と稱念する、此の六字を逕るの頃を、一念と名づくるなり。

と。

²問ふ。『彌勒所問經』の、十念往生は、彼の一々の念深廣なり。如何んぞ今、十聲念佛して、往生することを得と云ふ耶。

答ふ。諸師の釋するところ、同じからず。寂法師の云はく、

此れは、專心に佛の名を稱ふる時、自然に是くの如き、十〔念〕を具足すと說くなり。必ずしも一一、別に慈〔心〕等を緣ずるには非ず。亦彼の慈〔心〕等を數へて、十と爲るにも非ず。云何んぞ別に緣ぜざるに、〔何ぞ能く〕十を具足するとならば、戒を受けんと欲して、三歸を稱ふる時、別に離殺等の事を緣ぜずと雖も、而も能く具に、離殺等の戒を得るが如し。當に知るべし、此の中の道理も亦爾なり。又十念を具足して、南無〔阿彌陀〕佛と稱〔念〕す可しとは、能く慈等の十念を具足して、南無佛と稱ふるを謂ふ。若し能く是くの如くならば、稱念する所に隨つて、若しは一〔少〕稱、若しは多稱、皆往生す

第五明臨終念相。

[1]問。下々品人。臨終十念。即得往生。所言十念。何等念耶。

答。綽和尚云。

但憶念阿彌陀佛。若總相若別相。隨所緣觀。逕於十念。無他念想間雜。是名十念。又云。十念相續者。是聖者一數之名耳。但能積念凝思。不緣他事。便業道成辨。亦未勞記之頭數也。又云。若久行人念。多應依此。若始行人念者。記數亦好。此亦依聖教。

已上。有云。

佛の〔護〕念は『小經』に出で、山海慧菩薩等の護持は『十往生經』に出でたり。云云。

第五に臨終の念相

を明さば、

[1]問ふ。下々品の人も、臨終に十念せば、即ち往生することを得、と。言ふ所の十念とは、何等の念ぞ耶。

答ふ。綽和尚の云はく、

但阿彌陀佛を憶念して、若しは總相若しは別相、所緣に隨つて觀じ、十念を逕て、他の念想の間雜ることの無き、是れを十念と名づく。又云はく。十念相續とは、是れ聖者の一の數の名なるのみ。但能く念を積み、思ひを凝らして、他事を緣ぜず、業道をして成辨せしむれば、〔便ち罷みぬ、〕亦勞はしくこれが頭數を記さざるなり。又云はく。若し久行の人の念は、多く此れに依る應し。若し始行の人の念は、數を記するも亦好し。此れも亦聖教に依るなり。

と。已上。有るが云はく、

淨。何輒見佛。

答。衆緣合見。非唯自力。『般舟經』有三緣。如上九十日行。所引『止觀』文。

[9]問。以幾因緣。得生彼國。

答。依『經』案之。具四因緣。一自善根因力。二自願求因力。三彌陀本願緣。四衆聖助念緣。釋迦護助。出『平等覺經』。六方佛念。出『小經』。山海慧菩薩等護持。出『十往生經』云云。

ち同じく色聲有りと謂ひ、但化身の色相を見て、遂に法身も亦爾らんと執せんが爲の故に、說いて邪なりと爲す。『彌陀經』等に、佛の名を念じ、相を觀じて、淨土に生るゝことを求めよと勸むるは、但凡夫は障重ければ、法身は幽微にして、法體緣じ難きを以て、且く佛を念じ、形を觀じて禮讃せよと教へたるのみ。

と。略抄す。

[8]問ふ。凡夫の行者は、勤めて修習すと雖も、心純淨ならず。何ぞ輒く佛を見たてまつらん。

答ふ。衆の緣合して、見たてまつるなり。唯自力のみには非ず。『般舟經』に三緣有り、上の九十日の行に、引きし『止觀』の文の如し。

[9]問ふ。幾ばくの因緣を以て、彼の國に生るゝことを得るや。

答ふ。『經』に依つてこれを案ずるに、四の因緣を具す。一には、自善根の因力。二には、自願求の因力。三には、彌陀本願の緣。四には、衆聖助念の緣なり。釋迦の護助は『平等覺經』に出で、六方

若以色見我。以音聲求我。
是人行邪道。不能見如來。
答。『要決』通云。
大師說教。義有多門。各稱時機。
等無差異。『般若經』。自是一門。
『彌陀』等『經』。復爲一理。何者。
一切諸佛。並有三身。法佛無形
體。非色聲。良爲二乘。及小菩薩。
聞說三身不異。卽謂同有色聲。
但見化身色相。遂執法身亦爾。
故說爲邪。『彌陀經』等。勸念佛
名。觀相。求生淨土者。但以凡夫
障重。法身幽微。法體難緣。且教
念佛。觀形禮讚。
略抄。
問。凡夫行者。雖勤修習。心不純

法の無相を了らず　是を以て佛をば見ざるなり
見有れば則ち垢と爲る　此れ則ち見と爲さず
諸の見をば遠離して　如是して乃ち佛を見る
と云ひ、又
一切の法は　自性有ること無しと了知り
如是く法性を解るものは　卽〔則〕ち盧舍那を見たてまつる
と云ひ、『金剛經』には
若し色を以て我を見　音聲を以て我を求めば
是の人邪道を行じて　如來を見ること能はず
と云へるや。
答ふ。『要決』に通いて云はく、
大師の說教は、義に多門有り。各々時機に稱ひ、等しうして
差異無し。『般若經』〔の說〕は、自ら是れ一門にして、『彌陀』
等の『經』も、復た一理なりと爲す。何んとならば、一切の
諸佛には、並三身有つて、法佛には形體も無く、色聲も非し。
良に二乘、及び小菩薩の、三身異ならずと說くを聞いて、卽

答。『經』『論』多說。三昧成就。卽得見佛。明知。散業不可得見。唯除別緣。

6問。有相無相觀。倶得見佛耶。

答。無相見佛。理在不疑。其有相觀。或亦見佛。故『觀經』等。勸觀色相。

7問。若有相觀。亦見佛者。云何『華嚴經』偈云。

凡夫見諸法。但隨於相轉。
不了法無相。以是不見佛。
有見則爲垢。此則未爲見。
遠離於諸見。如是乃見佛。

又云。

了知一切法。自性無所有。
如是解法性。卽見盧舍那。

『金剛經』云。

如き其の勝劣に隨つて、應に九品を分つべし。然れども、『經』に說く所の、九品の行業は、是れ一端を示せるのみ。理實には無量なり。

5問ふ。如し定散、倶に往生することを得と爲さば、亦現身に、倶に佛を見たてまつると爲ん耶。

答ふ。『經』『論』には多く、三昧成就して、卽ち佛を見たてまつることを得と說けば、明かに知る、散業は見たてまつることを得可からず。唯、別緣のものを除く。

6問ふ。有相と、無相との觀は、倶に佛を見たてまつることを得る耶。

答ふ。無相〔の觀〕の、佛を見たてまつることは、理疑はざるに在り。其の有相の觀も、或は亦佛を見たてまつる。故に『觀經』等には、色相を觀ずることを勸めたり。

7問ふ。若し有相の觀も、亦佛を見たてまつるといはゞ、云何んぞ『華嚴經』の偈には

凡夫の諸法を見るは　但相に隨つて轉じ

力無畏。三昧解脱。諸神通事。如此妙處。非汝凡夫。所覺境界。但當深心。起隨喜想。起是想已。當復繫念。念佛功德」故知。初學之輩。觀彼色身。後學之徒。念法身也。故言。如是次第。得空三昧。當須善會『經』意。勿生毀讃之心。妙知。大聖巧逗根機者。

已上。『觀佛經』第九說。觀佛一毛。乃至觀具足色身已。有所引之十力無畏三昧等文也。

4問。念佛之行。於九品中。是何品攝。

答。若如說行。理當上々品。如是隨其勝劣。應分九品。然『經』所說。九品行業。是示一端。理實無量。

5問。爲如定散。倶得往生。亦爲現身。倶見佛耶。

の如來を念ぜず、亦彼の如來〔の色〕を得ざれ。已に是くの如くして、次第に空三昧を得ん」と。又『觀佛三昧經』に云はく「如來に亦法身、十力、無畏、三昧、解脱の、諸の神通の事有り。此の如きの妙處は、汝凡夫の、覺〔學〕するところの境界に非ず。但當に深心に、隨喜の想を起すべし。是の想を起し已らば、當に復た念を繫けて、佛の功德を念ずべし」と。故に知んぬ、初學の輩は、彼の色身を觀じ、後學の徒は、法身を念ずるなり。故に「是くの如くして、次第に空三昧を得ん」と言へり。當に須らく、善く『經』の意を會して、毀讃の心を生すこと勿れ。妙に知る、大聖は巧みに根機に逗じたまふ者なることを。

已上。『觀佛經』の第九に、佛の一毛を觀じ、乃至具足色身を觀ずることを說き已つて、引く所の十力無畏三昧等の文有るなり。

4問ふ。念佛の行は、九品の中に於て、是れ何れの品に攝するや。

答ふ。若し說の如く行ぜば、理として上々品に當る。是くの

不聽。受一飮水。
又言。
寧成熟五逆重惡。不成就我見。衆生見。壽見。命見。陰入界見等。
耶。已上略抄。
答。感師釋云。
有『聖教』復言。「寧起我見。如須彌山。不起空見。如芥子許。」如是等諸大乘『經』。訶有訶空。讃大讃小。並乃逗機不同。又有『經』言。「今者阿彌陀如來。應正等覺。具有如是。卌二相。八十隨形好。身色光明。如聚金融。如是乃至。不念彼如來。亦不得彼如來。已如是。次第得空三昧」。又『觀佛三昧經』云。「如來亦有法身。十

唯涅槃の畢竟清淨なるを愛せよ」と。是くの如く敎ふる者を、名づけて邪敎と爲し、惡知識と名づく。是の人を名づけて、我を誹謗り、外道を助くと爲す。是くの如き惡人は、我乃ち一飮の水をも、受くることを聽さじ。
と說き、又
寧ろ五逆重惡〔罪〕を成就すとも、我見、衆生見、〔人見〕壽見、命見、陰入界見等を成就せざれ。
と言へる耶。已上、略抄す。
答ふ。感師釋して云はく、
『聖敎』有つて復た言はく「寧ろ我見を起すこと、須彌山の如くすとも、空見を起すこと、芥子許りの如くもせざれ」と。是くの如き等の、諸の大乘の『經』には、有を訶し、空を訶し、大を讃め、小を讃め、並乃〔爲〕ち機に逗じて同じからず。又有る『經』に言はく「今者、阿彌陀如來、應正等覺は、具に是くの如きの、三十二相、八十隨形好有り。身色光明は、聚金の融けたるが如し〔と念ぜよ〕。是くの如くして、乃至彼

已上。
問。有相無相業。倶得往生耶。
答。綽和尙云。
若始學者。未能破相。但能依相專至。無不往生。不須疑也。
又感和尙云。
往生既品類差殊。修因亦有淺深各別。不可但言。唯修無所得。而得往生。有所得心。不得生也。
問。若爾如何『佛藏經』說。
若有比丘。敎餘比丘。汝當念佛念法念僧。念戒念施念天。如是等思惟。觀涅槃安樂寂滅。唯愛涅槃畢竟淸淨。如是敎者。名爲邪敎。名惡知識。是人名爲。誹謗於我。助於外道。如是惡人。我乃

行を成ず。
と。已上。
問ふ。有相と無相との業は、倶に往生することを得る耶。
答ふ。綽和尙の云はく、
若し始學の者は、未だ相を破すること能はざれば、但能く相に依つて專至せば、往生せずといふこと無し。疑ふ須からざるなり。
と。又感和尙の云はく、
往生に既に品類あつて差殊なれば、修因にも亦淺深有つて各別なり。但、唯無所得を修するもの、往生することを得、有所得の心は、生るゝことを得ずとは、言ふ可からざるなり。
と。
問ふ。若し爾らば、如何んぞ『佛藏經』には、
若し比丘有つて、餘の比丘を敎へて「汝、當に佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、施を念じ、天を念ぜよ。〔是くの如き等の思惟をもつて〕涅槃の安樂〔種〕寂滅なるを觀じ、

有。非有非空。通達此無二。眞入第一義。是名無相業。是最上三昧。故『雙觀經』阿彌陀佛言。

通達諸法性。一切空無我。
專求淨佛土。必成如是刹。

又『止觀』常行三昧中。有三段文。具如上別行中引。

[1]問。定散念佛。俱往生耶。

答。慇重心念。無不往生。故感師。說念佛差別云。

或深或淺。通定通散。定卽於凡夫。終于十地。如善財童子。於功德雲比丘所。請學念佛三昧。此卽甚深法也。散卽一切衆生。若行若坐。一切時處。皆得念佛。不妨諸務。乃至命終。亦成其行。

く夢の如し、體に卽して空なり、空なりと雖も而も有なり、非有非空なりと觀じ、此の無二に通達して、眞に第一義に入る。是れを無相業と名づけ、是れ最上の三昧なり。故に『雙觀經』に、阿彌陀佛の言はく、

諸法の性は一切空・無我なりと通達れども
專ら淨き佛の土を求め必ず是くの如きの刹を成ぜん

と。又『止觀』の、常行三昧の中に、三段の文有り。具に上の別行の中に引きしが如し。

[1]問ふ。定・散の念佛は、俱に往生する耶。

答ふ。慇重の心をもつて念ずれば、往生せずといふこと無し。故に感師、念佛の差別を說いて云はく、

或は深く或は淺く、定に通じ散に通ず。定は卽ち凡夫より〔始めて〕、十地に終る。善財童子の、功德雲比丘の所に於て、念佛三昧を請け學〔修〕びしが如し。此れ卽ち甚深の法なり。散は卽ち一切衆生の、若しは行若しは坐、一切の時處に、皆念佛することを得て、諸務を妨げず、乃至命終にも、亦其の

務勤修。莫失時焉。
問。若少善根。亦得往生。如何『經』云。
　不可以少善根。福德因緣。得生彼國。
答。此有異解。不能繁出。今私案云。大小無定。相待得名。望大菩薩。名之少善。望輪廻業。名之爲大。是故二『經』義不違害。
第四明尋常念相者。此有多種。大分爲四。一定業。謂坐禪入定觀佛。二散業。謂行住坐臥。散心念佛。三有相業。謂或觀相好。或念名號。偏厭穢土。專求淨土。四無相業。謂雖稱念佛。欣求淨土。而觀身土。卽畢竟空。如幻如夢。卽體而空。雖空而

ず。
と云へるや。
　答ふ。此れには異解有れども、繁く出すこと能はず。今私に案じて云はく、大小は定まれること無く、相待して名を得たり。大菩薩に望むれば、之を少善と名づけんも、輪廻の業に望むれば、之を名づけて大と爲す。是の故に二『經』の義、違害はざるなり。

第四に尋常の念相

を明さば、此れに多種有り。大に分つて、四と爲す。一には定業。謂はく、坐禪入定して、佛を觀ずるなり。二には散業。謂はく、行住坐臥の、散心に念佛するなり。三には有相業。謂はく、或は相好を觀じ、或は名號を念じて、偏へに穢土を厭ひ、專ら淨土を求むるなり。四には無相業。謂はく、佛を稱念し、淨土を欣求すと雖も、而も身土は、卽ち畢竟空にして、幻の如

國。六十億菩薩。人王佛國。十億菩薩。無上華佛國。無數不可稱計。不退諸菩薩。智慧勇猛。已曾供養。無量諸佛。於七日中。卽能攝取。百千億劫。大士所修。堅固之法。無畏佛國。七百九十億。大菩薩衆。諸小菩薩。及比丘等。不可稱計。皆當往生。不但此十四佛國中。諸菩薩等。當往生也。十方世界。無量佛國。其往生者。亦復如是。甚多無數。我但說十方。諸佛名號。及菩薩比丘。生彼國者。晝夜一劫。尙未能竟。

已上。此諸佛土中。今娑婆世界。有修少善。當往生者。我等今幸。遇釋尊遺法。億劫時一預。少善往生流。應

にして、已に曾て無量の諸佛を供養して、七日の中に於て、卽ち能く百千億劫の、大士の修せる、堅固の法を攝取せり。無畏佛の國の、七百九十億の、大菩薩衆と、諸の小菩薩、及び比丘等は、稱計ふ可からず、皆當に往生せん。但此の十四の佛國の中の、諸の菩薩等の、當に往生すべきのみにあらず、十方世界の、無量の佛國より、其の往生の者も、亦復た是くの如く、甚だ多く無數なり。我、但十方の、諸佛の名號、及び菩薩と比丘の、彼の國に生ぜん者を說かんに、晝夜一劫すとも、尙未だ竟ること能はじ。

と。已上〔略抄す〕。此の諸の佛土の中に、今娑婆世界に、少善を修して、當に往生すべき者有り。我等、今幸ひに釋尊の遺法に遇ひたてまつり、億劫時に一たび、少善往生の流に預れり。應に務めて勤修すべし。時を失ふこと莫れ焉。

問ふ。若し少善根も、亦往生することを得ば、如何んぞ『經』には

少善根、福德の因緣を以て、彼の國に生るゝことを得可から

第三往生多少者。『雙觀經』云。
佛告彌勒。於此世界。六十七億。不退菩薩。往生彼國。一々菩薩。已曾供養。無數諸佛。次如彌勒。諸小行菩薩。及修少功德者。不可稱計。皆當往生。他方佛土。亦復如是。其遠照佛國。百八十億菩薩。寶藏佛國。九十億菩薩。無量意佛國。二百二十億菩薩。甘露味佛國。二百五十億菩薩。龍勝佛國。十四億菩薩。勝力佛國。萬四千菩薩。師子佛國。五百菩薩。離垢光佛國。八十億菩薩。德首佛國。六十億菩薩。妙德山佛

し、臨終の十念は、是れ往生の勝緣なり。

第三に往生の多少

とは、『雙觀經』に云はく、
佛、彌勒に告げたまはく。此の世界に於て、六十七億の、不退の菩薩あつて、彼の國に往生せん。一々の菩薩は、已に曾て無數の諸佛を供養して、次で彌勒の如し。諸の小行の菩薩、及び少功德を修する者は、稱計ふ可からず、皆當に往生せん。他方の佛土も、亦復た是くの如し。其の遠照佛の國の、百八十億の菩薩。寶藏佛の國の、九十億の菩薩。無量意〔音〕佛の國の、二百二十億の菩薩。甘露味佛の國の、二百五十億の菩薩。龍勝佛の國の、十四億の菩薩。勝力佛の國の、萬四千の菩薩。師子佛の國の、五百〔億〕の菩薩。離垢光佛の國の、八十億の菩薩。德首佛の國の、六十億の菩薩。妙德山佛の國の、六十億の菩薩。人王佛の國の、十億の菩薩。無上華佛の國の、無數にして稱計ふ可からざる、不退の諸の菩薩は、智慧勇猛

者。豈無此益。彼一生作惡業。臨終遇善友。纔十念佛。卽得往生。如是等類。多是前世。欣求淨土。念彼佛者。宿善內熟。今開發耳。故『十疑』云。

臨終遇善知識。十念成就者。並是宿善强。得善知識。十念成就。

云云。感師意亦同之。

[13]問。下々品生。若依宿善。十念生本願。卽有名無實。

答。設有宿善。若無十念。定墮無間。受苦無窮。明臨終十念。是往生勝緣。

餘の業に由るが故に、彼の難處に生れ、前の信に由るが故に、

此の根器と成る。

と。云云。『華嚴』を信ずる者にして、既に是くの如し。念佛を信ぜん者、豈此の益無からんや。彼の一生に惡業を作れるもの、臨終に善友に遇ひ、纔(わづ)かに十たび念佛して、卽ち往生することを得。是くの如き等の類、多くは是れ前世に、淨土を欣(ねが)ひ求めて、彼の佛を念ぜし者の、宿善內(うち)に熟して、今開發するのみ。故に『十疑』に云はく、

臨終に善知識に遇うて、十念成就する者は、並(みな)〔皆〕是れ宿善〔の業〕强く、〔始めて〕善知識〔に遇うこと〕を得て、十念成就するなり。

と。云云。感師の意も、亦これに同じ。

[13]問ふ。下々品の生、若し宿善に依らば、十念生(せはうまるると)の本願は、卽ち名のみ有つて、實無けん。

答ふ。設(たと)ひ宿善有りとも、若し十念すること無くんば、定んで無間〔地獄〕に墮ちて、苦を受くること窮(きは)まり無からん。明け

國也。若不雜修。專行此業。此卽執心牢固。定生極樂國。乃至 又報淨土生者極少。化淨土中生者不少。故『經』別說。實不相違也。已上。

12問。設雖不具三心。雖不期畢命。彼一聞名。尚得成佛。況暫稱念。何唐捐耶。

答。暫似唐捐。終非虛設。如『華嚴』偈。說聞經者。轉生時益云。

若人堪任聞。雖在於大海。
及劫盡火中。必得聞此經。

大海者。是龍界。『釋』云。由餘業故。生彼難處。由前信故。成此根器。云云。信『華嚴』者。既而如是。信念佛

慢して、執心牢固ならざるに由る」と。是をもつて知る、雜修の者は執心不牢の人爲り、故に懈慢國に生るゝなり。若し雜修せずして、專ら此の業を行ずるものは、此れ卽ち執心牢固にして、定んで極樂國に生る。乃至 又報の淨土に生るゝ者は極めて少く、化の淨土の中に生るゝ者は少からず。故に『經』には別して說きたまふ。實に相違せざるなり。と。已上。

12問ふ。設ひ三心を具せずと雖も、畢命を期せずと雖も、彼の一たび名を聞くすら、尚成佛することを得といふ。況や暫くも稱念する、何ぞ唐捐ならん耶。

答ふ。暫くは唐捐なるに似たれども、終には虛設に非ず。『華嚴』の偈に、『經』を聞ける者の、生を轉ぜん時の益を、說いて云ふが如し。

若し人の聞くに堪任へたるは　大海及び劫盡の
火の中に在らんも　必ず此の經を聞くを得ん

と。「大海」とは、是れ龍海なり。『釋』に云はく、

11問。『菩薩處胎經』第二說。
西方去此閻浮提。十二億那由他。有懈慢界。國土快樂。作倡伎樂。衣被服飾。香華莊嚴。七寶轉開床。擧目東視。寶床隨轉。北視西視南視。亦如是轉。前後發意衆生。欲生阿彌陀佛國者。皆深著懈慢國土。不能前進。生阿彌陀佛國。億千萬衆。時有一人。能生阿彌陀佛國。
已上。以此『經』準。難可得生。
答。『群疑論』引善導和尙前『文』而釋此難。又自助成云。
此『經』下文言。「何以故。皆由懈慢。執心不牢固」。是知。雜修之者。爲執心不牢之人。故生懈慢

畢命を期と爲し、勤修して怠ること無くんば、業をして決定せしむるに、是れを張本と爲す。

11問ふ。『菩薩處胎經』の第二に說く、
西方に、此の閻浮提を去ること、十二億那由他にして、懈慢界有り。國土快樂にして、倡伎樂を作す。衣被服飾、香華莊嚴せり。七寶轉開〔關〕の床あつて、目を擧げて東を視るとき、寶床隨つて轉る。北を視、西を視、南を視るも、亦是くの如く轉る。前後に意を發す衆生の、阿彌陀佛の國に生れんと欲する者は、皆懈慢國土に深〔染〕著し、前進んで阿彌陀佛の國に生るゝこと能はず。億千萬衆のなか、時に一人有つて、能く阿彌陀佛の國に生る。
と。已上。此の『經』を以て準ずるに、生るゝことを得可きこと難からん。
答ふ。『群疑論』に、善導和尙の前の『文』を引いて、此の難を釋せり。又自ら助成して云はく、
此の『經』の下の文に言はく「何を以ての故とならば、皆懈

一。不決定故。信心不相續。餘念間故。此三不相應者。不能往生。若具三心。不往生者。無有是處。

導和尚云。

若能如上。念々相續。畢命爲期者。十卽十生。百卽百生。若欲捨專。修雜業者。百時希得一二。千時希得三五。

言如上者。指禮讃等五念門。至誠等三心。長時等四修也。

問。若必畢命爲期者。如何感和尚云。

長時短時。多修少修。皆得往生耶。

答。業類非一故。二師倶無過。然畢命爲期。勤修無怠。令業決定。是爲張本。

答ふ。綽和尚の云はく、

信心深〔淳〕からず、若しは存し若しは亡するが故に。信心一ならず、決定せざる〔無〕が故に。信心相續せず、餘念間はるが故に。〔此の三、相應せざれば、往生すること能はず。若し此の〕三心を具して、〔往〕生せずといはゞ、是の處有ること無し。

と。導和尚の云はく、

若し能く上の如く、念々相續して、畢命を期と爲る者は、十卽十生、百卽百生なり。若し專を捨てゝ、雜業を修せんと欲する者は、百の時希に一二を得、千の時希に三五を得。

と。「上の如く」と言ふは、禮、讃等の五念門と、至誠等の三心と、長時等の四修とを指せるなり。

問ふ。若し必ず畢命を期と爲さば、如何んぞ感和尚は

長時も短時も、多修も少修も、皆〔咸〕往生することを得。

と云へる耶。

答ふ。業類は一に非ざるが故に、二師倶に過無し。然れども、

『觀經義記』云。

九品人。生彼國已。得益之劫數。依勝而說。理亦有過之者。

取意。今謂。汎論九品。或復可有。少分速於此者。

[8]問。『雙觀經』中。亦有如彌勒等。諸大菩薩。當生極樂。故知『經』中九品得益。依劣而說。何言依勝耶。

答。約生彼國。始悟無生。前後早晚。謂之依勝。更不論彼。上位大士。然彼大士。於九品中。攝與不攝。別應思擇。

[9]問。若凡下輩。亦得往生。云何近代。於彼國土。求者千萬。得無一二。

答。綽和尚云。

信心不深。若存若亡故。信心不

九品の人の、彼の國に生れ已つて、益を得るの劫數は、勝れたるものに依つて說けり。理は、亦これに過ぎたる者有るべし。

と。取意す。今謂はく、汎く九品を論ずれば、或は復た少分に、此れよりも速かなる者有る可し。

[8]問ふ。『雙觀經』の中にも、亦彌勒等の、諸の大菩薩の如き有つて、當に極樂に生るべしといふ。故に知る、『經』の中の九品の得益は、劣れるものに依つて說きしならん。何ぞ、「勝れたるものに依つて」と言へる耶。

答ふ。彼の國に生れて、始めて無生〔忍〕を悟るの、前後早晚に約して、これを「勝れたるものに依つて」と謂へり。更に彼の上位の大士をば論ぜず。然も、彼の大士を、九品の中に於て攝すると、攝せざるとは、別に思擇す應し。

[9]問ふ。若し凡下の輩も、亦往生することを得ば、云何んぞ近代、彼の國土を求むる者は、千萬なるも、得るものは一二も無きや。

前凡夫。判九品位。不許諸師。所判深高。又『經』『論』多。依文判義。今『經』所說。上三品業。何必執爲。深位行耶。

⁶問。若爾生彼。不應早悟。無生法忍。

答。天台有。二無生忍位。若別教人。歷劫修行。悟無生忍。若圓敎人。乃至惡趣身。亦有頓證者。穢土尙爾。何況淨土。彼土諸事。莫例餘處。何處一切凡夫。未至其位。終無退墮。何處一切凡夫。悉得五神通。妙用無礙耶。證果遲速。例亦可然。

⁷問。上品生人。得益早晚。一向爾耶。

答。『經』中且擧一類。故慧遠和尙

凡夫を取つて、上品の三と爲せるをや。又『觀經』の善導禪師の『玄義』には、大小乘の方便以前の凡夫を以て、九品の位に判じて、諸師の所判の深高なるを許さざるなり。又『經』『論』は、多くは文に依つて義を判ず。今の『經』に說く所の、上三品の業、何ぞ必ずしも執して、深位の行と爲ん耶。

⁶問ふ。若し爾らば、彼に生れて早く無生法忍を悟る應からじ。

答ふ。天台に、二の無生忍の位有り。若し別教の人ならば、歷劫修行して、無生忍を悟る。若し圓教の人ならば、乃至惡趣の身にても、亦頓證する者有り。穢土にして尙爾り、何に況や淨土なるをや。彼の土の諸事は、餘處に例すること莫れ。何れの處か、一切の凡夫、未だ其の位に至らずして、終に退墮すること無く、何れの處か、一切の凡夫、悉く五神通を得て、妙用無礙ならん耶。證果の遲速、例して亦然る可し。

⁷問ふ。上品生の人の、得益の早晚は、一向に爾り耶。

答ふ。『經』の中には、且く一類を擧げたるのみ。故に慧遠和尙の、『觀經義記』に云はく、

中下是種解脱分善人。

力法師同之。基云。

中上四善根。中々三賢。中下方便前人。

有云。

如次忍頂懦。

有云。

三生並是種解脱分善根人也。

已上六品亦有餘釋。見感禪師『論』。龍興『記』等。」下品三生無別階位。但是具縛造惡人也。

問。明往生人其位有限。寧知猶是我等分耶。

答。上品之人。階位設深。下品三生。豈非我等耶。況彼後釋。既取十信以前凡夫。爲上品三。又『觀經』善導禪師『玄義』。以大小乘方便。以

を説くなり。故に諸師、各ゝ一義に據るなり。」中品の三生は、遠の云はく、

中上は是れ〔前の〕三果、中々は是れ七方便、中下は是れ解脱分の善〔根〕を種ゑたる人なり。

と。力法師は、これに同じ。基の云はく、

中上は四善根、中々は三賢、中下は方便の前の人なり。

と。有るが云はく、

次の如く、忍と頂と懦〔軟〕となり。

と。有るが云はく、

三生は並是れ、解脱分の善根を種ゑたる人なり。

と。已上の六品には、亦餘の釋有り。感禪師の『論』、龍興の『記』等を見よ。」下品の三生には、別の階位無し。但是れ具縛造惡の人なり。〔問ふ。〕明けし、往生の人は、其の位に限り有りといふことを。寧ぞ猶是れ、我等が分なりといふことを知らん耶。

答ふ。上品の人は、階位設ひ深くとも、下品の三生は、豈我等〔が分〕に非ざらん耶。況や彼の後の釋には、既に十信以前の

所以諸師所判不同者。以無生忍位不同故。『仁王經』無生忍在。

七八九地。

『諸論』在。

初地。

或。

忍位。

『本業瓔珞經』在。

十住。

『華嚴經』在。

十信。

『占察經』說。

修一行三昧得相似無生法忍者。

也。故諸師各據一義也。」中品三生。遠云。

中上是前三果。中々是七方便。

する者なり。上中と上下とは、唯十信以〔已〕前の、菩提心を發して、善を修する凡夫を取る。起行の淺深を、以て二品を分つなり。

と。諸師の所判不同なる所以は、無生忍の位の、不同なるを以ての故なり。『仁王經』には、無生忍は

七、八、九地。

に在り。『諸論』には

初地。

に在り、或は

忍位。

なり。『本業瓔珞經』には

十住。

に在り。『華嚴經』には

十信。

に在り。『占察經』には

一行三昧を修して、相似の無生法忍を得る者。

師云。
上々生四五六地。上中生初二三地。上下生地前卅心也。
力法師云。
上々行向。上中十解。上下十信。
基師云。
上々十廻向。上中解行。上下十信。
有云。
上々十住初心。上中十信後心。上下十信初位。
有云。
上々十信及以前。能發三心。能修三行者也。上中上下唯取十信以前。發菩提心修善凡夫。起行淺深以分三品也。

淨土も亦爾り。命長くして病無く、勝れたる侶と提携し、純正にして邪無く、唯淨にして染無く、恒に聖き尊に事ふ。此の五の縁に由つて、其の處には退くこと無し。
と。已上。略抄す。
[5]問ふ。九品の階位は、異解不同なり。遠法師の云ふが如し。
上々生は四・五・六地、上中生は初・二・三地、上下生は地前の三十心なり。
と。力法師の云はく、
上々は行・向、上中は十解（住）、上下は十信なり。
と。基師の云はく、
上々は十廻向、上中は解・行、上下は十信なり。
と。有るが云はく、
上々は十住の初心、上中は十信の後心、上下は十信の初位なり。
と。有るが云はく、
上々は十信、及び以前の、能く三心を發して、能く三行を修

[4]問。彼國衆生。皆不退轉。明知。非是凡夫生處。

答。所言不退者。非必是聖德。如『要決』云。

今明不退。有其四種。『十住毘婆沙』云。一位不退。卽修因萬劫。不復退墮。惡律儀行。流轉生死。二行不退。已得初地。利他行不退。三念不退。八地已去。無功用。意得自在故。四處不退。雖無文證。約理以成。何者。如天中得果。卽得不退。淨土亦爾。命長無病。勝侶提携。純正無邪。唯淨無染。恒事聖尊。由此五緣。其處無退。已上略抄。

[5]問。九品階位。異解不同。如遠法

廣く、法界の衆生を度せんとす。斯の勝解有るが故に、愚には非ざるなり。正しく〔佛を〕念ずる時、結使眠伏するが故に、結使の念を雜へずと言ふなり。

と。略抄す。その意に云はく、凡夫の行人は、此の德を具すとなり。

[4]問ふ。彼の國の衆生は、皆退轉せず、と。明かに知る、是れ凡夫の生るゝ處に非ざることを。

答ふ。言ふ所の不退とは、必ずしも是聖の德に非ず。『要決』に云ふが如し。

今、不退を明さば、其の四種有り。『十住毘婆沙』に云はく。一には位不退。卽ち、因を修すること萬劫なるも、復た惡律儀の行に退墮して、生死に流轉せず、と。二には行不退。已に初地を得れば、利他の行退かず、と。三には念不退。八地已去は、無功用にして、意に自在を得るが故に、と。四には處不退。文證無しと雖も、理に約して以て成ず。何んとなれば、天中に果を得るものは、卽ち退かざることを得るが如し。

土。

答。天台云。

無量壽國。雖果報殊勝。臨終之時。懺悔念佛。業障便轉。卽得往生。雖具惑染。願力持心。亦得居也。

[3]問。若許凡夫。亦得往生。『彌勒問經』如何通會。『經』云。

念佛者。非凡愚念。不雜結使。得生彌陀佛國。

答。『西方要決』釋云。

知娑婆苦。永辭染界。非薄淺。汎當來作佛。意專廣度。法界衆生。有斯勝解。故非愚也。正念時。結使眠伏。故言不雜結使念也。〔略抄〕。意云。凡夫行人。具此德也。

と。

[2]問ふ。設ひ報土に非ざらんも、惑業の重き者、豈淨土を得んや。

答ふ。天台の云はく、

無量壽の國は、果報殊勝なりと雖も、臨終の時、懺悔して念佛すれば、業障便ち轉じて、卽ち往生することを得。惑染を具すと雖も、願力持心すれば、亦居することを得るなり。

と。

[3]問ふ。若し凡夫も、亦往生することを得と許さば、『彌勒問經』は、如何んが通會せん。『經』に云はく、

佛を念ずるは、凡愚の念に非ず。結使〔の念〕を雜へずして、彌陀佛の國に生るゝことを得。

と。

答ふ。『西方要決』に釋して云はく、

娑婆は苦なりと知つて、永〔長〕く染界を辭するは、〔卽ち〕薄淺に非ず、汎〔爾に隨つて生る。〕當來に佛と作つて、意專ら

第二往生階位者。

1問。『瑜伽論』云。

三地菩薩。方生淨土。

今勸地前。凡夫聲聞。有何意。答。淨土差別。故無有過。如感師釋云。

諸『經』『論』文。說生淨土。各據一義。淨土既有。麁妙勝劣。得生亦有。上下階降。

又道宣律德云。

三地菩薩。始見報佛淨土。

2問。設非報土。惑業重者。豈得淨

故に能く身を分けて十方に遍し

悉く菩提樹王の下に現る

と。

第二に往生の階位

とは、

1問ふ。『瑜伽論』に云はく、

三地の菩薩、方に淨土に生る。

と。今、地前の凡夫、聲聞を勸むるは、何の意有りや。

答ふ。淨土に差別あり。故に過有ること無し。感師の釋して云へるが如し。

諸の『經』『論』の文に、淨土に生るゝことを說くは、各〻一義に據れり。淨土に既に、麁妙勝劣有れば、生を得るにも、亦上下階降有り。

と。又道宣〔世〕律德の云はく、

三地の菩薩、始めて報佛の淨土を、見る〔ことを得可し〕。

一々塵中無量土。
其中境界亦無量。
悉住無邊無盡劫。

問[17]。如來施化事不孤起。要對機緣。何遍十方。

答。廣劫修行。成就無量衆。故彼機緣。亦遍十方界。如『華嚴』偈云。

往昔勤修多劫海。
能轉衆生深重障。
故能分身遍十方。
悉現菩提樹王下。

菩薩は諸の願海を修行し
普く衆生の心の所欲に隨ふ
衆生の心行廣くして邊り無ければ
菩薩の國土も十方に遍し

と。又云はく、

如來よに出現でて十方に遍し
一々の塵の中に無量の土あり
其の中の境界も亦〔皆〕量り無く
悉く無邊無盡の劫に住む

と。

問[17]ふ。如來の化を施したまふは、事孤り起らず、要ず機緣に對す。何ぞ十方に遍するや。

答ふ。廣劫に修行して、無量の衆を成就〔熟〕したまふ。故に彼の機緣も、亦十方界に遍し。『華嚴』の偈に云ふが如し。

往昔勤修すること多劫海にして
能く衆生の深重き障りを轉ず

輪聖王。其母名曰。殊勝妙顏。子名月明。奉事弟子。名無垢稱。智慧弟子。曰攬光。神足精勤。名曰大化。爾時魔王。名曰無勝。有提婆達多。名曰寂靜。阿彌陀佛。與大比丘。六萬人俱。

已上。

[16] 問。彼佛所化。爲唯極樂清泰二國。

答。教文隨緣且擧一隅。論其實處不可思議。如『華嚴經』偈云。

菩薩修行諸願海。
普隨衆生心所欲。
衆生心行廣無邊。
菩薩國土遍十方。

又云。

如來出現遍十方。

は、未だ何れの處なるかを知らず。但し道綽等の諸師は、『鼓音聲經』に說く所の國土を以て、彼の穢土と爲せり。彼の『經』に云ふが如し。

阿彌陀佛は、聲聞と倶なり。其の國を號けて淸泰と曰ふ。聖王の住む所なり。其の城の縱廣、十千由旬にして、中に刹利の種を充滿せり。阿彌陀如來、應正遍知の父を、月上轉輪聖王と名づけ、其の母を名づけて、殊勝妙顏と曰ひ、子を月明と名づけ、奉事の弟子を、無垢稱と名づけ、智慧の弟子を、〔名づけて〕攬光と曰ひ、神足の精勤を、名づけて大化と曰ふ。爾の時の魔王を、名づけて無勝と曰ひ、提婆達多有つて、名づけて寂靜と曰ふ。阿彌陀佛は、大比丘六萬人と倶なれり。

と。已上。

[16] 問ふ。彼の佛の化したまふ所は、唯極樂と淸泰との二國なりと爲るや。

答ふ。教文は緣に隨つて、且く一隅を擧ぐるのみ。其の實處を論ずれば、不可思議なり。『華嚴經』の偈に云ふが如し。

此義。擧那庾多。
已上。此釋可思。
[14]問。彼佛所化。爲唯極樂。爲亦有餘。
答。『大論』云。
阿彌陀佛。亦有嚴淨。不嚴淨土。如釋迦文。
[15]問。何等是耶。
答。極樂世界。卽是淨土。然其穢土。未知何處。但道綽等諸師。以『鼓音聲經』所說國土。爲彼穢土。如彼『經』云。
阿彌陀佛。與聲聞俱。其國號曰淸泰。聖王所住。其城縱廣。十千由旬。於中充滿。刹利之種。阿彌陀如來。應正遍知父。名月上轉

倶胝と言ふは、此には億と爲すなり。那庾多といふは、此の間の姟〔垓〕の數に當るなり。世俗に言はく、十千を萬と曰ひ、十萬を億と曰ひ、十億を兆と曰ひ、十兆を經と曰ひ、十經を姟と曰ふ。姟は、猶是れ大數なり。百千倶胝とは、卽ち十萬億なり。億に四位有り、一には十萬、二には百萬、三には千萬、四には萬々なり。今億と言へるは、卽ち是れ萬々なり。此の義を顯はさんが爲に、那庾多を擧げたるなり。

と。已上。此の釋をもつて、思ふ可し。

[14]問ふ。彼の佛の化したまふ所は、唯極樂のみとや爲ん、亦餘有りとや爲ん。

答ふ。『大論』に云はく、

阿彌陀佛にも、亦嚴淨と、不嚴淨との土〔世界〕の有ること、釋迦文〔佛の國〕の如し。

と。

[15]問ふ。何等か是れなる耶。

答ふ。極樂世界は、卽ち是れ淨土なり。然れども、其の穢土

答。『經』云。
從此西方。過十萬億佛土。有極樂世界。
有『經』云。
於是西方。去此世界。過百千俱胝。那庾多佛土。有佛世界。名曰極樂。
[13]問。二『經』何故不同。
答。『論』智光『疏』意云。
言俱胝者。此爲億也。那庾多者。當此間姟數也。世俗言十千曰萬。十萬曰億。十億曰兆。十兆曰經。十經曰姟。姟猶是大數也。百千俱胝卽十萬億。億有四位。一者十萬。二者百萬。三者千萬。四者萬々。今言億者。卽是萬々。爲顯

〔ることを得〕と雖も、香華衣食等の、種々の供養の報を得ず。
と。此の『文』は、彼の佛の本願に違ふ。更に之を思擇せよ。玄一師と因法師とは、同じく云はく、
實に約して論ずれば、亦勝劣有り。然れども、其の狀相ひ似たるが故に、好醜無しと說く。
と。
[12]問ふ。極樂世界は、此を去ること幾ばくの處ぞや。
答ふ。『經』に云はく、
此れより西方、十萬億の佛土を過ぎて、極樂世界有り。
と。有る『經』に云はく、
是れより西方に、此の世界を去ること、百千俱胝、那庾多の佛土を過ぎて、佛の世界有り。名づけて極樂と曰ふ。
と。
[13]問ふ。二の『經』、何が故ぞ不同なる。
答ふ。『論』の智光の『疏』の意に云はく、

捨千金。雖不可稱。而能辨萬事。二界修行亦復如是。如『金剛般若經』云。

　佛世信解。未足爲勝。滅後爲勝。

或有餘義。不能委曲。

[11]問。如隨娑婆行因。極樂階位有別。所感福報亦有別耶。

答。大都無別。細分有差。如『陀羅尼集經』第二云。

　若人不以香華。衣食等供養者。雖生彼淨土。而不得香華衣食等。種々供養之報。

（此文違彼佛本願。更思擇之。）玄一師。因法師。同云。

約實而論。亦有勝劣。然其狀相似故。說無好醜。

[12]問。極樂世界。去此幾處。

と。已上。是れ其の勝劣なり。

答ふ。二界の善根は、尅對せば爾る可し。然れども、佛に値ひたてまつる緣勝れたれば、速かに悟るに失無し。或は此の『經』は、但修行の難易を顯はせるにして、善根の勝劣を顯はせるには非ず。譬へば、貧賤の一錢を施すは、稱美む可しとせんも、而も衆事を辨ぜず。富貴の千金を捨つるは、稱む可からざ雖も、而も能く萬事を辨ずるが如し。二界の修行も、亦復た是くの如し。『金剛般若經』に云ふが如し。

　佛世に信解するは、未だ勝れたりと爲るに足らず。滅後をば勝れたりと爲す。

と。或は餘の義有り。委曲にすること能はず。

[11]問ふ。娑婆の行因に隨つて、極樂の階位に別有るが如く、所感の福報にも、亦別有り耶。

答ふ。大都は別無けれども、細分は差有り。『陀羅尼集經』の第二に云ふが如し。

　若し人、香華衣食等を以て供養せざれば、彼の淨土に生る

『文』梓楯。
答。未知彼國多善劣。此界少善勝。
問。『雙觀經』說。
於是廣植德本。布恩施惠。勿犯道禁。忍辱精進。一心智慧。轉相敎化。立善正意。齋戒淸淨。一日一夜。勝在無量壽佛國。爲善百歲。所以者何。彼佛國土。無爲自然。皆積衆善。無毛髮之惡。於此修善。十日十夜。勝於他方。諸佛國中。爲善千歲等。
已上。是其勝劣。
答。二界善根剋對可爾。然値佛緣勝。速悟無失。或此『經』但顯修行難易。非顯善根勝劣。譬如貧賤施一錢。雖可稱美。而不辨衆事。富貴

國土の、長遠の時剋を經て、無生忍をば悟るといふことを。然れば彼に約して、卽に悟ると名づくるも、此に望むれば、卽ち億千歲なり。或はいふ可し、上々の人は、必ず是れ方便〔位、最〕後心の圓滿せる者なりと。若し爾らずば、諸『文』梓楯せん。

答ふ。未だ知らず、彼の國の多善は劣り、此の界の少善は勝るといふことを。

問ふ。『雙觀經』に說く、

是に於て廣く德本を植〔殖〕ゑ、恩を布き惠を施して、道禁を犯すこと勿れ。忍辱、精進、一心、智慧にして、轉た相ひ敎化し、〔德を爲し〕善を立て、〔正心〕正意にして、齋戒淸淨なること、一日一夜すれば、無量壽佛の國に在つて、善を爲すこと百歲するに勝れり。所以は何ん。彼の佛の國土は、無爲自然にして、皆衆の善を積み、毛髮ほどの惡も無ければなり。此に於て善を修すること、十日十夜すれば、他方の諸佛の國の中〔土〕に於て、善を爲すこと千歲するに勝れり、等。

四者若據彼界說九品者。上品中生一宿。上品下生一日夜。卽當此界半劫一劫。若許爾者。胎生疑心者。尙逕娑婆五百歲。而速得見佛。上品信行者。豈過半劫一劫而遲開蓮華耶。有此理故。後釋無失。

9問。若以此界日夜時尅。說彼相者。彼上々品。生彼國已。不應卽悟。無生法忍。所以然者。此界少時。修行爲勝。彼國多時。善根爲劣。既爾上上品人。於此界。一日至七日。具足三福業。尙不能證。無生法忍。云何生彼。聞法卽悟。故知。經彼國土。長遠時尅。悟無生忍。然約彼名卽悟。望此卽億千歲。或可上々人。必是方便後。心圓滿者。若不爾者。諸

と。取意す。憬興等の師は、此の『文』を以て、此の方の五百歲なりと證せり。今云はく、彼の胎生の歲數、既に此の間に依つて說けりとせば、九品の時尅〔刻〕、何の別義有つてか、彼に同ぜざらん耶。四には、若し彼の界に據つて、九品を說けりとせば、上品中生の一宿、上品下生の一日夜は、卽ち此の界の半劫と一劫とに當る。若し爾を許さば、胎生の疑心者、尙娑婆の五百歲を逕て、而も速かに佛を見たてまつることを得るに、上品の信行者、豈半劫と一劫とを過ぎて、而も遲く蓮華を開かん耶。此の理有るが故に、後の釋失無し。

9問ふ。若し此の界の、日夜の時尅を以て、彼の相を說けりとせば、彼の上々品は、彼の國に生れ已つて、卽に無生法忍を悟る應からず。然る所以は、此の界の少時の修行を、勝れたりと爲し、彼の國の多時の善根を、劣れりと爲す。既に爾らば、上上品の人は、此の界に於て、一日より七日に至るまで、三福業を具足して、尙無生法忍を、證すること能はざるに、云何んぞ彼に生れて、法を聞いて卽に悟ることをえん。故に知る、彼の

耶。二者如『尊勝陀羅尼經』說。
忉利天上。善住天子。聞空聲告。
汝當七日死。時天帝釋。承佛教
勅。令彼天子。七日勤修。過七日
後。壽命得延。
取意。此是人中日夜而說。若據天上
七日者。當於人中七百歲。不應佛
世八十年中。決了其事。九品日夜
亦應同之。三者法護所譯『經』云。
胎生之人。過五百歲。得見於佛。
『平等覺經』云。
於蓮華中。化生在城中。於是間
五百歲。不能得出。
取意。憬興等師。以此文。證此方五百
歲也。今云。彼胎生歲數。既依此間
說。九品時尅。有何別義。不同彼耶。

山の如き長大の人、一毛の端を以て、其の指節と爲んに似たる應し。故に知んぬ、佛の指の量を以て、佛の身の長短を說かざることを。何ぞ必ずしも、淨土の時尅〔剋〕を以て、華の開く遲速を說かん耶。二には、『尊勝陀羅尼經』に說くが如し。

忉利天上の、善住天子、空の聲の告ぐるを聞く「汝、當に七日にして死すべし」と。時に天帝釋、佛の敎勅を承けて、彼の天子をして、七日のあひだ勤修せしむるに、七日を過ぎて後、壽命延ぶることを得たり。

と。取意す。此れは是れ、人中の日夜をもつて說けるなり。若し天上の七日に據らば、人中の七百歲に當り、佛世の八十年の中に、其の事を決了す應からず。九品の日夜も、亦これに同じかる應し。三には、法護所譯の『經』に云はく、

胎生の人は、五百歲を過ぎて、佛を見たてまつることを得。

と。『平等覺經』に云はく、

蓮華の中に化生して、城の中に在り。是の間の五百歲に於て、出づることを得ること能はず。

樂。如忉利天。已上。有師云。
胎生是中品下品。
有師云。
九品所不攝。
雖有異說。快樂不別。何況判彼九品所逕日時。諸師不同。懷感智憬等諸師。許彼國土日夜劫數。誠當所責。有師云。
佛以此土日夜說之。令衆生知。
云云。今謂。後釋無失。且以四例助成。一者彼佛身量若干由旬。不以彼佛指分疊爲彼由旬也。若不爾者。應似如須彌山長大之人。以一毛端爲其指節。故知。不以佛指量說佛身長短。何必以淨土時尅說華開遲速

苦無し。豈、極樂に非ざらん。『雙觀經』に云ふが如し。
其の胎生の者、處む所の宮殿は、或は百由旬、或は五百由旬、各ゝ其の中に於て、諸の快樂を受くること、忉利天の如し。
と。已上。有る師の云はく、
胎生は、是れ中品と下品となり。
と。有る師の云はく、
九品に攝せざる所なり。
と。異說有りと雖も、快樂別ならず。何に況や、彼の九品に逕る所の、日時を判ずるに、諸師不同なるをや。懷感、智憬等の諸師の、彼の國土の日夜の劫數と許すは、誠に責むる所に當れり。有る師の云はく、
佛は此の土の日夜を以て之を說いて、衆生をして知らしめたまふなり。
と。云云。今謂はく、後の釋失無し。且く四例を以て、助成せん。一には、彼の佛の身の量若干由旬といふは、彼の佛の指分を以て、疊ねて彼の由旬と爲るにはあらず。若し爾らずば、須彌

佛身量。六十萬億那由他。恒河沙由旬。云云。樹座佛身。何不相稱。答。異解不同。或釋佛境界大小不相礙。或釋寄應佛說樹量。寄眞佛說身量。又有多釋。不可具述。

問。『華嚴經』云。娑婆世界一劫。爲極樂國一日一夜等。云云。由此當知。上品中生逕宿華開。當此間半劫。乃至下々生十二劫。當此間恒沙塵數劫。何名極樂。答。設經恒劫蓮華不開。既無微苦。豈非極樂。如『雙觀經』云。其胎生者。所處宮殿。或百由旬。或五百由旬。各於其中。受諸快

道〔場〕の樹、高さ四十萬由旬にして、樹の下に師子の座有つて、高さ五百由旬なり。

と云ひ、『觀經』には

佛身の量〔高さ〕、六十萬億那由他恒河沙由旬なり。

と云ふ。云云。樹と座と佛身と、何ぞ相ひ稱はざるや。

答ふ。異解不同なり。或は釋すらく「佛の境界は、大小相ひ礙げず」と。或は釋すらく「應佛に寄せて樹の量を說き、眞佛に寄せて身の量を說く」と。又、多くの釋有り。具に述ぶ可からず。

問ふ。『華嚴經』に云はく、

娑婆世界の一劫を、極樂國〔安樂世界阿彌陀佛刹〕の一日一夜と爲す、等。

と。云云。此れに由つて、當に知るべし。上品中生の、宿を逕て華の開くは、此の間の半劫に當り、乃至下々生の十二劫は、此の間の恒沙塵數劫に當れり。何ぞ極樂と名づけん。

答ふ。設ひ恒〔沙〕劫を經るまで、蓮華開けざらんも、既に微

也。

已上。此釋善矣。須專稱念。勿勞分別。

[6]問。彼佛相好。何以不同。

答。『觀佛經』說諸佛相好云。

同人相故。說三十二。勝諸天故。說八十種好。爲諸菩薩。說八萬四千。諸妙相好。

已上。彼佛準之。

[7]問。『雙觀經』云。

彼佛道樹。高四百萬里。

『寶積經』云。

道樹高。十六億由旬。

『十往生經』云。

道樹高。四十萬由旬。樹下有師子座。高五百由旬。

『觀經』云。

せず。但佛の語を信じ、『經』に依つて專ら念ずれば、即ち往生することを得。亦、須らく報と化とを圖度るべからざるなり。

と。已上。此の釋、善し矣。須らく專ら稱念すべく、勞はしく分別すること勿れ。

[6]問ふ。彼の佛の相好は、何を以てか同じからざる。

答ふ。『觀佛經』に、諸佛の相好を說いて云はく、

人相に同〔因〕ずるが故に、三十二〔相〕と說き、諸天に勝るが故に、八十〔種〕好と說く。諸の菩薩の爲には、八萬四千の、諸の妙相好と說く。

と。已上。彼の佛も、之に準ぜよ。

[7]問ふ。『雙觀經』には

彼〔無量壽〕の佛の道〔場〕の樹、高さ四百萬里なり。

と云ひ、『寶積經』には

道〔菩提〕の樹、高さ十六億由旬なり。

と云ひ、『十往生經』には

答。綽禪師會『授記經』云。此是報身。現隱沒相。非滅度也。迦才會『同性經』云。淨土中成佛。判爲報者。是受用事身。非實報身也。

5問。何者爲正耶。

答。迦才云。衆生起行。既有千殊。往生見土。亦有萬別也。若作此解者。諸『經』『論』中。或判爲報。或判爲化。皆無妨難也。但知諸佛修行。具感報化二土也。如『攝論』「加行感化。正體感報」。若報若化。皆欲成就衆生。此則土不虛設。行不空修。但信佛語。依『經』專念。卽得往生。亦不須圖度。報之與化

答ふ。綽禪師、『授記經』を會して云はく、此れは是れ報身の、隱沒の相を〔示〕現したまふにして、滅度したまふには非ざるなり。

と。迦才、『同性經』を會して云はく、淨土の中の成佛を、判じて報と爲すは、是れ受用〔の事〕身なり。實の報身には非ざるなり。

と。

5問ふ。何れを、正しと爲る耶。

答ふ。迦才の云はく、衆生の起行に、既に千殊有れば、往生して土を見るに、亦萬別有るなり。若し此の解を作さば、諸の『經』『論』の中に、或は判じて報と爲し、或は判じて化と爲すは、皆妨難無きなり。但し、諸佛の修行は、具に報・化の二土を感ずといふことを、知るべし。『攝論』に「加行は化を感じ、正體は報を感ず」といふが如し。若しは報、若しは化、皆衆生を成就せんと欲するなり。此れ則ち、土は虛らに設けず、行は空しく修

當有終極。佛涅槃後。正法住世。等佛壽命。善男子。阿彌陀佛。正法滅後。過中夜分。明相出時。觀世音菩薩。於菩提樹下。成等正覺。號普光功德山王如來。其佛國土。無有聲聞。緣覺之名。其佛國土。號衆寶普集莊嚴。普光功德如來涅槃。正法滅後。大勢至菩薩。卽於其國成佛。號善住功德寶王如來。國土光明壽命。乃至法住等無有異。

[4]問。『同性經』云。

報身。

『授記經』云。

入滅。

二『經』相違。諸師何會。

阿彌陀佛の壽命は、無量百千億劫にして、當に終極有るべし。佛涅槃して後、正法世に住まること、佛の壽命と等しからん。善男子、阿彌陀佛の、正法滅して後、中夜分を過ぎて、明相の出づる時、觀世音菩薩は、菩提樹の下に於て、等正覺を成じて、普光功德山王如來と號けん。其の佛の國土には、聲聞、緣覺の名有ること無し。其の佛の國土を、衆寶普集莊嚴と號くべし。普光功德如來涅槃して、正法滅して後、大勢至菩薩は、卽ち其の國に於て成佛し、善住功德寶王如來と號けん。國土、光明、壽命、乃至法の住まること、等しくして異なり有ること無けん。

と。

[4]問ふ。『同性經』には

報身。

と云ひ、『授記經』には

入滅す。

と云ふ。二『經』の相違、諸師何んが會するや。

答。『諸經』云。

十劫。

『大阿彌陀經』云。

十小劫。

『平等覺經』云。

十八劫。

『稱讃淨土經』云。

十大劫。

邪正難知。但『雙観經』璟興師『疏』。

會『平等經』云。

十八劫者。其小字闕其中點矣。

[3]問。未來壽幾何。

答。『小經』云。

無量無邊。阿僧祇劫。

『観音授記經』云。

阿彌陀佛。壽命無量。百千億劫。

十劫。

と云ひ、『大阿彌陀經』には

十小劫。

と云ひ、『平等覺經』には

十八劫。

と云ひ、『稱讃淨土經』には

十大劫。

と云ふ。邪正、知り難し。但し、『雙観經』の璟興師の『疏』に、

『平等經』を會して云はく、

「十八劫」とは、〔蓋し〕其れ「小」の字の、其の中の點を闕きしならん矣。

と。

[3]問ふ。未來の壽は、幾何ぞや。

答ふ。『小經』に云はく、

無量無邊、阿僧祇劫なり。

と。『観音授記經』に云はく、

應身佛同居土。
遠法師云。
是應身應土。
綽法師云。
是報佛報土。古舊等相傳皆云。「化土化身」。此爲大失。依『大乘同性經』云。「淨土中成佛者。悉是報身。穢土中成佛者。悉是化身」。又彼『經』云。「阿彌陀如來。蓮華開敷星王如來。龍主如來。寶德如來。等諸如來。清淨佛刹。現得道者。當得道者。如是一切。皆是報身佛也。何者如來化身。由如今日踊歩健如來。魔恐怖如來等」。
已上。『安樂集』。
問。彼佛成道。爲已久如。

應身の佛にして、〔凡聖〕同居の土なり。
と。遠法師の云はく、
是れ應身にして、應土なり。
と。綽法師の云はく、
是れ報佛にして、報土なり。古舊相ひ傳へて、皆「化土にして、化身なり」と云ふ。此れを、大なる失と爲す。『大乘同性經』に依るに、云はく「淨土の中の成佛は、悉く是れ報身なり。穢土の中の成佛は、悉く是れ化〔應〕身なり」と。又彼の『經』に云はく「阿彌陀如來、蓮華開敷星王如來、龍主〔王〕如來、寶德如來、等の諸の如來の、清淨の佛刹において、現に得道せる者、當に得道せん者、是くの如き一切は、皆是れ報身の佛なり。何者か、如來の化〔應〕身なる。由〔猶〕し、今日の踊歩健如來、魔恐怖如來等の如きなり」と。
と。已上、『安樂集』〔に依る〕。
問ふ。彼の佛成道したまうて、已に久しと爲んや如ん。
答ふ。『諸經』には〔多く〕

往生要集 巻下末

天台首楞嚴院沙門源信撰

大文第十。問答料簡者。略有十事。一極樂依正。二往生階位。三往生多少。四尋常念相。五臨終念相。六麁心妙果。七諸行勝劣。八信毀因緣。九助道資緣。十助道人法。

第一極樂依正者。

[1]問。阿彌陀佛。極樂淨土。是何身何土耶。

答。天台云。

大文第十に問答料簡

とは、略して十事有り。一には極樂の依正、二には往生の階位、三には往生の多少、四には尋常の念相、五には臨終の念相、六には麁心の妙果、七には諸行の勝劣、八には信毀の因緣、九には助道の資緣、十には助道の人法なり。

第一に極樂の依正

とは、

[1]問ふ。阿彌陀佛の、極樂淨土は、是れ何れの身、何れの土なり耶。

答ふ。天台の云はく、

其地。厠中之蓬。屠邊之麀。好惡由何乎。可見『佛藏經』知是非也。

を見て、是非を知る可きなり。

若有比丘得供養。
樂求利養堅著者。
於世更無如此惡。
故令不得解脫道。
如是貪求利養者。
既得道已還復失。

『佛藏經』迦葉佛記云。
釋迦牟尼佛。多受供養故。法當疾滅。
云云。如來尚爾。何況凡夫。[3]大象出窓。遂爲一尾所礙。行人出家。遂爲名利所縛。則知。出離最後之怨。莫大名利者也。但淨名大士。身在家心出家。藥王本事。避塵寰居雲山。今世行人。亦應如是。自料根性。而進止之。若不能制其心。猶須避於

若し比丘有つて供養を得
利養を樂求めて堅著はれなば
世に於て更に此くの如きの惡ぞ無き
故に解脫の道をば得ざらしむ
是の如く利養を貪求る者は
既に道を得已らんも還た復た失はん

と。〔又〕『佛藏經』に迦葉佛、記して云はく、
釋迦牟尼佛は、多く供養を受くるが故に、法は疾く滅す當し
と。云云。如來にして尚爾り、何に況や凡夫をや。[3]大象の窓を出づるに、遂に一尾の爲に礙げられ、行人の家を出づるに、遂に名利の爲に縛ばらる、と。則ち知る、出離最後の怨、名利より大なるものの莫きことを。但、淨名大士は、身は家に在れど心家を出で、藥王の本事は、塵寰を避けて雪山に居たり。今の世の行人、亦應に是くの如くなるべし。自ら根性を料つて、進止せよ。若し其の心を制すること能はずば、猶須らく其の地を避くべし。麻中の蓬と、屠邊の厩と、好惡何れにか由る乎。『佛藏經』

誠等三心。四歸向往生。聞淨土事。歸向稱念。讃歎等也。」

今私云。諸『經』行業。總而言之。不出『梵網』戒品。別而論之。不出六度。細明其相。有其十三。一者財法等施。二者三歸五戒。八戒十戒。多少戒行。三者忍辱。四者精進。五禪定。六般若。信第一義等。是也。七發菩提心。八修行六念。念佛法僧戒施天。謂之六念。十六想觀。亦不出之。九讀誦大乘。十守護佛法。十一孝順父母。奉事師長。十二不生憍慢。十三不染利養也。②『大集』月藏分偈云。

如樹果繁速自害。
竹蘆結實亦如是。
如任騾懷喪自身。
無智求利亦復然。

等の三心なり。四には、歸向して往生す。淨土の事を聞いて、歸向し、稱念し、讃歎する等なり。

と。」今、私に云はく。諸『經』の行業は、總じてこれを言はゞ、『梵網』の戒品を出でず、別してこれを論ぜば、六度を出でず。細しく其の相を明さば、其れ十三有り。一には財法等の施、二には三歸、五戒、八戒、十戒〔等の〕、多少の戒行、三には忍辱、四には精進、五には禪定、六には般若、第一義を信ずる等、是れなり。七には菩提心を發す、八には六念を修行す、佛・法・僧・戒・施・天を念ずるを、「六念」と謂ふ。十六想觀も、亦之を出でず。九には大乘を讀誦す、十には佛法を守護す、十一には父母に孝順し、師長に奉事す、十二には憍慢を生ぜず、十三には利養に染まざるなり。②『大集』の月藏分の偈に云はく、

樹の果繁らば速く自害るゝがごと
竹、蘆の實を結ぶも亦如是り
騾の懷妊まば自ら身を喪ふがごと
無智の利を求むるも亦復然なり

遇善知識。雖不念佛。但至心。令聲不絶。具足十念。稱南無無量壽佛。稱佛名故。於念々中。除八十億劫。生死之罪。

『雙觀經』三輩業。亦不出此。『觀經』以十六觀。爲往生因。[5]『寶積經』說佛前蓮華。化生有四因緣。『偈』云。

華香散佛及支提。
不害於他幷造像。
於大菩提深信解。
得處蓮華生佛前。

已上。餘不繁出。私云。支提者塔廟異名也。

第二總結諸業者。慧遠法師。出淨土因要有四。

一修觀往生。如十六觀。二修業往生。如三福業。三修心往生。至

第二に總じて諸業を結ぶ

とは、慧遠法師、淨土の因要を出せるに、四有り。

一には、觀を修して往生す。十六觀の如し。二には、業を修して往生す。三福業の如し。三には、心を修して往生す。至誠

者。若有善男子善女人。孝養父母。行世仁慈。下品上生者。或有衆生。作衆惡業。雖不誹謗。方等經典。如此愚人。多造衆惡法。無有慚愧。臨終聞十二部經。首題名字。及合掌。稱南無阿彌陀佛。下品中生者。或有衆生。毀犯五戒八戒。及具足戒。如此愚人。命欲終時。地獄衆火。一時俱至。遇善知識。以大慈悲。爲說阿彌陀佛。十力威德。廣說彼佛。光明神力。亦讃戒定慧。解脫知見。此人聞已。除八十億劫。生死之罪。下品下生者。或有衆生。作不善業。五逆十惡。具諸不善。如此愚人。以惡業故。應墮惡道。臨命終時。

此の人聞き已つて、八十億劫の、生死の罪を除く。下品下生とは、或は衆生有つて、不善業を作り、五逆、十惡、諸の不善を具へん。此くの如きの愚人、惡業を以ての故に、應に惡道に墮つべし。命終らんとする時に臨み、善知識に遇ひ、佛を念ぜずと雖も、但至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具足して、「南無無量壽〔阿彌陀〕佛」と稱へん。佛の名を稱ふるが故に、念々の中に於て、八十億劫の、生死の罪を除く。

と。『雙觀經』の、三輩の業も、亦此れを出でず。『觀經』には、十六觀を以て、往生の因と爲せり。[5]『寶積經』に、佛前の蓮華に化生するに、四の因緣有ることを說く。『偈』に云はく、

華〔花〕香をば佛と支提とに散げ
他を害さず、また像を造り
大菩提に於て深く信解せば
蓮華に處つて佛の前に生れ得ん

と。已上。餘は、繁く出さず。

三者修行六念。迴向發願。願生彼國。具此功德。一日乃至七日。卽得往生。上品中生者。不必受持。方等經典。善解義趣。於第一義。心不驚動。深信因果。不謗大乘。以此功德。迴向願求。生極樂國。上品下生者。亦信因果。不謗大乘。但發無上道心。以此功德。迴向願求。生極樂。中品上生者。若有衆生。受持五戒。持八戒齋。修行諸戒。不造五逆。無衆過患。以此善根。迴向願求。中品中生者。若有衆生。若一日一夜。受八戒齋。若一日一夜。持沙彌戒。若一日一夜。持具足戒。威儀無缺。以此功德。迴向願求。中品下生。

衆生有つて、五戒を受持し、八戒齋を持ち、諸戒を修行し、五逆を造らず、衆の過患無からん。此の善根を以て廻向して、(西方極樂世界に生れんと)願求ふ。中品中生とは、若し衆生有つて、若しは一日一夜、八戒齋を受(持)し、若しは一日一夜、沙彌戒を持ち、若しは一日一夜、具足戒を持ち、威儀缺くること無し。此の功德を以て廻向して、(極樂國に生れんと)願求ふ。中品下生とは、若し善男子、善女人有つて、父母に孝養し、世の仁慈を行ふ。下品上生とは、或は衆生有つて、衆の惡業を作らん。方等經典を、誹謗らずと雖も、此くの如きの愚人は、多く衆の惡法を造り、慚愧有ること無けん。臨終に、十二部經の、首題の名字を聞き、及び合掌して「南無阿彌陀佛」と稱ふ。下品中生とは、或は衆生有つて、五戒、八戒、及び具足戒を毀犯らん。此くの如きの愚人、命終らんと欲する時、地獄の衆火、一時に俱に至らん。善知識の、大慈悲を以て、爲に阿彌陀佛の、十力威德を說き、廣く彼の佛の、光明神力を說き、亦戒、定、慧、解脫、知見を讃むるに遇はん。

欲生彼國者。當修三福。一者孝養父母。奉事師長。慈心不殺。修十善業。二者受持三歸。具足衆戒。不犯威儀。三者發菩提心。深信因果。讀誦大乘。勸進行者。如此三事。名爲淨業。佛告韋提希。汝今知不。此三種業。過去未來現在。三世諸佛。淨業正因。

又云。

上品上生者。若有衆生。願生彼國者。發三種心。卽便往生。何等爲三。一者至誠心。二者深心。三者廻向發願心。具三心者。必生彼國。復有三種衆生。當得往生。何等爲三。一者慈心不殺。具諸戒行。二者讀誦大乘。方等經典。

過去未來現在の、三世の諸佛の、淨業正因なり。

と。又云はく、

上品上生とは、若し衆生有つて、彼の國に生れんと願はん者は、三種の心を發して、卽便ち往生す。何等をか三と爲る。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。三心を具する者は、必ず彼の國に生る。復た三種の衆生有つて、當に往生することを得べし。何等をか三と爲る。一には、慈心にして殺さず、諸の戒行を具ふ。二には、大乘方等經典を讀誦す。三には、六念を修行し、廻向發願して、彼の國に生れんと願ふ。此の功德を具すること、一日乃至七日せば、卽ち往生することを得。上品中生とは、必ずしも方等經典を、受持〔し讀誦〕せざれども、善く義趣を解り、第一義に於て、心驚動せず、深く因果を信じ、大乘を謗らず。此の功德を以て廻向して、極樂國に生れんと願求ふ。上品下生とは、亦因果を信じ、大乘を謗らず、但無上道心を發す。此の功德を以て廻向して、極樂〔國〕に生れんと願求ふ。中品上生とは、若し

切智心。日々常念。無有廢忘。七者於諸衆生。起尊重心。除我慢心。謙下言説。八者於世談話。不生味著。九者近於覺意。深起種種。善根因縁。遠離憒鬧。散亂之心。十者正念觀佛。除去諸想。

『寶積經』第九十二。佛亦以此十心。答彌勒問。其中第六心云。

求佛種智。於一切時。無忘失心。

其餘九種。文雖少異。意同前『經』。但結『文』云。

若人於此。十種心中。隨成一心。樂欲往生。彼佛世界。若不得生。無有是處。

云云。明非必具十。爲往生業也。[4]『觀經』云。

と。『寶積經』の第九十二に、佛亦此の十心を以て、彌勒の問に答へたまへり。其の中の第六心に云はく、

佛の種智を求めて、一切の時に於て、忘失すること無きの心。

と。其の餘の九種は、文少しく異なると雖も、意は前の『經』に同じ。但、結びの『文』に云はく、

若し人、此の十種の心の中に於て、隨つて一の心を成じ、彼の佛の世界に、往生せんと樂欲うて、若し生るゝことを得ずんば、是の處有ること無けん。

と。云云。明けし、必ずしも十を具して、往生の業と爲るには非ざるなり。[4]『觀經』に云はく、

彼の國に生れんと欲する者は、當に三福を修すべし。一には、父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には、三歸を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さず。三には、菩提心を發し、因果を深信し、大乘を讀誦し、行者を勸進す。此くの如きの三事を、名づけて淨業と爲す。佛、韋提希に告げたまはく。汝、今知るや不や。此の三種の業は、

國。十者正念。若於無上道。不起誹謗心。精進持淨戒。復敎無智者。流布是經法。敎化無量衆生。如是諸人等。皆悉得往生。阿彌陀佛國。

[3]『彌勒問經』云。

如佛所說。願阿彌陀佛。功德利益。若能十念相續。不斷念佛者。卽得往生。當云何念。佛言。凡有十念。何等爲十。一者於諸衆生。常生慈心。不毀其行。若毀其行。終不往生。二者於諸衆生。常起悲心。除殘害意。三者發護法心。不惜身命。於一切法。不生誹謗。四者於忍辱中。生決定心。五者深心淸淨。不染利養。六者發一

と。[3]『彌勒問經』に云はく、

佛の說きたまふ所の如く、阿彌陀佛の、功德利益を願〔念〕つて、若し能く十念相續し、不斷に〔彼の〕佛を念ずる者は、卽ち往生することを得とは、當に云何んが念ずべきや。佛、言はく。凡そ十念有り。何等をか十と爲す。一には、諸〔一切〕の衆生に於て、常に慈心を生して、其の行を毀らず。若し其の行を毀らば、終に往生せじ。二には、諸〔一切〕の衆生に於て、常〔深〕に悲心を起して、殘害の意を除く。三には、護法の心を發して、身命を惜まず、一切の法に於て、誹謗を生さず。四には、忍辱の中に於て、決定の心を生す。五には、深心淸淨にして、利養に染まず。六には、一切智の心を發し、日々に常に念じて、廢忘有ること無し。七には、諸〔一切〕の衆生に於て、尊重の心を起し、我慢の心〔意〕を除き、謙下して言說ふ。八には、世の談話に於て、味〔昧〕著〔の心〕を生さず。九には、覺意に近づき、深く種々の、善根の因緣を起し、憒鬧散亂の心を遠離す。十には、正念して佛を觀じ、諸の想〔疑〕を除去す。

生阿彌陀佛國。三者正念。不害一生命。慈悲於一切。往生阿彌陀佛國。四者正念。從師所受戒。淨慧修梵行。心常懷喜。往生阿彌陀佛國。五者正念。孝順於父母。敬重於師長。不懷憍慢心。往生阿彌陀佛國。六者正念。往詣於僧坊。恭敬於塔寺。聞法解一義。往生阿彌陀佛國。七者正念。一日一宿中。受持八戒齋。一日一宿中。受持不破一。往生阿彌陀佛國。八者正念。若能齋月齋日中。遠離於房舍。常詣於善師。往生阿彌陀佛國。九者正念。常能持淨戒。勤修樂禪定。護法不惡口。若能如是行。往生阿彌陀佛

三には、正念に、一りの生命をも害さず、一切を慈悲しみ、阿彌陀佛の國に往生す。四には、正念に、師の所に從つて戒を受け、淨慧をもつて梵行を修し、心に常に〔歡〕喜を懷き、阿彌陀佛の國に往生す。五には、正念に、父母に孝順し、師長を敬重〔奉〕し、憍慢の心を懷〔起〕かず、阿彌陀佛の國に往生す。六には、正念に、僧坊〔房〕に往詣し、塔寺を恭敬し、法を聞いて一義を解り、阿彌陀佛の國に往生す。七には、正念に、一日一宿〔夜〕の中、八戒齋を受持し、一をも破らず、阿彌陀佛の國に往生す。八には、正念に、若し能く齋月齋日の中、房舍を遠く離れ、常に善き師に詣で、阿彌陀佛の國に往生す。九には、正念に、常に能く淨戒を持ち、禪定を勤修し、法を護つて惡口せず。若し能く是くの如く行ぜば、阿彌陀佛の國に往生す。十には、正念に、若し無上道に於て、誹謗の心を起さず、精進して淨戒を持ち、復た無智の者を教へ、是の經法を流布し、無量の衆生を教化せん。是くの如き諸の人等は、皆悉く阿彌陀佛の國に、往生することを得。

當齋戒一心清淨。晝夜當念。欲生阿彌陀佛國。十日十夜不斷絕。我皆慈愍之。悉令往生阿彌陀佛國。殊使不能爾。自思惟熟授計。欲度脫身者。不當絕念。去愛勿念家事。莫與婦女同床。自端正身心。斷於愛欲。一心齋戒清淨。至專念生阿彌陀佛國。一日一夜不斷絕者。壽終皆往生其國。在七寶浴池。蓮華中化生。

此『經』。以持戒爲首。2『十往生阿彌陀佛國經』云。

吾今爲汝說。有十往生。云何十往生。一者觀身正念。常懷歡喜。以飲食衣服。施佛及僧。往生阿彌陀佛國。二者正念。世妙良藥。施一病比丘。及以一切衆生。往

の國に、生れんと欲ふべし。十日十夜斷絕えざれば、我皆これを慈愍〔哀〕して、悉く阿彌陀佛の國に、往生せしめん。殊使に爾すること能はずば、自ら思惟して熟〻按計れ。身を度脫せんと欲はゞ、當に念を絕つべからず。愛〔憂〕を去つて、家事を念ふこと勿れ。婦女〔人〕と與に同床すること莫れ。自ら身心を端正にして、愛欲を斷ち、一心に齋戒清淨にして、至專〔意〕ら阿彌陀佛の國に生れんと念じ、一日一夜斷絕えざれば、壽終つて皆其の國に往生し、七寶の浴池の、蓮華の中に在つて化生せん。

此の『經』は、持戒を以て首と爲せり。2『十往生阿彌陀佛國經』に云はく、

吾、今汝が爲に說かん。十往生〔の法〕有つて〔解脫を得可し〕。云何か十の往生なる。一には、身を觀じて正念に、常に歡喜を懷き、飲食衣服を以て、佛及び僧に施し、阿彌陀佛の國に往生す。二には、正念に、世の妙なる良藥をもつて、一りの病める比丘、及び一切の衆生に施し、阿彌陀佛の國に往生す。

大文第九。明往生諸行者。謂求極樂者。不必專念佛。須明餘行。任各樂欲。此亦有二。初別明諸『經』文。次總結諸業。

第一明諸經者。『四十華嚴經』普賢願。『三千佛名經』『無字寶篋經』『法華經』等。諸大乘經。『隨求』『尊勝』『無垢淨光』『如意輪』『阿嚕力迦』『不空羂索』『光明』『阿彌陀』及龍樹『所感往生淨土』等呪。此等顯密。諸大乘中。皆以受持讀誦等。爲往生極樂業也。」1『大阿彌陀經』云。

大文第九に往生の諸行

を明さば、謂はく極樂を求むる者は、必ずしも念佛を專らにせず、須らく餘行を明して、各々の樂欲に任すべし。此れに、亦二有り。初に別して諸『經』の文を明し、次に總じて諸業を結ぶ。

第一に諸經

を明さば、『四十華嚴經』の普賢願、『三千佛名經』、『無字寶篋經』、『法華經』等の諸大乘經、『隨求』、『尊勝』、『無垢淨光』、『如意輪』、『阿嚕力迦』、『不空羂索』、『光明』、『阿彌陀』、及び龍樹の『所感往生淨土』等の呪なり。此れ等顯密の、諸大乘の中には、皆受持、讀誦等を以て、極樂に往生するの業と爲せるなり。」1『大阿彌陀經』に云はく、

當に齋戒し、一心淸淨にして、晝夜に常に念じて、阿彌陀佛

見。執一文耶。
答。馬鳴菩薩『大乘起信論』云。
復次衆生。初學是法。其心怯弱。懼畏信心。難可成就。意欲退者。當知如來。有勝方便。攝護信心。隨以專心。念佛因緣。隨願得往生。他方佛土。如『修多羅』說。若人專念。西方阿彌陀佛。所作善業。廻向願求。生彼世界。卽得往生。
已上。明知。『契經』多以念佛。爲往生要。若不爾者。四依菩薩卽非理盡。

問ふ。諸『經』の所說は、機に隨つて萬品なり。何ぞ管見を以て、一文を執する耶。
答ふ。馬鳴菩薩の『大乘起信論』に云はく、
復た次に衆生の、初めて是の法を學ばんとするに、其の心怯弱けて、信心の成就す可きこと難きを懼畏れ、意の退せんと欲する者は、當に知るべし、如來に勝方便有つて、信心を攝護したまふ。謂はく、心〔意〕を專らにして念佛する因緣を以て、願に隨つて他方の佛土に往生することを得るなり。『修多羅』に「若し人、專ら西方の阿彌陀佛を念じて、作〔修〕る所の善業〔根〕をもつて廻向して、彼の世界に生れんと願ひ求むれば、卽ち往生することを得」と說くが如し。
と。已上。明かに知んぬ、『契經』には多く念佛を以て、往生の要と爲ることを。若し爾らずば、四依の菩薩は、卽ち理盡には非ざらん。

卽與大衆。往此人所。令其得見。
見已尋生。
十『往生論』。
以觀念彼佛。依正功德。爲往生
業。
已上。此中。『觀經』下々品。『阿彌陀經』。
『鼓音聲經』。但以念名號。爲往生業。
何況觀念。相好功德耶。

問。餘行寧無勸信文耶。
答。其餘行法。因明彼法種々功能。
其中自說。往生之事。不如直辯。往
生之要。多云念佛。2何況佛自。既
言當念我乎。3亦不云佛光明攝取
餘行人」。此等文分明。何重生疑耶。
問。諸『經』所說。隨機萬品。何以管

若し四衆有つて、能く正しく彼の佛の名號を受持せば、此の
功德を以て、終らんと欲する時に臨んで、阿彌陀佛は、卽ち
大衆と與に、此の人の所に往き、其をして見ることを得しめ
たまひ、見已つて尋いで生る。
と。十には、『往生論』に、
彼の佛の依正の功德を、觀念するを以て、往生の業と爲す。
と。已上。此の中、『觀經』の下々品と、『阿彌陀經』と、『鼓音聲經』
とは、但名號を念ずるを以て、往生の業と爲せり。何に況や、
相好、功德を觀念せんを耶。

問ふ。餘の行、寧ぞ勸信の文無からん耶。
答ふ。其の餘の行法は、彼の法の種々の功能を明せるに因み、
其の中に自ら、往生の事を說けるなり。直ちに往生の要を辯じ
て、多く「佛を念ぜよ」と云へるが如きにはあらず。2何に況や、
佛自ら既に、「當に我を念ずべし」と言へるを乎。3亦、佛の光明
は餘の行人を攝取すとは、云はざるなり。」此れ等の文、分明な
り。何ぞ重ねて疑を生ぜん耶。

當至心。無分散意。稱佛陀達摩僧伽名。乃過一木槵子。如是若十若廿。若百若千。乃至百千萬。若能滿廿萬遍。身心不亂。無諸諂曲者。捨命得生。第三炎魔天。衣食自然。常受安樂。若復能滿。一百萬遍者。當得除斷。百八結業。背生死流。趣涅槃道。獲無上果。

略抄。況復諸聖教中。多以念佛。爲往生業。[2]其文甚多。略出十文。一『占察經』下卷云。

若人欲生。他方現在淨國者。應當隨彼世界佛之名字。專意誦念。一心不亂。如上觀察者。決定得生。彼佛淨國。善根增長。速成不

に自ら隨つべし。若しは行、若しは坐、若しは臥、恒に至心にして、意を分散すること無く、佛陀・達摩（磨）・僧伽の名を稱へて、乃ち一の木槵子を過るべし。是くの如くして、若しは十、若しは二十、若しは百、若しは千、乃至百千萬せよ。若し能く二十萬遍を滿たすまで、身心亂れずして、諸の諂曲無くんば、命を捨てゝのち、第三の炎魔（焰）天に生るゝことを得、衣食自然にして、常に安樂を受けん。若し復た、能く一百萬遍を滿たさば、當に百八の結業を除斷つことを得べし。生死の流に背き、涅槃（泥洹）の道に趣いて、無上の果を獲る」と。

と。略抄す。況や復た、諸の聖教の中には、多く念佛を以て、往生の業と爲せるなり。[2]其の文、甚だ多し。略して、十文を出さん。一には、『占察經』の下卷に云はく、

若し人、他方の現在の淨國に、生れんと欲はゞ、當に彼の世界の、佛の名字に隨ひ、意を專らにして誦念す應し。一心不亂にして、上の如く觀察せば、決定して彼の佛の、淨國に生

大文第八。念佛證據者。

問。一切善業。各有利益。各得往生。何故唯勸。念佛一門。

答。今勸念佛。非是遮餘。種々妙行。只是男女貴賤。不簡行住坐臥。不論時處諸緣。修之不難。乃至臨終。願求往生。得其便宜。不如念佛。故『木槵經』云。

難陀國波瑠璃王。遣使白佛言。唯願世尊。特垂慈愍。賜我要法。使我日夜。易得修行。未來世中。遠離衆苦。佛告言。大王。若欲滅煩惱障報障者。當貫木槵子一百八。以常自隨。若行若坐若臥。恒

大文第八に念佛の證據

とは、

問ふ。一切の善業は、各ゝ利益有つて、各ゝ往生することを得べし。何が故に、唯念佛の一門を勸むるや。

答ふ。今念佛を勸むることは、是れ餘の種々の妙行を、遮するには非ず。只是れ男女貴賤、行住坐臥を簡ばず、時處諸緣を論ぜず、これを修するに難からず、乃至臨終に往生を願ひ求むるも、其の便宜を得ること、念佛に如かざればなり。故に『木槵經』に云はく、

難陀國の波瑠璃王、使を遣して佛に白して言はく「唯願はくば、世尊、特に慈〔矜〕愍を垂れて、我に要法を賜ひ、我をして日夜に、修行することを得易く、未來世の中に、衆の苦を遠離せしめたまへ」と、佛告げて言はく「大王、若し煩惱障、報障を滅せんと欲はゞ、當に木槵子一百八を貫いて、以て常

心意開解。壽終之後。皆當生阿彌陀佛國。已上。八齋戒龍子也。」餘趣信佛語生淨土。準之。地獄利益。如前國王因緣。并下麁心妙果。」諸餘利益。如下念佛功德。

り。壽終の後には、皆當に阿彌陀佛の國に生ずべし。と。已上は、八齋戒の龍子なり。」餘の趣のものも、佛語を信ぜば、淨土に生るゝこと、之に準ぜよ。地獄の利益は、前の國王の因緣、并に下の麁心妙果の如し。」諸の餘の利益は、下の念佛功德〔能〕の如し。

聞佛音聲。心生喜樂。更不食噉。餘諸衆生。因是命終。得生人中。於其佛所。聞法出家。近善知識。得阿羅漢。阿難。汝觀彼魚。生畜生道。得聞佛名。聞佛名已。乃至涅槃。何況有人。得聞佛名。聽聞正法。

略抄。又『菩薩處胎經』八齋品云。龍子。與金翅鳥。而說頌曰。

殺是不善行。　滅壽命中夭。
身如朝露虫。　見光則命終。
持戒奉佛語。　得生長壽天。
累劫積福德。　不墮畜生道。
今身爲龍身。　戒德淸明行。
雖墮六畜中。　必望自濟度。

是時龍子。說此頌時。龍子龍女。

いて、心に喜樂を生じ、更に餘の諸の衆生をも、食噉〔噉食〕はざりき。是れに因つて、命終りしとき、人中に生るゝことを得、其の佛の所に於て、法を聞いて出家し、善知識に近づいて、阿羅漢を得たりき。阿難、汝彼の魚を觀よ。畜生道に生れて、佛の名を聞くことを得たり。佛の名を聞き已つて、乃至涅槃せり。何に況や、人有つて佛の名を聞くことを得、正法を聽聞せんをや。

と。略抄す。又『菩薩處胎經』の八齋品に云はく、

龍子、〔復た〕金翅鳥の與に、頌を說いて曰く、

ものを殺すは是れ不善しき行ぞ　壽命を滅めて中夭す
身は朝の露虫の如し　光を見れば則ち命終ゆ
戒を持つて佛語を奉ずれば　長壽天に生るゝことを得
累劫に福德を積めば　畜生道に墮つることなし
今身〔我〕は龍の身たれど　戒德淸明く行り
六畜の中に墮ちたれど　必望はくば自ら濟度でん

と。是の時、龍子此の頌を說ける時、龍子龍女、心意開解せ

大海。其船卒爲。摩竭大魚。欲來呑噬。爾時商主。及諸商人。心驚毛竪。各皆悲泣。嗚呼奇哉。彼閻浮提。如是可樂。如是希有。世間人身。如是難得。我今當與父母離別。姉妹婦兒。親戚朋友別離。我更不見。亦不得見。佛法衆僧。極大悲哭。爾時商主。偏袒右肩。右膝著地。住於船上。一心念佛。合掌禮拜。高聲唱言。南無諸佛。得大無畏者。大慈悲者。憐愍一切衆生者。如是三稱。時諸商人。亦復同時。如是三稱。時摩竭魚。聞佛名號。禮拜音聲。生大愛敬。聞卽閉口。爾時商主。及諸商人。皆悉安穩。得免魚難。時摩竭魚。

其の船卒かに、摩竭大魚の爲に、來つて呑み噬はれんとせり。爾の時に商主と、及び諸の商人とは、心驚き毛竪つて、各々皆悲しみ泣けり。「嗚呼、痛ましき哉。彼の閻浮提は、是くの如く可樂しく、是くの如く希有し。世間の人身は、是くの如く得難きに、我今當に父母と離別れんとす。姉妹や婦兒、親戚や朋友と別離れて、我更に見ざらん。亦佛と、法と、衆僧とをも、見たてまつることを得じ」と。極めて大に悲哭しめり。爾の時に商主、右の肩を偏袒し、右の膝を地に著けて、船の上に住まり、一心に佛を念じて、合掌禮拜し、高聲に唱へて「諸の、大無畏を得たまへる、大慈悲あつて、一切の衆生を憐愍みたまふ佛に南無したてまつる」と言ひき。是くの如くに三たび稱へし時、諸の商人も、亦復た同時に、是くの如く三たび稱へたり。時に摩竭魚は、佛の名號禮拜の音聲を聞いて、大なる愛敬を生じ、〔不殺心を得〕聞いて卽ち口を閉ぢたり。爾の時、商主及び諸の商人は、皆悉く安穩に、魚の難を免るゝことを得たり。時に、摩竭魚は、「佛」の音聲を聞

五百釋子。但依父敎。一念佛。而不發菩提心。求生淨土。慇懃慚愧。又彼不至心。復唯一念。不具十念故。抄略。

第七明惡趣利益者。『大悲經』第二云。

若復有人。但心念佛。一生敬信。我說是人。當得涅槃果。盡涅槃際。阿難。且置人中。念佛功德。若有畜生。於佛世尊。能生念者。我亦說。其善根福報。當得涅槃。

問。何等是耶。答。『同經』第三。佛告阿難。

過去有大商主。將諸商人。入於

五百の釋子は、但父の敎に依つて、一たび佛を念ずれども、菩提心を發して、淨土に生れんことを求め、慇懃に慚愧することなし。又彼は至心ならず、復た唯一念にして、十念を具せざるが故なり。

と。略抄す。

第七に惡趣の利益

を明さば、『大悲經』の第二に云はく、

若し復た人有つて、但心に佛を念じ、一たびも敬信を生ぜば、我說く、是の人も〔亦〕當に涅槃の果を得、涅槃の際を盡すべし、と。阿難、且く人中の念佛の功德をば置く。若し畜生有つて、佛世尊に於て、能く念を生じなば、我亦說く、其の善根の福報は、當に涅槃を得べし、と。

と。問ふ。何等か是れなる耶。答ふ。『同經』の第三に佛、阿難に告げたまはく、

過去、大商主有りき。諸の商人を將ゐて、大海に入りしとき、

佛。聲皆慈悲。梵音朗徹。主事聞已。心甚愧感。此眞菩薩。云何錯判。卽遣追還。迸往天上。既往到已。五體投地。禮敬我妻。白言大師。幸義大恩。如見濟拔。乃至菩提。不違教勅。

已上。」又震旦國。東晉已來。至于唐朝。念阿彌陀佛。往生淨土者。道俗男女。合五十餘人。出『淨土論』。并『瑞應傳』『我朝往生者。亦有其數。具在慶氏『日本往生記』。何況朝市隱德。山林逃名之者。獨修獨去。誰得知耶。

問。下々品人。五百釋子。臨終同念。昇沈何別。

答。『群疑論』會云。

朗かに徹れり。主事聞き已つて、心甚だ愧ぢ、「此れ眞の菩薩なり、云何んぞ錯つて判きし」と。卽ち遣追り還して、天上に迸往しめたり。既に往到き已つて、五體を地に投げ、我が妻に禮敬して、大師に白して言ひき。「幸にして大恩を義けて、如濟抜はれたり。乃至菩提まで、教勅に違はじ」と。と已上。」又震旦國には、東晉より已來、唐朝に至るまでに、阿彌陀佛を念じて、淨土に往生せし者の、道俗男女、合せて五十餘人あること、『淨土論』、并に『瑞應傳』に出でたり。我が朝においで往生せる者も、亦其の數有り。具には、慶氏の『日本往生記』に在り。何に況や、朝市にありて德を隱し、山林に名を逃けし者の、獨り修して獨り去れる、誰か知ることを得ん耶。

問ふ。下々品の人と、五百の釋子とは、臨終に同じく念するに、昇沈何ぞ別なるや。

答ふ。『群疑論』に會して云はく、

酒肉。懶墮懈怠。不能精進。妻時語我。止其獵殺。戒斷酒肉。勤加精進。得脫地獄。苦惱之患。上生天宮。與一處。我於爾時。殺心不止。酒肉美味。不能割捨。精進之心。懶墮不前。天宮息意。地獄分受。我於爾時。居聚落內。近僧伽藍。數聞槌鍾。妻語我言。事々不能。聞槌鍾聲。三彈指。一稱佛。歛身自恭。莫生憍慢。如其夜半。此法莫廢。我卽用之。無復捨失。經十二年。其妻命終。生忉利天。却後三年。我亦壽盡。經至斷事。判我入罪。向地獄門。當入門時。聞鍾三聲。我卽住立。心生歡喜。愛樂不厭。如法三彈指。長聲唱

の獵殺を止め、戒めて酒肉を斷ち、勤めて精進を加へなば、地獄の苦惱の患を脫れ、天宮に上生れて、一處を與にすることを得ん」と。我爾の時に於て、殺心止まず、酒肉の美味は、割捨つること能はず、精進の心は、懶墮にして前まず、天宮は意を息めて、地獄の分を受けたり。我爾の時に於て、聚落の內に居み、僧伽藍に近かりしかば、數ゝ槌〔搥〕鐘を聞けり。妻我に語つて言へらく「事々能はずんば、槌鐘の聲を聞きしとき、三たび彈指して、一たび佛を稱へよ。身を歛〔斂〕めて自ら恭ひ、憍慢を生すこと莫れ。其れ夜半の如きも、此の法を廢すること莫れ」と。我卽ち之を用ひて、復た捨失つること無かりき。十二年を經て、其の妻命終つて、忉利天に生れたり。却の後三年にして、我も亦壽盡きたり。斷事のところに經至りしとき、我を判いて罪に入れ、地獄の門に向はしめたり。當に門に入らんとせし時、鐘の三聲を聞けり。我卽ち住立まつて、心に歡喜を生じ、愛樂して厭はず、法の如く三たび彈指し、長聲に佛を唱へたり。聲に皆慈悲あつて、梵音

度耳。汝害父奪國不耶。對曰。實爾。願見慈救。比丘曰。作大功德。恐不相及。王當稱南無佛。七日不絕。便得免罪。重告之曰。愼莫忘此法。卽便飛去。王便叉手。一心稱說南無佛。晝夜不懈。七日命終。魂神向泥黎門。稱南無佛。泥黎中人。聞佛音聲。皆一時言南無佛。泥黎卽冷。比丘爲說法。比丘母王。及泥黎中人。皆得度脫。後大精進。得須陀洹道。

已上諸文略抄。[4]『優婆塞戒經』云。善男子。我本往墮邪見家。惑網自我蓋。我於爾時。名曰廣利。妻名女。精進勇猛。度脫無量。十善化導。我於爾時。心生殺獵。貪嗜

功德を作すとも、恐らくは相ひ及ばざらん。王よ、當に南無佛と稱ふべし。七日のあひだ絕えざらしめば、便ち罪を免るることを得ん」と。重ねて之に告げて曰く「愼んで此の法を忘るゝこと莫れ」と。卽便ち飛び去りぬ。王は便ち手を叉せて、一心に「南無佛」と稱說ふること、晝夜に懈らず、七日にして命終りぬ。その魂神の、泥黎の門に向つて、「南無佛」と稱へしとき、泥黎の中の人、「佛」の音聲を聞いて、皆一時に「南無佛」と言ひ、泥黎卽ち冷めたり。比丘爲に法を說き、比丘の母、王及び泥黎の中の人は、皆度脫することを得、後に大に精進して、須陀洹道を得たりき。

と。已上の諸『文』は、略抄す。[4]『優婆塞戒經』に云はく、

善男子、我本往し、邪見の家に墮ち、惑網自ら我を蓋へり。我爾の時に於て、名を廣利と曰へり。妻は名女にして、精進勇猛し、度脫すること無量にして、十善をもつて化導せり。我爾の時に於て、心に殺獵を生し、酒肉を貪嗜り、懶墮懈怠にして、精進すること能はざりき。妻時に我に語りらく「其

我身是。由此觀像。今得成佛。若有人。能學如此觀。未來必當。成無上道。

[3]『譬喩經』第二云。

昔有比丘。欲度其母。母已命過。便以道眼。天上人中。獝狩薜茘中求索。了不見之。觀於泥黎。見母在中。便懊惋悲哀。廣求方便。欲脫其苦。時邊境有王。害父奪國。比丘知此王命餘有七日。受罪之地。與比丘母。同在一處。夜安靖時。到王寢殿處。穿壁現半身。王怖拔刀斫頭。頭卽落地。其處如故。斫之數反。化頭滿地。比丘不動。王意卽解。知其非常。叩頭謝過。比丘言。莫恐莫怖。欲相

と。[3]『譬喩經』の第二に云はく、

昔、比丘有り。其の母を度せんと欲せしも、母已に命過へたり。便ち道眼を以て、天上、人中、獝狩、薜茘の中に求索むれども、了にこれを見ず。泥黎を觀るに、母その中に在るを見たり。懊惋え悲哀しみ、廣く方便を求めて、其の苦を脫せんことを欲せり。時に、邊境に王有り、父を害して國を奪へり。比丘は、此の王の命の、餘すところ七日有り、罪を受くる地は、比丘の母と、同じく一處に在りといふことを知つて、夜の安靖なる時に、王の寢處に到り、壁を穿つて、半身を現せり。王怖れて、刀を拔いて頭を斫る。頭は卽ち地に落つるに、其の處故の如し。これを斫ること數反せるに、化せる頭は地に滿つれども、比丘は動かず。王の意卽〔乃〕ち解け、其の非常なることを知つて、頭を叩いて過を謝せり。比丘の言はく「恐るゝこと莫れ、怖るゝこと莫れ。相ひ度せんと欲するのみ。汝、父を害して、國を奪ひしや不や」と。對へて曰く「實に爾り。願はくば、慈救け見れよ」と。比丘の曰く「大

女等。同時悲泣。禮大精進。尋聽出家。既得出家。持像入山。取草爲座。在畫像前。結跏趺坐。一心諦觀。此畫像。不異如來。像者非覺非知。一切諸法。亦復如是。無相離相。體性空寂。作是觀已。經於日夜。成就五通。具足四無量。得無礙辯。得普光三昧。具大光明。以淨天眼。見於東方。阿僧祇佛。以淨天耳。聞佛所說。悉能聽受。滿足七月。以智爲食。一切諸天。散華供養。從山而出。來至村落。爲人說法。二萬衆生。發菩提心。無量阿僧祇人。住於聲聞。緣覺功德。父母親眷。皆住不退。無上菩提。佛告迦葉。昔大精進。今

草を取つて座〔坐〕と爲し、畫像の前に在つて、結跏趺坐して、一心に諦かに觀ぜり「此の畫像は、如來に異ならず。」「〔如來の〕像は、覺に非ず、知に非ず。一切の諸法も、亦復た是くの如し。相無く、相を離れ、體性空寂なり」と。是の觀を作し已り、日夜を經て、五通を成就し、四無量を具足し、無礙辯を得、普光三昧を得て、大光明を具せり。淨天眼を以ては、東方の阿僧祇の佛を見、淨天耳を以ては、佛の說きたまふ所を聞いて、悉く能く聽受せり。七月〔日〕を滿足すあひだ、智を以て食と爲し、〔世の供を食はざりしかば〕一切の諸天は、華を散して供養せり。山より出でて、村落に來至り、人の爲に法を說きしとき、〔一會の說法に〕二萬の衆生は、菩提心を發し、無量阿僧祇の人は、聲聞、緣覺の功德に住し、父母親眷〔屬〕は、不退の無上菩提に住しき、と。佛、迦葉に告げたまはく。昔の大精進は、今の我が身是れなり。此の像を觀たりしに由つて、今成佛することを得たり。若し人有つて、能く此の如き觀を學ばゞ、未來には必ず、當に無上道を成ぜん、と。

[2]『迦葉經』云。昔過去久遠。阿僧祇劫。有佛出世。號曰光明。入涅槃後。有一菩薩。名大精進。年始十六。婆羅門種。端正無比。有一比丘。於白氎上。畫佛形像。持與精進。精進見像。心大歡喜。作如是言。如來形像。妙好乃爾。況復佛身。願我未來。亦得成就。如是妙身。言已思念。我若在家。此身叵得。卽啓父母。求哀出家。父母答言。我今年老。唯汝一子。汝若出家。我等當死。子白父母。若不聽我者。我從今日。不飲不食。不昇床座。亦不言說。作是誓已。一日不食。乃至六日。父母知識。八萬四千。諸婇

けて光明と曰へり。涅槃に入りたまひし後、一りの菩薩有つて、大精進と名づけたり。年始めて十六、婆羅門種にして、端正比無かりき。一りの比丘有り、白氎〔疊〕の上に於て、佛の形像を畫き、持つて精進に與へたり。精進、像を見て、心大に歡喜し、是くの如き言を作さく「如來の形像の、妙好なること乃ち爾り。況や、復た佛身をや。願はくば、我も未來に、亦是くの如き妙なる身を、成就することを得ん」と。言ひ已つて、思念へらく「我、若し家に在らば、此の身は得ること叵し」と。卽ち父母に啓し、哀を求めて出家せんとせしに、父母答へて言はく「我、今年老いて、唯汝一子あるのみ。汝若し出家せば、我等當に死すべし」と。子、父母に白さく「若し我を聽したまはずば、我今日より、飲まず、食はず、床座に昇らず、亦言說はじ」と。是の誓を作し已つて、一日食はず、乃至六日になりしとき、父母、知識、八萬四千の、諸の婇女等は、同時に悲泣して、大精進を禮し、尋で出家を聽したり。既に出家することを得たれば、像を持つて山に入り、

故。心大歡喜。捨離邪見。歸依三寶。隨壽命終。由前入塔。稱南無佛。因緣功德。值九百萬億。那由他佛。逮得甚深。念佛三昧。三昧力故。諸佛現前。爲其授記。從是已來。百萬阿僧祇劫。不墮惡道。乃至今日。獲得甚深。首楞嚴三昧。爾時王子。今我財首是也。

又云。

佛言。我與賢劫諸菩薩。曾於過去。栴檀窟佛所。聞是諸佛。色身變化。觀佛三昧海。以是因緣。功德力故。超越九百萬億。阿僧祇劫。生死之罪。於此賢劫。次第成佛。乃至如是十方。無量諸佛。皆由此法。成三菩提。

て、三寶に歸依したてまつり、隨つて壽命終れり。前に塔に入つて、南無佛と稱へし、因緣の功德に由つて、〔恒に〕九百萬億、那由他の佛に值ひ〔まつることを得〕、甚深の念佛三昧を逮得たりき。三昧力の故に、諸佛前に現れて、其が爲に記を授けたまへり。是れより已來、百萬阿僧祇劫のあひだ、惡道に墮ちず、乃至今日、甚深の首楞嚴三昧を、獲得たり。爾の時の王子は、今の我財首是れなり、と。

と。又云はく、

佛、言はく。我、賢劫の諸の菩薩と與に、曾て過去の、栴檀窟佛の所に於て、是の諸佛身色變化の、觀佛三昧海を聞けり。是の因緣の、功德力を以ての故に、九百萬億、阿僧祇劫の、生死の罪を超越して、此の賢劫に於て、次第に成佛す。乃至是くの如く、十方の無量の諸佛も、皆此の法に由つて、三菩提を成じたまへり。

と。『迦葉經』に云はく、

昔、過去久遠、阿僧祇劫に、佛の世に出でたまへる有り、號

廣爲未來。諸衆生說。三說此已。各放光明。還歸本國。

又云。

財首菩薩。白佛言。世尊。我念過去無量世時。有佛世尊。亦名釋迦牟尼。彼佛滅後。有一王子。名曰金幢。憍慢邪見。不信正法。知識比丘。名定自在。告王子言。世有佛像。衆寶嚴飾。可暫入塔。觀佛形像。時彼王子。隨善友敎。入塔觀像。見像相好。白言比丘。佛像端嚴。猶尙如此。況佛眞身。比丘告言。汝今見像。不能禮然者。當稱南無佛。是時王子。合掌恭敬。稱南無佛。還宮繫念。念塔中像。卽於後夜。夢見佛像。見佛像

と。又云はく、

財首菩薩、佛に白して言はく。世尊、我過去無量の世の時を念ふに、佛世尊有つて、亦釋迦牟尼と名づけまつりき。彼の佛滅したまうて後に、一りの王子有り、名づけて金幢と曰へり。憍慢邪見にして、正法を信ぜざりき。知識の比丘、定自在と名づけたるあつて、王子に告げて言はく「世に佛像有り、衆寶をもつて嚴飾れり。暫く塔に入つて、佛の形像を觀たてまつる可し」と。時に彼の王子、善友の教〔語〕に隨つて、塔に入つて像を觀たてまつり、像の相好を見て、比丘に白して言はく「佛の像の端嚴なること、猶尙此くの如し。況や佛の眞身をや」と。〔是の語を作し已りしとき、〕比丘告げて言はく「汝、今像を見たてまつれり。〔若し〕禮することを能はずば、當に南無佛と稱ふべし」と。是の時に王子、掌を合せ恭敬して、「南無佛」と稱へき。宮に還り念を繫〔係〕けて、塔の中の像を念ぜしに、即ち後夜に於て、夢に佛像を見たてまつれり。佛像を見たてまつりしが故に、心大に歡喜し、邪見を捨離し

汝等今可。入塔觀像。與佛在世。等無有異。我從空聲。入塔觀像。眉間白毫。卽作是念。如來在世。光明色身。與此何異。佛大人相。願除我罪。作是語已。如大山崩。五體投地。懺悔諸罪。從是已後。八十億阿僧祇劫。不墮惡道。生生常見。十方諸佛。於諸佛所。受持甚深。念佛三昧。得三昧已。諸佛現前。授我記別。東方妙喜國。阿閦佛。卽第一比丘是。南方歡喜國。寶相佛。卽第二比丘是。西方極樂國。無量壽佛。第三比丘是。北方蓮華莊嚴國。微妙聲佛。第四比丘是。時四如來。各申右手。摩阿難頂。告言。汝持佛語。

佛の在世と等しうして、異なり有ること無けん」と。我、空の聲に從つて、塔に入り、像の眉間の白毫を觀て、卽ち是の念を作せり「如來在世の、光明色身は、此れと何ぞ異ならん。佛の大人相、願はくば我が罪を除きたまへ」と。是の語を作し已つて、大山の崩るゝが如く、五體を地に投げて、諸の罪を懺悔せり。是れより已後、八十億阿僧祇劫のあひだ、惡道に墮ちずして、生々に常に、十方の諸佛を見たてまつり、諸佛の所に於て、甚深の念佛三昧を、受け持てり。三昧を得已りしとき、諸佛前に現れて、我に記別（莂）を授けたまへり。東方妙喜國の、阿閦佛は、卽ち第一の比丘是れなり。南方歡喜國の、寶相佛は、卽ち第二の比丘是れなり。西方極樂國の、無量壽佛は、第三の比丘是れなり。北方蓮華莊嚴國の、微妙聲佛は、第四の比丘是れなり、と。時に四如來は、各ゝ右の手を申べて、阿難の頂を摩で、告げて言はく「汝、佛の語を持つて、廣く未來の、諸の衆生の爲に說け」と。三たび此れを說き已つて、各ゝ光明を放つて、本國に還歸りたまへり。

行佛。上方廣衆德佛。下方明德佛。如是十佛。由過去禮塔觀像。一偈讃歎。今於十方。各得成佛。説是語已。問訊釋迦文佛。既問訊已。放大光明。各還本國。

又云。

四佛世尊。從空而下、坐釋迦文佛床讃言。善哉々々。乃能爲於。未來之時。濁惡衆生。説三世佛。白毫光相。令諸衆生。得滅罪咎。所以者何。念我昔曾。空王佛所。出家學道。時四比丘。共爲同學。習佛正法。煩惱覆心。不能堅持。佛法寶藏。多不善業。當墮惡道。空中有聲。語比丘言。空王如來。雖復涅槃。汝之所犯。謂無救者。

讃歎せしに由つて、今十方に於て、各ゝ成佛することを得たり、と。是の語を説き已つて、釋迦文佛〔の起居安隱〕を問訊ねたまへり。既に問訊ね已つて、大光明を放ち、各ゝ本國に還りたまへり。

と。又云はく、

四佛世尊は、空より下りて、釋迦文佛の床に坐り、讃めて言はく。善き哉、善き哉。〔釋迦牟尼は〕乃ち能く未來の時〔世〕の、濁惡の衆生の爲に、三世の佛の、白毫の光相を説いて、諸の衆生をして、罪咎を滅すことを得しめたまふ。所以は何んとなれば、我、昔曾、空王佛の所にて、出家して道を學べり。時に四比丘あり、共に同學と爲つて、〔三世の諸〕佛の正法を習〔學〕ひしかど、煩惱は心を覆うて、堅く佛法の寶藏を持つこと能はず、不善の業多くして、當に惡道に墮ちんとせり。空の中にして聲有り、比丘に語つて言はく「空王如來は、復た涅槃したまひ、汝の犯せし所を、救ふ者無しと謂ふと雖も、汝等、今〔當に〕塔に入つて、像〔佛〕を觀ずべし。

又云。

時十方佛來跏趺坐。東方善德佛。告大衆言。我念過去。無量世時。有佛出世。號寶威德上王。時有比丘。與九弟子。往詣佛塔。禮拜佛像。見一寶像。嚴顯可觀。禮已諦視。說偈讚歎。後時命終。悉生東方。寶威德上王佛國。大蓮華中。結跏趺坐。忽然化生。從此已後。恒得値佛。於諸佛所。淨修梵行。得念佛三昧。得三昧已。佛爲授記。於十方面。各得成佛。東方善德佛者。則我身是。東南方無憂德佛。南方栴檀德佛。西南方寶施佛。西方無量明佛。西北方華德佛。北方相德佛。東北方三乘

と。又云はく、

時に十方の佛、來つて〔結〕跏趺坐したまへり。東方の善德佛、大衆に告げて言はく。我、過去無量の世の時を念ふに、佛の世に出でたまへる有り、寶威德上王と號けたり。時に比丘有り、九弟子と與に、佛塔に往詣して、佛像を禮拜せり。一の寶像の、嚴顯にして觀ず可きを見、禮し已つて諦かに視、偈を說いて讚歎せり。後の時に命終りしに、悉〔已〕く東方の、寶威德上王佛の國に生れ、大蓮華の中に、結跏趺坐して、忽然として化生せり。此れより已後、恒に佛に値ひたてまつることを得、諸佛の所に於て、淨く梵行を修し、念佛三昧を得たり。三昧を得已りしとき、佛爲に授記したまひ、十方面に於て、各〻成佛することを得たり。東方の善德佛とは、則ち我が身是れなり。東南方の無憂德佛、南方の栴檀德佛、西南方の寶施佛、西方の無量明佛、西北方の華德佛、北方の相德佛、東北方の三乘行佛、上方の廣衆德佛、下方の明德佛、是くの如きの十佛は、過去に塔を禮し、像を觀、一偈をもつて

壽修短。各欲命終。羅漢教稱。南無諸佛。既稱佛已。得生忉利天。乃至於未來世。當得作佛。號南無光照。

第七卷。文殊自說。値遇禮拜。過去寶威德佛。

爾時釋迦文佛讃言。善哉々々。文殊師利。乃於昔時。一禮佛故。得値爾許。無數諸佛。何況未來。我諸弟子。勤觀佛者。佛勅阿難。汝持文殊師利語。遍告大衆。及未來世衆生。若能禮拜者。若能念佛者。若能觀佛者。當知此人。與文殊師利。等無有異。捨身他世。文殊師利等。諸大菩薩。爲其和上。

羅漢の說を聞いて、心に瞋恨を生けり。壽の修短に隨つて、各々命終らんと欲しとき、羅漢教へて「南無諸佛」と稱へしむ。既に佛を稱へ已つて、忉利天に生るゝことを得たり。乃至未來世に於て、當に佛と作ることを得て、南無光照と號けん。と。第七卷には、文殊自ら、過去の寶威德佛に値遇うて、禮拜せしことを說く。

爾の時、釋迦文佛〔世尊〕、〔文殊師利を〕讃めて言はく。善き哉、善き哉。文殊師利は、乃ち昔の時に於て、一たび佛を禮せしが故に、爾許の無數の諸佛に、値ひたてまつることを得たり。何に況や、未來において、我が諸の弟子の、勤めて佛を觀ぜん者をや、と。佛、阿難に勅したまはく。汝、文殊師利の語を持つて、遍く大衆と、及び未來世の衆生とに告げよ。若し能く禮拜せん者、若し能く念佛せん者、若し能く佛を觀ぜん者は、當に知るべし、此の人は、文殊師利と等しうして、異なること有ること無けん。身を他世に捨てなば、文殊師利等の、諸の大菩薩は、其の和上〔尙〕と爲らん。

可稱法。汝可稱僧。未及三稱。其子命終。以稱佛故。生四天王所。天上壽盡。前邪見業。墮大地獄。獄卒羅刹。以熱鐵杈。刺壞其眼。受是苦時。憶父長者。所教誨事。以念佛故。還生人中。尸棄佛出。但聞佛名。不覩佛形。乃至迦葉佛時。亦聞其名。以聞六佛名因緣故。與我同生。是諸比丘。前世之時。以惡心故。謗佛正法。但爲父故。稱南無佛。生々常得。聞諸佛名。乃至今世。値遇我出。諸障除故。成阿羅漢。

又云。

燃燈佛末法之中。有一羅漢。其千弟子。聞羅漢說。心生瞋恨。隨

ふ可し。汝、僧を稱ふ可し」と。未だ三たび稱ふるに及ばずして、其の子命終れり。佛を稱へしを以ての故に、四天王の所に生れたり。天上の壽盡きしとき、前の邪見の業により、大地獄に墮ちたり。獄卒羅刹は、熱鐵の杈〔叉〕を以て、其の眼を刺し壞れり。是の苦を受けし時、父長者の、教誨せし所の事を憶ひ、念佛せるを以ての故に、〔地獄より出でて〕還た人中に生れたり。尸棄佛の出でたまひしとき、但佛の名を聞いて、佛の形を覩ず、乃至迦葉佛の〔出でたまひし〕時も、亦其の名のみを聞けり。六佛の名を聞きし、因緣を以ての故に、我と與に同じく生れたり。是の諸の比丘は、前世の時、惡心を以ての故に、佛の正法を謗りしかども、但父の爲の故に、「南無佛」と稱へしをもつて、生れ生れて常に、諸佛の名を聞くことを得、乃至今の世に、我が出〔世〕に値遇〔遭値〕うて、諸の障除こりしが故に、阿羅漢と成れり。

と。又云はく、

燃燈佛の、末法の中に、一りの羅漢有りき。其の千の弟子、

不即得至。不退轉者。不取正覺。

『觀經』云。

若念佛者。當知此人。是人中分陀利華。觀世音菩薩。大勢至菩薩。爲其勝友。當坐道場。生諸佛家。

已上。將來勝利。餘如上別時念佛門。

第六引例勸信者。『觀佛經』第三。

佛告諸釋子言。

毘婆尸佛像法中。有一長者。名日月德。有五百子。同遇重病。父到子前。涕涙合掌。語諸子言。汝等邪見。不信正法。今無常刀。截切汝身。爲何所怙。有佛世尊。名毘婆尸。汝可稱佛。諸子聞已。敬其父故。稱南無佛。父復告言。汝

若し念佛する者は、當に知るべし、此の人は是れ人中の分陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩は、其の勝友と爲りたまふ。當に道場に坐して、諸佛の家に生るべし。

と。已上は、將來の勝利なり。餘は、上の別時念佛門の如し。

第六に引例勸信

とは、『觀佛經』の第三に、佛、諸の釋子に告げて言はく、

毘婆尸佛の、像法の中に、一りの長者有り、名づけて月徳と曰へり。五百の子有つて、同じく重病に遇へり。父、子の前に到つて、涕涙し合掌せて、諸子に語つて言はく「汝等邪見にして、正法を信ぜざりき。今無常の刀、汝が身を截り切るも、何の怙む所と爲ん。佛世尊有す、毘婆尸と名づけたてまつる。汝、佛〔之〕を稱ふ可し」と。諸子聞き已り、其の父を敬ひしが故に「南無佛」と稱ふ。父復た告げて言はく「汝、法を稱

聞彌陀佛。十力威德。光明神力。戒定慧解脱知見。除八十億劫。生死之罪。地獄猛火。化爲淸涼風。吹諸天華。華上皆有。化佛菩薩。迎接此人。卽得往生。

同品下生人。

臨命終時。苦逼不能念佛。隨善友敎。但至心令聲不絕。具足十念。稱南無無量壽佛。稱佛名故。於念々中。除八十億劫。生死之罪。如一念頃。卽得往生。

『雙觀經』彼佛本願云。

諸佛世界。衆生之類。聞我名字。不得菩薩。無生法忍。諸深總持者。不取正覺。

他方國土。諸菩薩衆。聞我名字。

んに、彌陀佛の、十力威德、光明神力、戒、定、慧、解脱、知見を聞いて、八十億劫の、生死の罪を除き、地獄の猛火は、化して淸涼の風と爲り、諸の天華を吹く。華の上には、皆化佛菩薩有つて、此の人を迎接へて、卽ち往生することを得。

と。同品下生の人は、

命終らんとする時に臨み、苦に逼められて、佛を念ずること能〔遑〕はず。善友の敎に隨つて、但至心に聲をして絕えざらしめ、十念を具足して、「南無無量壽〔阿彌陀〕佛」と稱ふ。佛の名を稱ふるが故に、念々の中に於て、八十億劫の、生死の罪を除き、一念の頃の如くに、卽ち往生することを得。

と。『雙觀經』の、彼の佛の本願に云はく、

諸佛世界の、衆生の類、我が名字を聞いて、菩薩の無生法忍、諸の深總持を得ずば、正覺を取らじ。

他方國土の、諸の菩薩衆、我が名字を聞いて、卽ち不退轉に至ることを得ずば、正覺を取らじ。

と。『觀經』に云はく、

是人卽時。甚生慶悅。以是因緣。
如其所願。卽得往生。
『平等覺經』云。
佛言。要當齋戒。一心清淨。晝夜
常念。欲生無量清淨佛國。十日
十夜不斷絕。我皆慈愍之。悉令
生無量清淨佛國。
乃至一日一夜。亦如是。或可以此『文』置下諸行門中。『雙觀經』偈云。
其佛本願力。聞名欲往生。
皆悉到彼國。自致不退轉。
『觀經』下品上生人。
臨命終時。合掌叉手。稱南無阿
彌陀佛。稱佛名故。除五十億劫。
生死之罪。從化佛後。生寶池中。
同品中生人。
臨命終時。地獄猛火。一時俱至。

とを得るなり。
と。『平等覺經』に云はく、
佛の言はく、要ず當に齋戒して、一心清淨にし、晝夜常に念じて、無量清淨佛の、國に〔往〕生せんと欲し、十日十夜、斷絕えざるべし。我、皆これを慈愍〔哀〕して、悉く無量清淨佛の國に生れしむ。
と。乃至、一日一夜も、亦是くの如し。或は、此の『文』を以て、下の諸行門の中に置く可し。
『雙觀經』の偈に云はく、
其の佛の本願力の　名を聞いて往生せんと欲へば
皆悉く彼の國に到り　自ら不退轉に致らん
と。『觀經』の下品上生の人は、
命終らんとする時に臨み、合掌叉手せて、「南無阿彌陀佛」と稱へしむ。佛の名を稱ふるが故に、五十億劫の、生死の罪を除き、化佛の後に從〔隨〕つて、寶池の中に生る。
と。同品中生の人は、
命終らんとする時に臨み、地獄の猛〔衆〕火、一時に倶に至ら

『觀經』云。
見眉間白毫者。八萬四千相好。自然當見。見無量壽佛者。卽見十方。無量諸佛。得見無量諸佛故。諸佛現前授記。是爲遍觀一切色相。
已上。見佛。」『鼓音聲王經』云。
十日十夜。六時專念。五體投地。禮敬彼佛。堅固正念。悉除散亂。若能念心。念々不絕。十日之中。必得見彼。阿彌陀佛。幷見十方世界如來。及所住處。唯除重障。鈍根之人。於今少時。所不能觀。一切諸善。皆悉廻向。願得往生。安樂世界。垂終之日。阿彌陀佛。與諸大衆。現其人前。安喩稱善。

眉間の白毫を見たてまつれば、八萬四千の相好は、自然に當に見〔現〕るべし。無量壽佛を見たてまつる者は、卽ち十方の、無量の諸佛を見たてまつる。無量の諸佛を、見たてまつることを得るが故に、諸佛は現前に授記したまふ。是れを、遍く一切の色相を觀ずと爲す。
已上は、〔現身〕見佛なり。」『鼓音聲王經』に云はく、
十日十夜、六時に念を專らにし、五體を地に投じて、彼の佛を禮敬し、堅固正念にして、悉く散亂を除き、若し能く心をして、念々に絕えざらしめば、十日の中に、必ず彼の阿彌陀佛を見たてまつることを得、幷に十方世界の如來、及び所住の處を見ん。唯、重障と鈍根の人をば除く。今の少時に於て、觀ること能はざるところなり。一切の諸善を、皆悉く廻向して、安樂世界に、往生することを得んと願はゞ、終に垂んとするの日、阿彌陀佛は、諸の大衆と與に、其の人の前に現れて、安喩〔慰〕し稱善したまふ。是の人、卽時、甚だ慶悅を生ず。是の因緣を以て、其の所願の如く、卽〔尋〕ち往生するこ

彼佛本願云。
諸天人民。聞我名字。五體投地。
稽首作禮。歡喜信樂。修菩薩行。
諸天世人。莫不致敬。若不爾者。
不取正覺。
已上。冥得護持。」『大集經』賢護分云。
善男子善女人。端坐繫念。專心
想彼。阿彌陀如來。應供等正覺。
如是相好。如是威儀。如是大衆。
如是說法。如聞繫念。一心相續。
次第不亂。或經一日。或復一夜。
如是或至七日七夜。如我所聞。
具足念故。是人必覩。阿彌陀如
來。應供等正覺。若於晝時。不能
見者。若於夜分。或夢中。阿彌陀
佛。必當現也。

なり。『雙觀經』の、彼の佛の本願に云はく、
諸の天と人民、我が名字を聞いて、五體を地に投じて、稽首
作禮し、歡喜信樂して、菩薩の行を修せんに、諸天世人、敬
ひを致さざること莫けん。若し爾らずば、正覺を取らじ。
と。已上は、冥得護持なり。」『大集經』の賢護分に云はく、
善男子、善女人にして、端坐繫念し、心を專らにして、彼の
阿彌陀如來、應供等正覺を想ひ、是くの如きの相好、是くの
如きの威儀、是くの如きの大衆、是くの如きの說法を、聞く
が如くに繫念し、一心に相續して、次第亂れず、或は一日を
經、或は復た一夜せん。是くの如くして、或は七日七夜に至
るまで、先に聞く所の如く、具足して念ずるが故に、是の人
必ず、阿彌陀如來、應供等正覺を覩たてまつるなり。若し晝
時に於て、見たてまつること能はざる者は、若しは夜分に於
て、或は〔睡〕夢の中に、阿彌陀佛、必ず當に現れたまふべき
なり。
と。『觀經』に云はく、

『十往生經』。釋尊說。阿彌陀佛功德。國土莊嚴等。已云。淸信士淸信女。讀誦是經。流布是經。恭敬是經。不謗是經。信樂是經。供養是經。如是人輩。緣是信敬。我從今日。常使前二十五菩薩。護持是人。常使是人。無病無惱。惡鬼惡神。亦不中害。亦不惱之。亦不得便。已上。乃至睡寤行住。所至之處。皆悉安穩。云々。唐土諸師云。二十五菩薩。擁護念阿彌陀佛願往生者。此亦不違。彼『經』意也。二十五者。觀世音菩薩。大勢至菩薩。藥王菩薩。藥上菩薩。普賢菩薩。法自在菩薩。師子吼菩薩。陀羅尼菩薩。虛空藏菩薩。德藏菩薩。寶藏菩薩。金光藏菩薩。金剛藏菩薩。光明王菩薩。山海慧菩薩。華嚴王菩薩。衆寶王菩薩。月光王菩薩。日照王菩薩。三昧王菩薩。定自在王菩薩。大自在王菩薩。白象王菩薩。大威德王菩薩。無邊身菩薩也。『雙觀經』

說き已つて云はく、

淸信士、淸信女、是の經を讀誦し、是の經を流布し、是の經を恭敬し、是の經を謗らず、是の經を信樂し、是の經を供養せん。是くの如きの人輩をば、是の信敬に緣つて、我今日より、常に前の二十五菩薩をして、是の人を護持せしめ、常に是の人をして、病無く惱無く、惡鬼惡神も、亦中り害せず、亦これを惱まさず、亦便を得ざらしめん。

と。已上。乃至、睡寤行住、所至の處、皆悉く安穩ならしめん、と。云々。唐土の諸師の云はく、

二十五の菩薩は、阿彌陀佛を念じて、往生を願ふ者を、擁護したまふ。

と。此れも、亦彼の『經』の意に違はざるなり。二十五〔の菩薩〕とは、觀世音菩薩と、大勢至菩薩と、藥王菩薩と、藥上菩薩と、普賢菩薩と、法自在菩薩と、師子吼菩薩と、陀羅尼菩薩と、虛空藏菩薩と、德藏菩薩と、寶藏菩薩と、金〔光〕藏菩薩と、金剛藏菩薩と、光明王菩薩と、山海慧菩薩と、華嚴王菩薩と、衆寶王菩薩と、月光王菩薩と、日照王菩薩と、三昧王菩薩と、定自在王菩薩と、大自在王菩薩と、白象王菩薩と、大威德王菩薩と、無邊身菩薩と

指頂坐禪。以平等心。憐愍一切衆生。念阿彌陀佛功德。已上。滅罪生善。」『稱讚淨土經』云。

或善男子。或善女人。於無量壽。極樂世界。淸淨佛土。功德莊嚴。若已發願。若當發願。若今發願。必爲如是。住十方面。十殑伽沙。諸佛世尊。之所攝受。如說行者。一切定於。阿耨菩提。得不退轉。一切定生。無量壽佛。極樂世界。

『觀經』云。

光明遍照。十方世界。念佛衆生。攝取不捨。

又云。

無量壽佛。化身無數。與觀世音。大勢至。常來至此。行人之所。

生を憐愍して、阿彌陀佛を念ぜん功德には、如かず。

と。已上は、滅罪生善なり。」『稱讚淨土經』に云はく、

或〔若〕し善男子、或は善女人にして、無量壽の、極樂世界、淸淨佛土の、功德莊嚴に於て、若しは已に願を發し、若しは當に願を發し、若しは今願を發さんに、必ず是くの如く、十方面に住したまふ、十殑伽沙の、諸佛世尊の、攝受したまふところと爲る。說けるが如く行ぜん者は、一切定んで、阿耨〔多羅三藐三〕菩提に於て、退轉せざることを得、一切定んで、無量壽佛の、極樂世界に生ぜん。

と。『觀經』に云はく、

光明遍く、十方の世界を照し、念佛の衆生を、攝取して捨てたまはず。

と。又云はく、

無量壽佛の、化身無數にして、觀世音、大勢至と與に、常に此の行人の、所に來至したまふ。

と。『十往生經』に、釋尊、阿彌陀佛の功德、國土の莊嚴等を、

第五念彌陀別益者。爲令行者。其心決定。故別明之。滅罪生善。冥得護念。現身見佛。將來勝利。如次。

『觀經』說像想觀云。

作是觀者。除無量億劫。生死之罪。於現身中。得念佛三昧。

又云。

但聞佛名。二菩薩名。除無量劫。生死之罪。何況憶念。

又云。

但想佛像。得無量福。況復觀佛。具足身相。

『阿彌陀思惟經』云。

若轉輪王。千萬歲中。滿四天下七寶。布施十方諸佛。不如苾芻苾芻尼。優婆塞優婆夷等。一彈

第五に彌陀の別益

とは、行者をして其の心、決定せしめんが爲の故に、別してこれを明すなり。滅罪生善と、冥得護念〔持〕と、現身見佛と、將來の勝利とは次の如し。

『觀經』に像想觀を說いて云はく、

是の觀を作す者は、無量億劫の、生死の罪を除き、現身の中に於て、念佛三昧を得。

と。又云はく、

但佛の名と、二菩薩の名を聞くすら、無量劫の、生死の罪を除く。何に況や、憶念せんをや。

と。又云はく、

但佛像を想ふすら、無量の福を得。況や復た、佛の具足身相を觀ぜんをや。

と。『阿彌陀思惟經』に云はく、

若し轉輪王の、千〔十〕萬歲の中、四天下に滿てらん七寶をもつて、十方の諸佛に布施せんも、苾芻、苾芻尼、優婆塞、優婆夷等の、一彈指の頃も坐禪し、平等の心を以て、一切の衆

文明元年。京師人。姓王。失其名。既無戒行。曾不修善。因患致死。被二人引。至地獄門前。見有一僧。云是地藏菩薩。乃教王氏。誦此一偈。謂之曰。誦得此偈。能排地獄。王氏遂入。見閻羅王。王問此人。有功德。答云。唯受持一四句偈。具如上說。王遂放免。當誦此偈時。聲所及處。受苦之人。皆得解脫。王氏三日始蘇。憶持此偈。向諸沙門說之。示驗偈文。方知是『華嚴經』第十二卷。夜摩天宮無量諸菩薩雲集說法品。王氏自向空觀寺僧定法師。說云然也。
略抄。

文明元年、京師の人、姓は王、其の名を失せり。既に戒行無く、曾て善を修せず。患に因つて死に致る。二人に引かれて、地獄の門前に至る。一りの僧有るを見る、是れ地藏菩薩なりと云ふ。乃ち王氏に教へて、此の一偈を誦へしめ、之に謂つて曰く「此の偈を誦へ得ば、能く地獄を排ひえん」と。王氏遂に入つて、閻羅王に見ゆ。王、此の人に問ふ「(何の)功德か有る」と。答へて云はく「唯、一の四句偈を受持す」と。具に上の如くに說く。王遂に放免す。此の偈を誦ふる時に當り、聲の及べる處に、苦を受けし人は、皆解脫を得たり。王氏三日にして始めて蘇り、此の偈を憶持して、諸の沙門に向つて、之を說く。偈文を示〔參〕驗するに、方に是れ『華嚴經』第十二卷、夜摩天宮無量諸菩薩雲集說法品にあることを知れり。王氏自ら、空觀寺の僧定法師に向つて、說いて然なりと云ふ。
と。略抄す。

來。卽是我心。何以故。隨心見故。心卽我身。卽是虛空。我因覺觀。見無量佛。我以覺心。見佛知佛。心不見心。心不知心。我觀法界。性無牢固。一切諸佛。皆從覺觀。因緣而生。是故法性。卽是虛空。虛空之性。亦復是空。

已上。此文意同『觀經』。光師釋。亦無違。

問。知心作佛。有何勝利。

答。若觀此理。能了三世。一切佛法。乃至一聞。卽得解脫。三途苦難。如『華嚴經』。如來林菩薩偈云。

若人欲求知。三世一切佛。
應當如是觀。心造諸如來。

『華嚴傳』曰。

卽ち是れ我が心なり。何を以ての故とならば、心に隨つて見たてまつるが故なり。心は卽ち我が身にして、〔身〕は卽ち是れ虛空なり。我、覺觀に因つて、無量の佛を見たてまつる。我、覺心を以て、佛を見、佛を知るなり。心は心を見ず、心は心を知らず。我、法界を觀るに、性に牢固〔實〕無し。一切の諸佛は、皆覺觀の因緣より生ず。是の故に、法性は卽ち是れ虛空にして、虛空の性も、亦復た是れ空なり。

と。已上。此の文意は、『觀經』に同じ。光師の釋も、亦違ふこと無し。

問ふ。心の佛と作ることを知らば、何の勝れたる利有りや。

答ふ。若し此の理を觀ぜば、能く三世の、一切の佛法を了るなり。乃至一たびも聞かば、卽ち三途の苦難を解脫るゝことを得るなり。『華嚴經』の如來林菩薩の偈に云ふが如し。

若し人三世一切の　佛を知らんと欲求めなば
是くの如く觀ずべし　心諸の如來を造ると

と。『華嚴傳』に曰く、

已上。此義云何。
答。『往生論』智光『疏』釋此文云。
當衆生心想佛時。佛身相皆顯現
衆生心中。譬如水淸卽色像現。
而水與像不一不異。故言佛相好
身。卽是心想。是心作佛者。心能
作佛。是心是佛者。心外無佛。譬
如火從木出。不得離木。以不離
木。故卽能燒。木爲火燒。木卽是
火。
已上。」亦有餘釋。學者更勘。」私云。『大
集經』日藏分云。
行者作是念。是等諸佛。無所從
來。去無所至。唯我心作。於三界
中。是身因緣。唯是心作。我隨覺
觀。欲多見多。欲少見少。諸佛如

と云ふ。已上。此の義如何。
答ふ。『往生論』の智光の『疏』に、此の文を釋して云はく、
衆生の心に佛を想ふ時に當つて、佛身の相好、衆生の心中に
顯現するなり。譬へば、水淸ければ卽（則）ち色像現じて、水
と像と一ならず異ならざるが如し。故に、佛の相好身は卽ち
是れ心想、と言へり。是の心作佛すとは、心能く佛と作るな
り。是の心是れ佛なりとは、心の外に佛無きなり。譬へば、
火は木より出でて、〔火〕木を離るゝことを得ず、木を離れざ
るを以ての故に、卽（則）ち能く〔木〕を燒き、木は火の爲に燒
かれて、木は卽ち是（爲）れ火たるが如し。
と。已上。」亦餘の釋有り、學者更に勘へよ。」私に云はく。『大集
經』の日藏分に云はく、
行者是の念を作さく、是れ等の諸佛は、從來する所無く、去
るに至る所無し。唯我が心の作なるのみ。三界の中に於て、
是の身は因緣なり、唯是れ心の作なり。我、覺觀に隨つて、
多を欲すれば多を見、少を欲すれば少を見る。諸佛如來は、

寧受地獄苦。得聞諸佛名。
不受無量樂。而不聞佛名。
已上四門。總明念諸佛之利益。其中『觀佛經』以釋迦爲首。『般舟經』多以彌陀爲首。理實倶通一切諸佛。『念佛經』通三世佛。

問。『觀佛經』云。
是人心如佛心。與佛無異。
又『觀經』云。
佛告阿難。諸佛是法界身。入一切衆生。心想之中。是故汝等。心想佛時。是心卽是。三十二相。八十隨形好。是心作佛。是心是佛。諸佛正遍知海。從心想生。

ん功德は、終に虛しからじ。」則ち知る、佛法に値ひ、佛號を聞くことは、是れ少緣に非ずといふことを。是の故に、『華嚴經』の眞實慧菩薩の偈に云はく、

寧ろ地獄の苦を受くるとも　諸佛の名を聞くことを得よ
無量の樂を受くるとも　佛の名を聞かざることなかれ

と。已上の四門は、總じて諸佛を念ずるの利益を明す。其の中、『觀佛經』は釋迦を以て首と爲し、『般舟經』は多く彌陀を以て首と爲せども、理實には倶に一切の諸佛に通ずるなり。『念佛經』は、三世の佛に通ず。

問ふ。『觀佛經』には、
是の人の心は、佛の心の如くにして、佛と異なること無し。
と云ひ、又『觀經』には、
佛、阿難に告げたまはく。諸佛〔如來〕は、是れ法界身にして、一切衆生の心想の中に入りたまふ。是の故に汝等、心に佛を想ふ時は、是の心卽ち是れ三十二相、八十隨形好なり、是の心作佛す、是の心是れ佛なり。諸佛の正遍〔徧〕知海は、心想より生ず。

乃至爲說微妙法。授彼菩提記。
『法華經』偈云。
若人散亂心。入於塔廟中。
一稱南無佛。皆已成佛道。
『大悲經』第三。
佛告阿難。若有衆生。聞佛名者。
我說是人。畢定當得。入般涅槃。
『華嚴經』法幢菩薩偈云。
若有諸衆生。未發菩提心。
一得聞佛名。決定成菩提。
已上諸文。得菩提。」但聞名號。勝利如是。況暫觀念。相好功德。或復供養。一華一香。況一生勤修。功德終不虛。」則知。値佛法聞佛號。非是少緣。是故『華嚴經』眞實慧菩薩偈云、

面のあたり諸佛を覩たてまつりて　能く甚深の義を問はゞ
〔彼等無量の佛は　即ち其の心意を知しめし〕
爲に微妙の法を說き　彼に菩提の記を授く
と。『法華經』の偈に云はく、
若し人散亂の心もて　塔廟の中に入り
一たび南無佛と稱へなば　皆已に佛道を成ず
と。『大悲經』の第三に、
佛〔世尊、復た〕阿難に告げたまはく。若し衆生有つて、佛の名を聞かん者は、我說く、是の人は畢定して、當に般涅槃に入ることを得べし、と。
と。『華嚴經』の法幢菩薩の偈に云はく、
若し諸の衆生有つて　未だ菩提心を發さざらんも
一たび佛の名を聞くことを得ば　決定して菩提を成ぜん
と。已上の諸『文』は、菩提を得ること〔を明す〕。」但名號を聞くことの、勝れたる利〔益〕是くの如し。況や暫くも相好、功德を觀念し、或は復た一華、一香を供養せんをや。況や一生のあひだ、勤修せ

空。亦如是。又置此。若善男子
善女人等。下至一稱。南謨佛陀。
大慈悲者。是善男子善女人等。
窮生死際。善根無盡。於天人中。
恒受富樂。乃至最後。得般涅槃。
略抄。『大悲經』第二同之。『寶積經』云。
若有衆生。於如來所。起微善者。
盡於苦際。畢竟不壞。
又云。
若有菩薩。以勝意樂。能於我所。
起於父想。彼人當得。入如來數。
如我無異。
『十二佛名經』偈云。
若人持佛名。世々所生處。
身通遊虛空。能至無邊刹。
面覲於諸佛。能問甚深義。

をば置く。乃至、佛を供養せんが爲に、一華〔花〕を以て虛空に散らすも、亦是くの如し。又此れをも置く。若し善男子、善女人等にして、下は一たびも、「南謨〔無〕佛陀大慈悲者」と稱ふるに至らば、是の善男子、善女人等は、生死の際を窮むるまで、善根盡くること無く、天人の中に於て、恒に富樂を受け、乃至最後には、般涅槃を得ん。

略抄す。『大悲經』の第二、之に同じ。『寶積經』に云はく、

若し衆生有つて、如來の所に於て、微善をも起さば、苦の際を盡すまで、畢竟して壞れず。

と。又云はく、

若し菩薩有つて、勝意樂を以て、能く我が所に於て、父の想を起さば、彼の人當に、如來の數に入ることを得て、我が如く異なること無かるべし。

と。『十二佛名經』の偈に云はく、

若し人佛の名を持たば　世々に生るゝ處
身通をもて虛空に遊び　能く無邊の刹に至る

但能耳聞。此三昧名。假令不讀不誦。不受不持。不修不習。不爲他轉。不爲他說。亦復不能。廣分別釋。然彼諸善男子善女人。皆當次第。成就阿耨菩提。

『同經』偈云。

若欲圓滿諸妙相。
具足衆妙上莊嚴。
及求轉生清淨家。
必先受持此三昧。

又有『經』言。

若於佛福田。能殖少分善。
初獲勝善趣。後必得涅槃。

『大般若經』云。

依敬憶佛。必出生死至涅槃。置此。乃至爲供養佛。以一華散虛

人は當來に、決定して成佛すること、疑有ること無きなり。

と。『同經』の第九に云はく、

但能く耳に、此の三昧の名を聞かば、假令讀まず誦せず、受けず持たず、修せず習はず、他の爲に轉まず、他の爲に說かず、亦復た廣く分別して釋くこと能はざらんも、然も彼の諸の善男子、善女人は、皆當に次第に、阿耨菩提を成就すべし。

と。『同經』の偈に云はく、

若し諸の妙相を圓滿にし
衆の妙上なる莊嚴を具足へんと欲ひ
及清淨の家に轉生れんことを求めなば
必ず先づ此の三昧を受け持て

と。又有る『經』に言はく、

若し佛の福田に於て　能く少分の善を殖（植）ゑなば
初には勝善趣を獲　後には必ず涅槃を得ん

と。『大般若經』に云はく、

佛を敬ひ憶ふに依つて、必ず生死を出でて涅槃に至る。此れ

佛名經』偈云。

若人持佛名。不生怯弱心。
智慧無諂曲。常在諸佛前。
若人持佛名。七寶華中生。
其華千億葉。威光相具足。

已上諸文。永離惡趣。往生淨土。 2『觀佛經』云。

若能至心。繫念在內。端坐正受。
觀佛色身。當知是人。心如佛心。
與佛無異。雖在煩惱。不爲諸惡。
之所覆蔽。於未來世。雨大法雨。

『大集念佛三昧經』第七云。

當知如是。念佛三昧。則爲總攝。
一切諸法。是故非彼。聲聞緣覺。
二乘境界。若人暫聞。說此法者。
是人當來。決定成佛。無有疑也。

『同經』第九云。

と。云云。有るが云はく、『正法念經』に此の文有り、と。云云。

『十二佛名經』の偈に云はく、

若し人佛の名を持ち　怯弱の心を生さず
智慧あつて諂曲無くば　常に諸佛の前に在り
若し人佛の名を持たば　七寶の華の中に生る
其の華千億の葉にして　威光の相具足せり

と。已上の諸『文』は、永く惡趣を離れて、淨土に往生すること〔を明す〕。 2『觀佛經』に云はく、

若し能く至心にして、繫念內に在り、端坐正受して、佛の色身を觀ぜば、當に知るべし、是の人の心は、佛の心の如くにして、佛と異なること無し。煩惱に在りと雖も、諸惡の爲に覆蔽はれず、未來世に於て、大法雨を雨らす。

と。『大集念佛三昧經』の第七に云はく、

當に知るべし。是くの如き念佛三昧は、則ち總じて一切の諸法を攝すと爲す。是の故に、彼の聲聞緣覺の、二乘の境界に非ず。若し人暫くも、此の法を說くことを聞かん者は、是の

不生邪見。雜穢之處。常得正見。勤修不息。但聞佛名。獲如是福。何況繫念。觀佛三昧。

『安樂集』云。

『大集經』云。「諸佛出世。有四種法度衆生。何等爲四。一者口說十二部經。即是法施度衆生。二者諸佛如來。有無量光明相好。一切衆生。但能繫心觀察。無不獲益。即是身業度衆生。三者有無量德用。神通道力。種々神變。即是神通道力度衆生。四者諸佛如來。有無量名號。若總若別。其有衆生。繫心稱念。莫不除障獲益。皆生佛前。即是名號度衆生。」

云々。有云。『正法念經』有此文。『十二

明を聞かば、億々千劫のあひだ、惡道に墮ちず、邪見雜穢の處に生れず、常に正見を得て、勤修すること息まざらん。但佛の名を聞くすら、是くの如きの福を獲る。何に況や、念を繫（係）けて觀佛三昧せんをや。

と。『安樂集』に云はく、

『大集（彼）經』に云はく「諸佛の世に出でたまふは、四種の法有つて、衆生を度したまふ。何等をか四と爲す。一には、口に十二部經を說く。即ち是れ、法施をもつて衆生を度するなり。二には、諸佛如來には、無量の光明相好有り。一切の衆生、但能く心を繫けて觀察せば、益を獲ずといふこと無し。即ち是れ、身業をもつて衆生を度するなり。三には、無量の德用、神通道力、種々の神變（變化）有り。即ち是れ、神通力をもつて衆生を度するなり。四には、諸佛如來には、無量の名號有り。若しは總（名）、若しは別（名）なり。其れ衆生有つて、心を繫けて稱念せば、障を除き益を獲ずといふこと莫し。皆、佛の前に生る。即ち是れ、名號をもつて衆生を度するなり」と。

第四當來勝利者。『華嚴』偈云。
若念如來少功德。
乃至一念心專仰。
諸惡道怖悉永除。
智眼於此能深悟。
智眼天王頌。『般舟經』偈云。
其人終不墮地獄。
離餓鬼道及畜生。
世々所生識宿命。
學是三昧得如是。
『觀佛經』云。
若有衆生。一聞佛身。如上功德。
相好光明。億々千劫。不墮惡道。

清淨眼を得て　能く無量の佛を見たてまつる
と。

第四に當來の勝利

とは、『華嚴經』の偈に云はく、
若し如來の少かの功德を念じ
乃至一念の心だも專仰しまつらば
諸の惡道の怖れ悉く永く除り
智眼此に於て能く深く悟る
と。智眼天王の頌なり。『般舟經』の偈に云はく、
其の人終に地獄に墮ちず
餓鬼道及び畜生を離れ
世々生るゝ所に宿命を識る
是（此）の三昧を學べるもの是くの如くなるを得ん
と。『觀佛經』に云はく、
若し衆生有つて、一たび佛の身の、上の如き功德、相好、光

見無央數百千佛。
得是三昧菩薩然。
當見無央百千佛。
乃至
其有誦受是三昧。
已爲面見百千佛。
假使最後大恐懼。
持此三昧無所畏。
『念佛三昧經』第九偈云。
若欲盡見一切佛。
現在未來及十方。
或復求轉妙法輪。
亦先修習此三昧。
『十二佛名經』偈云。
若人能至心。七日誦佛名。
得於清淨眼。能見無量佛。

阿彌陀國の菩薩の
無央數百千の佛を見まつるが如
是の三昧を得し菩薩も然
無央百千の佛を見まつらん
乃至
其れ是の三昧を誦み受つこと有らば
已に面のあたり百千の佛を見まつると爲す
假使最後の大恐懼にも
此の三昧を持たば畏るゝところ無けん
と。『念佛三昧經』の第九の偈に云はく、
若しは盡く一切の佛
現在未來及び十方を見んと欲ひ
或は復た妙法輪を轉ぜんことを求めんも
亦先づ此の三昧を修習せよ
と。『十二佛名經』の偈に云はく、
若し人能く至心にして　七日佛の名を誦へなば

佛方所。端身正向。能於一佛。念念相續。卽於念中。能見過去未來現在諸佛。

導禪師釋云。

衆生障重。觀難成就。是以大聖。悲憐直勸。專稱名字。

『般舟經』云。

前所不聞經卷。是菩薩持是三昧威神。夢中悉自得其經卷。各々悉見悉聞經聲。若晝日不得者。若夜於夢中。悉得見佛。佛告跋陀和。若一劫若過一劫。我說是菩薩。持是三昧者。說其功德。不可盡竟。何況能求得是三昧者。

又『同經』偈云。

如阿彌陀國菩薩。

隨ひ、端身に正しく向つて、能く一佛に於て、念々に相續すべし。卽ち是の念の中に、能く過去未來現在の、諸の佛を見たてまつる。

と。導禪師の釋して云はく、

衆生は障重ければ、觀成就すること難し。是れを以て、大聖悲憐したまひ、直勸めて專ら名字を稱せしめたまふなり。

と。『般舟經』に云はく、

前に聞かざりし所の經卷をば、是の菩薩、是の三昧の威神を持つて、夢の中に悉く自ら其の經卷〔の名〕を得、各〻悉く見、悉く經の聲を聞かん。若し晝日に得ずんば、若しは夜、夢の中に於て、悉く見ることを得ん。佛、跋〔颰〕陀和に告げたまはく、若しは一劫、若しは〔復た〕一劫を過ぐるまでも、我是の菩薩の、是の三昧を持つ者を說き、其の功德を說かんに、盡し竟る可からじ。何に況や、能く〔力めて〕是の三昧を求め得たる者をや。

と。又『同經』の偈に云はく、

心無所畏毛不竪。
其功德行不可議。
行此三昧得如是。
「十住婆沙」云。引此等文已云。「唯除業報。必應受者。」『十二佛名經』偈云。
若人持佛名。衆魔及波旬。
行住坐臥處。不能得其便。

第三現身見佛者。『文殊般若經』下卷云。
佛云。若善男子善女人。欲入一行三昧。應處空閑。捨諸亂意。不取相貌。繫心一佛。專稱名字。隨

能く此の經を誦んで人を化すればなり
勇猛に諸の魔事を降伏し
心畏る丶所無く毛竪たず
其の功德行は議る可からず
此の三昧を行ぜんものは是くの如くなることを得る
と。『十住婆沙』に、此れ等の文を引き已つて云はく「唯、業報の必ず應に受くべき者をば除く」と。『十二佛名經』の偈に云はく、
若し人佛の名を持たば　衆の魔及び波旬も
行住坐臥の處に　其の便りを得ること能はず
と。

第三に現身見佛

とは、『文殊般若經』の下卷に云はく、
佛、云はく。若し善男子、善女人、一行三昧に入らんと欲せば、應に空閑なるところに處し、諸の亂の意を捨てて、相貌を取らず、心を一佛に繫け、專ら名字を稱へて、佛の方所に

不能中。佛言。如我所語無有異。
除其宿命。其餘無有能中者。
『偈』曰。
鬼神乾陀共擁護。
諸天人民亦如是。
并阿須倫摩睺勤。
行此三昧得如是。
諸天悉共頌其德。
天人龍神甄陀羅。
諸佛嗟歎令如願。
諷誦說經爲人故。
國々相伐民荒亂。
飢饉荐臻壞苦窮。
終不於中夭其命。
能誦此經化人者。
勇猛降伏諸魔事。

人の念を奪ふものも、設し是の菩薩を中らんと欲せば、終に中ること能はず、と。佛言はく、我が語る所の如きは、異有ること無し。其の宿命〔の所〔不〕請〕をば除く。其の餘は、能く中る者有ること無けん、と。

と。『偈』に曰く、

鬼神や乾陀は共に擁護し
諸天や人民も亦是くの如くす
并に阿須倫や摩睺勤も
此の三昧を行ぜんものは是くの如きらの〔護り〕を得る
諸天は悉共に其の德を頌め
天、人、龍、神〔鬼〕、甄〔眞〕陀羅も
諸佛も嗟歎めて願の如くなら令めたまふ
經を諷誦み說いて人の爲にす故なり
國と國と相ひ伐つて民荒亂び
飢饉荐りに臻つて壞〔懐〕苦窮まらんも
終に其の命を中夭せじ

福德。無量無邊。況復繫念。念諸佛者。而不滅除。諸障礙耶。已上滅罪生善。其餘如上正修念佛門。

第二冥得護持者。『護身呪經』云。

三十六部神王。有萬億恒沙鬼神爲眷屬。護受三歸者。

『般舟經』云。

劫盡壞燒時。持是三昧菩薩者。正使墮是火中。火卽爲滅。譬如大甖水滅小火。佛告跋陀和。我所語無有異。是菩薩者持是三昧。若帝王若賊。若火若水。若龍若蛇。若閱叉鬼神若猛獸。乃至若壞人禪奪人念。設欲中是菩薩者。終

て、若し我が名を稱へ、及び南無諸佛と稱へなば、獲る所の福德は、無量無邊ならん。況や復た念を繫けて、諸佛を念ぜん者の、而も諸の障礙を滅除せざらん耶。

と。已上は、滅罪と生善となり。其の餘は、上の正修念佛門の如し。

第二に冥得護持

とは、『護身呪經』に云はく、

三十六部の神王に、萬億恒〔河〕沙の鬼神有つて、眷屬と爲し、〔以て〕三歸を受けたる者を護る。

と。『般舟經』に云はく、

劫盡壞燒の時、是の三昧を持てる菩薩は、正使是の火の中に墮ちんとも、火は卽ち爲に滅す。譬へば、大甖の水の、小火を滅すが如し、と。佛、跋〔颰〕陀和に告げたまはく。我が語る所は、異有ること無し。是の菩薩、是の三昧を持たば、若しは帝王若しは賊、若しは火〔水〕若しは水〔火〕、若しは龍若しは蛇、若しは閱叉鬼神若しは猛獸、乃至 若しは人の禪を壞り、

若有聞是三昧者。
得其福祐過於彼。
安諦諷誦說講者。
引譬功德不可喩。

破一佛刹爲塵。取一々塵亦碎如一佛刹塵數。以此一塵爲一佛刹。若干佛刹滿中珍寶。供養諸佛。以之爲比也。已上生善。」『度諸佛境界經』說。

若諸衆生。緣於如來。生諸行者。斷無數劫。地獄畜生。餓鬼閻羅王生。若有衆生。一念作意。緣如來者。所得功德。無有限極。不可稱量。百千萬億那由他。諸大菩薩。悉得不可思議解脫定。不能計挍。知其邊際。

『觀佛經』說。

佛告阿難。我涅槃後。諸天世人。若稱我名。及稱南無諸佛。所獲

用つて佛天中天に供養せんも
若し是の三昧を聞くこと有らん者は
其の福祐を得ること彼に過ぎん
安諦に諷誦し講說せん者は
譬を引くとも功德喩ふ可からず

と。一佛刹を破して塵と爲し、一々の塵を取つて、亦碎いて一佛刹の塵の如くし、此の一塵を以て一佛刹と爲し、若干の佛刹の中に滿てらん珍寶をもつて、諸佛を供養す。之を以て比と爲すなり。已上は、生善なり。」『度諸佛境界經』に說く、

若し諸の衆生にして、如來を緣じて、諸行を生ずる者は、無數劫の地獄、餓鬼、畜生、閻羅〔魔〕王の生を斷つ。若し衆生有つて、一念も作意して、如來を緣ぜん者は、得る所の功德、限極有ること無し、稱量る可からず。百千萬億那由他の、諸大菩薩にして、悉く不可思議解脫定を得たらんも、計挍べて其の邊際を知〔得〕ること能はじ。

と。『觀佛經』に說く、

佛、阿難に告げたまはく。我涅槃して後に、諸天、世人にし

專心自歸一如來。
口自發言南無佛。
是功德福爲最上。
『般舟經』說念佛三昧偈云。
假使一切皆爲佛。
聖智清淨慧第一。
皆於億劫過其數。
講說一偈之功德。
至於泥洹誦詠福。
無數億劫悉歎誦。
不能究盡其功德。
於是三昧一偈事。
一切佛國所有地。
四方四隅及上下。
滿中珍寶以布施。
用供養佛天中天。

若し一心に十指を叉へ
心を專（等）らにして自ら一如來に歸しまつり
口に自ら南無佛と發言へなば
是の功德の福をもて最上と爲す
と。『般舟經』に念佛三昧を說く偈に云はく、
假使一切をして皆佛と爲し
聖智清淨にして慧第一たらしめん
皆億劫に於て其の數を過ぐるまで
一偈を講說せる功德において
泥洹に至るまでその福を誦（讃）め詠ひ
無數億劫のあひだ悉く歎め誦へんも
其の功德を究盡（盡究）すこと能はじ
是の三昧の一偈の事に於てせるを
一切の佛國の有らゆる地
四方四隅及び上下の
中に滿てらん珍寶を以て布施し

若三千大千世界滿中。須陀洹。斯陀含。阿那含。阿羅漢。若有善男子。善女人。若一劫若減一劫。以諸種々稱意。一切樂具。恭敬尊重。謙下供養。若復有人。於諸佛所。但一合掌。一稱名。如是福德。比前福德。百分不及一。百千億分。不及一。迦羅分。不及一。何以故。以佛如來。諸福田中。爲最無上。是故施佛。成大功德。略抄。以滿三千界辟支佛校量。亦爾。『普曜經』偈云。

一切衆生成緣覺。
若有供養億數劫。
飲食衣服床臥具。
擣香雜香及名華。
若有一心叉十指。

若し三千大千世界の中に滿てらん、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢を、若し善男子、善女人有つて、若しは一劫、若しは減一劫のあひだ、諸の種々稱意の、一切の樂具を以て、恭敬し尊重し、謙下して供養せん。若し復た人有つて、諸佛の所に於て、但一たび合掌し、一たびも名を稱せん。是くの如き福德に、前の福德を比べんに、百分にしてその一にも及ばず、百千億分にしてその一にも及ばず、迦羅分にしてその一にも及ばず。何を以ての故とならば、佛如來は、諸の福田の中において、最無上たるを以てなり。是の故に、佛に施したてまつるは、大功德を成すなり。と。略抄す。三千界に滿てらん辟支佛を以て校量すること、亦爾り。『普曜經』の偈に云はく、

一切衆生の緣覺と成らんに
若ひ億數〔千〕劫のあひだ
飲食と衣服と床臥の具と
擣〔搗〕香と雜香と及び名華とを供養すること有らんも

『寶積經』第五云。
如有寶珠。名種種色。在大海中。
雖有無量。衆多駃流。入於大海。
以珠火力。令水銷滅。而不盈溢。
如是如來。應正等覺。證菩提已。
由智火力。能令衆生。煩惱銷滅。
亦復如是。乃至若復有人。於日々中。
稱説如來。名號功德。是諸衆生。
能離黑闇。漸次當得。燒諸煩惱。
如是稱念。南無佛者。語業不空。
如是語業。名執大炬。能燒煩惱。
『遺日摩尼經』云。
菩薩雖復。數千巨億萬劫。在愛
欲中。爲罪所覆。若聞佛經。一反
念善。罪卽消盡。
已上諸文。滅罪。」『大悲經』第二云。

と。『寶積經』の第五に云はく、
寶珠有り、種種色と名づく。大海の中に在つて、無量衆多の
駃流の、大海に入るもの有りと雖も、珠火の力を以て、水を
して銷滅せしめて、盈溢せざるが如く、是くの如く、如來應
正等覺も、菩提を證し已れば、智火の力に由つて、能く衆生
の煩惱をして銷滅せしめたまふこと、亦復た是くの如し。乃至
若し復た人有つて、日々の中に於て、如來の名號の、功德を
稱説せば、是の諸の衆生は、能く黑闇を離れて、漸次に諸の
煩惱を、燒くことを得べし。是くの如く、「南無佛」と稱念せ
ば、語業空しからじ。是くの如き語業をば、大〔火〕炬を執つ
て、能く煩惱を燒くと名づく。
と。『遺日摩尼經』に云はく、
菩薩〔復た〕、數千巨億萬劫のあひだ、愛欲の中に在つて、罪
〔欲〕の爲に覆はる〔と雖〕も、〔若し〕佛の經を聞いて、一反だ
も善を念ぜば、罪卽ち消え盡きん。
と。已上の諸文は、滅罪なり。」『大悲經』の第二に云はく、

「優塡王作佛形像經」云。「作佛形像。功德無量。世々所生。不墮惡道。後皆得生。無量壽佛國。作菩薩當得成佛。」云云。略抄。又云。

老女見佛。邪見不信。猶能除却。八十萬億劫。生死之罪。況復善意。恭敬禮拜。

須達家老女因緣。如彼『經』廣說。又云。

諸凡夫及。四部弟子。謗方等經。作五逆罪。犯四重禁。偸僧祇物。婬比丘尼。破八戒齋。作諸惡事。種々邪見。如是等人。若能至心。一日一夜。繫念在前。觀佛如來。一相好者。諸惡罪障。皆悉盡滅。

又云。

若有歸依。佛世尊者。若稱名者。除百千劫。煩惱重障。何況正心。修念佛定。

惡道に墮ちず、後に皆無量壽佛の國に生るゝことを得、菩薩と作つて、當に成佛することを得べし」と。云云。略抄す。又云はく、

老女（母）の佛を見たてまつり、邪見にして信ぜざるも、猶能く八十萬億劫の生死の罪を除却けり。況や復た善意にして、恭敬し禮拜せんをや。

と。須達家の老女の因緣は、彼の『經』に廣く說くが如し。又云はく、

諸の凡夫、及び四部の弟子にして、方等經を謗り、五逆罪を作り、四重禁を犯し、僧祇物を偸み、比丘尼を婬し、八戒齋を破り、諸の惡事、種々の邪見を作さん。是くの如き等の人も、若し能く至心に、一日一夜、念を繫（係）けて前に在すがごとく、佛如來の一の相好をも觀ぜん者は、諸の惡も罪障も、皆悉く滅び盡きん。

と。又云はく、

若しは佛世尊に、歸依すること有る者、若しは名を稱ふる者は、百千劫の煩惱重障を除く。何に況や正心に、念佛定を修せんものをや。

恒河沙微塵數劫。生死之罪。設復有人。但聞白毫。心不驚疑。歡喜信受。此人亦却。八十億劫。生死之罪。

又云。

佛去世後。三昧正受。想佛行者。亦除千劫。極重惡業。佛行歩相。如上助念方法門。又云。

佛告阿難。汝從今日。持如來語。遍告弟子。佛滅度後。造好形像。令身相足。亦作無量。化佛色像。及通身色。及畫佛跡。以微妙綵。及頗梨珠。安白毫處。令諸衆生。得見是相。但見此相。心生歡喜。此人除却。百億那由他。恒河沙劫。生死之罪。

も、是くの如き等の人は、九十六億那由他恒河沙の、微塵の數の劫の、生死の罪を除却かん。設ひ復た人有つて、但白毫（毛）を聞き、心驚き疑はずして、歡喜し信受せば、此の人も亦、八十億劫の、生死の罪を却かん。

と。又云はく、

佛世を去つて後、三昧正受して、佛の行を想はん者も、亦千劫の、極重の惡業を除かん。

と。佛の行歩の相は、上の助念方法門の如し。又云はく、

佛、阿難に告げたまはく、汝今日より、如來の語を持つて、遍く弟子に告げよ。佛滅度の後には、好き形像を造つて、身相をして足らしめ、亦無量の化佛の色像、及び通身の色（光）を作り、及び佛跡を畫き、微妙の綵（彩）、及び頗梨珠を以て、白毫の處に安き、諸の衆生をして、是の相を見ることを得しめよ。但此の相を見て、心に歡喜を生ぜば、此の人は、百億那由他恒河の沙の、劫のあひだの生死の罪を除却かん。

と。『優塡王作佛形像經』に云はく「佛の形像を作る功德は、無量にして、世々に生るゝ所には、

天台首楞嚴院沙門源信撰

大文第七。明念佛利益者。大分有七。一滅罪生善。二冥得護持。三現身見佛。四當來勝利。五彌陀別益。六引例勸信。七惡趣利益。其文各多。今略擧要。

第一滅罪生善者。『觀佛經』第二云。

於一時中。分爲少分。少分之中。能須臾間。念佛白毫。令心了々。無謬亂想。分明正住。注意不息。念白毫者。若見相好。若不得見。如是等人。除却九十六億那由他。

往生要集 卷下

大文第七に念佛の利益

を明さば、大に分つて七有り。一には滅罪生善、二には冥得護持、三には現身見佛、四には當來の勝利、五には彌陀の別益、六には引例勸信、七には惡趣の利益なり。其の文各ゝ多し、今略して要を擧げん。

第一に滅罪生善

とは、『觀佛經』の第二に云はく、

一時の中に於て、分つて少分と爲し、少分の中にして、能く須臾の間も、佛の白毫を念じ、心をして了々ならしめ、謬亂の想無く、分明正住にして、注意して息まず、白毫を念ぜん者は、若しは相好を見、若しは見たてまつることを得ざらん

不同也。四佛者。彼『經』「一切火焰。化爲玉女。罪人遙見。心生歡喜。我欲往中。坐金車已。顧瞻玉女。皆捉鐵斧。折截其身。」『觀經』言。「爾時彼佛。卽遣化佛。化觀世音。化大勢至。至行者前。」以此四義。準知。蓮華來迎。不同『觀佛三昧經』說。

已上。看病之人。能了此相。數問病者。所有諸事。依前行儀。種々敎化。

往生要集　巻中末終

來つて汝を迎ふ」と」と。彼は是れ詠歌の音なれども、此は滅罪を陳ぶるの語なり。二音旣に別なるが故に、同じからざるなり。四に佛といふは、彼の『經』には「一切の火焰は、化して玉女と爲る。罪人遙かに見て、心に歡喜を生じ、我中に往かんと欲す、と。金車に坐し已つて、玉女を顧り瞻れば、皆鐵の斧を捉つて、其の身を折〔斬〕り截る」といへども、『觀經』には「爾の時彼の佛、卽ち化佛、化觀世音、化大勢至を遣して、行者の前に至らしめたまふ」と言ふ。此の四の義を以て準知す、蓮華〔花〕の來迎は、『觀佛三昧〔海〕經』の說に同じからずといふことを。

と。已上。看病の人は、能く此の相を了へ、數ゞ病者の、有らゆる諸の事を問ひ、前の行儀に依つて、種々に敎化せよ。

往生要集　巻中

此下品等三人。雖復生來造罪。終時遇善知識。至心念佛。以念佛故。滅多劫罪。成勝功德。感得寶池中華來迎。豈同前華也。二相者。彼『經』說。「風刀解身。偃臥不定。如被楚撻。其心荒越。發狂癡想。見己室宅。男女大小。一切皆是。不淨之物。屎尿臭處。盈流于外。」今此念佛。身心安穩。惡想都滅。唯見聖衆。聞有異香。故不類也。三語者。彼『經』中說。「地獄痛聲。如詠歌音。罪人聞已。如此好處。吾當遊中。」『觀經』中。「言。讃善男子。汝稱佛名故。諸罪消滅。我來迎汝。」彼是詠歌之音。此陳滅罪之語。二音既別。故

を生ぜず、善友の教へて念佛せしむるに遇はざるが故に、見るところの華〔花〕は、是れ地獄の相なり。今此の下品等の三人は、復た生れてより來、罪を造ると雖も、終の時に、善知識に遇ひ、至心に佛を念ず。佛を念ずるを以ての故に、多劫の罪を滅し、勝れたる功德を成じて、寶池の中の華〔花〕の來迎することを感得するなり。豈、前の華〔花〕に同じからんや。二に相といふは、彼の『經』には「風刀その身を解くに、偃臥定らず、楚撻を被るが如し。其の心は荒み越れて、狂癡の想を發す。己が室宅〔家〕を見れば、男女大小の、一切は皆是れ、不淨の物なり。屎尿の臭き處にして、外に盈れ流る」と說けども、今此は佛を念じて、身心安穩なれば、惡想都べて滅す。唯聖衆を見、異香有るを聞ぐ。故に類せざるなり。三に語といふは、彼の『經』の中には「地獄の痛ぶ聲は、詠歌の音の如し。罪人聞き已り、「此くの如き好き處に、吾當に中に遊ばん」〔と念ふ〕」と說けども、『觀經』の中には「讃めて言はく「善男子、汝佛の名を稱ふるが故に、諸の罪消滅す、我

便吾遊戲。乃處如此。不淨物間。作是語已。獄卒羅刹。以大鐵叉。擎阿鼻地獄。及諸刀山。化作寶樹。及淸涼池。火焰化作。金葉蓮華。諸鐵嘴蟲。化爲鳧鴈。地獄痛聲。如詠歌音。罪人聞已。如此好處。吾當遊中。念已卽時。坐大蓮華。

云云。寧知。今日蓮華來迎。非是火華。

答。感和尙釋云。

以四義故。知非火車。一以行。二以相。三以語。四以佛。此四義異火華。一以行者。『觀佛三昧經』說「罪人造罪。犯四重禁。乃至毀辱所親。」不生悔過。不遇善友。敎令念佛。故所見華。是地獄相。今

林の、吾をして遊戲せしむるもの無くして、乃ち此の如き、不淨の物の間に處くや」と。是の語を作し已るとき、獄卒羅刹、大鐵叉を以て、阿鼻地獄、及び諸の刀山（林）を擎げ、化して寶の樹、及び淸涼の池と作す。火焰は、化して金葉の蓮華と作り、諸の鐵の嘴の蟲は、化して鳧鴈と爲る。地獄の痛ぶ聲は、詠歌の音の如し。罪人聞き已り、「此くの如き好き處に、吾當に中に遊ばん」と念ひ已つて、尋時に大（火）の蓮華に坐す。

と。云云。寧ぞ知らん、今日の蓮華の來迎は、是れ火の華に非ずといふことを。

答ふ。感和尙の釋して云はく、

四の義を以ての故に、火の車に非ずといふことを知る。一には行を以てし、二には相を以てし、三には語を以てし、四には佛を以てす。此の四の義をもつて、火の華（花）に異なるなり。一に行を以てすとは、『觀佛三昧經』には「罪人罪を造り、四重禁を犯し、乃至所親を毀辱かしむ」と說けども、悔過

風刀解時。寒急失聲。寧得好火。
在車上坐。燃火自爆。作是念已。
卽便命終。揮攉之間。已坐金車。
顧瞻玉女。皆捉鐵斧。折截其身。
又言。
復有衆生。犯四重禁。虛食信施。
誹謗邪見。不識因果。斷學般若。
毀十方佛。偷僧祇物。婬佚無道。
逼略淨戒。諸比丘尼。姉妹親戚。
不知慚愧。毀辱所親。造衆惡事。
此人罪報。臨命終時。風刀解身。
偃坐不定。如被杖楚。其心荒越。
發癡狂想。見己室宅。男女大小。
一切皆是。不淨之物。屎尿臭處。
盈流于外。爾時罪人。卽作是語。
云何此處。無好城廓。及好山林。

中に往かんと欲す」と。風刀の解く時に、寒さ急しくして聲を失し、寧ろ好き火を得て、車の上に在て坐り、燃〔然〕ゆる火に自ら爆〔曝〕られん、と。是の念を作し已つて、卽便ち命終る。揮攉〔霍〕の間にして、已に金車に坐せり。玉女を顧り瞻れば、皆鐵の斧を捉つて、其の身を折〔斬〕り截る。

と。又言はく、

復た衆生有つて、四重禁を犯し、虛しく信施を食ひ、誹謗邪見にして、因果を識らず、般若を學ぶことを斷ち、十方の佛を毀り、僧祇物を偷み、婬佚無道にして、淨戒の諸の比丘尼、姉妹親戚を逼略して、慚愧を知らず、所親を毀辱かしめて、衆の惡事を造れる、此の人の罪の報は、命終の時に臨んで、風刀その身を解くに、偃坐〔臥〕定らず、杖禁〔楚撻〕を被るが如し。其の心は荒み越れて、癡狂〔狂癡〕の想を發す。己が室宅〔家〕を見れば、男女大小の一切は皆是れ、不淨の物なり。屎尿の臭き處にして、外に盈れ流る。爾の時に罪人、卽ち是の語を作さく「云何ぞ此の處に、好き城廓〔郭〕、及び好き山

七寶蓮臺上。應作是念。如來本誓。一毫無謬。願佛決定引攝我。南無阿彌陀佛。」或漸々取略應念。願佛必引攝。南無阿彌陀佛。如是瞻病者氣色。隨順其所應。但以一事。爲最後一念。不得衆多。其詞進止。可殊用意。勿令病者。生攀緣矣。

問。如觀佛三昧經說。

佛告阿難。若有衆生。殺父害母。罵辱六親。作是罪者。命終之時。銅狗張口。化十八車。狀如金車。寶蓋在上。一切火焰。化爲玉女。罪人遙見。心生歡喜。我欲往中。

一定すべし、今正しく是れ其の時なり、當に一心に佛を念じて、決定して西方極樂微妙淨土の、八功德の池の中の、七寶の蓮臺の上に往生すべし。應に是の念を作すべし「如來の本誓は、一毫も謬無し。願はくば佛、決定して我を引攝したまへ。南無阿彌陀佛。」と。」或は漸々に略を取つて、應に念ずべし「願はくば佛、必ず引攝したまへ。南無阿彌陀佛。」と。

是くの如く、病者の氣色を瞻て、其の所應に隨順し、但一事を以て、最後の一念と爲し、衆多なることを得ざれ。其の詞の進止は、殊に用意す可し。病者をして攀緣を生ぜしむること勿れ矣。

問ふ。『觀佛三昧經』に說くが如し。

佛、阿難に告げたまはく。若し衆生有つて、父を殺し、母を害し、六親を罵り辱かしめん。是の罪を作れる者は、命終の時に、銅の狗口を張つて、十八の車を化す。その狀、金車の如し。寶蓋は上に在り、一切の火焰は、化して玉女と爲る。罪人遙かに見て、心に歡喜を生じ、我中に往かんと欲す、「我

九。彌陀如來。非唯以光遙照。自與觀音勢至。常來擁護行者。何況父母於病子。其心偏重。動法性山。入生死海。當知。是時佛放大光明。與諸聖衆倶來。引接擁護。惑障相隔。雖不能見。大悲願不可疑。決定來入此室。故佛子。應作是念。願佛放大光明。決定來迎。往生極樂。（南無阿彌陀佛。）若病者氣力。漸々羸劣時。應云。佛與觀音勢至。無量聖衆倶來。擎寶蓮臺。引攝佛子。（以上。第七八九條事。常應勸誘。其餘條事。時々用之。）

十。正臨終時。應云。佛子知不。但今卽是。最後心也。臨終一念。勝百年業。若過此刹那。生處應一定。今正是其時。當一心念佛。決定往生。西方極樂。微妙淨土。八功德池中。

九には、彌陀如來は、唯光を以て遙かに照したまふのみに非ず。自ら觀音、勢至とともに、常に來つて行者を擁護したまふなり。何に況や。父母は病める子に於ては、其の心偏へに重し。法性の山を動かして、生死の海に入りたまふ。當に知るべし、是の時に佛は大光明を放ち、諸の聖衆と倶に來つて、引接し擁護したまふなり。惑障相ひ隔てて、見たてまつること能はずと雖も、大悲の願疑ふ可からず、決定して此の室に來入したまふなり。故に佛子、應に是の念を作すべし「願はくば佛、大光明を放ち、決定して來迎して、極樂に往生せしめたまへ。（南無阿彌陀佛。）」と。若し病者の氣力、漸々羸劣へん時は、應に云ふべし。佛は、觀音と勢至と、無量の聖衆と倶に來りたまひ、寶の蓮臺を擎げて、佛子を引攝したまふ、と。（以上の第七、八、九條の事は、常に應に勸誘すべし。其の餘の條事は、時々之を用ひよ。）

十には、正しく臨終の時には、應に云ふべし。佛子、知るや不や、但（唯）今は卽ち是れ最後の心なり、臨終の一念は百年の業よりも勝るといふ、若し此の刹那を過ぎなば、生るゝ處應に

滅九十六億。那由他恒河沙。微塵數劫。生死重罪。是故今當。憶念彼相。決定滅除罪業。應作此念。願白毫相光。滅我諸罪。南無阿彌陀佛。

八。彼白毫相。若干光明。常照十方世界。念佛衆生。攝取不捨。當知。大悲光明。決定來照。如『華嚴』偈云。

　又放光明名見佛。
　彼光覺悟命終者。
　念佛三昧必見佛。
　命終之後生佛前。

故今應作是念。願彌陀佛。放淸淨光。遙照我心。覺悟我心。轉境界自體。當生三種愛。令得念佛三昧成就。往生極樂。南無阿彌陀佛。

の沙を、微塵とせる數ほどの劫の、生死の重罪を滅す。是の故に、今當に彼の相を憶念して、決定して罪業を滅除すべし。應に此の念を作すべし「願はくば白毫相の光、我が諸の罪を滅したまへ。南無阿彌陀佛。」と。

　八には、彼の白毫相の、若干の光明は、常に十方世界の、念佛する衆生を照して、攝取して捨てたまはず。當に知るべし。大悲の光明は、決定して來り照したまふことを。『華嚴』の偈に云ふが如し。

　又光明を放つを見佛と名づく
　彼の光命終の者を覺悟しめたまひ
　念佛三昧して必ず佛を見たてまつり
　命終の後に佛の前に生る

と。故に今應に是の念を作すべし「願はくば彌陀佛、淸淨の光を放ち、遙かに我が心を照して、我が心を覺悟しめ、境界と自體と當生との、三種の愛を轉じて、念佛三昧成就して、極樂に往生することを得しめたまへ。南無阿彌陀佛。」と。

專念彌陀如來。令業增盛。然彼佛功德。無量無邊。不可具說。今現在十方。各恒河沙等諸佛。恒常稱讚。彼佛功德。如是稱讚。設經恒沙劫。終不可窮盡。佛子。總應一心。歸命彼佛功德。應念。我今一念之中。盡以歸命。彌陀如來一切萬德。南無阿彌陀佛。

七。佛子應念。阿彌陀佛一色相。令心住一境。謂彼佛色身。如閻浮檀金。威德巍々。如金山王。無量相好。莊嚴其身。其中眉間白毫。右旋婉轉。如五須彌。七百五倶胝。六百萬光明。熾然赫奕。如億千日月。是卽無漏萬德。之所成就。大定智悲。之所流出也。須臾之間。憶此相者。能

を。今須らく彌陀如來を專念して、業をして增盛ならしむべし。然も彼の佛の功德は、無量無邊にして、具に說く可からず。今十方に現在する、各々恒河沙等の諸佛は、恒常に彼の佛の功德を稱讚したまふ。是くの如く稱讚すること、設ひ恒沙の劫を經とも、終に窮盡す可からず。佛子、總じて應に一心に、彼の佛の功德を歸命したてまつるべし。應に念ふべし「我今一念の中に、盡く以て彌陀如來の、一切萬德を歸命したてまつらん。南無阿彌陀佛。」と。

七には、佛子、應に阿彌陀佛の一の色相を念じ、心をして一境に住まらしむべし。謂はく、彼の佛の色身は、閻浮檀金の如し。威德巍々たること、金山王の如く、無量の相好をもつて、其の身を莊嚴したまへり。其の中の眉間の白毫は、右に旋つて婉轉き、五の須彌〔を合せし〕が如し。七百五倶胝、六百萬の光明〔を出し〕、熾然赫奕けること、億千の日月の如し。是れ卽ち、無漏萬德の成就するところ、大定智悲の流出するところなり。須臾の間も、此の相を憶へば、能く九十六億、那由他恒河

欲生我國。不果遂者。不取正覺。
佛子。一生之間。偏修西方業。所修業雖多。所期唯極樂。今須重聚集三際。一切善根。盡廻向極樂。應作是念。願由我所有一切善根力。今日決定。往生極樂。南無阿彌陀佛。
五。又本願云。
設我得佛。十方衆生。發菩提心。修諸功德。至心發願。欲生我國。臨壽終時。假令不與。大衆圍遶。現其人前者。不取正覺。
佛子。久已發菩提心。及諸善根。廻向極樂。今須重發菩提心。念彼佛。應作此念。願我爲利益。一切衆生。今日決定。往生極樂。南無阿彌陀佛。
六。既知佛子。本來具往生業。今須

と。佛子、一生の間、偏へに西方の業を修せり。修せし所の業多しと雖も、期せし所は唯極樂なり。今須らく重ねて、三際の一切善根を聚集めて、盡く極樂に廻向すべし。應に是の念を作すべし「願はくば我が有らゆる、一切の善根力に由り、今日決定して、極樂に往生せん。南無阿彌陀佛。」と。
五には、又本願に云はく、
設ひ我佛を得んに、十方の衆生、菩提心を發し、諸の功德を修し、至心に發願して、我が國に生れんと欲せん。壽終の時に臨んで、假令大衆に圍遶〔繞〕せられて、其の人の前に現ぜずば、正覺を取らじ。
と。佛子、久しく已に菩提心を發し、及び諸の善根をもつて、極樂に廻向せり。今須らく重ねて菩提心を發して、彼の佛を念ずべし。應に此の念を作すべし「願はくば我、一切の衆生を利益〔樂〕せんが爲に、今日決定して、極樂に往生せん。南無阿彌陀佛。」と。
六には、既に知んぬ、佛子本より來、往生の業を具せること

無阿彌陀佛。見其十念以上信心勢盡。應勸次事。或加稱二菩薩。下去準之。

三。應欣求淨土。西方極樂。是大乘善根界。無苦無惱處。一託蓮胎。永離生死。眼瞻彌陀之聖容。耳聞深妙之尊敎。一切快樂無不具足。若人臨終時。十念彌陀佛。決定往生彼安樂國。佛子。今適得人身。亦値佛敎。猶一眼龜値浮木孔。若於此時。不得往生。還墮三途八難之中。聞法尚難。何況往生。故應一心稱念彼佛。應作是念。願佛今日決定。引接於我。往生極樂。南無阿彌陀佛。

四。凡欲往生彼國者。須求其業。如彼佛本願云。

設我得佛。十方衆生。聞我名號。係念我國。殖諸德本。至心廻向。

三には、應に淨土を欣求すべし。西方極樂は、是れ大乘善根の界、無苦無惱の處なり。一たび蓮胎に託しぬれば、永く生死を離れ、眼には彌陀の聖容を瞻たてまつり、耳には深妙の尊敎を聞く。一切の快樂、具足せずといふこと無し。若し人臨終の時に、彌陀佛を十念しまつれば、決定して彼の安樂國に往生す。佛子、今適〻人身を得、亦佛敎に値へり。猶も一眼の龜の、浮木の孔に値へるがごとし。若し此の時に於て、往生することを得ずんば、還た三途〔惡〕八難の中に墮ちて、法を聞くことすら尚難し。何に況や往生をや。故に、應に一心に彼の佛を稱念すべし。應に是の念を作すべし「願はくば佛、今日決定して、我を引接して、極樂に往生せしめたまへ。南無阿彌陀佛。」と。

四には、凡そ彼の國に往生せんと欲はゞ、須らく其の業を求むべし。彼の佛の本願に云ふが如し。

設ひ我佛を得んに、十方の衆生、我が名號を聞き、念を我が國に係〔繫〕けて、諸〔衆〕の德本を殖〔植〕ゑ、至心に廻向して、我が國に生れんと欲せん。果遂せずば、正覺を取らじ。

薩。南無三世十方一切聖衆。南無極樂界會一切三寶。南無三世十方一切三寶。三念已上。或隨宜同音助念。或令聞鐘聲增正念。下去準之。

二。法性雖平等。亦不離假有。如彌陀佛言。

通達諸法性。一切空無我。

專求淨佛土。必成如是刹。

故爲往生淨土。先應厭離此界。今此娑婆世界。是惡業所感。衆苦本源也。生老病死。輪轉無際。三界獄縛。無一可樂。若於此時。不厭離之。當於何生。離輪廻耶。然阿彌陀佛。有不思議威力。若一心稱名。念々之中。滅八十億劫。生死重罪。是故今當。一心念彼佛。離此苦界。應作是念。願阿彌陀佛。決定拔濟我。南

ぜよ。

二には、法性は平等なりと雖も、亦假有を離れず。彌陀佛の言ふが如し。

諸法の性は一切空にして無我なりと通達れど

專ら淨き佛土を求めて必ず是の如き刹を成らん

と。故に淨土に往生せんが爲には、先づ應に此の界を厭離すべし。今此の娑婆世界は、是れ惡業の所感、衆苦の本源なり。生、老、病、死は、輪轉して際無く、三界の獄縛は、一として樂しむ可きもの無し。若し此の時に於て、これを厭離せざれば、當に何れの生に於てか、輪廻を離れんや耶。然も阿彌陀佛には、不思議の威力有して、若し一心に名を稱へまつれば、念々の中に、八十億劫の、生死の重罪を滅したまふ。是の故に、今當に一心に彼の佛を念じて、此の苦界を離るべし。應に是の念を作すべし「願はくば阿彌陀佛、決定して我を拔濟ひたまへ。南無阿彌陀佛。」と。其の十念以上の信心の勢盡くるを見て、應に次の事を勸むべし。或は加ふるに二菩薩を稱し、下去之に準ぜよ。

如幻無定性。隨心而轉變。是故佛子。應念三寶。翻邪歸正。然佛是醫王。法是良藥。僧是瞻病人。除無明病。開正見眼。示本覺道。引接淨土。無如佛法僧。是故佛子。先應生大醫王想。一心念佛。南無三世十方一切諸佛。南無本師釋迦牟尼佛。南無藥師瑠璃光佛。三念已上。南無阿彌陀佛。十念已上。次應生妙良藥想。一心念法。南無三世佛母摩訶般若波羅蜜。南無平等大慧妙法蓮華經。南無八萬十二一切正法。次應生隨逐護念想。一心念僧。南無觀世音菩薩。南無大勢至菩薩。南無普賢菩薩。南無文殊師利菩薩。南無彌勒菩薩。南無地藏菩薩。南無龍樹菩

しく本覺の道を忘れたり。但諸法は本より來、常に自ら寂滅の相なれども、幻の如く定性無きは、心に隨つて轉變せるなり。是の故に佛子、應に三寶を念じ、邪を翻じて正に歸すべし。然も佛は是れ醫王、法は是れ良藥、僧は是れ瞻病人なり。無明の病を除き、正見の眼を開き、本覺の道を示して、淨土に引接するは、佛法僧に如くものは無し。是の故に佛子、先づ大醫王なりとの想を生して、一心に佛を念ずべし。「南無三世十方一切諸佛、南無本師釋迦牟尼佛、南無藥師瑠璃光佛、三念已上。南無阿彌陀佛、十念已上。」と。次には應に妙良藥なりとの想を生して、一心に法を念ずべし。「南無三世佛母摩訶般若波羅蜜、南無平等大慧妙法蓮華經、南無八萬十二一切正法」と。次には應に隨逐護念したまふとの想を生して、一心に僧を念ずべし。「南無觀世音菩薩、南無大勢至菩薩、南無普賢菩薩、南無文殊師利菩薩、南無彌勒菩薩、南無地藏菩薩、南無龍樹菩薩、南無三世十方一切聖衆、南無極樂界會一切三寶」と。三念已上。或は宜しきに隨ひ、同音して助念せよ。或は鐘聲を聞かしめて、正念を扶せ。下去之に準

臺上。從彌陀佛後。聖衆圍遶。過十萬億國土之間。亦復如是。勿緣餘境界。唯至極樂世界。七寶池中。始應擧目合掌。見彌陀尊容。聞甚深法音。聞諸佛功德香。甞法喜禪悅味。頂禮海會聖衆。悟入普賢行願。」今有十事。應當一心聽。一心念。每一々念。莫生疑心。

一。先應發大乘實智。知生死由來。如『大圓覺經』偈云。

一切諸衆生。無始幻無明。
皆從諸如來。圓覺心建立。

當知。生死卽涅槃。煩惱卽菩提。圓融無礙。無二無別。而由一念妄心。入生死界來。無明病所盲。久忘本覺道。但諸法從本來。常自寂滅相。

非ざるよりは、餘の事を思ふこと勿れ。是くの如くして、乃至命終の後、寶蓮臺の上に坐し、彌陀佛の後に從ひ、聖衆に圍遶せられて、十萬億の國土を過ぐるの間も、亦復た是くの如くに、餘の境界を緣ずること勿れ。唯極樂世界の、七寶の池の中に至つて、始めて應に目を擧げ、合掌して彌陀の尊容を見たてまつり、甚深の法音を聞き、諸佛の功德の香を聞ぎ、法喜禪悅の味を甞め、海會の聖衆を頂禮して、普賢の行願に悟入すべし。」今十事有り、應當に一心に聽き、一心に念ずべし。一々の念每に、疑心を生ずること莫れ。

一には、先づ應に大乘の實智を發して、生死の由來を知るべし。『大圓覺經』の偈に云ふが如し。

一切諸衆生の　無始の幻無明は
皆諸の如來の　圓覺の心より建立る

と。當に知るべし、生死は卽ち涅槃にして、煩惱は卽ち菩提なり。圓融無礙にして、無二無別なることを。而れども一念の妄心に由つて、生死界に入つてより來、無明の病に盲られて、久

此義順『經』文。餘如下料簡。

次臨終勸念者。善友同行。有其志者。爲順佛敎。爲利衆生。爲善根。爲結緣。從染患初。來問病床。幸垂勸進矣。」但勸誘之趣。應在人意。今且爲自身。結其詞云。

佛子年來之間。止此界悕望。唯修西方業。就中本所期。是臨終十念。今既臥病床。不可不恐。須閉目合掌。一心誓期。自非佛相好。勿見餘色。自非佛法音。勿聞餘聲。自非佛正教。勿說餘事。自非往生事。勿思餘事。如是乃至。命終之後。坐寶蓮

と。已上。言ふ所の十念には、多釋有りと雖も、然れども一心に十遍、南無阿彌陀佛と稱ふる、之を十念と謂ふ。此の義、『經』の文に順ふ。餘は、下の料簡の如し。

次に臨終勸念

とは、善友同行にして、其の志有らん者は、佛の教に順はんが爲に、衆生を利せんが爲に、〔自らの〕善根の爲に、〔往生の〕緣を結ばんが爲に、染患の初より、病床に來問して、幸ひに勸進を垂れよ矣。」但し勸誘の趣は、應に人の意に在るべし。今且く自身の爲に、其の詞を結んで云はく、

佛子、年來の間、此の界の悕望を止めて、唯西方の業を修せり。就中本より期せる所は、是れ臨終の十念なりき。今既に病床に臥す、恐れずんばある可からず。須らく目を閉じて合掌し、一心に誓ひ期すべし。佛の相好に非ざるよりは、餘の色を見ること勿れ。佛の法音に非ざるよりは、餘の聲を聞くこと勿れ。佛の正教に非ざるよりは、餘の事を說くこと勿れ。往生の事に

云云。明知。於所求事。取彼相時。能助其事。而得成就。非唯臨終。尋常準之。綽和尙云。

十念相續。似若不難。然諸凡夫。心如野馬。識劇猨猴。馳騁六塵。何曾停息。各須宜致信心。豫自剋念。使積習成性。善根堅固也。如佛告大王。人積善行。死無惡念。如樹先傾。倒必隨曲也。若刀風一至。百苦湊身。若習先不在。懷念何可辨。各宜同志三五。預結言要。臨命終時。迭相開曉。爲稱彌陀名號。願生極樂。聲々相次。使成十念。

已上。所言十念。雖有多釋。然一心十遍。稱念南無阿彌陀佛。謂之十念。

取ること多きが故に、身より烟火（炎）を出す。等。と。云云。明かに知んぬ、求むるところの事に於て、彼の相を取る時、能く其の事を助けて、成就することを得といふことを。唯臨終のみには非ず、尋常も之に準ず。綽和尙の云はく、

十念相續することは、難からざるに似若たり。然れども諸の凡夫の、心は野馬の如く、識は猨猴よりも劇しくして、六塵に馳騁すること、何ぞ曾て停息まらん。各〻須らく宜しく信心を致（發）し、豫め自ら念を剋めて、積習をして性を成じ、善根をして堅固ならしむべし。佛、大王に告げたまふが如し。人、善行を積まば、死するとき惡念無し。樹の先より傾けるが、倒るゝとき必ず曲れるに隨ふが如し、と。若し刀風一たび至らば、百苦身に湊る。若し習先より在らざれば、念ぜんと懷ふとも何ぞ辨ず可けん。各〻宜しく同志のもの三五と、預め言要を結び、命終の時に臨んでは、迭に相ひ開曉して、爲に彌陀の名號を稱へ、極樂（安樂國）に生れんと願ひ、聲々相ひ次いで、十念を成ぜしめよ。

聞說已。即依說錄記。又病人若不能語。看病必須數々問病人。見何境界。若說罪相。傍人即爲念佛。助同懺悔。必令罪滅。若得罪滅。華臺聖衆。應念現前。準前抄記。又行者等。眷屬六親。若來看病。勿令有食。酒肉五辛人。若有必不得向病人邊。即失正念。鬼神交亂。病人狂死。墮三惡道。願行者等。好自謹愼。奉持佛教。同作見佛因緣。

已上。作往生想迎接想。其理可然。如『大論』說神變作意云。

取地相多故。履水如地。取水相多故。入地如水。取火相多故。身出烟火等。

來つて迎接するの想を作せ。病人若し前境を見ば、則(即)ち看病人に向つて說け。既に說くことを聞き已らば、即ち說けるが依に錄記せよ。又病人若し語ること能はざれば、看病人必ず數々病人に問ふ須し。何なる境界を見しや、と。若し罪の相を說かば、傍の人即ち爲に念佛して、助けて同じく懺悔し、必ず罪をして滅せしめよ。若し罪滅することを得て、華臺の聖衆、念に應じて前に現れなば、前に準じて抄記せよ。又行者等の眷屬六親、若し來つて看病せば、酒肉五辛を食ふ人有らしむること勿れ。若し有らば、必ず病人の邊に向くことを得ざれ。即ち正念を失ひ、鬼神交亂し、病人狂ひ死んで、三惡道に墮ちん。願はくば行者等、好く自ら謹愼んで佛教を奉持し、同じく佛を見たてまつるの因緣と作せ。

と。已上。往生の想、迎接の想を作すこと、其の理然る可し。『大論』に、神變の作意を說いて云ふが如し。

地の相を取ること多きが故に、水を履むこと地の如し。水の相を取ること多きが故に、地に入ること水の如し。火の相を

一立像。金薄塗之。面向西方。其像右手擧。左手中繫一五綵幡。脚垂曳地。當安病者。在像之後。左手執幡脚。作從佛往佛淨刹之意。瞻病者。燒香散華。莊嚴病者。乃至若有屎尿吐唾。隨有除之。

或說。

佛像向東。病者在前。

私云。若無別處。但令病者。面向西。燒香散華。種々勸進。或可令見。端嚴佛像。　導和尚云。

行者等。若病不病。欲命終時。一依上念佛三昧法。正當身心。廻面向西。心亦專注。觀想阿彌陀佛。心口相應。聲々莫絕。決定作往生想。華臺聖衆。來迎接想。病人若見前境。則向看病人說。既

り。事に卽いて求め、専心に法を念ず。其の堂の中に、一の立像を置けり。金薄をもつてこれに塗り、面を西方に向けたり。其の像の右の手は擧げ、左の手の中には、一の五綵の幡の、脚を垂れて地に曳けるを繫ぐ。當に病者を安んぜんとして、像の後に在き、左の手に幡の脚を執り、佛に從つて淨刹に往くの意を作さしむ。瞻病する者は、香を燒き、華を散らして、病者を莊嚴す。乃至若し屎尿、吐唾有らば、有るに隨つてこれを除く。

と。或は說く、

佛像を東に向け、病者をその前に在く。

と。私に云はく、若し別處無くば、但病者をして、面を西方に向けしめ、香を燒き華を散らし、種々に勸進せよ。或は、端嚴なる佛像を見しむ可し。導和尚の云はく、

行者等、若しは病み、病まざらんも、命終らんと欲する時は、一ら上の念佛三昧の法に依り、身心を正當へ、面を廻らして西に向け、心も亦專注して阿彌陀佛を觀想し、心と口と相應して聲々絕ゆること莫く、決定して往生の想と、華臺の聖衆

番功德。若不修如是法。失無量重寶。人天爲之憂悲。如齆鼻人。把栴檀而不嗅。如田家子。以摩尼珠。博一頭牛。

云。四番功德者。『弘決』云。「又有四番果報。一不驚。二信受。三定心修。四能成就。」

第二臨終行儀者。先明行事。次明勸念。

初行事者。『四分律抄』瞻病送終篇。引『中國本傳』云。

祇洹西北角。日光沒處。爲無常院。若有病者。安置在中。以凡生貪染。見本房内衣盋衆具。多生戀著。無心厭背。故制令至別處。堂號無常。來者極多。還反一二。即事而求。專心念法。其堂中置

を把れども嗅がざるが如く、田家の子は摩尼珠を以て一頭の牛に博ふるが如し。

と。云云。「四番の功徳」とは、『弘決』に云はく「又四番の果報有り。一には驚かず、二には信じて受け、三には定心に修し、四には能く成就するなり」と。

第二に臨終の行儀

とは、先づ行事を明し、次に勸念を明す。

初に行事

とは、『四分律抄』の瞻病送終の篇に、『中國本傳』を引いて云はく、

祇洹（桓）の西北の角にて、日光の沒る處に、無常院を爲れり。若し病者有れば、安置して中に在く。凡の貪染を生ずるものは、本房の内の衣盋（鉢）衆具を見て、多く戀著を生し、心厭ひ背くこと無きを以ての故に、制して別處に至らしむるなり。堂を無常と號く。來る者は極めて多く、還反るものは一二な

通。悉見諸佛。悉聞所說。悉能受持者。常行三昧。於諸功德。最爲第一。此三昧。是諸佛母。佛眼佛父。無生大悲母。一切諸如來。從是二法生。碎大千地。及草木爲塵。一塵爲一佛刹。滿爾世界中。寶用布施。其福甚多。不如聞此三昧。不驚不畏。況信受持讀誦。爲人說。況定心修習。如搆牛乳頃。況能成是三昧。故無量無邊。『婆娑』云。「劫火官賊。怨毒龍獸。衆病侵是人者。無有是處。此人常爲天龍八部諸佛。皆共護念稱讃。皆共欲見。共來其所。」若聞此三昧。如上四番功德。皆隨喜。三世諸佛菩薩皆隨喜。復勝上四

一なりと爲す。此の三昧は、是れ諸佛の母、佛の眼、佛の父、無生大悲の母なり。一切の諸の如來は、是の二法より生ず。大千の地及び草木を碎いて塵と爲し、その一塵をもつて一佛刹と爲し、爾の世界の中に滿てる寶を用て布施せば、其の福は甚だ多からんも、此の三昧を聞いて驚かず、畏れざらんには如かじ。況や信じて受け持ち、讀誦して人の爲に說かんをや。況や定心に修し習ふこと、牛乳を搆る頃の如くせんをや。況や能く是の三昧を成ぜんをや。故に無量無邊〔量〕なり。『婆沙』に云はく「劫火、官、賊、怨、毒、龍、獸、衆の病、是の人を侵すといはゞ、是の處有ること無し。此の人は、常に天、龍〔等〕の八部、諸の佛の、皆共に護念し、稱讃するところと爲り、皆共に見んと欲して、共に其の所に來る」と。若し此の三昧を聞かば、上の四番の功德の如し。皆隨喜すること、三世の諸佛菩薩の皆隨喜したまふがごとくせば、復た上の四番の功德よりも勝る。若し是の如き法を修せざれば、無量の重寶を失はん。人、天これが爲に憂悲す。齆人は栴檀

五道鮮潔不受色。
有解此者成大道。
是名佛印。無所貪。無所著。無所求。無所想。所有盡。所欲盡。無所從生。無所可滅。無所壞敗。道要道本。是印二乘不能壞。何況魔耶。云云。『婆沙』明。「新發意菩薩。先念佛色相。相體相業。相果相用。得下勢力。次念佛四十不共法。心得中勢力。次念實相佛。得上勢力。而不著色法二身。」『偈』云。

不貪著色身。法身亦不著。
善知一切法。永寂如虛空。」

勸修者。若人欲得智慧如大海。令無能爲我作師者。於此坐不運神

此〔是〕を解ること有る者は大道を成ず
と。是れを、佛印と名づく。貪る所無く、著はるゝ所無く、求むる所無く、想ふ所無く、所有盡き、所欲盡く。從つて生ずる所無く、滅す可き所無く、壞敗るゝ所無し。道の要、道の本なり。是の印は、二乘も壞つこと能はず、何に況や魔を耶。云云。『婆沙』に明さく「新發意の菩薩は、先に佛の色相、相の體、相の業、相の果、相の用を念じて、下の勢力を得、次に佛の四十の不共法を念じて、心に中の勢力を得、次に實相の佛を念じて、上の勢力を得、而して色法の二身に著はれず」と。『偈』に云はく、

色身に貪〔染〕〔深〕著せず　法身にも亦著はれず
善く一切の法は　永く寂かなること虛空の如しと知る

と。」勸修とは、若し人、智慧は大海の如くにして、能く我が爲に師と作る者無からしめ、此に於て坐つて神通を運ばずして悉く諸佛を見、悉く所說を聞き、悉く能く受け持つことを得んと欲はゞ、常に三昧を行ぜよ。諸の功德に於て、最も第

來者。亦無有是骨。是意作耳。如鏡中像。不外來不中生。以鏡淨故。自見其形。行人色清淨。所有者淸淨。欲見佛卽見佛。見卽問問卽報。聞經大歡喜。其二。自念。佛從何所來。我亦無所至。我所念卽見。心作佛心自見心。見佛心。是佛心是我心見佛。心不自知心。心不自見心。心有想爲癡。心無相是泥洹。是法無可示者。皆念所爲。設有念。亦了無所有。念空耳。其三。『偈』云。

心者不知心。有心不見心。
心起想卽癡。無想卽泥洹。
諸佛從心得解脫。
心者無垢名清淨。

外より來らず、中よりも生ぜざれど、鏡の淨きを以ての故に、自ら其の形を見るが如し。行人の色清淨なれば、所有もの清淨なり。佛を見んと欲すれば、卽ち佛を見る。見ば卽ち問ひ、問へば卽ち報へたまふ。經を聞いて、大に歡喜す。其の二なり。自ら念ふ、佛は何れの所より來る、我も亦至る所無し。我が所念をもつて、卽ち見るなり。心、佛と作り、心自ら心を見、佛の心をも見るなり。是の佛の心は、是れ我が心に佛を見るなり。心は自ら心を知らず、心は自ら心を見ず。心に想有るを、癡と爲し、心に想無きは、是れ泥洹なり。是の法は、示す可きもの無し。皆、念の所爲なり。設ひ念有りとも、亦無所有の空と了る耳。其の三なり。『偈』に云はく、

心は心を(自ら)知らず　心有つて心を見ず
心想を起せば卽(則)ち癡　想(心)無きは卽ち(是れ)泥洹(涅槃)なり
諸佛は心によつて解脫を得たり
心は垢無ければ清淨と名づく
五道は鮮潔くして色を受けず

盡者。是癡人不知。智者曉了。不用身口得佛。不用智慧得佛。何以故。智慧索不可得。自索我了不可得。亦無所見。一切法本無所有。壞本絶本。其一。如夢見七寶。親屬歡樂。覺已追念。不知在何處。如是念佛。又如舍衞有女。名須門。聞之心喜。夜夢從事。覺已念之。彼不來我不往。而樂事宛然。當如是念佛。如人行大澤。飢渇夢得美食。覺已腹空。自念一切所有法皆如夢。當如是念佛。數々念莫得休息。用是念當生阿彌陀佛國。是名如想念。如人以寶倚瑠璃上。影現其中。亦如比丘觀骨。骨起種々光。此無持

となならば、智慧を索めて得可からず、自ら我を索めて了に得可からざればなり。亦所見も無し。一切の法は、本より所有無く、本を壞し、本を絶す。其の一なり。夢に七寶を見て、親屬歡樂すれど、覺め已つて追念するに、何れの處に在るといふことを知らざるが如し。是くの如く、佛を念ぜよ。又舍衞に女有り、須門と名づくと、之を聞いて心に喜び、夜夢のうちに事に從ひ、覺め已つてこれを念ふに、彼も來らず我も往かざるに、樂事宛然たるが如し。當に是くの如く、佛を念ずべし。人、大澤を行くに、飢渇して夢に美食を得、覺め已つて腹空しきが如し。自ら一切所有の法を念ふに、皆夢の如し。當に是くの如く、佛を念ずべし。數々念じて、休息むことを得ること莫れ。是の念を用て、當に阿彌陀佛の國に生るべし。是れを如相念と名づく。人、寶を以て瑠璃の上に倚するに、影其の中に現ずるが如し。亦比丘、骨〔相〕を觀ずるに、骨より種々の光を起すが如し。此れ持ち來れる者も無く、亦是の骨有ることも無し。是れ意の作せる耳。鏡の中の像は、

時。若唱彌陀。卽是唱十方佛功德等。但專以彌陀。爲法門主。擧要言之。歩々聲々念々。唯在阿彌陀佛。3意論止觀者。念西方阿彌陀佛。去此十萬億佛刹。在寶地寶池寶樹寶堂。衆菩薩中央坐說經。三月常念佛。云何念。念三十二相。從足下千輻輪相。一々逆緣。念諸相乃至無見頂。亦應從頂相順緣。乃至千輻輪。令我亦逮是相。又念我當從心得佛。從身得佛。佛不用心得。不用心身得。不用心得佛色。不用色得佛心。何以故。心者佛無心。色者佛無色。故不用色心。得三菩提。佛色已盡。乃至識已盡。佛所說

爲す。要を擧げて之を言はゞ、歩々、聲々、念々、唯阿彌陀佛に在り。3意に止觀を論ずとは、西方の阿彌陀佛を念ぜよ。此を去ること十萬億の佛の刹にして、寶地、寶池、寶樹、寶堂のなかに在し、衆の菩薩の中央に坐して、經を說きたまふ。三月のあひだ常に佛を念ぜよ。云何んが念ずるとならば、三十二相を念ずるなり。足の下の千輻輪の相より、一々に逆に緣じて、諸の相乃至無見頂(相)を念じ、亦應に頂相より、順に緣じて、乃ち千輻輪にまで至るべし。我をして亦是の相に逮ばしめたまへ、と。又、念ぜよ。我當に心によつて佛を得んか、身によつて佛を得んか、と。佛は心を用ても得ず、身を用ても得ず。心を用て佛色を得ず、色を用て佛心を得ず。何を以ての故とならば、心といへば佛には心無く、色といへば佛には色無し。故に色心を用てしては、三菩提を得ず。佛は色已に盡き、乃至識も已に盡く。佛の說きたまふ所の盡くといへるを、癡人は知らず、智者のみ曉らかに了る。身口を用ても佛を得ず、智慧を用ても佛を得ざるなり。何を以ての故

須要期誓願。使我筋骨枯朽。學是三昧不得。終不休息。起大信無能壞者。起大精進無能及者。所入智無能逮者。常與善師從事。終竟三月。不得念世間想欲。如彈指頃。三月終竟。不得臥出。如彈指頃。終竟三月。行不得休息。除坐食左右。爲人說經。不得望衣食。『婆沙』偈云。

　親近善知識。精進無懈怠。
　智慧甚堅牢。信力無妄動。

²口說嘿者。九十日身常行無休息。九十日口常唱阿彌陀佛名無休息。九十日心常念阿彌陀佛無休息。或唱念俱運。或先念後唱。或先唱後念。唱念相繼。無休息

及ぶ者無く、所入の智は、能く逮ぶ者無く、常に善師とともに事に從へ。三月を終竟るまで、世間の想欲を念ふこと、彈指の頃の如きをも得ざれ。三月終竟るまで、臥出すること、彈指の頃の如きをも得ざれ。三月を終竟るまで、〔常に〕行いて、休息むことを得ざれ、坐食と左右とをば除く。人の爲に經を說かんに、衣食を希望することを得ざれ。『婆沙』の偈に云はく、

　善き知識に親近づいて　精進して懈怠〔退〕無く
　智慧甚だ堅牢くして　信力妄りに動かざれ

と。²口の說默とは、九十日のあひだ身には常に行いて休息むこと無く、九十日のあひだ口には常に阿彌陀佛の名を唱へて休息むこと無く、九十日のあひだ心には常に阿彌陀佛を念じて休息むこと無かれ。或は唱と念と俱に運び、或は先づ念じて後に唱へ、或は先づ唱へて後に念じ、唱と念と相ひ繼いで、休息む時無かれ。若し彌陀を唱ふれば、卽ち是れ十方の佛を唱ふると、功德等し。但專ら彌陀を以て、法門の主と

發是勢力。能生三昧。故名住處。初禪少。二禪中。三四多。或少時住名少。或見世界少。或見佛少。故名少。中多亦如是。[1]身開常行。行此法時。避惡知識及癡人。親屬鄕里。常獨處止。不得希望他人。有所求索。常乞食不受別請。嚴飾道場。備諸供具。香餚甘果。澡沐其身。左右出入。改換衣服。唯專行旋。九十日爲一期。須明師善內外律。能開除妨障。於所聞三昧處。如視世尊。不嫌不恚。不見短長。當割肌肉供養師。況復餘耶。承事師如僕奉大家。若於師生惡。求是三昧終難得。須外護如母養子。須同行如共涉嶮。

が故に、少と名づく。中と多も、亦是くの如し。[1]身に常行を開す。此の法を行ずる時は、悪知識及び癡人と、親屬と鄕里とを避け、常に獨り處止し、他人に希望して求索むるところ有ることを得ざれ。常に乞食して、別請を受けざれ。道場を嚴飾り、諸の供具、香餚、甘果を備へよ。其の身を澡(里)沐め、左右出入には、衣服を改め換へよ。唯專ら行き旋つて、九十日を一期と爲し、明師の內外の律に善くして、能く妨障を開除するを須ひよ。所聞の三昧處に於ては、世尊を視たてまつるが如くし、嫌はず恚らず、短長を見ざれ。當に肌の肉を割いても、師に供養すべし。況や復たその餘を耶。師に承事ふること、僕の大家に奉ずるが如くせよ。若し師に於て惡を生ぜば、是の三昧を求むとも、終に得ること難し。外護は、母の子を養ふが如くなるを須ひ、同行は、共に嶮(險)を涉るが如くなるを須ひよ。須らく要期誓願ふべし。我が筋骨をして枯朽せしむとも、是の三昧を學び得ずんば、終に休息せじ、と。大信を起せば、能く壞る者無く、大精進を起せば、能く

矣。

已上迦才。所言十日行者。出『鼓音聲經』『平等覺經』。至次利益門當知。所言九十日行者。『止觀』第二云。

常行三昧者。先明方法。次明勸修。」方法者。身開遮。口說默。意止觀。」此法出『般舟三昧經』。翻爲佛立。佛立三義。一佛威力。二三昧力。三行者本功德力。能於定中。見十方現在佛。在其前立。如明眼人。淸夜觀星。見十方佛。亦如是多。故名佛立三昧。『十住毘婆沙』偈云。

是三昧住處。少中多差別。

如是種々相。亦應須論議。

住處者。或於初禪二三四中間。

の行とは、『止觀』の第二に云はく、

常行三昧とは、先づ方法〔を明し〕、次に勸修〔を明す〕。」方法とは、身の開遮と、口の說默と、意の止觀となり。」此の法は『般舟三昧經』に出づ。翻して佛立と爲す。佛立に、三義あり。一には佛の威力、二には三昧の力、三には行者の本功德力をもつて、能く定の中に於て、十方現在の佛、其の前に在つて立ちたまふを見ること、明眼の人の、淸夜に星を觀るが如し。十方の佛を見るも、亦是くの如く多し。故に佛立三昧と名づく。『十住毘婆沙』の偈に云はく、

是の三昧の住處には　少と中と多の差別あり

是くの如き種々の相をば　皆當に須らく論議すべし

と。

住處とは、或は初禪、二、三、四、中間に於て、是の勢力を發して、能く三昧を生ずるが故に、住處と名づくるなり。初禪は少、二禪は中、三と四とは多なり。或は少時住するを少と名づけ、或は世界を見ること少く、或は佛を見ること少き

慈悲護念。現身令見。便願滿足。若有闕少。華香等事。但一心念。功德威神。將命終時。必得見佛。已上。言前所說功德等者。如來大慈大悲。說法。無礙靜慮。一念能現無邊類身。天眼。天耳。他心智。無失念。無漏離垢。得一切法。自在平等。等功德威神也。『大集賢護經』亦有七日行。如次利益中說。又迦才『淨土論』云。

綽禪師。撿得『經』文。但能念佛。一心不亂。得百萬遍已去者。定得往生。又綽禪師。依『小阿彌陀經』七日念佛。撿得百萬遍也。是故『大集經』『藥師經』『小阿彌陀經』皆勸七日念佛者。此意明

闕少くること有らば、但一心に、功德と威神とを念ぜよ。將に命の終らんとする時、必ず佛を見たてまつることを得ん、と。已上。前に說く所の功德等と言ふは、如來の大慈大悲、說法、無礙の靜慮、一念〔の頃〕に能く無邊〔異〕類の身を現じたまふこと、天眼、天耳、他心智、無失念、無漏離垢、一切法を得、自在平等なる、等の功德と威神となり。『大集賢護經』にも、亦七日の行有り。次の〔念佛〕利益〔門〕の中に說くが如し。又迦才の『淨土論』に云はく、

綽禪師は、『經』文の「但能く念佛すること、一心不亂にして、百萬遍已去を得たる者は、定んで往生することを得」といへるを撿へ得たり。又綽禪師は、『小阿彌陀經』の、七日の念佛に依つて、百萬遍を撿へ得たまへるなり。是の故に、『大集經』『藥師經』『小阿彌陀經』に、皆七日の念佛を勸むるは、此の意明かなり矣。

と。已上は、迦才なり。言ふ所の十日の行とは、『鼓音聲經』『平等覺經』に出づ。次の利益門に至つて、當に知るべし。言ふ所の九十日

佛經』云。『若諸比丘比丘尼。若男女人。犯四根本罪。十惡等罪。五逆罪。及謗大乘。如是諸人。若能懺悔。日夜六時。身心不息。五體投地。如大山崩。號泣雨涙。合掌向佛。念佛眉間。白毫相光。一日至七日。前四種罪。可得輕微。觀白毫毛。闇不見者。應入塔中。觀像眉間白毫。一日至三日。合掌啼泣。』

已上。『觀念門』略抄。『大般若』五百六十八。明七日行云。

若善男子善女人等。心無疑惑。於七日中。澡浴清淨。著新淨衣。華香供養。一心正念。如前所說。如來功德。及大威神。爾時如來。

若しは男女人にして、四の根本罪、十惡等の罪、五逆の罪を犯し、及び大乘を謗らん。是くの如き諸の人、若し能く懺悔すること、日夜六時に、身心息まずし、五體を地に投ずること、大山の崩るゝが如くして、號び泣き涙を雨らし、合掌して佛に向ひ、佛の眉間の白毫相の光を念ずること、一日より七日に至るまでせば、前の四種の罪、輕微なることを得可し。白毫の毛（光）を觀ぜんに、（罪重く）闇くして見えざる者は、應に塔の中に入つて、像の眉間の白毫を觀ずべし。一日より三日に至るまで、合掌して啼び泣けよ」と。

と。已上。『觀念門』より略抄す。『大般若』の五百六十八に、七日の行を明して云はく、

若し善男子、善女人等、心に疑惑無く、七日の中に於て、澡浴して清淨となり、新淨の衣を著け、花香をもつて供養し、一心に正しく、前に說く所の如き、如來の功德、及び大威神を念ずれば、爾の時如來は、慈悲をもつて護念し、身を現じて見せしめ、願をして滿足せしめたまふ。若し花香等の事に、

善者自知。惡者懺悔。酒肉五辛。極發願手不捉。口不喫。若違此語。卽願身口。俱著惡瘡。願誦『阿彌陀經』滿十萬遍。日別念佛一萬遍。誦經日別十五遍。或誦二十遍。三十遍。任力多少。誓生淨土。願佛攝受。又曰。諸行者。但欲今生。日夜相續。專念彌陀佛。專誦『彌陀經』。稱揚禮讃。淨土聖衆莊嚴願生者。除入三昧道場。日別念彌陀佛一萬。畢命相續者。卽蒙彌陀加念。得除罪障。又蒙佛與聖衆。常來護念。既蒙護念。卽得延年。轉長命安樂。因緣一々。具如『譬喩經』『惟無三昧經』『淨度三昧經』等說。又『觀

のは自ら知り、惡しきものは懺悔せよ。酒肉五辛は、誓ひ發願して、手に捉らず、口に喫せざれ。若し此の語に違はゞ、卽ち身も口も、俱に惡瘡を著けんと願へ。〔或は〕願つて『阿彌陀經』を誦すること、十萬遍を滿たし、日別に念佛一萬遍せよ。經を誦すること日別に十五遍、或は誦すること二十遍、三十遍、力の多少に任せて、淨土に生れんと誓ひ、佛の攝受を願へ。又諸の行者に白さく、但今生において、日夜相續して、專ら彌陀佛を念じ、專ら『彌陀經』を誦し、淨土の聖衆と莊嚴とを稱揚し禮讃して、生れんと願ふことを欲せん者、〔又〕三昧道場に入るを除き、日別に彌陀佛を念ずること一萬して、命を畢るまで相續せん者は、卽ち彌陀の加念したまふことを蒙つて、罪障を除くことを得、又佛と聖衆と常に來つて護念したまふことを蒙る。既に護念したまふことを蒙りなば、卽ち年を延ばして壽を轉じ、長命安樂なるを得ん。因緣の一々は、具に『譬喩經』『惟無三昧經』『淨度三昧經』等に說くが如し。又『觀佛經』に云はく「若しは諸の比丘、比丘尼、

須一食長齋。粳餅麁飯。隨時醬菜。儉素節量。於道場中。晝夜束心。相續專念。阿彌陀佛。心與聲相續。唯坐唯立。七日之内。不得睡眠。亦不須。依時禮佛誦經。數珠亦不須捉。但知合掌念佛。念念作見佛想。佛言。想念阿彌陀佛。眞金色身。光明徹照。端正無比。在心眼前。正念佛時。若立卽立。念一萬二萬。若坐卽坐。念一萬二萬。於道場内。不得交頭竊語。晝夜或三時六時。表白諸佛。一切賢聖。天曹地府。一切業道。發露懺悔。一生已來。身口意業。所造衆罪。事々依實懺悔竟。還依法念佛。所見境界。不得輒說。

盡く淨衣を須ひ、鞋韈も亦新淨なるを須ひよ。七日の中、皆須らく一食長齋して、粳餅麁飯し、隨時の醬菜は、儉素節量すべし。道場の中に於ては、晝夜に心を束へ、相續して專〔心〕に阿彌陀佛を念ぜよ。心と聲と相續して、唯坐り、唯立ち、七日の間、睡眠することを得ざれ。亦、時に依つて佛を禮し經を誦むことを須ひず、數珠をも亦捉る須からず。但合掌して佛を念ずと知り、念々に佛を見たてまつるの想を作せ。佛の言はく、阿彌陀佛の眞金色の身に光明徹照し、端正無比にして、心眼の前に在すと想念せよ。正しく念佛する時は、若し立てば、卽ち立ちながら念ずること一萬二萬せよ。若し坐れば、卽ち坐りながら念ずること一萬二萬せよ。道場の内に於ては、頭を交へて竊かに語ることを得ざれ。晝夜、或は三時、六時に、諸佛、一切の賢聖、天曹地府、一切の業道に表白して、一生已來、身口意の業をもつて造れる衆の罪を、發露し懺悔せよ。事實の依に懺悔し竟らば、還た法に依つて念佛せよ。見る所の境界は、輒く說くことを得ざれ。善きも

專念故得往生。當念佛身。三十二相。八十種好。巨億光明徹照。端正無比。在菩薩僧中說法。莫壞色。何以故不壞色故。由念佛色身。故得是三昧。」已上。明念佛三昧法。此文在彼『經』行品中。若覺不見佛。於夢中見之。 欲入三昧道場時。一依佛教方法。先須料理道場。安置尊像。香湯掃灑。若無佛堂。有淨房亦得。掃灑如法。取一佛像。西壁安置。行者等。從月一日。至八日。或從八日。至十五日。或從十五日。至廿三日。或從廿三日。至三十日。月別四時佳。行者等。自量家業輕重。於此時中。入淨行道。若一日乃至七日。盡須淨衣。鞋韈亦須新淨。七日之中。皆

すること有ること莫れ、卽〔則〕ち來生することを得ん、と。佛の言はく、專念するが故に往生することを得るなり。當〔常〕に念ぜよ、佛身には三十二相、八十種好〔有つて〕、巨億の光明徹照し、端正にして比無く、菩薩僧の中に在つて說法したまふことを。色を壞ること莫〔不〕れ。何を以ての故とならば、色を壞らざるが故に、佛の色身を念ずるに由るが故に、是の三昧を得るなり」と。已上。念佛三昧の法を明す。此の文は、彼の『經』の行品の中に在り。若し覺めて佛を見ざれば、夢の中に於て之を見るなり。 三昧の道場に入らんと欲する時は、一ら佛教の方法に依つて、先づ須らく道場を料理ひ、尊像を安置し、香湯をもつて掃き灑ぐべし。若し佛堂無くも、淨房有らば亦得たり。掃き灑ぐこと法の如くし、一の佛像を取つて、西の壁に安置せよ。行者等、月の一日より八日に至り、或は八日より十五日に至り、或は十五日より廿三日に至り、或は廿三日より三十日に至るまで、月別に四時にするは佳し。行者等、自ら家業の輕重を量り、此の時の中に於て、淨行の道に入れ。若しは一日、乃至七日、

彼。隨所聞當念。去此十萬億佛刹。其國名須摩提。一心念之。一日一夜。若七日七夜。過七日已後見之。譬如夢中所見。不知晝夜。亦不知內外。不由在冥中。有所蔽礙故不見。跋陀和。四衆常作是念時。諸佛境界中。諸大山須彌山。其有幽冥之處。悉爲開闢。無所蔽礙。是四衆。不持天眼徹視。不持天耳徹聽。不持神足到其佛刹。不於此間終生彼間。便於此坐見之。佛言四衆。於此間國土。念阿彌陀佛。專念故得見之。卽問。持何法得生此國。阿彌陀佛報言。欲來生者。常念我名。莫得休息。卽得來生。佛言。

し。此を去ること十萬億〔千億萬〕の佛の刹にして、其の國を須摩提と名づく。一心に之を念ずること、一日一夜、若しは七日七夜せよ。七日を過ぎ已つて後、これを見たてまつらん。譬へば、〔人〕夢の中に見るところの、晝夜を知らず、亦內外を知らざるが、冥き中に在つて蔽礙するところ有るに由るが故に見ざるにはあらざるが如し。跋陀和、四衆〔菩薩〕常〔當〕に是の念を作さん時、諸佛の〔國〕境界の中の、諸の大山、須彌山、其の有らゆる幽冥の處は、悉く開闢を爲して、蔽礙するところ無からん。是の四衆〔菩薩〕、天眼を持つて徹し視るにあらず、天耳を持つて徹し聽くにあらず、神足を持つて其の佛の刹に到るにあらず、此の間に終つて彼の間に生るゝにあらず、便ち此の坐に於て之を見るなり、と。佛言はく、四衆〔菩薩〕は此の間の國土に於て、阿彌陀佛を念ずるに、專念するが故に之を見たてまつることを得。卽ち問へ。何なる法を持つてか此の國に生るゝことを得ん、と。阿彌陀佛報へて言はん、來生せんと欲する者は、常〔當〕に我が名を念じて、休息

大文第六。別時念佛者。有二。初明尋常別行。次明臨終行儀。

第一尋常別行者。於日々行法。不能常勇進。故應有時。修別時行。或一二三日。乃至七日。或十日。乃至九十日。隨樂修之。所言一日。乃至七日者。導和尚云。

『般舟三昧經』。「佛告跋陀和。持是行法。便得三昧。現在諸佛。悉在前立。其有比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。如法持戒完具。獨一處止。念西方阿彌陀佛。今現在

大文第六に別時念佛

とは、二有り。初に尋常の別行を明し、次に臨終の行儀を明す。

第一に尋常の別行

とは、日々の行法に於ては、常に勇進すること能はず。故に應に時有つて、別時の行を修すべし。或は一二三日乃至七日、或は十日乃至九十日、樂に隨つてこれを修せよ。」言ふところの一日乃至七日とは、導和尚の云はく、

『般舟三昧經』に「佛、跋〔颰〕陀和に告げたまはく、是の行法を持てば、便ち三昧を得、現在の諸佛、悉く前に在つて立ちたまふ。其れ比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷有つて、如法に〔修行し〕、持戒完く具はり、獨り一處に止まり、西方の阿彌陀佛を念ぜば、今現に彼に在す。聞く所に隨つて、當に念ずべ

臨命終時。正念現前。

已上。業由願轉。故云隨願往生。」總而言之。護三業是止善。稱念佛是行善。菩提心及願。扶助此二善。故此等法爲往生要。其旨出『經』『論』。不能具之。

三には薫習熟利し、命終の時に臨んで正念現前す。と。已上。業は願に由つて轉ずるが故に、願に隨つて往生すと云ふなり。」總じて之を言はゞ、三業を護るは是れ止善にして、佛を稱念するは是れ行善なり。菩提心及び願は、此の二善を扶助す。故に此れ等の法を往生の要と爲す。其の旨『經』『論』に出でたり。これを具にすること能はず。

師所釋。

第七總結要行者。

問。上諸門中。所陳既多。未知何業。爲往生要。

答。大菩提心。護三業。深信至誠常念佛。隨願決定生極樂。況復具餘諸妙行。

問。何故此等。爲往生要。

答。菩提心義。如前具釋。三業重惡。能障正道。故須護之。往生之業。念佛爲本。其念佛心。必須如理。故具深信。至誠。常念三事。常念有三益。如迦才云。

一者諸惡覺觀。畢竟不生。亦得消於業障。二者善根增長。亦得種於見佛因緣。三者薰習熟利。

第七に總結要行とは、

問ふ。上の諸門の中に、陳ぶるところ既に多し。未だ知らず、何れの業をか往生の要と爲る。

答ふ。大菩提心と、三業を護ると、深く信じ誠を至して常に佛を念ずるとは、願に隨つて決定して極樂に生る。況や復た、餘の諸の妙行を具せんをや。

問ふ。何が故に、此れ等を往生の要と爲る。

答ふ。菩提心の義は、前に具に釋せしが如し。三業の重惡は能く正道を障ふ、故に須らく之を護るべし。往生の業には、念佛をもつて本と爲す。其の念佛の心は、必ず須らく理の如くすべし。故に深く信ずると、誠を至すと、常に念ずるとの三事を具するなり。常に念ずるに三の益有ること、迦才の云ふが如し。

一には諸惡の覺觀畢竟して生ぜず、亦業障を消すことを得、

二には善根增長して、亦佛を見るの因緣を種うることを得、

說是不二法。

已上。

問。何故觀空。魔不得便。

答。彼『論』云。

一切法中皆不著。不著故無違錯。無違錯故魔不能得其便。譬如人身無瘡。雖臥毒屑中。毒亦不入。若有小瘡則死。

又『大集經』月藏分中。他化天魔王。發菩提心。受記發願云。

我等護念。現在未來。諸佛弟子。與第一義。相應住者。供給供養。若不順我教。惱亂行者。卽令彼類。得種々病。退失神通。

取意。明知。實魔不得便。權魔護念耳。前二種治。皆有證據。故不更引諸

と。已上。

問ふ。何が故に空を觀ぜば、魔便を得ざるや。

答ふ。彼の『論』に云はく、

一切法の中に〔於て〕皆著はれず。著はれざるが故に違錯無く、違錯無きが故に魔其の便を得ること能はず。譬へば、人の身に瘡無くんば、毒屑の中に臥すと雖も、毒も亦入らず、若し小瘡有らば、則ち死するが如し。

と。又『大集經』の月藏分の中に、他化天魔王、菩提心を發し、記を受け、願を發して云はく、

我等は、現在と未來の諸佛の弟子の、第一義と相應して住せん者をば護念し、供給し供養せん。若し我が教に順はずして、行者を惱亂せん者は、卽ち彼の類をして、種々の病を得しめ、神通を退失はしめん。

と。取意す。明かに知んぬ、實魔は便を得ずして、權魔は護念する耳。前の二種の治は、皆證據有り。故に、更に諸師の所釋を引かず。

理無二故。而諸衆生。妄想夢未覺。不解一實相。生是非想。輪廻五道。願令衆生。入平等慧。如是深起無緣大悲。乃至雖觀佛妙色身。入三空門。不應執著。如熱金丸。雖見色妙。不可手觸。況於餘事。生著生慢。作是觀時。魔不沮壞。故『大般若經』亦說其治云。

一觀諸法皆畢竟空。二不棄捨一切有情。

又『大論』云。

十二入皆是魔網。虛狂不實。於此中生六種識。亦是魔網虛狂。何者是實。唯不二法。無眼無色。乃至無意無法。等是名實。令衆生離十二入。故常以種々因緣。

だ覺めず、一實の相を解らざれば、是非の想を生じて五道に輪廻す。願はくば衆生をして、平等の慧に入らしめん、と。是くの如く、深く無緣の大悲を起し、乃至佛の妙色身を觀ずと雖も、三空門に入つて執著す應からず。熱金丸の色の妙なるを見ると雖も、手觸る可からざるが如し。況や餘の事に於て、著を生じ、慢を生ぜんや。是の觀を作す時、魔も沮壞らず。故に『大般若經』に、亦其の治を說いて云はく、

一には諸法は皆畢竟空なりと觀じ、二には一切の有情を棄捨せず。

と。又『大論』に云はく、

十二入は、皆是れ魔網にして、虛誑不實なり。此の中に於て六種の識を生ずるも、亦是れ魔網にして虛誑なり。何者か是れ實とならば、唯不二の法あるのみ。眼も無く色も無く、乃至意も無く法等も無し、是れを實と名づく。衆生をして十二入を離れしめん〔が爲の〕故に、常に種々の因緣を以て、是の不二の法を說く。

常爲護念。
又『般舟經』云。
若閻叉鬼神。壞人禪奪人念。設欲中是菩薩者。終不能中。
云云。餘如下利益門。」二理念者。如『止觀』第八云。
知魔界如。佛界如。一如無二如。平等一相。不以魔爲戚。以佛爲欣。安之實際。乃至魔界卽佛界。而衆生不知。迷於佛界。横起魔界。於菩提中。而生煩惱。是故起悲。欲令衆生。於魔界卽佛界。於煩惱卽菩提。是故起慈悲。
已上。應作是念。魔界佛界。及自他界。同空無相。此諸法無相。是卽佛眞體。當知。魔界卽是佛身。亦卽我身。

念したまふ所と爲る。
と。又『般舟經』に云はく、
若し閻叉鬼神、人の禪を壞り、人の念を奪はんも、設し是の菩薩を中らんと欲せば、終に中ること能はず。
と。云云。餘は、下の利益門の如し。」二に理の念とは、『止觀』の第八に云ふが如し。
魔界の如と、佛界の如とは、一如にして二如無く、平等一相なりと知り、魔を以て戚と爲し、佛を以て欣と爲さず、之を實際に安く。乃至魔界は卽ち佛界なれども、衆生知らずして、佛界に迷うて横に魔界を起し、菩提の中に於て煩惱を生ず。是の故に悲を起す。衆生をして、魔界卽ち佛界なり、煩惱卽ち菩提ならしめんと欲す。是の故に慈を起す。
と。已上。應に是の念を作すべし。魔界も佛界も、及び自他の界も、同じく空無相なり。此の諸法の無相は、是れ卽ち佛の眞體なり。當に知るべし、魔界は卽ち是れ佛身にして、亦卽ち我が身なり、理に二無きが故に。而れども諸の衆生は、妄想の夢未

問。種々魔事。能障正道。或令發病患。或令失觀念。或令得邪法。所謂若有見若無見。若明了若昏闇。若邪定若攀緣。若悲若喜。若苦若樂。若禍若福。若惡若善。若憎人若戀著。若心强若心軟。如是等事。若過若不及。皆是魔事。悉障正道。何以對治之。

答。治道雖多。今但應依。念佛一治。此中亦有事理。一事念者。言行相應。一心念佛時。諸惡魔不能沮壞。

問。何故不壞。

答。佛護念故。法威力故。不能沮壞。如『大般若』。對治魔事。出番々二法。其中云。

一如所言。皆悉能作。二爲諸佛。

とは、

問ふ。種々の魔事、能く正道を障ふ。或は病患を發さしめ、或は觀念を失はしめ、或は邪法を得しむ。謂はゆる、若しは有の見若しは無の見、若しは明了若しは昏闇、若しは邪定若しは攀緣、若しは悲若しは喜、若しは苦若しは樂、若しは禍若しは福、若しは惡若しは善、若しは憎人若しは戀著、若しは心强若しは心軟。是くの如き等の事、若しは過ぎ若しは及ばざる、皆是れ魔事にして、悉く正道を障ふ。何を以てかこれを對治せん。

答ふ。治道多しと雖も、今は但應に念佛の一治に依るべし。此の中に、亦事と理と有り。一に事の念とは、言行相應して一心に念佛する時、諸の惡魔沮壞すること能はず。

問ふ。何が故に壞れざるや。

答ふ。佛の護念したまふが故に、法の威力の故に、沮壞すること能はず。『大般若』に、魔事を對治するに、番々の二法を出せるが如し。其の中に云はく、

一には、所言の如く皆悉く能く作し、二には、諸佛の常に護

十方。說偈言。

我悔一切過。勸明衆道德。

歸命禮諸佛。令得無上慧。

佛語阿難。彌勒菩薩。以是善根。

得於無上。正眞之道。

已上。

問。修此懺悔。勸請等事。得幾處福。

答。『十住論』偈云。

若於一時中。福德有形者。

恒河沙世界。乃自不容受。

第六對治魔事者。

りたまはく「彌勒菩薩は、晝夜各ゝ三たび、衣を正して體に束ね、手を叉せ、右〔下〕膝を地に著け、十方に向つて、〔此の〕偈を說いて言へり。

我一切の過を悔い　勸めて衆の道德を助け

諸佛を歸命禮したてまつる　無上の慧を得さしめよ

と。佛、阿難に語りたまはく「彌勒菩薩は、是の善權を以て、無上正眞の道を得たり」と。

と。已上。

問ふ。此の懺悔と、勸請等の事を修せば、幾ばくの處の福を得るや。

答ふ。『十住論』の偈に云はく、

若し一時に於て行ぜん　福德の形有らば

恒河沙の世界も　乃ち自ら受け容れざらん

と。

第六に對治魔事

所有布施福。持戒修禪行。
從身口意生。去來今所有。
習行三乘人。具足三乘者。
一切凡夫福。皆隨而歡喜。
已上。又常行三昧。法華三昧。眞言教等。皆各有『文』。隨意用之。若樂略者。可依『彌勒菩薩本願經』一偈。
『經』云。
佛語阿難。彌勒菩薩。本求道時。不持耳鼻。頭目手足。身命珍寶。城邑妻子。及以國土。布施與人。以成佛道。但以善根。安樂之行。得致無上。正眞之道。阿難白佛。彌勒菩薩。以何善根。得致佛道。佛語阿難。彌勒菩薩。晝夜各三。正衣束體叉手。右膝著地。向於

十方の一切の佛　若し壽命を捨てんと欲したまはゞ
我今頭面に禮しまつり　勸請して久しく住まらしめん
と。隨喜の『偈』に云はく、
有らゆる布施の福も　持戒と修禪の行も
身口意より生ずる　去來今の所有を
三乘を習ひ行ふ人の　三乘を具足せる者の
一切凡夫の福を　皆隨つて歡喜せん
と。已上。又常行三昧、法華三昧、眞言教等には、皆各ゝ『文』有り。意に隨つてこれを用ひよ。若し略を樂ふ者は、『彌勒菩薩本願經』の一偈に依る可し。『經』に云はく、
佛、阿難に語りたまはく「彌勒菩薩の、本と道を求めし時、耳鼻、頭目、手足、身命、珍寶、城邑、妻子、及び國土を持つて、布施して人に與へ、以て佛道を成ぜしにはあらず。但善權〔方便〕安樂の行を以て、無上正眞の道を、致すことを得たり」と。阿難、佛に白さく「彌勒菩薩は、何なる善權を以てか、佛道を致すことを得たるや」と。佛、阿難に語〔言〕

喜。勸請三事。
略抄。五念門中。禮拜之次。應修此事。
『十住婆沙』懺悔偈云。
十方無量佛。所知無不盡。
我今悉於前。發露諸黑惡。
三三合九種。從三煩惱起。
今身若前身。是罪盡懺悔。
於三惡道中。若應受業報。
願於今身償。不入惡道受。
三三合九種者。身口意各有。現生後自作。教使。見作隨喜也。業從三煩惱起者。三界。三毒。三品煩惱。勸請『偈』云。
十方一切佛。現在成佛者。
我請轉法輪。安樂諸衆生。
十方一切佛。若欲捨壽命。
我今頭面禮。勸請令久住。
隨喜『偈』云。

別時の懺悔なり。然れども、行者は常に當に三事を修すべし。
『大論』に云ふが如し。
菩薩は必ず、須らく晝夜六時に、懺悔と隨喜と勸請との、三事を修すべし。
と。略抄す。五念門の中、禮拜の次に、應に此の事を修すべし。
『十住婆沙』の懺悔の偈に云はく、
十方の無量の佛は　知りたまふ所盡さざる無し
我今悉く前に於て　諸の黑惡をば發露せん
三三合して九種あり　三の煩惱より起る
今身若しは前〔先〕身の　是の罪を盡く懺悔せん
三惡道の中に於て　若し受く應き業報あらば
願はくば今身に償ひて　惡道に入つて受けざらん
と。「三三合して九種あり」とは、身と口と意とに、各〻〔順〕現と〔順〕生と〔順〕後業と有り。「三の煩惱より起る」とは、三界の煩惱なり。勸請の『偈』に云はく、
十方の一切の佛　現在成佛〔道〕したまへり
我轉法輪を請うて　諸の衆生を安樂ならしめん

救。

答。『觀經』。十念能滅五逆。『觀佛經』。念佛一相。能滅十惡五逆。『大經』闍王懺除。殺父之罪。『般若經』。讀誦解說。能滅殺害。三界衆生之罪。不墮惡趣。『華嚴經』。誦普賢願。一念能滅。十惡五逆。明知。大乘實說。無不滅罪。然此『論』文。或是轉重輕受。非全不受。名之不除。或是隨轉理門之說。又感禪師。會『十輪經』云。

如來密意。欲令畏罪。

等。云云。餘如下料簡念佛相門。」此等皆是。別時懺悔。然行者常。當修三事。如『大論』云。

菩薩必須。晝夜六時。修懺悔。隨

と云ひ、又『十輪經』には

十惡の輪罪を造れば、一切の諸佛の、救ふこと能はざる所なり。

と說くや。

答ふ。『觀經』には、十念して能く五逆〔罪〕を滅し、『觀佛經』には、佛の一相を念じて、能く十惡、五逆〔の罪〕を滅し、『大經』には、〔阿〕闍〔世〕王の、父を殺せる罪を懺い除き、『般若經』には、讀誦し解說して、能く三界の衆生を殺害せる罪を滅して、惡趣に墮ちず、『華嚴經』には、普賢の願を誦して、一念に能く十惡、五逆〔の罪〕を滅す、と。明かに知る、大乘の實說は、罪を滅せずといふこと無し。然らば此の『論』の文は、或は是れ重き〔罪〕を轉じて輕く受け、全く受けざるに非ざるを、「除かず」と名づけ、或は是れ隨轉理門の說ならん。又感禪師は、『十輪經』を會して云はく、

如來は密意をもつて、罪を畏れしめんと欲したまふなり。

等と。云云。餘は、下の料簡念佛相門の如し。」此れ等は、皆是れ

乃至 若夜後分。有所犯戒。於日初分。不離一切智心。如是菩薩。戒身不壞。以是義故。菩薩乘人。持開遮戒。設有所犯。不應失念。妄生憂悔。自惱其心。於聲聞乘。有所犯者。便爲破壞。聲聞淨戒。

云云。一切智心者。準餘處說。是第一義空相應心。或可。是願求佛種智心也。

問。若修懺悔。能滅衆罪。云何『大論』卌六云。

戒律中戒。雖復細微。懺悔卽清淨。犯十善戒。雖復懺悔。三惡道罪不除。

又『十輪經』說。

造十惡輪罪。一切諸佛。之所不

犯す所有らんも、日の後分に於て、一切智の心を離れずば、是くの如き菩薩は、戒身壞れず。乃至 若し夜の後分に、戒を犯す所有らんも、日の初分に於て、一切智の心を離れずば、是くの如き菩薩は、戒身壞れず。是の義を以ての故に、菩薩乘の人は、開遮〔通〕の戒を持つなり。設ひ犯す所有らんも、應に失念して妄に憂悔を生じ、自ら其の心を惱ますべからず。聲聞乘に於て、犯す所有る者は 便ち聲聞の淨戒を、破壞すと爲す。

と。云云。一切智の心とは、餘處の說に準へば、是れ第一義空と相應する心なり。或はいふ可し、是れ佛の種智を願求する心なりと。

問ふ。若し懺悔を修して、能く衆の罪を滅すとせば、云何んぞ『大論』の四十六には

戒律の中の戒は、復た細微なりと雖も、懺悔すれば、卽〔則〕ち清淨なり。十善戒を犯せば、復た懺悔すと雖も、三惡道の罪除かず。

一切我說。名之爲犯。迦葉。五無間罪。若不堅住。堅執堅著。生於見者。我不說彼。名曰爲犯。況復餘少。不善業道。迦葉。我不以不善法。而得菩提。亦不以善法。而得菩提。乃至解知煩惱。從因緣生。名得菩提。迦葉。云何爲解知。從因緣所生煩惱。解知是無自性。起法是無生法。如是解知。名得菩提。

又『決定毘尼經』云。

於大乘中。發起修行。日初分時。有所犯戒。於日中分。不離一切智心。如是菩薩。戒身不壞。若日中分。有所犯戒。於日後分。不離一切智心。如是菩薩。戒身不壞。

し汎爾く判ぜば、理懺をもつて勝れたりと爲す。故に『如來祕密藏經』の下卷に、佛、迦葉に告げて言はく、

若し少かの不善をも、若し其れ堅住し、堅執し、堅著せば、一切我說いて、これを名づけて犯と爲す。迦葉、五無間罪をも、若し堅住し、堅執し、堅著して見を生ぜずば、我彼を說いて、名づけて犯と爲すとは曰はず。況や、復た餘の少〔小〕かの不善の業道をや。迦葉、我不善法を以て、而も菩提を得ざりき。亦善法を以ても、而も菩提を得ざりき。乃至 煩惱は因緣より生ずと解知するを、菩提を得と名づく。迦葉、云何なるをか、因緣より生ずる所の煩惱を解知すと爲ん。是れ自性無くして起れる法は、是れ無生の法なりと解知す。是くの如く解知するを、菩提を得と名づく。

と。又『決定毘尼經』に云はく、

大乘の中に於て、發起し修行せんものは、日の初分の時に、戒を犯す所有らんも、日の中分に於て、一切智の心を離れずば、是くの如き菩薩は、戒身壞れず。若し日の中分に、戒を

問。如是懺悔。有何勝德。
答。『心地觀經』偈云。
在家能招煩惱因。
出家亦破淸淨戒。
若能如法懺悔者。
所有煩惱悉皆除。
乃至
懺悔能出三界獄。
懺悔能開菩提華。
懺悔能見佛大圓鏡。
懺悔能至於寶所。
問。此中何者爲最勝耶。
答。若約一人。順機爲勝。若汎爾判。
理懺爲勝。故『如來祕密藏經』下卷。
佛告迦葉言。
若少不善。若其堅住。堅執堅著。

と。已上。諸の餘(このほか)の空、無相等の觀も、これに準じて、皆應(まさ)に念佛三昧に攝入(い)るべし。
問ふ。是くの如き懺悔には、何(いか)なる勝れたる德有りや。
答ふ。『心地觀經』の偈に云はく、
在家は能く煩惱の因(たね)を招き
出家も亦淸淨の戒を破す
若し能く如法に懺悔する者は
有らゆる煩惱悉く皆除(のぞ)かん
乃至
懺悔は能く三界の獄を出で
懺悔は能く菩提の華を開き
懺悔は佛の大圓鏡を見
懺悔は能く寶所に至る
と。
問ふ。此の中において、何者(いづれ)を最も勝(すぐ)れたりと爲(す)る耶。
答ふ。若し一人に約せば、機に順へるを勝れたりと爲す。若

問。眞觀念佛既能滅罪。何故更修理懺悔耶。

答。誰言一一修之。但隨意樂。何況觀衆罪性空無所有。卽是眞實念佛三昧。如『華嚴』偈云。

現在非和合。未來亦復然。
一切法無相。是卽佛眞體。

『佛藏經』念佛品云。

見無所有。名爲念佛。見諸法實相。名爲念佛。無有分別。無取無捨。是眞念佛。

已上。諸餘空無相等觀。準之皆應攝入念佛三昧、

願はくば我早く眞性の源を悟り
速かに如來の無上道を證せん

と。

問ふ。直佛を觀念せば、既に能く罪を滅す。何が故に更に理の懺悔を修する耶。

答ふ。誰か言ふ、一一にこれを修せよと。但、意の樂に隨はんのみ。何に況や、衆の罪は性空しくして、所有無しと觀ずるは、卽ち是れ眞實の念佛三昧なるをや。『華嚴』の偈に云ふが如し。

現在は和合に非ず　去來も亦復た然り
一切法は無相なり　是れ則ち佛の眞體なり

と。『佛藏經』の念佛品に云はく、

所有無しと見るを、名づけて佛を念ずると爲し、諸法の實の相を見るを、名づけて佛を念〔見〕ずると爲す。分別有ること無く、取ることも無く、捨つることも無きは、是れ眞に佛を念ずるなり。

一切諸罪性皆如。
顚倒因緣妄心起。
如是罪相本來空。
三世之中無所得。
非內非外非中間。
性相如如倶不動。
眞如妙理絕名言。
唯有聖智能通達。
非有非無非有無。
非不有無離名相。
周遍法界無生滅。
諸佛本來同一體。
唯願諸佛垂加護。
能滅一切顚倒心。
願我早悟眞性源。
速證如來無上道。

五逆〔の罪〕を滅し、七遍すれば、能く根本の罪を滅す。『儀軌』に出づ。」或は復た『心地觀經』に、理の懺悔を明して云はく、

一切諸の罪は性皆如なり
顚倒の因緣、妄心より起る
是くの如き罪相は本來空しく
三世の中に得る所無し
內に非ず外に非ず中間にも非ず
性相は如如にして倶に動ぜず
眞如の妙理は名言を絕ち
唯聖智有つて能く通達す
有に非ず無に非ず有無にも非ず
有無ならざるにも非ず名相を離れ
法界に周遍して生滅無く
諸佛は本來同一體なり
惟願はくば諸佛加護を垂れて
能く一切顚倒の心を滅したまへ

投地。遍身流汗。歸命彌陀佛。念眉間白毫相。發露涕泣。應作此念。過去空王佛。眉間白毫相。彌陀尊禮敬。滅罪今得佛。我今禮彌陀佛。亦當復如是。須隨罪根。哀請佛光。謂放檀光滅慳蔽罪。放戒光滅毀禁罪。放忍辱光滅瞋恚罪。放精進光滅懈怠罪。放禪定光滅散亂罪。放智慧光滅愚惑罪。如是若一日若至七日。除百千劫煩惱重障。或須臾間。坐禪入定。念佛白毫。令心了了。無謬亂想。分明正住。注意不息。除却九十六億。那由他等劫。生死之罪。或一心念彼佛神呪。一遍能滅。四重五逆。七遍能滅。根本之罪。出『儀軌』。或復『心地觀經』明理懺悔云。

と。已上。」懺〔悔〕の法は一に非ず。樂に隨つてこれを修せよ。
或は五體を地に投じ、遍身に汗を流して、彌陀佛に歸命し、眉間の白毫相を念じて、〔罪を〕發露し涕泣して、應に此の念を作すべし「過去の空王佛の、眉間の白毫相を、彌陀尊禮敬〔敬禮〕し、罪を滅して今佛を得たまへり。我今彌陀佛を禮したてまつりて、亦當に復た是くの如くならん」と。須らく罪根〔相〕に隨つて、佛の光を哀請すべし。謂はく「檀の光を放つて、慳蔽の罪を滅したまへ。戒の光を放つて、毀禁の罪を滅したまへ。忍辱の光を放つて、瞋恚の罪を滅したまへ。精進の光を放つて、懈怠の罪を滅したまへ。禪定の光を放つて、散亂の罪を滅したまへ。智慧の光を放つて、愚惑の罪を滅したまへ」と。是くの如くして、若しは一日、若しは七日に至らば、百千劫の煩惱の重き障を除く。或は須臾の間も、坐禪入定して、佛の白毫を念じ、心をして了了ならしめ、謬亂の想無く、分明に正住して、意を注いで息まずば、九十六億那由他等の劫の、生死の罪を除却く。
或は一心に彼の佛の神呪を念ずること、一遍すれば、能く四重

此の觀佛三昧は、是れ一切衆生の、罪を犯せる者の藥なり、
戒を破れる者の護りなり。
と云へるや。
答ふ。戒を破れる已後に、前の罪を滅せんが爲に、一心に念佛す。此れが爲に藥と名づく。若し常に毀犯せば、三昧成ずること難きなり。

第五に懺悔衆罪

第五懺悔衆罪者。設爲煩惱。迷亂其心。毀禁戒者。應不過日。營修懺悔。如『大經』十九云。

若覆罪者。罪則增長。發露懺悔。罪卽消滅。

又『大論』云。

身口意惡不悔。欲見佛。無有是處。

已上。懺法非一。隨樂修之。或五體

とは、設し煩惱の爲に、其の心を迷亂して、禁戒を毀らば、應に日を過さずして、懺悔を營み修すべし。『大經』の十九に云ふが如し。

若し罪を覆ふ者は、罪則ち增長すれど、發露して懺悔〔愧〕するものは罪卽〔則〕ち消滅す。

と。又『大論』に云はく、

身や口や意の惡を悔いずして、佛を見たてまつらんと欲すれば、是の處有ること無し。

云云。我今未有智火分。故不能解煩惱氷成功德水。願佛哀愍我。如其所得法。定慧力莊嚴。以此令解脫。如是念已。擧聲念佛。而請救護。如『止觀』云。

　如人引重。自力不前。假傍救助。則蒙輕擧。行人亦爾。心弱不能排障。稱名請護。惡緣不能壞。

已上。若惑覆心。不令欲修。通別對治。須知其意。常爲心師。不師於心。

問。若破戒者。三昧不成。云何『觀佛經』云。

　此觀佛三昧。是一切衆生。犯罪者藥。破戒者護。

答。破戒已後。爲滅前罪。一心念佛。爲此名藥。若常毀犯。三昧難成。

　煩惱と菩提とは體二つ無く
　生死と涅槃とは異處に非ず

と。云云。我今未だ智火の分有らざるが故に、煩惱の氷を解いて功德の水と成すこと能はず。願はくば、佛我を哀愍して、其の得たまへる法の如くし、定と慧との力をもつて莊嚴し、此れを以て解脫せしめたまへ」と。是くの如く念じ已つて、聲を擧げて念佛し、救護を請へ。『止觀』に云ふが如し。

　人の重きものを引くに、自力をもつて前まずば、傍の救助を假つて、則ち輕く擧ぐることを蒙るが如し。行人も亦爾り。心弱くして障を排ふこと能はずば、稱名して護りを請へば、惡緣も壞ること能はず。

と。已上。若し惑、心を覆うて、通別の對治を修することを欲せしめざらば、須らく其の意を知つて、常に心の師と爲るべし。心をば師とせざれ。

問ふ。若し破戒の者は、三昧成ぜずんば、云何にして『觀佛經』には

自滅。故『心地觀經』偈云。
如是心法本非有。
凡夫執迷謂非無。
若能觀心體性空。
惑障不生便解脫。
云云。又『中論』第一偈云。
諸法不自生。亦不從他生。
不共不無因。是故知無生。
應依此『偈』用多四句。三者應念。
今我惑心具足。八萬四千塵勞門。
彼彌陀佛具足。八萬四千波羅蜜門。
本來空寂。一體無礙。貪欲卽是道。
恚癡亦如是。如氷與水。性非異處。
故『經』云。
煩惱菩提體無二。
生死涅槃非異處。

ず、亦中間にも非ず。都て處所無く、皆幻有の如し。唯惑心のみに非ず、觀心も亦爾り。是くの如く推求せば、惑心自ら滅す。故に『心地觀經』の偈に云はく、

是くの如き心法は本より有らざれど
凡夫執迷うて無きに非ずと謂ふ
若し能く心の體性空しと觀ずれば
惑障生ぜずして便ち解脫す

と。云云。又『中論』の第一の偈に云はく、

諸の法は自より生ぜず　亦他より生ぜず
共にもあらず因無きにもあらず　是の故に無生なりと知る

と。應に此の『偈』に依つて、多くの四句を用ふべし。三には、應に念ふべし「今我が惑心に具足せる、八萬四千の塵勞門と、彼の彌陀佛の具足したまへる、八萬四千の波羅蜜門とは、本來空寂にして、一體無礙なり。貪欲は卽ち是れ道なり、恚癡も亦是くの如し。氷と水との、性異なる處に非ざるが如し。故に『經』に云はく、

菩薩修淨觀。執意如金剛。
毀譽及惱亂。心意不傾動。
解空本來淨。無彼此中間。
二通用四句。推求一切。煩惱根源。謂此煩惱。爲由心生。爲由緣生。爲共生。爲離生。若由心生者。更不待緣。或於龜毛兎角。應生貪瞋。若由緣生者。應不用心。或令眠人。生於煩惱。若共生者。未共各無。共時安有。譬如二沙。雖合無油。或心境俱合。那有不生煩惱時。若離生者。既離心離緣。那忽生煩時。或虛空離二。常應生煩惱。種種觀察。既無實生。無所從來。亦無所去。非內非外。亦非中間。都無處所。皆如幻有。非唯惑心。觀心亦爾。如是推求。惑心

菩薩の淨觀を修せんとする　執意は金剛の如く
毀譽及び惱亂に　心意傾動かさるゝことなくば
空を解ること本來淨く　彼・此・中間もあること無けん
と。二には、通じて四句を用つて、一切煩惱の根源を推求せよ。謂はく、此の煩惱は心に由つて生ずとや爲ん、緣に由つて生ずとや爲ん、〔心と緣とを〕共にして生ずとや爲ん、〔心と緣とを〕離れて生ずとや爲ん、と。若し心に由つて生ずとせば、更に緣を待たず。或は龜の毛や兎の角に於て、貪瞋を生ず應し。若し緣に由つて生ずとせば、心を用ひず。或は眠れる人をして、煩惱を生ぜしむ應し。若し共にして生ずとせば、未だ共ならざるとき各ゝ無くして、共なる時に安んぞ有らん。譬へば、二の沙を合すと雖も、油無きが如し。或は心と境と俱に合つて、那ぞ煩惱を生ぜざるの時有るや。若し離れて生ずとせば、既に心を離れ緣を離るゝに、那ぞ忽ちに煩惱を生ぜん。或は虛空は二を離る、常に應に煩惱を生ずべし。種種に觀察するに、既に實の生無し。從つて來る所も無く、亦去る所も無し。內に非ず外に非

略抄。別相治如是。今加三通治。一能了惑起。驚覺其心。呵責煩惱。如驅惡賊。防護三業。如擎油鉢。如『六波羅蜜經』云。

結跏趺坐。正念觀察。以大悲心。而爲屋宅。智慧爲鼓。以覺悟杖。而扣擊之。告諸煩惱。汝等當知。諸煩惱賊。從忘想生。我法王家。有善事起。非汝所爲。汝宜速出。若不時出。當斷汝命。如是告已。諸煩惱賊。尋自散。次於自身。善起防護。不應放逸。

又『菩薩處胎經』偈云。

如彼犯罪人。擎持滿鉢油。
若棄油一渧。罪交入大辟。
左右作伎樂。懼死不顧視。

と。略抄す。別相の治は、是くの如し。今、三の通〔相〕の治を加へん。一には、能く惑の起を了して、其の心を驚覺し、煩惱を呵責すること、惡賊を驅るが如くし、三業を防護すること、油鉢を擎ぐるが如くせよ。『六波羅蜜經』に云ふが如し。

結跏趺坐して、正念觀察し、大悲心を以て屋宅と爲し、智慧を鼓と爲して、覺悟の杖を以てこれを扣擊き、諸の煩惱に告げよ「汝等當に知るべし、諸の煩惱の賊は、妄想より生ず。我が法王〔身〕の家に、善事の起ること有るも、汝が所爲に非ず。汝、宜しく速かに出づべし。若し時に出でずんば、當に汝が命を斷つべし」と。是くの如く告げ已らば、諸の煩惱の賊、尋いで自ら〔退〕散せん。次に自身に於て、善く防護を起し、應に放逸すべからず。

と。又『菩薩處胎經』の偈に云はく、

彼の罪を犯せる人の　鉢に滿てる油をば擎げ持ち
若し油の一渧を棄すすら　罪大辟に交り入れば
左右に伎樂を作さんをも　死を懼れて顧り視ざるがごと

法。中生心數。惡念思惟。從緣惡法。中生心數。善能破惡。故應念報佛。譬如醜陋。少智之人。在端正大智人中。卽自鄙恥。惡亦如是。在善心中。則恥愧自息。緣佛功德。念念之中。滅一切障。三治境界逼迫障者。應念法佛。法佛者卽是。法性平等。不生不滅。無有形色。空寂無爲。無爲之中。旣無境界。何者是逼迫之相。知境界空故。卽是對治。若念卅二相。卽非對治。何以故。是人未緣相時。已爲境界惱亂。而更取相者。因此著。魔狂亂其心。今觀空破相。除諸境界。在心念佛。功德無量卽滅重罪。

らば、此の佛の功德を念ずるは、勝善法を緣ずる中より生ずる心數なれども、惡念思惟は、惡法を緣ずる中より生ずる心數なり。善は能く惡を破るが故に、應に報佛を念ずべし。譬へば、醜陋少智の人の、端正大智の人の中に在れば、卽ち自ら鄙恥するが如し。惡も亦是くの如し。善心の中に在れば、則ち恥愧して自ら息む。佛の功德を緣ずれば、念念の中に、一切の障を滅す。三に境界逼迫の障を治せんには、應に法佛を念ずべし。法佛は、卽ち是れ法性平等にして、生ぜず滅せず、形色有ること無く、空寂にして無爲なり。無爲の中には、旣に境界無ければ、何者か是れ逼迫の相ならん。境界の空なることを知るが故に、卽ち是れ對治なり。若し三十二相を念ずれば、卽ち對治に非ず。何を以ての故とならば、是の人未だ相を緣ぜざる時、已に境界の爲に惱亂せらる。而るを更に相を取らば、此の著に因つて、魔其の心を狂亂す。今空を觀じて相を破せば、諸の境界を除き、心を佛の功德無量なることを念ずるに在けば、卽ち重き罪を滅す。

起。既爾以何方便治之。
答。其治非一。如『次第禪門』云。
一治沈惛闇塞障者。應觀念應佛。卅二相中隨取一。或先取眉間毫相。閉目而觀。若心闇鈍。懸成不成。當對一好嚴形像。一心取相。緣之入定。若不明了。開眼更觀。復更閉目。如是取一相明了。次第遍觀衆相。使心眼開明。卽破惛睡沈闇之心。念佛功德。則除罪障。二治惡念思惟障者。應念報佛功德。正念之中。緣佛十力。四無所畏。十八不共。一切種智。圓照法界。常寂不動。普現色身。利益一切。功德無量。不可思議何以故。此念佛功德。從勝緣善

厭ふと雖も猶起る。既に爾らば、何の方便を以てかこれを治せん。
答ふ。其の治、一に非ず。『次第禪門』に云ふが如し。
一に沈惛闇塞の障を治せんには、應に應佛を觀念すべし。三十二相の中、隨つて一〔相〕を取れ。或は先づ眉間の毫相を取り、目を閉ぢて觀ぜよ。若し心闇鈍にして、懸かに成〔作〕すこと成らずんば、當に一の好き嚴かなる形像に對し、一心に相を取り、これを緣じて定に入るべし。若し明了ならずんば、眼を開いて更に觀じ、復た更び目を閉ぢよ。是くの如くにして一相を取ること明了ならば、次第に遍く衆の相を觀じ、心眼をして開明ならしめ、卽ち惛睡沈闇の心を破れ。佛の功德を念ずれば、則ち罪障を除く。二に惡念思惟の障を治せんには、應に報佛の功德を念ずべし。正念の中〔心〕に、佛の十力、四無所畏、十八不共、一切種智は、圓かに法界を照し、常寂不動にして、普く色身を現じて、一切を利益したまふ功德は、無量にして、不可思議なることを緣ぜよ。何を以ての故とな

拔一切衆生苦故。三者樂淸淨心。以令一切衆生得大菩提故。以攝取衆生生彼國土故。是名三種隨順菩提門法滿足。

已上。此中何故。不依彼『論』。

答。前四弘中。具足此六法。文言雖異。其義無闕。

問。念佛自滅罪。何必堅持戒。

答。若一心念。誠如所責。然盡日念佛。閑撿其實。淨心是一兩。其餘皆濁亂。野鹿難繫。家狗自馴。何況自恣心。其惡幾許乎。是故要當。精進持淨戒。猶如護明珠。後悔何及。善思念之。

問。誠如所言。善業是今世所學。雖欣動退。妄心是永劫所習。雖厭猶

しむるを以ての故に。衆生を攝取して、彼の國土に生ぜしむるを以ての故に。是れを、三種の隨順菩提門の法滿足すと名づく。

と。已上。此の中には、何が故に彼の『論』に依らざるや。

答ふ。前の四弘〔願〕の中に、此の六の法を具足す。文言異なると雖も、其の義闕くること無し。

問ふ。佛を念ずれば、自ら罪を滅す。何ぞ必ずしも堅く戒を持たんや。

答ふ。若し一心に念ぜば、誠に責むる所の如し。然れども盡日佛を念ぜんも、閑かに其の實を撿ぶるに、淨心は是れ一兩にして、其の餘は皆濁り亂れたり。野鹿は繫ぎ難く、家狗は自ら馴る。何に況や、自ら心を恣にせば、其の惡幾許ぞ乎。是の故に、要ず當に精進して淨戒を持つこと、猶も明珠を護るが如くすべし。後に悔いるとも何ぞ及ばん。善くこれを思念せよ。

問ふ。誠に言ふ所の如し。善業は是れ今世に學ぶ所なれば、欣ふと雖も動もすれば退き、妄心は是れ永劫に習ふ所なれば、

聲聞。辟支佛事。猶爲無益之言。
何況餘事。
巳上。行者常於。娑婆依正。生火宅想。
絕無益語。想續念佛。
問。『往生論』說念佛行法云。
遠離三種菩提門相違法。何等三
種。一者依智慧門。不求自樂。遠
離我心貪著自身故。二者依慈悲
門。拔一切衆生苦。遠離無安衆
生心故。三者依方便門。憐愍一
切衆生心。遠離供養恭敬自身心
故。是名遠離三種菩提門相違法
故。菩薩遠離如是三種。菩提門
相違法。得三種隨順菩提門法滿
足故。何等三。一者無染淸淨心。
不爲身求諸樂故。二者安淸淨心。

況や餘の事をや」と。
と。巳上。行者常に、娑婆の依正に於て、火宅の想を生し、
無益の語を絕ち、相續して佛を念ぜよ。
問ふ。『往生論』に、念佛の行法を說いて云はく、
三種の菩提門相違の法を遠離すべし。何等か三種なる。一に
は、智慧門に依つて、自の樂を求めず、我心をもつて自身に
貪著することを遠離するが故に。二には、慈悲門に依つて、
一切衆生の苦を拔いて、衆生を安んずること無きの心を遠離
するが故に。三には、方便門に依つて、一切衆生を憐愍む心
をもつて、自身を供養し、恭敬するの心を遠離するが故に。
是れを、三種の菩提門相違の法を遠離すと名づく。菩薩、是
くの如き三種の菩提門相違の法を遠離して、三種の隨順菩提
門の法滿足することを得るが故に。何等か三〔種〕なる。一に
は、無染淸淨の心、〔自〕身の爲に諸の樂を求めざる〔を以て〕
の故に。二には、安淸淨の心、一切衆生の苦を拔く〔を以て〕
の故に。三には、樂淸淨の心、一切衆生をして、大菩提を得

不見佛時。心專精故。不離佛日。
又『遺日摩尼經』說。
沙門墮牢獄。有多事。或求人欲得供養。或多欲積衣鉢。或與白衣厚善。或常念愛欲。或憙交結知友。
『文』有多法。略抄。　問。今何不擧彼等法耶。
答。若廣出之。還令行者。生退轉心。故略擧要。若堅持十重四十八輕戒。理必助成。念佛三昧。亦應任運。持得餘行。況具六法。或具十法。何行不攝。故略不述。然麁强惑業。令人覺了。但無義語。其過不顯。恒障正道。善應治之。或應依『大論』文。
　如人失火。四邊俱起。云何安處其內。語說餘事。此中佛說。若說

沙門の牢獄に墮つるに、多くの事有り。或は人を求めて供養を得んと欲し、或は多く衣鉢を積まんと欲し、或は白衣とともに厚善しうし、或は常に愛欲を念ひ、或は憙んで知友と交結はる。

と。『文』には多くの法有れども、略抄す。今、何ぞ彼等の法を擧げざる耶。

答ふ。若し廣くこれを出さば、還つて行者をして、退轉の心を生ぜしめん。故に略して要を擧ぐ。若し堅く十重〔戒〕、四十八輕戒を持たば、理必ず念佛三昧を助成し、亦任運に餘行をも持ち得應し。況や六の法を具し、或は十の法を具するもの、何れの行か攝せざらん。故に略して述べざるなり。然るに、麁强の惑業は、人をして覺了せしむれども、但無義の語は、其の過顯れずして、恒に正道を障ふ。善くこれを治す應し。或は應に『大論』の文に依るべし。

人の失火して、四邊に俱に起るが如し。云何んが其の內に安處して、餘の事を語り說かんや。此の中に、佛說きたまはく「若し聲聞、辟支佛の事を說くすら、猶無益の言と爲す。何に

九深入慧中無所著。十敬事善師如佛。
略抄。

問。『般舟經』亦有。四四十六法種。『十住婆沙』第九有。百四十餘種法。『念佛三昧經』有。種種法。又『華嚴經』入法界品偈云。

若有信解離憍慢。
發心即得見如來。
若有諂誑不淨心。
億劫尋求莫値遇。

『觀佛經』云。
晝夜六時。勤行六法。端坐正受。當樂少語。除讀誦經。廣演法教。終不宣說。無義之語。常念諸佛。心心相續。乃至無有。一念之間。

かれ。十には、善き師に敬事すること、佛の如くせよ。
と。略抄す。

問ふ。『般舟經』にも、亦四四十六種の法有り。『十住婆沙』の第九には、百四十餘種の法有り。『念佛三昧經』には、種種の法有り。又『華嚴經』の入法界品の偈に云はく、

若(或)し信解して憍慢を離るゝこと有るものは
發心(意)して即ち如來を見たてまつることを得れど
若(或)し諂誑不淨の心有るものは
億劫に尋ね求むとも値遇ふこと莫けん

と。『觀佛經』に云はく、
晝夜六時に、六の法を勤行し、端坐正受して、當に少語を樂ふべし。經を讀誦み、法教を廣演ぶるを除いては、終に無義の語を宣說かざれ。常に諸佛を念うて、心心相續せよ。乃至一念の間も、佛を見たてまつらざるの時有ること無し。心專精なるが故に、佛日を離れず。
と。又『遺日摩尼經』に說く、

已上。又若無精進。行難成就。故『華嚴經』偈云。

如鑽燧求火。未出而數息。
火勢隨止滅。懈怠者亦然。

已上。精進。讀誦大乘。功德無量。如『金剛般若論』偈云。

福不趣菩提。二能趣菩提。
於實名了因。於餘名生因。

已上『觀佛經』六種法畢。彼『經』嫉恚精進不具說之。故以餘『文』。釋成『經』意。

『般舟經』亦有十事。如彼『經』言。

若有菩薩。學誦是三昧者。有十事。一不嫉妬他人利養。二悉當愛敬人。孝順於長老。三當念報恩。四不妄語離非法。五常乞食不受請。六精進經行。七晝夜不得臥出。八常欲布施終無惜悔。

鑽燧みて火を求むるが如し　未だ出でざるに數〻息はゞ
火勢隨つて止滅す　懈怠の者も亦然り

と。已上は、精進なり。　大乘〔經典〕を讀誦する、功德無量なり。『金剛般若論』の偈に云ふが如し。

福は菩提に趣かざれど　二は能く菩提に趣く
實をば了因と名づけ　その餘をば生因と名づく

と。已上。『觀佛經』の六種の法、畢んぬ。彼の『經』に、嫉と恚と精進とは、具に之を說かざるが故に、餘『文』を以て、『經』の意をば釋成せり。

『般舟經』にも、亦十事有り。彼の『經』に言ふが如し。

若し菩薩有つて、是の三昧を學誦はん者は、十事有り。一には、他人の利養を嫉妬せざれ。二には、悉く當に人を愛敬し、長老に孝順すべし。三には、當に報恩を念ふべし。四には、妄語せずして非法を離れよ。五には、常に乞食して、請を受けざれ。六には、精進して經行せよ。七には、晝夜に臥出することを得ざれ。八には、常に布施を欲して、終に惜み悔いること無かれ。九には、深く慧の中に入つて、著する所無

起教師想。我從今日。至未來際。若不善能摧伏其身。生下劣想。如旃陀羅。及於狗犬。則爲欺誑如來。若於持戒。多聞頭陀。少欲知足。一切功德。身自炫曜。則爲欺誑如來。所修善本。不自矜伐。所行罪業。慚愧發露。若不爾者。爲欺誑如來。時佛讃言。善哉善哉。以則如是決定心。一切業障。皆悉消滅。無量善根。亦當增長。略抄。是故『大論』偈云。

自法愛染故。毀訾他人法。
雖持戒行人。不脱地獄苦。

已上。嫉妬。『同論』偈云。

馬井二比丘。懈怠墮惡道。
雖見佛聞法。猶亦不自勉。

たてまつると爲ん。〔我、今日より未來際に至るまで、〕若し持戒、多聞、頭陀、少欲、知足の、一切の功德に於て、身自ら炫曜はゞ、則ち如來を欺誑りたてまつると爲ん。〔我、今日より未來際に至るまで、〕修する所の善本に、自ら矜伐らず、行ふ所の罪業は、慚愧して發露さん。若し爾らずば、如來を欺誑りたてまつると爲ん」と。時に佛、讃めて言はく「善き哉、善き哉。是くの如き決定の心を以てせば、一切の業障は、皆悉く消滅し、無量の善根は、亦當に增長せん。

と。略抄す。是の故に『大論』の偈に云はく、

自らの法に愛染するが故　他人の法を毀訾るものは
たとへ持戒の行人なり雖　地獄の苦をば脱れえず

と。已上は、嫉妬なり。『同論』の偈に云はく、

馬と井との二りの比丘は　懈怠にして惡道に墮〔墜〕ちぬ
佛を見、法を聞きしことあれ雖　猶亦自ら勉〔免〕めざりし

と。已上。又、若し精進すること無くんば、行は成就し難し。故に『華嚴經』の偈に云はく、

生盲無目。在在所生。忘失正念。障礙善根。形容醜缺。人不憙見。常生邊地。貧窮下劣。從此歿已。於後末五百歲中。法欲滅時。還於邊地。下劣家生。遺乏飢凍。忘失正念。設欲修善。多諸留難。五百歲後。惡業乃滅。於後得生。阿彌陀佛。極樂世界。是時彼佛。當爲汝等。授阿耨菩提記。時諸菩薩。聞佛所說。擧身毛竪。深生憂悔。便自收淚白言。我從今日。至未來際。若於菩薩乘人。見有違犯。擧露其過。我等卽爲。欺誑如來。我從今日。至未來際。若見在家出家。菩薩乘人。以欲樂遊戲歡娛。終不伺求其過。常生信敬。

れて、貧窮下劣なりき。此より歿し已つて、後の末〔世〕の五百歲の中に於て、法の滅せんと欲する時、還た邊地下劣の家に生れ、遺〔匱〕乏飢凍して、正念を忘失せん。設ひ善〔行〕を修せんと欲せんも、諸の留難多し。五百歲の後、惡業乃ち滅して、後に阿彌陀佛の、極樂世界に生るゝことを得、是の時、彼の佛、當に汝等が爲に、阿耨〔多羅三藐三〕菩提の記を授けたまふべし」と。時に諸の菩薩、佛の說きたまふ所を聞いて、擧身の毛竪ち、深く憂悔を生じて、便ち自ら淚を收〔斂〕め、〔佛に〕白して言はく「我、今日より未來際に至るまで、若し菩薩乘の人に於て、違犯有るを見て、其の過を擧げ露さば、我等卽〔則〕ち如來を欺誑りたてまつると爲ん。我、今日より未來際に至るまで、若し在家、出家の菩薩乘の人、〔五〕欲の樂を以て遊戲歡娛するを見んも、終に其の過を伺ね求めずして、常に信敬を生し、教師の想を起さん。我、今日より未來際に至るまで、若し善能く其が身を摧伏して、下劣の想を生すこと、旃陀羅及び狗犬の如くならずば、則ち如來を欺誑り

積經』九十一云。
佛在施鹿園。時有六十菩薩。業障深重。諸根闇鈍。頂禮佛足。悲感流淚。不能自起。時佛告言。汝等應起。勿復悲啼。生大熱惱。汝曾於俱留孫佛法中。出家爲道。自執著多聞持戒。頭陀少欲。時有二說法比丘。多諸親友。名聞利養。汝等以嫉妬心。妄言誹謗。令彼親友諸衆生。無隨順心。斷諸善根。由此惡業。於六十百千歲中。生阿鼻地獄。餘業未盡。復於四十百千歲中。生等活地獄。復於二十百千歲中。生黑繩地獄。復於六十百千歲中。生燒熱地獄。從彼歿已。還得爲人。五百世中。

佛、施鹿園〔苑〕に在しき。時に六十の菩薩有り、業障深重にして、諸根闇鈍なりき。佛足を頂禮して、悲感流淚し、自ら起つこと能はざりき。時に佛、告げて言はく「汝等應に起つべし。復た悲啼〔號〕して、大熱惱を生ずること勿れ。汝、曾俱留孫佛の法の中に於て、出家して道を爲せしかども、自ら多聞、持戒、頭陀、少欲に執著はれたり。時に、二りの說法する比丘有つて、諸の親友多く、名聞利養ありき。汝等嫉妬〔慳嫉〕の心を以て、妄言し誹謗して、彼の親友と諸の衆生をして、隨順の心無からしめ、諸の善根を斷たしめたり。此の惡業に由つて、六十百千歲の中に於て、阿鼻地獄に生ぜり。餘業未だ盡きずして、復た四十百千歲の中に於て、等活地獄に生じ、復た二十百千歲の中に於て、黑繩地獄に生じ、復た六十百千歲の中に於て、燒熱地獄に生ぜり。彼より歿し已つて、還た人と爲ることを得たれども、五百世の中、生盲にして目無かりき。在在の所生には、正念を忘失して、善根を障礙〔覆〕せり。形容醜缺くして、人見ることを喜ばず、常に邊地に生

生。

已上。邪見。憍慢。『六波羅蜜經』云。

無量劫中。修行諸善。無安忍力。及智慧眼。一念瞋火。燒滅無餘。

又『遺教經』云。

劫功德賊。無過瞋恚。

又或處說云。

能損大利莫過瞋。一念因緣悉焚滅。俱胝廣劫所修善。是故慇懃常捨離。

『大集月藏分』說無瞋功德云。

常與賢聖相會。得著於三昧。

已上。瞋恚。『雙觀經』云。

今世恨意。微相憎嫉。後世轉劇。至成大怨。

云云。又嫉毀他人。其罪甚重。如『寶

と。已上は、邪見と憍慢となり。『六波羅蜜經』に云はく、

無量劫の中に、諸の善を修行すとも、安忍の力、及び智慧の眼無くば、一念の瞋の火に、燒き滅ぼされて餘すこと無けん。

と。又『遺教經』に云はく、

功德を劫むる賊は、瞋恚に過ぎたるは無し。

と。又、或る處に說いて云はく、

能く大利を損ふこと、瞋に過ぎたるは莫し。一念の因緣をもつて、悉く俱胝廣劫に修せる善を焚き滅す。是の故に慇懃して常に捨離せよ。

と。『大集月藏分』に、無瞋の功德を說いて云はく、

常に賢聖とともに相ひ會し、〔乃至〕三昧を得。

と。已上は、瞋恚なり。『雙觀經』に云はく、

今世の恨意は、微しく相ひ憎嫉すれども、後世には轉た劇しくして、大怨と成るに至る。

と。云云。又、他人を嫉毀するは、其の罪甚だ重し。『寶積經』の九十一に云ふが如し。

了了分明。
又『大論』云。
佛如醫王。法如良藥。僧如瞻病人。或如服藥禁忌。
已上。故知。設服法藥。不持禁戒。無由除愈。煩惱病患。故『般舟經』云。
不得破戒。大如毛髮。
已上。戒品。『觀佛經』云。
若起邪念。及貢高法。當知此人。是增上慢。破滅佛法。多使衆生。起不善心。亂和合僧。顯異惑衆生。是惡魔伴。如是惡人。雖復念佛。失甘露味。此人生處。以貢高故。身恒卑小。生下賤家。貧窮諸衰。無量惡業。以爲嚴飾。如此種種。衆多惡事。當自防護。令永不

鏡の如く、了了分明なり。
と。又『大論』に云はく、
佛は醫王の如く、法は良藥の如く、僧は瞻病人の如く、戒は服藥禁忌の如し。
と。已上。故に知る、設ひ法藥を服すとも、禁戒を持たざれば、煩惱の病患を除き愈すに由無し。故に『般舟經』に云はく、
戒を破〔犯〕ること、大きさ毛髮の如くするをも得ざれ。
と。已上は、戒品なり。『觀佛經』に云はく、
若し邪念〔命〕、及び貢高の法を起さば、當に知るべし、此の人は、是れ增上慢にして、佛法を破滅す。多く衆生をして不善の心を起さしめ、和合僧を亂り、異を顯して衆〔生〕を惑はす。是れ、惡魔の伴なり。是くの如き惡人は、復た佛を念ずと雖も、甘露の味を失ふ。此の人は生處、貢高を以ての故に、身恒に卑小にして、下賤の家に生れ、貧窮の諸衰、無量の惡業を以て嚴飾と爲す。此くの如き種種、衆多の惡事は、當〔常〕に自ら防護して、永く生ぜざらしむべし。

往生要集 巻中末

天台首楞嚴院沙門源信撰

第四止惡修善者。『觀佛三昧經』云。

此念佛三昧。若成就者。有五因緣。一者持戒不犯。二者不起邪見。三者不生憍慢。四者不恚不嫉。五者勇猛精進。如救頭燃。行此五事。正念諸佛。微妙色身。令心不退。亦當讀誦。大乘經典。以此功德。念佛力故。速疾得見。無量諸佛。

已上。

問。此六種法。有何義耶。

答。『同經』云。

以淨戒故。見佛像面。如眞金鏡。

第四に止惡修善

とは、『觀佛三昧經』に云はく、

此の念佛三昧を、若し成就せん者は、五の因緣有り。一には、戒を持つて犯さず。二には、邪見を起さず。三には、憍慢を生ぜず。四には、恚らず嫉まず。五には、勇猛精進して、頭の燃（然）ゆるを救ふが如くす。此の五事を行じて、正しく諸佛の微妙なる色身を念じ、心をして退かざらしめ、亦當に大乘の經典を讀誦すべし。此の功德を以て佛力を念ずるが故に、速疾に無量の諸佛を見たてまつることを得。

と。已上。

問ふ。此の六種の法は、何の義有り耶。

答ふ。『同經』に云はく、

戒淨きを以ての故に、佛像の面を見たてまつること、眞金の

問。凡夫行人。逐物意移。何常得起。念佛之心。

答。彼若不能。直爾念佛。應寄事々。勸發其心。謂遊戲談笑時。願於極樂界。寶池寶林中。與天人聖衆。如是得娛樂。若憂苦時。願共諸衆生。離苦生極樂。若對尊德。當願生極樂。如是奉世尊。若見卑賤。當願生極樂。利樂孤獨類。凡每見人畜。常應作是念。願共此衆生。往生安樂國。若飲食時。當願受極樂。自然微妙食。衣服臥具。行住坐臥。違緣順緣。一切準知。寄事作願。是『華嚴經』等例也。

往生要集 卷中本終

しむことを得んと願へ。若し憂苦の時は、諸の衆生と共に、苦を離れて極樂に生れんと願へ。若し尊德のひとに對せば、極樂に生れて、是くの如く世尊に奉へんと願ふ當し。若し卑賤のものを見ば、極樂に生れて、孤獨の類を利樂せんと願ふ當し。凡そ人畜を見る毎に、常に應に是の念を作すべし「願はくば此の衆生と共に、安樂國に往生せん」と。若し飲食する時は、極樂の自然微妙の食を受けんと願ふ當し。衣服臥具、行住坐臥、違緣順緣、一切準じて知れ。事に寄せて願を作すは、是れ『華嚴經』等の例なり。

有何勝利。
答。「度諸佛境界經」云。
若於十方世界。微塵等諸佛。及聲聞衆。施百味飲食。微妙天衣。日日不廢。滿恒沙劫。彼佛滅後。爲一一佛。於十方界。一一世界。起塵數塔。衆寶莊嚴。種種供養。一日三時。日日不廢。滿恒沙劫。復敎無數。無量衆生。設諸供養。若有一人。信此如來。智慧功德。不可思議境界。所得功德。勝彼無量。
取意。又『華嚴』偈云。
如來自在力。無量劫難遇。
若生一念信。速證無上道。
餘如下利益門。

滅後には、一一の佛の爲に、十方〔世〕界の、一一の世界に於て、塵數の塔を起て、衆寶をもつて莊嚴し、種種に供養すること、一日に三時し、日日廢せずして、恒〔河〕沙の劫を滿たし、復た無數無量の衆生を敎へて、諸の供養を設さしむるあらんに、若し一人有つて、此の如來の智慧功德〔功德智慧〕の、不可思議境界を信ぜば、その得る所の功德は、彼よりも勝ること無量なり。

と。取意す。又『華嚴』の偈に云はく、

如來の自在力は　無量劫にも遇ふこと難し
若し一念の信を生ぜば　速かに無上道を證す

と。餘は、下の利益門の如し。

問ふ。凡夫の行人は、物を逐うて意移る。何んぞ常に佛を念ずる心を起すことを得ん。

答ふ。彼若し直爾に佛を念ずること能はずんば、應に事々に寄せて、其の心を勸發すべし。謂はく、遊戲談笑の時は、極樂界の寶池寶林の中に於て、天人聖衆とともに、是くの如く娯樂

設有大火。充滿三千。大千世界。要當過此。聞是經法。歡喜信樂。受持讀誦。如說修行。所以者何。多有菩薩。欲聞此經。而不能得。若有衆生。聞此經者。於無上道。終不退轉。是故應當。專心信受。持讀誦。如說修行。

已上。應作此念。或過大千猛火聚。或經億劫應求法。我既値遇深三昧。如何退屈不勤修。

行者於此諸事。若多若少。隨樂憶念。若不能憶念。須披卷對文。或決擇或誦詠。或戀慕或敬禮。近爲勤心之方便。遠結見佛之因緣。凡三業四儀。勿忘佛境界矣。

問。信受憶念。如來如是。種種功德。

の故に應當に、專心に信受し、持ち〔讀〕誦して、說〔の如く修〕行すべし。

と。已上。應に此〔是〕の念を作すべし「或は大千〔世界〕の猛火聚を過ぎ、或は億劫を經ても、應に法を求むべし。我既に深三昧に値遇へり、如何んが退屈して勤修せざらん」と。

行者、此の諸の事に於て、若しは多若しは少、樂に隨つて憶念せよ。若し憶念すること能はずんば、須らく卷を披き文に對して、或は決擇し或は誦詠し、或は戀慕し或は敬禮して、近くは勤心の方便と爲し、遠くは見佛の因緣を結び、凡そ三業四儀に、佛の境界を忘るゝこと勿れ矣。

問ふ。如來の是くの如き種種の功德を信受し、憶念するに、何なる勝れたる利有りや。

答ふ。『度諸佛境界經』に云はく、

若し〔善男子、善女人有つて、〕十方世界の、微塵等の諸佛、及び聲聞衆に於て、百味の飲食、〔及び〕微妙の天衣を施すこと、日日廢せずして、恒〔河〕沙の劫を滿たし、彼の〔諸〕佛の

時魔因緣數興起。
初未曾得一反聞。
是故比丘比丘尼。
及淸信士淸信女。
持是經法囑汝等。
聞是三昧疾受行。
常敬習持是法師。
具足一劫無得懈。
乃至
假使億千那術劫。
求是三昧難得聞。
設令世界如恒沙。
滿中珍寶用布施。
若有受是一偈說。
敬誦功德過於彼。
『雙觀經』云。

是の三昧を聞かば疾く受け行へよ
常に是れを習ひ持つ法師を敬うて
一劫を具足つるまで懈ることを得ざれ
乃至
假使億千那術の劫のあひだ
是の三昧を求むとも聞くことを得ること難し
設令世界の恒沙の如き
その中に滿てらん珍寶を用つて布施することあらんも
若し是の一偈の說を受くること有つて
敬ひ誦まんものはその功德彼よりも過ぎん
と。『雙觀經』に云はく、
設ひ大火の、三千大千世界に充滿てる有らんも、要ず當に此れを過ぎて是の經法を聞き、歡喜信樂し、受持讀誦して、說の如く修行すべし。所以は何ん。多く菩薩有つて此の經を聞かんと欲すとも、而も得ること能はざればなり。若し衆生有つて此の經を聞かん者は、無上道に於て、終に退轉せじ。是

常隨法師不捨離。
初不得聞是三昧。
有佛號曰具至誠。
時智比丘名和隣。
彼佛世尊泥洹後。
比丘常持是三昧。
我時爲王君子種。
夢中逮聞是三昧。
和隣比丘有斯經。
王當從受此定意。
從夢覺已卽往求。
輒見比丘持三昧。
卽除髮鬚作沙門。
學八千歲一時聞。
其數具足八萬歲。
供養奉事此比丘。

この比丘常に是の三昧を持ちたり
我時に王君子の種たりしに
夢の中に是の三昧を聞き逮び
和隣〔輪〕比丘斯の經を有つ
王當に從いて此の定意を受くべしと
夢より覺め已つて卽に往き求むるに
輒ち比丘の三昧を持てるを見
卽に鬚髮を除つて沙門と作り
學ぶこと八千歲にして一時聞けり
其の數八萬歲を具足つるまで
此の比丘を供養し事へ奉りしかど
時に魔の因緣數〻興起り
初より未だ曾て一反も聞くことを得ざりき
是の故に比丘も比丘尼も
及び淸信士も淸信女も
是の經法を持てと汝等に囑す

莫不稱歎。
龍樹『偈』云。
世尊諸功德。不可得度量。
如人以尺寸。量空不可盡。
同讃彌陀『偈』云。
諸佛無量劫。讃揚其功德。
猶尚不能盡。歸命清淨人。
應念。願我得佛。齊正法王。
二十欣求教文。『般舟經』云。
是三昧難得値。正使求是三昧。至百億劫。但欲得聞其名聲。不能得聞。何況得學者。轉復行敎人。
『偈』言。
我自識念往世時。
其數具足六萬歲。

猶尚盡すこと能はず　清淨なる人を歸命したてまつる
と。應に念ふべし「願はくば我佛を得て、正法王に齊しからん」
と。
二十には、欣求教文を。『般舟經』に云はく、
是の三昧は、値ふことを得ること難し。正使是の三昧を求むること、百億劫に至り、但其の名聲を聞くことを得んと欲するも、聞くことを得ること能はず。何に況や、學ぶことを得ん者をや。轉た復た、行じて人を教へんをや。
と。『偈』に言はく、
我自ら往世時を識念ふに
其の數六萬歲を具足つるまで
常に法師に隨うて捨離れざりしかど
初め是の三昧を聞くことを得ざりき
佛有して號けて具至誠と曰ひ
時に比丘あつて和隣〔輪〕と名づけたり
彼の佛世尊泥洹したまひし後

無有。覺知之想。以此安心。畢竟無體。不可見故。乃至廣說。以信解觀念此理。爲菩薩最初根本業也。此一實境界。卽是、如來法身也。『華嚴經』一切慧菩薩偈云。

法性本空寂。無取亦無見。
性空卽是佛。不可得思量。

已上。應念。我何時。得顯本有性。

十九總觀佛德。如普賢菩薩云。

如來功德。假使十方。一切諸佛。經不可說。不可說佛刹。極微塵數劫。相續演說。不可窮盡。

已上。又阿彌陀佛。威神無極。如『雙觀經』云。

無量壽佛。威神無極。十方世界。無量無邊。不可思議。諸佛如來。

性空なるぞ卽ち是れ佛なり　思ひ量ることを得可からず

と。已上。應に念ふべし「我何れの時にか、本有の性を顯すことを得ん」と。

十九には、總觀佛德を。普賢菩薩の云ふが如し。

如來の功德は、假使十方の、一切の諸佛、不可說不可說の佛刹を、極微塵〔に碎ける〕數ほどの劫を經るまで、相續して演說べたまふとも、窮め盡す可からず。

と。已上。又、阿彌陀佛の、威神極まり無きことは、『雙觀經』に云ふが如し。

無量壽佛の威神極まり無し。十方世界の無量無邊、不可思議の諸佛如來、稱歎せざるは莫し。

と。龍樹の『偈』に云はく、

世尊の諸の功德は　度量ることを得可からず
人尺寸を以て空を量り　盡す可からざるが如し

と。同じく彌陀を讚むるの『偈』に云はく、

諸の佛は無量劫に　其の功德を讚揚たまはんも

『占察經』下卷。地藏菩薩言。一實境界者。謂衆生心體。從本已來。不生不滅。自性清淨。無障無礙。猶如虚空。離分別故。平等普遍。無所不至。圓滿十方。究竟一相。無二無別。不變不異。無增無減。以一切衆生心。一切聲聞辟支佛心。一切菩薩心。一切諸佛心。皆同不生不滅。無染寂靜。眞如相故。所以者何。一切有心起分別者。猶如幻化。無有定實。乃至一切世界。求心形狀。無一區分。而可得者。但以衆生。無明癡闇。薫習因縁。妄現境界。令生念著。所謂此心。不能自知無。妄自謂有。起覺知想。計我我所。而實

『大般若』

無く、十方に圓滿す。究竟して一相にして、二無く別無し。不變不異にして、增無く減無し。一切衆生の心、一切聲聞、辟支佛の心、一切菩薩の心、一切諸佛の心は、皆同じく不生不滅、無染寂靜の眞如の相なるを以ての故なり。所以は何ん。一切の、心有つて分別を起すは、猶も幻化の如く、定（眞）實有ること無し。乃至 一切世界に、心の形狀を求むるに、一區分として、得可きもの無し。但衆生の無明癡闇の、薫（熏）習する因縁を以て、妄境界を現じて、念著を生ぜしむ。謂はゆる此の心、自ら無じと知ること能はずして、妄りに自ら有りと謂ひ、覺知の想を起して、我と我所とを計ふ。而れども、實には覺知の想も、有ること無きなり。此の妄心は、畢竟して體無く、見る可からざるを以ての故に。

と。乃至廣說す。信解を以て此の理を觀念するを、菩薩最初の根本の業と爲すなり。 此の一實境界は、即ち是れ如來の法身なり。『華嚴經』の一切慧菩薩の偈に云はく、

法性本より空寂にして　取るべきも無く亦見るべきも無し

名爲鶏隨。其音甚哀和。頗有髣髴似佛音聲。萬分之一。王聞其音歡喜。卽發無上道意。宮中綵女。凡七千人。復發無上道意。王從是。遂信三尊。鳥之音聲。所度如是。況於至眞清淨妙音者乎。取意略抄。應念。我何時。得聞彼辯說。

十八觀佛法身。如文殊師利菩薩言。我觀如來。卽眞如相。無動無作。無所分別。無異分別。非卽方處。非離方處。非有非無。非常非斷。非卽三世。非離三世。無生無滅。無去無來。無染不染。無二不二。心言路絕。若以此等。眞如之相。觀於如來。名眞見佛。亦名禮敬。親近如來。實於有情。能爲利樂。

と。取意略抄す。應に念ふべし「我何れの時にか、彼の辯說を聞くことを得ん」と。

十八には、觀佛法身を。文殊師利菩薩の言ふが如し。我如來を觀たてまつるに、卽ち眞如の相なり。動くことなく、作すこと無し。分別する所無く、異の分別無し。方處に卽くに非ず、方處を離るゝに非ず。有るに非ず、無きに非ず。常に非ず、斷に非ず。三世に卽くに非ず、三世を離るゝに非ず。生ずること無く、滅すること無し。去ること無く、來ること無し。染も不染も無く、二も不二も無し。心も言も路絕えたり。若し此れ等の、眞如の相を以て、如來を觀たてまつるをば、眞に佛を見たてまつると名づけ、亦如來を禮敬し、親近したてまつると名づく。實に有情を、能く利樂せんが爲なり。と。『大般若』に云ふ。『占察經』の下卷に、地藏菩薩の言はく、一實境界とは、謂はく衆生の心の體は、本より已(以)來、生ぜず滅せず、自性清淨にして、無障無礙なること、猶も虛空の如し。分別を離るゝが故に、平等に普く遍ち、至らざる所

衆生。乃至是故佛名。最上導師。
『偈』云。
於四問答中。超絶無倫匹。
衆生諸問難。一切皆易得。
若於三時中。諸有所說者。
言必不虛設。常有大果報。
已上。『華嚴經』偈云。
諸佛廣大音。法界靡不聞。
菩薩能了知。善入音聲海。
『淨名經』偈云。
佛以一音演說法。
衆生隨類各得解。
皆謂世尊同其語。
斯卽神力不共法。
又『譬喩經』第三云。
阿育王。意不信佛。時海邊有鳥。

と。已上。『華嚴經』の偈に云はく、
諸佛の廣大音は　法界に聞こえざる靡し
菩薩能く了知して　善く音聲海に入る
と。『淨名經』の偈に云はく、
佛は一音を以て法を演說したまへど
衆生は類に隨つて各〻解を得て
皆謂ふ世尊は其の語を同じうしたまふと
斯れ卽〔則〕ち神力不共の法なり
と。又『譬喩經』の第三に云はく、
阿育王、意に佛を信ぜず。時に海邊に鳥有り、名づけて鴹隨と爲す。其の音甚だ哀和にして、頗る髣髴として、佛の音聲に似たること、萬分の一なり。王、其の音を聞いて歡喜し、卽ち無上道の意を發し、宮中の婇女、凡て七千人も、復た無上道の意を發す。王は是れより、遂に三尊〔寶〕を信ぜり、と。鳥の音聲にして、度する所是くの如し。況や、至眞の淸淨なる妙音者に於てをや。

塵數。三千大千世界衆生。皆如舍利弗。如辟支佛。皆悉成就。智慧樂說。壽命如上。塵數大劫。是諸人等。因四念處。盡其形壽。問難如來。如來還以。四念處義。答其所問。言義不重。樂說無窮。

又云。

佛有所說。皆有利益。終不空言。是亦希有。乃至若一切衆生。智慧勢力。皆如辟支佛。是諸衆生。若不承佛意。欲度一人。無有是處。若是諸人說時。乃至不能斷。無色界結使。一毫釐分。若佛欲度衆生。有所言說。乃至外道邪見。諸龍夜叉等。及餘不解佛語者。皆悉令解。是等亦能轉化。無量

重ならず、樂說窮〔盡〕まること無からんと。又、云はく、

佛の所說有るは、皆利益有つて、終に空言ならず。是れも、亦希有なり。乃至若し一切衆生の、智慧勢力、皆辟支佛の如くならんに、是の諸の衆生、若し佛意を承けずして、一人を度はんと欲せば、是の處有ること無し。若し是の諸の人、〔法を〕說かん時は、乃至無色界の結使の、一毫釐分をも、斷ずること能はず。若し佛、衆生を度はんと欲して、言說する所有らば、乃至外道、邪見、諸龍、夜叉等、及びその餘の佛語を解せざる者にも、皆悉く解せしめ、是れ等も亦能く、無量の衆生を轉化す。乃至是の故に、佛を最上の導師と名づく。

と。『偈』に云はく、

四の問答の中に　超絕したまうて倫匹無し
衆生の諸の問難は　一切皆答へ易し
若し三時の中に於て　諸の所說有るものは
言必ず虛設ならず　常に大なる果報有り

譬如魚子。母若不念。子則爛壞。
衆生亦爾。佛若不念。善根卽壞。
『莊嚴論』偈云。
菩薩念衆生。愛之徹骨髓。
恒時欲利益。猶如一子故。
由此等義。有懺悔『偈』云。
如父母有子。始生便盲聾。
慈悲心慇重。不捨而養活。
子不見父母。父母常見子。
諸佛視衆生。猶如羅睺羅。
衆生雖不見。實在諸佛前。
已上。應作是念。彌陀如來。常照我身。護念我善根。觀察我機緣。我若機緣熟。不失時被引接。
十七佛無礙辯說。『十住論』云。
若三千界。所有四天下。滿中微

と。此れ等の義に由つて、有る懺悔の『偈』に云はく、

父母に子有れ　始生すなはち盲聾なれど
慈悲心慇重ければ　捨てずして養活ひたまふ
子は父母を見ざれど　父母常に子を見たまふがごと
諸佛の衆生を視たまふも　猶し羅睺羅の如し
衆生は見たてまつらざれど　實は諸佛の前に在り

と。已上。應に是の念を作すべし「彌陀如來は、常に我が身を照し、我が善根を護念し、我が機緣を觀察したまふらん。我若し機緣熟しなば、時を失はずして引接せられなん」と。
十七には、佛の無礙辯說を。『十住論』に云はく、
若し三千〔大千〕世界の、有らゆる四天下の中に、滿てらん微塵の數ほどの、三千大千世界の、〔その中に滿てらん〕衆生、皆舍利弗の如く、辟支佛の如く、皆悉く智慧樂說を成就して、その壽命は上の塵の數ほどの大劫ならんに、是の諸の人等、四念處に因つて、其の形壽を盡すまで、如來を問難せば、如來は還つて、四念處の義を以て、其の所問に答ふるに、言義

『同經』偈云。

爲利一衆生。住無邊劫海。
令其得調伏。大悲心如是。

『華嚴經』文殊讃佛偈云。

一一地獄中。經於無量劫。
爲度衆生故。而能忍是苦。

『大經』偈云。

一切衆生受異苦。
悉是如來一人苦。
乃至
衆生不知佛能救。
故謗如來及法僧。

『大論』云。

佛以佛眼。一日一夜。各三時觀。
一切衆生。誰可度者。無令失時。

『有論』云。

一切衆生の異の苦を受くるを
悉く是れ如來一人苦しみたまふ
乃至
衆生は佛の能く救ひたまふことを知らず
故に如來と及び法と僧とを謗る

と。『大論』に云はく、

佛は佛眼を以て、一日一夜、各〻三時に、一切の衆生を觀そなはし、誰か度ふ可き者あらば、時を失はしめたまふこと無し。

と。『有〔同〕論』に云はく、

譬へば魚の子、その母若し念はざれば、子則ち爛れ壞るゝが如く、衆生も亦爾り。佛若し念ひたまはずば、善根卽ち壞れなん。

と。『莊嚴論』の偈に云はく、

菩薩の衆生を念うて　これを愛すること骨髓に徹り
恒時に利益せんと欲ふ　猶し一子の如きが故に

間。佛於諸受。知起知住。知生知滅。諸相諸觸。諸覺諸念。亦知起知住。知生知滅。惡魔七年。晝夜不息。常隨逐佛。不得佛短。不見佛念。不在安慧。

『偈』云。

其念如大海。湛然在安穩。
世間無有法。而能擾亂者。

應念。願佛除滅我。麁動覺觀心。

十六悲念衆生。『大般若經』云。

十方世界。無一有情。如來大悲。
所不能照。

『寶積經』云。

假使過於。恒河沙等。諸佛世界。
唯一衆生。是佛化限。爾時如來。
躬往其所。爲說法要。令其悟入。

と。應に念ふべし「願はくば佛、我が麁動なる覺觀の心を除滅したまへ」と。

十六には、悲念衆生を。『大般若經』に云はく、

十方世界には、一りの有情として、如來大悲の、能く照したまはざる所無し。

と。『寶積經』に云はく、

假使恒河「殑伽」沙等の、諸佛の世界を過ぎて、唯一りの衆生をも、是れ佛の化の限ならしめん、と。爾の時、如來躬ら其の所に往いて、爲に法要を說き、其をして悟入らしめたまふ。

と。『同經』の偈に云はく、

一りの衆生を利はんがため　無邊劫の海に住み
其をして調伏を得しめたまふ　大悲心是くの如し

と。『華嚴經』の文殊讚佛の偈に云はく、

一一の地獄の中にも　無量劫を經ん
衆生を度はんが爲の故に　能く是の苦を忍びたまふ

と。『大經』の偈に云はく、

一緣中。隨意久近。如意能住。從此緣中。更住餘緣。隨意能住。若佛住常心。欲令人不知。則不能知。假使一切衆生。知他心智。如大梵王。如大聲聞辟支佛。成就智慧。知他人心。欲知佛常心。若佛不聽。則不能知。

應念。願令我得。佛覺三昧。

十五常在安慧。『同論』云。

諸佛安穩。常不動念。常在心。何以故。先知而後行生。隨意所緣中。住無礙行故。斷一切煩惱故。出過動性故。如佛告阿難。佛於此夜。得阿耨菩提。一切世間。若天魔梵。沙門婆羅門。以盡苦道。教化周畢。入無餘涅槃。於其中

十五には、常在安慧を。『同論』に云はく、

諸佛は慧に安んじたまひ、常に念を動かしたまはざれども、常に心在り。何を以ての故とならば、先に知つて而る後に行生じ、意の所緣の中に隨つて無礙の行に住したまふが故に。一切の煩惱を斷じたまふが故に。動性を出過したまふが故に。佛、阿難に告げたまひしが如し。「佛は此の夜に於て、阿耨菩提を得て、一切世間の、若しは天、魔、梵、沙門、婆羅門を、盡苦の道を以て、教化すること周く畢つて、無餘涅槃に入る。其の中間に於て、佛は諸受に於て、その起を知り、住を知り、生を知り、滅を知る。諸相〔想〕、諸觸、諸覺、諸念においても、亦その起を知り、住を知り、生を知り、滅を知る。惡魔、七年のあひだ、晝夜息まず、常に佛に隨逐すれども、佛の短を得ず、佛の念の、慧に在安んぜざりしことを見ざりき」と。

と。『偈』に云はく、

其の念は大海の如く　湛然として安穩なり
世間には法の　能く擾亂するもの有ること無し

假使十方無量無邊。一切世界所有衆生。皆悉成就繋屬一生補處。菩薩之智。欲比如來十力之一。處非處智。百千萬分。不及其一。乃至。烏波尼沙陀分。不及其一。乃至算數譬喩。所不能及。

『華嚴經』偈言。

如來甚深智。普入於法界。
能隨三世轉。與世爲明道。

『同經』普明智菩薩讃佛偈云。

一切諸法中。法門無有邊。
成就一切智。入於深法海。

已上。應作是念。願今彌陀照見我三業。願得如世尊慧眼第一淨。

十四能調伏心。『十住論』云。

諸佛若入定。若不入定。欲繋心

一切智を成就せば　深き法の海に入る

と。已上。應に是の念を作すべし「今彌陀如來は、我が三業を照見したまふらん。願はくば世尊の如く、慧眼第一淨なることを得ん」と。

十四には、能調伏心を。『十住論』に云はく、

諸佛は、若しは定に入り、若しは定に入らずして、心を一緣の中に繋けんと欲したまはゞ、意の久近に隨つて、意の如く能く住したまふ。此の緣の中より、更に餘の緣に住するも、意の隨に能く住したまふ。若し佛、常の心に住したまふときも、人をして知らざらしめんと欲したまはゞ、則ち知ること能はず。假使一切衆生の、他の心を知る智をして、大梵王の如くならしめ、大聲聞辟支佛の如く、智慧を成就して、他人の心を知らんとも、佛の常の心を知らんと欲せんに、若し佛聽したまはずば、則ち知ること能はず。

と。應に念ふべし「願はくば我をして、佛覺三昧を得しめたまへ」と。

蜜多。所有智慧。過彼百倍。又此三千大千世界。所有衆生。皆具布施波羅蜜多智慧。不及一菩薩。所得淨戒波羅蜜多智慧。乃至般若。亦復如是。又此三千大千世界。所有衆生。皆具六波羅蜜智慧。不及一初地菩薩智慧。乃至十地。展轉如是。又此十地菩薩智慧。比汝慈氏。一生補處菩薩智慧。百千分中。不及其一。此三千大千世界。一切衆生所有智慧。皆如慈氏。等無有異。如是菩薩。坐於道場。降伏魔怨。將成正覺。所有智慧。於佛智慧。百千萬分。不及其一。

『寶積經』云。

及ばず。此の三千大千世界の、一切の衆生の、有つ所の智慧をして、皆慈氏の如く、等しうして異なり有ること無からしめんに、是くの如き菩薩の、道場に坐して魔怨を降伏し、將に正覺を成ぜんとして、有つ所の智慧は、佛の智慧に於ける、百千萬分の、其の一にも及ばず。

と。『寶積經』に云はく、

假使十方の無量無邊の、一切世界の有らゆる衆生をして、皆悉く繫屬一生の菩薩の智を成就せしめんに、如來の十力の一の、處非處智に比べんと欲せば、百千萬分の、其の一にも及ばず。乃至。烏波尼沙陀分の、其の一にも及ばず。乃至、算數も譬喩も、及ぶ能はざる所なり。

と。『華嚴經』の偈に言はく、

如來の甚深き智は　普く法界に入り
能く三世に隨つて轉して　世のための明かな道と爲る

と。『同經』の普明智菩薩讃佛の偈に云はく、

一切諸法の中には　法門に邊り有ること無し

作是言。敢以滴水。持用相寄。後若須者。當還賜我。爾時如來。取其滴水。置殑伽河中。而爲彼河流浪廻渡。之所旋轉。和合引注。至于大海。是人滿百年已。而白佛言。先寄滴水。今請還我。爾時佛。以一分毛端。就大海內。霑本水滴。用還是人。

略抄。『六波羅蜜經』云。

如是四州。及諸山王。用爲紙素。八大海水。以爲其墨。一切草木。用爲其筆。一切人天。一劫書寫。比舍利弗。所得智慧。十六分中。不及其一。又於此三千大千世界。其中衆生。所有智慧。如舍利弗。等無有異。菩薩了達。布施波羅

と。略抄す。『六波羅蜜經』に云はく、

是くの如き四州(洲)、及び諸の山王を用つて紙素と爲し、八大海の水を以て其の墨と爲し、一切の草木を用つて其の筆と爲して、一切の人天の一劫のあひだ書寫せるを、舍利弗の得たる智慧に比べんに、十六分の中、其の一にも及ばず。又此の三千大千世界に於ける、其の中の衆生の、有つ所の智慧をもつて、舍利弗の如く、等しうして異なり有ること無からしめんに、菩薩の了達せる、布施波羅蜜多の、有つ所の智慧は、彼に過ぐること百倍なり。又此の三千大千世界の、有らゆる衆生をして、皆布施波羅蜜多の智慧を具せしめんに、一りの菩薩の得たる、淨戒波羅蜜多の智慧に及ばず。乃至、般若(波羅蜜多)も、亦復た是くの如し。又此の三千大千世界の、有らゆる衆生をして、皆六波羅蜜の智慧を具せしめんに、一りの初地の菩薩の智慧に及ばず。乃至、十地まで展轉すること、是くの如し。又此の十地の菩薩の智慧をもつて、汝慈氏の、一生補處の菩薩の智慧に比べんに、百千分の中、其の一にも

樂。所作事業。所受果報。心何所行。本從何來。如是等事。卽能知見。

『偈』云。

宿命智無量。天眼見無邊。
一切人天中。無能知其限。

應念。願佛令我。宿業淸淨。

十三智惠無礙。『寶積經』三十七云。

假使有人。取恒河沙等世界。所有一切草木。悉燒爲墨。擲置他方。恒河沙等。世界大海。於百千歲。就以磨之。盡爲墨汁。佛從大海中。取一一墨滴。分別了知。是其世界。如是草木。其根其莖。其枝其條。華果葉等。又如有人。持一毛端。霑水一滴。來至佛所。而

十三には、智惠〔慧〕無礙を。『寶積經』の三十七に云はく、

假使人有つて、恒河〔殑伽〕沙等の世界〔中〕の、有らゆる一切草木を取り、悉く燒いて墨と爲し、他方恒河〔殑伽〕沙等の世界の大海〔海中〕に擲げ置き、百千歲のあひだ就いて以てこれを磨り、盡く墨汁と爲んも、佛は大海の中より、一一の墨の滴を取つて、是れは某の世界の、是くの如き草木、某の根、某の莖、某の枝、某の條、華、果、葉等と分別し、了知したまふ。又如し人有つて、一毛端に水の一滴を霑せるを持ち、佛の所に來至つて、是の言を作さく「敢て滴水を以て、持用て相ひ寄す。後に若し須ひんときは、當に我に還し賜へ」と。爾の時、如來其の滴水を取つて、殑伽河の中に置きたまふに、彼の河の流浪、廻渡〔洄復〕の爲に旋轉され、和合り引注いで、大海に至る。是の人、百年を滿ち已つて。佛に白して言はく「先に寄したてまつりし滴水、今請ふ、我に還したまへ」と。爾の時、佛一分の毛端を以て、大海の內に就き、本の水の滴を霑し、用つて是の人に還したまふ。

已上。應作是念。今彌陀如來。定聞我所有語業。

十一知他心智。『十住論』云。

佛能知無量無邊世界。現在衆生心。及諸染淨所緣等。又能知無色衆生諸心。

略抄。『華嚴』文殊偈云。

一切衆生心。普在於三世。
如來於一念。一切悉明達。

應作是念。今彌陀如來。必知我意業。

十二宿住隨念智。『十住論』云。

佛若欲念。自身及一切衆生。無量無邊宿命。一切事皆悉知。無有不知。過恒河沙等劫事。是人何處生。姓名貴賤。飲食資生苦

一切衆生の心の　普く三世の中に在るを
如來は一念に於て　一切悉く明達したまふ

と。應に是の念を作すべし「今彌陀如來は、必ず我が意業を知しめしたまふらん」と。

十二には、宿住隨念智を。『十住論』に云はく、

佛若し自身及び一切衆生の、無量無邊の宿命を念ぜんと欲したまはゞ、一切の事皆悉く知りたまひ、過恒河沙等の劫の事をも知りたまはずといふこと有ること無し。是の人は何處に生れ、姓名、貴賤、飲食、資生、苦樂、所作の事業、所受の果報、心は何なる所行、本は何より來る、是くの如き等の事を、即ち能く知見したまふ。

と。『偈』に云はく、

宿命をもて知りたまふこと量り無く　天眼をもて見たまふこと邊し無し
一切人天の中には　能く其の限りを知るもの無し

と。應に念ふべし「願はくば佛、我が宿業をして清淨ならしめたまへ」と。

普見十方諸國土。
其中衆生不可量。
現大神通悉調伏。
應作是念。今彌陀如來。遙見我身業。
十聞聲自在。『十住論』云。
假令恒河沙等。三千大千世界衆生。一時發言。又一時作。百千種伎樂。若遠若近。隨意能聞。若欲於中。聞一音聲。隨意得聞。餘者不聞。又過無邊世界最細聲。皆亦得聞。若欲令衆生聞。能令得聞。
略抄。『華嚴』文殊偈云。
一切世間中。所有諸音聲。
佛智皆隨了。亦無有分別。

は一時に百千種の伎樂を作さんに、若しは遠き、若しは近き、意の隨に能く聞きたまふ。若しその中に於て、一の音聲のみを聞かんと欲したまはゞ、意の隨に聞くことを得たまうて、餘の者は聞こえず。又無邊の世界を過ぎて、最も細き聲をも、皆亦聞くことを得たまふ。若し衆生をして、聞かしめんと欲したまはゞ、能く聞くことを得しめたまふ。
と。略抄す。『華嚴』の文殊の偈に云はく、
一切世間〔界〕の中の　有らゆる諸の音聲を
佛智みな隨了したまへども　亦分別をもちひたまふこと有ること無し
と。已上。應に是の念を作すべし「今彌陀如來は、定んで我が語業を聞きたまふらん」と。
十一には、知他心智を。『十住論』に云はく、
佛は、能く無量無邊の世界の、現在の衆生の心、及び諸の染淨〔心〕の所緣等を知りたまひ、又能く無色〔界〕の衆生の諸の心をも知りたまふ。
と。略抄す。『華嚴』の文殊の偈に云はく、

普現十方無量國。
隨諸衆生所應見。
光明遍照轉法輪。
應作是念。願我當見。遍法界身。
九天眼明徹。『十住論』云。大力聲聞。以天眼見。小千國土。亦見中衆生。生時死時。小力辟支佛。見十小千國土。見中衆生。生時死時。中力辟支佛。見百小千國土。見中衆生。生時死時。大力辟支佛。見三千大千國土。見中衆生。生死所趣。諸佛世尊。見無量無邊。不可思議世間。亦見是中衆生。生時死時。
已上。『華嚴經』偈云。
佛眼廣大無邊際。

大力の聲聞は、天眼を以て、小千國土を見、亦その中の衆生の、生時と死時とを見る。小力の辟支佛は、十〔千〕の小千國土を見、その中の衆生の、生時と死時とを見る。中力の辟支佛は、百〔萬〕の小千國土を見、その中の衆生の、生時と死時とを見る。大力の辟支佛は、三千大千國土を見、その中の衆生の、生死の所趣を見る。諸佛世尊は、無量無邊、不可思議の世間を見、亦是の中の衆生の、生時と死時とを見たまふ。

と。已上。『華嚴經』の偈に云はく、

佛眼は廣大にして邊際無く
普く十方の諸の國土を見たまふ
其の中の衆生は不可量けれども
大神通を現じて悉く調伏したまふ

と。應に是の念を作すべし「今彌陀如來は、遙かに我が身業を見たまふらん」と。

十には、聞聲自在を。『十住論』に云はく、

假令恒河沙等の、三千大千世界の衆生、一時に言を發し、又

轉。在何佛土。在誰毛孔。我於何時。得覺知之。

八隨類化現。『十住論』云。

佛一念中。於十方無量無邊。恒河沙等世界。變化無量佛身。一一化佛。亦能施種種佛事。

已上四事。神境通。『度諸佛境界經』云。

如來所現。無異功用。無異思惟。隨衆生性。自見不同。如十五日夜。閻浮提人。各見月現在其上。月不作意。我現其上。

『華嚴』偈云。

如來廣大身。究竟於法界。
不離於此座。而遍一切處。

又云。

智慧甚深功德海。

と。已上の四事は、神境通なり。『度諸佛境界經』に云はく、

如來の所現は、異の功用無く、異の思惟無し。衆生の性に隨つて、自ら見ること不同なり。十五日の夜、閻浮提の人、各々月の現れて、其の上に在るを見れども、月は作意して、我其の上に現れんとせざるが如し。

と。『華嚴』の偈に云はく、

如來の廣大身は　法界を究竟め
此の座を離れずして　一切の處に遍ちたまふ

と。又、云はく、

智慧甚深の功德海をもつて
普く十方の無量國に現れ
諸衆生の見る應き所に隨つて
光明遍く照して法輪を轉じたまふ

と。應に是の念を作すべし「願はくば我當に、遍法界の身を見たてまつらん」と。

九には、天眼明徹を。『十住論』に云はく、

四大海。入一毛孔。亦復如是。其中衆生。不覺不知。唯應度者。乃知見之。
地。菩薩尚爾。何況佛力。故『度諸佛境界經』云。
能令十方世界。入一毛孔。乃至於一微塵。能現無量無數。不可說世界。一切衆生。亦無迫窄。無量無數。不可說劫。威儀果報事。能於一念中現。一念威儀果報事。於無量無數。不可說劫中現。如是所作。心無功用。不作思惟。
『華嚴經』眞實幢菩薩偈云。
一切諸如來。神通力自在。
悉於三世中。求之不可得。
應作是念。我今亦不知。爲佛神力

能く十方の世界をして、一の毛孔に入らしめ、乃至一の微塵に於て、能く無量無數、不可說の世界を現ずるに、一切の衆生、亦迫窄（迮）無し。無量無數、不可說劫の、威儀果報の事を、能く一念の中に於て現じ、一念の威儀果報の事を、無量無數、不可說劫の中に於て現ず。是くの如き所作、心に功用無く、思惟を作さず。

と。『華嚴經』の、眞實幢菩薩の偈に云はく、

一切諸の如來は　神通力自在なり
悉く三世の中に於て　これを求むも得可からず

と。應に是の念を作すべし「我今も亦知らず、佛神力の爲めに轉ぜられて、何れの佛土にか在り、誰の毛孔にか在るを。我何れの時にか、これを覺知することを得ん」と。

八には、隨類化現を。『十住論』に云はく、

佛は一念の中に、十方の無量無邊、恒河沙等の世界に於て、無量の佛身を變化したまふ。一一の化佛も、亦能く種種の佛事を施作したまふ。

七神通無礙。『十住論』云。
佛能末恒河沙等世界。令如微塵。又能還合。或又能變無量無邊。阿僧祇世界。皆令作金銀等。又能變恒河沙等。世界大海水。皆使爲乳蘇等。

已上。『淨名經』說菩薩不思議解脫云。
斷取三千大千世界。如陶家輪。著右掌中。擲過恒河沙世界之外。其中衆生。不覺不知。己之所往。又復還置本處。都不使人。有往來想。而此世界。本相如故。又於下方。過恒河沙等。諸佛世界。取一佛土。擧著上方。過恒河沙。無數世界。如持針鋒。擧一棗葉。而無所嬈。以須彌山。納芥子中。以

河沙等の世界の、大海の水を變じて、皆乳蘇〔酥〕等と爲らしめたまふ。

已上。『淨名經』に、菩薩の不思議の解脫を說いて云はく、
三千大千世界を斷ち取ること、陶家輪の如くにして、右の掌の中に著け、恒河沙の世界の外に擲げ過るとも、其の中の衆生は、己が往く所を、覺えず知らず。又復た還のごとく、本處に置くに、都べて人をして、往來の想を有たしめず。而も、此の世界の本相は故の如し。又、下方に於て、恒河沙等の、諸佛の世界を過ぎ、一佛土を取つて、上方に擧げ著くるに、恒河沙無數の世界を過ぐること、針〔鍼〕鋒を持つて、一棗〔棗〕葉を擧ぐるが如くして、而も嬈ます所無し。須彌山を以て、芥子の中に納〔內〕れ、四大海〔水〕を以て、一毛孔に入るゝも、亦復た是くの如し。其の中の衆生は、覺えず知らず。唯應に度すべき者のみ、乃ちこれを知見る。

と。已上。菩薩尚爾り、何に況や佛力をや。故に『度諸佛境界經』に云はく、

已上略抄。又。
蹈空行。而千輻輪。現於地際。
悦意妙香。鉢特摩華。自然踊出。
承如來足。若畜生趣。一切有情。
爲如來足。之所觸者。極滿七夜。
受諸快樂。命終之後。往生善趣。
樂世界中。
『寶積經』。若以卌里盤石。從色究竟天下。
經一萬八千。三百八十三年。到此
地。直下尙爾。推之應知。聲聞飛行。
如來飛行。展轉不可思議。『華嚴經』
慧林菩薩讃佛偈云。
自在神通力。無量難思議。
無來亦無去。說法度衆生。
應作是念。願我得神通。遊戲諸佛
土。

承く。若し畜生趣の、一切有情にして、如來の足に、觸れら
れ爲る者は、七夜を極滿るまで、諸の快樂を受け、命終の後、
善趣、樂世界の中に往生す。
と。『寶積經』に言ふ。若し四十里の盤（磐）石を以て、色究竟天より
下せば、一萬八千、三百八十三年を經て、此の地に到るといふ。
直下すら尙爾り。これを推して、應に知るべし。聲聞の飛行と、
如來の飛行とは、展轉して不可思議なることを。『華嚴經』の慧
林菩薩讃佛の偈に云はく、
自在神通力は　無量にして思議すること難し
來りもせず亦去りもせず　法を說いて衆生を度したまふ
と。應に是の念を作すべし「願はくば我神通を得て、諸の佛土
を遊戲せん」と。
七には、神通無礙を。『十住論』に云はく、
佛は、能く恒河沙等の世界を末（抹）にして、微塵の如くなら
しめ、又能く還のごとくに合せたまふ。或は又、能く無量無
邊、阿僧祇の世界を變じて、皆金銀等と作らしめ、又能く恒

應作是念。願我當得佛。金剛不壞身。

六飛行自在。『同論』云。

佛於虛空。舉足下足。行住坐臥。皆得自在。若大聲聞。神通自在。一日過五十三億。二百九十六萬六千。三千大千世界。如是聲聞。百歲所過。佛一念過。乃至恒河中沙。一沙爲一河。是諸恒河沙大劫。所過國土。佛一念中過。若欲蹈寶蓮華而去。卽能成辦。如是飛行。一切無礙。

『觀佛經』云。

於虛空。舉足行時。千輻輪相。皆雨八萬。四千蓮華。如是衆華。有塵數佛。亦步虛空。

六には、飛行自在を。『同論』に云はく、

佛は虛空に於て、舉足下足、行住坐臥、皆自在を得たまへり。大聲聞の若きは、神通自在にして、一日に五十三億、二百九十六萬六千の、三千大千世界を過ぐ。是くの如き聲聞の、百歲に過ぐる所を、佛は一念に過ぎたまふ。乃至恒河の中の沙の、一の沙を一河(劫)と爲し、是の諸の恒河沙の大劫に、過ぐる所の國土を、佛は一念の中に過ぎたまふ。若し寶蓮華を蹈んで、去らんと欲したまはゞ、卽ち能く成辦したまふ。是くの如き飛行、一切無礙なり。

と。『觀佛經』に云はく、

虛空に於て、足を舉げて行きたまふ時、(足の下の)千輻輪相の、(一一の輪相は、)皆八萬四千の、蓮華を雨す。是くの如き衆の華に、塵數の佛有つて、亦虛空を歩みたまふ。

と。已上、略抄す。又、

空を蹈んで行きたまふに、而も千輻輪は、地の際に現ず。悅意妙香の、鉢特摩華は、自然に踊(涌)き出して、如來の足を

及四大州。八萬小州。大山大海。高百踰繕那。乃至無量百千踰繕那。已碎末爲塵。又擊壞滅焰摩天宮。乃至遍淨天所有宮殿。亦皆散滅。卽以此風。吹如來衣。一毛端際。尚不能動。何況衣角。及全衣者。

已上。『十住論』云。

諸佛不可思議。假喩可知。假使一切。十方世界衆生。皆有勢力。設有一魔。有爾所勢力。復令十方。一一衆生。力如惡魔。欲共害佛。尚不能動佛一毛。況有害者。

『偈』云。

若諸世間中。欲有害佛者。

是事皆不成。以成不殺法。

繕那、乃至無量百千踰繕那にして、已に碎末いて塵と爲す。又〔上は〕焰摩天宮、乃至遍淨天の有らゆる宮殿を、擊ち〔散らし〕壞ち滅して、〔彼の諸の微塵〕、亦皆散滅す。卽ち此の風を以て、如來の衣を吹かんに、一毛の端際をも、尙動かすこと能はず。何に況や、衣の角、及び全衣をや。

と。已上。『十住論』に云はく、

諸佛の不可思議は、喩を假つて知る可し。假使一切十方世界の衆生をして、皆勢力有らしめ、設し一の魔有つて、爾所の勢力有らんに、復た十方の一一の衆生をして、力惡魔の如くならしめ、共に佛を害したてまつらんと欲すとも、尙佛の一毛をすら動かすこと能はず。況や害する者有らん。

と。『偈』に云はく、

若し諸の世間の中に　佛を害したてまつらんと欲せん者は

是の事皆成ぜず　不殺の法を成じたまへるを以てなり

と。應に是の念を作すべし「願はくば我當に、佛の金剛不壞身を得ん」と。

宮。卽前禮足。頭上金釵。墮落在地。求之不得。恠其所以。如來過去。足跡有千輻輪。現光明晃。七日卽滅。登時金釵。與地同色。是以不見。光滅後得釵。乃知爲殊特。王聞歡喜。心煥開悟。略抄。『華嚴經』偈云。

一一毛孔現光明。
普遍虛空發大音。
諸幽冥所靡不照。
地獄衆苦咸令滅。

應作是念。願佛光照我。滅生死業苦。

五無能害者。『寶積經』三十七云。

風劫起時。世有大風。名僧伽多。彼風擧此。三千世界。須彌鐵圍。

得ざりき。其の所以を恠しみしに、如來過ぎ去りたまひし足跡に、千輻輪有つて、光明を現じて晃き、七日にして卽ち滅せり。登時金の釵は、地と色を同じうし、是を以て見えざりき。光滅して後、釵を得たり。乃ち知らん、殊特たまひしことを」と。王聞いて歡喜し、心煥かに悟を開けり。

と。略抄す。『華嚴經』の偈に云はく、

一一の毛孔より光明（雲）を現し
普く虛空に遍して大音を發す
諸（所有）幽冥所（幽冥）を照さざる靡し
地獄の衆苦も咸滅せしめたまふ

と。應に是の念を作すべし「願はくば佛光我を照して、生死の業苦を滅しめたまへ」と。

五には、無能害者を。『寶積經』の三十七に云はく、

風（災）劫の起る時には、世に大風有り。僧伽多と名づく。彼の風（の吹く所）、此の三千世界、須彌（山）、鐵圍（山）、及び四大州（洲）、八萬の小州（少洲）、大山大海を擧ぐること、高さ百踰

不斷。隨意所願。得生其國。我說無量壽佛。光明威神。巍巍殊妙。晝夜一劫。尙不能盡。已上取意。『平等覺經』別云「頂光」。『觀經』總云「光明」。『譬喩經』第三。明釋迦文佛光明相云。

佛滅百年。有阿育王。國內民庶。歌佛遺典。王意不信念言。佛有何德。過踰於人。而共專信。誦習其文。卽問大臣。國中頗有見佛者。答曰。聞波斯匿王妹。出家作比丘尼。年在西垂。云言見佛。王卽自出。往詣問曰。道人見佛不耶。答云。實爾。問曰。有何殊異。道人曰。佛之功德。巍巍難量。非我愚賤。所能陳之。粗說一事。可知殊特。我時八歲。世尊來入王

はず。と。已上、取意す。『平等覺經』には別して「頂の光」と云ひ、『觀經』には總じて「光明」と云ふ。『譬喩經』の第三に、釋迦文佛の光明の相を明して云はく、

佛滅百年にして、阿育王有り、國內の民庶、佛の遺典を歌へり。王意に信ぜずして、念言へらく「佛に何なる德の、人より過踰たる有らん。而るを、共專ら信じて、其の文を誦み習ふや」と。卽ち大臣に問はく「國の中に、頗し佛を見し者有りや」と。答へて曰く「聞く、波斯匿王の妹、出家して比丘尼と作り、年西垂て在り。佛を見しと云言ふ」と。王卽ち自ら出でて、往詣いて問うて曰く「道人、佛を見しや不や」と。答へて云はく「實に爾り」と。問うて曰く「何の殊異有りしや」と。道人の曰く「佛の功德は、巍巍として量り難し。我が愚賤の、能くこれを陳ぶる所に非ざれども、粗一事を說かば、殊特を知りぬ可し。我、時に八歲なりき。世尊來つて王宮に入りたまへり。卽ち前んで足を禮したてまつりしとき、頭上の金の釵、墮落ちて地に在り。これを求めんとすれども、

諸佛光明。所不能及。或有佛光。照百佛世界。或千佛世界。取要言之。乃照東方。恒河沙佛刹。南西北方。四維上下。亦復如是。是故無量壽佛。號無量光佛。無邊光佛。無礙光佛。無對光佛。玄一師云。無與等故。炎王光佛。一師云。最勝自在故。清淨光佛。一云。滅三垢故。憬興師云。無貪善根所生故。歡喜光佛。一云。遇者悅意故。興云。無瞋所生故。智慧光佛。一云。智慧所發故。興云。無癡所生故。不斷光佛。一云。恒相續故。難思光佛。無稱光佛。一云。不可稱歎。盡其所有故。自餘名義。可知。不煩記。超日月光佛。若在三途。勤苦之處。見此光明。無復苦惱。壽終之後。皆蒙解脫。非但我今。稱其光明。一切諸佛。亦復如是。若有衆生。聞其光明。威神功德。日夜稱說。至心

し。是の故に無量壽佛をば、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、玄一師の云はく「ともに等しきもの無きが故に」と。炎王光佛、一師の云はく「最勝にして自在なるが故に」と。清淨光佛、一師の云はく「三垢を滅するが故に」と。憬興師の云はく「無貪の善根の生ずる所なるが故に」と。歡喜光佛、一〔師〕の云はく「遇ふ者悅意するが故に」と。興〔師〕の云はく「無瞋の生ずる所なるが故に」と。智慧光佛、一〔師〕の云はく「智慧の發する所なるが故に」と。興〔師〕の云はく「無癡の生ずる所なるが故に」と。不斷光佛、一〔師〕の云はく「恒に相續するが故に」と。難思光佛、無稱光佛、一〔師〕の云はく「其の所有を稱歎し盡す可からざるが故に」と。自餘の名義は、知る可し。煩はしく記さず。超日月光佛と號す。若し三途〔塗〕勤苦の處に在つて、此の光明を見たてまつれば、復た苦惱無く、壽終の後、皆解脫を蒙る。但我今其の光明を、稱めたてまつるのみに非ず。一切の諸佛も、亦復た是くの如し。若し衆生有つて、其の光明の、威神功德を聞いて、日夜に稱め說き、至心にして斷えざれば、意の所願の隨に、其の國に生るゝことを得。我、無量壽佛の、光明の威神、巍巍殊妙たることを說かんに、晝夜一劫のあいだすとも、尚盡すこと能

一一諸相莫不然。
是故見者無厭足。
應作是念。願我當見佛。無邊功德
相。
四光明威神。謂『平等覺經』云。
無量清淨。（無量清淨佛者。是阿彌陀佛也。）光明最尊。
第一無比。諸佛光明。皆所不及
也。有佛頂光明。照七尺。有佛照
一里。有佛五里。有佛二十里。四
十里。八十里。乃至百萬佛國。二
百萬佛國。八方上下。無央數諸
佛。頂光所照。皆如是也。無量清
淨佛。頂中光明。炎照千萬佛國。
（已上取意。私云。『觀經』云。「彼佛圓光。如百億大千界。」此『經』云。「頂中光照。千萬佛國。」二『經』意同耳。）
『雙觀經』云。
無量壽佛。威神光明。最勝第一。

の相を見たてまつらん」と。
四には、光明の威神を。謂はく、『平等覺經』に云はく、
無量清淨佛（「無量清淨佛」とは、是れ阿彌陀佛なり。）の光明は、最尊第一
にして比無く、諸佛の光明の皆及ばざる所なり。有る佛の頂
の光明は七尺〔丈〕を照し、有る佛は一里を照し、有る佛は五
里、有る佛は二十里、四十里、八十里、乃至百萬の佛國、二
百萬の佛國なり。八方上下、無央數の諸佛の、頂の光の照し
たまふ所、皆是くの如し。無量清淨佛の、頂の中の光明は、
千萬の佛國を、炎〔焰〕照したまふ。
と。已上、取意す。私に云はく、『觀經』には「彼の佛の圓光は、百億〔三千〕大千〔世〕界の如し」と云ひ、此の『經』には「頂の中の光は、千萬の佛國を照す」と云ふ。二の『經』の意、同じきのみと。『雙觀經』に云はく、
無量壽佛の、威神光明は、最勝〔尊〕第一にして、諸佛の光明
の、及ぶ能はざる所なり。或は佛光有つて、百佛世界を照し、
或は千佛世界〔を照す〕。要を取つて之を言はゞ、乃ち東方恒
河沙の佛刹を照す。南西北方、四維上下も、亦復た是くの如

宛轉右遶。如頗胝迦寶。明淨鮮白。夜闇之中。猶如明星。毫相舒之。上至色界。阿迦膩吒天。卷之如舊。復爲毫相。於眉間住。毫相功德。至百千倍。成肉髻相。如是肉髻。千倍功德。不及梵音。聲相功德。

又『寶積經』有無數挍量。學者可勘。

又『大集念佛三昧經』第五云。

如此世界。及十方無量無邊。諸世界中。所有衆生。假使盡皆。一時成佛。彼諸世尊。經無量劫。皆還歎佛一毛功德。終亦不盡。

已上。『華嚴』偈云。

清淨慈門刹塵數。
共生如來一妙相。

相はこれを舒ぶれば、上は色界の、阿迦膩吒天にまで至り、これを卷けば舊の如く、復た毫相と爲つて、眉間に於て住る。毫相の功德、百千倍に至つて、肉髻の相を成ず。是くの如き肉髻の、千倍の功德は、梵音聲相の、功德に及ばず。

と。又『寶積經』には、無數の挍量有り。學者勘ふ可し。又『大集念佛三昧經』の第五に云はく、

此の如き世界、及び十方の無量無邊の、諸の世界中の、有らゆる衆生、假〔設〕使盡く皆、一時に成佛して、彼の諸の世尊、無量劫の經、皆還た佛の一毛の功德を歎むるとも、終に亦盡くさじ。

と。已上。『華嚴』の偈に云はく、

清淨の慈門刹塵の數
共なつて如來の一妙相を生ず
一一の諸相然らずといふこと莫し
是の故に見たてまつる者厭足こと無し

と。應に是の念を作すべし「願はくば我、當に佛の邊無き功德

一得聞佛名。決定成菩提。『首楞嚴經』文。如下料簡門。應作是念。我今既得聞佛尊號。願我當作佛。如十方諸佛。三佛相好功德。『六波羅蜜經』云。於諸世間。所有三世。一切衆生。學無學人。及辟支佛。如是有情。無量無邊。所有功德。比於如來。一毛功德。百千萬分中。不及其一。如是一一毛端。皆從如來。無量功德。之所出生。一切毛端。所有功德。共成一髮功德。如是佛髮。八萬四千。一一髮中。各具如上功德。如是合集。共成一隨好功德。一切隨好功德。共成一相功德。一切相功德。合集至百千倍。成眉間毫相功德。其相圓滿。

と。『首楞嚴經』の文は、下の料簡門の如し。 應に是の念を作すべし「我、今既に佛の尊號を聞くことを得たり、願はくば我當に佛と作つて、十方の諸佛の如くならん」と。

三には、佛の相好の功德を。『六波羅蜜經』に云はく、

諸の世間に於ける、有らゆる三世、一切の衆生、〔有〕學、無學人、及び辟支佛、是くの如き有情の、無量無邊の、有らゆる功德は、如來の一毛の功德に比ぶるに、百千萬分の、其の一にも及ばず。是くの如き一一の毛端は、皆如來の無量の功德より、出生る所なり。一切の毛端の、有らゆる功德をもつて、共に一髮の功德を成ず。是くの如き佛の髮は、八萬四千あつて、一一の髮の中に、各〻上の如き功德を具す。是くの如く合せ集つて、共に一の隨好の功德を成じ、一切の隨好の功德をもつて、共に一の相の功德を成ず。一切の相の功德合せ集つて、百千倍に至り、眉間の〔白〕毫相の功德を成ず。其の相は圓滿にして、宛〔婉〕轉き右遶〔旋〕して、頗胝迦寶の如く、明淨鮮白なり。夜闇の中における、猶も明星の如し。毫

三藐三佛陀。名爲多陀阿伽度。名爲佛陀。阿難。若我廣說。此三句義。汝以劫壽。不能盡受。正使三千大千世界。滿中衆生。皆如阿難。多聞第一。得念總持。此諸人等。以劫之壽。亦不能受。

『要決』云。

『維摩經』云。「佛初三號。佛若廣說。阿難經劫。不能領受。」『成實論』釋佛之號。前之九號。皆從別義。總前九號。名義功德。爲佛世尊。說初三號。歷劫難周。阿難領悟。莫能具悉。更加六號。以製佛名。勝德既圓。念其大善也。

已上『要決』。『華嚴』偈云。

若有諸衆生。未發菩提心。

阿難、若し我廣く此の三句の義を說かば、汝劫壽を以てせんも、盡く受くること能はじ。正使三千大千世界の、中に滿てらん衆生をして、皆阿難の如く、多聞第一にして、念總持を得しむとも、此の諸の人等、劫の壽を以てせんも、亦受くること能はじ。

と。『要決』に云はく、

『維摩經』に云はく「佛の初の三の號を、佛若し廣く說かば、阿難は劫を經とも、領受すること能はじ」と。『成實論』に、佛の號を釋するに、前の九の號は、皆別義に從ひ、前の九の號の、名義の功德を總べて、佛世尊と爲す。初の三の號を說くすら、劫を歷とも周め難く、阿難の領悟すら、能く具悉すること莫し。更に六の號を加へて、以て佛の名を製したまへり。勝德既に圓かなれば、其れを念ずるは大善なり。

と。已上は、『要決』なり。『華嚴』の偈に云はく、

若し諸の衆生有つて　未だ菩提心を發さざらんも
一たび佛の名を聞くことを得ば　決定ず菩提を成ず

大願船。汎生死海。就此娑婆世界。呼喚衆生。令上大願船。送著西方。若衆生肯。上大願船者。竝皆得去。

此是易往也。『心地觀經』偈云。

衆生沒在生死海。
輪廻五趣無出期。
善逝恒爲妙法船。
能截愛流超彼岸。

應念我何時。乘悲願船去。

二名號功德。如『維摩經』言。

諸佛色身。威相種性。戒定智慧。解脫知見。力無所畏。不共之法。大慈大悲。威儀所行。及其壽命。說法教化。成就衆生。淨佛國土。具諸佛法。悉皆同等。是故名爲

生死の海に汎(浮)び、此の娑婆世界に就いて、衆生を呼喚つて、大願の船に上らしめ、西方に送り著けたまふ。若し衆生有つて、大願の船に上る者は、竝に皆去ることを得ん。

と。此れは、是れ往き易きなり。『心地觀經』の偈に云はく、

衆生は生死の海に沒在れ
五趣に輪廻して出づる期無し
善逝は恒に妙法の船と爲り
能く愛の流を截つて彼岸に超す

と。應に念ふべし「我、何れの時にか、悲願の船に乗つて去らん」と。

二には、名號の功德を。『維摩經』に言ふが如し。

諸佛の色身の威相、種性(姓)、戒、定、智慧、解脫、解脫知見、力、無所畏、不共の法、大慈大悲、威儀、所行、及び其の壽命、說法教化し、衆生を成就し、佛國土を淨め、諸の佛法を具するは、悉く皆同等なり。是の故に名づけて三藐三佛陀と爲し、名づけて多陀阿伽度と爲し、名づけて佛陀と爲す。

第三對治懈怠者。行人不能恒時勇進。或心蒙昧。或心退屈。爾時應寄。種々勝事。勸勵自心。或以三途苦果。比淨土功德。應作是念。我已惡道。經多劫無利勤苦尙能超。修行少行。得菩提大利。不應生退屈。惡趣苦。淨土相。一々如前。²或緣往生。淨土衆生。應作是念。十方世界諸有情。念念往生安樂國。彼既丈夫我亦爾。不應自輕生退屈。往生人。如下利益門。料簡門。³或應緣佛奇妙功德。

問。何等功德。

答。其事無邊。略擧其要。

一應思念。四十八本願。又『無量清淨覺經』云。

阿彌陀佛。與觀世音大勢至。乘

第三に對治懈怠

とは、「行人恒時に勇進すること能はず。」或は心蒙昧となり、或は心退屈せん。爾の時、應に種々の勝事に寄せて、自心を勸勵すべし。或は三途の苦果を以て、淨土の功德に比べ、應に是の念を作すべし「我已に惡道にして、多劫を經しに、無利の勤苦、尙能く超えき。少行を修行して、菩提の大利を得たらんには、應に退屈を生ずべからず」と。惡趣の苦と、淨土の相とは、一々前の如し。²或は淨土に往生する衆生を緣じて、應に是の念を作すべし「十方世界の諸の有情、念念に安樂國に往生す。彼既に丈夫なり、我も亦爾り。應に自ら輕んじて、退屈を生ずべからず」と。往生の人は、下の利益門、料簡門の如し。³或は應に佛の奇妙の功德を緣とすべし。

問ふ。何等の功德を〔緣とする〕や。

答ふ。其の事邊無し。略して其の要を擧げん。

一には、應に四十八の本願を思念すべし。又『無量淸淨覺經』に云はく、

阿彌陀佛は、觀世音、大勢至とともに、大願の船に乘つて、

念想難成。令聲不絕。至心便得。今此出聲。學念佛定。亦復如是。令聲不絕。遂得三昧。見佛聖衆。皎然目前。故『大集日藏分』言。「大念見大佛。小念見小佛。」大念者大聲稱佛也。小念者小聲稱佛也。斯卽聖教。有何惑哉。現見卽今諸修學者。唯須勵聲念佛。三昧易成。小聲稱佛。遂多馳散。此乃學者所知。非外人之曉矣。

已上。彼『經』但云。「欲多見多、欲小見小」等。云云。然感師既得三昧。彼所釋。應仰信受。更勸諸本。「小念見小。大念見大。」文出『日藏經』第九。

にして、至心に聲をして絶えざらしむ」と。豈、苦惱に逼られて、念想成じ難きも、聲をして絶えざらしめば、至心に便ち得るに非ずや。今、此の聲を出して、念佛定を學ぶも、亦復た是くの如し。聲をして絶えざらしめば、遂に三昧を得て、佛と聖衆の皎然として、常に目前に在るを見ん。故に『大集日藏分』に言はく「大念は大佛を見、小念は小佛を見る」と。大念とは、大聲に佛を稱するなり。小念とは、小聲に佛を稱するなり。斯れ卽ち聖教なり、何の惑ふこと有らん哉。現見卽今の、諸の修學者、唯須らく聲を勵まして佛を念ずべし。三昧成じ易からん。小聲に佛を稱するは、遂に馳散多し。此れ乃ち學者の知る所にして、外人の曉るところに非ず矣。と。

已上。彼の『經』には、但「多を欲すれば多を見、小を欲すれば小を見る」等と云ふ。云云。然るに感師は、既に三昧を得たまへり。彼の釋したまふ所、應に仰いで信受すべし。更に諸本を勘へよ。「小念は小を見、大念は大を見る」の文は、『日藏經』の第九に出でたり。

彼人念渡。念念相次。無餘心想間雜。或念佛法身。或念佛神力。或念佛智慧。或念佛毫相。或念佛相好。或念佛本願。稱名亦爾。但能專至。相續不斷。定生佛前。

已上。元曉師同之。

問。念佛三昧。爲唯心念。爲亦口唱。

答。如『止觀』第二云。

或唱念俱運。或先念後唱。或先唱後念。唱念相繼。無休息時。聲聲念念。唯在阿彌陀。

又感禪師云。

『觀經』言。「是人苦逼。不遑念佛。善友敎令。可稱阿彌陀佛。如是至心。令聲不絕。」豈非苦惱所逼。

彼の人の渡ることのみを念ふが如く、念念相ひ次いで、餘の心想の間雜はること無く、或は佛の法身を念じ、或は佛の神力を念じ、或は佛の智慧を念じ、或は佛の〔白〕毫相を念じ、或は佛の相好を念じ、或は佛の本願を念ぜよ。名を稱ふることも亦爾り。但能く專至して、相續して斷たざれば、定んで佛の前に生る。

と。已上。元曉師も、これに同じ。

問ふ。念佛三昧は、唯心に念ずるのみと爲すや、亦口にも唱ふると爲すや。

答ふ。『止觀』の第二に云ふが如し。

或は唱と念と俱に運び、或は先に念じ後に唱へ、或は先に唱へ後に念じ、唱念相ひ繼いで、休息する時無し。聲聲念念、唯阿彌陀に在り。

と。又、感禪師の云はく、

『觀經』に言はく「是〔此〕〔彼〕の人苦に逼られて、念佛するに遑あらず。善友敎令へて、阿彌陀佛を稱すべしと。是くの如く

稱阿彌陀佛。觀音勢至諸菩薩。清淨大海衆竟。而發見佛菩薩。及極樂界相之願。卽隨意入觀。及睡得見。除不至心。

[4]問。行者常途。計念往生。其相似何。

答。前所引『要決』。欲歸本國之譬。是其相也。又『安樂集』云。

譬如有人。於空曠迥處。値遇怨賊。拔劍奮勇。直來欲殺。此人徑走。觀渡一河。未及到河。卽作此念。我至河岸。爲脱衣渡。爲著衣浮。若脱衣渡。唯恐無暇。若著衣浮。復畏首領難全。爾時但有一心。作渡河方便。無餘心想間雜。行者亦爾。念阿彌陀佛時。亦如

菩薩、及び極樂界の相を見たてまつらんとの願を發せ。卽ち意の隨に、入觀及び睡〔時〕に見たてまつることを得。至心ならざるを除く。

と。

[4]問ふ。行者常途に、往生を計念する、其の相何に似たるや。

答ふ。前に引ける『要決』の、本國に歸らんと欲するの譬、是れ其の相なり。又『安樂集』に云はく、

譬へば人有つて、空曠の迥かなる處に於て、怨賊の劍〔刀〕を拔き、勇を奮ひ、直ちに來つて殺さんと欲するに値遇ふ。此の人、徑に走つて、一河の渡るべきを觀〔視〕る。未だ河に到るに及ばざるに、卽ち此の念を作す「我、河の岸に至りなば、衣を脱いで渡るとや爲ん、衣を著て浮ぶとや爲ん。若し衣を脱いで渡らば、唯恐らくは暇無からん。若し衣を著て浮ばゞ、復た首領全うし難からんことを畏る」と。爾の時、但一心に渡河の方便を作すことのみ有つて、餘の心想間雜はること無からんが如し。行者も亦爾り。阿彌陀佛を念ずるの時も、亦

聲一聲等。定得往生。乃至一念。無有疑心。三廻向發願心。謂所作一切善根。悉皆廻向。願往生故。具此三心。必得往生。若少一心。卽不得生。

略抄之。『經』文雖在上品上生。如禪師釋者。理通九品。餘師釋不能具。『鼓音聲經』云。

若能深信。無狐疑者。必得往生。阿彌陀佛國。

『涅槃經』云。

阿耨菩提。信心爲因。是菩提因。雖復無量。若說信心。則已攝盡。

已上。明知。修道以信爲首。又善導和尚云。

若入觀及睡時。應發此願。若坐若立。一心合掌。正面向西。十聲

一念も、疑心有ること無き〔が故に〕。三に廻向發願心とは、謂はゆる所作一切の善根を、悉く皆廻向して、往生せんと願ふが故なり。此の三心を具すれば、必ず往生することを得るなり。若し一心をも少かば、卽ち生るゝことを得ず。

と。これを略抄す。『經』の文は、上品上生に在りと雖も、禪師の釋の如くんば、理九品に通ず。餘師の釋は、具にすること能はず。『鼓音聲經』に云はく、

若し能く深く信じて、狐疑無き者は、必ず阿彌陀佛の國に、往生することを得。

と。『涅槃經』に云はく、

阿耨菩提は、信心をもつて因と爲す。是の菩提の因は、復た無量なりと雖も、若し信心を說かば、則ち已に攝め盡す。

と。已上。明かに知んぬ、道を修するには、信を以て首と爲すことを。又、善導和尚の云はく、

若し入觀及び睡眠の時、應に此の願を發すべし。若しは坐り、若しは立つて、一心に合掌し、正しく面を西に向け、十聲「阿彌陀佛、觀音勢至諸菩薩、淸淨大海衆」と稱へ竟つて、佛、

璃王行。又迦才『淨土論』云。
譬如龍行。雲卽隨之。心若西逝。
業亦隨之。
云云。
○問。既知修行。總有四相。其修行
時。用心云何。
答。『觀經』云。
若有衆生。願生彼國者。發三種
心。卽便往生。一至誠心。二深心。
三廻向發願心。
善導禪師云。
一至誠心。謂禮拜讃歎念觀。三
業必須眞實故。二深心。謂信知
自身是具足煩惱凡夫。善根薄少。
流轉三界。未出火宅。今信知彌
陀本弘誓願。及稱名號。下至十

の行の如くす應し。又、迦才の『淨土論』に云はく、
譬へば、龍の行くときは、雲卽〔則〕ちこれに隨ふが如く、心
若し西に逝れば、業も亦これに隨ふ。
と。云云。
○問ふ。既に知んぬ、修行には總じて四〔種〕の相有ることを。
其の修行の時の用心は、云何ん。
答ふ。『觀經』に云はく、
若し衆生有つて、彼の國に生れんと願ふ者は、三種の心を發
して、卽便ち往生す。一には至誠心、二には深心、三に
は廻向發願心なり。
と。善導禪師の云はく、
一に至誠心とは、謂はゆる禮拜、讃歎、念觀の三業、必ず眞
實なるべきが故に。二に深心とは、謂はゆる自身は是れ煩惱
を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流轉し、火宅を出
でずと信知し、今彌陀の本弘誓願と、及び名號を稱すること、
下十聲一聲等に至るまで、定んで往生を得と信知して、乃至

導師云。
專稱彼佛名。專念專想。專禮專讚。彼佛及一切聖衆等。不雜餘業。
已上。

[1]問。其餘事業。有何過失。
答。『寶積經』九十二云。
若有菩薩。樂作世業。營於衆務。爲所不應。我說是人。住於生死。
又同『偈』云。
戯論諍論處。多起諸煩惱。
智者應遠離。當去百由旬。
云云。自餘方法。具如『止觀』。

[2]問。若爾在家人。難堪念佛行。
答。世俗人難棄緣務。但常繫念西方。誠心應念彼佛。如『木槵經』瑠

と。導師の云はく、
專ら彼の佛の名を稱し、彼の佛及び一切の聖衆等を專ら念じ、專ら想ひ、專ら禮し、專ら讃して、餘の業を雜へざれ。
と。已上。

[1]問ふ。其の餘の事業に、何の過失有りや。
答ふ。『寶積經』の九十二に云はく、
若し菩薩有つて、樂うて世の業を作し、衆の務を營まば、應ぜざる所と爲す。我說く、是の人は生死に住る、と。
と。又、同〔經〕の『偈』に云はく、
戯論諍論の處は　多く諸の煩惱を起す
智者應に遠く離れて　百由旬を去つべし
と。云云。自餘の方法は、具には『止觀』の如し。

[2]問ふ。若し爾らば、在家の人は、念佛の行に堪へ難からん。
答ふ。世俗の人は、緣務を棄つること難ければ、但常に念を西方に繫けて、誠心に彼の佛を念ずること、『木槵經』の瑠璃王

夜驚忙。發心願往。所以精勤不倦。當念佛恩。報盡爲期。心恒計念。

導師云。

心心相續。不以餘業間。又不以貪瞋等間。隨犯隨懺。不令隔念。隔時隔日。常令清淨。

私云。

晝夜六時。或三時二時。要具方法。精勤修習。其餘時處。不求威儀。不論方法。心口無廢。常應念佛。

四者無餘修。『要決』云。

專求極樂。禮念彌陀。但諸餘業行。不令雜起。所作之業。日別須修。念佛讀經。不留餘課耳。

忽ち彌陀慈父の、弘願に違はずして、群生を濟拔ひたまふことを聞き、日夜に驚忙しくして、發心して往かんことを願ふ。所以に精勤倦まずして、當に佛恩を念ひ、報の盡くるを期と爲して、心に恒に計念すべし。

と。導師の云はく、

心心相續して、餘の業を以て間へず、又貪瞋等（煩惱）を以て間へず、隨犯隨懺して、念を隔て、時を隔て、日を隔てしめず、常に清淨ならしめよ。

と。私に云はく、

晝夜六時、或は三時、二時に、要ず方法を具して、精勤修習せよ。其の餘の時處は、威儀を求めず、方法を論ぜず、心と口に廢すること無く、常に佛を念ず應し。

と。四には、無餘修。『要決』に云はく、

專ら極樂を求めて、彌陀を禮念し、但て諸餘の業行は、雜起せしめざれ。所作の業は、日別に須らく念佛、讀經を修して、餘課を留めざるべき耳。

面向西方者最勝。如樹先傾倒必隨曲。必有事礙。不及向西方者。但作向西想亦得。

三者無間修。『要決』云。

謂常念佛。作往生心。於一切時。心恒想巧。譬若有人。被他抄掠。身爲下賤。備受艱辛。忽思父母。欲走歸本國。行裝未辨。由在他鄉。日夜思惟。苦不堪忍。無時暫捨。不念爺孃。爲計既成。便歸得達。親近父母。縱任歡娛。行者亦爾。往因煩惱。壞亂善心。福智珍財。幷皆散失。久沈生死。制不自由。恒與魔王。而作僕使。驅馳六道。苦切身心。今遇善縁。忽聞彌陀慈父。不違弘願。濟拔群生。日

と。導禪師の云はく、

面を西方に向くる者、最も勝れたり。樹の先の傾けるが倒るるには、必ず曲れるに隨ふが如し。故に必ず事の礙有つて、西方に向くに及ばざる者は、但西に向く想を作すも亦得たり。

と。三には無間修。『要決』に云はく、

謂はく、常に佛を念じ、往生の心を作して、一切の時に於て、心恒に想ひ巧め。譬へば、人有つて、他に抄掠られ、身下賤と爲つて、備に艱辛を受く。忽ち父母を思ひ、走つて歸國せんと欲すれども、行裝未だ辨はざれば、由他鄉に在つて、日夜に思惟す。苦忍ぶに堪へざれども、時暫くも捨てゝ、爺孃を念はざること無し。計を爲すこと既に成つて、便ち歸つて達することを得、父母に親近して、縱任に歡び娛しまんがごとし。行者も亦爾〔然〕なり。往、煩惱に因つて、善心を壞亂し、福智の珍財、幷に皆散失せり。久しく生死に沈〔流〕んで、制すること自由ならず。恒に魔王のために、僕使と作つて、六道に驅馳せられ、身心を苦切す。今、善縁に遇うて、

自圓滿。其文不異通途所用。故不更抄。」若用念珠時。欲求淨土。用木槵子。欲多功德。用菩提子。乃至或水精蓮子等。見『念珠功德經』。

第二修行相貌者。依『攝論』等。用四修相。一者長時修。『要決』云。

從初發心。乃至菩提。恒作淨因。終無退轉。

善導禪師云。

畢命爲期。誓不中止。

二者慇重修。謂於極樂。佛法僧寶。心常憶念。專生尊重。『要決』云。

行住坐臥。不背西方。涕唾便痢。不向西方。

導禪師云。

惱は自ら減少し、六度は自ら圓滿せん。其の『文』は、通途の所用に異ならず。故に更に抄せず。」若し念珠を用ふる時には、淨土を求めんと欲せば、木槵子を用ひ、功德多からんことを欲せば、菩提子、乃至或は水精、蓮子等を用ひよ。『念珠功德經』を見よ。

第二に修行の相貌

とは、『攝論』等に依つて、四修の相を用ふ。一には長時修。『要決』に云はく、

初發心より、乃至菩提まで、恒に淨因を作して、終に退轉無し。

と。善導禪師の云はく、

畢命を期と爲し、誓つて中止せざれ。

と。二には慇重修。謂はく、極樂の佛法僧寶を、心に常に憶念して、專ら尊重を生すなり。『要決』に云はく、

行住坐臥、西方を背にせず、涕唾便利は、西方に向つてせざれ。

大文第五。助念方法者。一目之羅。不能得鳥。萬術助觀念。成往生大事。今以七事。略示方法。一方處供具。二修行相貌。三對治懈怠。四止惡修善。五懺悔衆罪。六對治魔事。七總結行要。

第一方處供具者。內外俱淨。卜一閑處。隨力辨於。華香供具。若有闕少。華香等事。但專念佛。功德威神。若親對佛像。須辨燈明。若遙觀西方。或須闇室。（感禪師許闇室。）若供華香時。須依『觀佛三昧經』供養文意。其所得福。無量無邊。煩惱自滅少。六度

大文第五に助念の方法

とは、一目の羅(あみ)をもつては、鳥を得ること能はず、萬術(いろいろのてだて)をもつて觀念を助けて、往生の大事を成ず。今、七事を以て、略して方法を示さん。一には方處供具(ねんぶつするはしよとそなへもの)、二には修行の相貌(ねんぶつをしゆするありさま)、三には對治懈怠(おこたりがちなるをとどむること)、四には止惡修善(あくをやめてぜんをなすこと)、五には懺悔衆罪(もろもろのつみをくひあらたむること)、六には對治魔事(いろいろのじやまをとどむること)、七には總結要行(わうじやうのえうぎやうをむすぶ)なり。

第一に方處供具(ねんぶつするはしよとそなへもの)

とは、內(こころ)、外(からだとも)俱に淨く、一の閑處を卜(し)め、力に隨つて華香供具(はなかうそのたのそなへもの)を辨へよ。若し華香等の事に闕少(かく)ること有らば、但(ただ)專ら佛の功德威神を念ぜよ。若し親り(まのあた)佛像に對せんには、燈明を辨ずべく、若し遙かに西方を觀ぜんには、或は闇室を須(もち)ひよ。（感禪師は、闇室を許せり。）若し華香を供ふる時は、『觀佛三昧經』の、供養の文の意に依るべし。其の得るところの福は、無量無邊にして、煩

順土風。置之末後。言薩婆若。卽是菩提。如前『論』文。

[10]問。有相廻向。無利益耶。

答。如上數論。雖有勝劣。猶有巨益。如『大論』第七云。

有小因大果。小緣大報。如求佛道。讃一偈。一稱南無佛。燒一捻香。必得作佛。何況聞知。諸法實相。不生不滅。不々生不々滅。而行因緣業。亦不失。

已上。此『文』深妙。髻中明珠。則知。我等成佛無疑。

歸命龍樹尊。　證成我心願。

---

[9]問ふ。最後に何の意あつてか、唱へて「大菩提に廻向す」と言ふ耶。

答ふ。此れは是れ薩婆若と相應せしむるなり。此れも亦土の風に順つて、これを末後に置く。薩婆若と言ふは、卽ち是れ菩提なり。前の『論』の文の如し。

[10]問ふ。有相の廻向には、利益無き耶。

答ふ。上に數々論ぜしが如し。勝劣有りと雖も、猶巨なる益有り。『大論』の第七に云ふが如し。

小因をもつて大果をえ、小緣をもつて大報をうること有り。佛道を求めて一偈を讃み、一たび南無佛と稱へ、一捻の香を燒かんも、必ず佛と作ることを得るが如し。何に況や、「諸法は實に生ぜず、滅せず、不生にもあらず、不滅にもあらず」と聞き知つて、而も因緣の業を行ずれば、亦失はざるなり。

と。已上。此の『文』、深妙なり。髻中の明珠なり。則ち知る、我等の成佛せんこと疑ひ無きことを。

龍樹尊に歸命したてまつる　我が心の願を證成したまへ

之。更撿『論』文。
[7]問。次何故。觀所有事。悉令空耶。
答。『論』云。
著心取相菩薩。修福德。如草生火。易可得滅。若體得實相菩薩。以大悲心。行衆行。難可得破。如水中火。無能滅者。
[8]問。若爾應唱。言空無所得。何故今云。廻施法界。
答。理實可然。然今順於國土風俗。故云法界。理亦無違。所以然者。法界卽是。圓融無作。第一義空。以所修善。廻趣相應。彼第一義空。名廻施法界。
[9]問。最後何意唱言。廻向大菩提耶。
答。此是令與薩婆若相應也。此亦

答ふ。『論』に廻向を明すに、これを分つて二と爲せり。故に、今もこれに順ふ。更に『論』の文を撿へよ。
[7]問ふ。次に何が故に、有らゆる事を觀じて悉く空ならしむる耶。
答ふ。『論』に云はく、
著心取相の菩薩の修せる福德は、草より生ぜる火の、滅すことを得可きこと易きが如し。若し實相を體得せる菩薩の、大悲心を以て行へる衆の行は、破ることを得可きこと難し、水の中の火の、能く滅すもの無きが如し。
と。
[8]問ふ。若し爾らば、應に唱へて「空にして、得るところ無し」と言ふべし。何が故に、今「法界に廻施す」と云ふや。
答ふ。理、實に然る可し。然れども、今は國土の風俗に順ふが故に「法界」と云ふ。理、亦違ふこと無し。然る所以は、法界は卽ち是れ圓融無作の第一義空なり。修するところの善を以て廻趣して、彼の第一義空と相應せしむるを、「法界に廻施す」と名づくるなり。

譬如慳貪人。無因緣。乃至一錢不施。貪慳積聚。但望增長。菩薩亦如是。福德若多若少。不向餘事。但愛惜積集。向薩婆若。已上。

4問。若爾唯應廻向菩提。何故更云往生極樂。

答。菩提是果報。極樂是花報。求果之人。盍期花耶。是故九品業皆云。廻向願求生極樂國。

5問。發願廻向。有何差別。

答。誓期所求。名之爲願。廻所作業。趣向於彼。謂之廻向。

6問。薩婆若與無上菩提。二無差別。何分爲二。

答。『論』明廻向。分之爲二。故今順

論』に云はく、

譬へば、慳貪の人、因緣無くんば、乃至一錢をも施さず、貪惜み積聚めて、但增長さんことを望むが如し。菩薩も、亦是くの如し。福德の、若しは多きもの若しは少きもの、餘の事に向へず、但愛惜み積集めて、薩婆若に向はしむ。

と。已上。

4問ふ。若し爾らば、唯應に菩提に廻向すべし。何が故に、更に極樂に往生すと云ふや。

答ふ。菩提は是れ果報にして、極樂は是れ花報なり。果を求むる人、盍ぞ花を期せざらん耶。是の故に九品の業には、皆「廻向して極樂國に生れんと願ひ求む」と云へり。

5問ふ。發願と廻向と、何の差別有りや。

答ふ。誓つて求むるところを期す、これを名づけて願と爲し、所作の業を廻らして彼に趣き向はしむ、これを廻向と謂ふ。

6問ふ。薩婆若と無上菩提と、二つ差別無し。何ぞ分つて二と爲すや。

小分布施。廻向發願。與一切衆生。同證無上。正等菩提。以是功德。無量無邊。猶如小雲。漸遍法界。

乃至。以一華一果施。亦爾。『大論』意亦同之。『寶積經』卌六云。

菩薩摩訶薩。所有已生。諸妙善根。一切廻向。無上菩提。令此善根。畢竟無盡。譬如小水。投于大海。乃至劫燒中無有盡。

又『大莊嚴論』偈云。

行施不求妙色財。
亦不願感天人趣。
專求無上勝菩提。
施微便感無量福。

已上。故以諸善根。盡廻向佛道。又『大論』云。

云何にして少施の功徳多き耶。方便力を以て、少分の布施を廻向して發願すらく「一切の衆生とゝもに、同じく無上正等の菩提を證せん」と。是を以て、功德の無量無邊なること、猶も少かの雲の漸く法界に遍するが如し。

と。乃至、一華一果を以て施すも亦爾り。『大論』の意も亦これに同じ。『寶積經』の四十六に云はく、

菩薩摩訶薩は、有らゆる已生の諸の妙善根を、一切無上の菩提に廻向し、此の善根をして畢竟盡くること無からしむ。譬へば、少水を大海に投るゝに、乃至劫燒の中にも、盡くること有ること無きが如し。

と。又『大莊嚴論』の偈に云はく、

施を行すに妙色財を求めず
亦天人の趣を感ぜんことをも願はず
專に無上の勝れたる菩提を求むれば
微を施して便ち無量の福を感く

と。已上。故に諸の善根を以て、盡く佛道に廻向するなり。又『大

以三世善根。而無所着。無相離
相。悉以廻向。
『刊定記』有二釋。一未來善根。雖
未有。今若發願。願薫成種。攝持力
故。未來所修。任運注向。衆生菩提。
不待更廻向也。二依此教中。菩薩
乃至。修一念善。攝法性故。遍於九
世。故用彼善根。廻向也。
[2]問。第二何名薩婆若相應心。
答。『論』云。
阿耨菩提意。卽是應薩婆若心。
應者繫心。願我當作佛。
[3]問。第三第四。何故要共。一切衆
生。及以廻向。無上菩提。
答。『六波羅蜜經』云。
云何少施功德多耶。以方便力。

離れて、悉く以て廻向す。
と。『刊定記』に二の釋有り。一は、未來の善根は未だ有らずと
雖も、今若し願を發さば、願薫じて種を成じ、攝持する力の故
に、未來の所修を、任運に衆生と菩提とに注ぎ向け、更に廻向
を待たずとなり。二は、此の教の中に依れば、菩薩の、乃至一
念の善を修するも、法性を攝するが故に九世に遍す、故に彼の
善根を用つて廻向すとなり。
[2]問ふ。第二を何をもつてか、薩婆若と相應する心と名づくる
や。
答ふ。『論』に云はく、
阿耨〔多羅三藐三〕菩提の意は、卽ち是れ薩婆若心に應ず。應
とは、心を繫けて「我當に佛と作らん」と願ふなり。
と。
[3]問ふ。第三と第四とは、何が故に、要ず一切衆生と共にし、
及び無上の菩提に廻向するや。
答ふ。『六波羅蜜經』に云はく、

第五明迴向門者。五義具足。是眞迴向。」一聚集三世。一切善根。『華嚴經』意。二薩婆若心相應。三以此善根。共一切衆生。四迴向無上菩提。五觀能施所施。施物皆不可得。能令諸法實相和合。『大論』意。2依此等義。心念口言。所修功德。及以三際。一切善根。其一。迴向自他法界。一切衆生。平等利益。其二。滅罪生善。共生極樂。普賢行願。速疾圓滿。自他同證。無上菩提。盡未來際。利益衆生。其三。迴施法界。其四。迴向大菩提。其五。

1問。未來善根未有。以何迴向。

答。『華嚴經』說第三迴向菩薩行相云。

第五に迴向門

を明さば、五義具足するもの、是れ眞の迴向なり。」一には、三世の一切善根を聚集む。『華嚴經』の意。二には、薩婆若〔を求むる〕心と相應す。三には、此の善根を以て一切の衆生と共にす。四には、無上の菩提に迴向す。五には能施も所施も施物も皆不可得なりと觀じて、諸法の實の相と和合せしむるなり。『大論』の意。2此れ等の義に依つて、心に念じ、口に言ひ、修するところの功德と、及び三際一切の善根とを、其の一。自他法界の一切衆生に迴向して、平等に利益し、其の二。罪を滅し善を生じて、共に極樂に生れ、普賢の行願を速かに疾く圓滿し、自他同じく無上の菩提を證して、未來際を盡すまで衆生を利益し、其の三。法界に迴施して、其の四。大菩提に迴向するなり。其の五。

1問ふ。未來の善根は未だ有らず、何を以てか迴向せん。

答ふ。『華嚴經』に第三迴向の菩薩の行相を說いて云はく、三世の善根を以て、而も着するところ無く、相無く、相を

5問。觀白毫一相。亦名三昧耶。
答。爾。故『觀佛經』第九云。
若能繫心。觀一毛孔。是人名爲行念佛定。以念佛故。十方諸佛。常立其前。爲說正法。此人卽爲能生三世。諸如來種。何況具足。念佛色身。
6問。何故不觀。淨土莊嚴耶。
答。今爲不堪。廣行之者。唯勸略觀。若欲觀者。應讀『觀經』何況前明十種事。卽是淨土莊嚴也。
7問。何故不觀。觀音勢至耶。
答。略故不述。念佛已後。應觀二菩薩。或稱名號。多少隨意。

の別時の行、及び利益門に至つて、應に知るべし。

5問ふ。白毫の一相を觀ずるも、亦三昧と名づくる耶。
答ふ。爾り。故に『觀佛經』の第九に云はく、
若し能く心を繫〔係〕けば、一の毛孔を觀ずるも、是の人を名づけて念佛定を行ずと爲す。念佛するを以ての故に、十方の諸佛常に其の前に立ち、爲に正法を說きたまふ。此の人、卽ち能く三世の諸の如來の種を生ずと爲す。何に況や、具足して佛の色身を念ぜんをや。
と。
6問ふ。何が故に淨土の莊嚴を觀ぜざる耶。
答ふ。今は廣き行に堪へざる者の爲に、唯略觀を勸むるなり。若し觀ぜんと欲ふ者は、應に『觀經』を讀むべし。何に況や、前に十種の事を明せり。卽ち是れ、淨土の莊嚴なり。
7問ふ。何が故に觀音と勢至を觀ぜざる耶。
答ふ。略の故に述べざりしかども、佛を念じ已つて後は、應に二菩薩を觀ずべし。或は名號を稱へよ、多少は意に隨へ。

毫相光。亦復覆護。暫聞是語。除三劫罪。後身生處。生諸佛前。如是種々。百千億種。諸觀光明。微妙境界。不可悉說。念白毫時。自然當生。

又云。

麁心觀像。尚得如是。無量功德。況復繫念。觀佛眉間。白毫相光。

又云。

釋迦文佛。現行者前。告言。汝修觀佛三昧力。故我以涅槃相力。示汝色身。令汝諦觀。汝今坐禪。不得多觀。汝後世人。多作諸惡。但觀眉間。白毫相光。作此觀時。所見境界。如上所說。

已上略抄。上所說者。見佛種々境界也。諸餘利益。至下別時行。及利益門。應知。

是の處有ること無けん。縱使瞋を生ぜんも、白毫相の光、亦復た覆ひ護るなり。暫くも是の語を聞かば、三劫の罪を除き、後身の生處は、諸佛の前に生る。是くの如き、種々百千億種の、諸の光明を觀る微妙の境界は、悉く說く可からず。白毫を念ずる時、自然に當に生ずべし。

と。又、云はく、

麁心をもつて像を觀ずるも、尚是くの如き無量の功德を得。況や、復た念を繫けて、佛の眉間の白毫相の光を觀ぜんをや。

と。又、云はく、

釋迦文佛、行者の前に現（住）じて告げて言はく「汝、觀佛三昧力を修す。故に我涅槃相の力を以て、汝に色身を示し、汝をして諦かに觀ぜしむ。汝今坐禪するも、多く觀ずることを得ず。汝より後の世の人は、多く諸の惡を作せば、但眉間の白毫相の光を觀ぜよ。此の觀を作す時、見るところの境界は、上に說くところの如し。

と。已上。略抄す。「上に說くところ」とは、佛の種々の境界を見るなり。諸の餘の利益は、下

差別相。
問。諸相功德。肉髻梵音。是爲最勝。今多勸白毫。有何證據耶。
答。其證甚多。略出一兩。『觀經』云。
觀無量壽佛者。從一相好入。但觀眉間白毫。極令明了。見眉間白毫者。八萬四千相好。自然當見。
又『觀佛經』云。
如來有無量相好。一々相中。八萬四千。諸小相好。如是相好。不及白毫。小分功德。是故今日。爲於來世。諸惡衆生。說白毫相。大惠光明。消惡觀法。若有邪見。極重惡人。聞此觀法。具足相貌。生瞋恨心。無有是處。縱使生瞋。白

具す。是くの如く、一行三昧に入る者は、盡く恒沙の諸佛の法界の、差別無き相を知る。
と。
問ふ。諸相の功德は、肉髻と梵音と、是れを最も勝れたりと爲す。今多く白毫を勸むるは、何の證據有り耶。
答ふ。其の證甚だ多し。略して、一兩を出さん。『觀經』に云はく、
無量壽佛を觀ぜん者は、一の相好より入れ。但眉間の白毫を觀じては、極めて明了ならしめよ。眉間の白毫を見ば、八萬四千の相好、自然に當に見るべし。
と。又『觀佛經』に云はく、
如來に無量の相好有つて、一々の相の中に、八萬四千の諸の小相好あり。是くの如き相好は、白毫の少分の功德にも及ばず。是の故に今日、來世の諸の惡衆生の爲に、白毫相の大慧光明の、惡を消す觀法を說く。若し邪見、極重の惡人有つて、此の觀法は相貌を具足すと聞いて、瞋恨の心を生ずといはゞ、

念阿彌陀佛。卽是念一切佛。故『華嚴經』云。

一切諸佛身。卽是一佛身。
一心一智慧。力無畏亦然。

已上。又『觀佛三昧經』云。

若思惟一佛。卽見一切佛。

云云。

[3]問。爲如諸佛體性無二。念者功德亦無別耶。

答。等無差別。故『文殊般若經』下卷云。

念一佛功德無量無邊。亦與無量諸佛功德無二。不思議佛法。等無分別。皆乘一如。成最正覺。悉具無量。功德辯才。如是入一行三昧者。盡知恒沙諸佛法界。無

答ふ。天台大師の云はく、

阿彌陀佛を念ずれば、卽ち一切の佛を念ずるなり。故に『華嚴經』に云はく、

一切諸佛の身は、卽〔唯〕ち是れ一佛〔法〕身なり
一心、一智慧なり、力、無畏も亦然り

と。

と。已上。又『觀佛三昧經』に云はく、

若し一佛を思惟すれば、卽ち一切佛を見たてまつる。

と。云云。

[3]問ふ。諸佛の體性無二なるが如く、念ずる者の功德も亦別無しと爲す耶。

答ふ。等しうして差別無し。故に『文殊般若經』の下卷に云はく、

一佛の功德の無量無邊なるを念ずれば、亦無量の諸佛の功德と無二なり。不思議の佛法は、等しうして分別無く、皆一如に乘じて最正覺を成じ、悉く無量の功德と〔無量の〕辯才とを

稱念。已上。意樂不同故。明種々觀。[3]行住坐臥。語默作作。常以此念。在於胸中。如飢念食。如渴追水。或低頭擧手。或擧聲稱名。外儀雖異。心念常存。念々相續。寤寐莫忘。

[1]問。彼佛眞身。非是凡夫。心力所及。但應觀像。何觀大身。

答。『觀經』云。

無量壽佛。身量無邊。非是凡夫。心力所及。然彼如來。宿願力故。有憶想者。必得成就。但想佛像。得無量福。況復觀佛。具足身相。

已上。明知。初心亦隨樂欲。得觀眞身。

[2]問。所言彌陀一身。卽一切佛身者。有何證據。

答。天台大師云。

觀を明す。[3]行住坐臥、語默作作に、常に此の念を以て胸の中に在くこと、飢ゑたるものゝ食を念ふが如く、渴けるものの水を追ふが如くにせよ。或は頭を低げ、手を擧げ、或は聲を擧げ、名を稱へ、外の儀は異なると雖も、心の念は常に存せよ。念々に相續して、寤寐に忘るゝこと莫れ。

[1]問ふ。彼の佛の眞身は、是れ凡夫の心力の及ぶところに非ざれば、但應に像を觀ずべし。何ぞ大身を觀ぜん。

答ふ。『觀經』に云はく、

無量壽佛は、身の量無邊なり。是れ凡夫の心力の及ぶところに非ず。然れども、彼の如來の宿願力の故に、憶想すること有る者は、必ず成就することを得。但佛の像を想ふすら、無量の福を得。況や、復た佛の具足せる身の相を觀ぜんをや。

と。已上。明かに知る、初心のものも亦樂ひ欲するに随つて、眞身を觀ずるを得といふことを。

[2]問ふ。云ふところの、彌陀の一身は卽ち一切佛の身なりとは、何の證據有りや。

音。宣暢諸法海。又彼一々光明。遍照十方世界。念佛衆生。攝取不捨。我亦在彼。攝取之中。煩惱障眼。雖不能見。大悲無倦。常照我身。²或應起自心。生極樂國。於蓮華中。結跏趺坐。作蓮華合想。尋蓮華開時。瞻仰尊顏。觀白毫相。時有五百色光。來照我身。卽見無量化佛菩薩。滿虛空中。水鳥樹林。及與諸佛。所出音聲。皆演妙法。如是思想。令心欣悅。願共諸衆生。往生安樂國。已上。依『觀經』『華嚴經』等意。具在別卷。」若樂極略者應念。彼佛眉間白毫相旋轉。猶如頗梨珠。光明遍照攝我等。願共衆生々彼國。²若有不堪觀念相好。或依歸命想。或依引攝想。或依往生想。應一心

世界を照し、念佛の衆生を攝め取つて捨てず。我も亦、彼の攝取の中に在り。煩惱に眼を障へられて見ること能はずと雖も、大悲は倦くこと無く常に我が身を照したまふ。²或は應に自心を起して、極樂國に生れ、蓮華の中に於て結跏趺坐り、蓮華合するの想を作すべし。尋いで蓮華開く時、尊顏を瞻仰し、白毫相を觀たてまつる、と。時に五百色の光有り、來つて我が身を照す。卽ち無量の化佛菩薩の、虛空の中に滿てるを見る。水鳥、樹林、及び諸佛の出すところの音聲は、皆妙法を演ぶ、と。是くの如く思想して、心をして欣ひ悅ばしめよ。願はくば、諸の衆生と共に、安樂國に往生せんことを、と。已上は、『觀經』『華嚴經』等の意に依る。具には、別卷に在り。」若し極めて略を樂ふ者は、應に念ずべし。彼の佛の眉間の白毫相は、旋り轉いて猶も頗梨珠の如し。光明は遍く照して、我等を攝めたまふ。願はくば、衆生と共に彼の國に生れんことを、と。²若し相好を觀念するに堪へざるもの有らば、或は歸命の想に依り、或は引攝の想に依り、或は往生の想に依つて、應に一心に稱念すべし。已上。意の樂ひの不同なるが故に、種々の

知。所觀衆相。卽是三身卽一之相好光明也。諸佛同體之相好光明也。萬德圓融之相好光明也。色卽是空故。謂之眞如實相。空卽是色故。謂之相好光明。一色一香無非中道。受想行識亦復如是。我所有三惡道。與彌陀佛萬德。本來空寂。一體無礙。願我得佛。齊聖法王。已上。依『觀經』『心地觀經』『金光明經』『念佛三昧經』『般若經』『止觀』等意。

三雜略觀者。彼佛眉間。有一白毫。右旋宛轉。如五須彌。於中復有。八萬四千好。一々好有。八萬四千光。其光微妙。具衆寶色。總而言之。七百五倶胝。六百萬光明。十方面赫奕。如億千日月。其光中現。一切佛身。無數菩薩。衆會圍遶。復出微妙

所有の三惡道と、彌陀佛の萬德とは、本より來た空寂しくて、一體にして無礙なり。願はくば、我佛を得て、聖法王に齊しからん。已上は、『觀經』『心地觀經』『金光明經』『念佛三昧經』『般若經』『止觀』等の意に依れり。

三に雜略觀

とは、彼の佛の眉間には、一の白毫有り。右旋して宛轉き、五の須彌〔山〕の如し。中に於て復た八萬四千の好有り、一々の好に八萬四千の光有り。其の光微妙にして、衆寶の色を具へたり。總じてこれを言へば、七百五倶胝六百萬の光明あり。十方面に赫奕として、億千の日月の如し。其の光の中に、一切の佛身を現す。無數の菩薩、衆會して圍み遶れり。復た微妙の音を出して、諸の法海を宣暢ぶ。又彼の一々の光明は、遍く十方の

圓滿。與一切諸佛。其意同一。報身。微妙淨法身。具足諸相好。一々相好。卽是實相。實相法界。具足無減。不生不滅無去來。不一不異非斷常。有爲無爲諸功德。依此法身常淸淨。與一切諸佛。其體同一。法身。[3]是故三世十方。諸佛三身。普門塵數。無量法門。佛衆法海。圓融萬德。凡無盡法界。備在彌陀一身。不縱不橫。亦非一非異。非實非虛。亦非有無。本性淸淨。心言路絕。譬如如意珠中。非有寶。非無寶。佛身萬德。亦復如是。[4]又非卽陰入界。名爲如來。彼諸衆生。皆悉有之故。非離陰入界。名爲如來。離之則是。無因緣法故。非卽亦非離。寂靜但有名。[5]是故當

て常に淸淨なり。一切の諸佛と、其の體同一なり。法身。[3]是の故に、三世十方の諸佛の三身、普門塵數の無量の法門、佛衆の法界圓融の萬德、凡そ無盡の法界は備はつて彌陀の一身に在り。縱ならず、橫ならず、亦一異にも非ず。實に非ず、虛に非ず、亦有無にも非ず。本性淸淨にして、心言の路絕えたり。譬へば、如意珠の中には、寶有るにも非ず、寶無きにも非ざるが如し。佛身の萬德も、亦復た是くの如し。[4]又陰入界に卽して、名づけて如來と爲すに非ず。彼の諸の衆生は、皆悉くこれ有るが故に。陰入界を離れて、名づけて如來と爲すにも非ず。これを離るれば、則ち是れ無因緣の法なるが故に。卽にも非ず、亦離にも非ず、寂靜にして但名有るのみ。[5]是の故に、當に知るべし。觀るところの衆相は、卽ち是れ三身卽一の相好光明なり、諸佛同體の相好光明なり、萬德圓融の相好光明なることを。色は卽ち是れ空なるが故に、これを眞如實相と謂ひ、空は卽ち是れ色なるが故に、これを相好光明と謂ふ。一色も、一香も、中道に非ずといふこと無し。受、想、行、識も、亦復た是くの如し。我が

好。周遍世界之者。亦是閻浮檀金光明。譬如劫水。彌滿世界。其中萬物。沈沒不現。滉瀁浩汗。唯見大水。彼佛光明。亦復如是。高出一切世界上。相好光明。靡不照曜。行者以心眼。見於己身。在於彼光明。所照之中。已上。依『觀經』『雙觀經』『般舟經』『大論』等意。此觀成後。隨樂作次觀耳。」或應觀。彼佛是三身一體之身也。[2]於彼一身。所見不同。或丈六。或八尺。或廣大身。所現身皆金色。所利益各無量。與一切諸佛。其事同一。應化身。又一々相好。凡聖不得其邊。梵天不見其頂。目連不窮其聲。無形第一體。非莊嚴々々。十力四無畏。三念住大悲八萬四千三昧門。八萬四千波羅蜜門。恒沙塵數法門。究竟

見るが如く、彼の佛の光明も、亦復た是くの如し。高く一切世界の上に出て、相好の光明照し曜かずといふこと靡し。行者、心眼を以て己が身を見れば、亦彼の光明に照さるゝ中に在り。已上は、『觀經』『雙觀經』『般舟經』『大論』等の意に依る。此の觀成じて後、樂ひに隨つて次の觀を作すのみ。」或は、應に觀ずべし。彼の佛は、是れ三身一體の身なり。[2]彼の一身に於て、見るところ不同なり。或は丈六、或は八尺、或は廣大の身なり。現すところの身は皆金色にして、利益するところは各々無量なり。一切の諸佛と、其の事同一なり。應化身。又一々の相好は、凡聖其の邊を得ず、梵天其の頂を見ず、目連其の聲を窮めず、無形第一の體なり。莊嚴に非ずして莊嚴す。十力、四無畏、三念住、大悲、八萬四千の三昧門、八萬四千の波羅蜜門、恒沙塵數の法門究竟り圓滿せり。一切の諸佛と、其の意同一なり。報身。微妙の淨法身に、諸の相好を具足せり。一一の相好は、即ち是れ實相なり。實相の法界は、具足して減ずること無し。生ぜず、滅せず、去來も無し。一ならず、異ならず、斷常にも非ず。有爲、無爲の諸の功德は、此の法身に依つて

孔。演出光明。如須彌山。圓光如百億大千界。光中有無量。恒河沙化佛。一々化佛。以無數菩薩。爲侍者。如是有八萬四千相。一々相。各有八萬。四千隨好。一々好。復有八萬。四千光明。一々光明。遍照十方世界。念佛衆生。攝取不捨。當知。一一相中。各具七百五倶胝。六百萬光明。熾然赫奕。神德巍々。如金山王。在大海中。無量化佛菩薩。充滿光中。各々現神通。圍遶彌陀佛。彼佛如是。具足無量。功德相好。在於菩薩。衆會之中。演說正法。行者是時。都無餘色相。須彌鐵圍。大小諸山。悉不現。大海江河。土地樹林。悉不現。溢目之者。但是彌陀佛相

身の諸の毛孔より演べ出す光明は、須彌山の如く、圓光は百億の大千界の如し。光の中には無量恒河沙の化佛有つて、一々の化佛は無數の菩薩を以て侍者と爲す。是くの如く、八萬四千の相有つて、一々の相には各々八萬四千の隨好有り。一々の好には復た八萬四千の光明有つて、一々の光明は遍く十方世界の念佛の衆生を照し、攝め取つて捨てざるなり。當に知るべし、一一の相の中に各々七百五倶胝六百萬の光明を具へ、熾然赫奕として神德巍々たること、金山王の大海の中に在るが如し。無量の化佛菩薩は、光の中に充ち滿ちて各々神通を現し、彌陀佛を圍み遶れり。彼の佛は、是くの如く無量の功德相好を具足して、菩薩衆會の中に在つて、正法を演說したまふ。行者、是の時、都て餘の色相〔想〕無くして、須彌、鐵圍、大小の諸山は悉く現れず、大海、江河、土地、樹林も悉く現れず。目に溢つるものは、但是れ彌陀佛の相好、世界に周遍するものは、亦是れ閻浮檀金の光明のみなり。譬へば、劫水の、世界に彌ち滿つるとき、其の中の萬物は沈沒して現れず、滉瀁浩汗として唯大水のみを

二總相觀者。先觀如前。衆寶莊嚴。廣大蓮華。次觀阿彌陀佛。坐華臺上。身色如百千萬億。閻浮檀金。身高六十萬億。那由他。恒河沙由旬。眉間白毫。右旋婉轉。如五須彌山。眼如四大海水。清白分明。身諸毛

すること、十六反を經よ。是くの如くして、心想を極めて明利ならしめ、然る後心を住めて、念を一處に繫けよ。是くの如くして、漸々に舌を擧げて腭に向へ、舌をして正しく住らしむること、二七日を經よ。然る後、身心安穩なることを得可し。

と。導和尙の云はく、

十六遍の後、心を住めて、白毫の相を觀ぜよ。雜亂することを得ざれ。

と。

二に總相觀

とは、先づ前の如く、衆寶をもつて莊嚴せる、廣大の蓮華を觀ぜよ。次に阿彌陀佛の、華の臺の上に坐したまへるを觀ぜよ。身の色は百千萬億の閻浮檀金の如く、身の高さは六十萬億那由他、恒河沙由旬なり。眉間の白毫は右旋して婉轉き、五の須彌山の如く、眼は四大海水の如くにして、清〔青〕白分明なり。

可得安穩。導和尚云。十六遍後。住心觀白毫相。不得雜亂。

有ること無く、能く一切の相及び隨好を感ず。と。云云。別因と言ふは、彼の『論』に三種有り。一には、六十二の因なり。具には『論』文の如し。二には、淨戒なり。若し諸の菩薩、淨戒を毀犯すれば、尚下賤の人身をも得ること能はず。何に況や、能く大丈夫の相を感ぜん。三には、四種の善修なり。一に善く事業を修し、二に善巧方便し、三に有情を饒益し、四に無倒廻向なり、と。已上。別因の中にも、亦多くの差別有れども、今者は且く、因果相順のものを取れり。」前後の次第は、諸文亦不同なれども、今者は、宜しきに隨つて、取つて次第を爲せり。」相と好とを間雜へて以て觀法と爲すことは、亦是れ『觀佛經』の例なり。」順觀の次第は、大途是くの如し。逆觀は、これに反し、足より頂に至る。『觀佛三昧經』に云はく、

眼〔目〕を閉ぢて見ることを得んには、心想の力を以てせよ。了々にして分明なること、佛の在世の如くすべし。是の相を觀ずと雖も、衆多なることを得ざれ。一事より起めて、復た一事を想へ。一事を想ひ已れば、復た一事を想へ。逆順反覆

賤人身。何況能感。大丈夫相。三者四種善修。一善修事業。二善巧方便。三饒益有情。四無倒廻向。已上。別因之中。亦有多差別。今者且取。因果相順者也。」前後次第。諸文亦不同。今者隨宜。取爲次第也。」相好間雜。以爲觀法。亦是『觀佛經』之例也。」順觀次第。大途如是。逆觀反之。從足至頂。『觀佛三昧經』云。閉眼得見。以心想力。了々分明。如佛在世。雖觀是相。不得衆多。從一事起。復想一事。一事想已。復想一事。逆順反覆。經十六反。如是心想。極令明利。然後住心。繫念一處。如是漸々。擧舌向腭。令舌政住。經二七日。然後身心。

『大經』に云はく「持戒勤かず、施心移らず、實語に安住せしが故に、此の相を得たり」と。云云。其の足柔軟にして、諸指纖長く、鞔網具足して、内外に握る等の相及び業因は、前の手の相に同じ。

四十二には、廣きを樂ふ者は、應に觀ずべし。足の下及び跟には、各々一の花を生じ、諸の光を圍遶して、十匝を滿足せり。花と花と相ひ次ぎ、一々の花の上（中）には、五の化佛有り、一一の化佛は、五十五の菩薩を以て侍者と爲せり。一々の菩薩の頂には、摩尼珠の光を生ず。此の相の現ずる時、佛の諸の毛孔より、八萬四千の微細の小光明を生じ、身の光を嚴飾して、極めて可愛ならしむ。此の光一尋なれども、其の相は衆多なり。乃至他方の諸大菩薩、此を觀ずる時は此の光隨つて大なり。已上。

是の諸の相好の行相、利益、廢立等の事は、諸文不同なり。然るに、今三十二の略相は多く『大般若』に依り、廣相と隨好と、及び諸の利益とは『觀佛經』に依れり。」又相好の業（因）には、其の總と別と有り。總因と言ふは、『瑜伽』の四十九に云はく、始め清淨勝意樂地より、一切の有らゆる菩提の資糧は、差別

薩。頂生摩尼珠光。此相現時。佛諸毛孔。生八萬四千。微細小光明。嚴飾身光。極令可愛。此光一尋。其相衆多。乃至他方。諸大菩薩。觀此之時。此光隨大。已上。

是諸相好。行相利益。廢立等事。諸文不同。然今三十二略相。多依『大般若』廣相隨好。及諸利益。依『觀佛經』。又相好業。有其總別。言總因者。『瑜伽』四十九云。

始從淸淨勝意樂地。一切所有菩提資糧。無有差別。能感一切相及隨好。

云云。言別因者。彼『論』有三種。一者六十二因。具如『論』文。二者淨戒。若諸菩薩。毀犯淨戒。尙不能得。下

三十九には、如來の身には、前後左右、及び頂の上に、各々八萬四千の毛有つて生え、柔潤紺青にして、右旋して宛轉けり。或は次に、應に廣く觀ずべし。一々の毛の端には、百千萬の塵數の蓮華有り、一々の蓮華は、無量の化佛を生じ、一々の化佛は、諸の偈頌を現いて、聲と聲と相ひ次げること、猶も雨の滴の如し。『無上依經』に云はく「諸の勝善法を修するに、中下品無く、恒に增上ならしめて、身の毛の上に靡き、右旋して宛轉ける相を得たり」と。『優婆塞戒經』に云はく「智者に親近して、聞くことを樂しみ、論ずることを樂しみ、聞き已つて修することを樂しみ、道路を治め、棘刺を除去することを樂しみしが故に」と。

四十には、世尊の足の下には、千輻輪の文あり。轂輞衆相、圓滿せずといふこと無し。『瑜伽』に云はく「其の父母に於て、種々に供養し、諸の有情の諸の苦惱の事に於て、種々に救護し、往來等の動轉の業に由るが故に、此の相を得たり」と。云云。千輻輪の相を見れば、千劫の極めて重き惡業を除き却く。

四十一には、世尊の足の下には、平滿の相有り。妙善安住せること、猶も匳の底の如し。地は高下なりと雖も、足の蹈むところに隨つて、皆悉く怚然にして等しく觸れずといふこと無し。

靑。右旋宛轉。或次應廣觀。一々毛端。有百千萬。塵數蓮華。一一蓮華。生無量化佛。一々化佛。現諸偈頌。聲々相次。猶如雨渧。『無上依經』云。「修諸勝善法。無中下品。恒令增上。得身毛上靡。有旋宛轉相。」『優婆塞戒經』云。「親近智者。樂聞樂論。聞已樂修。樂治道路。除失棘刺故。」

四十世尊足下。千輻輪文。網轂衆相。無不圓滿。『瑜伽』云。「於其父母。種々供養。於諸有情。諸苦惱事。種々救護。由往來等動轉業。故得此相」云云。見千輻輪相。除却千劫。極重惡業。

四十一世尊足下。有平滿相。妙善安住。猶如匳底。地雖高下。隨足所蹈。皆悉怛然。無不等觸。『大經』云。「持戒不動。施心不移。安住實語。故得此相」云々。其足柔軟。諸指纖長。縵網具足。內外握等相。及業因。同前手相。

四十二樂廣者應觀。足下及跟。各生一花。圍遶諸光。滿足十匝。花々相次。一々花上。有五化佛。一々化佛。五十五菩薩。以爲侍者。一々菩

云はく「他の過を覆ひ藏せしが故に」と。『大論』に云はく「亦慚愧を修し、及び邪婬を斷ちしが故に」と。導禪師の云はく「佛の言はく、若し欲色を貪ること多き者は、即ち如來の陰藏相を想へば、欲心即ち止み、罪障除き滅びて、無量の功德を得」と。

三十五には、世尊の兩足、二手の掌中、項及び雙肩の七處は、充ち滿てり。『大經』に云はく「施を行ひし時、所珍の物は能く捨てゝ悋まず、福田及び非福田を觀ざりしかば、七處の滿てる相を得たり」と。

三十六には、世尊の雙の腨は、漸次に纖圓きこと、翳〔鹽〕泥耶仙鹿王の腨の如し。腨の鉤鏁の骨、盤結せる間より、諸の金の光を出す。『瑜伽』に云はく「自ら正法に於て、實の如く攝受し、廣く他の爲に說き、及び正しく他の爲に善く給使を作して、翳〔鹽〕泥耶の腨の相を得たり」と。

三十七には、世尊の足の跟は、廣く長く圓滿し、趺と相ひ稱うて、諸の有情に勝れたり。

三十八には、足の趺は修く高くして、猶も龜の背の如く、柔軟妙好にして、跟と相ひ稱へり。『瑜伽』に云はく「足の下の平滿と、千輻輪と、纖長き指との三相を感ずる業は、總じて能く跟と趺との二相を感得す。是れ前の三相の所依止の故に」と。

淨。『大經』云。「見裸施衣服。故得陰藏相。」『大集經』云。「覆藏他過故。」『大論』云。「亦修慚愧。及斷邪婬故。」導禪師云。「佛言。若多貪欲色者。即想如來陰藏相者。欲心即止。罪障除滅。得無量功德。」

三十五世尊兩足。二手掌中。項及雙肩。七處充滿。『大經』云。「行施之時。所珍之物。能捨不悋。不觀福田。及非福田。得七處滿相。」

三十六世尊雙腨。漸次纖圓。如毉泥耶仙鹿王腨。膊鉤鏁骨。盤結之間。出諸金光。『瑜伽』云。「自於正法。如實攝受。廣爲他說。及正爲他。善作給使。得毉泥耶腨相。」

三十七世尊足跟。廣長圓滿。與趺相稱。勝諸有情。

三十八足趺修高。猶如龜背。柔軟妙好。與跟相稱。『瑜伽』云。「感足下平滿。千輻輪。纖長指。三相之業。總能感得。跟趺二相。是前三相。所依止故。」

三十九如來之身。前後左右。及以頂上。各有八萬。四千毛生。柔潤紺

三十には、身の光は、任運に三千の界を照す。若し作意する時は、無量無邊なり。然れども、諸の有情を憐愍むが爲の故に、光を攝めて常に照すこと、面各〻一尋なり。『大經』に云はく「香、花、燈明等を以て人に施して、此の相を得たり」と。云々。大光を觀る者は、但見んと發心するのみにて衆罪を除き却く。

三十一には、世尊の身の相は、修く廣くして端嚴なり。『大論』に云はく「尊長を恭敬し、迎送侍遶して、身の直く廣き相を得たり」と。

三十二には、世尊の體の相は、縱廣量等しくして、周匝圓滿せること、尼拘陀樹の如し。『大集經』に云はく「常に衆生を勸め、三昧を修して、此の相を得たり」と。『報恩經』に云はく「若し衆生有つて、四大不調なりしとき、能く療治を爲せしが故に、身の圓き相を得たり」と。

三十三には、世尊の容儀は、洪滿にして端直なり。『瑜伽』に云はく「疾病の者に於て、卑屈して瞻侍し、良藥を給し施せしが故に、身の僂曲せざる相を得たり」と。

三十四には、如來の陰藏は、平かなること滿月の如し。金色の光有つて、猶も日輪の如し。金剛の器の如く、中外倶に淨し。『大經』に云はく「裸のものを見て、衣服を施せしが故に、陰藏の相を得たり」と。『大集經』に

二十九世尊身皮。皆眞金色。光潔晃曜。如妙金臺。衆寶莊嚴。衆所樂見。『大經』云。「施衣服臥具。得此相。」

三十身光任運。照三千界。若作意時。無量無邊。然爲憐愍。諸有情故。攝光常照。面各一尋。『大經』云。「以香花燈明等施人。得此相。」云々。觀大光者。但發心見。除却衆罪。

三十一世尊身相。修廣端嚴。『大論』云。「恭敬尊長。迎送侍逸。得身直廣相。」

三十二世尊體相。縱廣量等。周匝圓滿。如尼拘陀樹。『大集經』云。「常勸衆生。修三昧。得此相」『報恩經』云。「若有衆生。四大不調。能爲療治。故得身方圓相。」

三十三世尊容儀。洪滿端直。『瑜伽』云。「於疾病者。卑屈瞻侍。給施良藥。故得身不傷曲相。」

三十四如來陰藏。平如滿月。有金色光。猶如日輪。如金剛器。中外俱

化佛に、各〻千の光有つて、衆生を利益し、乃至遍く十方の佛の頂に入る。時に諸佛の胸よりは、百千の光を出し、一々の光は六波羅蜜を説く。一々の化佛は、一化人の、端正微妙にして状彌勒の如きを遣して、行者を安慰す。此の相の光を見る者は、十二億劫の生死の罪を除く。

二十八には、如來の心の相は、紅き蓮華の如し。妙なる紫金の光、以て間錯を爲して、瑠璃筒の如くに、懸かつて佛の胸に在り。合しもせず、開きもせず、團圓きこと心の如し。萬億の化佛は、佛の心の間に遊ぶ。又無量塵數の化佛は、佛の心の中に在つて、金剛の臺に坐り、無量の光を放つ。一々の光の中には、亦無量塵數の化佛有つて、廣長の舌を出し、萬億の光を放つて、諸の佛事を作す。佛の心を念ずる者は、十二億劫の生死の罪を除き、生々に無量の菩薩に値ふことを得と。云々。廣く觀ぜんと樂ふ者は、應に此の觀を作すべし。

二十九には、世尊の身の皮は、皆眞金の色なり。光潔くして晃曜けること、妙金の臺の如し。衆の寶をもつて莊嚴し、衆の見んと樂ふところなり。『大經』に云はく「衣服や臥具を施して、此の相を得たり」と。

二十七胸有萬字。名實相印。放大光明。或次應廣觀。光中有無量。百千衆花。一々花上。有無量化佛。是諸化佛。各有千光。利益衆生。乃至遍入。十方佛頂。時諸佛胸。出百千光。一々光說。六波羅蜜。一々化佛。遣一化人。端正微妙。狀如彌勒。安慰行者。（見此相光者。除十二億劫生死之罪。）

二十八如來心相。如紅蓮華。妙紫金光。以爲間錯。如瑠璃筒。懸在佛胸。不合不開。團圓如心。萬億化佛。遊佛心間。又無量塵數化佛。在佛心中。坐金剛臺。放無量光。一々光中。亦有無量塵數化佛。出廣長舌。放萬億光。作諸佛事。（念佛心者。除十二億劫。生死之罪。生々得値。無量菩薩。云云。擧廣觀者。應作此觀。）

て、花赤銅の如し。『瑜伽』に云はく「諸の尊長を恭敬し、禮拜し、合掌し、起立せしが故に、纎長き指の相を得たり」と。

二十四には、一々の指の間には、猶も雁王の如く、咸く鞔網有り。金色交絡して、その文綺畫に同じく、閻浮檀金に勝れたること、百千萬億〔倍〕なり。其の色は、明達にして、眼界に過えたり。張る時は則ち見ゆれども、指を斂むるときは見えず。『大經』に云はく「四攝法を修して、衆生を攝取せしが故に、此の相を得たり」と。

二十五には、其の手の柔軟なること、覩羅綿の如くにして、一切に勝過れ、內外倶に握る。『大經』に云はく「父母、師長の病苦せし時、自ら手をもつて洗ひ拭ひ、捉り持ち、按摩せしが故に、手の軟き相を得たり」と。

二十六には、世尊の頷、臆、幷に身の上半の、威容廣大なること、師子王の如し。『瑜伽』に云はく「諸の有情の如法の所作に於て、能く上首と爲つて助伴と作り、我慢を離れて諸の獷悷無かりしが故に、此の相を得たり」と。

二十七には、胸に卍字有り、實相印と名づけ、大なる光明を放つ。或は次に、應に廣く觀ずべし。光の中には、無量百千の衆の花有つて、一々の花の上には、無量の化佛有り。是の諸の

見所尊。心生恐怖。合掌恭敬。以恭敬故。命終生天。『大集經』云。「教護怖畏。得臂肘髀。見他事業。佐助故。得手摩膝相。」

二十三諸指圓滿。充密纖長。甚可愛樂。於一々端。各生萬字。其爪光潔。如花赤銅。『瑜伽』云。「於諸尊長。恭敬禮拜。合掌起立。故得指纖長相。」

二十四一々指間。猶如雁王。咸有鞔網。金色交絡。文同綺畫。勝閻浮金。百千萬億。其色明達。過於眼界。張時則見。斂指不見。『大集經』云。「修四攝法。攝取衆生。故得此相。」

二十五其手柔軟。如覩羅綿。勝過一切。內外俱握。『大集經』云。「父母師長。若病苦。自手洗拭。捉持按摩。故得手軟相。」

二十六世尊領臆。幷身上半。威容廣大。如師子王。『瑜伽』云。「於諸有情。如法所作。能爲上首。而作助伴。離於我慢。無諸獷悷。故得此相。」

二十一には、如來の腋の下は、悉皆充ち實てり。紅紫の光を放ち、諸の佛事を作して、衆生を利益す。『無上依經』に云はく「衆生の中に於て、利益の事を爲し、四正勤を修して、心に畏るゝところ無かりしかば、兩肩平整にして兩腋の下の滿てる相を得たり」と。

二十二には、佛の雙の臂肘は、修く直ぐにして、膸圓きこと、象王の鼻の如く、平に立つときは、膝を摩づ。或は次に、應に廣く觀ずべし。手の掌には千輻の理あつて、各ゝ百千の光を放ち、遍く十方を照し、化して金の水と成る。金の水の中には、一の妙なる水有つて、水精の色の如し。餓鬼見れば熱を除き、畜生は宿命を識り、狂象見れば師子王と爲り、師子は金翅鳥と見、諸龍は亦金翅鳥王と見る。是の諸の畜生は、各ゝ尊ぶところのものと見て、心に恐怖を生し、合掌して恭敬す。恭敬するを以ての故に、命終れば天に生る。『大集經』に云はく「怖畏を救護して、臂肘の膸きことを得、他の事業を見て佐助けしが故に、手の膝を摩づる相を得たり」と。

二十三には、諸の指は圓滿し、充密して纖長く、甚だ愛樂す可し。一々の端に於て、各ゝ卍字を生す。其の爪、光り潔くし

聞。見此光明。光分爲十支。一支千色。十千光明。光有化佛。一々化佛。有四比丘。以爲侍者。一々比丘。皆說苦空。無常無我。已上三種。樂廣觀者。應用之。

二十世尊肩項。圓滿殊妙。『法華文句』云。「恒令施增長。故得此相。」

二十一如來腋下。悉皆充實。放紅紫光。作諸佛事。利益衆生。『無上依經』云。「於衆生中。爲利益事。修四正勤。心無所畏。得兩肩平整。而腋下滿相。」

二十二佛雙臂肘。明直傭圓。如象王鼻。平立摩膝。或次應廣觀。手掌千輻理。各放百千光。遍照十方。化成金水。金水之中。有一妙水。如水精色。餓鬼見除熱。畜生識宿命。狂象見者。爲師子王。師子見金翅鳥。諸龍亦見。金翅鳥王。是諸畜生。各

の如し。『無上依經』に云はく「衣服、飲食、車乘、臥具、諸の莊嚴の物を、歡喜んで施し與へて、身は金色にして、圓光一丈なる相を得たり」と。

十八には、頸より二の光を出す。其の光に萬の色あつて、遍く十方一切の世界を照す。此の光に遇ふ者は、辟支佛と成る。此の光は、諸の辟支佛の頸を照す。此の相の現るゝ時、行者遍く十方一切の諸の辟支佛の、鉢を虛空に擲げて十八變を作し、一々の足の下に皆文字有つて、其の字十二因緣を宣說するを見る。

十九には、缺盆骨滿の相あり。光は十方を照し、虎魄の色を作す。此の光に遇ふ者は、聲聞の意を發す。是の諸の聲聞、此の光明を見るに、光分れて十支と爲り、一支ごとに千の色、十千の光明あり。光ごとに、化佛有り。一々の化佛に、四の比丘有つて、以て侍者と爲す。一々の比丘は、皆苦、空、無常、無我を說く。已上の三種は、廣く觀ぜんと樂ふ者、應にこれを用ふべし。

二十には、世尊の肩項は、圓滿にして殊妙れたり。『法華文句』に云はく「恒に施をして增長せしめしが故に、此の相を得たり」と。

遶前圓光。滿足七匝。衆畫分明。一一畫間。有妙蓮華。華上有七佛。一一化佛。各有七菩薩。以爲侍者。一一菩薩。執如意珠。其珠金光。青黃赤白。及摩尼色。皆悉具足。圍遶諸光。上下左右。各々一尋。圍遶佛頸。了々如畫。『無上依經』云。「衣服飲食。車乘臥具。諸莊嚴物。歡喜施與。得身金色。圓光一丈相。」

十八頸出二光。其光萬色。遍照十方。一切世界。遇此光者。成辟支佛。此光照諸。辟支佛頸。此相現時。行者遍見。十方一切。諸辟支佛。擲鉢虛空。作十八變。一々足下。皆有文字。其字宣說。十二因緣。

十九缺盆骨滿相。光照十方。作虎魄色。遇此光者。發聲聞意。是諸聲

十六には、如來の咽喉は、瑠璃筒の如く、狀は蓮華を累ねたるが如し。出す所の音聲は、詞韻和雅にして、等しく聞えざるは無し。其の聲の洪きく震ふこと、猶も天の鼓の如く、發すところの言の婉約しきこと、伽陵頻〔鳥〕の音の如し。任運に能く大千世界に遍ず。若し作意する時は、無量無邊なり。然るに、衆生を利せんが爲に、類に隨つて增減せず。『大經』に云はく「彼の短を訟めず、正法を謗らずして、梵音聲の相を得たり」と。『大集經』に云はく「諸の衆生に於て、常に柔軟に語りしが故に」と、云云。

十七には、頸より圓光を出す。咽喉の上に點相の分明なる有つて、〔猶も伊字の如く〕一一の點の中より、一々の光を出す。其の一々の光は、前の圓光を遶り、七匝を滿足して、衆畫分明なり。一々の畫の間に、妙蓮華有つて、華の上に七佛有り。一一の化佛に、各ゝ七菩薩有つて、以て侍者と爲す。一々の菩薩は、如意珠を執ち、其の珠に金の光あり。青、黃、赤、白、及び摩尼の色は、皆悉く具足して、諸の光を圍み遶れり。上下左右は、各ゝ一尋にして、佛の頸を圍遶り、了々かなること畫

文。咲時動舌。出五色光。遶佛七匝。還從頂入。所有神變。無量無邊。『大集經』云。「護口四過。得廣長舌相。」云々。觀此相者。除百億八萬四千劫罪。他世値八十億佛。

十五舌下兩邊。有二寶珠。流注甘露。滴舌根上。諸天世人。十地菩薩。無此舌根。亦無此味。『大般若』有異說。可勘。『大經』云。「飲食施與。故得上味相。」

十六如來咽喉。如瑠璃筒。狀如累蓮華。所出音聲。詞韻和雅。無不等聞。其聲洪震。猶如天鼓。所發言婉約。如伽陵頻音。任運能遍。大千世界。若作意時。無量無邊。然爲利衆生。隨類不增減。『大經』云。「不訟彼短。不謗正法。得梵音聲相。」『大集經』云。「於諸衆生。常柔軟語故」。云云。

十七頸出圓光。咽喉上有。點相分明。一一點中。出一々光。其一々光。

目に映り耀く。『大經』に云はく「兩舌、惡口、恚心を遠離して、四十の齒白く淨く齊ひ密なる相を得たり」と。

十三には、四の牙は鮮かに白く、光潔くして、鋒利し。月の初めて出たるが如くなり。『大集經』に云はく「身、口、意淨きが故に、四の牙の白き相を得たり」と。云々。此の脣、口、齒の相を觀ずる者は、二千劫の罪を滅す。

十四には、世尊の舌の相は、薄くして淨く、廣長にして、能く面輪を覆ひ、耳髪の際より、乃至梵天に至る。其の色は、赤銅の如し。或は次に、廣く觀ず可し。舌の上には五の畫あつて、猶も印文の如し。咲む時舌を動かせば、五色の光を出し、佛を遶ること七匝して、還た頂より入る。有らゆる神變は、無量無邊なり。『大集經』に云はく「口の四過を護つて、廣長なる舌の相を得たり」と。云々。此の相を觀ずる者は、百億八萬四千劫の罪を除き、他世において八十億の佛に値ふ。

十五には、舌の下の兩邊には、二の寶珠有り、甘露を流注して、舌根の上に滴らす。諸天、世人、十地の菩薩は、此の舌根無く、亦此の味も無し。『大般若』には異說有り、勘ふ可し。『大經』に云はく「飲食を施し與へしが故に、上味の相を得たり」と。

如鸚鵡觜。表裏淸淨。無諸塵翳。出二光明。遍照十方。變作種々。無量佛事。觀此隨好者。滅千劫罪。未來生處。聞上妙香。常以戒香。爲身瓔珞。十一脣色赤好。如頻婆果。上下相稱。如量嚴麗。或次應廣觀。團圓光明。從佛口出。猶如百千。赤眞珠貫。入出於鼻。白毫髮間。如是展轉。入圓光中。此脣隨好業等。可勘。十二四十齒齊。淨密根深。白逾珂雪。常有光明。其光紅白。映耀人目。『大經』云。「遠離兩舌。惡口恚心。得四十齒。鮮白齊密相。」十三四牙鮮白。光潔鋒利。如月初出。『大集經』云。「身口意淨故。得四牙白相。」云々。觀此脣口齒相者。滅二千劫罪。十四世尊舌相。薄淨廣長。能覆面輪。至耳髮際。乃至梵天。其色如赤銅。或次可廣觀。舌上五晝。猶如印

り、白き光の中には、白き色の化佛有つて、此の靑と白との化佛は、復た諸の神通を現す。『大集經』に云はく「慈心を修し集め、衆生を愛しみ視て、紺色の目の相を得たり」と。云々。少かの時間に於ても、此の相を觀ずる者は、未來生る處には、眼は常に明かにして淨く、眼根に病無くして、七劫の生死の罪を除き却く。

十には、鼻は修く高く直にして、其の孔現れず。鑄金の鋌の如く、鸚鵡の觜の如し。表も裏も淸淨にして、諸の塵翳も無し。二の光明を出して、遍く十方を照し、變じて種々無量の佛事を作す。此の隨好を觀ずる者は、千劫の罪を滅す。未來生るゝ處には、上妙の香を聞ぎ、常に戒の香を以て身の瓔珞と爲す。

十一には、脣の色赤くして好きこと、頻婆の果の如く、上下相稱へること、量の如くにして嚴麗なり。或は次に、應に廣く觀ずべし。團圓の光明は、佛の口より出で、猶も百千の赤眞珠の貫くが如くにして、鼻と白毫と髮との間に入出す。是くの如く展轉して、圓光の中に入る。此の脣の隨好の業等は、勘ふ可し。

十二には、四十の齒は齊ひ、淨く、密にして根深く、白きことは珂雪に逾えたり。常に光明有り、其の光紅白にして、人の

由他。恒河沙。微塵數劫。生死之罪。」

八如來眼睫。猶若牛王。紺青齊整。不相雜亂。或次應廣觀。上下各生。有五百毛。如優曇華鬚。柔軟可愛樂。一々毛端。流出一光。如頗梨色。遶頭一匝。純生微妙。諸青蓮華。一一華臺。有梵天王。執青色蓋。『大集經』云。「至心求於無上菩提。故得牛王睫相。」『大經』云。「見於怨憎。生於善心故。」

九佛眼青白。上下俱眴。白者過白寶。青者勝青蓮華。或次應廣觀。眼出光明。分爲四支。遍照十方。無量世界。於青光中。有青色化佛。於白光中。有白色化佛。此青白化佛。復現諸神通。『大集經』云。「修集慈心。愛視衆生。得紺色目相。」云々。於少時間。觀此相者。未來生處。眼常明淨。眼根無病。除却七劫。生死之罪。

十鼻修高直。其孔不現。如鑄金鋌。

こと能はじ。『大集經』に云はく「他の德を隱さず、其の德を稱揚して、此の相を得たり」と。『觀佛〔三昧〕經』に云はく「無量劫より、晝夜に精進して、身心懈ること無く、頭の燃ゆるを救ふが如くに、六度、卅七品、十力、無畏、大慈、大悲、諸の妙功德を勤修して、此の白毫を得たり。此の相を觀ずる者は、九十六億那由他恒河沙、微塵數劫の生死の罪を除き却く」と。

八には、如來の眼睫は、猶も牛王のごとし。紺青齊整にして、相ひ雜亂せず。或は次に、應に廣く觀ずべし。上下に各々生えて、五百の毛有り。優曇華の鬚の如く、柔軟にして、愛樂す可し。一々の毛の端には、一の光を流れ出す。頗梨の色の如くにして、頭を遶ること一匝し、純ら微妙の諸の青蓮華を生ず。一一の華の臺には、梵天王有つて、青色の蓋を執る。『大集經』に云はく「至心に無上菩提を求めしが故に、牛王の睫の相を得たり」と。『大經』に云はく「怨憎を見て、善の心を生ぜしが故に」と。

九には、佛の眼は青白にして、上下俱に眴ぐ。白きところは白寶に過ぎ、青きところは青蓮華より勝れたり。或は次に、應に廣く觀ずべし。眼より光明を出し、分れて四の支と爲り、遍く十方の無量の世界を照す。青き光の中には、青き色の化佛有

七眉間白毫。右旋宛轉。柔軟如覩羅綿。鮮白逾珂雪。或次應廣觀。舒之直長大。如白瑠璃筒。放已右旋。如頗梨珠。丈六佛白毫。長丈五。右旋徑一寸。周圍三寸。於十方面。現無量光。如萬億日。不可具見。但於光中。現諸蓮華。上過無量。塵數世界。華々相次。團圓正等。一々華上。一化佛坐。相好莊嚴。眷屬圍遶。一々化佛。復出無量光。一々光中。亦無量化佛。是諸世尊。行者無數。住者無數。坐者無數。臥者無數。或說大慈大悲。或說三十七品。或說六波羅蜜。或說諸不共法。若廣說者。一切衆生。至十地菩薩。亦不能知之。『大集經』云。「不隱他德。稱揚其德。得此相。」『觀佛經』云。「從無量劫。晝夜精進。身心無懈。如救頭燃。勤修六度。卅七品。十力無畏。大慈大悲。諸妙功德。成此白毫。觀此相者。除却九十六億。那

あり。來り求むる者を見て歡喜を生ずるが故に、面輪圓滿なり。此の相を觀ずる者は、億劫生死の罪を除き却け、後身の生るゝ處には面のあたり諸佛を見たてまつる。

七には、眉間の白毫は、右旋して宛轉けり。柔軟なること覩羅綿の如く、鮮白なること珂雪に逾えたり。或は次に、應に廣く觀ずべし。これを舒ぶれば直く長大にして、白瑠璃の筒の如く、放ち已れば右に旋りて、頗梨の珠の如し。丈六の佛の白毫は、長さ丈五、右旋の徑一寸、周圍三寸なり。十方面に於て、無量の光を現ずること、萬億の日の如くにして、具に見る可からず。但光の中に於て、諸の蓮華を現ず。上は無量塵數の世界を過ぐるまで、華と華と相ひ次いで、團圓正等なり。一々の華の上には、一りの化佛坐り、相好莊嚴して、眷屬圍み遶れり。一々の化佛は、復た無量の光を出し、一々の光の中にも、亦無量の化佛あり。是の諸の世尊は、行く者も無數、住る者も無數、坐る者も無數、臥する者も無數なり。或は大慈大悲を說き、或は三十七品を說き、或は六波羅蜜を說き、或は諸の不共法を說く。若し廣く說かば、一切の衆生より、十地の菩薩に至るまで、亦これを知る

三於其髮際。有五千光。間錯分明。皆上向靡。圍遶諸髮。遶頂五匝。如天畫師。所作畫法。團圓正等。細如一糸。於其糸間。生諸化佛。有化菩薩。以爲眷屬。一切色像。亦於中見。樂廣觀者。可用此觀。

四耳厚廣長。輪埵成就。或應廣觀。旋生七毛。流出五光。其光千色。色千化佛。佛放千光。遍照十方。無量世界。此隨好之業因。可勘。『觀佛三昧經』云。「觀此好者。滅八十億劫生死之罪。後世常爲陀羅尼人爲眷屬。」云々。下去諸利益。皆亦依『觀佛三昧經』而註。

五額廣平正。形相殊妙。此妙業因。竝利益。可勘。

六面輪圓滿。光澤熈怡。端正皎潔。猶如秋月。雙眉皎淨。似天帝弓。其色無比。紺瑠璃光。見來求者生歡喜。故面輪圓滿。觀此相者。除却億劫生死之罪。後身生處面見諸佛。

皆上に向つて靡き、諸の髮を圍遶し、頂を遶ること五匝す。天の畫師の作れる畫法の如し。團圓正等にして、細さ一糸の如し。其の糸の間に於て諸の化佛を生じ、化菩薩有つて以て眷屬と爲せり。一切の色像も、亦中に於て見る。廣く觀ぜんと樂ふ者は、此の觀を用ふ可し。

四には、耳は厚く廣く長くして、輪埵を成就せり。或は、應に廣く觀ずべし。七の毛を旋り生じ、五の光を流れ出す。其の光には千の色あり、色ごとに千の化佛あり。佛ごとに千の光を放つて、遍く十方の無量の世界を照す。此の隨好の業因は、勘ふ可し。『觀佛三昧經』に云はく「此の好を觀ずる者は、八十劫の生死の罪を滅し、後世には常に陀羅尼人と眷屬と爲る」と。云々。下去の諸の利益は、皆亦『觀佛三昧經』に依つて註す。

五には、額は廣く平正にして、形相殊妙なり。此の好の業因、竝に利益は、勘ふ可し。

六には、面輪は圓滿にして、光澤あつて熈怡あり。端正にして皎潔なること、猶も秋の月の如し。雙べる眉は皎かにして淨く、天帝の弓に似たり。其の色は比ぶるもの無く、紺瑠璃の光

猶如天蓋。或樂廣觀者。次應觀。彼頂上有大光明。具足千色。一々色。作八萬四千支。一々支中。有八萬四千化佛。化佛頂上。亦放此光。光光相次。乃至上方無量世界。於上方界。有化菩薩。如雲而下。圍遶諸佛。『大集經』云。「恭敬父母。師僧和上。得肉髻相。」云云。若於此相。生隨喜者。除却千億劫極重惡業。不墮三途。

二頂上八萬四千髮毛。皆上向靡。右旋而生。永無褫落。亦不雜亂。紺青稠密。香潔細軟。或樂廣觀者。應觀。一々毛孔。旋生五光。若申之時。修長難量。如釋尊髮長。從尼拘樓陀精舍。至父王宮。遶城七匝。無量光普照。作紺瑠璃色。色中化佛。不可稱數。現此相已。還住佛頂。右旋宛轉。卽成蠡文。『大集經』云。「不以惡事。加衆生故、得髮毛金精相。」

八萬四千の化佛有り。化佛の頂の上にも、亦此の光を放つ。光と光と相ひ次いで、乃ち上方の無量の世界に至る。上方の界に於ても、化菩薩有り、雲の如くにして下つて、諸佛を圍み遶る。『大集經』に云はく「父母、師長、和上を恭敬して肉髻相を得たり」と。云云。若し此の相に於て、隨喜を生ずる者は、千億劫の極めて重き惡業を除き却けて、三途に墮ちず。

二には、頂の上の八萬四千の髮毛は、皆上〔兩〕向に靡き、右旋して生えたり。永く褫け落つること無く、亦雜亂せず。紺青にして稠密く、香潔にして細く軟かなり。或は廣く觀ぜんと樂ふ者は、應に觀ずべし。一々の毛孔には、旋つて五の光を生ず。若しこれを申ぶる時は、修長くして量り難し。釋尊の如きは、髮の長さ尼拘樓陀の精舍より、父王の宮に至つて、城を遶ること七匝なりきと。無量の光普く照して、紺瑠璃の色を作す。色の中に化佛あつて、稱げて數ふ可からず。此の相を現じ已れば、還た佛の頂に住り、右旋して宛轉き、卽ち蠡文を成ず。『大集經』に云はく「惡事を以て衆生に加へざりしが故に、髮の色金精の相なることを得たり」と。

三には、其の髮の際に於て五千の光有り、間錯つて分明なり。

八萬四千異種金色。一々金光。遍其寶土。處々變化。各作異相。或爲金剛臺。或作眞珠網。或作雜華雲。於十方面。隨意變現。施作佛事。是爲華座想。如此妙華。是本法藏比丘。願力所成。若欲念彼佛者。當先作此華座想。作此想時。不得雜觀。皆應一々觀之。一々葉。一々珠。一々光。一一臺。一々幢。皆令分明。如於鏡中。自見面像。作此觀者。名爲正觀。若他觀者。名爲邪觀。

已上。觀此座相者。滅除五萬劫生死之罪。必定當生極樂世界。次正觀相好。謂阿彌陀佛。坐華臺上。相好炳然。莊嚴其身。

一頂上肉髻。無能見者。高顯周圓。

眞珠の網と作り、或は雜華の雲を作つて、十方面に於て、意ふが隨に變現して、佛事を施作す。是れを、華座の想と爲す。此くの如き妙華は、是れ本法藏比丘の、願力の成せるところなり。若し彼の佛を念ぜんと欲はゞ、當に先づ此の華座の想を作すべし。此の想を作す時、雜觀することを得ざれ。皆、一々に之を觀ずべし。一々の葉、一々の珠、一々の光、一々の臺、一々の幢、皆分明ならしめよ。鏡の中に於て、自ら面像を見るが如くせよ。此〔是〕の觀を作すを、名づけて正觀と爲す。若し他觀せば、名づけて邪觀と爲す。

已上。此の座の相を觀ずる者は、五萬劫の生死の罪を滅除し、必定して當に極樂世界に生るべし。次に、正しく相好を觀ず。謂はく、阿彌陀佛は、華の臺の上に坐り、相好炳然にして、其の身を莊嚴したまふ。

一には、頂の上の肉髻は能く見る者無し。高く顯れて周圓なること、猶も天蓋の如し。或は廣く觀ぜんと樂ふ者は、次に應に觀ずべし。彼の頂の上には、大なる光明有つて、千の色を具足す。一々の色は、八萬四千の支を作し、一々の支の中には、

地上。作蓮華想。令其蓮華。一々葉。作百寶色。有八萬四千脈。猶如天畫。脈有八萬四千光。了々分明。皆令得見。華葉小者。縦廣二百五十由旬。如是華。有八萬四千葉。一々葉間。有百億摩尼珠王。以爲暎飾。一々摩尼珠。放千光明。其光如蓋。七寶合成。遍布地上。釋迦毘楞伽寶。以爲其臺。此蓮華臺。八萬金剛。甄叔迦寶。梵摩尼寶。妙眞珠網。以爲交飾。於其臺上。自然而有。四柱寶幢。一々寶幢。如百千萬億須彌山。幢上寶幔。如夜摩天宮。有五百億微妙寶珠。以爲暎飾。一々寶珠。有八萬四千光。一々光。作

に於て、蓮華の想を作せ。其の蓮華の、一々の葉をして、百寶の色を作さしめよ。八萬四千の脈有つて、猶も天の畫の如し。〔一々の〕脈には、八萬四千の光有つて、了々分明に、皆見ることを得しめよ。華葉の小さきものも、縦廣二百五十由旬なり。是くの如き蓮華に、八萬四千の葉が有り、一々の葉の間には、百億の摩尼珠王有つて、以て暎飾と爲せり。一々の摩尼珠は、千の光明を放ち、其の光は、蓋の如く、七寶をもつて合成つて、遍く地上に覆へり。釋迦毘楞伽寶を、以て其の臺と爲す。此の蓮華の臺は、八萬の金剛、甄叔迦寶、梵摩尼寶、妙眞珠の網を、以て交飾と爲せり。其の臺の上に於ては、自然にして、四柱の寶幢が有り、一々の寶幢は、百千萬億の須彌山の如し。幢の上の寶幔は、夜摩天の宮の如く、五百億の微妙の寶珠有つて、以て暎飾と爲せり。一々の寶珠には、八萬四千の光が有り、一々の光は、八萬四千の異種なる金色を作す。一々の金光〔色〕は、其の寶土に遍ち、處々に變化して、各々異なる相を作す。或は金剛の臺と爲り、或は

往生要集 卷中本

天台首楞嚴院沙門源信撰

第四觀察門者。初心觀行。不堪深奧。如『十住毘婆娑』云。

新發意菩薩。先念佛色相。

又諸『經』中。爲初心人。多説相好功德。」是故今當修色相觀。此分爲三。一別相觀。二總想觀。三雜略觀。隨意樂應用之。

初別相觀者。亦有二。先觀華座。『觀經』云。

欲觀彼佛者。當起想念。於七寶

往生要集 卷中

第四に觀察門

とは、初心の觀行は、深奥に堪へず。『十住毘婆沙』に云ふが如し。

新發意の菩薩は、先づ佛の色相を念ず。

と。又諸の『經』の中に、初心の人の爲には、多く相好の功德を説けり。」是の故に、今當に色相觀を修すべし。此れを分つて、三と爲す。一には別相觀、二には總想〔相〕觀、三には雜略觀なり。意樂に隨つて、應に之を用ふべし。

初に別相觀

とは、亦二有り。先づ華座を觀ず。『觀經』に云はく、

彼の佛を觀んと欲はゞ、當に想念を起すべし。七寶の地の上

往生要集卷上末終

往生要集　卷上

罪福雖有定報。但作願者。修小福。有願力故。得大果報。一切衆生。皆願得樂。無願苦者。是故不願地獄。以是故。福有無量報。罪報有量。

略抄。

問。以何等法。世世增長大菩提願。而不忘失。

答。『十住婆沙』第三偈云。

乃至失身命。　轉輪聖王位。
於此尚不應。　妄語行諂曲。
能令諸世間。　一切衆生類。
於諸菩薩衆。　而生恭敬心。
若有人能行。　如是之善法。
世世得增長。　無上菩提願。

文中。亦有卅二種失菩提心法。可見。

罪福には定れる報有りと雖も、但し願を作す者は、少福を修すとも、願力有るが故に大果報を得るなり。一切の衆生は、皆樂を得んことを願つて、苦を願ふ者無し。是の故に、地獄をば願はざるなり。是れを以ての故に、福には量無き報有れども、罪の報は量有り。

と。略抄す。

問ふ。何等の法を以てか、世世に大菩提の願を增長して、忘失せざらん。

答ふ。『十住婆沙』の第三の偈に云はく、

乃至身命　轉輪聖王の位を失はんも
此に於て尚妄語し　諂曲を行ふべからず
能く諸世間の　一切衆生の類をして
諸の菩薩衆に　恭敬の心を生さしめよ
若し人有つて能く　是の如き善き法を行へば
世世に無上菩提の　願を增長するを得ん

と。（『十住毘婆沙論』の）文の中には、亦卅二種の、菩提心を失ふ法有り。見る可し。

人。本雖是小乘。後發大心。得生彼國。由彼本習。暫證小果。其下品人。雖退大心。而其勢力。猶在得生。

慈恩同之。有云。

中下品。但由福分生。上品。具福分道分生。

云云。道分者。是菩提心行也。

5問。如菩提心。諸師異解。欣淨土心。亦不同耶。

答。大菩提心。雖有異說。欣淨土之願。九品皆應具。

6問。若淨土業。依願得報。如人作惡。不願地獄。彼不應得。地獄果報。

答。罪報有量。淨土報無量。二果既別。二因何一例。如『大論』第八云。

乘なりと雖も、後に大〔乘の〕心を發して、彼の國に生るゝことを得。彼の本の習に由つて、暫く小〔乘の〕果を證す。其の下品の人は、大〔乘の〕心を退ふと雖も、而も其の勢力、猶在つて生るゝことを得。

と。慈恩は、これに同じ。有が云はく、

中〔品と〕下品は但福分に由つて生れ、上品は福分と道分とを具〔足〕して生る。

と。云云。道分とは、是れ菩提心の行なり。

5問ふ。菩提心につき、諸師の異解あるが如く、淨土を欣ふ心にも、亦不同あり耶。

答ふ。大菩提心には、異說有りと雖も、淨土を欣ふ願は、九品ともに皆應に具すべきなり。

6問ふ。若し淨土の業は願に依つて報を得ば、人惡を作しつゝ地獄を願はざるが如きは、彼應に地獄の果報を得べからずや。

答ふ。罪の報は量有れども、淨土の報は量無し。二果既に別なれば、二因何ぞ一例にいはん。『大論』の第八に云ふが如し、

佛國事大。獨行功德。不能成就。要須願力。如牛雖力挽車。要須御者。能有所至。淨佛國土。由願引成。以願力故。福慧增長。已上。『十住毘婆沙論』云。

一切諸法。願爲根本。離願則不成。是故發願。

又云。

若人願作佛。心念阿彌陀。
應時爲現身。是故我歸命。

已上。大菩提心。既有此力。是故行者。要發此願。

[4]問。若不發願者。終不往生耶。

答。諸師不同。有云。

九品生人。皆發菩提心。其中品

佛國〔を莊嚴する〕事大なれば、獨り行の功德をもつてしては、成就すること能はず。要ず願の力を須つ。牛は車を挽く力ありと雖も、要ず御者を須つて能く至る所有るが如し。佛國土を淨むるも、願に由つて引成す。願の力を以ての故に、福慧〔德〕增長するなり。

と。已上。『十住毘婆沙論』に云はく、

一切の諸法は、願をもつて其の本と爲す。願を離れては、則ち成ぜず。是の故に、願を發す。

と。又、云はく、

若し人佛と作らんと願ひ　心に阿彌陀を念ずれば
時に應じて爲に身を現したまふ　是の故に我歸命したてまつる

と。已上。大菩提心に、既に此の力有り。是の故に行者、要ず此の願を發すべし。

[4]問ふ。若し願を發さざる者は、終に往生せざる耶。

答ふ。諸師不同なり。有が云はく、

九品生の人は、皆菩提心を發す。其の中品の人は、本是れ小

世中。救衆生苦。
已上。餘經論文。具如『十疑』也。應知。念佛修善爲業因。往生極樂爲花報。證大菩提爲果報。利益衆生爲本懷。譬如世間植木開花。因花結菓。得菓飡受。

2問。念佛之行。於四弘中。是何行攝。

答。修念佛三昧。是第三願行。隨有所伏滅。是第二願行。遠近結良緣。是第一願行。積功累德。成第四願。自餘衆善例知。不俟。

3問。一心念佛。理亦往生 何要經論。勸菩提願。

答。『大莊嚴論』云。

淨土に生れ、諸佛に親近き、無生忍を證つて、方に能く惡世の中に於て、衆生の苦を救はんと求む。

と。已上。餘の『經』『論』の文は、具に『十疑』の如くなり。應に知るべし、佛を念じて善を修するを業因と爲し、極樂に往生するを花報と爲し、大菩提を證するを果報と爲し、衆生を利益するを本懷と爲すことを。譬へば世間に、木を植ゑて花を開き、花に因つて果を結び、果を得て飡受ふが如し。

2問ふ。佛を念ずる行は、四弘〔願〕の中に於て、是れ何れの行に攝むるや。

答ふ。念佛三昧を修するは、是れ第三の願行なり。隨つて伏滅するところ有るは、是れ第二の願行にして、遠近に良緣を結ぶは、是れ第一の願行なり。功を積み德を累ぬるは、第四の願を成ずるなり。自餘の衆善は、例して知れ。〔釋を〕俟たず。

3問ふ。一心に佛を念ぜば、理亦往生すべし。何ぞ要ず『經』『論』には、菩提の願を勸むるや。

答ふ。『大莊嚴論〔大論〕』に云はく、

自利。如『十住毘婆沙』云。

自未得度。不能度彼。如人自沒於泥。何能拯濟餘人。又如爲水所漂。不能濟溺。是故說。我度已當度彼。

又如『法句』偈說。

若能自安身。在於善處者。
然後安餘人。自同於所利。

已上。故『十疑』言。

所以求生淨土。欲救拔一切衆生苦故。卽自思惟。我今無力。若在惡世。煩惱境中。以境强故。自被纒縛。淪溺三途。動經數劫。如此輪轉。無始已來。未曾休息。何時能得。救衆生苦。爲此求生淨土。親近諸佛。證無生忍。方能於惡

が爲に、先づ極樂を求むるなり。自利の爲にせず。『十住毘婆沙』に云ふが如し。

自ら度ることを得ずしては、彼を度ふこと能はず。人の自ら於泥に沒せるが如き、何ぞ能く餘の人を拯濟（拔）ひえん。又、水の爲に漂はされしもの、溺れたるを濟ふこと能はざるが如し。是の故に說く「我度り已つて、當に彼を度ふべし」と。

と。又『法句經』の偈に、說くが如し。

若し能く自ら身を安め　善き處に在るをえば
然の後餘人をも安めて　自に所利を同じうせよ

と。已上。故に『十疑』に言はく、

淨土に生れんと求むる所以は、一切の衆生の苦を救拔はんと欲ふが爲の故なり。卽ち自ら思忖ふらく「我、今力無し。若し惡世、煩惱の境の中に在つては、境强きを以ての故に、自ら纒縛られて三途に淪溺み、動もすれば數劫を經ん。此くの如くに輪轉すること、無始より已來未だ曾て休息まず。何れの時にか、能く衆生の苦を救ふことを得ん」と。此の爲に、

雖恒處地獄。不障大菩提。
若起自利心。是大菩提障。
又『丈夫論』偈云。
悲心施一人。功德大如地。
爲己施一切。得報如芥子。
救一厄難人。勝餘一切施。
衆星雖有光。不如一月明。
已上。明自利行。非是菩提心之所依。得報亦少。云何獨願速生極樂。
答。豈不前言。願極樂者。要發四弘願。隨願而勤修。此豈非是大悲心行。又願求極樂。非是自利心。所以然者。今此娑婆世界。多諸留難。甘露未霑。苦海朝宗。初心行者。何暇修道。故今爲欲圓滿菩薩願行。自在利益一切衆生。先求極樂。不爲

恒に地獄に處すと雖も、大菩提を障へず
若し自利の心を起さば　是れ大菩提の障なり
と。又『丈夫論』の偈に云はく、
悲心をもて一人に施さば　功德大地の如し
己が爲に一切に施さば　報を得ること芥子の如し
一りの厄難れる人を救ふは　餘の一切の施に勝る
衆星は光有れど　一の月の明かなるに如かず
と。已上。明らけし、自利の行は、是れ菩提心の所依に非ざれば、報を得ること亦少し。云何んぞ、獨り速かに極樂に生れんと願ふや。
答ふ。豈前に言はずや、極樂を願はん者は、要ず四の弘き願を發し、願に隨つて勤修せよと。此れ豈、是れ大悲心の行に非ずや。又、極樂を願ひ求むるは、是れ自利の心には非ず。然る所以は、今此の娑婆世界は、諸の留難多し。甘露未だ霑はざるに、苦海朝宗す。初心の行者、何の暇あつてか道を修せん。故に今、菩薩の願行を圓滿して、自在に一切の衆生を利益せんと欲する

非是四弘願。廣大菩提心。
[4]問。大菩提心。若有此力。一切菩薩。從初發心。決定應無。墮惡趣者。
答。菩薩未至不退位前。染淨二心間雜而起。前念雖滅衆罪。後念更造衆罪。又菩提心。有淺深强弱。惡業有久近定不定。是故退位昇沈不定。非菩提心無滅罪力。且述愚管。見者取捨。

三料簡者。
[1]問。『入法界品』云。
譬如金剛。從金性生。非餘寶生。
菩提心寶。亦復如是。大悲救護。
衆生性生。非餘善生。
『莊嚴論』偈云。

れ四の弘き願の、廣大の菩提心には非ず。
[4]問ふ。大菩提心に、若し此の力有らば、一切の菩薩は、初發心より決定んで惡趣に墮つる者無かるべけん。
答ふ。菩薩未だ不退の位に至らざる前は、染淨の二心間雜はつて起る。前念に衆罪を滅すと雖も、後念には更に衆罪を造る。又菩提心には淺深强弱有り、惡業には久近定不定有り。是の故に、退位にあつては昇沈定まらざるなり。菩提心に滅罪の力無きに非ず。且く愚管を述べたり。見ん者取捨せよ。

三に料簡

とは、
[1]問ふ。『入法界品』に云はく、
譬へば、金剛は金性より生じて、餘寶より生ぜざるが如く、
菩提心の寶も、亦復た是くの如し。大悲をもつて衆生を救護
する性より生じて、餘の善より生ぜず。
と。『莊嚴論』の偈に云はく、

理。
答。此是信解。大乘至極道理。非必第一義空。相應觀慧。
³問。『十疑』引『雜集論』云。
若有願生安樂淨土。卽得往生者。若人聞無垢佛名。卽得阿耨菩提者。此是別時因。全無行。
已上。慈恩同云。
願行前後。故說別時。非謂念佛不卽生也。
已上。明知。有願無行。是別時意。云何上品下生之人。但由菩提願。卽得往生耶。
答。大菩提心。功能甚深。滅無量罪。生無量福。故求淨土。隨求卽得。所言別時意者。但爲自身。願求極樂。

するに非ずや。
答ふ。此れは是れ、大乘至極の道理を信解するなり。必ずしも、第一義空と相應せる觀慧には非ず。
³問ふ。『十疑』に『雜集論』を引いて云はく、
若しは安樂國土に生れんと願うて、卽ち往生を得る者あり
若しは人、無垢佛の名を聞いて、卽ち阿耨菩提を得る者あり
並に是れ、別時の因にして、全く行有ること無し。
と。已上。慈恩も同じく云はく、
願と行と前後す。故に別時と說く。佛を念ずるも卽ち生れずと謂ふには非ず。
と。已上。明かに知る、願有つて行の無きは、是れ別時の意なることを。云何んぞ上品下生の人、但菩提の願のみに由つて、卽ち往生することを得ん耶。
答ふ。大菩提心は、功能甚深なり。無量の罪を滅し、無量の福を生ず。故に淨土を求めなば、求むるに隨つて卽ち得。言ふところの別時の意とは、但自身の爲に極樂を願ひ求むるなり。是

提心。亦畢消信施。其三。『止觀』引『秘
密藏經』已云。
初菩提心。已能除重重十惡。況
第二第三第四菩提心耶。
云云。所言初者。是三藏教。緣界內
事。菩提心也。何況深信。一切衆生。
悉有佛性。普願自他。共成佛道。豈
無滅罪。其四。『唯識論』云。
不執菩提有情實有。無由發起猛
利悲願。
已上。大士悲願。尚執有起。則知。事
願亦有勝利。其五。餘如下廻向門。
問。信解衆生。本有佛性。豈非緣

已に諸の世間に過えたり。應に世の供養を受くべし
と。云云。此の『論』も、亦但「佛と作らんと願ふ」と云ふ。事
の菩提心も、亦畢に信施を消すといふことを明せり。其の三なり。
『止觀』に『祕密藏經』を引き已つて云はく、
初の菩提心、已に能く重重の十惡を除く。況や第二、第三、
第四の菩提心を耶。
と。云云。言ふところの初とは、是れ三藏教の、界內の事を緣と
する菩提心なり。何に況や、深く一切の衆生は悉く佛性有りと
信じて、普く自他共に佛道を成ぜんと願ふこと、豈罪を滅すこ
と無からんや。其の四なり。『唯識論』に云はく、
菩提と有情との實有を執ぜずば、猛利の悲願を發起すに由無
し。
と。已上。大士の悲願すら、尚有を執して起る。則ち知る、事
〔を緣とする〕願も亦勝れたる利有りといふことを。其の五なり。餘
は、下の廻向門の如し。
問ふ。衆生に本より有る佛性を信解することは、豈理を緣と

問。緣事誓願。亦有勝利耶。
答。雖不如緣理。此亦有勝利。何以知者。上品下生業。云但發無上道心。不云解第一義。故知。唯是事菩提心。若不爾者。與彼中生業。應無別。其一。『往生論』明菩提心。但云。
以拔一切衆生苦故。以令一切衆生得大菩提故。以攝取衆生生彼國土故。
云云。若緣事心無往生力。論主豈不示緣理心。其二。『大論』第五偈云。
若初發心時。誓願當作佛。
已過諸世間。應受世供養。
云云。此『論』亦但云願作佛。明事菩

即ち師子の座より下り、大光明を放つて三千界を照し、五體を地に投げて童子を禮讚せりといふ。已上は、總じて勝れたる利を顯せり。
問ふ。事を緣とする誓願も、亦勝れたる利有り耶。
答ふ。理を緣とするには如かずと雖も、此れ亦勝れたる利有り。何を以てか知るとならば、上品下生の業に、「但無上の道の心を發す」と云つて、「第一義を解る」とは云はず。故に知る、唯是れ事〔を緣とする〕の菩提心なることを。若し爾らずんば、彼の〔上品〕中生の業と、別無かるべし。其の一なり。『往生論』に菩提心を明して、但云はく、
一切衆生の苦を拔くを以ての故に。一切衆生をして大菩提を得しむるを以ての故に。衆生を攝取して彼の國土に生ぜしむるを以ての故に。
と。云云。若し事を緣とする心に、往生の力無くんば、論主豈理を緣とする心を示さざらんや。其の二なり。『大論』の第五の偈に云はく、
若し初發心の時　當に佛と作らんと誓ひ願はば

當得無邊大福聚。
速得證於無上道。
『寶積經』偈云。
菩提心功德。若有色方分。
周遍虛空界。無能容受者。
云云。菩提心。有如是勝利。是故迦葉菩薩禮佛『偈』云。
發心畢竟二無別。
如是二心前心難。
自未得度先度他。
是故我禮初發心。
又彌伽大士。聞善財童子。已發菩提心。卽從師子座下。放大光明照三千界。五體投地禮讚童子。已上。總顯勝利。

彼等衆生の最も勝れたる者なり
此れ比類無し況や上有らん
是の故に此の諸の法を聞くことを得ば
智者常に法を樂ふの心を生し
當に無邊の大福聚を得て
速かに無上の道を得證るべし

と。『寶積經』の偈に云はく、

菩提心の功德にして　若しも色方分有るならば
虛空界に周遍し　能く容受るゝ者あること無けん

と。云云。菩提心には、是くの如き勝れたる利有り。是の故に、迦葉菩薩の禮佛の『偈』に云はく、

發心と畢竟と二つ別ならず
如是の二心において先の心難し
自ら度るを得ざるに先づ他を度はんとす
是の故に我初發心を禮したてまつる

と。又彌伽大士は、善財童子の已に菩提心を發せるを聞いて、

又『出生菩提心經』偈云。
若此佛刹諸衆生。
令住信心及持戒。
如彼最上大福聚。
不及道心十六分。
若諸佛刹恒河沙。
皆悉造寺求福故。
復造諸塔如須彌。
不及道心十六分。
乃至
如是人等得勝法。
若求菩提利衆生。
彼等衆生最勝者。
此無比類況有上。
是故得聞此諸法。
智者常生樂法心。

一切衆生の心は　悉く分別して知る可し
一切刹の微塵も　尚其の數を算ふ可し
十方の虛空界は　一毛をもつて猶量る可し
菩薩の初發心は　究竟して測る可からず
と。又『出生菩提心經』の偈に云はく、
若し此の佛の刹の諸の衆生をして
信心に住み及び戒を持たしめん
彼の最上の大なる福の聚も
道の心の十六分にも及ばじ
若し諸の佛の刹の恒河の沙ほどならんに
皆悉く寺を造り福を求むる故にせん
復た諸の塔を造ること須彌の如くにせんも
道の心の十六分にも及ばじ
乃至
是くの如き人等勝れたる法を得んも
若し菩提を求めて衆生を利さば

功德香徹。十方佛所。聲聞緣覺。以無漏智。薰諸功德。於百千劫。所不能及。譬如金剛。雖破不全。一切衆寶。猶不能及。菩提之心。亦復如是。雖少懈怠。聲聞緣覺。諸功德寶。所不能及。

已上。『經』中有二百餘喩。可見。『賢首品』偈云。

菩薩於生死。最初發心時。
一向求菩提。堅固不可動。
彼一念功德。深廣無涯際。
如來分別說。窮劫不能盡。

此言發心。通於凡聖。具見『弘決』。又『同經』偈云。

一切衆生心。悉可分別知。
一切刹微塵。尙可算其數。
十方虛空界。一毛猶可量。
菩薩初發心。究竟不可測。

り。譬へば、波利質多樹の華をもつて一日衣を薰ぜるに、瞻蔔の華、婆師の華をもつて千歲薰ずと雖も、及ぶ能はざるところの如く、菩提心の華も、亦復た是くの如し。一日薰ずるところの功德の香は、十方の佛の所に徹る。〔一切〕聲聞、緣覺の、無漏の智〔心〕を以て諸の功德を薰ずること、百千劫に於てするも、及ぶ能はざるところなり。譬へば、金剛の、破れて全からずと雖も、一切の衆寶の猶及ぶこと能はざるが如し。菩提の心も、亦復た是くの如し。少しく懈怠ると雖も、聲聞、緣覺の、諸の功德の寶の及ぶ能はざるところなり。と。（已上。『經』の中には、二百餘の喩有り。見る可し。）『賢首品』の偈に云はく、

菩薩は生死に於て　最初に心を發せし時
一向菩提を求むること　堅固にして可動がず
彼の一念の功德　深く廣くして涯際無し
如來分別して說きたまはんに　劫を窮むるも盡す能はじ

と。（此に「心を發す」と言ふは、凡、聖に通ず。具には『弘決』に見ゆ。）又『同經』の偈に云はく、

復如是。於無量劫。處生死中。諸煩惱業。不能斷滅。亦無損滅。

又『同經』法幢菩薩偈云。

若有智慧人。一念發道心。
必成無上尊。愼莫生疑惑。

已上。終不敗壞。必至菩提益。 4又『入法界品』云。

譬如閻浮檀金。除如意寶。勝一切寶菩提之心。閻浮檀金。亦復如是。除一切智。勝諸功德。譬如迦楞毘伽鳥。在殼中時。有大勢力。餘鳥不及。菩薩摩訶薩。亦復如是。於生死殼。發菩提心。功德勢力。聲聞緣覺。所不能及。譬如波利質多樹華。一日薫衣。瞻蔔華婆師華。雖千歲薫。所不能及。菩提心華。亦復如是。一日所薫。

が如く、菩提心の、水に住れる寶珠を得ば、生死の海に入れども而も沈沒まざるなり。譬へば、金剛の、百千劫の於水の中に處けども、而も爛壞ず、亦變異無きが如く、菩提の心も亦復た是くの如し。無量劫の於生死の中に處けども、諸の煩惱業も、斷ち滅すこと能はず、亦損ひ滅すこと無きなり。

と。又、『同經』の法幢菩薩の偈に云はく、

若し智慧有る人は　一念、道の心を發さば
必ず無上尊と成る　愼んで疑惑を生すこと莫れ

と。已上は、終に敗壞せずして、必ず菩提に至る益なり。 4又『入法界品』に云はく、

譬へば、閻浮檀金は、如意寶を除いて、一切の寶に勝れるが如く、菩提の心の、閻浮檀金も、亦復た是くの如し。一切智を除いて、諸の功德に勝れり。譬へば、迦楞毘伽鳥は、殼の中に在る時は大なる勢力有つて、餘の鳥の及ばざるが如く、菩薩摩訶薩も、亦復た是くの如し。生死の殼に於て菩提心を發せる、功德勢力は、聲聞、緣覺の、及ぶ能はざるところな

所積諸業。煩惱乳中。皆悉消盡。不住聲聞。緣覺法中。

『大般若經』云。

若諸菩薩。雖多發起。五欲相應。非理作意。而起一念。無上菩提。相應之心。卽能折滅。

已上三文。滅罪益。3『入法界品』云。

譬如有人。得不可壞藥。一切怨敵。不得其便。菩薩摩訶薩。亦復如是。得菩提心。不壞法藥。一切煩惱。諸魔怨敵。所不能壞。譬如有人。得住水寶珠。瓔珞其身。入深水中。而不沒溺。得菩提心。住水寶珠。入生死海。而不沈沒。譬如金剛。於百千劫。處於水中。而不爛壞。亦無變異。菩提之心。亦

の諸の煩惱の病を滅す。譬へば牛、馬、羊の乳を合せて一器に在き、師子の乳を以て彼の器の中に投るゝに、餘の乳は消え盡きて、直ちに過ぐること礙無きが如く、如來師子の菩提心の乳をもつて、無量劫に積める諸の業、煩惱の乳の中に著けば、皆悉く消え盡きて、聲聞、緣覺の法の中に住らざるなり。

と。『大般若經』に云はく、

若し諸の菩薩、多く五欲と相應せる非理の作意を發起すと雖も、若し一念、無上の菩提と相應せる心を起さば、普く能く摧き滅す。

と。已上の三文は、滅罪の益なり。3『入法界品』に云はく、

譬へば、人有つて、不可壞の藥を得ば、一切の怨敵も其の便を得ざるが如く、菩薩摩訶薩も、亦復た是くの如し。菩提心の、不壞の法藥を得ば、一切の煩惱、諸魔、怨敵も壞つこと能はざるところなり。譬へば、人有つて、水に住れる寶珠を得て其の身に瓔珞れば、深き水の中に入れども而も沒溺れざる

惡道。何以故。法無積聚。法無集惱。一切法不生不住。因緣和合。而得生起。生已還滅。若心生已滅。一切結使。亦生已滅。如是解無犯處。若有犯有住。無有是處。如百年闇室。若燃燈時。闇不可言。我是室主。住此久而不肯去。燈若生闇卽滅。其義亦如是。此『經』具指。前四菩提心。已上。在彼『經』下卷。言前四者。指四教菩提心。『華嚴經』入法界品云。

譬如善見藥王。滅一切病。菩提心滅。一切衆生。諸煩惱病。譬如牛馬羊乳。合在一器。以師子乳。投彼器中。餘乳消盡。直過無礙。如來師子。菩提心乳。著無量劫。

清淨なりと知つて、解知し信入せん者は、我是の人地獄、及び諸の惡道の果に趣向くとは說かず。何を以ての故とならば、法には積聚無く、法には集も惱も無し。一切の法は、生れもせず、住りもせず。因と緣と和合して、生起することを得れども、生〔起〕じ已れば、還た滅するなり。若し心、生じ已つて滅せば、一切の結使も、亦生じ已つて滅せん。是くの如く解さば、犯す處も無し。若し犯すこと有り、住ること有りといはば、是の處有ること無けん。百年の闇室にも、若し燈を燃す時は、闇「我は是れ室の主なり、此に住ること久しければ、去るを肯んぜず」と言ふ可からず。燈若し生ずるときは、闇卽ち滅するが如し。」と。其の義、亦是くの如し。此の『經』は、具に前の四の菩提心を指すなり。と。已上は、彼の『經』の下卷に在り。「前の四」と言ふは、四教の菩提心を指せるなり。『華嚴經』の入法界品に云はく、

譬へば〔人有つて〕善見藥王〔を得ば〕一切の病を滅するが如く、〔菩薩摩訶薩も〕菩提心〔の善見藥王を得ば〕一切衆生

不得利。能受供養。比丘驚問。云何是人。能受供養。佛言。是人受衣。用敷大地。受揣食若須彌山。亦能畢報施主之恩。當知。小乘之極果。不及大乘之初心。

已上。消信施。又云。

『如來密藏經』說。若人父爲緣覺而害。盜三寶物。母爲羅漢而汙。不實事謗佛。兩舌間賢聖。惡口罵聖人。壞亂求法者。五逆初業之瞋。奪持戒人物之貪。邊見之癡。是爲十惡者。若能知如來。說因緣法。無我人衆生壽命。無生無滅。無染無著。本性清淨。又於一切法。知本性清淨。解知信入者。我不說是人。趣向地獄。及諸

何ん」と。佛、言はく「若し大乘の心を發して、一切智を求むるものは、數に墮ちず、業を修せず、利を得ざらんも、能く供養を受けん」と。比丘、驚いて問ひたてまつらく「云何んが、是の人能く供養を受くる」と。佛、言はく「是の人、衣を受けて用つて大地に敷き、摶食を受くること、須彌山のごとくならんも、亦能く畢に施主の恩を報いん」と。當に知るべし、小乘の極果は、大乘の初心に及ばざることを。と。

已上は、信施を消す〔の益〕なり。又、云はく、

『如來密藏經』に說く「若し人あつて、父の緣覺と爲りしを害し、三寶の物を盜〔奪〕み、母の羅漢と爲りしを汙し、不實の事を以て佛を謗り、兩舌して賢聖を間〔壞〕て、惡口して聖人を罵り、求法の者を壞亂し、五逆〔罪〕の初業〔と相應する〕瞋と、持戒の人の物を奪ふ貪と、邊見の癡とあらん。是れを、十惡の惡者と爲す。若し能く、如來の、因緣の法は我も人も衆生も壽命も無く、生も無く滅も無く、染も無く著も無し、本性清淨なりと說きたまふを知り、又一切の法に於て、本性

二明利益者。若人如說。發菩提心。設少餘行。隨願決定。往生極樂。如上品下生之類是也。如是利益無量。今略示一端。[1]『止觀』云。

『寶梁經』云。比丘不修比丘法。大千無唾處。況受人供養。六十比丘悲泣白佛。我等乍死。不能受人供養。佛言。汝起慚愧心。善哉善哉。一比丘白佛言。何等比丘。能受供養。佛言。若在比丘數。修僧業得僧利者。是人能受供養。四果向是僧數。三十七品是僧業。四果是僧利。比丘重白佛。若發大乘心者復云何。佛言。若發大乘心。求一切智。不墮數。不修業。

二に利益

を明すとは、若し人あつて、說の如く菩提心を發さば、設ひ餘行を少かんとも、願に隨つて決定んで極樂に往生せん。上品下生の類の如き是れなり。是くの如き利益無量なり。今略して、その一端を示さん。[1]『止觀』に云はく、

『寶梁經』に云はく「比丘にして比丘の法を修せざるものは、大千〔地〕に唾く處も無し、況や人の供養を受くることをや、と。六十〔二百〕の比丘、悲泣して佛に白さく「我等、乍ちに死すとも、人の供養を受くること能はじ」と。佛、言はく「汝、慚愧の心を起せり。善い哉、善い哉」と。一りの比丘、佛に白さく「何等の比丘か、能く供養を受けん」と。佛、言はく「若し比丘の數に在つて、僧の業を修し、僧の利を得たらん者は、是の人能く供養を受けん。四果〔四〕向は是れ僧の數なり、三十七品は是れ僧の業なり、四果は是れ僧の利なり」と。比丘重ねて佛に白さく「若し大乘の心を發さん者は、復た云

亦常修習。四弘願行。如依空地。造立宮舍。唯地唯空。終不能成。此是由諸法三諦相卽。故『中論』偈云。

因緣所生法。我說卽是空。

亦名爲假名。亦是中道義。

云云。更檢『止觀』。

問。執有之見。罪過既重。緣事菩提心。豈有勝利耶。

答。堅執有時。過失乃生。所言緣事。非必堅執。若不爾者。應無見有。得道之類。見空亦爾。譬如用火。手觸爲害。不觸有益。空有亦爾。

るゝも、二事倶に失す。

と。已上。是の故に、行者、常に諸法の、本より來た空寂なることを觀じ、亦常に四の弘き願行を修し習へよ。空と地とに依つて宮舍を造立らんも、唯地、唯空には、終に成ること能はざるが如し。此れは、是れ諸法の三諦相ひ卽するに由る。故に『中論』の偈に云はく、

因緣によつて生るゝ法は　我說く卽ち是れ空（無）と

亦名（是）づけて假名と爲す　亦是れ中道の義なり

と。云云。更に『止觀』を檢べよ。

問ふ。有に執はるゝの見、罪過既に重くんば、事を緣とする菩提心、豈勝れたる利有らん耶。

答ふ。堅く有に執はるゝ時、過失乃ち生ず。言はゆる事を緣とすとは、必ずしも堅く執はるゝに非ず。若し爾らずんば、應に得道の類有るを見ること無かるべし。空を見ることも、亦爾り。譬へば、火を用ふるに、手觸るれば害を爲し、觸れざれば益有るが如し。空、有も亦爾り。

有所得者。說有我人。壽者命者。憶念分別。無所有法。或說斷常。或說有作。或說無作。我淸淨法。以是因緣。漸漸滅盡。我久在生死。受諸苦惱。所成菩提。是諸惡人。爾時毀壞。

略抄。又『同經』淨戒品云。

我見。人見。衆生見者。多墮邪見。斷滅見者。多疾得道。何以故。是易捨故。是故當知。是人寧自。以利刀割舌。不應衆中。不淨說法。

有所得執。名爲不淨。『大論』。竝明二執過云。

譬如人行陜道。一邊深水。一邊大火。二邊俱死。著有著無。二事俱失。

已上。是故行者。常觀諸法。本來空寂。

有所得の者は、我、人、壽者、命者有りと說いて、無所有の法を憶想し、分別す。或は斷と說き、常と〔說き、〕或は有作と說き、或は無作と說く。我が淸淨の法は、是の因緣を以て、漸漸に滅し盡きん。我久しく生死に在つて、諸の苦惱を受けて、成ぜしところの菩提を、是の諸の惡人、爾の時に毀ち壞らん。

と。略抄す。又『同經』の淨戒〔法〕品に云はく、

我ありの見、人ありの見、衆生ありの見をもつ者は、多くは邪見に墮ち、〔一切〕斷滅の見をもつ者は、多くは疾く道を得る。何を以ての故とならば、是れは捨て易きが故なり。是の故に、當に知るべし。是の人は、寧ろ自ら利刀を以て舌を割らんも、衆の中にして不淨に法を說くべからず。

と。有所得の執を、名づけて「不淨」と爲す。『大論』には、二の執〔見〕の過を竝べ明して云はく、

譬へば、人の陜き道を行くに、一邊は深き水、一邊は大なる火にして、二邊倶に死すが如し。有に著はるゝも、無に著は

可愍。於諸法空觀弱。若得方便力。於此二法。等無偏黨。大悲心不妨諸法實相。得諸法實相不妨大悲。生如是方便。是時便得。入菩薩法位。住阿鞞跋致地。

略抄。

問。若偏生解。其過云何。

答。『無上依經』上卷。明空見云。

若有人。執我見。如須彌山大。我不驚怖。亦不毀呰。增上慢人。執著空見。如一髭髮。作十六分。我不許可。

又『中論』第二偈云。

大聖說空法。爲離諸見故。

若復見有空。諸佛所不化。

『佛藏經』念僧品。破有所得執云。

を以てせば、諸法の空を観ること弱し。若し方便力を得ば、此の二法に於て等しうして偏黨ること無けん。大悲心は諸法の實相を妨げず、諸法の實相を得れども大悲をば妨げず。是くの如き方便を生ずる是の時、便ち菩薩の法位に入つて、阿鞞跋致の地に住ることを得。

と。略抄す。

問ふ。若し偏して解を生すときは、其の過云何ん。

答ふ。『無上依經』の上卷に、空の見を明して云はく、

若し人有つて、我の見に執はるゝこと、須彌山の如く大ならんも、我驚き怪しまず、亦毀呰らじ。增上慢の人、空の見に執著はるゝこと、一毫髮を十六分に作るが如くならんも、我許可さじ。

と。又『中論』の第二の偈に云はく、

大聖空の法を說きたまふは　諸見を離れしめんが爲の故なり

若し復た空ありと見ば　諸佛の化せざる所なり

と。『佛藏經』の念僧品に、有所得の執を破して云はく、

『十住毘婆沙』偈云。
我今是新學。善根未成就。
心未得自在。願後當相與。
已上。行者應當。如是用心。
問。此中緣理。發菩提心。亦可信因果。勤修行道耶。
答。理必可然。如『淨名經』云。
雖觀諸佛國。及與衆生空。
而常修淨土。教化諸群生。
『中論』偈云。
雖空亦不斷。雖有而不常。
業果報不失。是名佛所說。
又『大論』云。
若諸法皆空。則無衆生。誰可度者。是時悲心便弱。或時以衆生

隨喜ぶ福き報は　施と等しくて異なること無し
と。『十住毘婆沙』の偈に云はく、
我今是れ新學なり　善根未だ成就せず
心未だ自在を得ず　願はくば後に當に相ひ與ふべし
と。已上。行者、應當に是くの如く心を用ふべし。
問ふ。此の中に、理を緣として菩提心を發すも、亦因果を信じて、勤めて道を修行す可き耶。
答ふ。理、必ず然る可し。『淨名經』〔の偈〕に云ふが如し。
諸佛の國と衆生との　空しきことを知ると雖
而も常に淨土を修め　また群生を敎へ化く
と。『中論』の偈に云はく、
空しといへど亦斷えもせず　有りといへども而も常かず
業の果報の失はざる　是れを佛の所說と名づく
と。又『大論』に云はく、
若し諸法皆空ならば、則ち衆生も無く、誰か度ふ可き者あらん。是の時は、悲の心便ち弱し。或は、時に衆生の愍む可き

後。諸善根水。自然流入。四弘願渠。轉生極樂。遂會菩提。薩婆若海。何況時時。憶念前願。具如下廻向門。

[6]問。凡夫無力。能捨難捨。或復貧乏之。以何方便。令心順理。

答。『寶積經』云。

如此布施。若無有力。不能學之。不能捨財。是菩薩。應如是思惟。我今當勤加精進。時時漸漸。斷除慳貪悋惜之垢。我當勤加精進。時時漸漸。學捨財施與。常令我施心。增長廣大。

已上。又『因果經』偈云。

若有貧窮人。無財可布施。
見他修施時。而生隨喜心。
隨喜之福報。與施等無異。

一たび發心して後は、諸の善根の水、自然に四弘願の渠に流れ入つて、轉た極樂に生れ、遂に菩提の薩婆若海に會す。何に況や、時時、前の願を憶念さんをや。具には、下の廻向門の如し。

[6]問ふ。凡夫は無力なれば、能く捨てんとして捨て難し。或は復た貧乏なれば、何なる方便を以てか、心をして理に順はしめんや。

答ふ。『寶積經』に云はく、

此くの如く布施せんに、若し力有ること無く、これを學ぶこと能はず、財を捨つること能はずんば、是の菩薩、應に是くの如く思惟すべし「我、今當に勤めて精進を加へ、時時漸漸に慳貪、悋惜の垢を斷ち除かん。我、當に勤めて精進を加へ、時時漸漸に財を捨てゝ施し與ふることを學び、常に我が施の心をして、增長し、廣大ならしめん」と。

と。已上。又『因果經』の偈に云はく、

若し貧窮しき人有つて　財の布施す可きもの無くば
他の施を修す時を見て　隨喜ぶ心を生せ

「華嚴經」入法界品云。
譬如金剛。能持大地。不令墜沒。
菩提之心。亦復如是。能持菩薩。
一切願行。不令墜落。沒於三界。
云云。

問。凡夫不堪。常途用心。爾時善
根。爲唐捐耶。
答。若至誠心。心念口言。我從今日。
乃至一善。不爲己身。有漏果報。盡
爲極樂。盡爲菩提。發此心後。所有
諸善。若覺不覺。自然趣向。無上菩
提。如一穿渠溝。諸水自流入。轉至
江河。遂會大海。行者亦爾。一發心

の念を懷き、力に隨つて修行せば、渧は微なりと雖も、漸く大
器に盈つるが如く、此の心、能く巨細の萬善を持つて、漏れ落
しめず、必ず菩提に至るなり。」『華嚴經』の入法界品に云ふが
如し。

譬へば、金剛の能く大地を持ち、墜して沒せしめざるが如く、
菩提の心も、亦復た是くの如し。諸の菩薩の、一切の願行を
持ち、墜落して三界に沒せしめず。

と。云云。

問ふ。凡夫は、常途に心を用ふるに堪へざれば、爾の時の善
根は唐捐しと爲ん耶。

答ふ。若し至誠心をもつて、心に念ひ、口に言はん「我、今
日より、乃至一善をも、己が身の有漏の果報の爲にせじ。盡く
極樂の爲にし、盡く菩提の爲にせん」と。此の心を發して後は、
有らゆる諸善、若しは覺え、〔若しは〕覺えざるも、自然に無上
菩提に趣き向ふ。一たび渠溝を穿れば、諸水自ら流れ入つて、
轉た江河に至り、遂に大海に會するが如し。行者も、亦爾り、

已上。『經』文甚廣。今略抄之。可見。如是隨事。常發心願。願令此衆生。速成無上道。願我如是。漸漸成就。第一願行。圓滿檀度。速證菩提。廣度衆生。發一愛語。施一利行。同一善事。準此應知。[2]若暫制伏。一念惡時。應作是念。願我如是。漸漸成就。第二願行。斷諸惑業。速證菩提。廣度衆生。[3]若讀誦修習一文一義時。應作是念。願我如是。漸漸成就。第三願行。學諸佛法。速證菩提。廣度衆生。」觸一切事。常作用心。我從今身。漸漸修學。乃至生極樂。自在學佛道。速證菩提。究竟利生。若常懷此念。隨力修行者。如渧雖微。漸盈大器。此心能持。巨細萬善。不令漏落。必至菩提。」如

上の如く布施せよ。是れ、我が善き行なり。と。已上。『經』文は甚だ廣けれども、今略して之を抄せり。見る可し。是くの如く、事に隨つて、常に心の願を發せ「願はくば、此の衆生をして、速かに無上道を成ぜしめん。願はくば、我是くの如くして、漸漸に第一の願行を成就し、檀度を圓滿して、速かに菩提を證し、廣く衆生を度はん」と。一の愛語を發し、一の利行を施し、一の善事に同ずるも、此れに準じて知るべし。[2]若し暫くも一念の惡を制伏することある時は、應に是の念を作すべし「願はくば、我是くの如くして、漸漸に第二の願行を成就し、諸の惑業を斷じて、速かに菩提を證し、廣く衆生を度はん」と。[3]若し一文、一義をも讀誦み、修習ふことある時は、應に是の念を作すべし「願はくば、我是くの如くして、漸漸に第三の願行を成就し、諸の佛法を學んで、速かに菩提を證し、廣く衆生を度はん」と。」一切の事に觸れて、常に心を用ふることを作せ「我、今身より漸漸に學を修め、乃至極樂に生れて自在に佛道を學び、速かに菩提を證し、究竟して〔衆〕生を利せん」と。若し常に此

便善巧。無有一心一行空過。而
不廻向一切智者。
已上
問。云何用心。
答。如『寶積經』九十三云。
須食施食。爲具足一切智力故。
須飮施飮。爲斷渇愛力故。須衣
施衣。爲得無上慚愧衣故。施坐
處。爲坐菩提樹下故。施燈明。爲
得佛眼明故。施紙墨等。爲得大
智慧故。施藥爲除衆生結使病故。
如是乃至。或自無財。當生心施。
欲得開示。無量無邊。一切衆生。
有力無力。如上布施。是我善行。

般若經』に云ふが如し。
若し諸の菩薩、深般若波羅蜜多の方便善巧を行ずれば、一心
一行として空しく過ぎ、一切智に廻向せざるもの有ること無
し。
と。已上。
問ふ。云何にして心を用ふるや。
答ふ。『寶積經』の九十三に云ふが如し。
食を須むるものには、食を施せ、一切智の力を具足せんが爲の
故に。飮を須むるものには、飮を施せ、〔衆生の〕渇愛の力を斷
たんが爲の故に。衣を須むるものは、衣を施せ、無上の慚愧
の衣を得んが爲の故に。坐處を施すは、菩提樹の下に坐せん
が爲の故に。燈明を施すは、佛眼の明を得んが爲の故に。紙
墨等を施すは、大なる智慧を得んが爲の故に。藥を施すは、
衆生の結使の病を除かんが爲の故に。是くの如く、乃至、或
は自ら財無くんば、當に心の施を生すべし。無量無邊の、一
切の衆生を開示くことを得んと欲はば、力有るも、力無きも、

行。何況誰人。一生之中。不一稱南無佛。不一食施衆生。須以此等微少善根。皆應攝入四弘願行。故行願相應。不爲虛妄願。」如『優婆塞戒經』第一云。

若人不能一心觀察。生死過咎涅槃安樂。如是之人。雖復慧施持戒多聞。終不能得解脫分法。若能厭患生死過咎。深見涅槃功德安樂。如是之人。雖復少施小戒小聞。卽能獲得解脫分法。

已上。於無量世。以無量財。施無量人。於無量佛所。受持禁戒。於無量世。無量佛所。受持讀誦。十二部經。名爲多施戒聞。以一把麨。施一乞人。一日一夜。受持八禁。讀一四句偈。名少施戒聞。如『經』廣說。」是故行者。隨事用心。乃至一善。無空過者。如『大般若經』云。

若諸菩薩。行深般若波羅蜜多方

別は、心に在つて行に非ざることを。何に況や、誰人か、一生の中、一たびも「南無佛」と稱へず、一食をも衆生に施さざるものあらん。須らく此れ等微少の善根を以ても、皆應に四弘の願行に攝り入るべし。故に、行と願と相應して、虛妄の願とは爲らざるなり。」『優婆塞戒經』の第一に云ふが如し。

若し人、一心に生死の過咎、涅槃の安樂を觀察すること能はずんば、是くの如き人は、復た惠施、持戒、多聞ありと雖も、終に解脫分の法を得ること能はじ。若し能く生死の過咎を厭患ひ、深く涅槃の功德と安樂とを見ば、是くの如き人は、復た施少く、戒少く、聞少しと雖も、卽ち能く解脫分の法を獲得ん。

と。　已上。無量の世に於て、無量の財を以て、無量の人に施し、無量の佛の所に於て、禁戒を受持し、無量の世に、無量の佛の所に於て、十二部經を受持し讀誦するを、名づけて「施、戒、聞多し」と爲す。一把の麨を以て、一の乞人に施し、一日一夜、八禁を受持し、一の四句偈を讀むを、「施、戒、聞少し」と名づく。『經』に廣く說くが如し。」是の故に、行者、事に隨つて心を用ふれば、乃至一善も、空しく過ぐるもの無きなり。『大

是義故。亦有亦無。所以者何。時節有異。其體是一。衆生佛性。亦復如是。若言衆生中。別有佛性者。是義不然。何以故。衆生卽佛性。佛性卽衆生。直以時異。有淨不淨。善男子。若有問言。是子能生果不。是果能生子不。應定答言。亦生不生。

已上

問。凡夫不堪勤修。何虛發弘願耶。

答。設不堪勤修。猶須發悲願。其益無量。如前後明。調達誦六萬藏經。猶不免那落。慈童發一念悲願。忽得生兜率。則知。昇沈差別。在心非

ず、是の故に「無し」と名づく。是の義を以ての故に、「亦は有り、亦は無し」といふ。所以は何ん。時節に異なること有れども、其の體は是れ一なり。衆生の佛性も、亦復た是くの如し。若し衆生の中に、別に佛性有りと言はば、是の義然らず。何を以ての故とならば、衆生は卽ち佛性なり、佛性は卽ち衆生なり、直時の異なるを以て、淨と不淨と有るなり。善男子、若し問ふこと有つて言はん「是の子は能く果を生ずるや不や、是の果は能く子を生ずるや不や」と。應に定んで答へて言ふべし「亦は生じ、亦は生ぜず」と。

と。已上。

問ふ。凡夫は、勤修するに堪へず。何ぞ、虛しく弘き願を發さん耶。

答ふ。設ひ勤修するに堪へざらんも、猶須らく悲の願を發すべし。其の益の無量なること、前後に明すが如し。調達は六萬藏の經を誦みしも、猶那落を免れざりき。慈童は一念の悲の願を發して、忽ち兜率に生るゝことを得たり。則ち知る、昇沈の差

意。起惑業耶。
答。生如是解。名之爲惡取空者。專非佛弟子。今反質云。汝若煩惱卽菩提故。欣起煩惱惡業。亦應生死卽涅槃故。欣受生死猛苦。何故於刹那苦果。猶厭難堪。於永劫苦因。欣自恣作。是故當知。煩惱菩提。體雖是一。時用異故。染淨不同。如水與氷。亦如種果。其體是一。隨時用異。由此修道者。顯本有佛性。不修道者。終無顯理。如『涅槃經』三十二云。

善男子。若有人問。是種子中。有果無果耶。應定答言。亦有亦無。何以故。離子之外。不能生果。是故名有。子未出牙。是故名無。以

を起すべき耶。
答ふ。是くの如き解を生す、これを名づけて惡取空の者と爲す。專ら佛弟子に非ず。今、反質して云はん。汝若し、煩惱卽ち菩提の故に、欣つて煩惱、惡業を起さば、亦應に、生死卽ち涅槃の故に、欣つて生死の猛苦を受くべし。何が故に、刹那の苦果に於て、猶堪へ難きことを厭ひ、永劫の苦因に於て、自恣に作らんことを欣ふや。是の故に、當に知るべし。煩惱と菩提と體は是れ一なりと雖も、時用異なるが故に、染と淨と同じからず。水と氷との如く、亦種と果との如し。其の體は是れ一なれども、時に隨つて用異なるなり。此に由つて、道を修する者は、本有の佛性を顯せども、道を修せざる者は、終に理を顯すこと無きなり。『涅槃經』の三十二に云ふが如し。

善男子、若し人有つて問はん「是の種子の中に、果有りや、果無き耶」と。應に定んで答へて言ふべし「亦は有り、亦は無し」と。何を以ての故とならば、子を離れて外に果を生ずること能はず、是の故に「有り」と名づく。子未だ牙を出さ

諸法實相。此不可得。亦不可得。

略抄。又迦葉菩薩白佛言。

一切諸法中。悉有安樂性。

唯願大世尊。爲我分別說。

又『般若經』云。

一切有性。皆如來藏。普賢菩薩。

自體徧故。

『法句經』云。

諸佛依貪瞋。而處於道場。

塵勞諸佛種。本來無所動。

五蓋及五欲。爲諸佛種性。

常以是莊嚴。本來無所動。

諸法從本來。無是亦無非。

是非性寂滅。本來無所動。

已上六文。是利根人菩提心耳。

問。煩惱菩提。若一體者。唯應任

の實相なり。此の不可得も、亦不可得なり。

と。略抄す。又、迦葉菩薩、佛に白して言はく、

一切の諸法の中に　悉く安樂の性有り

唯願はくば大世〔仙〕尊　我が爲に分別して說きたまへ

と。又『般若經』に云はく、

一切の有情は、皆如來藏なり。普賢菩薩自體徧の故に。

と。『法句經』に云はく、

諸佛は貪と瞋に依つて　道場に處したまふ

塵勞は諸佛の種なり　本より來た動くところ無し

五の蓋と五の欲を　諸佛の種性と爲す

常に是れを以て莊嚴りたまふ　本より來た動くところ無し

諸法は本より來た　是も無く亦非も無し

是非の性は寂滅し　本より來た動くところ無し

と。已上の六文は、是れ利根の人の菩提心なるのみ。

問ふ。煩惱と菩提と、若し一體ならば、唯意に任せて、惑業

者。卽知是諸法。皆是法性。譬如神通人。能變瓦石。皆使爲金。鈍根者。方便分別求之。乃得法性。譬如大冶鼓石。然後得金。

已上。又云。

苦行頭陀。初中後夜。勤心觀禪。苦而得道。聲聞敎也。觀諸法相。無縛無解。心得淸淨。菩薩敎也。如文殊師利本緣。

已上。卽引『無行經』喜根菩薩偈云。

婬欲卽是道。恚癡亦如是。
如此三事中。無量諸佛道。
若有人分別。婬怒癡及道。
是人去佛道。譬如天與地。

如是有七十餘偈。又『同論』云。

一切法不可得。是名佛道。卽是

法は、皆是れ法性なり」と知る。譬へば、神通ある人の、能く瓦石を變じて、皆金と爲らしむるが如し。鈍根の者は、方便分別してこれを求めて、乃ち法性を得。譬へば、大冶の、石を鼓つて、然して後に金を得るが如し。

と。已上。又、云はく、

苦行頭陀し、初、中、後夜に、勤心に坐禪し、苦を觀じて道を得るは、聲聞の敎なり。諸法の相は、無縛無解なりと觀じて、心淸淨なることを得るは、菩薩の敎なり。文殊師利の本緣の如し。

と。已上。卽ち、『無行經』の喜根菩薩の偈を引いて云はく、

婬欲は卽ち是れ道なり　恚も癡も亦是くの如し
此くの如き三事の中に　無量の諸佛の道あり
若し人有つて　婬怒癡と道とを分別すれば
是の人佛を去ること遠し、譬へば天と地との如し

と。是くの如く、七十餘の偈有り。又『同論』に云はく、

一切法の不可得なる、是れを佛道と名づく。卽ち、是れ諸法

不淨非正道因。若心有限非大菩提。若無至誠其力不强。是故要須淸淨深廣誠心。不爲勝他名利等事。而於佛眼所照無盡法界。一切衆生。一切煩惱。一切法門。一切佛德。發此四種之願行也。

問。於何法中。求無上道。

答。此有利鈍二差別。如大論云。如黃石中有金性。白石中有銀性。如是一切世間法中。皆有涅槃性。諸佛賢聖。以智慧方便。持戒禪定引導。令得是涅槃法性。利根

にして、是れ總なり。」四弘〔誓願〕已つて後は、「自他法界同じく利益し、共に極樂に生れて佛道を成ぜん」と云ふ可し。心の中には應に念ず可し「我と衆生と共に極樂に生れ、前の四弘願を圓滿し究竟せん」と。若し別の願有らば、四弘〔願〕の前にこれを唱へよ。若し心不淨ならば、正道の因に非ず。若し心に限有らば、大菩提に非ず。若し至誠無くんば、其の力强からず。是の故に、要ず淸淨にして、深廣なる誠の心を須ひよ。勝他、名利等の事の爲にせざれ。而も、佛眼の照すところの無盡法界の、一切の衆生、一切の煩惱、一切の法門、一切の佛德に於て、此の四種の願と行とを發せ。」

問ふ、何れの法の中に於て、無上道を求むるや。

答ふ。此に利鈍の二〔種〕の差別有り。「大論」に云ふが如し。黃石の中には金の性有り、白石の中には銀の性有るが如し。是くの如く、一切世間の法の中には、皆涅槃の性有り。諸佛賢聖は、智慧、方便、持戒、禪定を以て、〔敎化し〕引導して、是の涅槃の法性を得しめたまふ。利根の者は、卽ち「是の諸

無造菩提者。亦無有衆生。亦無造衆生者。乃至云云。此二四弘。各有二義。一云。初二願拔衆生苦集二諦苦。後二願與衆生道滅二諦樂。二云。初一約他。後三約自。謂拔衆生二諦苦。與衆生二諦樂。總在初願中。爲欲究竟圓滿此願。更約自身發後三願。如『大般若經』云。

爲利有情。求大菩提。故名菩薩。

而不依著。故名摩訶薩。

已上。又前三是因是別。第四是果是總。」四弘已後可云。自他法界同利益。共生極樂成佛道。心中應念。我與衆生共生極樂。圓滿究竟前四弘願。若有別願者。四弘前唱之。若心

と爲す。然も是の中に於て、實に得る所無し。得る所無きを以ての故に得。若し一切の法に於て得る所無くんば、是れを菩提を得と名づく。始行の衆生の爲の故に、菩提有りと說くなり。乃至。然も是の中に於て、亦心有ること無く、亦心を造る者も無し。亦菩提有ること無く、亦菩提を造る者も無し。亦衆生有ること無く、亦衆生を造る者も無し。

と。乃至云云。此の二の四弘〔誓願〕に、各〻二の義有り。一に云はく、初の二願は衆生の苦、集二諦の苦を拔き、後の二願は衆生に道、滅二諦の樂を與ふ、と。二に云はく、初の一は他に約し、後の三は自に約す、と。謂はく、衆生より二諦の苦を拔いて、衆生に二諦の樂を與ふるは、總じて初願の中に在り。此の願を究竟し圓滿せんと欲ふが爲に、更に自身に約して後の三願を發すなり。『大般若經』に云ふが如し。

有情を利せんが爲に大菩提を求む、故に菩薩と名づく。而も依著せず、故に摩訶薩と名づく。

と。已上。又前の三は是れ因にして、是れ別なり。第四は是れ果

脫。是故普於法界一切衆生。起大慈悲。興四弘誓。是名順理發心。是最上菩提心。（可見『止觀』第一。）又『思益經』云。
知一切法非法。知一切衆生非衆生。是名菩薩發無上菩提心。
又『莊嚴菩提心經』云。
菩提心者。非有非造。離於文字。菩提卽是心。心卽是衆生。若能如是解。是名菩薩修菩提。菩提非過去未來現在。如是心衆生。亦非過去未來現在。能如是解。名爲菩薩。然於是中。實無所得。以無所得故得。若於一切法無所得。是名得菩提。爲始行衆生故。說有菩提。（乃至。）然於是中。亦無有心。亦無造心者。亦無有菩提。亦

し。實有るにも非ず、實無きにも非ず。若し無しと謂はば、卽ち妄語なり、若し有りと謂はば、卽ち邪見なり。心を以て知る可からず、言を以て辯ず可からず。衆生は、此の不思議、不縛（ばく）の法の中に於て思想して縛を作し、無脫の法の中に於て而も脫を求む。是の故に、普く法界の一切衆生に於て、大なる慈悲を起し、四の弘き誓を興す。是れを、理に順へる發心と名づく。是れ、最上の菩提心なり。（『止觀』の第一を見る可し。）又『思益經』に云はく、

一切の法は法に非ずと知り、一切の衆生は衆生に非ずと知る。是れを、菩薩、無上の菩提心を發（おこ）すと名づく。

と。又『莊嚴菩提心經』に云はく、

菩提心とは、有るに非ず、造るに非ず、文字を離る。菩提は卽ち是れ心なり、心は卽ち是れ衆生なり。若し能く是くの如く解せば、是れを菩薩、菩提〔心〕を修すと名づく。菩提は、過去、未來、現在に非ず。是くの如く、心と衆生も、亦過去、未來、現在に非ず。能く是くの如く解するを、名づけて菩薩

此是攝善法戒。亦是智德心。亦是了因佛性。報身菩提因。四無上菩提誓願證。此是願求佛果菩提。謂由具足前三行願。證得三身圓滿菩提。還亦廣度一切衆生。²二緣理願者。一切諸法本來寂靜。非有非無。非常非斷。不生不滅。不垢不淨。一色一香無非中道。生死卽涅槃。煩惱卽菩提。翻一一塵勞門。卽是八萬四千諸波羅蜜。無明變爲明。如融氷成水。更非遠物。不餘處來。但一念心普皆具足。如如意珠。非有寶非無寶。若謂無者卽妄語。若謂有者卽邪見。不可以心知。不可以言辯。衆生於此。不思議不縛法中。而思想作縛。於無脫法中。而求於

くば斷たんことを」と。此れは、是れ攝律儀戒なり、亦是れ斷德の心なり、亦是れ正因佛性なり、法身の菩提の因なり。三には「法門は盡くること無からんも誓つて願はくば知らんことを」と。此れは、是れ攝善法戒なり、亦是れ智德の心なり、亦是れ了因佛性なり、報身の菩提の因なり。四には「無上の菩提は誓つて願はくば證らんことを」と。此れは、是れ佛果菩提を願ひ求むるなり。謂はく、前の三の行願を具足するに由り、〔法、報、應〕三身圓滿の菩提を證り得て、還つて亦廣く一切の衆生を度ふなり。²二に理を緣とする願とは、一切の諸法は、本より來寂靜なり。有るにも非ず、無きにも非ず。常くにも非ず、斷ゆるにも非ず。生れもせず、滅びもせず。垢れてもなく、淨くもあらず。一の色、一の香も、中道に非ずといふこと無し。生死は卽ち涅槃なり。煩惱は卽ち菩提なり。一一の塵勞門を翻せば、卽ち是れ八萬四千の諸波羅蜜なり。無明の變じて明と爲るは、氷を融かして水と成すが如し。更に遠き物に非ず、餘處より來るにもあらず。但一念の心に普く皆具足すること、如意珠の如

要。故聊以三門。決擇其義。行者勿厭繁。一明菩提心行相。二明利益。三總料簡。

初行相者。總謂之。願作佛心。亦名上求菩提下化衆生心。」別謂之。四弘誓願。此有二種。一緣事四弘願。是卽衆生緣慈。或復法緣慈也。二緣理四弘。是無緣慈悲也。[1]「言緣事四弘者。一衆生無邊誓願度。應念。一切衆生悉有佛性。我皆令入無餘涅槃。此心卽是。饒益有情戒。亦是恩德心。亦是緣因佛性。應身菩提因。二煩惱無邊誓願斷。此是攝律儀戒。亦是斷德心。亦是正因佛性。法身菩提因。三法門無盡誓願知。

故に、聊か三門を以て、其の義を決擇せん。行者、繁きを厭ふこと勿れ。一には菩提心の行相を明し、二には利益を明し、三には總じて料簡ぶ。

初に行相

とは、總じてこれを謂へば、佛と作らんと願ふ心なり。亦、上菩提を求め下衆生を化ふ心とも名づく。」別してこれを謂へば、四の弘き誓願なり。此れに、二種有り。一には、事を緣とする四の弘き願なり。是れ卽ち、衆生を緣とする慈なり。或は復た、法を緣とする慈なり。二には、理を緣とする四の弘き〔願〕なり。是れ、緣とするもの無き慈悲なり。[1]「事を緣とする四の弘き〔願〕と言ふは、一には「衆生は邊無からんも誓つて願はくば度はんことを」と。應に念ずべし「一切の衆生には悉く佛となる性有れば、我皆無餘涅槃に入らしめん」と。此の心は、卽ち是れ饒益有情戒なり、亦是れ恩德の心なり、亦是れ緣因佛性なり、應身の菩提の因なり。二には「煩惱は邊無からんも誓つて願は

第三作願門者。以下三門。是三業・相應之意業也。」綽禪師『安樂集』云。

『大經』云。凡欲往生淨土。要須發菩提心爲源。云何菩提者。乃是無上佛道之名也。若欲發心作佛者。此心廣大周遍法界。此心長遠盡未來際。此心普備離二乘障。若能一發此心。傾無始生死有輪。『淨土論』云。發菩提心者。正是願作佛心。願作佛心者。卽是度衆生心。度衆生心者。卽是攝受衆生。生有佛國土心。今既願生淨土。故先須發菩提心也。已上。當知菩提心。是淨土菩提之綱

第三に作願門

とは、以下の三門は、是れ三業の相應せる意の業なり。」綽禪師の『安樂集』に云はく、

『大經』に云はく「凡そ淨土に往生せんと欲せば、要ず菩提心を發すをもつて源と爲すべし」と。云何なるか菩提ならば、乃ち是れ無上佛道の名なり。若し發心して佛と作らんと欲する者は、此の心廣大にして法界に周遍し、此の心長遠にして未來際を盡す。此の心普く備はつて、二乘の障を離る。若し能く一たび此の心を發さば、無始生死の有輪〔論〕を傾く。『淨土論』に云はく「發〔此〕菩提心とは、卽ち是れ佛と作らんと願ふ心なり、佛と作らんと願ふ心とは、卽ち是れ衆生を度ふ心なり、衆生を度ふ心とは、卽ち是れ衆生を攝取して佛の有す國土に生れしむる心なり」と。今既に淨土に生れんと願ふが故に、先づ須らく菩提心を發すべし。

と。已上。當に知るべし、菩提心は是れ淨土の菩提の綱要なり。

我今亦如是。稱讚無量德。
以是福因緣。願佛常念我。
以此福因緣。所獲上妙德。
願諸衆生類。皆亦悉當得。

彼『論』有三十二偈。今略鈔要。具在別鈔。或復『往生論』偈。眞言教『佛讚』。阿彌陀『別讚』。此等文。一遍多遍。一行多行。但應至誠。不論多少。」設無餘行。唯依讚歎。亦應隨願。必得往生。如『法華』偈云。

或以歡喜心。歌唄頌佛德。
乃至一小音。皆已成佛道。

一音既爾。何況常讚。佛果尚爾。何況往生。眞言讚佛。利益甚深。不能顯露。

猶尚盡すこと能はず　淸淨なる人を歸命したてまつる
我も今亦是くの如し　無量の德を稱讚へたてまつる
是の福き因緣を以て　願はくば佛常に我を念じたまへ
此の福き因緣を以て　獲んところの上妙れたる德を
願はくば諸の衆生の類も　皆亦悉く當に得んことを

と。彼の『論』には、三十二の偈有り。今、略して要を鈔る。具には、別『鈔』に在り。或は復た『往生論』の偈、眞言教の『佛讚』、阿彌陀の『別讚』あり。此れ等の文を、一遍にても多遍にても、一行も多行も、但應に至誠なるべし。多少を論ぜざれ。」設ひ餘の行無からんも、唯讚歎するに依つて、亦應に願に隨つて必ず往生することを得べし。『法華』の偈に云ふが如し。

或は歡喜の心を以て　歌唄うて佛の德を頌め
乃至一小音をもつてせるも　皆已に佛道を成ぜり

と。一音、既に爾り。何に況や、常に讚めんをや。佛果尚爾り、何に況や往生をや。眞言の讚佛は、利益甚だ深くして、顯露すこと能はず。

無量光明慧。身如眞金山。
我今身口意。合掌稽首禮。
十方現在佛。以種種因緣。
歎彼佛功德。我今歸命禮。
佛足千輻輪。柔輭蓮華色。
見者皆歡喜。頭面禮佛足。
眉間白毫光。猶如淸淨月。
增益面光色。頭面禮佛足。
彼佛所言說。破除諸罪根。
美言多所益。我今稽首禮。
一切賢聖衆。及諸人天衆。
咸皆共歸命。是故我亦禮。
乘彼八道船。能度難度海。
自度亦度彼。我禮自在者。
諸佛無量劫。讚揚其功德。
猶尙不能盡。歸命淸淨人。

の故に、常に應に憶念すべし。偈を以て稱讚すらく、
量りなき光明の慧　身は眞金山の如し
我今身口意をもつて　合掌し稽首禮したてまつる
十方に現在す佛　種種の因緣を以て
彼の佛の功德を歎めたまふ　我今歸命して禮したてまつる
佛の足には千輻輪あり　柔輭にして蓮華の色あり
見る者皆歡喜す　頭面に佛足を禮したてまつる
眉間白毫の光は　猶し淸淨の月の如し
面の光色を增益す　頭面に佛足を禮したてまつる
彼の佛の言說べたまふところ　諸の罪根を破除く
美言益するところ多し　我今稽首して禮したてまつる
一切の賢聖衆　及び諸の人天衆
咸く皆共に歸命す　是の故に我亦禮したてまつる
彼の八〔聖〕道の船に乘り　能く度り難き海を度る
自ら度り亦彼を度す　我自在なる者を禮したてまつる
諸の佛は無量劫に　其の功德を讚揚たまふも

若樂廣行者。應依龍樹菩薩『十二禮』。又有善導和尙『六時禮法』。不可具出。」設無餘行。但依禮拜。亦得往生。如『觀虛空藏菩薩佛名經』云。

阿彌陀佛。至心敬禮。得離三惡道。後生其國。

第二讚歎門者。是三業相應之口業也。」如『十住婆沙』第三云。

阿彌陀佛本願如是。若人念我。稱名自歸。卽入必定。得阿耨菩提。是故常應憶念。以偈稱讚。

と。六に、應に念ずべし。

佛法の衆の德の海　三世同じく一體なり
故に我歸命して　圓融萬德の尊を禮したてまつる

と。若し廣き〔禮拜〕行を樂はん者は、應に龍樹菩薩の『十二禮』に依るべし。又善導和尙の『六時禮法』有り。具に出す可からず。」設ひ餘の行無からんも、但禮拜するに依つて、亦往生することを得。『觀虛空藏菩薩佛名經』に云ふが如し。

阿彌陀佛を、至心に敬禮すれば、三惡道を離れ、後に其の國に生るゝことを得。

と。

第二に讚歎門

とは、是れ三業の相應せる口の業なり。」『十住婆沙』の第三〔五〕に云ふが如し。

阿彌陀佛の本願、是くの如し「若し人、我を念じ、名を稱へて自ら歸せば、卽ち必定に入つて、阿耨菩提を得」と。是

故我歸命禮。無上功德田。
二應念。
慈眼視衆生。平等如一子。
故我歸命禮。極大慈悲母。
三應念。
十方諸大士。恭敬彌陀尊。
故我歸命禮。無上兩足尊。
四應念。
一得聞佛名。過於優曇華。
故我歸命禮。極難値遇者。
五應念。
一百俱胝界。二尊不竝出。
故我歸命禮。希有大法王。
六應念。
佛法衆德海。三世同一體。
故我歸命禮。圓融萬德尊。

と。已上。『經』の文は、極めて略なり。今須らく言を加へ、以て禮法を爲るべし。一に、應に念ずべし。

一たび南無佛と稱ふるものは　皆已に佛道を成ず
故に我歸命して　無上の功德田を禮したてまつる

と。二に、應に念ずべし。

慈眼をもて衆生を視ること　平等にして一子の如し
故に我歸命して　極大の慈悲母を禮したてまつる

と。三に、應に念ずべし。

十方の諸の大士は　彌陀尊を恭敬す
故に我歸命して　無上の兩足尊を禮したてまつる

と。四に、應に念ずべし。

一たび佛の名を聞くことを得るは　優曇華よりも過ぎたり
故に我歸命して　極めて値遇ひ難き者を禮したてまつる

と。五に、應に念ずべし。

一百俱胝の界に　二の尊竝んで出でず
故に我歸命して　希有の大法王を禮したてまつる

有一行者。接足爲禮。皆是己身。私云。一佛一切佛者。是彌陀分身。或是十方一切諸佛。或應念。
能禮所禮性空寂。
自身他身體無二。
願共衆生體解道。
發無上意歸眞際。
或應依『心地觀經』六種功德。
一無上大功德田。二無上大恩德。三無足二足。及以多足衆生中尊。四極難値遇。如優曇華。五獨出三千大千世界。六世出世間功德圓滿。一切義依。具如此等六種功德。常能利益一切衆生。已上。『經』文極略。今須加言。以爲禮法。一應念。
一稱南無佛。皆已成佛道。

るなり。若し一佛を思惟すれば、卽ち一切の佛を見たてまつる。一一の佛の前に一の行者有つて、接足して禮を爲すは、皆是れ己が身なり。
と。私に云はく、「一切の佛」とは、是れ彌陀の分身なり。或は是れ十方一切の諸佛なり、と。或は應に念ずべし。
能禮も所禮も性空寂し
自身も他身も體二無し
願はくば衆生と共に道を體解し
無上の意を發して眞際に歸らん
と。或は應に『心地觀經』の、六種の功德に依るべし。
一には、無上の大功德田なり。二には、無上の大恩德なり。三には、無足、二足、及び多足の衆生の中の尊なり。四には、極めて値遇ひ難きこと、優曇華の如し。五には、獨り三千大千世界に出でたまふ。六には、世と出世間との功德圓滿して、一切義の依たり。此(是)くの如き等の六種の功德を具へて、常に能く一切の衆生を利益(樂)したまふ。

大文第四。正修念佛者。此亦有五。如世親菩薩『往生論』云。修五念門行成就。畢竟得生安樂國土。見彼阿彌陀佛。一禮拜門。二讚歎門。三作願門。四觀察門。五廻向門。云云。此中。作願廻向二門。於諸行業。應通用之。

初禮拜門者。是卽三業相應之身業也。」一心歸命。五體投地。遙禮西方阿彌陀佛。不論多少。但用誠心。或應念『觀佛三昧經』文。

我今禮一佛。卽禮一切佛　若思惟一佛。卽見一切佛。一一佛前。

大文第四に正修念佛

とは、此に亦五有り。世親菩薩の『往生論』に云ふが如し。五念門を修すること成就せば、畢竟して安樂國土に生れ、彼の阿彌陀佛を見たてまつることを得。一には禮拜門、二には讚歎門、三には作願門、四には觀察門、五には廻向門なり。と。云云。此の中において、作願と廻向との二門は、諸の行業に於て、應にこれを通じて用ふべし。

初に禮拜門

とは、是れ卽ち、三業の相應せる身の業なり。」一心に歸命し、五體を地に投げて、遙かに西方の阿彌陀佛を禮したてまつること、多少を論ぜず、但誠心を用てせよ。或は應に『觀佛三昧經』の文を念ずべし。

我今一佛を禮したてまつるは、卽ち一切の佛を禮したてまつ

生西方者。莫毀兜率之業。各隨性欲。任情修學。莫相是非。何但不生勝處。亦乃輪轉三途。云云。

る處に生れざるのみならん、亦乃ち三途に輪轉せん。と。云云。

何以故。如是一切。諸沙門中。乃至一稱佛名。一生信者。所作功德。終不虛設。

已上。『心地觀經』意。亦如是。故彼『經』云龍華。不云兜率。」今案之。從釋尊入滅。至慈尊出世。隔五十七倶胝。六十百千歲。新『婆沙』意。其間輪廻。劇苦幾處乎。何不願終焉之暮。卽託蓮胎。而期留悠悠生死。至龍華會耶。何況。若適生極樂者。晝夜隨念。往來兜率宮。乃至龍華會中。新爲對揚首。猶如富貴而歸故鄕。誰人不欣樂此事耶。」若有別緣者。餘方亦佳。凡可隨意樂。勿生異執。故感法師云。

志求兜率者。勿毀西方行人。願

中においても、乃至一たび佛の名を稱し、一たび信を生ぜん者は、所作の功德終に虛設からざればなり。

と。已上。『心地觀經』の意も、亦是くの如し。故に彼の『經』には、龍華と云つて、兜率とは云はざるなり。」今これを案ずるに、釋尊の入滅より慈尊の出世に至るまで、五十七倶胝六十百千歲を隔つ。新『婆沙』の意なり。其の間における輪廻、劇苦は幾處ぞ乎。何ぞ終焉の暮卽ち蓮胎に託することを願はずして、悠悠たる生死に留つて龍華會に至ることを期せん耶、何に況や、若し適ゝ極樂に生ずる者は、晝夜念の隨に兜率の宮に往來し、乃至龍華會の中には新に對揚の首と爲らんこと、猶も富貴となつて故鄕に歸らんが如し。誰の人か、此の事を欣樂はざらん耶。」若し別緣有らば餘の方も亦佳し、凡そ意の樂に隨ふ可し。異執を生すこと勿れ。故に、感法師の云はく、

兜率を志求むる者は、西方の行人を毀ること莫れ。西方に生れんと願ふ者は、兜率の業を謗ること莫れ。各ゝ性欲に隨ひ、情に任せて修學せよ。相ひ是非すること莫れ。何ぞ但勝れた

自他耶。
問。『心地觀經』云。
　我今弟子付彌勒。
　龍華會中得解脱。
豈非如來勸進兜率。
答。此亦無違。誰遮『上生』『心地』等兩三經。然不如極樂之文。顯密且千。又『大悲經』第三云。
於當來世。法欲滅時。當有比丘。比丘尼。於我法中。得出家已。手牽兒臂。而共遊行。從酒家至酒家。於我法中。作非梵行。乃至。但使性是沙門。汙沙門行。自稱沙門。形似沙門。當有被著。袈裟衣者。於此賢劫。彌勒爲首。乃至最後。盧遮佛所。入般涅槃。無有遺餘。

問ふ。『心地觀經』に云はく、
　我今の弟子をば彌勒に付す
　龍華會中に解脱を得ん
と。豈、如來、兜率を勸進めたまふに非ずや。
答ふ。此れ亦違うこと無し。誰か『上生』『心地』等、兩三の經を遮せん。然れども、極樂の文の、顯密且千なるには如じ。又『大悲經』の第三に云はく、
當來の世に於て、法の滅せんと欲する時、當に比丘、比丘尼有つて、我が法の中に於て出家することを得已り、手に兒の臂を牽いて共に遊行し、酒家より酒家に至り、我が法の中に於て非梵行を作すべし。乃至。但使性は是れ沙門なれども、沙門の行を汙して自ら沙門と稱し、形は沙門に似て、當に袈裟、衣を被著る者有るべし。此の賢劫に於て、彌勒を首と爲し、乃至最後の盧遮佛の所にて般涅槃に入り、遺餘有ること無けん。何を以ての故とならば、是くの如き一切諸の沙門の

理及敎。鑑其難易二門。可永除
其惑矣。
已上略抄。但十五同義。可見彼論。

問。玄弉所傳。不可不會。

答。西域行法。暗以難決。今試會云。
西域行者。多有小乘。十五國學大乘。十五國大小兼學。四十一國學小乘。上生兜率。大小共許。往他方
佛土。大許小不許。彼共許故。竝云
兜率。流沙以東。盛興大乘。不可同
彼西域雜行。何況諸敎興隆。不必
一時。就中念佛之敎。多利末代經
道滅後。濁惡衆生計也。彼時天竺
未興盛歟。若不爾者。上足基師。豈
容別著『西方要決』。立十勝劣。勸

率は、爾らず。十五の同の義をもつて、猶生れ難しと說く可
からず。況や、異に八門有り。而るを乃ち說いて、往き難し
と言はんや。請ふ、諸の學者、理及び敎を尋ね、其の難易の
二門を鑑みて、永く其の惑を除く可し矣。
と。已上略抄す。但し十五の同の義は、彼の『論』を見る可し。

問ふ。玄弉の傳ふるところ、會せずんばある可からず。

答ふ。西域の行法は暗ければ以て決し難けれども、今試みに
會して云はん。西域の行者、多く小乘に有り。〔相傳に云はく〕十五國
は大乘を學び、十五國は大小兼學し、四十一國は小乘を學ぶ、と。兜率に上生るゝは、
大小共に許し、他方の佛土に往くは、大は許して小は許さず。彼
は共に許すが故に、竝兜率と云ひしならんか。流沙より以東は、
盛んに大乘を興す。彼の西域の雜行に同ず可からず。何に況や、
諸敎の興隆は必ずしも一時ならず。就中、念佛の敎は、多く末代
經道滅後の濁惡の衆生を利する計なり。彼の時、天竺には未だ
興盛せざりし歟。若し爾らずんば、上足の基師、豈別に『西方要
決』を著し、十の勝劣を立てゝ自他を勸めん耶。

沙諸佛。之所攝受。又『十往生經』云。佛遣二十五菩薩。常守護行人。兜率不爾。有護若多人共遊。不畏强賊所逼。無護似孤遊嶮徑。必爲暴客所侵。四舒舌異。謂十方佛舒舌證誠。兜率不爾。五衆聖異。謂華聚菩薩。山海慧菩薩。發弘誓願。若有一衆生。生西方不盡。我若先去不取正覺。六滅罪多少。如前。七重惡異。謂造五逆罪。亦得生西方。兜率不爾。八敎說異。謂『無量壽經』云。横截五惡趣。惡趣自然閉。昇道無窮極。易往而無人。兜率不爾。十五同義。猶不可說於難生。況異有八門。而乃說言難往。請諸學者。尋

光無きは、暗中に來往するに似たり。三には、守護の異。謂はく、無數の化佛、觀音、勢至は、常に行者の所に至る。又『稱讚淨土經』に云はく「十方の十兢伽沙の諸佛の、攝受したまふところなり」と。又『十往生經』に云はく「佛、二十五の菩薩を遣して、常に行人を守護したまふ」と。兜率は、爾らず。護有るは、多人共に遊んで、强賊の逼るところを畏れざるがごとく、護無きは、孤り嶮徑に遊び、必ず暴客の爲に侵さるゝに似たり。四には、舒舌の異。謂はく、十方の佛は舌を舒べて證誠したまへども、兜率は爾らず。五には、衆聖の異。謂はく、華聚菩薩、山海慧菩薩、弘き誓願を發さく「若し一衆生有つて、西方に生るゝこと盡きざらんに、我若し先づ去らば、正覺を取らじ」と。六には、滅罪の多少。前の如し。七には、重惡の異。謂はく、五逆罪を造れるも、亦西方に生るゝことを得れども、兜率は爾らず。八には、敎說の異。謂はく、『無量壽經』に云はく「横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉づ、道に昇ること窮極無し、往き易くして人無し」と。兜

西方佛來迎。兜率不爾。
感師云。
來迎同也。
第十云。
西方『經』『論』慇懃勸極多。兜
率非多。亦非慇懃。
云云。感師又於往生難易。立十五同
義八異義。八異義者。
一本願異。謂彌陀有引攝願。彌
勒無願。無願若自浮度水。有願
若乘舟而遊水。二光明異。謂彌
陀佛光。照念佛衆生。攝取不捨。
彌勒不爾。光照如晝日之遊。無
光似暗中來往。三守護異。謂無
數化佛。觀音勢至。常至行者所。
又『稱讚淨土經』云。十方十殑伽

と。已上。凡そ二界の勝劣差別を立つ。慈恩は十の異を立てたり。前の八は、感師の所立を出でざるが故に、更めて抄かず。其の第九に云はく、

西方は佛來つて迎へたまへども、兜率は爾らず。

と。感師の云はく、

來つて迎へたまふことは同じ。

と。第十に云はく、

西方は『經』『論』慇懃に勸むるもの極めて多けれども、兜率は多からず、亦慇懃ならず。

と。云云。感師は、又往生の難易に於て、十五の同の義と、八の異の義とを立てたり。八の異の義とは、

一には、本願の異。謂はく、彌陀には引攝の願有れども、彌勒には願無し。願無きは、自ら浮んで水を度るがごとく、願有るは、舟に乗つて水に遊ぶがごとし。二には、光明の異。謂はく、彌陀佛の光は、念佛の衆生を照し、攝取して捨てたまはざれども、彌勒は爾らず。光の照すは、晝日の遊の如く、

明知。佛意偏勸極樂。西域風俗豈乖之耶。又懷感禪師『群疑論』於極樂兜率。立十二勝劣。

一化主佛菩薩別故。二淨穢土別。三女人有無。四壽命長短。五內外有無。（兜率內院不退。外院有退。西方悉無內外。無退。）六五衰有無。七相好有無。八五通有無。九不善心起不起。十滅罪多少。謂稱彌勒名。除千二百劫罪。稱彌陀名。滅八十億劫罪。十一苦受有無。十二受生異。謂天在男女膝下懷中。西方在華裏殿中。雖二處勝劣。其義如斯。然並佛勸讚。莫相是非。

（已上。凡立二界勝劣差別。）慈恩立十異。前八不出感師所立。故不更抄。其第九云。

に知る、佛意偏に極樂を勸めたまふといふことを。西域の風俗、豈これに乖かん耶。又懷感禪師の『群疑論』には、極樂と兜率とに於て、十二の勝劣を立てたり。

一には、化主の佛と菩薩と別なるが故に。二には、淨と穢との土の別。三には、女人の有ると無きと。四には、壽命の長きと短きと。五には、內外の有ると無きと。（天の內院は退せず、外院は退有れども、西方は悉く退無し。）六には、五衰の有ると無きと。七には、相好の有ると無きと。八には、五〔神〕通の有ると無きと。九には、不善心の起ると起らざると。十には、滅罪の多きと少きと。謂はく、彌勒の名を稱ふれば千二百劫の罪を除けども、彌陀の名を稱ふれば八十億劫の罪を滅す。十一には、苦を受くることの有ると無きと。十二には、生を受くることの異なり。謂はく、天は男女の膝の下、懷の中に在れども、西方は華の裏、殿の中に在り。二處の勝劣其の義斯くの如しと雖も、然も並に佛の勸め讚めたまふところなれば、相ひ是非すること莫れ。

第二對兜率者。
問。玄弉三藏云。
西方道俗。竝作彌勒業。爲同欲界。其行易成。大小乘師。皆許此法。彌陀淨土。恐凡鄙穢。修行難成。如舊經論。七地已上菩薩。隨分見報佛淨土。依新論意。三地菩薩。始可得見。報佛淨土。豈容下品凡夫。卽得往生。
已上。天竺既爾。今何勸極樂耶。
答。中國邊州。其處雖異。顯密教門。其理是同。如今所引。證據既多。寧可背佛教之明文。從天竺之風聞耶。何況祇洹精舍無常院。令病者面西。作往佛淨刹想。具如下臨終行儀。

第二に兜率に對す

とは、
問ふ。玄弉三藏の云はく、
西方の道俗は、竝彌勒の業を作す。同じく欲界にして、其の行成じ易きが爲なり。大小乘の師、皆此の法を許す。彌陀の淨土は、恐らくは凡鄙穢れて、修行成じ難からん。舊の『經』『論』の如きは、七〔十〕地已上の菩薩、分に隨つて報佛の淨土を見ると。新『論』の意に依らば、三地の菩薩、始めて報佛の淨土を見ることを得可しと。豈、下品の凡夫卽ちに往生することを得んや。
と。已上。天竺にして既に爾り、今何ぞ極樂を勸むる耶。
答ふ。中國と邊州と其の處異なりと雖も、顯密の教門は其の理是れ同じ。如今引きし所の證據、既に多し。寧んぞ、佛教の明文に背いて、天竺の風聞に從ふ可けん耶。何に況や、祇洹精舍の無常院には、病者をして西に面し、佛の淨刹に往くの想を作さしむといふをや。具には、下の臨終行儀〔章〕の如し。明か

末法。滿一萬年。一切諸經。竝從滅沒。釋迦恩重。留敎百年。

已上。又懷感禪師云。

『般舟三昧經』說。跋陀和菩薩。請釋迦牟尼佛言。未來衆生。云何得見。十方諸佛。佛敎令念阿彌陀。卽見十方一切佛。以此佛特與娑婆衆生有緣。先於此佛。專心稱念。三昧易成。

已上。又觀音勢至。本於是土。修菩薩行。轉生彼國。宿緣所追。豈無機應耶。

と。已上。慈恩の云はく、

末法〔一〕萬年には餘經悉く滅し、彌陀の一敎物を利すること偏に增さん。大聖特に留めたまふこと、百歳なり。時末法を經ること一萬年に滿たば、一切の諸經は竝從つて滅沒せん。釋迦の恩重く、敎を留めたまふこと百年なり。

と。已上。又懷感禪師の云はく、

『般舟三昧經』に說く「跋陀和菩薩、釋迦牟尼佛に請うて言はく、未來の衆生は、云何にして十方の諸佛を見たてまつることを得ん、と。佛敎へて阿彌陀〔佛〕を念ぜしめたまふに、卽ち十方一切の〔諸〕佛を見たてまつる」と。此の佛、特に娑婆の衆生と緣有るを以て、先づ此の佛を專心に稱念すれば、三昧成じ易きなり。

と。已上。又觀音と勢至は、本是の土に於て菩薩の行を修し、轉じて彼の國に生れたまへり。宿緣の追ふところ、豈機應無からん耶。

應當發願。生彼國土。已上。佛誠慇懃。唯應仰信。況復非無機緣。何强拒之。如天台『十疑』云。

阿彌陀佛。別有大悲。四十八願。接引衆生。又彼佛光明。遍照法界。念佛衆生。攝取不捨。十方各恒河沙諸佛。舒舌覆三千界。證誠一切衆生念阿彌陀佛。乘佛大悲本願力。決定得生。極樂世界。又『無量壽經』云。末後法滅之時。特留此經。百年在世。接引衆生。生彼國土。故知。阿彌陀與此世界極惡衆生。偏有因緣。已上。慈恩云。

末法萬年。餘經悉滅。彌陀一敎。利物偏增。大聖特留百歲。時經

と。『阿彌陀經』に云はく、

我是の利を見るが故に、是〔此〕の言を說く。若し〔衆生あつて、是の說を〕信〔聞〕ずること有らん者は、應當に願を發して、彼の國土に生るべし。

と。已上。佛の誠慇懃なり、唯仰いで信ずべし。況や復た、機緣無きに非ず、何ぞ强いてこれを拒まん。天台の『十疑』に云ふが如し。

阿彌陀佛は、別に大悲の四十八願有つて、衆生を接引したまふ。又彼の佛の光明は、遍く法界の念佛の衆生を照して、攝取して捨てたまはず。十方の各恒河沙の諸佛は、舌を舒べて三千界を覆ひ、一切衆生の阿彌陀佛を念じ、佛の大悲本願力に乘ずれば、決定して極樂世界に生るゝを得ることを證誠したまふなり。又『無量壽經』に云はく「末後法滅の時、特に此の經を留めて百年世に在らしめ、衆生を接引して彼の國土に生れしめん」と。故に知る、阿彌陀〔佛〕と此の世界の極惡の衆生とは、偏に因緣有りといふことを。

難測。唯可仰信。譬若癡人。墮於火坑。不能自出。知識救之。以一方便。癡人得力。應務速出。何暇縱横。論餘術計。行者亦爾。勿生他念。如『目連所問經』云。

譬如萬川長流。有浮草木。前不顧後。後不顧前。都會大海。世間亦爾。雖有豪貴。富樂自在。悉不得免。生老病死。只由不信佛經。後世爲人。更甚困劇。不能得生。千佛國土。是故我說。無量壽佛國。易往易取。而人不能。修行往生。反事九十五種邪道。我說是人。名無眼人。名無耳人。

『阿彌陀經』云。

我見是利。故說是言。若有信者。

答ふ。設ひ餘の淨土を勸むとも、亦此の難を避けざらん。佛意測り難し、唯仰いで信ず可し。譬へば癡人、火坑に墮ちて自ら出ること能はず、知識あつて之を救ふに一の方便を以てせんに、癡人力を得て應に務めて速かに出づべきがごとし。何の暇あつてか、縱横と餘の術計を論ぜん。行者も亦爾り、他念を生ずること勿れ。『目連所問經』に云ふが如し。

譬へば萬川の長流に、草木浮べること有らんに、前のものは後のものを顧みず、後のものは前のものを顧みずして、都べて大海に會るが如し。世間も亦爾り。豪貴、富樂、自在なるものありと雖も、悉く生老病死を免るゝことを得ず。只（秖）佛の經を信ぜざるに由つて、後の世に人と爲るも更に甚だ困しみ劇み、千佛の國土に生るゝを得ること能はず。是の故に我說く「無量壽佛の國は、往き易く取り易し」と。而るに、人修行して往生すること能はずして、反（返）つて九十五（六）種の邪道に事ふ。我說く「是の人を眼無き人と名づけ、耳無き人と名づく」と。

中。專勸極樂。不可稱計。故偏願求。
問。佛言諸佛淨土。實無差別。何故如來。偏讚西方。
答。『隨願往生經』。佛決此疑言。
娑婆世界。人多貪濁。信向者少。習邪者多。不信正法。不能專一。心亂無志。實無差別。令諸衆生。專心有在。是故。讃歎彼國土耳。諸往生人。悉隨彼願。無不獲果。
又『心地觀經』云。
諸佛子等。應當至心。求見一佛。及一菩薩。如是名爲。出世法要。
云云。是故。專求一佛國也。
問。爲專其心。何故於中。唯勸極樂。
答。設勸餘淨土。亦不避此難。佛意

問ふ。佛の言はく「諸佛の淨土は、實に差別無し」と。何が故ぞ、如來は偏に西方を讃めたまふや。
答ふ。『隨願往生經』に、佛此の疑を決して言はく、
娑婆世界は、人貪濁(むさぼり)多くして信向する者少く、邪を習ふ者多くして正法を信ぜず、專一なること能はざれば心亂れて志無し。實には差別無けれども、諸の衆生をして專心に在ること有らしめんとす。是の故に、彼の國土を讃歎するのみ。諸の往生する者は、悉く彼の願に隨つて、果を獲ずといふこと無し。
と。又『心地觀經』に云はく、
諸の佛子等、應當(まさ)に至心に、一佛及び一菩薩を見たてまつらんと求むべし。是くの如きを名づけて出世の法要と爲す。
と。云云。是の故に、專ら一佛國を求むるなり。
問ふ。其の心を專らにせんが爲とならば、何が故に、中に於て唯(ただ)極樂のみを勸むるや。

『淨土論』。引十二經七論。一無量壽經。二觀經。三小阿彌陀經。四鼓音聲經。五稱揚諸佛功德經。六發覺淨心經。七大集經。八十往生經。九藥師經。十般舟三昧經。十一大阿彌陀經。十二無量清淨平等覺經。已上。雙觀無量壽經。清淨覺經。大阿彌陀經。同本異譯也。一往生論。二起信論。三十住毘婆沙論。四一切經中彌陀偈。五寶性論。六龍樹十二禮偈。七攝大乘論彌陀偈。已上。智憬師同之。

[3]私加云。『法華經』藥王品。『四十華嚴經』普賢願。『目連所問經』。『三千佛名經』。『無字寶篋經』。『千手陀羅尼經』。『十一面經』。『不空羂索』。『如意輪』。『隨求』。『尊勝』。『無垢淨光』。『光明』。『阿彌陀』等。諸顯密教

とを引けり。一には『無量壽經』、二には『觀經』、三には『小阿彌陀經』、四には『鼓音聲〔王〕經』、五には『稱揚諸佛功德經』、六には『發覺淨心經』、七には『大集經』、八には『十〔方〕往生經』、九には『藥師經』、十には『般舟三昧經』、十一には『大阿彌陀經』、十二には『無量清淨平等覺經』なり。已上、『雙觀無量壽經』『清淨覺經』『大阿彌陀經』は、同本異譯なり。一には『往生論』、二には『起信論』、三には『十住毘婆沙論』、四には一切經の中の『彌陀偈』、五には『寶性論』、六には龍樹の『十二禮偈』、七には『攝大乘論』の彌陀偈なり。已上。智憬師もこれに同じ。[3]私に加へて云はく、『法華經』の藥王品、『四十華嚴經』の普賢願、『目連所問經』、『三千佛名經』、『無字寶篋經』、『千手陀羅尼經』、『十一面經』、『不空羂索』、『如意輪』、『隨求』、『尊勝』、『無垢淨光』、『光明』、『阿彌陀』等の、諸の顯密の教の中に、專ら極樂を勸むること、稱げて計ふ可からず。故に、偏に願ひ求むるなり。

大文第三。明極樂證據者。有二。一對十方。二對兜率。

初對十方者。

問。十方有淨土。何唯願生極樂耶。

答。天台大師云。

諸經論。處處唯勸衆生。偏念阿彌陀佛。令求西方極樂世界。『無量壽經』『觀經』『往生論』等。數十餘部經論文。慇懃指授。勸生西方。是以偏念也。

已上。大師披閱一切經論。凡十五遍。應知。所述不可不信。[2]迦才師三卷

大文第三に極樂の證據

を明すには、二有り。一には十方に對し、二には兜率に對す。

初に十方に對す

とは、

問ふ。十方に淨土有るに、何ぞ唯極樂にのみ生れんと願ふ耶。

答ふ。天台大師の云はく、

諸の『經』『論』は、處處に唯衆生を勸めて、偏に阿彌陀佛を念じ、西方の極樂世界を求めしめたり。『無量壽經』『觀經』『往生論』等の、數十餘部の『經』『論』の文は、慇懃に指授して、西方に生れんことを勸めたり。故に偏に念ず。

と。已上。大師、一切の『經』『論』を披閱したまふこと、凡そ十五遍なりと。應に知るべし、述べたまふところ、信ぜずんばある可からず。[2]迦才師の三卷の『淨土論』には、十二の『經』と、七の『論』

無有諸趣惡知識。
往生不退至菩提。
故我頂禮彌陀佛。
我説彼尊功德事。
衆善無邊如海水。
所獲善根清淨者。
願共衆生生彼國。
願共諸衆生。往生安樂國。

彼の尊の無量の方便の境には
諸趣、惡知識有ること無し
往生すれば退かずして菩提に至る
故に我彌陀尊を頂禮したてまつる
我彼の尊の功德の事を説かんに
衆善無邊なること海水の如し
獲る所の善根清淨なる者を
衆生に廻施して彼の國に生れん
願はくば諸の衆生と共に　安樂國に往生せん
と。

必使淨除諸業障。

一見尙爾。何況常見。由此因緣。彼土衆生。於所有萬物。無我我所心。去來進止。心無所係。於諸衆生。得大悲心。自然增進。悟無生忍。究竟必至。一生補處。乃至速證。無上菩提。爲衆生故。示現八相。隨緣在於。嚴淨國土。轉妙法輪。度諸衆生。令諸衆生。欣求其國。如我今日。志願極樂。亦往十方。引接衆生。如彌陀佛。大悲本願。如是利益。不亦樂乎。一世勤修。是須臾間。何不棄衆事。求淨土哉。願諸行者。努力匪懈。多依『雙觀經』、竝天台『十疑』等意。

龍樹『偈』云。

彼尊無量方便境。

若し衆生有つて一たび佛を見たてまつれば
必ず諸の業障を淨め除かしめん

と。一たび見たてまつるすら、尙爾り。何に況や、常に見たてまつるをや。此の因緣に由つて、彼の土の衆生は、所有の萬物に於て、我、我所の心無く、去來進止、心に係るところ無し。諸の衆生に於て、大悲心を得、自然に增進して、無生忍を悟り、究竟して必ず、一生補處に至る。乃至、速かに無上菩提を證す。衆生の爲の故に、八相を示現し、緣に隨ひ、嚴淨の國土に在つて、妙法輪を轉じ、諸の衆生を度す。諸の衆生をして、其の國を欣ひ求めしむること、我が今日、極樂を志願するが如くならしむ。亦十方に往いて、衆生を引接すること、彌陀佛の、大悲本願の如し。是くの如きの利益、亦樂しからず乎。一世の勤修は、是れ須臾の間なり。何ぞ衆事を棄てて、淨土を求めず哉。願はくば、諸の行者、努力懈ること匪れ。多くは『雙觀經』竝に天台の『十疑』等の意に依る。

龍樹の『偈』に云はく、

分。象子力微。身歿刀箭。故龍樹菩薩云。

譬如四十里氷。如有一人。以一升熱湯投之。當時似氷減。經夜至明。乃高於餘者。凡夫在此。發心救苦。亦復如是。以貪瞋境。順違多故。自起煩惱。返墮惡道。

已上」彼極樂國土衆生。有多因緣故。畢竟不退。增進佛道。一佛悲願力。常攝持故。二佛光常照。增菩提心故。三水鳥樹林。風鈴等聲。常令生念佛。念法。念僧之心故。四純諸菩薩。以爲善友。外無惡緣。內伏重惑故。五壽命永劫。共佛齊等。修習佛道。無有生死之間隔故。『華嚴』偈云。

若有衆生一見佛。

菩提の道を成ずることを得たまへり。其の餘の衆生は、己が智分に非ず。象子は力微なれば、身刀箭に歿す。故に龍樹菩薩の云はく、

譬へば四十里の氷に、一人有つて、一升の熱湯を以て、之に投げんに、當時は氷（少しく）減ずるに似たれども、夜を經て明に至れば、乃ち餘の者よりも高きが如し。凡夫の此に在つて、發心して苦を救はんも、亦復た是くの如し。貪、瞋の境（界）は、違順多きを以ての故に、自ら煩惱を起し、返つて惡道に墮つ。

と。已上。」彼の極樂國土の衆生は、多くの因緣有るが故に、畢竟退かずして、佛道を增進するなり。一には佛の悲願力、常に攝持したまふが故に。二には佛光常に照して、菩提心を增すが故に。三には水鳥、樹林、風鈴等の聲は、常に念佛、念法、念僧の心を生ぜしむるが故に。四には純ら諸菩薩、以て善友と爲り、外に惡緣無く、內に重惑を伏するが故に。五には壽命永劫にして、佛と共に齊等しければ、佛道を修習するに、生死の間隔有ること無きが故に。『華嚴』の偈に云はく、

第十增進佛道樂者。今此娑婆世界。修道得果甚難。何者。受苦者常憂。受樂者常著。苦云樂云。遠離解脫。若昇若沈。無非輪廻。適雖有發心修行者。亦難成就。煩惱內催。惡緣外牽。或發二乘心。或還三惡道。譬猶水中之月。隨波易動。陣前之軍。臨刃則還。魚子難長。菴果少熟。如彼身子等。六十劫退者。是也。唯釋迦如來。於無量劫。難行苦行。積功累德。求菩薩道。未曾止息。觀三千大千世界。乃至無有如芥子許。非是菩薩捨身命處。爲衆生故。然後乃得成菩提道。其餘衆生。非己智

と。

第十に增進佛道(ほとけのさとりにすすみいる)の樂

とは、今此の娑婆世界は、道を修して果を得ること甚だ難し。何(いか)んとなれば、苦を受くる者は常に憂へ、樂を受くる者は常に著(とら)はる。苦と云ひ、樂と云ひ、遠く解脫(さとり)を離る。若しは昇、若しは沈、輪廻に非ずといふこと無し。適ゝ發心して修行する者有りと雖も、亦成就すること難し。煩惱內に催し、惡緣外に牽(ひ)いて、或は二乘の心を發(おこ)し、或は三惡道に還(かへ)る。譬へば、猶(あたか)も水中の月の、波に隨つて動き易く、陣前の軍の、刃に臨めば則ち還るがごとし。魚子は長じ難く、菴果は熟すること少し。彼の身子(しやりほつ)等の、六十劫にして退きしが如きもの是れなり。唯、釋迦如來は、無量劫に於て、難行苦行し、功を積み德を累(かさ)ね、菩薩の道を求めて、未だ曾て止息したまはず。三千大千世界を觀るに、乃至、芥子(けし)の如き許りも、是の菩薩の、身命を捨てたまはざりし處あること無し。衆生の爲の故なり。然る後に、乃ち

以食時。還到本國。飯食經行。受諸法樂。或言。每日三時。供養諸佛。
[3]行者今從遺敎。得聞十方佛土。種種功德。隨見隨聞。遙生戀慕。各謂言。我等何時。得見十方淨土。得値諸佛菩薩。每對敎文。無不嗟歎。而若適得。生極樂國。或由自力。或承佛力。朝往暮來。須臾去。須臾還。遍至十方。一切佛刹。面奉諸佛。値遇諸大士。恒聞正法。受大菩提記。乃至普入。一切塵刹。作諸佛事。修普賢行。不亦樂乎。『阿彌陀經』『平等覺經』『雙觀經』意。
龍樹『偈』云。
　彼土大菩薩。日日於三時。
　供養十方佛。是故稽首禮。

食時を以て、本國に還り到つて飯食し、經行いて諸の法樂を受く。或は言はく、每日三時に、諸佛を供養したてまつる、と。
[3]行者、今遺教に從つて、十方佛土の、種種の功德を聞くことを得、見るに隨ひ、聞くに隨つて、遙かに戀慕を生ず。各〻謂うて言はく「我等、何れの時にか、十方の淨土を見ることを得、諸佛菩薩に値ひたてまつることを得ん」と。教文に對ふ每に、嗟歎せずといふこと無し。而れども、若し適〻極樂國に生るゝことを得ば、或は自力に由り、或は佛力を承けて、朝に往いて暮に來り、須臾に去り須臾に還り、遍く十方一切の佛刹に至つて、面り諸佛に奉へ、諸の大士に値遇うて、恒に正法を聞き、大菩提の記を受く。乃至、普く一切の塵刹に入つて、諸の佛事を作し、普賢の行を修す。亦、樂しからず乎。『阿彌陀經』『平等覺經』『雙觀經』の意なり。
龍樹の『偈』に云はく、
　彼の諸の大菩薩は　日日三時に於て
　十方の佛を供養す　是の故に稽首して禮したてまつる

亦如水月電影露。
爲衆說法無名字。
故我頂禮彌陀佛。
願共諸衆生。往生安樂國。

第九隨心供佛樂者。彼土衆生。晝夜六時。常持種種天華。供養無量壽佛。又有意欲供養。他方諸佛。卽前長跪。叉手白佛。則可之。皆大歡喜。千億萬人。各自飜飛。等輩相追。俱共散飛。到八方上下。無央數諸佛所。皆前作禮。供養恭敬。如是每日晨朝。各以衣裓。盛衆妙華。供養他方。十萬億佛。及諸衣服伎樂。一切供具。隨意出生。供養恭敬。卽

亦水月、電、影、露の如しと
衆の爲に法の名字無きことを說きたまふ
故に我彌陀尊を頂禮したてまつる
願はくば諸の衆生と共に　安樂國に往生せん
と。

第九に隨心供佛の樂

とは、彼の土の衆生は、晝夜六時に、常に種種の天華を持つて、無量壽佛を供養したてまつる。又意に他方の諸佛を、供養せんと欲すること有らば、卽ち前んで長跪き、叉手いて佛に白せば、則ち之を可したまふ。皆大に歡喜し、千億萬の人は、各自飜り飛び、等輩相ひ追ひ、俱共に散り飛んで、八方上下、無央數の諸佛の所に到る。皆前んで禮を作し、供養し恭敬したてまつる。是くの如くに、每日の晨朝には、各ゝ衣裓を以て、衆の妙花を盛り、他方の十萬億の佛を供養したてまつる。及び諸の衣服や伎樂、一切の供具は、意の隨に出生れて、供養し恭敬す。卽ち

八音暢妙響。當授菩薩記。告言。仁諦聽。十方來正士。吾悉知彼願。志求嚴淨土。受決當作佛。覺了一切法。猶如夢幻響。滿足諸妙願。必成如是刹。知法如電影。究竟菩薩道。具諸功德本。受決當作佛。通達諸法性。一切空無我。專求淨佛土。必成如是刹。已上。況復水鳥樹林。皆演妙法。凡所欲聞。自然得聞。如是法樂。亦在何處乎。（此中。多依『雙觀經』『平等覺經』等意。）

龍樹『讃』曰。

金底寶間池生華。
善根所成妙臺座。
於彼座上如山王。
故我頂禮彌陀佛。
諸有無常無我等。

吾悉く彼の願を知る。嚴淨の土を志求め、決を受けて當に佛と作るべし。一切の法は、猶し夢、幻、響の如しと覺了すれど、諸の妙願を滿足して、必ず是くの如きの刹を成ぜん。法は電、影の如しと知れど、菩薩の道を究竟し、諸の功德の本を具し、決を受けて當に佛と作るべし。諸法の性は、一切空、無我なりと通達すれど、專ら淨き佛土を求めて、必ず是くの如きの刹を成ぜん」と。已上。況や復た、水鳥も樹林も、皆妙法を演べ、凡そ聞かんと欲する所は、自然に聞くことを得るをや。」是くの如き法樂は、亦何れの處にか在らん乎。此の中は、多く『雙觀經』『平等覺經』の意に依る。

龍樹の『讃』に曰く、

金底寶間の池に生えたる華には
善根より成れる妙臺の座あり
彼の座の上に於て山王の如し
故に我彌陀尊を頂禮したてまつる
諸の有は無常、無我等なり

池上。隨衆生本宿命。求道時心所憙願。大小隨意。爲說經法。令其疾開解得道。如是隨種種機。說種種法。又觀音勢至兩菩薩。常在佛左右邊。坐侍政論。佛常與是兩菩薩。共對坐。議八方上下。去來現在之事。[3]或時東方。恒沙佛國。無量無數。諸菩薩衆。皆悉往詣。無量壽佛所。恭敬供養。及諸菩薩。聲聞之衆。南西北方。四維上下。亦復如是。見彼嚴淨土。微妙難思議。因發無量心。願我國亦然。應時世尊。動容微咲。口出無數光。遍照十方國。廻光圍身。三帀入頂。一切天人衆。踊躍皆歡喜。大士觀世音。整服稽首問佛。何緣咲唯然。願說。時梵聲猶雷。

小意の隨に、爲に經法を說き、其をして疾く開解し得道せしむ。是くの如く、種種の機に隨つて、種種の法を說きたまふ。又觀音、勢至の兩菩薩は、常に佛の左右の邊に在つて、坐り侍つて政論す。佛は常に是の兩菩薩と共に對坐して、八方上下、去來現在の事を議したまふ。[3]或る時は、東方恒沙の佛國の、無量無數の諸の菩薩衆、皆悉く無量壽佛の所に往詣りて、恭敬し供養したてまつる。及び諸の菩薩、聲聞の衆は、南西北方、四維上下も、亦復た是くの如くす。彼の嚴淨の土の、微妙難思議なるを見て、因つて無上の心を發し、我が國も亦然らんと願ふ。時に應じて世尊、容を動かして微咲みたまふに、口より無數の光を出し、遍く十方の國を照す。廻光身を圍ること、三帀して頂に入る。一切の天人衆は、踊躍して皆歡喜す。大士觀世音は、服を整へ稽首して佛に問ひたてまつる。「何に緣つてか咲みたまふこと唯然り、願はくば〔意を〕說きたまへ」と。時に梵の聲猶も雷のごとく、八音をもつて妙響を暢べたまひ、當に菩薩に記を授け、告げて言はく「仁諦かに聽け。十方より來れる正士は、

色。聞樹香。嘗樹味。觸樹光。緣樹相。一切亦然。至成佛道。六根清徹。樹下有座。莊嚴無量。座上有佛。相好無邊。烏瑟高顯。晴天翠濃。白毫右旋。秋月光滿。青蓮之眼。丹果之脣。迦陵頻之聲。師子相之胸。仙鹿王之腨。千輻輪之趺。如是八萬四千相好。纓絡紫磨金身。無量塵數光明。如集億千日月。有時在於。七寶講堂。演暢妙法。梵音深妙。悅可衆心。菩薩聲聞。天人大衆。一心合掌。瞻仰尊顏。卽時自然微風。吹七寶樹。無量妙華。隨風四散。一切諸天。奏諸音樂。當斯之時。熈怡快樂。不可勝言。或復現廣大身。或現丈六八尺身。或在寶樹下。或在寶

深法忍を得、不退轉に住して、耳根清く徹かなり。樹の色を覩、樹の香を聞ぎ、樹の味を嘗め、樹の光に觸れ、樹の相を緣ずるも、一切亦然り。佛道を成ずるに至るまで、六根清く徹かなり。樹の下には座有つて、莊嚴無量なり。座の上には佛有して、相好無邊なり。烏瑟高く顯れて、晴天の翠濃く、白毫右に旋つて、秋月の光滿つ。青蓮の眼、丹果の脣、迦陵頻〔伽〕の聲、師子相の胸、仙鹿王の腨、千輻輪の趺、是くの如き八萬四千の相好は、紫磨金の身を纓絡ひ、無量塵數の光明は、億千の日月を集めたるが如し。有る時は、七寶の講堂に在つて、妙法を演暢べたまふに、梵音深妙にして、衆の心を悅可しめたまふ。菩薩、聲聞、天、人、大衆、一心に合掌して、尊顏を瞻仰る。卽の時自然の微風、七寶の樹を吹き、無量の妙華、風に隨つて四に散る。一切の諸天は、諸の音樂を奏づ。斯の時に當つて、熈怡快樂、勝て言ふ可からず。或は復た廣大の身を現じ、或は丈六、八尺の身を現じたまふ。或は寶樹の下に在り、或は寶池の上に在り。衆生の本の宿命により、求道の時心に悳み願ひし所に隨ひ、大

今見大聖牟尼尊。
猶如盲龜値浮木。
又儒童捨全身。而始得半偈。常啼割肝府。而遠求般若。菩薩尙爾。何況凡夫。佛在舍衞。二十五年。彼九億家。三億見佛。三億纔聞。其餘三億。不見不聞。在世尙爾。何況滅後。故『法華』云。
是諸罪衆生。以惡業因緣。
過阿僧祇劫。不聞三寶名。」
而彼國衆生。常見彌陀佛。恒聞深妙法。謂嚴淨地上。有菩提樹。枝葉四布。衆寶合成。樹上覆寶羅網。條間垂珠瓔珞。風動枝葉。聲演妙法。其聲流布。徧諸佛國。其有聞者。得深法忍。住不退轉。耳根淸徹。覩樹

四無量、三解脫を修して
今大聖牟尼尊を見たてまつること
猶し盲たる龜の浮木に値へるが如し
と。又儒童〔菩薩〕は全身を捨てゝ、而も始めて半偈を得、常啼〔菩薩〕は肝府を割いて、而も遠く般若を求めたり。菩薩尙爾り、何に況や凡夫をや。佛の舍衞〔城〕に在すこと、二十五年なりしに、彼の九億の家の、三億は佛を見、三億は纔かに聞き、其の餘の三億は、見もせず聞きもせざりき。在世尙爾り、何に況や滅後をや。故に『法華』に云はく、
是の諸の罪の衆生は　惡業の因緣を以て
阿僧祇劫を過せども　三寶の名をも聞かず
と。而るに、彼の國の衆生は、常に彌陀佛を見、恒に深妙の法を聞く。謂はゆる嚴淨の地の上には、菩提樹有つて、枝葉四に布き、衆寶をもつて合成れり。樹の上には寶の羅網を覆ひ、條の間には珠の瓔珞を垂る。風枝葉を動かせば、聲妙法を演べ、其の聲流布して、諸佛の國に徧し。其を聞くこと有らん者は、

處。互交言語。問訊恭敬。親近承習。不亦樂乎。已上。『雙觀經』『觀經』『平等經』等意。

龍樹『偈』云。

彼土諸菩薩。具足諸相好。
皆自莊嚴身。我今歸命禮。
超出三界獄。目如蓮華葉。
聲聞衆無量。是故稽首禮。

又云。

十方所來諸佛子。
顯現神通至安樂。
瞻仰尊顏常恭敬。
故我頂禮彌陀佛。

第八見佛聞法樂者。今此娑婆世界。見佛聞法甚難。師子吼菩薩言。

我等無數百千劫。
修四無量三解脫。

龍樹の『偈』に云はく、

彼の土の諸菩薩は　諸の相好を具足して
以て自ら身を莊嚴せり　我今歸命して禮したてまつる
三界の獄を超出して　目は蓮華の葉の如し
聲聞衆無量なり　是の故に稽首して禮したてまつる

と。又云はく、

十方より來れる諸の佛子
神通を顯現して安樂に至り
尊顏を瞻仰いで常に恭敬す
故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

と。

第八に見佛聞法の樂

とは、今此の娑婆世界は、佛を見たてまつりて法を聞くこと、甚だ難し。師子吼菩薩の言はく、

我等無數百千劫に

無滅。諸菩薩衆。復倍上數。如『大論』云。
彌陀佛國。菩薩僧多。聲聞僧少。已上。8如是聖衆。充滿其國。互遙相瞻望。遙聞語聲。同一求道。無有異類。9何況復十方。恒河沙佛土。無量塵數。菩薩聖衆。各現神通。至安樂國。瞻仰尊顏。恭敬供養。或齎天妙華。或燒妙寶香。或獻無價衣。或奏天伎樂。發和雅音。歌歎世尊。聽受經法。宣布道化。如是往來。晝夜不絕。東方去西方來。西方去北方來。北方去南方來。四維上下。互亦如是。更相開避。猶如盛市。此等大士。一聞其名。尚非少緣。況百千萬劫。誰得相見者。然彼國土衆生。常會一

彌陀佛の國には、菩薩僧多くして、聲聞僧少し。
と。已上。8是くの如き聖衆、其の國に充ち滿てり。互に遙かに相ひ瞻望し、遙かに語聲を聞き、同一に道を求めて、異類有ること無し。9何に況や、復た十方恒河沙の佛土の、無量塵數の、菩薩聖衆は、各々神通を現して、安樂國に至り、尊顏を瞻仰いで、恭敬し供養しまつる。或は天の妙華を齎し、或は妙寶の香を燒き、或は無價の衣を獻り、或は天の伎樂を奏し、和雅の音を發して、世尊を歌歎し、經法を聽受して、道化を宣布す。是くの如くに往來すること、晝夜に絕えず。東方へ去れば西方より來り、西方へ去れば北方より來り、北方へ去れば南方より來る。四維上下も、互に亦是くの如し。更に相ひ開避すること、猶も盛んなる市の如し。」此れ等の大士は、一たび其の名を聞くすら、尚少緣に非ず。況や百千萬劫にも、誰か相ひ見ることを得る者あらん。然れども、彼の國土の衆生は、常に一處に會し、互に言語を交へ、問訊恭敬して、親近づき承習ふ。亦、樂しからず乎。已上は、『雙觀經』『觀經』『平等經』等の意なり。

功德智慧俱無量。
具足慈悲救世間。
遍遊一切衆生海。
如是勝人甚難遇。
一心恭敬頭面禮。
已上。如是一生補處大菩薩。其數如恒沙。色相端嚴。功德具足。常在極樂國。圍繞彌陀佛。又諸聲聞衆。其數難量。神智洞達。威力自在。能於掌中。持一切世界。設如大目連。百千萬億。無量無數。於阿僧祇劫。悉共計校。彼初會聲聞。所知數者。猶如一渧。其所不知。如大海水。其中般泥洹去者。無央數。新得阿羅漢者。亦無央數。而都不爲增減。譬如大海。雖減恒水。雖加恒水。而無增亦

慈悲を具足して世間を救ひ
遍く一切衆生の海に遊ぶ
是の如き勝人甚だ遇ふこと難し
一心に恭敬して頭面に禮したてまつれ

と。已上。是くの如き、一生補處の大菩薩、其の數恒〔河の〕沙の如し。色相端嚴にして、功德を具足し、常に極樂國に在つて、彌陀佛を圍繞しまつる。又諸の聲聞衆は、其の數量り難し。神智洞達して、威力自在なり。能く掌の中に於て、一切の世界を持つ。設ひ大目連の如きが、百千萬億、無量無數あつて、阿僧祇劫に於て、悉く共に、彼の初會の聲聞を計校へんも、知る所の數は、猶も一渧の如く、其の知らざる所は、大海の水の如し。其の中において、般泥洹し去る者は、無央數にして、新に阿羅漢を得る者も、亦無央數なり。而れども都て增減を爲さず。譬へば大海の、恒水を減ずと雖も、恒水を加ふと雖も、而も增すことも無く、亦減ることも無きが如し。諸の菩薩衆は、復た上の數に倍す。『大論』に云ふが如し。

以智慧光。普照一切。令離三途。
得無上力。故此菩薩。名大勢至。
觀此菩薩者。除無數劫阿僧祇。
生死之罪。不處胞胎。常遊諸佛。
淨妙國土。

『觀經』意。

無量無邊無數劫。
廣修願力助彌陀。
常處大衆宣法言。
衆生聞者得淨眼。
神通周遍十方國。
普現一切衆生前。
衆生若能至心念。
皆悉導令至安樂。

龍樹『讃』。又云。

觀音勢至大名稱。

智慧の光を以て、普く一切を照し、三途を離れしむるに、無上力を得たり。故に此の菩薩を、大勢至と名づく。此の菩薩を觀る者は、無數劫阿僧祇の生死の罪を除き、胞胎に處らずして、常に諸佛の淨妙な國土に遊ぶ。

と。『觀經』の意なり。

無量無邊無數劫に
廣く願力を修して彌陀を助け
常に大衆に處いて法言を宣ぶ
衆生聞かん者は淨眼を得る
神通をもつて十方の國に周遍り
普く一切衆生の前に現る
衆生若し能く至心に念ずれば
皆悉く導いて安樂に至らしむ

と。龍樹の『讃』なり。又云はく、

觀音と勢至は大名稱あり
功德と智慧とは倶に無量

退轉地。

『十一面經』。衆生若聞名。離苦得解脱。
亦遊戲地獄。大悲代受苦。

『請觀音經』偈。弘誓深如海。歴劫不思議。
侍多千億佛。發大清淨願。
具足神通力。廣修智方便。
十方諸國土。無刹不現身。
念念勿生疑。觀世音淨聖。
於苦惱死厄。能爲作依怙。
具一切功德。慈眼視衆生。
福聚海無量。是故應頂禮。

『法華經』。6大勢至菩薩曰。

『寶積經』。我能堪任。度諸惡趣。未度衆生。

らん者は、一切皆不退轉地を得。

と。『十一面經』に言ふ。

衆生若し名を聞かば　苦を離れて解脱を得ん
亦地獄に遊戲び　大悲代つて苦を受けん

と。『請觀音經』の偈なり。

弘誓の深きこと海の如し　劫を歴とも思議られじ
多千億の佛に侍へ　大清淨の願を發す
神通力を具足し　廣く智の方便を修し
十方諸の國土に　刹として身を現さざるは無し
念念に疑を生ずること勿れ　觀世音淨聖は
苦惱死厄に於て　能く爲に依怙と作る
一切の功德を具へ　慈眼をもつて衆生を視る
福聚の海無量なり　是の故に應に頂禮すべし

と。『法華經』に言ふ。6大勢至菩薩の曰く、

我能く、諸の惡趣、未度の衆生を度ふに堪任たり。

と。『寶積經』に言ふ

一一神通悉周遍。
十方國土無遺者。
如一切刹如來所。
彼刹塵中悉亦然。『同經』偈。
2文殊師利大聖尊。
三世諸佛以爲母。
十方如來初發心。
皆是文殊教化力。
一切世界諸有情。
聞名見身及光相。
竝見隨類諸化現。
皆成佛道難思議。『心地觀經』意。若但聞名者。除十二億劫生死之罪。若禮拜供養者。恒生佛家。若稱名字。一日七日。文殊必來。若

種種の三昧をもつて神通を現し
一一の神通は悉く周遍いて
十方の國土に遺す者無し
一切刹の如來の所の如く
彼の刹の塵の中にも悉く亦然り
と。『同經』の偈なり。
2文殊師利大聖尊は
三世の諸佛以て母と爲し
十方の如來の初發心は
皆是れ文殊教化の力なり
一切世界の諸の有情
その名を聞き身及び光相を見
竝に隨類の諸の化現を見ば
皆佛道を成ずること思議り難し
と。『心地觀經』の偈なり。若し但名を聞く者は、十二億劫の生死の罪を除き、若し禮拜し供養する者は、恒に佛家に生れ、若し名

若有衆生。未種善根。及種少善。聲聞菩薩。猶尚不得。聞我名字。況見我身。若有衆生。得聞我名。於阿耨菩提。不復退轉。乃至夢中。見聞我者。亦復如是。

『華嚴經』意。又云。

我常隨順諸衆生。
盡於未來一切劫。
恒修普賢廣大行。
圓滿無上大菩提。
普賢身相如虛空。
依眞而住非國土。
隨諸衆生心所欲。
示現普身等一切。
一切刹中諸佛所。
種種三昧現神通。

賢菩薩の言はく、

若し衆生有つて、未だ善根を種ゑざるもの、及び少善を種ゑたる聲聞、菩薩は、猶尚我が名字を聞くことを得ず、況や我が身を見んことをや。若し衆生有つて、我が名を聞くことを得ば、阿耨菩提に於て、復た退轉かじ。乃至、夢の中にして、我を見聞きせん者も、亦復た是くの如し。

と。『華嚴經』の意なり。又云はく、

我常に諸の衆生に隨順うて
未來一切の劫を盡すまで
恒に普賢の廣大の行を修し
無上の大菩提を圓滿せん
普賢の身の相は虛空の如し
眞に依つて住み國土に非ず
諸の衆生の心の所欲の隨に
普ねき身を示現して一切に等しうす
一切刹の中諸佛の所に

面見彼佛阿彌陀。
即得往生安樂刹。
我既往生彼國已。
現前成就此大願。
一切圓滿盡無餘。
利樂一切衆生界。
無緣尚爾。況結緣乎。
龍樹『偈』云。
無垢莊嚴光。一念及一時。
普照諸佛會。利益諸群生。
第七聖衆倶會樂者。如『經』云。衆生聞者。應當發願。願生彼國。所以者何。得與如是。諸上善人。倶會一處。已上。」彼諸菩薩。聖衆德行。不可思議。「[1]普賢菩薩言。

我既に彼の國に往生し已れば
現前に此の大願を成就せん
一切圓滿して盡く餘すこと無く
一切衆生界を利樂せん
と。無緣尚爾り、況や結緣を乎。
龍樹の『偈』に云はく
無垢莊嚴の光り　一念及び一時に
普く諸佛の會を照し　諸の群生を利益す
と。

第七に聖衆倶會の樂

とは、『經』に云ふが如し。
衆生聞かん者は、應當に願を發し、彼の國に生れんと願ふべし。所以は何ん。是くの如き、諸の上善人と、倶に一處に會ふことを得ればなり。
と。已上。」彼の諸の菩薩、聖衆の德行は、思議る可からず。「[1]普

世世生生互有恩。」
若生極樂。智慧高明。神通洞達。世
世生生。恩所知識。隨心引接。以天
眼見生處。以天耳聞言音。以宿命
智憶其恩。以他心智了其心。以神
境通隨逐變現。以方便力教誡示導。
[2]如『平等經』云。
彼土衆生皆自知。其前世所從來
生。及知八方上下。去來現在之
事。知彼諸天人民。蠉飛蠕動之
類。心意所念。口所欲言。何歲何
劫。當生此國。作菩薩道。得阿羅
漢。皆豫知之。
又『華嚴經』普賢願云。
願我臨欲命終時。
盡除一切諸障礙。

世世生生には互に恩有り
と。」若し極樂に生るれば、智慧高明にして、神通洞達し、世世
生生の、恩所知識、心の隨に引接す。天眼を以ては生處を見、
天耳を以ては言音を聞き、宿命智を以ては其の恩を憶ひ、他心
智を以ては其の心を了り、神境通を以ては、隨ひ逐うて變現し、
方便力を以ては教誡へ示導く。[2]『平等〔覺〕經』に云ふが如し。
彼の土の衆生は、皆自ら其の前世の、從つて來れる生を知り、
及び八方上下、去來現在の事を知り、彼の諸天人民、蜎飛蠕
動の類の、心意の所念、口に言はんと欲する所を知る。何れ
の歲、何れの劫にか、此の國に生れ、菩薩の道を作して、阿
羅漢を得べしといふことも、皆豫め之を知る。
と。又『華嚴經』の普賢の願に云はく、
願はくば我命終らんと欲する時に臨み
盡く一切諸の障礙を除き
面り彼の佛阿彌陀を見たてまつり
即ち安樂刹に往生することを得ん

第六引接結緣樂者。人之在世。所求不如意。樹欲靜而風不停。子欲養而親不待。志雖春肝膽。力不堪水菽。君臣師弟。妻子朋友。一切恩所。一切知識。皆亦如是。空勞癡愛之心。彌增輪廻之業。況復業果推遷。生處相隔。六趣四生。不知何處。野獸山禽。誰辯舊親。如『心地觀經』偈云。

世人爲子造諸罪。
墮在三途長受苦。
男女非聖無神通。
不見輪廻難可報。
有情輪廻生六道。
猶如車輪無始終。
或爲父母爲男女。

第六に引接結緣の樂

とは、人の世に在るに、求むる所意の如くならず。樹は靜まらんと欲すれども、風停まず、子は養はんと欲すれども、親待たず、志肝膽を春くと雖も、力水菽に堪へざるなり。君臣、師弟、妻子、朋友、一切の恩所、一切の知識、皆亦是くの如し。空しく癡愛の心を勞して、彌ゝ輪廻の業を增す。況や復た、業果推し遷つて、生くる處相ひ隔つれば、六趣四生、何れの處といふことを知らず。野獸山禽、誰か舊親を辯〔辨〕へん。『心地觀經』の偈に云ふが如し。

世人子の爲に諸の罪を造り
三途に墮在て長く苦を受くれども
男女聖に非ざれば神通無く
輪廻を見ざれば報ゆ可きこと難し
有情輪廻して六道に生るゝこと
猶し車輪の如く始終無し
或は父母と爲り男女と爲つて

七寶山。七寶塔。七寶坊。出『十往生經』。浴八功德池。寂然宴默。讀誦解說。如是遊樂。相續無間。處是不退。永免三途八難之畏。壽亦無量。終無生老病死之苦。心事相應。無愛別離苦。慈眼等視。無怨憎會苦。白業之報。無求不得苦。金剛之身。無五盛陰苦。一託七寶莊嚴之臺。長別三界苦輪之海。若有別願。雖生他方。是自在生滅。非業報生滅。尙無不苦。不樂之名。何況諸苦耶。

龍樹『偈』云。

若人生彼國。終不墮惡趣。
及與阿修羅。我今歸命禮。

の山に登り、「七寶の山、七寶の塔、七寶の坊」は、『十往生經』に出づ。八功德の池に浴し、寂然に宴默へ、讀誦み、解說す。是くの如く遊び樂しむこと、相續して間無し。處は是れ不退なれば、永く三途八難の畏を免れ、壽亦無量なれば、終に生老病死の苦あること無し。心と事と相應すれば、愛別離の苦も無く、慈眼をもつて等しく視れば、怨憎會の苦も無し。白業の報なれば、求不得の苦も無く、金剛の身なれば、五盛陰の苦も無し。一たび七寶莊嚴の臺に託しぬれば、長く三界苦輪の海と別る。若し別願有らば、他方〔世界〕に生るゝことありと雖も、是れ自在の生滅にして、業報の生滅には非ず。尙、不苦不樂の名すら無し。何ぞ況や、諸の苦を耶。

龍樹の『偈』に云はく、

若し人彼の國に生るれば　終に三〔惡〕趣
及び阿修羅に墮ちざるなり　我れ今歸命して禮したてまつる

と。

間。從宮殿至宮殿。從林池至林池。若欲寂時。風浪絃管。自隔耳下。若欲見時。山川溪谷。尙現眼前。香味觸法。隨念亦然。或渡飛梯作伎樂。或騰虛空現神通。或從他方大士而迎送。或伴天人聖衆以遊覽。或至寶池邊慰問新生人。汝知不是處。名極樂世界。是界主。號彌陀佛。今當歸依。或同在寶池中。各坐蓮臺上。互說宿命事。我本在其國。發心求道之時。持其經典。護其戒行。作其善法。修其布施。各語所好憙之功德。具陳所來生之本末。或共語十方諸佛利生之方便。或共議三有衆生拔苦之因緣。議已追緣而相去。語已隨樂而共往。或復登七寶山。

の如し。共に瑠璃地の上を經行き、同じく栴檀の林の間に遊戲ぶ。宮殿より宮殿に至り、林池より林池に至る。若し〔心〕寂ならんと欲する時は、風浪絃管、自らに耳下を隔たり、若し見んと欲する時は、山川溪谷、尙眼前に現る。香、味、觸、法も、念の隨に亦然り。或は飛梯を渡つて伎樂を作し、或は虛空に騰つて神通を現す。或は他方の大士に從つて迎送し、或は天人聖衆に伴つて遊覽す。或は寶池の邊に至り、新に生れたる人を慰問す「汝知るや不や、是の處を極樂世界と名づけ、是の界の主を彌陀佛と號す、今當に歸依したてまつるべし」と。或は同じく寶池の中に在つて、各〻蓮の臺の上に坐り、互に宿命の事を說く「我れ本其の國に在つて、〔菩提の〕心を發して道を求めし時、其の經典を持ち、其の戒行を護り、其の善法を作し、其の布施を修せし」と。各〻好み憙びし所の功德を語り、具に來生せる所の本末を陳ぶ。或は共に十方諸佛の利生の方便を語り、或は共に三有衆生の拔苦の因緣を議す。議し已れば、緣を追つて相ひ去り、語り已れば、樂に隨つて共に往く。或は復た七寶

無量寶絞絡。羅網遍虛空。
種々鈴發響。宣吐妙法音。
衆生所願樂。一切皆滿足。
故我願生彼。阿彌陀佛國。

第五快樂無退樂者。今此娑婆世界。無可耽玩。輪王之位。七寶不久。天上之樂。五衰早來。乃至有頂。輪廻無期。況餘世人乎。事與願違。樂與苦俱。富者未必壽。壽者未必富。或昨富今貧。或朝生暮死。故『經』言。

出息不待入息。入息不待出息。非唯眼前樂去哀來。亦臨命終。隨罪墮苦。」

彼西方世界。受樂無窮。人天交接。兩得相見。慈悲薰心。互如一子。共經行於瑠璃地上。同遊戲於栴檀林

衆生の願樂ふところ　一切能く滿足す
故に我れ阿彌陀佛の國に　往生せんと願ふ

と。

第五に快樂無退の樂

とは、今此の娑婆世界は、耽玩む可きこと無し。〔轉〕輪王の位も、七寶久しからず、天上の樂も、五衰早く來る。乃至有頂も、輪廻の期無し。況や餘の世の人をや。事と願とは違ひ、樂は苦と俱なれり。富める者、必ずしも壽からず、壽き者、必ずしも富まず。或は昨富んで、今貧しく、或は朝に生れて、暮に死す。故に『經』に言はく、

出づる息は入る息を待たず、入る息は出づる息を待たず。唯眼前に樂去つて哀來るのみに非ず、亦命終に臨んでは、罪に隨つて苦に墮つ。

と。」彼の西方世界は、樂を受くること窮り無し。人と天と交接はつて、兩に相ひ見ることを得、慈悲は心に薰みて、互に一子

後夜。亦復如是。」此等所有。微妙五境。雖令見聞覺者。身心適悅。而不增長。有情貪著。更增無量。殊勝功德。凡八方上下。無央數諸佛國中。極樂世界。所有功德。最爲第一。以二百一十億。諸佛淨土。嚴淨妙事。皆攝在此中。若觀如是國土相者。除無量億劫。極重惡業。命終之後。必生彼國。依二種『觀經』『阿彌陀經』『稱讚淨土經』『寶積經』『平等覺經』『思惟經』等意。記之

世親『偈』云。

觀彼世界相。勝過三界道。
究竟如虛空。廣大無邊際。
寶華千萬種。彌覆池流泉。
微風動華葉。交錯光亂轉。
宮殿諸樓閣。觀十方無礙。
雜樹異光色。寶欄遍圍繞。

貪著を、増長せしめず、更に無量、殊勝の功德を增すなり。凡そ八方上下、無央數の諸佛の國の中において、極樂世界に有るところの功德をもつて、最も第一と爲す。二百一十億の、諸佛の淨土における、嚴淨の妙事、皆攝めて此の〔土〕の中に在るを以てなり。若し是くの如き國土の相を觀ずる者は、無量億劫の、極めて重き惡業をも除き、命終の後は、必ず彼の國に生る。二種の『觀經』『阿彌陀經』『稱讚淨土經』『寶積經』『平等覺經』『思惟經』等の意に依つて、之を記す。

世親の『偈』に云はく、

彼の世界の相を觀るに　三界道よりも勝過れたり
究竟ること虛空の如く　廣大にして邊際無し
寶の華千萬種あつて　池、流、泉に彌く覆ふ
微風華葉を動かせば　交錯の光亂れ轉く
宮殿諸の樓閣は　十方を觀て礙り無し
雜の樹には異なる光色あり　寶の欄遍く圍繞り
無量の寶絞絡へたる　羅網は虛空に遍けり
種々の鈴響を發して　妙法の音を宣吐す

衆生等。若欲食時。七寶之机。自然現前。七寶之鉢。妙味滿中。不類世間之味。亦非天上之味。香美無比。甛酢隨意。見色聞香。身心清潔。卽同食已。色力增長。事已化去。時至復現。又彼土衆生。欲得衣服。隨念卽至。如佛所讃。應法妙服。自然在身。不求裁縫。染治浣濯。又光明周遍。不用日月燈燭。冷暖調和。無有春秋冬夏。自然德風。溫冷調適。觸衆生身。皆得快樂。譬如比丘得滅盡三昧。每日晨朝。吹散妙華。遍滿佛土。馨香芬烈。微妙柔軟。如兜羅綿。足履其上。蹈下四寸。隨擧足已。還復如故。過晨朝已。其華沒地。舊華既沒。更雨新華。中時晡時。初中

鉢には、妙味中に滿つ。世間の味に類せず、亦天上の味にも非ず。香美きこと比無く、甛酢意の隨なり。色を見、香を聞かば、身心清潔となり、卽ち食ひ已るに同じくて、色力增長す。事已れば化し去り、時至れば復た現る。又彼の土の衆生は、衣服を得んと欲へば、念の隨に卽ち至る。佛の讃めたまへるが如く、法に應へる妙服、自然に身に在つて、裁縫、染治、浣濯を求せず。又光明周遍いて、日月燈燭を用ひず、冷暖調和うて、春秋冬夏あること無し。自然の德風は、溫冷調適ひ、衆生の身に觸れて、皆快樂を得ること、譬へば比丘の、滅盡三昧を得るが如し。每日晨朝には、妙華を吹き散らして、佛土に遍滿し、馨香芬烈ひ、微妙にして柔軟きこと、兜羅綿の如し。足をもつて其の上を履めば、蹈下むこと四寸なれども、足を擧げ已るに隨つて、還復故の如くなる。晨朝を過ぎ已れば、其の華地に沒す。舊き華既に沒すれば、更に新しき華を雨らす。中時、晡時、初、中、後夜も、亦復た是くの如し。」此れ等の有らゆる、微妙の五境は、見聞覺者の身心をして、適悅ま令むと雖も、而も有情の

悉照見。樹上有七重寶網。寶網間有五百億妙華宮殿。宮殿中有諸天童子。瓔珞光耀。自在遊樂。如是七寶諸樹。周遍世界。名華軟草。亦隨處有。柔軟香潔。觸者生樂。已上樹林。5衆寶羅網。彌滿虛空。懸諸寶鈴。宣妙法音。天華妙色。繽紛亂墜。寶衣嚴具。旋轉來下。如鳥飛空下。供散於諸佛。又有無量樂器。懸處虛空。不鼓自鳴。皆說妙法。已上虛空。6復如意妙香。塗香抹香無量香。芬馥遍滿於世界。若有聞者。塵勞垢習。自然不起。凡自地至空。宮殿華樹。一切萬物。皆以無量雜寶。百千種香。而共合成。其香普薫。十方世界。菩薩聞者。皆修佛行。7復彼國菩薩羅漢。諸

樹の上には、七重の寶網有り、寶網の間には、五百億の妙華の宮殿有り、宮殿の中には、諸の天童子有つて、瓔珞光り耀き、自在に遊び樂しむ。是くの如き七寶の諸の樹は、世界に周遍き、名ある華、軟かき草も、亦隨處に有つて、柔軟の香は潔く、觸るゝ者樂を生ず。已上は、樹林なり。5衆の寶の羅網は、虛空に彌き滿ち、諸の寶の鈴を懸けて、妙法の音を宣ぶ。天華は妙色にして、繽紛として亂れ墜ち、寶衣嚴具は、旋轉して來下り、鳥の飛んで空より下るが如くに、諸佛に供散したてまつる。又無量の樂器有つて、懸かに虛空に處り、鼓たざるに自ら鳴つて、皆妙法を說く。已上は、虛空なり。6復た如意の妙香、塗香、抹香、無量の香、芬馥しくして遍く世界に滿つ。若し聞ぐこと有る者は、塵勞垢習、自然に起らず。凡て地より空に至るまで、宮殿も華樹も、一切の萬物は、皆無量雜寶の、百千種の香を以て、共に合成せり。其の香普く、十方の世界に薫り、菩薩にして聞ぐ者は、皆佛の行を修す。7復た彼の國の菩薩、羅漢、諸の衆生等にして、若し食はんと欲する時は、七寶の机、自然に前に現れ、七寶の

羅漢者。得阿羅漢。未得阿惟越致者。得阿惟越致。皆悉得道。莫不歡喜。復有清河。底布金沙。淺深寒溫。曲從人好。衆人遊覽。同萃河濱。已上水相。4池畔河岸。有栴檀樹。行々相當。葉々相次。紫金之葉。白銀之枝。珊瑚之華。硨磲之實。一寶七寶。或純或雜。枝葉華果。莊嚴映飾。和風時來。吹諸寶樹。羅網微動。妙華徐落。隨風散馥。雜水流芬。況出微妙音。宮商相和。譬如百千種樂。同時俱作。聞者自然。念佛法僧。彼第六天。萬種音樂。不如此樹。一種音聲。葉間生華。華上有果。皆放光明。化爲寶蓋。一切佛事。映現蓋中。乃至欲見。十方嚴淨佛土。於寶樹間。皆

須陀洹を得、乃至未だ阿羅漢を得ざる者は、阿羅漢を得、未だ阿惟越致を得ざる者は、阿惟越致を得、皆悉く道を得て、歡喜せざるもの莫し。復た清き河有つて、底には金の沙を布き、淺深寒溫は、曲に人の好みに從へり。衆人遊覽して、同に河の濱に萃まる。已上は、水の相なり。4池の畔、河の岸には、栴檀の樹有つて、行と行と相ひ當り、葉と葉と相ひ次ぎ、紫金の葉、白銀の枝、珊瑚の華、硨磲の實、一寶また七寶の、或は純或は雜の、枝葉華果をもつて、莊嚴し映り飾れり。和風時に來つて、諸の寶樹を吹けば、羅網微かに動いて、妙華徐かに落つ。風に隨つて馥を散らし、水に雜つて芬を流す。況や微妙の音を出して、宮商相ひ和すること、譬へば百千種の樂を、同時に俱に作すが如し。聞く者は自然に、佛、法、僧を念ず。彼の第六天の、萬種の音樂も、此の樹の、一種の音聲には如かざるなり。葉の間には華を生じ、華の上には果有つて、皆光明を放ち、化して寶蓋と爲り、一切の佛事は、蓋の中に映り現る。乃至、十方の嚴淨な佛土を見んと欲へば、寶樹の間に於て、皆悉く照し見る。

空無我。諸波羅蜜。或流出十力無畏。不共法音。或大慈悲聲。或無生忍聲。隨其所聞。歡喜無量。隨順淸淨寂滅。眞實之義。隨順菩薩聲聞。所行之道。又鳧雁鴛鴦。鵞鷺鵝鶴。孔雀鸚鵡。伽陵頻迦等。百寶色鳥。晝夜六時。出和雅音。讃嘆念佛。念法。念比丘僧。演暢五根五力。七菩提分。無有三途。苦難之名。但有自然。快樂之音。彼諸菩薩。及聲聞衆。入於寶池。洗浴之時。淺深隨念。不違其心。蕩除心垢。淸明澄潔。洗浴已訖。各々自去。或在空中。或在樹下。有講經誦經者。有受經聽經者。有坐禪者。有經行者。其中未得須陀洹者。則得須陀洹。乃至未得阿

相ひ灌注ぐ。安詳にながれ徐に逝いて、遲からず疾からず。其の聲、微妙にして、佛法にあらずといふこと無し。或は苦、空、無我、諸波羅蜜を演説べ、或は十力、〔四〕無畏、〔十八〕不共の法をとく音を流れ出す。或は大慈悲の聲、或は無生忍の聲なり。其の聞く所に隨つて、歡喜無量なり。淸淨の寂滅、眞實の義に隨順ひ、菩薩や聲聞の、行ずる所の道に隨順へり。又鳧、雁、鴛鴦、鵞、鷺、鵝、鶴、孔雀、鸚鵡、伽陵頻迦等の、百寶の色鳥は、晝夜六時に、和雅の音を出して、佛を念じ、法を念じ、比丘僧を念ずることを讃嘆へ、五根、五力、七菩提分を演暢ぶ。三途、苦難の名すら有ること無く、但自然の快樂の音のみ有り。彼の諸の菩薩、及び聲聞衆の、寶の池に入つて、洗ひ浴する時は、淺深は念に隨うて、其の心に違はず、心の垢を蕩除いて、淸明澄潔なり。洗ひ浴すること已に訖れば、各ゝ自らに去つて、或は空中に在り、或は樹の下に在つて、經を講き經を誦む者も有れば、經を受け經を聽く者も有り、坐禪する者も有れば、經行く者も有り。其の中において、未だ須陀洹を得ざる者は、則ち

億華幢。垂珠瓔珞。懸寶幡蓋。殿裏樓上。有諸天人。常作妓樂。歌詠如來。已上宮殿。講堂精舍。宮殿樓閣。內外左右。有諸浴池。黃金池底白銀沙。白銀池底黃金沙。水精池底瑠璃沙。瑠璃池底水精沙。珊瑚琥珀。硨磲瑪瑙。白玉紫金。亦復如是。八功德水。充滿其中。寶沙映徹。無深不照。八功德者。一澄淨。二淸冷。三甘美。四輕輭。五潤澤。六安和。七飮時。除飢渴等。無量過患。八飮已。定能長養。諸根四大。增益種種。殊勝善根。四邊階道。衆寶合成。種々寶華。彌覆池中。靑蓮有靑光。黃蓮有黃光。赤蓮白蓮。各有其光。微風吹來。華光亂轉。一一華中。各有菩薩。一一光中。有諸化佛。微瀾廻流。轉相灌注。安詳徐逝。不遲不疾。其聲微妙。無不佛法。或演說苦

の寶の床座には、妙なる衣をもつてその上に敷き、七重の欄楯、百億の華幢あつて、珠の瓔珞を垂らし、寶の幡や蓋を懸けたり。殿の裏、樓の上には、諸の天人有つて、常に妓樂を作して、如來を歌詠ひたてまつる。已上は、宮殿なり。講堂、精舍、宮殿、樓閣の、內外左右には、諸の浴の池有り。黃金の池の底には白銀の沙あり、白銀の池の底には黃金の沙あり、水精の池の底には瑠璃の沙あり、瑠璃の池の底には水精の沙あり。珊瑚、琥珀、硨磲、瑪瑙、白玉、紫金も、亦復た是くの如し。八功德の水、其の中に充ち滿ち、寶の沙に映り徹つて、深く照さずといふこと無し。「八功德」とは、一には澄淨、二には淸冷、三には甘美、四には輕輭、五には潤澤、六には安和、七には飮む時飢渴等の無量の過患を除き、八には飮み已れば定んで能く諸根四大を長養し種種殊勝の善根を增益するをいふ。四邊の階道は、衆寶をもつて合せ成り、種々の寶華は、池の中に彌く覆ふ。靑蓮には靑き光有り、黃蓮には黃なる光有り。赤蓮、白蓮にも、各ゝ其の光有つて、微風吹き來れば、華の光亂れ轉く。一一の華の中には、各ゝ菩薩有し、一一の光の中には、諸の化佛有す。微瀾廻り流れて、轉た

天台首楞嚴院沙門源信撰

第四五妙境界樂者。四十八願。莊嚴淨土。一切萬物。窮美極妙。所見悉是淨妙色。所聞無不解脫聲。香味觸境。亦復如是」。謂彼世界。以瑠璃爲地。金繩界其道。坦然平正。無有高下。恢廓曠蕩。無有邊際。晃耀微妙。奇麗淸淨。以諸妙衣。遍布其地。一切人天。踐之而行。已上地相。[2]衆寶國土。一一界上。有五百億。七寶所成。宮殿樓閣。高下隨心。廣狹應念。諸寶床座。妙衣敷上。七重欄楯。百

第四に五妙境界の樂

とは、四十八の願をもつて、淨土を莊嚴したまへば、一切の萬物、美を窮め妙を極めたり。見るところ悉く是れ淨妙の色にして、聞くところ解脫の聲ならずといふこと無し。香、味、觸の境も、亦復た是くの如し。」謂はく、彼の世界は、瑠璃を以て地と爲し、金の繩をもつて其の道を界ふ。坦然平正にして、高下有ること無く、恢廓曠蕩くして、邊際有ること無し。晃耀微妙にして、奇麗淸淨なり。諸の妙なる衣を以て、遍く其の地に布き、一切の人天は、これを踐んで行く。已上は、地の相なり。[2]衆寶よりなる國土の、一一の界の上には、五百億の、七寶より成れる、宮殿樓閣有つて、高下は心の隨に、廣狹は念の應なり。諸

誰得一通。非燈日無以照。非行歩無以至。雖一紙不見其外。雖一念不知其後。焚籠未出。隨事有礙。而彼土衆生。無有一人。不具此德。」不於百大劫中。而種相好業。不於四靜慮中。而修神通因。只是彼土。任運生得之果報。不亦樂乎。（多依『雙觀經』『平等覺經』等。）

龍樹『偈』云。

人天身相同。猶如金山頂。
諸勝所歸處。是故頭面禮。
其有生彼國。具天眼耳通。
十方竝無礙。稽首聖中尊。
其國諸衆生。神變及身通。
亦具宿命智。是故歸命禮。

往生要集　卷上本終

ものあらん。燈か日に非ざれば以て照すこと無く、行き歩むに非ざれば以て至ること無し。一紙と雖も其の外を見ず、一念と雖も其の後を知らず。樊籠を未だ出でざれば、隨事に礙有れども、彼の土の衆生は、一人として、此の德を具せざるもの、有ること無し。」百大劫の中に、相好の業を種ゑず、四靜慮の中に、神通の因を修せざれど、只是れ彼の土の、任運生れながらにして得るところの果報なり。亦樂しからず乎。（多くは『雙觀經』『平等覺經』等に依る。）

龍樹の『偈』に云はく、

人天の身の相同じくて　猶も金山の頂の如し
諸の勝れたる所歸處なり　是の故に頭面をもって禮したてまつる
其れ彼の國に生るゝこと有るものは　天眼と耳との通を具し
十方竝く礙無し　聖中の尊を稽首したてまつる
其の國の諸の衆生は　神變及び心通あり
亦宿命の智をも具す　是の故に歸命禮したてまつる

と。

第三身相神通樂者。彼土衆生。其身眞金色。內外俱清淨。常有光明。彼此互照。三十二相。具足莊嚴。端正殊妙。世間無比。諸聲聞衆。身光一尋。菩薩光明。照百由旬。或云十萬由旬。以第六天主。比彼土衆生。猶如乞匃。在帝王邊。²又彼諸衆生。皆具五通。妙用難測。隨心自在。若欲見十方界色。不運步卽見。欲聞十方界聲。不起座卽聞。無量宿命之事。如今日所聞。六道衆生之心。如明鏡所見像。無央數之佛刹。如咫尺往來。凡橫於百千萬億。那由他國。竪於百千萬億。那由他劫。一念之中。自在無礙。」今此界衆生。於三十二相。誰得一相。於五神通。

第三に身相神通の樂

とは、彼の土の衆生は、其の身眞金色にして、內外俱に清淨なり。常に光明有つて、彼此互に照す。三十二の相あつて、莊嚴を具足し、端正殊妙にして、世間に比ぶるもの無し。諸の聲聞衆は、身の光一尋にして、菩薩の光明は、百由旬を照す。或は十萬由旬とも云ふ。第六天の主を以て、彼の土の衆生に比ぶれば、猶も乞匃の、帝王の邊に在るが如し。²又彼の土の諸の衆生は、皆五の通を具し、妙用測り難く、心の隨に自在なり。若し十方界の色を見んと欲せば、步を運ばずして卽ち見、十方界の聲を聞かんと欲せば、座を起たずして卽ち聞く。無量の宿命の事は、今日聞く所の如く、六道の衆生の心は、明鏡に所見る像の如し。無央數の佛の刹を、咫尺の如くに往來すること、凡そ橫には百千萬億、那由他の國を、竪には百千萬億、那由他の劫を、一念の中にして、自在無礙なり。」今此の界の衆生は、三十二相に於て、誰か一相を得、五神通に於て、誰か一通を得る

聖衆。恭敬圍繞。又寶地上。寶樹行列。寶樹下。各有一佛二菩薩。光明嚴飾。遍瑠璃地。如夜闇中。燃大炬火。[4]時觀音勢至。來至行者前。出大悲音。種々慰喩。行者從蓮臺下。五體投地。頭面敬禮。卽從菩薩。漸至佛所。跪七寶階。瞻萬德之尊容。聞一實道。入普賢之願海。歡喜雨涙。渇仰徹骨。」始入佛界。得未曾有。行者昔於娑婆。纔讀經文。今正見此事。歡喜心幾乎。多依「觀經」等意。

龍樹『偈』曰。

若人種善根。疑則華不開。
信心淸淨者。華開則見佛。

ひ、無量の聖衆は、恭敬ひまつりて圍み繞れり。又寶地の上には、寶樹行列し、寶樹の下には、各々一佛と二菩薩と有す。光明をもつて嚴飾り、瑠璃の地に遍きこと、夜の闇の中に、大なる炬火を燃せるが如し。[4]時に觀音と勢至、行者の前に來至り、大悲の音を出して、種々に慰喩めたまふ。行者、蓮の臺より下り、五體を地に投げ、頭面を「佛の足につけて」敬禮したてまつる。卽ちに菩薩に從ひ、漸く佛の所に至つて、七寶の階に跪き、萬德の尊き容を瞻たてまつる。一實の道を聞いて、普賢の願海を入し、歡喜して涙を雨らし、渇仰して骨に徹る。」始めて佛界に入つて、未曾有なることを得る。行者、昔娑婆に於て、纔かに經文を讀みたらんも、今正しく此の事を見れば、歡喜の心幾ばくならん乎。多くは『觀經』等の意に依る。

龍樹の『偈』に曰く、

若し人善根を種ゑんも　疑ふものは則ち華開かず
信心淸淨なる者は　華開いて則ち佛を見たてまつる

と。

奇妙。盡虛空界之莊嚴。眼迷雲路。轉妙法輪之音聲。聽滿寶刹。樓殿林池。表裏照曜。鳧雁鴛鴦。遠近群飛。或見衆生。如駃雨。從十方世界生。或見聖衆。如恒沙。從無數佛土來。或有登樓臺。望十方者。或有乘宮殿。住虛空者。或有住空中。誦經說法者。或有住空中。坐禪入定者。地上林間。亦復如是。處々復有。涉河濯流。奏樂散華。往來樓殿。禮讚如來之者。如是無量。天人聖衆。隨心遊戲。況化佛菩薩。香雲華雲。充滿國界。不可具名。又漸廻眸。遙以瞻望。彌陀如來。如金山王。坐寶蓮華上。處寶池中央。觀音勢至。威儀尊重。亦坐寶華。侍佛左右。無量

を聞く。色に觸れ聲に觸るゝもの、みな奇妙ならざるもの無し。盡き虛空界の莊嚴は、眼雲路に迷ひ、妙法輪を轉ずるの音聲は、その聽寶刹に滿つ。樓殿と林池とは、表裏に照り曜き、鳧、雁、鴛鴦は、遠近に群がり飛ぶ。或は衆生の、駃き雨の如く、十方の世界より生るゝを見、或は聖衆の、恒〔河〕の沙の如く、無數の佛土より來るを見る。或は樓臺に登つて、十方を望む者も有れば、或は宮殿に乘つて、虛空に住る者も有り。或は空中に住つて、經を誦み法を說く者も有れば、或は空中に住つて、坐禪して定に入る者も有り。地上と林間も、亦復た是くの如し。處處に復た、河を涉り流れに濯ぎ、樂を奏し華を散らし、樓殿に往來して、如來を禮し讚むる者も有り。是くの如き無量の、天人聖衆は、心の隨に遊び戲むる。況や化佛や菩薩の、香の雲、華の雲のごとく、國界に充ち滿ちたまふこと、具に名ふ可からず。又漸く眸を廻らして、遙かに彌陀如來を瞻望たてまつれば、金山王の如く、寶蓮華の上に坐り、寶池の中央に處せり。觀音と勢至は、威儀尊重く、亦寶〔蓮〕華に坐つて、佛の左右に侍りたま

永越過苦海。初往生淨土。爾時歡喜心。不可以言宣。

龍樹『偈』云。

若人命終時。得生彼國者。即具無量德。是故我歸命。

第二蓮華初開樂者。行者生彼國已。蓮華初開時。所有歡樂。倍前百千。猶如盲者。始得明眼。亦如邊鄙。忽入王宮。」自見其身。身既作紫磨金色體。亦有自然寶衣。鐶釧寶冠。莊嚴無量。見佛光明。得清淨眼。因前宿習。聞衆法音。觸色觸聲。無不

こと際無くして、〔終には〕三途を免れざるなり。而るに今、觀音の掌に處り、寶蓮の胎に託りなば、永く苦の海を越過え、初めて淨土に往生するなり。爾の時の歡喜の心は、言を以て宣ぶ可からず。

龍樹〔菩薩〕の『偈』に云はく、

若し人あつて命終る時　彼の國に生るゝことを得る者は
即ち無量の德を具す　是の故に我〔彌陀尊を〕歸命したてまつる

と。

第二に蓮華初開の樂

とは、行者彼の國に生れ已つて、蓮華初めて開く時、有くる所の歡樂は、前に倍すること百千なり。猶も盲者の、始めて明き眼を得たるが如く、亦は邊鄙の、忽ち王宮に入れるが如し。」自ら其の身を見れば、身既に紫磨金色の體と作り、亦自然の寶衣を有、鐶や釧、寶の冠など、莊嚴すること無量なり。佛の光明を見て、清淨の眼を得、前の宿習に因つて、衆の法をとく音

命盡時。地水先去。故緩縵無苦。」何況念佛功積。運心年深之者。臨命終時。大喜自生。所以然者。彌陀如來。以本願故。與諸菩薩。百千比丘衆。放大光明。皓然在目前。時大悲觀世音。申百福莊嚴手。擎寶蓮臺。至行者前。大勢至菩薩。與無量聖衆。同時讃嘆。授手引接。是時行者。目自見之。心中歡喜。身心安樂。如入禪定。當知草菴。瞑目之間。便是蓮臺。結跏之程。卽從彌陀佛後。在菩薩衆中。一念之頃。得生西方。極樂世界。依『觀經』『平等覺經』竝『傳記』等意。彼忉利天上。億千歲樂。大梵王宮。深禪定樂。此等諸樂。未足爲樂。輪轉無際。不免三途。而今處觀音掌。託寶蓮胎。

づ去るが故に、動き熱して苦多し。善き行の人の命盡くる時は、地〔大〕と水〔大〕と先づ去るが故に、緩縵にして苦無し。」何ぞ況や念佛の功積み、心を運ぶこと年深かりし者は、命終る時に臨んでは、大なる喜自らに生ず。然る所以は、彌陀如來、その本願を以ての故に、諸の菩薩、百千の比丘衆とともに、大光明を放ち、皓然かに目の前に在れたまふ。時に大悲の觀世音〔菩薩〕、百福をつんで莊嚴したまへる手を申べ、寶蓮の臺を擎げて、行者の前に至みたまひ、大勢至菩薩は、無量の聖衆とともに、時を同じうして讃嘆へ、手を授べて引接したまふなり。是の時行者、目のあたり自らこれを見て、心の中において歡喜す。身も心も安樂なること、禪定に入るが如くなり。當に知るべし、草菴に目を瞑づるの間は、便ち是れ蓮の臺に、結跏るの程なり。卽に彌陀佛の後に從ひ、菩薩衆の中に在つて、一念の頃に、西方の極樂世界に、生るゝことを得る。『觀經』『平等覺經』竝に『傳記』等の意に依る。彼の忉利天上の、億千歲の樂も、大梵王宮の、深き禪定の樂も、此れ等の諸の樂は、未だ樂と爲るに足らず。輪のごとく轉ずる

大文第二、欣求淨土者。極樂依正。功德無量。百劫千劫。說不能盡。算分喩分。亦非所知。然『群疑論』明三十種益。『安國鈔』標二十四樂。既知稱揚。只在人心。今擧十樂。而讃淨土。猶如一毛之渧大海。一聖衆來迎樂。二蓮華初開樂。三身相神通樂。四五妙境界樂。五快樂無退樂。六引接結緣樂。七聖衆俱會樂。八見佛聞法樂。九隨心供佛樂。十增進佛道樂也。

第一聖衆來迎樂者。凡惡業人命盡時。風火先去。故動熱多苦。善行人

大文第二に欣求淨土

とは、極樂の依と正とは、功德無量にして、百劫千劫にも、說き盡すこと能はじ。算分も喩分も、亦知る所に非ず。然れども、『群疑論』には、三十種の益を明かし、『安國鈔』には、二十四の樂を標す。既に知る、稱揚ることは只人の心に在りといふことを。今十の樂を擧げて、淨土を讃めんに、猶一毛をもつて大海を渧らすが如し。一には聖衆來迎の樂、二には蓮華初開の樂、三には身相神通の樂、四には五妙境界の樂、五には快樂無退の樂、六には引接結緣の樂、七には聖衆俱會の樂、八には見佛聞法の樂、九には隨心供佛の樂、十には增進佛道の樂なり。

第一に聖衆來迎の樂

とは、凡そ惡しき業の人の命盡くる時は、風〔大〕と火〔大〕と先

晝夜常繫念。勿思於欲境。
若欲遠離者。常作如是觀。
勤求解脫處。速超生死海。
已上。諸餘利益。可見『大論』『止観』等。

晝夜常に念を繫け　欲の境を思ふこと勿れ
若し遠ざけ離れんと欲はん者は　常に是くの如き観を作し
解脫の處を勤求むれば　速かに生死の海を超ゆ
と。已上。諸の餘の利益は、『大論』『止観』等を見る可し。

運動骨機關。危脆非堅實。
愚夫常愛樂。智者無染著。
洟唾汗常流。膿血恒充滿。
黄脂雜乳汁。腦滿髑髏中。
胸膈痰癊流。内有生熟藏。
肪膏與皮膜。五藏諸腹胃。
如是臭爛等。諸不淨同居。
罪身深可畏。此卽是怨家。
無識耽欲人。愚癡常保護。
如是臭穢身。猶如朽城廓。
日夜煩惱逼。遷流無暫停。
身城骨墻壁。血肉作塗泥。
畫彩貪瞋癡。隨處而莊飾。
可惡骨身城。血肉相連合。
常被惡知識。内外苦相煎。
難陀汝當知。如我之所說。

骨の機關を運動かすに　危脆くして堅實ならず
愚夫は常に愛し樂めども　智者は染まり著るゝこと無し
洟、唾、汗は常に流れ　膿血は恒に充ち滿てり
黄脂乳汁に雜はつて　腦は髑髏の中に滿つ
胸膈には痰癊流れ　内には生熟の藏有り
肪膏と皮膜と　五藏諸の腹胃と
是くの如く臭く爛れたる　諸の不淨と同に居む
罪の身は深く畏る可し　此れ卽ち是れ怨家なり
識らずして耽り欲る人は　愚癡にも常に保護すれど
是くの如く臭く穢れた身は　猶も朽ちたる城廓の如し
日夜煩惱に逼まられて　遷り流れて暫くも停ること無し
身の城、骨の墻壁　血肉をもつて塗泥と作し
畫彩の貪、瞋、癡　處に隨つて莊飾る
惡む可し骨身の城を　血肉と相ひ連合んで
常に惡知識を被り　内外の苦をもつて相ひ煎る
難陀よ、汝當に知れ　我が說き所が如く

乃至臨終。正念不亂。不墮惡處。如『大莊嚴論』。勸進繫念偈云。

盛年無患時。懈怠不精進。
貪營衆事務。不修施戒禪。
臨爲死所呑。方悔求修善。
智者應觀察。斷除五欲想。
精勤習心者。終時無悔恨。
心意旣專至。無有錯亂念。
智者勤捉心。臨終意不散。
不習心專至。臨終必散亂。

已上。又『寶積經』五十七偈云。

應觀於此身。筋脈更纒繞。
濕皮相裹覆。九處有瘡門。
周遍常流溢。屎尿諸不淨。
譬如舍與篅。盛諸穀麥等。
此身亦如是。雜穢滿其中。

なり、乃至臨終には、正しく念じて亂れず、惡處に墮ちざるなり。『大莊嚴論』の、念を繫くることを勸進むる偈に云ふが如し。

盛年くして患無き時　懈怠つて精進めず
但衆の事務に營して　施と戒と禪を修めざりしもの
死に呑まれんとするに臨み　方に悔いて善を修せんことを求む
智者は應に念を繫け　五欲の想を除き破すべし
精勤めて執心む者は　終る時悔恨ること無し
心意旣に專至なれば　錯亂の念有ること無し
智者勤めて心を捉ふれば　臨終には意散れず
習心むこと專至ならざるもの　臨終には必ず散亂る

と。已上。又『寶積經』の五十七〔卷〕の偈に云はく、

應に此の身を觀ずべし　筋と脈とが更に纒繞り
濕れる皮相ひ裹み覆ふ　九の處に瘡門有つて
周遍く常に流れ溢づ　屎尿や諸の不淨のものが
譬へば倉と篅とに諸の　穀麥等を盛れるが如し
此の身も亦是くの如し　雜穢其の中に滿てり

生死長夜。

問。若作無常苦空等觀。豈異小乘自調自度。

答。此觀不局小。亦通在大乘。如『法華』云。

大慈悲爲室。柔和忍辱衣。

諸法空爲座。處此爲説法。

已上。諸法空觀。尚不妨大慈悲心。何況苦無常等。催菩薩悲願乎。是故『大般若』等經。以不淨等觀。亦爲菩薩法。若欲知者。更讀經文。

問。如是觀念。有何利益。

答。若常如是。調伏心者。五欲微薄。

未だ覺めざれば、空を謂うて有と爲す。故に『唯識論』に云はく、

未だ眞の覺を得ざるときは、恒に夢の中に處る。故に佛説いて生死の長夜と爲したまふ。

と。

問ふ。若し無常、苦、空等の觀を作さば、豈小乘の自り調め自り度するに異ならんや。

答ふ。此の觀は小〔乘〕に局らず、亦通じて大乘にも在るなり。『法華』に云ふが如し。

大慈悲をば室と爲し　柔和忍辱衣をき

諸法の空をば座と爲して　此に處つて法を説け

と。已上。諸法空の觀、尚大慈悲心を妨げざるなり。何ぞ況や苦、無常等は、菩薩の悲願を催すを乎。是の故に、『大般若』等の經には、不淨等の觀を以て、亦菩薩の法と爲せり。若し知らんと欲する者は、更に經文を讀め。

問ふ。是くの如く觀念すれば、何の利益か有る。

答ふ。若し常に是くの如く、心を調へ伏むれば、五欲微薄と

受中陰身。顧屍嘆惜。猶願歷世。不言以報厚德。遂見託生南印度。大婆羅門家。乃至受胎出胎。備經苦危。荷恩荷德。嘗不出聲。洎乎受業冠婚。喪親生子。每念前恩。忍而不語。宗親戚屬。咸見恠異。年過六十有五。我妻謂曰。汝可言矣。若不語者。當殺汝子。我時惟念。已隔生世。自顧衰老。唯此稚子。因止其妻。令無殺害。遂發此聲耳。隱士曰。我之過也。此魔嬈耳。烈士感恩。悲事不成。憤恚而死。

已上略抄。夢境如是。諸法亦然。妄想夢未覺。於空謂爲有。故『唯識論』云。未得眞覺。常處夢中。故佛說爲

ことを感じて、忍んで報語へざりき。彼の人震怒つて、遂に殺害せ見れ、中陰の身を受けたり。屍を顧みて嘆惜したれども、猶願はくば、世を歷とも言はずして、以て厚德に報いんと。遂に見れば、南印度の、大婆羅門の家に託生れたり。乃至胎に受り、胎を出で、備に苦厄を經たれども、恩を荷ひ德を荷へば、嘗て聲を出さざりき。業を受け、冠婚し、親を喪ひ、子を生むに洎んでも、每に前の恩を念ひ、忍んで語はざりしかば、宗親戚屬、咸く見て恠異しめり。年六十有五を過ぎたるとき、我が妻謂つて曰く「汝、言ふ可し矣。若し語はざれば、當に汝が子を殺すべし」と。我時に惟念へらく「已に生〔を變へ〕世を隔てり、自ら顧れば衰老して、唯此の稚子のみあり、因つて其が妻を止めて、殺害すること無から令めん」と。遂に此の聲を發せる耳」と。隱士の曰く「我の過なりき。此れ魔の嬈ませし耳」と。烈士は恩を感じて、事の成らざりしを悲しみ、憤恚して死せり。

と。已上、略抄す。夢の境、是くの如し。諸法も亦然り。妄想の夢

未能馭風雲。陪仙駕。閲圖考古。更求仙術。其方曰。命一烈士。執長刀立檀隅。屏息絶言。自昏逮旦。求仙者中壇而坐。手按長刀。口誦神咒。收視反聽。遲明登仙。遂依仙方。求一烈士。數加重貽。潛行陰德。隱士曰。願一夕不聲耳。烈士曰。死尚不辭。豈徒屏息。於是設壇場受仙法。依方行事。坐待日曛。曛暮之後。各司其務。隱士誦神咒。烈士按銛刀。殆將曉矣。忽發聲叫。時隱士問曰。誡子無聲。何以驚叫。烈士曰。受命後至夜分。惛然若夢。變異更起。見昔事主。躬來慰謝。感荷厚恩。忍不報語。彼人震怒。遂見殺害。

馭つて、仙駕に陪ること能はず。圖を閲べ古を考へて、更に仙術を求む。其の方に曰く「一の烈士に命じ、長刀を執つて壇の隅に立ち、息を屏し言を絶ち、昏より旦に逮ばしめよ。仙を求むる者は、中壇に坐り、手に長刀を按り、口に神咒を誦へ、視ることを收め、聽くことを反めば、明くるを遲つて仙に登る」と。遂に仙方に依つて、一の烈士を求め、數ゝ重き賂を加へて、潛かに陰德を行ふ。隱士の曰く「願はくは、一夕聲せざること耳」と。烈士の曰く「死も尚辭せず、豈徒息を屏すことをや」と。是に於て壇場を設け、仙法を受くること、方に依つて行事ふ。坐して日の曛るゝを待つ。曛暮れたる後、各ゝ其の務を司る。隱士は神咒を誦へ、烈士は銛き刀を按る。殆んど將に曉けんとせるとき、忽ちに聲を發して叫ぶ。時に隱士問うて曰く「子を誡めたり、聲すること無かれと、何を以てか驚き叫べる」と。烈士の曰く「命を受けて後、夜分に至るに、惛然として夢の若く、變異更に起れり。昔事へし主、躬ら來つて慰め謝するを見たれども、厚恩を荷へる

已上。祇園寺無常堂四角。有頗梨鐘。鐘音中。亦說此偈。病僧聞音。苦惱卽除。得淸涼樂。如入三禪。乘生淨土。況復雪山大士。捨全身而得此偈。行者善思念。不得忽爾之。如說觀察。應當離貪瞋癡等惑業。如師子追人。不應作外道無益苦行。如癡狗追塊。

問。不淨苦無常。其義易了。現見有法體。何說爲空。

答。豈不『經』說。如夢幻化。故例夢境。當觀空義。如『西域記』云。

波羅痆斯國。施鹿林東。行二三里。有涸池。昔有一隱士。於此池側。結廬屛迹。博習伎術。究極神理。能使瓦礫爲寶。人畜易形。但

中に、亦此の偈を說く。病める僧、音を聞いて、苦惱卽ち除こり、淸涼の樂を得、三禪に入るが如くにして、淨土に垂れ生ぜりといふ。況や復た雪山〔に道を求めたる〕大士は、全身を捨てて此の偈を得たりといふ。行者、善く思念せよ。これを忽爾にすることを得ざれ。說きたまへるが如くに觀察して、應當に貪、瞋、癡等の惑業を離るゝこと、師子の人を追ふが如くすべし。外道の益無き苦行を作して、癡かなる狗の塊を追ふが如くす應からず。

問ふ。不淨、苦、無常は、其の義了り易し。〔然るに〕現に見るがごとく法體有るを、何ぞ說いて空と爲る。

答ふ。豈『經』に說かずや「夢、幻、化の如し」と。故に夢の境に例して、當に空の義を觀ずべし。『西域記』に云ふが如し。

婆羅痆斯國の、施鹿林の東、行くこと二三里にして、涸ける池有り。昔、一の隱士有つて、此の池の側に於て、廬を結んで迹を屛し、博く伎術を習うて、神理を究極め、能く瓦礫をして寶と爲し、人畜をして形を易へ使む。但し未だ風雲に

身臭如死屍。九孔流不淨。
如厠虫樂糞。愚貪身無異。
憶想妄分別。則是五欲本。
智者不分別。五欲則斷滅。
邪念生貪著。貪著生煩惱。
正念無貪欲。餘煩惱亦盡。

已上。過去彌樓揵駄佛滅後。正法滅時。陀摩尸利菩薩。求得此偈。弘宣佛法。利益無量衆生。或復『仁王經』有四非常偈。可見。若樂極略者。如『金剛經』云。

一切有爲法。如夢幻泡影。
如露亦如電。應作如是觀。

或復『大經』偈云。

諸行無常。是生滅法。
生滅々已。寂滅爲樂。

身の臭きこと死尸の如く　九の孔よりは不淨を流す
厠の蟲の糞を樂しむが如く　愚の身を貪るも異なること無し
憶想して妄りに分別はるゝは　則ち是れ五欲の本なり
智者分別はれざれば　五欲則ち斷滅す
邪念より貪著を生じ　貪著より煩惱を生ず
正念にして貪著無ければ　餘の煩惱も亦盡きる

と。已上。過去、彌樓揵駄佛の滅後、正法の滅びし時、陀摩尸利菩薩、此の偈を求め得て、佛法を弘宣め、無量の衆生を利益せりといふ。或は復た『仁王經』に四非常の偈有り、見る可し。若し極めて略を樂はゞ、『金剛經』に云ふが如し。

一切有爲の法は　夢幻泡影の如し
露の如く亦電の如し　應に是くの如き觀を作すべし

と。或は復た、『大經』の偈に云はく、

諸行は無常なり　是れ生滅の法なり
生滅滅し已つて　寂滅を樂と爲す

と。已上。祇園寺無常堂の四の角に、頗梨の鐘有つて、鐘の音の

則得清淨不動處。

已上。有百十行偈。今略抄。 若存略者。如馬鳴菩薩。
賴吒和羅伎聲唱云。

有爲諸法。如幻如化。
三界獄縛。無一可樂。
王位高顯。勢力自在。
無常既至。誰得存者。
如空中雲。須臾散滅。
是身虛僞。猶如芭蕉。
爲怨爲賊。不可親近。
如毒蛇篋。誰當愛樂。
是故諸佛。常呵此身。

已上。此中具演。無常苦空無我。聞者悟道。或復堅牢比丘壁上『偈』云。

生死不斷絕。貪欲嗜味故。
養怨入丘塚。虛受諸辛苦。

則ち清淨不動の處を得るなり

と。已上、百十行〔半〕の偈有り。今は略抄す。 若し略を存さば、馬鳴菩薩の賴吒和羅〔尊者を詠へる〕伎〔樂〕の聲に唱へて云ふが如し。

有爲の諸法は　幻の如く化の如し
三界の獄縛は　一も樂ふ可きもの無し
王位は高顯にして　勢力自在ならんも
無常既に至らば　誰か存つことを得ん
空中の雲の如し　須臾にして散滅す
是の身は虛僞なること　猶し芭蕉の如し
怨爲り賊爲り　親しみ近づく可からず
毒蛇をもりたる篋の如し　誰か當に愛樂せん
是の故に諸の佛は　常に此の身を呵したまふなり

と。已上。此の中に、具に無常、苦、空、無我を演ぶれば、聞く者道を悟る。或は復た堅牢比丘の〔石窟の〕壁の上の偈に云はく、

生死の斷絕ざるは　貪欲に嗜味るが故なり
怨を養うて丘塚に入り　唐しく諸の辛苦を受く

百千萬劫莫能得。
設復推求得少分。
更相劫奪尋散失。
清涼秋月患熖熱。
溫和春日轉寒苦。
若趣園林衆果盡。
設至清淨流變枯竭。
罪業緣故壽長遠。
逕有一萬五千歲。
受衆楚毒無空缺。
皆是餓鬼之果報。
[6]煩惱駛河漂衆生。
爲深怖畏熾燃苦。
欲滅如是諸塵勞。
應修眞實解脫諦。
離諸世間假名法。

百千萬劫にも能く得ること莫し
設ひ復た推ね求めて少分を得たりとせんも
更に相ひ劫め奪はれて尋た散り失ふ
清涼の秋の月にも熖熱を患へ
溫和の春の日にも轉た寒に苦しむ
若し園林に趣けば衆果盡き
設し清流に至れば變かに枯竭す
罪業の緣の故に壽長遠くして
經ること一萬五千の歲有り
衆の楚毒を受けて空缺ること無きは
皆是れ餓鬼の果報なり
[6]煩惱の駛き河衆生を漂はし
深き怖畏、熾燃の苦と爲る
是くの如き諸の塵勞を滅せんと欲はば
應に眞實解脫の諦を修すべし
諸世間の假名の法を離るれば

或隨經書自憶念。
如是知時以難忍。
況復己身自逕歷。
若復有人一日中。
以三百矛鑽其體。
比阿鼻地獄一念苦。
百千萬分不及其一。
[4]於畜生中苦無量。
或有繫縛及鞭撻。
或爲明珠羽角牙。
骨毛皮肉被殘害。
[5]餓鬼道中苦亦然。
諸所須欲不隨意。
飢渴所逼困寒熱。
疲乏等苦甚無量。
屎尿糞穢諸不淨。

或は經に書けるに隨つて自ら憶念し
是くの如くして知る時已に忍び難し
況や復た己が身自ら經歷らんをや
若し復た人有つて一日の中に
三百の矛を以て其の體を鑽らんに
阿鼻獄の一念の苦に比ぶれば
百千萬分の一にも及ばず
[4]畜生の中に於つても苦無量なり
或は繫ぎ縛らるゝ有り及た鞭撻たるゝあり
或は明珠や羽角牙
骨や毛皮や肉らの爲に殘害さるゝもあり
[5]餓鬼道の中の苦も亦然り
諸の須む所の欲意の隨ならず
飢渴に逼まられ寒熱に困しみ
疲れ乏く等の苦甚だ無量なり
屎尿糞穢諸の不淨すら

於二時中當眠息。
初中後夜觀生死。
宜勤求度勿空過。
譬如少鹽置恒河。
不能令水有鹹味。
微細之惡遇衆善。
消滅散壞亦如是。
[2]雖受梵天離欲娯。
還墮無間熾燃苦。
雖居天宮具光明。
後入地獄黑闇中。
[3]所謂黑繩等活地獄。
燒割剌剝及無間。
是八地獄常熾燃。
皆是衆生惡業報。
若見圖畫聞他言。

二時の中於ては眠り息む當し
初中後夜には生死を觀じ
宜しく勤めて度を求め空しく過ぐること勿るべし
譬へば少かの鹽を恒河に置るゝとも
水に鹹味を有たすこと能はざるが如く
微細の惡衆善に遇へば
消え滅び散り壞るゝこと亦是くの如し
[2]〔たとへ天界に生れて〕梵天離欲の娯を受くと雖も
還た無間〔地獄〕に墜ちて熾んに燃さるゝ苦あり
天の宮に居んで光明を具ふと雖も
後には地獄の黑闇の中に入る
[3]謂はゆる黑繩と〔等〕活地獄
燒き割き剝ぎ刺すと及び無間と
是の八地獄の常に熾んに燃ゆること
皆是れ衆生の惡しき業の報なり
若しは圖に畫けるを見〔若しは〕他の言を聞き

不放逸如是七法名聖財。
眞實無比牟尼說。
超越世間衆珍寶。
知足雖貧可名富。
有財多欲是名貧。
若豐財業增諸苦。
如龍多首益酸毒。
當觀美味如毒藥。
以智慧水灑令淨。
爲存此身雖應食。
勿貪色味長憍慢。
於諸欲染當生厭。
勤求無上涅槃道。
調和此身令安穩。
然後宜應修齊戒。
一夜分別有五時。

是くの如き七法をば聖財と名づく
眞實にして比無しと牟尼說きたまふ
世間の衆の珍寶よりも超越れたり
足りぬと知れば貧しと雖も富めりと名づく可し
財有れども欲多きときは是れを貧しと名づく
若し財業に豐かなれば諸の苦を增すこと
龍の首多きもの酸毒を益すが如し
當に美味は毒藥の如しと觀じ
智慧の水を以て灑いで淨から令むべし
此の身を存たんが爲に食ふ應しと雖も
色味を貪つて憍慢を長ふこと勿れ
諸の欲染に於ては當に厭を生じ
勤めて無上涅槃の道を求むべし
此の身を調和へて安穩ならしめ
然る後宜しく齋戒を修す應し
一夜を分別つに五の時有り

若無戒智猶禽獸。
雖處醜賤少聞見。
能修戒智名勝上。
利衰八法莫能免。
若有除斷眞無匹。
諸有沙門婆羅門。
父母妻子及眷屬。
莫爲彼意受其言。
廣造不善非法行。
設爲此等起諸過。
未來大苦唯身受。
夫造衆惡不卽報。
非如刀劍交傷割。
臨終罪相始俱現。
後入地獄嬰諸苦。
信戒施聞慧慚愧。

若し戒と智と無きものは猶し禽獸のごとし
醜賤に處して聞見少しと雖も
能く戒と智とを修むるものを勝士と名づく
利衰の八法は能く免がるゝもの莫し
若し除き斷つこと有らば眞に匹無し
諸有の沙門や婆羅門や
父母や妻子や及た眷屬の
彼の意の爲に其の言を受き
廣く不善非法の行を造すこと莫れ
設ひ此れ等の爲に諸の過を起すことあらんも
未來の大苦は唯身に受く
夫れ衆の惡を造れども卽に報いず
刀劍の交ゝ傷ひ割くが如くには非ざれども
臨終に罪相始めて俱く現れ
後地獄に入つて諸の苦に嬰る
信と戒と施と聞と慧と慚と愧と

陀迦王『偈』云。
是身不淨九孔流。
無有窮已若河海。
薄皮覆蔽似淸淨。
猶假瓔珞自莊嚴。
諸有智人乃分別。
知其虛誑便棄捨。
譬如疥者近猛焰。
初雖暫悅後增苦。
貪欲之想亦復然。
始雖樂著終多患。
見身實相皆不淨。
卽是觀於空無我。
若能修習斯觀者。
於利益中最無上。
雖有色族及多聞。

せる『偈』に云はく、
是の身は不淨九の孔より流れて
窮まり已むの有る無きこと河海の若し
薄き皮覆ひ蔽して淸淨なるに似たれども
瓔珞を假つて自ら莊嚴せるが猶し
諸の智有る人は乃ち分別し
其の虛誑なるを知つて便ち棄捨つ
譬へば疥者猛き焰に近づくに
初め暫らく悅ぶと雖も後苦を增すが如し
貪欲の想も亦復た然なり
始め樂しみ著はると雖も終には患多し
身の實相は皆不淨なりと見る
卽ち是れ空無我を觀ずるなり
若し能く斯の觀を修習むる者は
利益の中に於て最無上なり
色と族と及び多聞と有りと雖も

能聽是法者。此人亦復難。

而今適具此等緣。當知。應離苦海。往生淨土。只在今生。而我等。頭戴霜雪。心染俗塵。一生雖盡。希望不盡。遂辭白日下。獨入黃泉底之時。墮多百踰繕那。銅燃猛火中。雖呼天扣地。更有何益乎。願諸行者。疾生厭離心。速隨出要路。莫入寶山。空手而歸。

問。以何等相。應生厭心。

答。若欲廣觀。如前所說。六道因果。不淨苦等。或復龍樹菩薩。勸發禪

人趣に生るゝ者は、爪の上の土の如く、三途に墮つる
者は、十方の土の如し。

と。『法華經』に云はく、

無量無數劫にも　是の法を聞くこと亦難し
能く是の法を聽く者は　斯の人亦復たえ難し

と。而るに今適ゝ此等の緣を具せり。當に知るべし、苦海を離れて、淨土に往生す應きは、只今生に在ることを。而れども我等、頭に霜雪を戴きつゝ、心俗の塵に染み、一生盡きんとすれ雖、希望は盡きず。遂に白日の下を辭して、獨り黃泉の底に入らん時は、多百踰繕那、洞燃く猛火の中に墮ちて、天に呼ばはり地を扣くと雖も、更に何の益か有らん乎。願はくば諸の行者、疾く厭離の心を生じ、速かに出要の路に隨へよ。寶の山に入つて、手を空しくして歸ること莫れ。

問ふ。何等の相を以て、厭ふ心を生ず應きや。

答ふ。若し廣く觀ぜんと欲せば、前の所說の如く、六道の因果、不淨、苦等なり。或は復た龍樹菩薩の、禪陀迦王を勸發

唯戒及施不放逸。
今世後世爲伴侶。
[2]如是展轉。作惡受苦。徒生徒死。
輪轉無際。如『經』偈云。
一人一劫中。所受諸身骨。
常積不腐敗。如毘布羅山。
一劫尙爾。況無量劫。我等未曾修道。故徒歷無邊劫。今若不勤修。未來亦可然。[3]如是無量生死之中。得人身甚難。縱得人身。具諸根亦難。縱具諸根。遇佛敎亦難。縱遇佛敎。生信心亦難。故『大經』云。
生人趣者。如爪上土。墮三途者。
如十方土。
『法華經』云。
無量無數劫。聞是法亦難。

妻子も珍寶も及王の位も
命終る時に臨んでは隨ふ者無し
唯戒と及び施と不放逸とは
今の世と後の世との伴侶と爲る
と。[2]是くの如く展轉つて、惡を作つては苦を受け、徒らに生れては徒らに死し、輪の轉るが如く際無きこと、『經』の偈に云ふが如し。
ただ一人の一劫の中に〔捨つる〕其の身骨を積み聚めんに
常に積つて腐敗ざらば毘布羅なる山の如くならん
と。一劫すら尙爾り、況や無量劫においてをや。我等未だ曾て道を修せざりしが故に、徒らに無邊劫を歷たり。今若し勤め修せずんば、未來も亦然る可し。[3]是くの如く無量生死の中に、人身を得ること甚だ難し。縱ひ人身を得るも、諸根を具すること亦難し。縱ひ諸根を具すとも、佛敎に遇ふこと亦難し。縱ひ佛敎に遇ふとも、信心を生ずること亦難し。故に『大經』に云はく、

父母兄弟及妻子。
朋友僮僕並珍財。
死去無一來相親。
唯有黑業常隨逐。
乃至
閻羅常告彼罪人。
無有少罪我能加。
汝自作罪今自來。
業報自招無代者。
父母妻子無能救。
唯當勤修出離因。
是故應捨枷鎖業。
善知遠離求安樂。
又『大集經』偈云。
妻子珍寶及王位。
臨命終時不隨者。

車馬も財寶も他人に屬し
苦を受くるを誰か能く共に分つ者あらん
父母も兄弟も及び妻子も
朋友も僮僕も並に珍財も
死し去れば一として來つて相ひ親しむもの無し
唯黑業のみ有つて常に隨ひ逐ふ
乃至
閻羅常に彼の罪人に告ぐ
少かの罪も我能く加ふること有ること無し
汝自ら罪を作つて今自ら來る
業報自ら招いて代る者無し
父母も妻子も能く救ふもの無し
唯當に出離の因を勤め修すべし、と
是の故に應に枷鎖るゝ業を捨て
善く遠離を知うて安樂を求ふべし
と。又『大集經』の偈に云はく、

衆生。以貪愛自蔽。深著於五欲。非常謂常。非樂謂樂。彼如洗癰置睫。猶盍厭。況復刀山。火湯漸將至。誰有智者。寶玩此身乎。故『正法念經』偈云。

智者常懷憂。而似獄中囚。
愚人常歡樂。猶如光音天。

『寶積經』偈云。

種々惡業求財物。
養育妻子謂歡娛。
臨命終時苦逼身。
妻子無能相救者。
於彼三途怖畏中。
不見妻子及親識。
車馬財寶屬他人。
受苦誰能苦分者。

は合せ來つて、避け遁るゝ所無し。而るに諸の衆生は、貪愛を以て自ら蔽ひ、深く五欲に著はる。常に非ざるものを常なりと謂ひ、樂に非ざるものを樂なりと謂ふ。彼の癰を洗うて〔少かに樂なるを眞の樂と謂ひ〕、睫を〔掌に〕置いて〔眼睛に置くの苦を覺らざる愚夫〕の如し、猶盍ぞ厭はざらん。況や復た刀山、火湯は漸く將に至らんとす、誰か智有る者、此の身を寶とみ玩でん乎。故に『正法念經』の偈に云はく、

智者の常に憂を懷くこと　獄中に囚るゝに似たり
愚人の常に歡樂すること　猶し光音天の如し

と。『寶積經』の偈に云はく、

種々の惡しき業をもつて財物を求め
妻子を養育うて歡娛と謂へども
命終る時に臨んでは苦身に逼り
妻子も能く相ひ救ふ者無し
彼の三塗の怖畏しき中於は
妻子及び親識を見ず

苦。甚於地獄。故『正法念經』偈云。
天上欲退時。心生大苦惱。
地獄衆苦毒。十六不及一」。
[3]又大德天。既生之後。舊天眷屬。捨而從彼。或有威德天。不順心時。驅令出宮。不能得住。『瑜伽』。」餘五欲天。悉有此苦。上二界中。雖無如此之事。終有退沒之苦。乃至悲想。不免阿鼻。當知天上。亦不可樂。已上天道。

第七總結厭相者。謂一篋偏苦。非可耽荒。四山合來。無所避遁。而諸

ず乎。彼の馬頭山、沃焦海に墮ちしめたまふこと勿れ」と。是の言を作すと雖も、敢て救ふ者無きなり。『六波羅蜜經』〔に依る〕。當に知るべし、此の苦は地獄よりも甚しきことを。故に『正法念經』の偈に云はく、

天上より退かんと欲する時　心に大苦惱を生ず
地獄の衆の苦毒も　十六の一にも及ばず

と。[3]又大德ある天、既に生れて後は、舊の天の眷屬は、〔皆〕捨てゝ、彼に從ふ。或は威德ある天有つて、〔其の〕心に順はざる時は、驅つて宮より出し、住ることを得能はざらしむ。『瑜伽』〔に依る〕。」餘の五の欲〔界〕の天も、悉く此の苦有り。上の二界の中には、此くの如き事無しと雖も、終には退き沒する苦有り。乃至悲想〔天〕までも、阿鼻〔地獄〕を免れざるなり。當に知るべし、天上も亦樂ふ可からざることを。已上は、天道なり。

第七に總じて厭相を結ぶ

とは、謂はく一篋は偏に苦なり、耽り荒しむ可きに非ず、四山

數眴。五不樂本居。是相現時。天女眷屬。皆悉遠離。棄之如草。偃臥林間。悲泣歎曰。此諸天女。我常憐愍。云何一旦。棄我如草。我今無依無怙。誰救我者。善見宮城。於今將絕。帝釋寶座。朝謁無由。殊勝殿中。永斷瞻望。釋天寶象。何日同乘。衆車苑中。無復能見。麁澁苑內。甲冑長辭。雜林苑中。宴會無日。歡喜苑中。遊止無期。劫波樹下。白玉輭石。更無坐時。曼陀枳尼。殊勝池水。沐浴無由。四種甘露。卒難得食。五妙音樂。頓絕聽聞。悲哉此身。獨嬰此苦。願垂慈悲。救我壽命。更延少日。不亦樂乎。勿令墮彼馬頭山。沒焦海。雖作是言。無敢救者。『六波羅蜜經』。當知此

より汗出で、四には兩目數ゝ眴み、五には本の居を樂しまざるなり。是の相の現るゝ時は、天女眷屬、皆悉く遠ざかり離れて、之を棄つること草の如くにす。林の間に偃れ臥し、悲しみ泣いて歎じて曰く、「此の諸の天女を、我常に憐愍せしに、云何んぞ一旦にして、我を棄つること草の如くする。我今依るところ無く怙るところ無し、誰か我を救ふ者あらん。善見宮城は、今將に絕らんとす。帝釋の寶座は、朝謁るに由無し。殊勝殿の中には、永く瞻望ることを斷ち、釋天の寶象には、何れの日か同に乘らん。衆車苑の中には、復た能く見ること無く、麁澁〔惡〕苑の內には、甲〔介〕冑長く辭す。雜林苑の中には、宴會するに日無く、歡喜苑の中には、遊止するに期無し。劫波樹の下の、白玉の輭かな石には、更に坐る時無く、曼陀枳尼の、殊勝池の水には、沐浴するに由無し。四種の甘露は、亦得て食ふこと難く、五妙の音樂は、頓かに聽聞くことを絕つ。悲〔咄〕しき哉や、此の身獨り此の苦に嬰る。願はくば慈悲〔慈〕を垂れて、我が壽命を救〔濟〕ひ、更に少かの日を延ばしめたまはゞ、亦樂しから

忽聞斷頭。心大驚怖。遭生老病。尙不爲急。死事弗奢。那得不怖。怖心起時。如履湯火。五塵六欲。不暇貪染。已上取意。人道如此。實可厭離。

第六明天道者。有三。一者欲界。二者色界。三者無色界。其相既廣。難可具述。」且擧一處。以例其餘。如彼忉利天。雖快樂無極。臨命終時。五衰相現。一頭上華鬘忽萎。二天衣塵垢所著。三腋下汗出。四兩目

かならず、食へども哺に甘からず。頭の燃ゆるを救ふが如くにして、「日夜に走り競ひ」以て出要を求めよ。

と。又、云はく、

譬へば野干の、耳や尾、牙を失へば、詐り眠つて脫れんことを望めども、忽ち頭を斷たんと聞いて、心大に驚き怖るゝが如し。生、老、病に遭うて、尙急がはしく爲ざらんも、死の事は奢にせず、那ぞ怖れざることを得ん。怖るゝ心の起る時は、湯火を履むが如し。五塵六欲も、貪染るに暇あらず。

と。已上。人道は此くの如し、實に厭ひ離る可し。

第六に天道

を明さば、三有り。一には欲界、二には色界、三には無色界なり。其の相既に廣ければ、具に述ぶ可きこと難し。」且く一處を擧げて、以て其の餘を例せば、彼の忉利天の如きは、快樂極まり無しと雖も、命終る時に臨んで、五衰の相現る。一には頭の上の華鬘忽ちに萎み、二には天衣塵垢に著され、三には腋の下

非空非海中。非入山石間。
無有他方處。脫止不受死。
騰空。入海。隱巖。三人因緣。如『經』廣說。」當知。諸餘苦患。或有免者。無常一事。終無避處。須如說修行。欣求常樂果。如『止觀』云。
無常殺鬼。不擇豪賢。危脆不堅。難可恃怙。云何安然。規望百歲。四方馳求。貯積聚斂。聚斂未足。溘然長往。所有產貨。徒爲他有。冥々獨逝。誰訪是非。若覺無常。過於暴水。猛風掣電。山海空市。無逃避處。如是觀已。心大怖畏。眠不安席。食不甘哺。如救頭燃。以求出要。
又云。
譬如野干。失耳尾牙。詐眠望脫。

を得たる者も、亦復た是くの如し。『法句譬喩經』の偈に云ふが如し。

空にも非ず海の中にも非ず　山石の間に入るにも非ず
地の方處として　脫れて死を受けざるもの有ること無し

と。空に騰り、海に入り、巖に隱るゝ、三人の因緣は『經』に廣く說くが如し。」當に知るべし、諸の餘の苦患は、或は免るゝ者有らんも、無常の一事は、終に避くる處無きことを。須らく說きたまふが如く修業して、常樂の果を欣ひ求むべし。『止觀』に云ふが如し。

無常の殺鬼は、豪きも賢きも擇ばず、危脆くして堅からず、恃怙む可きこと難し。云何ぞ安然として、百歲を規望み、四方に馳せ求めて、貯へ積み聚め斂らん。聚め斂ること未だ足らざるうちに、溘然に長く往かば、所有てる產貨は、徒らに他の有と爲り、冥々として獨り逝く。誰か是非を訪ぬるものあらん。〔乃至〕若し無常を覺らば、暴き水、猛き風、掣る電よりも過ぎたり。山や海、空や市に、逃れ避くる處も無し、

と。此の如く觀じ已らば、心大に怖畏る。眠れども席に安ら

已上。設雖有長壽業。終不免無常。」設
雖感富貴報。必有衰患期。如『大
經』偈云。
一切諸世間。生者皆歸死。
壽命雖無量。要必有終盡。
夫盛有必衰。合會有別離。
壯年不久停。盛色病所侵。
命爲死所呑。無有法常者。
又『罪業應報經』偈云。
水渚不常滿。火盛不久燃。
日出須臾沒。月滿已復缺。
尊榮高貴者。無常速過是。
當念懃精進。頂禮無上尊。
已上。」非唯諸凡下。有此怖畏。登仙得
通者。亦復如是。如『法句譬喩經』
偈云。

譬へば栴陀羅の　牛を驅つて屠所に就くに
歩々死地に近づくが如し　人の命は是れよりも疾し
と。已上。設ひ長壽の業有りと雖も、終には無常を免れざるなり。」
設ひ富貴の報を感ずと雖も、必ず衰へ患むの期有り。『大經』の
偈に云ふが如し。
一切諸の世間において　生ける者は皆死に歸す
壽命無量なりと雖も　要必ず終盡ること有り
夫れ盛んなるものは必ず衰ふること有り　合ひ會へるものは別れ離るゝこと有り
壯年も久しく停らず　盛色も病に侵さる
命は死の爲に呑まれ　法として常なる者有ること無し
と。又『罪業應報經』の偈に云はく、
水流るれば常に滿たず　火盛んなれば久しく燃えず
日出づれば須臾にして沒り　月滿つれば已に復た缺く
尊榮豪貴の者も　常無きこと復た是れに過ぎたり
念うて當に懃め精進んで　無上尊を頂禮すべし
と。已上。」唯諸の凡下のみ、此の怖畏有るに非ず。仙と登つて通

坐臥。無不皆苦。若長時行。不暫休息。是名爲外苦。住及坐臥。亦復皆苦。

略抄。諸餘苦相。眼前可見。不可俟說。

三無常者。『涅槃經』云。

人命不停。過於山水。今日雖存。明亦難保。云何縱心。令住惡法。

『出曜經』云。

此日已過。命卽減少。如小水魚。斯有何樂。

『摩耶經』偈云。

譬如栴陀羅。驅牛至屠所。歩々近死地。人命亦如是。

に逼切る。此の五陰の身は、一々の威儀、行、住、坐、臥、皆苦ならずといふこと無し。若し長時に行いて、暫くも休息せざれば、是れを名づけて苦と爲す。住るも、及び坐るも、臥すも、〔各長時なれば〕、亦復た皆苦なり。

と。略抄す。諸の餘の苦相は、眼前に見る可ければ、說くことを俟つ可からず。

三に無常

とは、『涅槃經』に云はく、

人の命の停らざること、山の水よりも過ぎたり。今日存りと雖も、明亦保ひ難し。云何ぞ心を縱にして、惡法に住せしめん。

と。『出曜經』に云はく、

此の日已に過ぎぬれば　命則ち隨つて減ず
水少き魚の如し　斯れ何の樂か有らん

と。『摩耶經』の偈に云はく、

二苦者。此身從初生時。常受苦惱。如『寶積經』說。
若男若女。適生墮地。或以手捧。或衣承接。或冬夏時。冷熱風觸。受大苦惱。如生剝牛。觸於墻壁。取意。長大之後。亦多苦惱。『同經』說。受於此身。有二種苦。所謂眼耳鼻舌。咽喉牙齒。胸腹手足。有諸病生。如是四百四病。逼切其身。名爲內苦。復有外苦。所謂或在牢獄。撾打楚撻。或劓耳鼻。及削手足。諸惡鬼神。而得其便。復爲蚊虻。蜂等毒虫。之所唼食。寒熱・飢渴。風雨竝至。種々苦惱。逼切其身。此五陰身。一々威儀。行住

二に苦

とは、此の身初めて生るゝ時より、常に苦惱を受く。『寶積經』に說くが如し。

若しは男、若しは女にして、適ゝ生れて地に墮つるに、或は手を以て捧げ、或は衣をもつて承け接り、或は冬夏の時に、冷熱の風觸るゝに、大苦惱を受くること、牛を生剝にして、墻壁に觸れしむるが如し。

と。取意す。長大して後、亦苦惱多し。『同經』に說く、此の身を受くるに、二種の苦有り。謂はゆる眼、耳、鼻、舌、咽喉、牙齒、胸、腹、手、足に、諸の病生ずること有り。是くの如き四百四病、其の身に逼切るを、名づけて內苦と爲す。復た、外苦有り。謂はゆる、或は牢獄に在つて、撾き打ち楚撻たれ、或は耳鼻を劓がれ、及び手足を削らる。諸の惡鬼神は、而も其の便を得、復た蚊、虻、蜂等の毒蟲の爲に、唼ひ食はる。寒熱、飢渴、風雨、竝至つて、種々の苦惱、其の身

有智者。更生樂著。故『止觀』云。
未見此相。愛染甚强。若見此已。欲心都罷。懸不忍耐。如不見糞。猶能噉飯。忽聞臭氣。卽便嘔吐。
又云。
若證此相。雖復高眉翠眼。皓齒丹脣。如一聚屎。粉覆其上。亦如爛屍。假著繒彩。尙不眼見。況當身近。雇鹿杖自害。況歛抱婬樂。如是想者。是婬欲病之大黃湯。

ることを。愛する所の男女も、皆亦是くの如し。誰か智有る者、更に樂著を生ぜん。故に『止觀』に云はく、

未だ此の相を見ざるときは、愛染甚だ强けれども、若し此れを見已れば、欲心都て罷み、懸かに忍ぶに耐へざること、糞を見ざるときは、猶能く飯を噉へども、忽ち臭氣を聞がば、卽ち嘔吐するが如し。

と。又云はく、

若し此の相を證らば、復た高き眉、翠き眼、皓き齒、丹き脣と雖も、一聚の屎に、粉をもつて其の上を覆へるが如く、亦爛れたる屍に、假りに繒彩〔綵〕を著せたるが如し。尙眼をもつてさへ見〔視〕ず、況や當に身をもつて近づくべけんや。鹿杖〔梵士〕を雇うて自害せる〔比丘〕あり、況や歛ひ抱きあつて婬れ樂ばんや。是くの如くに想ふは、是れ婬欲の病の大黃湯なり。

と。

水洗。不可令淨潔。外雖施端嚴相。內唯裹諸不淨。猶如畫瓶而盛糞穢。取『大論』『止觀』等意也。故『禪經』偈云。

　知身臭不淨。　愚者故愛惜。
　外視好顏色。　不觀內不淨。

已上。擧身不淨。5況復命終之後。捐捨塚間。經一二日。乃至七日。其身膖脹。色變青瘀。臭爛皮穿。膿血流出。鵰鷲鵄梟。野干狗等。種々禽獸。齸掣食噉。禽獸食已。不淨潰爛。有無量種蟲蛆。雜出臭處。可惡過於死狗。乃至成白骨已。支節分散。手足髑髏。各在異處。風吹日曝。雨灌霜封。積有歲年。色相變異。遂腐朽碎末。與塵土相和。已上。究竟不淨。見『大般若』『止觀』等。」當知此身。始終不淨。所愛男女。皆亦如是。誰

なり。海の水を傾けて洗ふとも、淨潔ならしむ可からず。外に端嚴の相を施すと雖も、內には唯諸の不淨を裹むこと、猶し畫ける瓶に糞穢を盛れるが如し。『大論』『止觀』等より取意す。故に、『禪經』の偈に云はく、

　身は臭くして不淨と知れど　愚者は故に愛惜す
　外に好き顏色を視て　內の不淨をば觀ざるなり

と。已上は、身(體)の不淨を擧ぐ。5況や復た命終つて後は、塚の間に捐捨つ。一二日、乃至七日を經れば、其の身膖脹れて、色靑瘀に變ず。臭く爛れて皮穿れ、膿血流れ出づ。鵰、鷲、鵄、梟、野干、狗等、種々の禽獸、齸み掣いて食ひ噉む。禽獸食ひ已つて、不淨潰れ爛るれば、無量種の蟲蛆有つて、臭き處に雜はり出づ。惡む可きこと、死せる狗よりも過ぎたり。乃至白骨と成り已れば、支節分散して、手、足、髑髏、各異なる處に在り。風吹き日曝し、雨灌ぎ霜封じて、積むこと歲年有れば、色相ひ變異る。遂に腐り朽ち碎末となつて、塵土と相ひ和すなり。已上は、究竟不淨なり『大般若』『止觀』等に見ゆ。」當に知るべし、此の身は始終不淨な

舌。五百戸依左邊。食左邊。右邊亦然。四戸食生藏。二戸食熟藏。四戸依小便道。食尿而住。四戸依大便道。食糞而住。乃至一戸名黑頭。依脚食脚。如是八萬。依止此身。晝夜食噉。令身熱惱。心有憂愁。衆病現前。無有良醫。能爲除療。

出第五十五七略抄。『僧伽吒經』說。人將死時。諸虫怖畏。互相噉食。受諸苦痛。男女眷屬。生大悲惱。諸虫相食。唯有二虫。七日鬪諍。過七日已。一虫命盡。一虫猶存。

已上。虫蛆。4又縱食上饍衆味。逕宿之間。皆爲不淨。譬如糞穢。大小倶臭。此身亦爾。從少至老。唯是不淨。傾海

〔有り〕、左邊に依つて、左邊を食ふ。右邊も亦然り。四戸は生藏を食ひ、二戸は熟藏を食ふ。四戸は小便道に依つて、尿を食つて住み、四戸は大便道に依つて、糞を食つて住む。乃至一戸を黑頭と名づく。脚に依つて、脚を食ふ。是くの如き八萬〔戸の蟲〕、此の身に依り止つて、晝夜に食ひ噉み、身をして熱だ惱ましむ。〔復た〕心に憂愁有つて、衆の病現前る。良醫も、能く爲に除き療すこと有ること無し。

と。第五十五と七とに出でたるを、略抄す。『僧伽吒經』に說く、

人の將に死なんとする時、諸の蟲怖畏れて、互に相ひ噉み食ふに、諸の苦痛を受く。男女眷屬、大悲惱を生じて、〔迭に相ひ食ひ噉む。〕諸の蟲相ひ食つて、唯二の蟲有り、七日のあひだ鬪ひ諍ふ。七日を過ぎ已れば、一の蟲命盡くれども、一の蟲猶存す。

と。已上は、蟲蛆なり。4又縱ひ上饍〔饌〕の衆味を食ふとも、宿を經る間には、皆不淨と爲る。譬へば、糞穢の大小〔多少〕倶に臭きが如し。此の身も、亦爾なり。少きより老に至るまで、唯是れ不淨

在中。其色黃。膀胱爲津液之府。亦爲腎府。一斗尿在中。其色黑。三膲爲中瀆之府。如此等物。縱橫分布。大小二腸。赤白交色。十八周轉。如毒蛇蟠。已上。腹中府藏。又從頂至趺。從髓至膚。有八萬戶虫。四頭四口。九十九尾。形相非一。一一戶。復有九萬細虫。小於秋毫。『禪經』『次第禪門』等。『寶積經』云。初出胎時。經於七日。八萬戶蟲。從身而生。縱橫食噉。有二戶虫。名爲舐髮。依髮根住。常食其髮。二戶虫名繞眼。依眼住。常食眼。四戶虫。依腦食腦。一戶名稻葉。依耳食耳。一戶名藏口。依鼻食鼻。二戶。一名遙擲。二名遍擲。依脣食脣。一戶名針口。依舌食

三升の糞中に在つて、其の色黃なり。膀胱を津液の府と爲す、亦腎の府たり。一斗の尿中に在つて、其の色黑し。三膲を中瀆の府と爲す。此くの如き等の物、縱橫に分布せり。大小の二腸は、赤く白く色を交へて、十八周轉すること、毒蛇の蟠るが如し。已上は、腹の中の府藏なり。又頂より趺に至り、髓より膚に至るに、八萬戶の蟲有り。四の頭、四の口、九十九の尾あつて、形相は一に非ず。一々の戶に、復た九萬の細蟲有つて、秋毫よりも小さし。『禪經』『次第禪門』等に依る。『寶積經』に云はく、

初めて胎を出る時、七日を經て、八萬戶の蟲、身より生れて、縱橫に食ひ噉む。二戶の蟲有り、名づけて舐髮と爲す。髮の根に依つて住み、常に其の髮を食ふ。二戶の蟲を繞眼と名づく。眼に依つて住み、常に眼を食ふ。四戶の蟲は、腦に依つて、腦を食ふ。一戶を稻葉と名づく。耳に依つて、耳を食ふ。一戶を藏口と名づく。鼻に依つて、鼻を食ふ。二戶あり、一を遙擲と名づけ、二を遍擲と名づく。脣に依つて、脣を食ふ。一戶を針口と名づく。舌に依つて、舌を食ふ。〔復た〕五百戶

如是之身。一切臭穢。自性殨爛。誰當於此。愛重憍慢。『寶積經』九十六。」[1]或云。九百臠覆其上。九百筋連其間。有三萬六千之脈。三升之血。在中流注。有九十九萬之毛孔。諸汗常出。九十九重之皮。而裹其上。已上。身中骨肉等。[2]又腹中有五藏。葉々相覆。靡々向下。狀如蓮華。孔竅空疎。內外相通。各有九十重。肺藏在上。其色白。肝藏其色青。心藏在中央。其色赤。脾藏其色黃。腎藏在下。其色黑。又有六府。謂大腸爲傳送之府。亦爲肺府。長三尋半。其色白。膽爲清淨之府。亦爲肝府。其色青。小腸爲受盛之府。亦爲心府。長十六尋。其色赤。胃爲五穀之府。亦爲脾府。三升糞

をもつて盈ち滿てり。七重の皮をもつて裹み、六味をもつて長養ふこと、猶し火を祠るが如し、呑受して厭くこと無し。是くの如き身は、一切臭く穢れて、自性殨〔潰〕れ爛れり。誰か當に此〔の身〕に於て、愛重し憍慢せん。『寶積經』九十六〔に依る〕。」[1]或は云ふ、九百の臠其の上を覆ひ、九百の筋其の間を連ぬ。三萬六千の脈有つて、三升の血、中に在つて流れ注ぐ。九十九萬の毛孔有つて、諸の汗常に出づ。九十九重の皮は、而も其の上を裹む、と。已上は、身中の骨肉等なり。[2]又腹の中には五藏有つて、葉々相ひ覆ひ、靡々あつて下に向ふこと、狀蓮の華の如し。孔竅は空疎にして、內外相ひ通ず。各〻九十〔九〕重有り。肺藏は上に在つて、其の色白く、肝藏は其の色青し。心藏は中央に在つて、其の色赤く、脾藏は其の色黃なり。腎藏は下に在つて、其の色黑し。又六府有り。謂はく、大腸を傳送の府と爲す、亦肺の府たり。長さ三尋半にして、其の色白し。膽を清淨の府と爲す、亦肝の府たり。其の色青し。小腸を受盛の府と爲す、亦心の府たり。長さ十六尋にして、其の色赤し。胃を五穀の府と爲す、亦脾の府たり。

骨。膝骨拄胜骨。胜骨拄髖骨。髖骨拄腰骨。腰骨拄背骨。背骨拄肋骨。復背骨拄項骨。項骨拄頷骨。頷骨拄牙齒。上有髑髏。復項骨拄肩骨。肩骨拄臂骨。臂骨拄腕骨。腕骨拄掌骨。掌骨拄指骨。如是展轉。次第鏁成。〔『大經』〕」三百六十骨。聚所成 如朽壞舍。諸節支持。以四細脈。周帀彌布。五百分宍。猶如泥塗。六脈相繫。五百筋纒。七百細脈。以爲編絡。十六麁脈。鉤帶相連。有二肉繩。長三尋半。於內纒結。十六腸胃。繞生熟藏。二十五氣脈。猶如窓隟。一百七關宍。如破碎器。八萬毛孔。如亂草覆。五根七竅。不淨盈滿。七重皮裹。六味長養。猶如祠火。呑受無厭。

を拄へ、踝の骨は蹲の骨を拄へ、蹲の骨は膝の骨を拄へ、膝の骨は胜〔髀〕の骨を拄へ、胜の骨は髖の骨を拄へ、髖の骨は腰の骨を拄へ、腰の骨は背の骨を拄へ、背の骨は肋の骨を拄へ、復た背の骨は項の骨を拄へ、項の骨は頷の骨を拄へ、頷の骨は牙齒を拄へ、上に髑髏有り。復た項の骨は肩の骨を拄へ、肩の骨は臂の骨を拄へ、臂の骨は腕の骨を拄へ、腕の骨は掌の骨を拄へ、掌の骨は指の骨を拄ふ。是くの如く展轉つて、次第に鏁のごとく成れり。〔『大經』に依る〕。」三百六十の骨の、聚つて成ずる所にして、朽ち壞れたる舍の如し。諸の節をもつて支へ持ち、四の細き脈を以て、周り匝り彌く布ふ。五百分の宍〔肉〕は、猶し泥塗の如く、六の脈相ひ繫ぎ、五百の筋纒ふ。七百の細き脈は、以て編み絡ることを爲し、十六の麁き脈は、鉤り帶つて相ひ連ぬ。二の肉の繩有り、長さ三尋半にして、內に於て纒ひ結ぶ。十六の腸胃は、生熟藏を繞る。二十五の氣脈は、猶し窓隟の如く、一百七の關宍〔穴〕は、破れ碎けたる器の如し。八萬の毛孔は、亂れたる草をもつて覆へるが如く、五根七竅は、不淨

已上諸文。散在經論。

第四明阿修羅道者。有二。根本勝者。住須彌山北。巨海之底。支流劣者。在四大州間。山巖之中。」[1]雲雷若鳴。謂是天鼓。怖畏周章。心大戰悼。[2]亦常爲諸天。之所侵害。[3]或破身體。或夭其命。[4]又日日三時。苦具自來逼害。種々憂苦。不可勝說。

第五明人道者。略有三相。應審觀察。一不淨相。二苦相。三無常相。

一不淨者。凡人身中。有三百六十之骨。節々相拄。謂指骨拄足骨。足骨拄踝骨。踝骨拄蹲骨。蹲骨拄膝

第四に阿修羅道

を明さば、二有り。根本の勝れたる者は、須彌山の北、巨海の底に住み、支流の劣れる者は、四大州の間、山巖の中に在り。」[1]雲雷若し鳴れば、是れ天の鼓なりと謂うて、怖畏れ周章て、心大に戰き悼む。[2]亦常に諸天の爲に侵害せられ。[3]或は身體を破り、或は其の命を夭す。[4]又日日三時に、苦具自ら來つて逼り害し、種々の憂ひ苦しみは、勝げて說く可からず。

第五に人道

を明さば、略して三の相有り、應に審かに觀察すべし。一には不淨の相、二には苦の相、三には無常の相なり。

一に不淨

とは、凡そ人の身の中には、三百六十の骨有つて、節と節と相ひ拄へたり。謂はく、指の骨は足の骨を拄へ、足の骨は踝の骨

水性之屬。爲漁者所害。諸陸行之類。爲獵者所害。[4]若如象馬牛驢。駱駝騾等。或鐵鉤斷其腦。或穿鼻中。或轡繫首。身常負重。加諸杖棰。但念水草。餘無所知。[5]又蚰蜒鼠狼等。闇中而生。闇中死。[6]蟣蝨蚤等。依人身生。還依人死。[7]又諸龍衆。受三熱苦。晝夜無休。[8]或復蟒蛇。其身長大。聾騃無足。宛轉腹行。爲諸小虫。之所唼食。」或復有如一毛百分。或如窓中遊塵。或如十千由旬。」如是諸畜生。或經一時頃。或七時頃。或有一劫。乃至百千萬億劫。受無量苦。或遇諸違緣。數被殘害。此等諸苦。不可勝計。」愚癡無慚。徒受信施。他物不償者。受此報。

けり。[3]況や復た諸の水性の屬は、漁者の爲に害せられ、諸の陸行の類は、獵者の爲に害せらる。[4]若し象、馬、牛、驢、駱駝、騾等の如きは、或は鐵の鉤をもつて其の腦を斷ち、或は鼻の中を穿ち、或は轡をもつて首に繫ぎ、身は常に重を負うて、諸の杖棰を加へらる。但だ水草を念うて、餘は知るところ無し。[5]又蚰蜒、鼠狼等は、闇の中に生れて、闇の中に死す。[6]蟣蝨、蚤等は、人の身に依つて生れ、還た人に依つて死す。[7]又諸の龍の衆は、三熱の苦を受けて、晝夜休むこと無し。[8]或は復た蟒蛇は、其の身長大なれども、聾騃にして足無く、宛轉と腹行して、諸の小蟲の爲に唼ひ食はる。」或は復た一毛の百分の如きもの、或は窓中の遊塵の如きもの、或は十千由旬の如きもの有り。」是くの如き諸の畜生は、或は一時頃、或は七時頃を經、或は一劫乃至百千萬億劫に、無量の苦を受くる有り。或は諸の違緣に遇うて、數〻殘害せらる。此れ等の諸の苦は、勝げて計ふ可からず。」愚癡無慚にして、徒らに信施を受けて、他の物を償はざりし者、此の報を受く。　已上の諸文は、『經』『論』に散在す。

而不能用鬼。謂適逢少食。而食噉者。變作猛焰。焼身而出。『瑜伽論』。」以人間一月。爲一日夜。成月年。壽五百歳。」『正法念經』云。

慳貪嫉妬者。墮餓鬼道。

第三明畜生道者。其住處有二。根本住大海。支末雜人天。」別論有三十四億種類。總論不出三。一者禽類。二者獸類。三者虫類。」如是等類。[1]强弱相害。[2]若飲若食。未曾暫安。晝夜之中。常懷怖懼。[3]況復諸

[16]或は内の障に依つて、食ふことを得ざる鬼有り。謂はく、口は針の孔の如く、腹は大なる山の如し。縱ひ飲食に逢ふとも、之を噉ふに由無し。[17]或は内外の障無けれども、用ふること能はざる鬼有り。謂はく、適少かの食に逢つて食ひ噉めば、變じて猛焰と作り、身を燒いて出づるなり。『瑜伽論』[に依る]。」人間の一月を以て、一日夜と爲して月年を成し、壽五百歳なり。」『正法念經』に云はく、

慳貪と嫉妬の者、餓鬼道に墮つ。

と。

第三に畜生道

を明さば、其の住處に二有り。根本は大海に住み、支末は人天に雜る。」別して論ずれば、三十四億の種類有れども、總じて論ずれば、三を出でず。一には禽類、二には獸類、三には蟲類なり。」是くの如き等の類、[1]强弱相害す。[2]若しは飲み、若しは食つて、未だ曾て暫くも安らかならず。晝夜の中に、常に怖懼を懷

有鬼。生在樹中。逼迮押身。如賊木虫。受大苦惱。昔伐陰涼樹。及伐衆僧園林之者。受此報。『正法念經』。[10]復有鬼。頭髪垂下。遍纒身體。其髪如刀。刺切其身。或變作火。周匝焚燒。[11]或有鬼。晝夜各生五子。隨生食之。猶常飢乏。『六波羅蜜經』。[12]復有鬼。一切之食。皆不能噉。唯自破頭。取腦而食。[13]或有鬼。火從口出。飛蛾沒火。以爲飮食。[14]或有鬼。食糞涕濃血。洗器遺餘。『大論』。[15]又有依外障。不得食鬼。謂飢渴常急。身體枯竭。適望淸流。走向趣彼。有大力鬼。以杖打。或變作火。或悉枯涸。[16]或有依內障。不得食鬼。謂口如針孔。腹如大山。縱逢飮食。無由噉之。[17]或有無內外障。

り、常に塚の間に至り、燒けたる屍火を噉ふに、猶足ること能はず。昔、刑獄に典主して、人の飮食を取〔奪〕りし者、此の報を受く。[9]或は鬼有り、生れて樹の中に在り。逼迮して身を押〔壓〕さるゝこと、賊木蟲の如くに、大苦惱を受く。昔、陰涼しき樹を伐り、及び衆僧園の林を伐りし者、此の報を受く。『正法念經』「に依る」。[10]復た鬼有り、頭髪垂れ下つて、遍く身體を纒ひ、其の髪は刀の如くにして、其の身を刺し切る。或は變じて火と作り、周り匝つて焚燒す。[11]或は鬼有り、晝夜に各〻五子を生む。生むに隨つて之を食へども、猶常に飢ゑて乏し。『六波羅蜜經』「に依る」。[12]復た鬼有り、一切の食は、皆噉ふこと能はず。唯自ら頭を破り、腦を取つて食ふ。[13]或は鬼有り、火を口より出し、飛べる蛾の火に沒するを以て飮食と爲す。[14]或は鬼有り、糞、涕、膿血、器を洗へる遺餘を食ふ。『大論』「に依る」。[15]又、外の障に依つて食ふことを得ざる鬼有り。謂はく、飢ゑ渴くこと常に急にして、身體枯れ竭く。適〻淸流を望み、走り向つて彼に趣けば、大力の鬼有つて、杖を以て打つ。或は變じて火と作り、或は悉く枯れ涸く。

趣河邊。若人渡河。脚足之下。遺落餘水。速疾接取。以自活命。或人掬水。施亡父母。則得少分。命得存立。若自取水。守水諸鬼。以杖撾打。昔沽酒加水。或沈蚓蛾。不修善法者。受此報。[6]或有鬼。名悕望。世人爲亡父母。設祀之時。得而食之。餘悉不能食。若人勞而得小物。誑惑取用之者。受此報。[7]或有鬼。生海渚中。無有樹林河水。其處甚熱。以彼冬日。比人間夏。過踰千倍。唯以朝露。而自活命。雖住海渚。見海枯竭。昔行路之人。病苦疲極。欺取其賣。與直薄少之者。受此報。[8]或有鬼。常至塚間。噉燒火屍。猶不能足。昔典主刑獄。取人飲食者。受此報。[9]或

を覆ひ、目見るところ無くして、河の邊に走り趣くに、若し人の河を渡るあつて、脚足の下より、遺落る餘り水あれば、速かに疾く接し取つて、以て自ら活命す。或は人の水を掬んで、亡き父母に施すあらば、則ち少分を得て、命存立することを得。若し自ら水を取らんとすれば、水を守る諸の鬼、杖を以て撾り打つ。昔、酒を沽るに水を加へ、或は蚓、蛾を沈めて、善き法を修せざりし者、此の報を受く。[6]或は鬼有り、悕〔希〕望と名づく。世の人の亡き父母の爲に、祀を設くる時、得て之を食ふ。餘は、悉く食ふこと能はず。昔、人の勞して小〔少〕かの物を得たるを、誑かし惑はしてこれを取り用ひたる者、此の報を受く。[7]或は鬼有り、海の渚の中に生る。樹の林、河の水有ること無く、其の處甚だ熱し。彼の冬の日を以て、人間の夏に比ぶるに、過ぎ踰えたること千〔十〕倍なり。唯朝の露を以て、自ら活命す。海の渚に住むと雖も、〔惡業を以ての故に〕海は枯竭せりと見る。昔、路を行く人、病苦に疲れ極まれるに、其の賈〔價〕を欺き取つて、直を與ふること薄少なりし者、此の報を受く。[8]或は鬼有

鑊身。其身長大。過人兩倍。無有面目。手足猶如鑊脚。熱火滿中。焚燒其身。昔貪財屠殺之者。受此報。[2]或有鬼。名食吐。其身廣大。長半由旬。常求嘔吐。困不能得。昔或丈夫。自噉美食。不與妻子。或婦人。自食不與夫子。受此報。[3]或有鬼。名食氣。世人依病。水邊林中設祭。嗅此香氣。以自活命者。昔於妻子等前。獨噉美食者。受此報。[4]或有鬼。名食法。於嶮難處。馳走求食。色如黑雲。涙流如雨。若至僧寺。有人咒願。說法之時。因此得力活命。昔爲貪名利。不淨說法之者。受此報。[5]或有鬼。名食水。飢渴燒身。周障求水。困不能得。長髮覆面。目無所見。走

[1]或は鬼有り、鑊身と名づく。其の身長大にして、人に過ぎたること兩倍なり。面も目も有ること無く、手足は猶し鑊の脚の如し。熱火中に滿ちて、其の身を焚燒す。昔、財を貪る〔が故に〕、屠り殺せる者、此の報を受く。[2]或は鬼有り、食吐と名づく。其の身廣大にして、長半由旬なり。常に嘔吐を求むるに、困んで得ること能はず。昔、或は丈夫自ら美食を噉つて、妻子に與へず、或は婦人自ら食つて、夫の子に與へざりしもの、此の報を受く。[3]或は鬼有り、食氣と名づく。世の人の病めるに依つて、水の邊、林の中に、祭を設くるに、此の香氣を嗅いで、以て自ら活命す。昔、妻子等の前に於て、獨り美食を噉へる者、此の報を受く。[4]或は鬼有り、食法と名づく。嶮難の處に於て、馳り走つて食を求む。色は黑雲の如く、涙の流るゝこと雨の如し。若し僧寺に至るに、人の咒願する有つて、法を說く時は、此れに因つて力を得て活命す。昔、名利を貪るが爲に、不淨說法したる者、此の報を受く。[5]或は鬼有り、食水と名づく。飢渴身を燒き、周慞て水を求むるに、困んで得ること能はず。長き髮面

燒燃鐵丸。置其口中。餘如前說。若彼答言。我今唯爲渇苦所逼。爾時獄卒。便卽洋銅。以灌其口。由是因緣。長時受苦。乃至先世所造。一切惡業。能感那落迦。惡不善業未盡。未出此中。若刀劍刃路。若刃葉林。若鐵設柆末梨林。總之爲一。故有四園。已上。『瑜伽』竝『倶舍』意。一々地獄。四門之外。各有四園。合爲十六。不同『正法念經』。八大地獄。十六別處。名相各別。」復有頞部陀等。八寒地獄。具如經論。不遑述之。

第二明餓鬼道者。住處有二。一者在地下五百由旬。閻魔王界。二者在人天之間。」其相甚多。今明少分。或身長一尺。或身量如人。或千踰繕那。或如雪山。『大集經』。或有鬼。名

一切の、能く那落迦を感ずる惡不善の業未だ盡きざれば、未だ此の中を出でず。若しは刀劍刃路、若しは刃葉の林、若しは鐵設柆末梨の林、これを總べて一と爲すが故に、四園有るなり。」と。已上は、『瑜伽』竝に『倶舍』の意なり。一々の地獄、四門の外に、各〻四園有れば、合して十六〔の別處〕と爲す。『正法念經』の八の大地獄と、十六の別處との名相各別なるに同じからず。」復た、頞部陀等の八の寒地獄有り、具に『經』『論』に〔說くが〕如し。〔今〕之を述るに遑あらず。

第二に餓鬼道

を明さば、住處に二有り。一は地の下五百由旬に在り、閻魔王界なり。二は人天の間に在り。」其の相、甚だ多し。今少分を明さば、或は身の長一尺なるあり、或は身の量人の如きあり、或は千〔百〕踰繕那なるあり、或は雪山の如きあり。『大集經』に依る〕。

因緣。貫刺其身。遍諸支節。爾時便有鐵觜大烏。上彼頭上。或上其髆。探啄眼精。而噉食之。4從鐵設拉末梨林無間。有廣大河。沸熱灰水。彌滿其中。彼諸有情。尋求舍宅。從彼出已。來墮此中。猶如以豆置之大鑊。燃猛熾火。而煎煮之。隨湯騰涌。周旋廻復。於河兩岸。有諸獄卒。手執杖索。及以大網。行烈而住。遮彼有情。不令得出。或以索羂。或以網漉。復置廣大熱鐵地上。仰彼有情。而問之言。汝等今者。欲何所須。如是答言。我等今者。竟無覺知。然爲種々飢苦所逼。時彼獄卒。卽以鐵鉆。鉆口令開。便以極熱

林より、無間に廣き大河有り、沸ぎれる熱灰の水、其の中に彌ち滿つ。彼の諸の有情、舍宅を尋ね求めんとして、彼より出で已つて、來つて此の中に墮つ。猶し豆を以て、之を大なる鑊に置き、猛く熾んなる火を燃いて、之を煎り煮るが如し。湯の騰り湧くに隨つて、周旋り廻復る。河の兩岸に於て、諸の獄卒有り、手に杖索、及び大網を執つて、行烈〔列〕して住ち、彼の有情を遮つて、出づることを得しめず。或は索を以て羂け、或は網を以て漉ふ。復た廣き大熱鐵の地の上に置き、彼の有情を仰けて、之に問うて言ふ「汝等、今者何の所須をか欲する」と。是くの如く答へて言ふ「我等、今者竟に覺知すること無し。然れども種々の飢苦の爲に逼まらる」と。時に彼の獄卒、卽ち鐵の鉆〔鉗〕を以て、口を鉆んで開かしめ、便ち極熱燒燃の鐵丸を以て、其の口の中に置く。餘は、前に說けるが如し。若し彼答へて、「我今唯渴苦の爲に逼まらる」と言はば、爾の時獄卒、便ち洋ぎれる銅を以て其の口に灌ぐ。是の因緣に由つて、長時に苦を受く。乃至、先の世に造れる

糞泥內。多有諸虫。名孃矩吒。穿皮入肉。斷筋破骨。取髓而食。[3]次屍糞泥無間。有利刀劍。仰刃爲路。彼諸有情。爲求舍宅。從彼出已。遊行至此。下足之時。皮肉筋血。悉皆消爛。擧足之時。還復如故。次刀劍刃路無間。有刃葉林。彼諸有情。爲求舍宅。從彼出已。往趣彼陰。纔坐其下。微風逐起。刃葉墮落。斫截其身一切支節。便卽躃地。有黑黧狗。摣掣背胎。而噉食之。從此刃葉林無間。有鐵設拉末梨林。彼諸有情。爲求舍宅。便來趣之。遂登其上。當登之時。一切刺鋒。悉迴向下。欲下之時。一切刺鋒。復廻向上。由此

を斷つて骨を破り、髓を取つて食ふ。[3]次に屍糞泥の無間に、利き刀劍有り、刃を仰けて路と爲す。彼の諸の有情、舍宅を求めんが爲に、彼より出で已つて、遊行して此に至り、足を下す時に、皮肉筋血、悉く皆消け爛る。足を擧ぐる時、還た復た故の如し。次に刀劍刃路の無間に、刃葉の林有り。彼の諸の有情、舍宅を求めんが爲に、彼より出で已つて、往いて彼の陰に趣き、纔かに其の下に坐るに、微風逐ひ起つて、刃葉墮落し、其の身の一切の支節を斫り截つて、便ち地に躃る。黑黧の狗有り、背胎を摣み掣いて、之を噉み食ふ。此の刃葉の林より、無間に鐵設拉末梨の林有り。彼の諸の有情、舍宅を求めんが爲に、便ち來つて之に趣き、遂に其の上に登る。之に登る時に當つては、一切の刺鋒、悉く廻つて下に向き、之を下らんと欲する時は、一切の刺鋒、復た廻つて上に向く。此の因緣に由つて、其の身を貫き刺すこと、諸の支節に遍し。爾の時、便ち鐵嘴の大烏有り、彼の頭の上に上り、或は其の髆に上り、眼精を探り啄んで、之を噉み食ふ。[4]鐵設拉末梨の

遙上空中。東西遊行。然後放之。如石墮地。碎爲百分。碎已復合。合已復執。又利刃滿道。割其足脚。或有炎齒狗。來齧其身。於長久時。受苦惱。昔決斷人用之。令人渴死之者。墮此。餘如經說已上『正法念經』『瑜伽』第四。通說八大地獄近邊別處云。

謂彼一切諸大那落迦。皆有四方四岸四門。鐵墻圍遶。從其四方四門出已。其一々門外。置四出園。謂煻煨齊膝。彼諸有情。出求舍宅。遊行至此。下足之時。皮肉及血。並卽消爛。擧足還生。次此煻煨無間。卽有屍糞泥。此諸有情。爲求舍宅。從彼出已。漸々遊行。陷入其中。首足俱沒。又屍

東西に遊行し、然る後之を放つに、石の地に墮つるが如く、碎けて百分と爲る。碎け已れば復た合し、合し已れば〔鳥〕復た執る。又利刃道に滿ちて、其の足脚を割く。或は炎齒の狗有り、來つて其の身を齧む。長久の時に於て、大苦惱を受く。昔、人用〔の河〕を決斷(斷截)して、人をして渴死せしめたる者、此〔の中〕に墮つ。餘は、『經』に說くが如し。已上は、『正法念經』に依る。」『瑜伽』の第四に、通じて八の大地獄の近邊の別處を說いて云はく、

謂はく、彼の一切の諸の大那落迦は、皆四方に四岸、四門有つて、鐵墻圍ひ遶る。其の四方の四門より出で已れば、其の一々の門の外に、四の出園有り。謂はく、煻煨あつて膝に齊し。彼の諸の有情、出でて舍宅を求め、遊行して此に至る。足を下す時、皮肉及び血、並卽ち消け爛る。足を擧ぐれば還た生ゆ。次に此の煻煨の無間に、卽ち屍糞泥有り。此の諸の有情、舍宅を求めんが爲に、彼より出で已つて、漸々に遊行し、其の中に陷ち入つて、首足俱に沒す。又屍糞泥の內には、多く諸の蟲有り、孃矩吒と名づく。皮を穿つて肉に入り、筋

燒佛像。燒僧房。燒僧臥具者。墮此中。[2]復有別處。名黑肚處。謂飢渴燒身。自食其肉。食已復生。生已復食。有黑肚蛇。繞彼罪人。始從足甲。漸々齧食。或入猛火焚燒。或在鐵鑊煎煮。無量億歲。受如此苦。昔取佛財物食用者。墮此中。[3]復有別處。名雨山聚處。謂一由旬量鐵山。從上而下。打彼罪人。碎如沙揣。碎已復生。生已復碎。又有十一炎。周遍燒身。又獄卒以刀。遍割身分。極熱白鑞汁。入其割處。四百四病。具足常有。長久受苦。無有年歲。昔取辟支佛之食。自食不與之者。墮此。[4]復有別處。名閻婆度處。有惡鳥。身大如象。名曰閻婆。嘴利生炎。執罪人

佛像を燒き、僧房を燒き、僧の臥具を燒きし者、此の中に墮つ。[2]復た別處有り、黑肚處と名づく。謂はく、飢渴身を燒いて、自ら其の肉を食ふ。食ひ已れば復た生じ、生じ已れば復た食ふ。黑き肚の蛇有つて、彼の罪人を繞ひ、足の甲より始めて、漸々に齧み食ふ。或は猛火に入れて焚燒し、或は鐵鑊に在いて煎り煮る。無量億歲、是くの如き苦を受く。昔、佛の財物を取つて、之を食ひ用ひたる者、此の中に墮つ。[3]復た別處有り、雨山聚處と名づく。謂はく、一由旬量りの鐵山、上より下つて、彼の罪人を打つに、碎くること沙揣〔搏〕の如し。碎け已れば復た生じ、生じ已れば復た碎く。又十一の炎有り、遍く周つて身を燒く。又獄卒、刀を以て遍く身分を割き、極熱の白鑞の汁を、其の割けたる處に入る。四百四病、具足して常に有り、長久に苦を受けて、年歲有ること無し。昔、辟支佛の食を取つて、自ら食うて與へざりし者、此〔の中〕に墮つ。[4]復た別處有り、閻婆度處と名づく。惡鳥有つて、身の大なること象の如し。名を閻婆と曰ふ。嘴利くして炎を生ず。罪人を執つて、遙かに空中に上り、

山。一名出山。二名沒山。遮彼臭氣。若人聞一切地獄所有苦惱。皆悉不堪。聞此則死。如是阿鼻大地獄處。於千分中。不說一分。何以故。不可說盡。不可得聽。不可譬喩。若有人旣說。有人聽。如是之人。吐血而死。『正法念經』略抄。」此無間獄。壽一中劫。『俱舍論』。」造五逆罪。撥無因果。誹謗大乘。犯四重。虛食信施者。墮此中。『觀佛三昧經』。

此無間獄。四門之外。亦有十六眷屬別處。」其中一處。名鐵野干食處。謂罪人身上。火燃十由旬量。諸地獄中。此苦最勝。又雨鐵塼。如盛夏雨。身體破碎。猶如乾脯。炎牙野干。常來食噉。於一切時。受苦不止。昔

所の苦惱を聞かば、皆悉く堪へざらん。〔若し〕此れを聞かは、則ち死せん。是くの如くなれば、阿鼻大地獄の處は、千分の中に於て、一分をも說かず。何を以ての故とならば、說き盡す可からず、聽くことを得可からず、譬喩ふ可からざればなり。若し人有つて說き、若し人有つて聽かば、是くの如き人は、血を吐いて死なん。『正法念經』より略抄す。」此の無間〔地〕獄は、壽一中劫なり。『俱舍論』〔に依る〕。」五逆罪を造り、因果を撥無し、大乘を誹謗り、四重〔禁〕を犯し、虛しく信施を食へる者、此の中に墮つ。『觀佛三昧經』〔に依る〕。

此の無間〔地〕獄の四門の外に、亦十六の眷屬別處有り。」其の中の一處を、鐵野干食處と名づく。謂はく、罪人の身の上に、火の燃ゆること十由旬量りなり。諸の地獄の中に、此の苦最も勝れたり。又鐵の塼を雨らすこと、盛んなる夏の雨の如く、身體破れ碎くること、猶し乾脯の如し。炎の牙ある野干、常に來つて食ひ噉み、一切の時に於て、苦を受くること止まず。昔、

而鋏揃之。復置熱鐵地上。令登大熱鐵山。上而復下。下而復上。從其口中。拔出其舌。以百鐵釘。而張之。令無皺襵。如張牛皮。復更仰臥熱鐵地上。以熱鐵鉗。鉗口令開。以三熱鐵丸。置其口中。卽燒其口及以咽喉。徹於府藏。從下而出。又以洋銅。而灌其口。燒喉及口。徹於府藏。從下流出。已上『瑜伽』。言三熱者。燒燃。極燒燃。遍極燒燃也。前七大地獄。竝及別處。一切諸苦。以爲一分。阿鼻地獄。一千倍勝。如是阿鼻地獄之人。見大焦熱地獄罪人。如見他化自在天處。四天下處。欲界六天。聞地獄氣。卽皆消盡。何以故。以地獄人極臭故。地獄臭氣。何故不來。有二大

り、下つては復た上る。其の口の中より、其の舌を拔き出し、百の鐵釘を以て、〔釘うつて〕之を張り、皺襵無からしむること、牛の皮を張るが如くにす。復た更に熱鐵の地の上に仰き臥せ、熱鐵の鉗を以て、口を鉗んで開かしめ、三熱の鐵丸を以て、其の口の中に置くに、卽ち其の口、及び咽喉を燒き、府藏を徹つて、下より出づ。又洋銅を以て、其の口に灌ぐに、喉及び口を燒き、府藏を徹つて、下より流れ出づ。

と。已上は、『瑜伽』〔に依る〕。三熱と言ふは、燒燃と極燒燃と遍極燒燃となり。前の七の大地獄、竝に別處の、一切諸苦を以て一分と爲んに、阿鼻地獄は、一千倍して勝れり。是くの如くなれば、阿鼻地獄の人は、大焦熱地獄の罪人を見ること、他化自在天處を見るが如し。四天下の處、欲界の六天も、〔阿鼻〕地獄の氣を聞かば、卽ち皆消え盡さん。何を以ての故とならば、〔阿鼻〕地獄の人は、極めて大だ臭きを以ての故なり。地獄の臭氣、何が故に來らずとならば、二の大なる山有り、一を出山と名づけ、二を沒山と名づけ、彼の臭氣を遮ゆればなり。若し人、一切の〔阿鼻〕地獄に有る

滿城內。其蛇哮吼。如百千雷。雨大鐵丸。亦滿城內。有五百億虫。有八萬四千嘴。嘴頭火流。如雨而下。此虫下時。獄火彌盛。遍照八萬四千由旬。又八萬億千苦中苦者。集在此中。『觀佛三昧經』略抄。『瑜伽』第四云。從東方多百踰繕那。三熱大鐵地上。有猛熾火。騰焰而來。刺彼有情。穿皮入肉。斷筋破骨。復徹其髓。燒如脂燭。如是擧身。皆成猛焰。如從東方。南西北方。亦復如是。由此因緣。彼諸有情。與猛焰和雜。唯見火聚。從四方來。火焰和雜。無有間隙。所受苦痛。亦無間隙。唯聞苦逼號叫之聲。知有衆生。又以鐵箕。盛滿三熱鐵炭。

百千の雷の如く、大鐵丸を雨らして、亦城の內に滿つ。〔又〕五百億の蟲有つて、八萬四千の嘴有り、嘴の頭より火流れ、雨の如くにして下る。此の蟲の下る時、獄〔猛〕火彌々盛んにして、遍く八萬四千由旬を照す。又八萬億千の苦の中の苦は、集つて此の中に在り。『觀佛三昧經』より略抄す。『瑜伽』の第四に云はく、東の方多百踰繕那、三熱の大鐵地の上より、猛く熾んなる火有つて、焰を騰げて來り、彼の有情を刺す。皮を穿つて肉に入り、筋を斷つて骨を破り、復た其の髓に徹り、燒くこと脂燭の如し。是くの如くにして、身を擧げて皆猛焰と成る。東の方よりするが如く、南、西、北の方も、亦復た是くの如し。此の因緣に由つて、彼の諸の有情は、猛焰と和し雜り、唯火聚の四方より來るを見る。火焰和し雜つて、間隙有ること無く、受くるところの苦痛も、亦間隙無し。唯、苦に逼められて號き叫ぶ聲を聞いて、衆生有ることを知る。又鐵の箕を以て、三熱の鐵炭を盛り滿たし、之を簸り揃へ、復た熱鐵の地の上に置いて、大熱鐵の山に登らしむ。上つては復た下

悶絶。頭面在下。足在於上。逕二千年。皆向下行。『正法念經』略抄。」彼阿鼻城。縱廣八萬由旬。」七重鐵城。七層鐵網。下有十八隔。刀林周匝。四角有四銅狗。身四十由旬。眼如電。牙如劍。齒如刀山。舌如鐵刺。一切毛孔。皆出猛火。其烟臭惡。世間無喩。有十八獄卒。頭如羅刹。口如夜叉。有六十四眼。迸散鐵丸。鉤牙上出。高四由旬。牙頭火流。滿阿鼻城。頭上有八牛頭。一一牛頭。有十八角。一一角頭。皆出猛火。又七重城內。有七鐵幢。幢頭火踊。猶如沸泉。其炎流迸。亦滿城內。四門閫上。有八十釜。沸銅涌出。亦滿城內。一一隔間。有八萬四千鐵蟒大蛇。吐毒吐火。身

す。頭面は下に在り、足は上に在つて、二千年を經、皆下に向つて行く。已上は、『正法念經』より略抄す。」彼の阿鼻城は、縱廣八萬〔千〕由旬なり。」七重の鐵城、七層の鐵網あり。下に十八の隔(へだて)有つて、刀林周り匝る。四角(すみ)に四の銅狗有つて、身長きこと四十〔千〕由旬なり。眼は電(いなづま)の如く、牙は劍の如く、齒は刀山の如く、舌は鐵刺(とげ)の如し。一切の毛孔より、皆猛火を出し、其の烟(けむり)臭惡にして、世間に喩(たと)ふるもの無し。十八の獄卒有つて、頭は羅刹(おそろしきおに)の如く、口は夜叉(ひとくひおに)の如し。六十四の眼有つて、鐵丸を迸り散らす。鉤(まが)れる牙は上に出でて、高きこと四由旬なり。牙の頭より火流れて、阿鼻城に滿つ。頭の上に八の牛頭有つて、一々の牛頭に、十八の角有り。一々の角の頭より、皆猛火を出す。又七重の城の内には、七の鐵幢有つて、幢の頭より火の涌〔踊〕くこと、猶し沸泉の如し。其の炎流れ迸つて、亦城の内に滿つ。四門の閫(しきみ)の上には、八十の釜有り、沸(たぎ)れる銅涌き出して、亦城の内に滿つ。一々の隔の間には、八萬四千の鐵蜂〔蟒〕、大蛇有つて、毒を吐き、火を吐いて、身城の内に滿つ。其の蛇哮(さけ)び吼ゆること、

有位。啼哭說偈言。
一切唯火炎。遍空無中間。
四方及四維。地界無空處。
一切地界處。惡人皆遍滿。
我今無所歸。孤獨無同伴。
在惡處闇中。入大火炎聚。
我於虛空中。不見日月。
已上。時閻羅人。以瞋怒心答曰。
或增劫或減劫。大火燒汝身。
癡人已作惡。今何用生悔。
非是天修羅。揵達婆龍鬼。
業羂所繫縛。無人能救汝。
如於大海中。唯取一掬水。
此苦如一掬。後苦如大海。
旣呵責已。將向地獄。去彼二萬五千由旬。聞彼地獄啼哭之聲。十倍

き向ふ時、先づ中有の位にして、啼き哭び、偈を說いて言ふ、
一切は唯火炎なり　空に遍して中間無し
四方及び四維　地界にも空しき處無し
一切地界處は　惡人皆遍ち滿てり
我今歸せん所無く　孤獨にして同伴も無し
惡處の闇の中に在つて　大火炎の聚に入る
我虛空の中に於て　日月星をも見ざるなり
と。時に閻羅人、瞋怒の心を以て、答へて曰く、
或は增劫或は減劫の　大火汝が身を燒くなり
癡人已に惡を作る　今何を用てか悔ゆることを生す
是れ天、〔阿〕修羅　揵達婆、龍、鬼に非ず
業の羂に繫縛せらる　人能く汝を救ふもの無し
如し大海の中に於て　唯一掬の水を取らんに
此の苦は一掬の如し　後の苦は大海の如し
と。旣に呵責し已れば、將ゐて地獄に向ふ。彼を去ること二萬五千由旬にして、彼の地獄にて啼き哭ぶ聲を聞き、十倍に悶絕

此大焦熱地獄。四門之外。有十六別處。」其中一處。一切無間。乃至虛空。皆悉炎燃。無針孔許不炎燃處。罪人火中。發聲唱喚。無量億歲。常燒不止。2犯清淨優婆夷者。墮此中。」復有別處。名普受一切苦惱。謂炎刀剝割一切身皮。不侵其肉。既剝其皮。與身相連。敷在熱地。以火燒之。以熱鐵沸。灌其身體。如是無量億千歲。受大苦也。2比丘以酒。誘誑持戒婦女。壞其心已。然後共行。或與財物者。墮此中。餘如經中說。『正法念經』略抄。

八阿鼻地獄者。在大焦熱之下。欲界最底之處。」罪人趣向彼時。先中

在くが如し。已上は、『正法念經』より略抄す。

此の大焦熱地獄の、四門の外に、十六の別處有り。」其の中の一處は、一切間無く、乃至虛空までも、皆悉く炎燃ゆ。針の孔ばかりも炎の燃えざる處無し。罪人火の中に聲を發して唱へ喚べども、無量億歲、常に燒かるゝこと止まず。2清淨の優婆夷を犯したる者、此の中に墮つ。」復た別處有り、普受一切苦惱と名づく。謂はく、炎の刀をもつて一切の身の皮を剝ぎ割きながら、其の肉を侵さず。既に其の皮を剝げば、身と相ひ連ねて熱地に敷き在き、火を以て之を燒き、熱鐵の沸けるを以て、其の身體に灌ぐ。是くの如く、無量億千歲、大苦を受くるなり。2比丘の、酒を以て持戒の婦女を誘ひ誑かし、其の心を壞り已つて、然る後共に行じ、或は財物を與へたる者、此の中に墮つ。餘は『經』の中に說くが如し。『正法念經』より略抄す。

八に阿鼻地獄

とは、大焦熱〔地獄〕の下、欲界最底の處に在り。」罪人、彼に趣

呵責既已。惡業羂縛。出向地獄。遠見大焦熱地獄。普大炎燃。又聞地獄罪人啼哭之聲。悲愁恐魄。受無量苦。如是無量百千萬億無數年歲。聞啼哭聲。十倍恐魄。心驚怖畏。閻羅人。呵責之言。

汝聞地獄聲。已如是怖畏。
何況地獄燒。如燒乾薪草。
火燒非是燒。惡業乃是燒。
火燒則可滅。業燒不可滅。

云云。如是。苦呵責已。將向地獄。有大火聚。其聚擧高。五百由旬。其量寛廣。二百由旬。炎燃熾盛。彼人所作。惡業勢力。急擲其身。墮彼火聚。如大山岸。推在險岸。已上。正法念經略抄。

ば、閻魔王、種々に呵責す。呵責さるゝこと既に已れば、惡業の羂をもつて縛られ、出でて地獄に向ふ。遠かに大焦熱地獄の、普く大炎の燃ゆるを見る。又地獄の罪人の、啼き哭ぶ聲を聞く。悲しみ愁へ恐れ魄〔怕〕れて、無量の苦を受く。是くの如くして、無量百千萬億無數の年歲のあひだ、啼き哭ぶ聲を聞くなり。〔既に啼き哭ぶを聞いて〕十倍に恐魄〔怕〕し、心驚き怖畏る。閻羅人、之を呵責して言ふ、

汝地獄の聲を聞き　已に是くの如く怖畏る
何ぞ況や地獄に燒かるゝは　乾ける薪草を燒くが如し
火の燒くは是れ燒くに非ず　惡業乃ち是れ燒くなり
火の燒くは則ち滅しう可し　業の燒くは滅しう可からず

と。云云。是くの如く、苦に呵責され已り、將ゐられて地獄に向ふに、大火聚有り。其の〔火〕聚擧がつて高きこと、五百由旬なり。其の量寛廣きこと、二百由旬なり。炎の燃ゆること熾盛なるは、彼の人所作の惡業の勢力なり。急に其の身を擲げて、彼の火聚に墮すこと、大山の岸〔崖〕より推して險〔嶮〕しき岸に

獄。根本別處。一切諸苦。十倍具受。不可具說。」其壽半中劫。」殺盜婬飲酒妄語邪見。竝汙淨戒尼者。墮此中。」此惡業人。先於中有。見大地獄相。有閻羅人。面有惡狀。手足極熱。捩身怒肱。罪人見之。極大怋怖。其聲如雷吼。罪人聞之。恐怖更增。其手執利刀。腹肚甚大。如黑雲色。眼炎如燈。鉤牙鋒利。臂手皆長。搖動作勢。一切身分。皆悉麁起。如是種種可畏形狀。堅繫罪人咽。如是將去。過六十八百千由旬。地海洲城。在海外邊。復行三十六億由旬。漸漸向下十億由旬。一切風中。業風第一。如是業風。將惡業人。去到彼處。既到彼已。閻魔王。種々呵責。

じ。『大論』『瑜伽論』に依る」。但し前の六の地獄の、根本と別處との一切諸苦を、十倍して重く受く。具に說く可からず。」其の壽、半中劫なり。」殺、盜、婬、飮酒、妄語、邪見を〔犯〕し、竝に淨戒の尼を汙せる者、此の中に墮つ。」此の惡業の人は、先づ中有に於て、大地獄の相を見るに、閻羅人有つて、面に惡しき狀有り、手足極熱して、身を捩らし肱〔肚〕を怒らす。罪人これを見て、極めて大に怋怖る。其の聲、雷の吼ゆるが如く、罪人これを聞いて、恐怖更に增す。其の手に利刀を執り、腹肚甚だ大にして、黑雲の色の如し。眼の炎は燈の如く、鉤れる牙は鋒のごとくに利し。臂手皆長くして、搖り動かして勢を作すに、一切の身分は、皆悉く麁く起つ。是くの如き、種々畏る可き形狀にて、罪人の咽を堅く繋ふ。是くの如くして將ゐ去るに、六十八百千由旬を過ぎて、地海洲城、海の外邊に在り。復た行くこと三十六億由旬にして、漸々に下に向ふこと十億由旬なり。一切の風の中には、業風を第一とす。是くの如き業風、惡業の人を將ゐ去つて、彼の處に到る。既にして彼に到り已れ

前進入。既入彼處。分茶離迦炎燃。高火五百由旬。彼火燒炙。死而復活。「若人自餓死。望得生天。復教他人。令住邪見者。墮此中。」復有別處。名闇火風。謂彼罪人。惡風所吹。在虛空中。無所依處。如輪疾轉。身不可見。如是轉已。異刀風生。碎身如沙。分散十方。散已復生。生已復散。恒常如是。「若人作如是見。一切諸法。有常無常。無常者身。常者四大。彼邪見人。受如是苦。餘如經說。『正法念經』。

七大焦熱地獄者。在焦熱下。」縱廣同前。」苦相亦同。『大論』『瑜伽論』。但前六地

既にして彼の處に入れば、分茶離迦の炎の燃ゆること、高さ火五百由旬なり。彼の火に燒き炙られ、死して復た活く。「若し人、自ら餓死して天に生るゝことを得んと望み、復た他人を教へて邪見に住まらしめたる者、此の中に墮つ。」復た別處有り、闇火風と名づく。謂はく、彼の罪人、惡風に吹かれ、虛空の中に在つて、所依の處無し。輪の如く疾く轉じて、身見る可からず。是くの如く轉じ已るに、異なる刀風生じ、身を碎くこと沙の如く、十方に分散す。散り已れば復た生じ、生じ已れば復た散ず。恒常に是くの如くして、〔年數あること無し。〕「若し人、是くの如きの見を作さん「一切の諸法には、常と無常と有り。無常の者は身なり、常の者は四大なり」と。彼の邪見の人は、是くの如きの苦を受くるなり。餘は、『經』に說くが如し。『正法念經』〔に依る〕。

七に大焦熱地獄

とは、焦熱〔地獄〕の下に在り。」縱廣前に同じ。」苦相も、亦同

提。一時焚盡。況罪人之身。輭如生蘇。長時焚焼。豈可忍哉。此地獄人。望見前五地獄之火。猶如霜雪。『正法念經。』以人間千六百歳。爲他化天一日夜。其壽萬六千歳。以他化天壽爲日夜。此獄壽亦然。」殺盜婬飲酒妄語邪見之者。墮此中。

四門之外。復有十六別處。」其中有一處。名分荼離迦。謂彼罪人。一切身分。無芥子許。無火炎處。異地獄人。如是説言。汝々疾々速々來々。此有分荼離迦池。有水可飲。林有潤影。隨而走趣。道上有坑。滿中熾火。罪人入已。一切身分。皆悉焼盡。焼已復生。生已復焼。渇欲不息。便

若し此の〔地〕獄の豆許りの火を以て、閻浮提に置かば、一時にして焚き盡さん。況や罪人の身の輭かなること、生蘇の如し。長時に焚焼せば、豈忍ぶ可けん哉。此の地獄の人は、前の五の地獄の火を望み見ること、猶し霜か雪の如し。『正法念經』に依る」。人間の千六百歳を以て、他化天の一日夜と爲して、其の壽〔一〕萬六千歳なり。他化天の壽を以て、一日夜と爲して、此の〔地〕獄の壽も亦然り。」殺、盜、婬、飲酒、妄語、邪見を〔犯〕せる者、此の中に墮つ。

四門の外に、復た十六の別處有り。」其の中に一處有り、分荼離迦と名づく。謂はく、彼の罪人の、一切の身分に、芥子ばかりも、火炎無き處とて無し。異の地獄の人、是くの如く説いて言ふ「汝速かに疾く來れ、汝速かに疾く來れ。此に分荼離迦の池有り、水有つて飲む可し。林に潤へる影有り」と。隨つて走り趣くに、道の上に坑有つて、中に熾んなる火滿てり。罪人入り已つて、一切の身分、皆悉く焼け盡す。焼け已つて復た生じ、生じ已つて復た焼く。渇欲息まずして、便ち前に進んで入る。

熱鐵鉗。拔出其舌。拔已復生。生則復拔。拔二眼亦然。復以刀削其身。刀甚薄利。如剃頭刀。受如是等。異類諸苦。皆是妄語之果報也。」餘如經說。『正法念經』略抄。

六焦熱地獄者。在大叫喚之下。」縱廣同前。」獄卒投罪人。臥熱鐵地上。或仰或覆。從頭至足。以大熱鐵棒。或打或築。令如肉摶。或置極熱大鐵鏊上。猛炎炙之。左右轉之。表裏燒薄。或以大鐵串。從下貫之。徹頭而出。反覆炙之。令彼有情諸根毛孔。及以口中悉皆炎起。或入熱鑊。或置鐵樓。鐵火猛盛。徹於骨髓。『瑜伽論』『大論』。若以此獄豆許之火。置閻浮

其の舌を抜き出す。抜き已れば、復た生じ、生ずれば、則ち復た抜く。眼を抜くことも、亦然り。復た刀を以て其の身を削る、刀の甚だ薄くして利きこと、剃頭刀の如し。是くの如き等の、異類の諸苦を受くること、皆是れ妄語の果報なり。」餘は、『經』に說くが如し。『正法念經』より略抄す。

六に焦熱地獄

とは、大叫喚〔地獄〕の下に在り。」縱廣前に同じ。」獄卒、罪人を捉へて、熱鐵の地の上に臥せ、或は仰け或は覆せ、頭より足に至るまで、大なる熱鐵の棒を以て、或は打ち或は築いて、肉摶の如くならしむ。或は極熱の大なる鐵の鏊の上に置き、猛き炎をもつて之を炙り、左右に之を轉がし、表裏ともに燒き薄〔博〕すむ。或は大なる鐵の串を以て、下より之を貫き、頭に徹して出し、反覆して之を炙り、彼の有情の諸根毛孔、及び口の中に悉く皆炎を起らしむ。或は熱鐵の鑊に入れ、或は熱鐵の樓に置くに、鐵火猛く盛んにして、骨髓に徹る。〔『瑜伽論』『大論』に依る〕。

燒解脱如火。所謂酒一法。
『正法念經』。

五大叫喚地獄者。在叫喚下。」縱廣同前。」苦相亦同。但前四地獄。及諸十六別處。一切諸苦。十倍重受。」以人間八百歳。爲化樂天一日夜。其壽八千歳。以彼天壽。爲此獄一日夜。其壽八千歳。」殺盗婬飮酒妄語者。墮此中。獄卒呵責罪人。説偈云。

妄語第一火。尚能燒大海。
況燒妄語人。如燒草木薪。

復有十六別處。」其中一處。名受鋒苦。熱鐵利針。口舌倶刺。不能啼哭。」復有別處。名受無邊苦。獄卒以

解脱を燒くこと火の如くなる　謂はゆる酒の一法なり
と。『正法念經』に依る」。

五に大叫喚地獄

とは、叫喚〔地獄〕の下に在り。」縱廣前に同じ。」苦相も、亦同じ。但し前の四の地獄、及び諸の十六別處の一切諸苦を、十倍して重く受く。」人間の八百歳を以て、化樂天の一日夜と爲して、其の壽八千歳なり。彼の天の壽を以て、此の地獄の一日夜と爲して、其の壽八千歳なり。」殺、盗、婬、飮酒、妄語を〔犯〕せる者、此の中に墮つ。獄卒、罪人を呵責し、偈を說いて云はく、

妄語は第一の火なり　尚能く大海を燒く
況や妄語の人を燒くこと　猶し草木を燒くが如し

と。

復た十六の別處有り。」其の中の一處を、受鋒苦と名づく。熱鐵の利き針をもつて、口舌倶に刺され、啼き哭ぶこと能はず。」復た別處有り、受無邊苦と名づく。獄卒、熱鐵の鉗を以て、

日夜。而壽四千歲。」殺盜婬飲酒者。墮此中。

復有十六別處。」其中有一處。名火末虫。昔賣酒加益水者。墮此中。具四百四病。（風黃冷雜。各有百一病。合有四百四。）其一病力。於一日夜。能令四大州若干人皆死。又自身虫出。破其皮肉骨髓飲食。」復有別處。名雲火霧。昔以酒與人令醉已。調戲挊之。令彼羞恥者。墮此受苦。謂獄火滿厚二百肘。獄卒投罪人。令行火中。從足至頭。一切洋消。擧之還生。如是無量百千歲。與苦不止。」餘如經文。又獄卒呵責罪人。說偈云。

於佛所生癡。壞世出世事。

して、其の壽四千歲なり。兜率天の壽を以て、此の地獄の一日夜と爲して、其の壽四千歲なり。」殺、盜、婬、飲酒を〔犯〕せる者、此の中に墮つ。

復た、十六の別處有り。」其の中に一處有り、火末蟲と名づく。昔、酒を賣るに水を加へ益したる者、此の中に墮ちて、四百四病を具す。（風と黃と冷と雜とに、各〻百一病有り。合せて四百四有り。）其の一の病の力は、一日夜に於て、能く四大州の、若干の人をして皆死せしむ。又身より蟲出でゝ、其の皮肉骨髓を破つて飲み食ふ。」復た別處有り、雲火霧と名づく。昔、酒を以て人に與へ、醉はしめ已つて、調ひ戲れて之を弄び、彼をして羞恥かしめたる者、此に墮ちて苦を受く。謂はく、獄火の滿つること、厚さ二百肘なり。獄卒、罪人を捉へて、火の中を行かしむるに、足より頭に至るまで、一切洋消ゆ。之を擧ぐれば、還た生く。是くの如く無量百千歲、苦を與ふること止まず。」餘は、『經』文の如し。又獄卒罪人を呵責し、偈を說いて云はく、

佛の所にて癡を生じ　世出世の事を壞し

增瞋怒。『大論』。或以鐵棒打頭。從熱鐵地令走。或置熱熬。反覆炙之。或擲熱鑊。而煎煮之。或驅入猛炎鐵室。或以鉗開口。而灌洋銅。燒爛五藏。從下直出。『瑜伽論』。『大論』。罪人說偈。傷恨閻羅人言。

汝何無悲心。復何不寂靜。
我是悲心器。於我何無悲。

時閻羅人。答罪人曰。

己爲愛羂誑。作惡不善業。
今受惡業報。何故瞋恨我。

又云。

汝本作惡業。爲欲癡所誑。
彼時何不悔。今悔何所及。

『正法念經』。以人間四百歲。爲都卒天一日夜。其歲以都卒壽。爲此地獄一

を垂れて、少〔小〕しく放捨かれよ」と。此の言有りと雖も、彌瞋怒を增す。『大論』〔に依る〕。或は鐵棒を以て頭を打つて、熱鐵の地より走らしめ、或は熱熬〔鏊〕に置き、反覆して之を炙り、或は熱せる鑊に擲げて之を煎じ煮る。或は驅つて猛炎の鐵室に入らしめ、或は鉗を以て口を開いて洋ぎれる銅を灌ぎ、五藏を燒き爛らして、下より直ちに出す。『瑜伽論』『大論』〔に依る〕。罪人、偈を說き、閻羅人を傷み恨んで言はく、

汝何ぞ悲心なき　復た何ぞ寂靜ならざる
我は是れ悲心の器ぞ　我に於て何ぞ悲なき

と。時に閻羅人、罪人に答へて曰く、

己愛羂に誑かされ　惡不善の業を作して
今惡業の報を受く　何故ぞ我を瞋り恨むる

と。又云はく、

汝もと惡しき業を作し　欲癡のために誑かさる
彼の時何ぞ悔いざる　今に悔ゆとも何の及ぶところ

と。『正法念經』〔に依る〕。人間の四百歲を以て、兜率天の一日夜と爲

男。行邪行者。墮此受苦。謂見本男子。一切身分。皆悉熱炎。來抱其身。一切身分。皆悉解散。死已復活。極生怖畏。走避而去。墮於嶮岸。有炎嘴烏炎口野干。而噉食之。」復有別處。名忍苦處。取他婦女者。墮此受苦。謂獄卒懸之樹頭。頭面在下。足在於上。下燃火炎。燒一切身。燒盡復生。唱喚開口。火從口入。燒其心肺。生熟藏等。餘如經說。已上。『正法念經』略抄之。

四叫喚地獄者。在衆合下。」縱廣同前。」獄卒頭黃如金。眼中火出。著赭色衣。手足長大。疾走如風。口出惡聲。而射罪人。罪人惶怖。叩頭求哀。願垂慈愍。小見放捨。雖有此言。彌

墮ちて苦を受く。謂はく、本の男子を見れば、一切の身分に、皆悉く熱炎あり。來つて其身を抱くに、一切の身分、皆悉く解け散る。死し已つて、復た活く。極めて怖畏を生じ、走り避げ去つて、嶮しき岸より墮つるに、炎嘴の烏、炎口の野干有つて、之を噉み食ふ。」復た別處有り、忍苦處と名づく。他の婦女を取れる者、此に墮ちて苦を受く。謂はく、獄卒之を樹の頭に懸くるに、頭面を下に在き、足を上に在く。下に火炎を燃して、一切の身を燒く。燒き盡して、復た生く。唱へ喚ばはらんとして口を開けば、火口より入つて、其の心肺生熟藏等を燒く。餘は、『經』に說くが如し。已上は、『正法念經』より之を略抄す。

四に叫喚地獄

とは、衆合〔地獄〕の下に在り。縱廣前に同じ。」獄卒の頭黃なること金の如く、眼の中より火出で、赭色の衣を著たり。手足長大にして、疾く走ること風の如し。口より惡聲を出して、罪人を射る。罪人惶れ怖れ、頭を叩いて哀を求む、「願はくば慈愍

日夜。其壽二千歲。以彼天壽。爲此獄一日夜。其壽二千歲。」殺生偸盜邪婬者。墮此中。

此大地獄。復有十六別處。」謂有一處。名惡見處。取他兒子。强逼邪行。令號哭者。墮此受苦。²謂罪人見自兒子。在地獄中。獄卒若以鐵杖。若以鐵錐。刺其陰中。若以鐵鉤。釘其陰中。旣見自子。如是苦事。愛心悲絕。不可堪忍。此愛心苦。於火燒苦。十六分中。不及其一。彼人如是。心苦逼已。復受身苦。謂頭面在下。盛熱銅汁。灌其糞門。入其身內。燒其熱藏大小腸等。次第燒已。在下而出。具受身心二苦。無量百千年中不止。」又有別處。名多苦惱。謂男於

て、其の壽二千歲なり。彼の天の壽を以て、此の地獄の一日夜と爲して、其の壽二千歲なり。」殺生、偸盜、邪婬を〔犯〕せる者、此の中に墮つ。

此の大地獄に、復た十六の別處有り。」謂はく、一處有り、惡見處と名づく。他の兒子を取り、强ひ逼めて邪行し、號び哭かしめたる者、此に墮ちて苦を受く。²謂はく、罪人自の兒子を見れば、地獄の中に有り。獄卒、若しは鐵杖を以て、若しは鐵錐を以て、其の陰中を刺し、若しは鐵鉤を以て、其の陰中に釘つ。旣に自の子の是くの如き苦事を見るに、愛心悲絕して、堪へ忍ぶ可からず。此の愛心の苦は、火燒の苦よりも、十六分の中、其の一にも及ばず。彼の人是くの如く、心の苦に逼られ已つて、復た身の苦を受く。謂はく、頭面を下に在き、熱せる銅汁を盛つて、其の糞門に灌ぎ、其の身の內に入れて、其の熟藏、大小腸等を燒く。次第に燒け已れば、下に在つて出づ。具に身心の二苦を受くること、無量百千年の中に止まず。」又別處有り、多苦惱處と名づく。謂はく、男の男に於て邪行を行せる者、此に

頭。有好端政嚴飾婦女。如是見已。卽上彼樹。樹葉如刀。割其身肉。次割其筋。如是劈割一切處。已得上樹已。見彼婦女。復在於地。以欲媚眼。上看罪人。作如是言。念汝因緣。我到此處。汝今何故。不來近我。何不抱我。罪人見已。欲心熾盛。次第復下。刀葉向上。利如剃刀。如前遍割一切身分。既到地已。而彼婦女。復在樹頭。罪人見已。而復上樹。如是無量百千億歲。自心所誑。彼地獄中。如是轉行。如是被燒。邪欲爲因。乃至。獄卒呵嘖罪人。說偈曰。

非異人作惡。異人受苦報。
自業自得果。衆生皆如是。

『正法念經』以人間二百歲。爲夜摩天一

正嚴飾の婦女有り。是くの如く見已つて、卽ち彼の樹に上るに、樹の葉刀の如くにして、其の身の肉を割き、次いで其の筋を割く。是くの如く、一切の處を劈き割いて、已に樹に上ることを得已り、彼の婦女を見れば、復た地に在り、欲の媚びたる眼を以て、上に罪人を看、是くの如き言を作す「汝を念ふ因緣をもつて、我此處に到れり。汝今何故ぞ、來つて我に近づかざる。何ぞ我を抱かざる」と。罪人見已つて、欲心熾んに盛え、次第に復た下るに、刀葉上に向つて利きこと、剃刀の如し。前の如く遍く一切の身分を割き、既に地に到り已れば、彼の婦女復た樹の頭に在り。罪人見已つて、復た樹に上る。是くの如く無量百千億歲、自心に誑かされて、彼の地獄の中に、是くの如く轉り行き、是くの如く燒かるゝこと、邪欲を因と爲るなり。乃至。獄卒、罪人を呵嘖して、偈を說いて曰く、

異人の作れる惡をもて　異人苦報を受くるに非ず
自業自得の果なり　衆生皆是の如し

と。「『正法念經』に依る」。人間の二百歲を以て、夜摩天の一日夜と爲し

前。」多有鐵山。兩山相對。牛頭馬頭等諸獄卒。手執器杖。驅令入山間。是時兩山。迫來合押。身體摧碎。血流滿地。或有鐵山。從空而落。打於罪人。碎如沙揣。或置石上。以巖押之。或入鐵臼。以鐵杵擣。極惡獄鬼。幷熱鐵師子虎狼等諸獸。烏鷲等鳥。競來食噉。『瑜伽論』。『大論』。　又鐵炎嘴鷲。取其腸已。掛在樹頭。而噉食之。彼有大江。中有鐵鉤。皆悉火燃。獄卒執罪人。擲彼河中。墮鐵鉤上。又彼江中。有熱赤銅汁。漂彼罪人。或有身如日初出者。有身沈沒如重石者。有擧手向天而號哭者。有共相近而號哭者。久受大苦。無主無救。又復獄卒。取地獄人。置刀葉林。見彼樹

とは、黒繩〔地獄〕の下に在り。」縱廣前に同じ。」多く鐵山有つて、兩山相對す。牛頭馬頭等の諸の獄卒、手に器杖を執り、驅つて山の間に入らしむ。是の時に、兩山迫り來つて合せ押すに、身體摧け碎け、血流れて地に滿つ。或は鐵山有つて、空より落ち、罪人を打つて、碎くこと沙揣の如し。或は石の上に置き、巖を以て之を押し、或は鐵臼に入れ、鐵杵を以て擣く。極惡の獄鬼、幷に熱鐵の師子、虎、狼等の諸獸、烏、鷲等の鳥、競ひ來つて食ひ噉む。『瑜伽論』『大論』〔に依る〕。又、鐵炎の嘴鷲、其の腸を取り已つて、樹の頭に掛け在き、之を噉み食ふ。彼に大なる河有り、中に鐵鉤有つて、皆悉く火に燃ゆ。獄卒、罪人を執り、彼の河の中に擲げて、鐵鉤の上に墮す。又彼の河の中に、熱せる赤銅の汁有つて、彼の罪人を漂はす。或は身日の初めて出るが如き者有り、身沈沒すること重き石の如き者有り、手を擧げ天に向つて號び哭く者有り、共に相近づいて號び哭く者有り。久しく大苦を受くれども、主も無く、救も無し。又復た獄卒、地獄の人を取つて、刀葉の林に置く。彼の樹の頭を見れば好端

間一百歳。爲忉利天一日夜。其壽一千歳。以忉利天壽。爲一日夜。此地獄壽。一千歳。」殺生偸盜者。墮此中。

復有異處。名等喚受苦處。謂擧在嶮岸。無量由旬。熱炎黑繩。束縛繫已。然後推之。墮利鐵刀。熱地之上。鐵炎牙狗。之所噉食。一切身分。分分分離。唱聲吼喚。無有救者。昔說法。依惡見論。一切不實。不顧一切。投岸自殺者。墮此中。」復有異處。名畏鷲處。謂獄卒。怒杖急打。晝夜常走。手執火炎鐵刀。挽弓弩箭。隨後走逐。斫折射之。昔貪物故。殺人縛人。奪食者。墮此中。『正法念經』略抄。

三衆合地獄者。在黑繩下。」縱廣同

意なり。」人間の一百歳を以て、忉利天の一日夜と爲して、其の壽一千歳なり。忉利天の壽を以て、一日夜と爲して、此の地獄の壽一千歳なり。」殺生、偸盜せる者、此の中に墮つ。

復た異處有り、等喚受苦處と名づく。謂はく、嶮しき岸（崖）の無量由旬なるに擧げ在き、熱炎の黑繩をもつて束ね縛り、繫ぎ已つて、然して後之を推し、利き鐵刀の〔立てる〕熱地の上に墮す。鐵炎の牙狗の噉み食ふ所となる。一切の身分、分々に分離す。聲を唱へて吼え喚ばふれども、救ふ者有ること無し。昔、法を說くに、惡見の論に依り、一切不實にして、一切を顧みず、岸（崖）に投じて自殺せる者、此の中に墮つ。」復た異處有り、畏鷲處と名づく。謂はく、獄卒、杖を怒らかして急に打ち、晝夜に常に走り、手に火炎の鐵刀を執り、弓を挽き箭を弩へ、後に隨つて走り逐ひ、斫り打つて之を射る。昔、物を貪るが故に、人を殺し、人を縛つて、食を奪へる者、此の中に墮つ。『正法念經』より略抄す。

三に衆合地獄

繩。縱横拼身。以熱鐵斧。隨繩切割。或以鋸解。或以刀屠。作百千段。處處散在。又懸熱鐵繩。交横無數。驅罪人。令入其中。惡風暴吹。交絡其身。燒肉焦骨。楚毒無極。已上。『瑜伽論』『智度論』。又左右有大鐵山。山上各建鐵幢。幢頭張鐵繩。繩下多有熱鑊。驅罪人。令負鐵山。從繩上行。遙落鐵鑊。摧煮無極。『觀佛三昧經』。等活地獄。及十六別處。一切諸苦。十倍重受。獄卒呵責罪人云。心是第一怨。此怨最爲惡。此怨能縛人。送到閻羅處。汝獨地獄燒。爲惡業所食。妻子兄弟等。親族眷屬。不能救。乃至廣說。後五地獄。各以前々一切地獄。所有之諸苦。十倍重受。例應知之。已上。『正法念經』意。」以人

執つて、熱鐵の地に臥せ、熱鐵の繩を以て、縱横に身に拼ち、熱鐵の斧を以て、繩に隨つて切り割る。或は鋸を以て解ち、或は刀を以て屠り、百千段と作して、處々に散らし在く。又熱鐵の繩を懸けて、交へ横たへたること無數なり。罪人を驅つて、其の中に入らしむれば、惡風暴く吹いて、其の身に交へ絡まり、肉を燒き骨を焦して、楚毒極り無し。已上は、『瑜伽論』『智度論』に依る」。又、左右に大鐵山有り。山の上に各ゝ鐵幢を建て、幢の頭に鐵繩を張り、繩の下に多く熱せる鑊有り。罪人を驅つて、鐵山を負はせ、繩の上より行かしめ、遙かに鐵の鑊に落して、摧き煮ること極まり無し。『觀佛三昧經』に依る」。等活地獄及び十六別處の一切諸苦を、十倍して重く受く。獄卒、罪人を呵責して云はく「心は是れ第一の怨なり。此の怨最も惡と爲す。此の怨能く人を縛つて、閻羅の處に送り到る。汝獨り地獄に燒かれ、惡業の爲に食はる。妻子兄弟等、親族眷屬も救ふこと能はず」と。乃至廣く說く。後の五の地獄は、各ゝ前々の一切地獄の有らゆる諸苦を以て、十倍して重く受くること、例して之を知るべし。已上は、『正法念經』の

怖小兒。如是等種々惱人者。皆墮此中。」五闇冥處。謂在黑闇處。常爲闇火所燒。大力猛風。吹金剛山。合磨合碎。猶如散沙。熱風所吹。如利刀割。昔大火炎。唵羊口鼻。二塼之中。置龜押殺者。墮此中。」六不喜處。謂有大火炎。晝夜焚燒。熱炎嘴鳥。狗犬野干。其聲極惡。甚可怖畏。常來食噉。骨肉狼藉。金剛嘴虫。骨中往來。而食其髓。昔吹貝打鼓。作可畏聲。殺害鳥獸者。墮此中。」七極苦處。謂在嶮岸下。常爲鐵火所燒。昔放逸殺生者。墮此中。（已上。依『正法經』。自餘九處。經中不說。）

二黑繩地獄者。在等活下。」縱廣同前。」獄卒執罪人。臥熱鐵地。以熱鐵

し、小兒を怖かし、是くの如き等の、種々に人を惱ませし者、皆此の中に墮つ。」五には、闇冥處。謂はく、黑闇の處に在つて、常に闇火の爲に燒かる。大力の猛風、金剛山を吹いて、合せ磨り合せ碎くこと、猶し沙を散らすが如し。熱風に吹かるゝこと、利き刀の割くが如し。昔、羊の口鼻を唵ぎ、二の塼の中に龜を置いて押し殺せる者、此の中に墮つ。」六には、不喜處。謂はく、大火炎有つて、晝夜に焚燒す。熱炎の嘴鳥、狗犬、野干、其の聲極めて惡しくして、甚だ怖畏る可し。常に來つて食ひ噉み、骨肉狼藉たり。金剛嘴蟲、骨の中に往來して、其の髓を食ふ。昔、貝を吹き鼓を打ち、畏る可き聲を作して、鳥獸を殺害せる者、此の中に墮つ。」七には、極苦處。謂はく、嶮しき岸〔崖〕の下に在つて、常に鐵火の爲に燒かる。昔、放逸にして、生を殺せる者、此の中に墮つ。（已上は、『正法念經』に依る。自餘の九處は、經の中に說かず。）

二に黑繩地獄

とは、等活〔地獄〕の下に在り。」縱廣前に同じ。」獄卒、罪人を

處。」一屎泥處。謂有極熱屎泥。其味最苦。金剛嘴虫。充滿其中。罪人在中。食此熱屎。諸虫聚集。一時競食。破皮噉宍。折骨唼髓。昔殺鹿殺鳥之者。墮此中。」二刀輪處。謂鐵壁周匝。高十由旬。猛火熾然。常滿其中。人間之火。比此如雪。纔觸其身。碎如芥子。又雨熱鐵。猶如盛雨。復有刀林。其刃極利。復雨刃如雨而下。衆苦交至。不可堪忍。昔貪物殺生者。墮此中。」三瓮熱處。謂執罪人。入鐵瓮中。煎熱如豆。昔殺生煮食者。墮此中。」四多苦處。謂此地獄。有十千億種。無量楚毒。不可具說。昔以繩縛人。以杖打人。驅人令行於遠路。從嶮處落人。薰煙惱人。令

屎泥處。謂はく、極熱の屎泥有り、其の味、最も苦し。金剛嘴蟲、其の中に充ち滿てり。罪人中に在つて、此の熱屎を食ふ。諸の蟲聚り集つて、一時に競ひ食ふ。皮を破つて宍を噉み、骨を折いて髓を唼ふ。昔、鹿を殺し鳥を殺せる者、此の中に墮つ。」二には、刀輪處。謂はく、鐵壁周り匝つて、高さ十由旬なり。猛火熾んに然え、常に其の中に滿てり。人間の火は、此に比ぶるに、雪の如し。纔かに其の身に觸るゝに、碎くること芥子の如し。又熱鐵を雨らすこと、猶し盛んなる雨の如し。復た刀林有り、其の刃極めて利し。復た雨〔雨〕刃有り、雨の如くにして下る。衆苦交ゝ至つて、堪へ忍ぶ可からず。昔、物を貪つて生を殺せる者、此の中に墮つ。」三には、瓮熱處。謂はく、罪人を執つて、鐵の瓮の中に入れ、煎り熟すこと豆の如し。昔、殺生して煮て食へる者、此の中に墮つ。」四には、多苦處。謂はく、此の地獄には、十千億種の、無量の楚毒有り、具に說く可からず。昔、繩を以て人を縛り、杖を以て人を打ち、人を驅つて遠き路に行かしめ、嶮しき處より人を落し、煙を薰べて人を惱ま

逢鹿。各以鐵爪。而互爬裂。血肉既盡。唯有殘骨。或獄卒。手執鐵杖鐵棒。從頭至足。遍皆打築。身體破碎。猶如沙揣。或以極利刀。分分割肉。如廚者屠魚肉。」涼風來吹。尋活如故。欻然復起。如前受苦。或云。空中有聲云。此諸有情。可還等活。或云。獄卒以鐵叉打地。唱云活活。如是等苦。不可具述。已上。依『智度論』『瑜伽論』『諸經要集』撰之。」以人間五十年。爲四天王天一日一夜。其壽五百歲。以四天王天壽。爲此地獄一日一夜。其壽五百歲。」殺生之者。墮此中。已上。壽量依『倶舍』。業因依『正法念經』。下六亦同之。『優婆塞戒經』以初天一年。爲初地獄日夜。下去準之。
此地獄四門之外。復有十六眷屬別

獵者の鹿に逢へるが如し。各〻鐵爪を以て、互に爬み裂く。血肉既に盡いて、唯殘骨のみ有り。或は獄卒、手に鐵杖、鐵棒を執つて、頭より足に至るまで、遍く皆打ち築くに、身體破れ碎くること、猶し沙揣（搏）の如し。或は極めて利き刀を以て、分分に肉を割くこと、廚者の魚肉を屠るが如し。」涼風來り吹き、尋いで活くること故の如し。欻然にして復た起き、前の如くに苦を受く。或は云はく、空中に聲有つて云ふ「此の諸の有情、還た等活す可し」と。或は云はく、獄卒、鐵叉を以て地を打ち、唱へて「活々」と云ふと。是くの如き等の苦、具に述ぶ可からず。已上は、『智度論』『瑜伽論』『諸經要集』に依つて之を撰ぶ。」人間の五十年を以て、四天王天の一日一夜と爲して、其の壽五百歲なり。四天王天の壽を以て、此の地獄の一日一夜と爲して、其の壽五百歲なり。」殺生せる者、此の中に墮つ。已上の壽量は『倶舍』に依り、業因は『正法念經』に依る。下の六も、亦之に同じ。『優婆塞戒經』には、初天の一年を以て、初地獄の日夜と爲す。下去、之に準ず。
此の地獄の四門の外に、復た十六の眷屬別處有り。」一には、

大文第一。厭離穢土者。夫三界無安。最可厭離。今明其相。總有七種。一地獄。二餓鬼。三畜生。四阿修羅。五人。六天。七總結。

第一地獄。亦分爲八。一等活。二黑繩。三衆合。四叫喚。五大叫喚。六焦熱。七大焦熱。八無間。

初等活地獄者。在於此閻浮提之下。一千由旬。」縱廣一萬由旬。」此中罪人。互常懷害心。若適相見。如獵者

〔本文〕

大文第一に厭離穢土

とは、夫れ三界は安きことなし、最も厭離す可し。今其の相を明さば、總べて七種有り。一には地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人、六には天、七には總結なり。

第一に地獄

にも、亦分つて八と爲す。一には等活、二には黑繩、三には衆合、四には叫喚、五には大叫喚、六には焦熱、七には大焦熱、八には無間なり。

初に等活地獄

とは、此の閻浮提の下、一千由旬に在り。」縱廣一萬由旬なり。」此の中の罪人、互に常に害心を懷けり。若し適ま相ひ見れば、

於茲忘矣。

往生要集 巻上本 盡第四門半

天台首楞嚴院沙門源信撰

夫往生極樂之教行。濁世末代之目足也。道俗貴賤。誰不歸者。」但顯密教法。其文非一。事理業因。其行惟多。利智精進之人。未爲難。如予頑魯之者。豈敢矣。是故依念佛一門。聊集經論要文。披之修之。易覺易行。總有十門。分爲三卷。一厭離穢土。二欣求淨土。三極樂證據。四正修念佛。五助念方法。六別時念佛。七念佛利益。八念佛證據。九往生諸業。十問答料簡。置之座右。備

往生要集 巻上

天台首楞嚴院沙門源信撰

〔序文〕

夫れ往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、誰か歸せざる者あらん。」但し顯密の教法は、其の文一に非ず、事理の業因は、其の行惟れ多し。利智精進の人は、未だ難と爲さざらんも、予が如き頑魯の者、豈敢てせんや矣。是の故に念佛の一門に依つて、聊か經論の要文を集む。之を披いて之を修すれば、覺り易く、行ひ易からん。總べて十門有り、分つて三巻と爲す。一には厭離穢土、二には欣求淨土、三には極樂の證據、四には正修念佛、五には助念の方法、六には別時念佛、七には念佛の利益、八には念佛の證據、九には往生の諸業、十には問答料簡なり。之を座右に置いて廢忘に備へん矣。

漢和 往生要集 全

註記

挿繪

目次

往生要集　巻上

の統計、本書原文の底本より改めし諸文字等に就いての概說を註記第一とし、往生要集の上掲諸本竝に引用原典との文字の校合を註記第二とし、引用諸經論疏の典據指示を註記第三として、別に本書の附錄として卷末に載せて置いた。就いて參考とせよ。

以　上

文字を附して斷つてある。したがつて斯かる本書の譯出に當つては、必ず抄略以前の經論の原文を參照する必要もあれば、諸師既引の抄文に誤謬なきやを確かむるの要もあり、更に正文引用のものに於ても尙學術の發達せる現代にあつては異本大藏經所收本との間に於ける異同を明かにして置く必要もある。そこで今回是れ等の引文を直接原典に就いて一々探索校合する企てを始めたのであるが、幸にして僅か一二の例外を除いては、約一千に及ぶ引文を悉く現代佛教叢書本の中に求め得たのである。即ち大正新脩大藏經をはじめ、大日本續藏經、大日本佛教全書等の中に於ける是れ等の典據は、註記第三に收めて指示して置いた。

五譯文　本書の訓點は古來の諸本必ずしも一致して居らぬ。撰者自身の訓點が本來存したものかどうか不明であるが、現在の諸本について云ふ限り相當訂正を要す可きものが尠くない。今回は上述諸本の校合と引用原典の直接對校とによつて幾らか往生要集の原本に近いものを得たやうな氣がする。したがつてそれを底本として新譯を試みたのが下段の譯文である。故に下段の譯文と上段の原文とは往々一致しない場合があるが、それは上段原文の傍線のある文字について註記第二を參照すれば、元祿の底本を去つて他の異本又は原典を採用したものであることが明瞭となる。譯文するに當つては成る可く原文を尊重して一字一句と雖も私の添削を加へないやうに努めたのであるが、引用文意を明瞭ならしめるために其の原典等から僅かの文字を插入したやうな場合は、必ず括弧〔　〕に入れて原文と區別した。又譯文中、引用原典或は異本の相違をも併せ示す必要ある場合は、特に六號括弧「　」を以て插入して置いた。只、現代人をして直接此の古典を讀みながら親しみ易からしめんがためを考慮して、傍訓の方法を用ひたのであるが、これは全く譯者の獨斷が多いと思ふ。

六註記　往生要集の著作傳說竝に遺宋留和二本說の考證、及び現存往生要集諸本の略解說、引用文獻

8 昭和六年本（大正新脩大藏經卷八十四所收、大藏經本。今⑧を以て略示す）

9 昭和八年本（昭和校訂眞宗七祖聖教所收、眞宗大谷派用本。今⑨を以て略示す）

二 部分的に直接校合せる版本

10 古梓堂文庫藏本（遣宋古版殘缺本。元の久原文庫所藏、今(久)を以て略示す）

11 寛永八年本（現存最初の訓點留和本。今(寛)を以て略示す）

三 全巻に亙り間接校合せる古寫本

12 長德二年寫本（中巻のみ）、鎌倉時代寫本（上巻のみ）、室町時代寫本（下巻のみ）（上の大正五年本の對校本。今㊀を以て略示す）

13 高野山正智院藏古寫本（上の昭和六年本の原本。今㊁を以て略示す）

14 青蓮院藏承安元年寫本（上の昭和六年本の對校本。今㊂を以て略示す）

15 武生引接寺藏本（上の天保十年本、竝に大正五年本の對校本。今㊃を以て略示す）

三 版式　底本の訓、返點を廢して句讀點を附し、無改行の字詰（九行十九字詰册子六册本）を改めて本文（標準十三字）と引文（標準十二字）とを區別し、更に十大文以下各章節の綱目を本文中より別出する方法によつて下段の譯文と對照せしめ、又節中必要に應じて行を改め、或は文章を句切り（「先づ」符を以て句切り、更に必要の場合は2、3、4、等の小型數字を以て分つ）、書名には必ず二重鉤符『』を附し、偈句は五字二句又は七字一句各別行の形式を採用した。只、引文中の引文と挾註中の引文とは一重鉤符「」を以て句切り特に改行字下げの方法を避けたため、一見文章句切りの同符と混同し易い恐れもあるが、その前後の關係を見れば自ら明瞭となると思ふ。

四 典據　本書中の引文は多く經論から直接正文を引いたものであるが、中には諸師既引の抄文をそのまゝ採用したものもある。撰者自ら纂文を抄略せる場合は、必ず「乃至」或は「略抄」或は「取意」等の

凡例

一底本　本書上段の往生要集原文は、しばらく西村九郎右衛門外二氏刊行による元祿十年版本を採用して底本とし、特に著しき誤字等に限り他の異本によつて修正したものである。尤も元祿本中の俗略字竝に誤刻字等にして今回正字に訂したもの一百七十六種の文字に就いては、註記第一中の六類表を參照せよ。

二校合　底本元祿十年本〔註記第二に④を以て略符とす〕に校合するに現存往生要集の代表的異本左記十五種を以てし、校合を加へた文字の右には必ず傍線を引いて之を示し、一々の校合は悉く集めて註記第二に收めた。

一全卷に亙り直接校合せる版本

1 承元複刻本〔現存最古の留和本。今①を以て略示す〕
2 建長五年本〔現存最古の遺宋完本。今②を以て略示す〕
3 貞享元年本〔冠註最初の留和本。今③を以て略示す〕
4 天保十年本〔校合最初の遺宋本。今⑤を以て略示す〕
5 明治四十三年本〔淨土宗全書卷十五所收、淨土宗用本。今⑥を以て略示す〕
6 大正五年本〔大日本佛教全書卷三十一、竝に惠心僧都全集初版卷二所收、天台宗用本。今⑦又は⑦初版本を以て略示す〕
7 昭和二年本〔惠心僧都全集再版卷一所收、天台宗用本。今⑦又は⑦再版本を以て略示す〕

我が國民信仰を深く且つ久しきに亙つて支配して來た極めて影響の大きい書物なのである。

茲に本書出來の好き因緣を惠まれた顯冥の師友に深く謝すると共に、校合その他について便宜を與へられた東京帝國大學圖書館、京都帝國大學圖書館、龍谷大學圖書館、大谷大學圖書館、東洋大學圖書館、大正大學圖書館、帝國圖書館、東洋文庫、京都博物館、東大寺圖書館等の各當事者の方々にも厚く御禮を申し上ぐる次第である。尚、口繪の選擇竝に挿入に關しては畏友石田茂作氏を煩はしたことであつた。記して以て謝意を表す。

昭和十二年二月十日

花山信勝

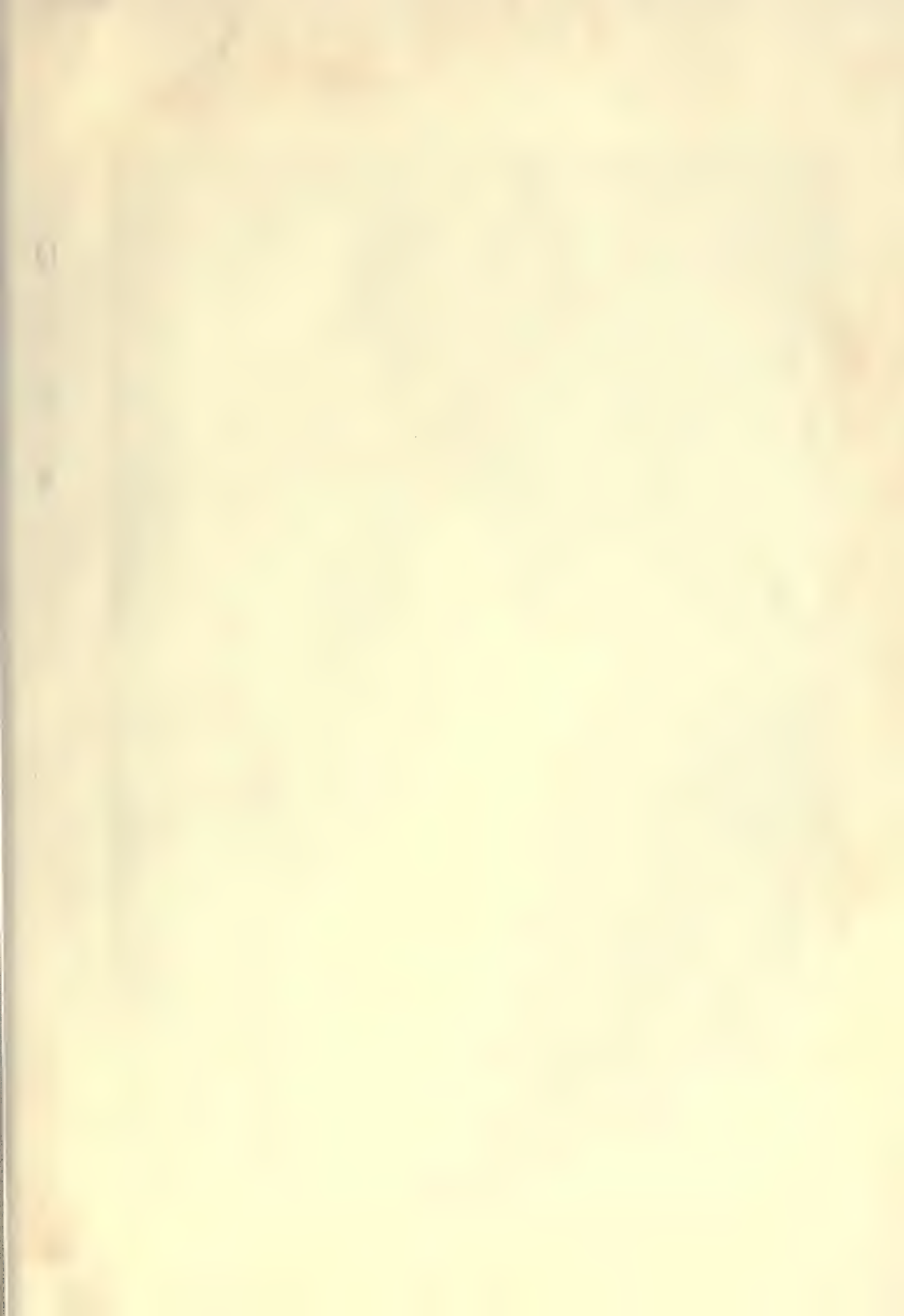
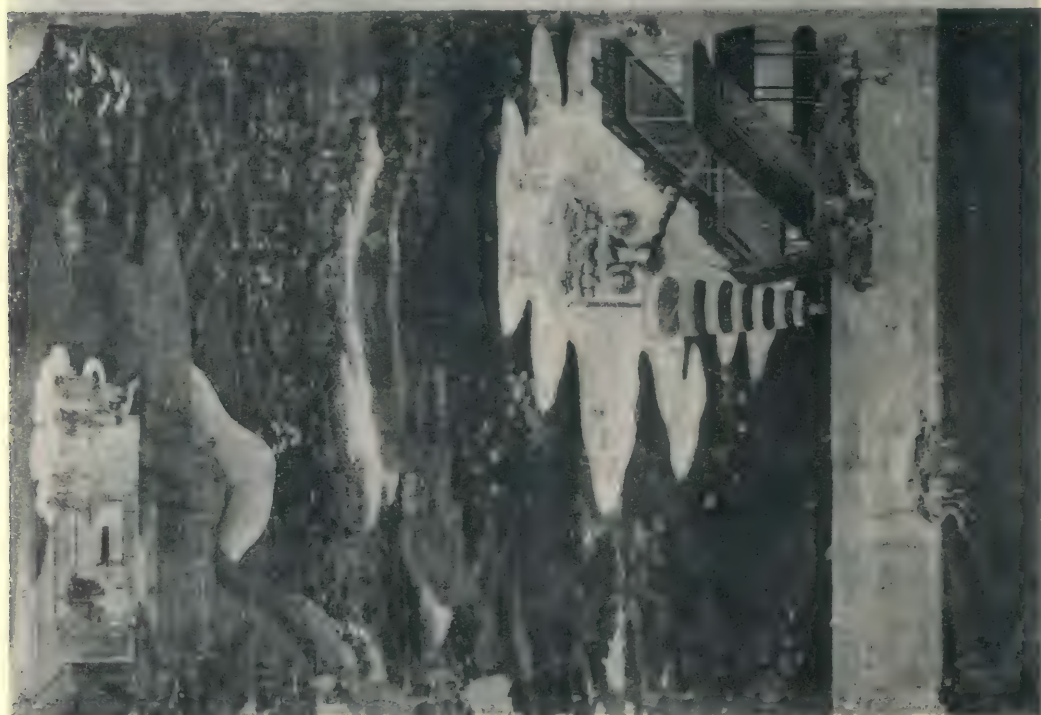
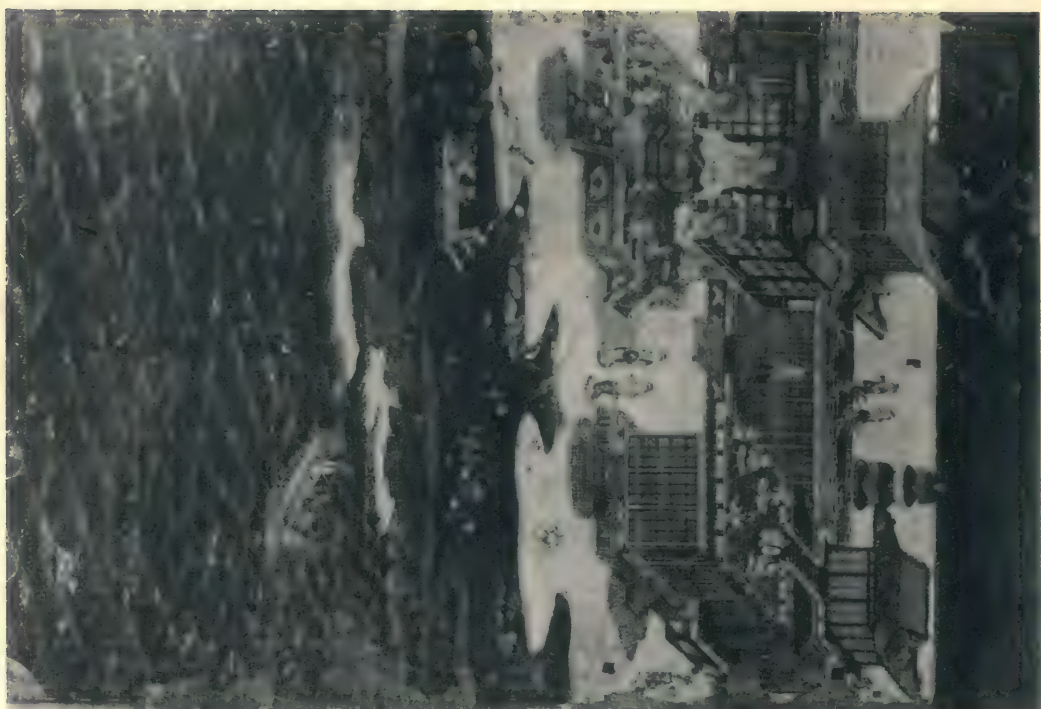
に就いて探し索め、その正引、略引、意引、孫引等を確かめながら、それ等の間に於ける異同をも悉く記し採り、最後に是れ等の往生要集諸本並に引用原典との校合異同を參考として、是非を取捨し、以て一案の新譯を試みたのである。 往生要集本來の使命が、惠心僧都自身の謂はゆる「予が如き頑魯の者」のために書かれた書であり、今回の私の因緣も亦上述の如くである。 したがつて、現代の我が同胞が一千年以前の此の古典に自然親しみを感ずるやうなものになればといふ念願から、成る可くやさしくして、而も原典の文字をそのまゝ生かして用ひ得るやうな方法を採用してみたのである。 地獄極樂の有無といふやうなことは、要するにその人の信仰心如何に關はることであつて、少くとも人間が生れて死ぬる限りは、宗教は永遠の生命を保つであらう。 我が國に於ても、亦平安朝の中期一度この往生要集が現れて後は、實に未來淨土の信仰全盛の時代を生み出すこととなつたのであり、今日に於ても、尙法然の淨土宗、親鸞の眞宗をはじめ、融通念佛宗、時宗、天台宗眞盛派等の宗門が極めて盛んに行はれて居るのである。 而してそれ等の何れもは、皆悉く此の惠心僧都の往生要集に源を發したのである。更に、天台はもとよりのこと、眞言、日蓮、法相、三論等の聖道門佛教諸宗へ及ぼした本書の影響も、亦極めて大きなものがある。 我が國文學の雄篇たる源氏物語や、榮華物語をはじめ、枕草子、平家物語、源平盛衰記、謠曲等から、乃至淨瑠璃の類に至るまで、本書の思想的影響を蒙らぬものとてはなく、大原三千院の往生極樂院、日野法界寺の阿彌陀堂、宇治平等院の鳳凰堂を始め、諸國の阿彌陀寺や諸寺の阿彌陀堂の如きも、亦この思想的潮流の中に陸續として建つたものであり、二十五菩薩來迎の圖や山越阿彌陀の圖、又來迎相の彌陀像や彌陀繪、及び地獄變相の圖や地獄双紙、乃至十界圖等の如き名作品類も、亦同樣に往生要集の思想的影響の下に現れたものである。 德川時代に入つて、その普及版として作られた繪入和文往生要集が廣く民間に行き亙るやうになつてからは、地獄極樂乃至六道の觀念は、遂に我が國民一般から拔き去ることの出來ぬ思想信仰とさへなつたのである。 兎も角、往生要集は過去の

もかけず息を吐切らして醫師を呼び來つた妻も、「御殘念です」と醫師に云はれて、ワーと泣き伏してしまつた。腦溢血とあれば止むを得なかつたのである。平素熱湯好きの母ではあつたが、自分たちの不注意が悔まれてならなかつたのである。四十年足らず、日夜を分かず、慈恩を受けて育まれて來た三界中唯一人の母が、永遠に去つて還らぬものと氣がついたときは、もうあとの祭りであり、生前不孝の數々が身を劈くやうに迫つて來て、泣けて泣けてしやうがなかつた。まことに生と死とは紙一重である。私一人を養育のために尊い七十三年の母の一生があつたのかと思ふと、何物にもかへ難い偉大な慈恩が一層身にしみるのであつた。一通りの野邊送りをすまし、中陰も終へて、愈〻只一人切りになつてみると亡き母への追慕と懺悔とが日増しに募つて來る。それとともに社會の大きな恩惠も、亦母の死を因緣として、一層深く感ぜられるやうになつた。斯かる氣分の中に取りかかつた仕事が、此の『往生要集』である。一には師友知識への感謝のしるしまでに、一には亡き母への報恩の萬一にもと。斯くして母の一周忌を期して取りかかつた仕事ではあつたけれども、その間或は病魔に妨げられ、或は思はざる出來事のために中斷して、一年も過ぎ二年も過ぎて、今漸く玆に本文の印刷を終つて序文を書く運びとなつたのである。此の間に亡くなられた知己や友人達も一人や二人でなく、誠に相濟まぬことと思ひながら日夜身心を勵ましたことであつた。

上の如き因緣によつて本書が生れ出ることになつたわけであるが、私は最初その着手として、取り敢へず一古版本の往生要集を求めて、全卷に朱點を加へ、科を分け、節を切り、更に本文と引用文とを區別した。それから出來るだけ時間を割いて、東京、京都、奈良、伊勢、越前等の諸大學圖書館や諸寺の寶庫等に本書の古寫本竝に版本を探り、それ等の研究とともに、私の手入本との間の文字の異同を記し採ることに努めたのである。一通り此の仕事を終へてから後、只管自宅に閉ぢ籠つて本書中約一千の引用文を、一々大正新脩大藏經を始めとして、大日本續藏經、大日本佛敎全書等の現代叢書本中の原典

はしがき

凡そ三年ばかり前のことであつた。小山書店の小山君が見えて、往生要集といふ素晴しい書物があるさうであるが、自分は出來るだけ立派な本にして出版して見たいと思ふから、是非現代譯をしてもらひたい、と。私はその時云つた。それは勿論我が日本が生んだ最高の宗教書の一である。單に我が日本の淨土教史といふ一面からだけでなく、廣く佛教史全體の上に立つて眺めても極めて重要な書物であり、更に東西兩洋に於ける宗教作品の好一對として屢〻ダンテの神曲などに比べられて近代的にも亦可なり著名になつてゐる書物である。しかし只今の私には他に爲す可き仕事が多いので、御引受け出來兼ねる、と。

それから間もなくであつた。私は悲しい母の死に遭つたのである。而もそれが餘りにも突然であつた。僅か數十分前には、去年の重患からいまだ充分に癒えきつてゐない母ではあつたが、珍らしく着物まで着かへて、私の書齋に入つて語つて行かれたのである。その時獨りで外出はまだ危いからと御引止めして、私は書見を續けてゐた。それから暫くの後、私は或る會合へ出かける時間が來たので、母に一こと挨拶をしてと思つて、入浴中の母に聲をかけたが、返事が無い。外から中を覗き込んでも見えず、をかしいと思つて、戸を開けて一歩踏み込んだとき、おや――浴槽の中に、うな垂れた母の不思議な姿を見たではないか。時は、昭和九年十月十日午後三時。眞に一生懸命であつた。私は母を浴槽中から抱き上げて、ただ湯水を呑まれたものとばかり考へ、無我夢中で、大聲に名を叫びながら醫師の來るまで力限り人工呼吸を續けたが、つひに母はかへらなかつた。よもや母の最後とは思ひ

極樂（金戒光明寺、地獄極樂圖）

人道〔不淨〕（來迎寺、十界圖）

阿修羅道（來迎寺、十界圖）

餓鬼道（北野神社、北野天神縁起）

衆合地獄、阿鼻地獄（帝室御物、春日權現驗記）

黒縄地獄（帝室御物、春日権現験記）

原本校註・漢和對照

往生要集

花山信勝

校訂並びに譯註

小山書店

爲亡母
眞順院釋尼教宥
報恩